HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マックス・ヒンデルと田上義也 ： 大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究
Author(s)	角, 幸博
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(工学)
Dissertation Number	乙第4828号
Issue Date	1995-09-29
DOI	https://doi.org/10.11501/3083793
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51289
Type	doctoral thesis
File Information	000000291410.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

マックス・ヒンデルと田上義也

―大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究―

角　幸博

マックス・ヒンデルと田上義也

—大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究—

角　　幸博

目次

序章　地方建築家研究と北海道 ―― 7
0-1　研究の目的……7
0-2　従来の地方建築家研究……9
0-3　本論文の構成と要旨……11

第１部　大正・昭和前期の北海道建築界と建築家

第１章　大正・昭和前期の北海道建築界 ―― 16
1-1　大札幌案内……19
1-1-1:デパート　19
1-1-2:映画館　22
1-1-3:カフェーと喫茶店　23
1-2　道外建築家の活動……26
1-2-1:札幌組合教会と荒木賢治　26
1-2-2:札幌独立基督教会・クラーク記念会堂と高松政雄　29
1-3　中村鎮と不燃建築……35
1-3-1:中村鎮の経歴　35
1-3-2:中村式鉄筋コンクリートブロック構造の概要　35
1-3-3:中村鎮の作品　37
1-3-4:1921年函館大火復興と中村鎮　38
1-3-5:「銀座街」火防線の建築　38
1-3-6:函館以外における中村式構造の建築　39
1-4　鉄筋コンクリート造建築と函館……41
1-4-1:東本願寺函館別院　41
1-4-2:村田専三郎と建築同好会　43
1-4-3:公共建築の不燃化　44
1-4-4:1934(昭和９)年大火復興　45
1-5　官庁営繕建築家と市街地建築……49
1-5-1:札幌グランドホテルと北海道庁土木部　55
1-5-2:小樽組合基督教会(1926年)と成田幸一郎　60
1-5-3:日本メソジスト函館教会ハリス監督記念会堂(1930年)と萩原惇正　61
1-5-4:石井喜助と地方営繕事業　63
1-6　外国人建築家と北海道……65

第２章　博覧会 ―― 69
2-1　1906年北海道物産共進会……73
2-2　開道五十年記念北海道博覧会……74
2-3　国産振興博覧会……83
2-4　国産振興北海道拓殖博覧会……88
2-5　小樽海港博覧会……92
2-6　北海道大博覧会……95

第３章　札幌の郊外住宅地と住宅 ―― 100
3-1　札幌の郊外住宅地……101
3-1-1:山鼻地区　101
3-1-2:円山地区　104
3-1-3:札幌温泉土地株式会社　108
3-2　建築家設計の住宅……110
3-3　施主設計の住宅……113
3-3-1:有島武郎邸　113
3-3-2:古藤猛哉邸ほか　122

3-4　棟梁設計の洋風住宅……128
3-5　近郊農家住宅……137

第２部　マックス・ヒンデル

第４章　ヒンデルの経歴と作品活動 ―― 148
4-1　来日以前……149
4-2　札幌時代(1924-1927)……150
4-3　横浜時代(1927-1940)以降……153

第５章　札幌時代の作品 ―― 158
5-1 住宅建築……158
5-1-1:東光園円い家　158
5-1-2:柳壮一邸　163
5-1-3:山崎春雄邸　165
5-1-4:林邸　169
5-1-5:大野精七邸　169
5-1-6:ノートン記念館　170
5-2　学校建築……172
5-2-1:札幌藤高等女学校（現札幌藤学園キノルド館）　172
5-2-2:北星女学校女教師館(現北星学園百年記念館)　178
5-2-3:北星女学校寄宿舎　185
5-2-4:北星女学校校舎　189
5-3　宗教建築……199
5-3-1:聖フランシスコ修道院　199
5-3-2:天使の聖母トラピスチヌ修道院　204
5-3-3:新潟カトリック教会　208
5-4　スキーヒュッテ……214
5-4-1:パラダイスヒュッテ　215
5-4-2:ヘルヴェチアヒュッテ　216
5-4-3:秩父宮殿下ヒュッテ(現空沼小屋)　218
5-5　ジュネーブ国際連盟会館案……220

第６章　横浜時代の作品 ―― 226
6-1　住宅建築……226
6-1-1:ヒンデル邸　226
6-1-2:旭シルク株式会社住宅　228
6-2　宗教建築……229
6-2-1:熱田天主公教会(1928)　229
6-2-2:岐阜天主公教会(1929)と付属幼稚園(1930)　229
6-2-3:御器所天主公教会(カトリック恵方町教会)(1931)　231
6-2-4:金沢聖霊修道院三位一体聖堂(1931)　232
6-2-5:三本木天主公教会(現カトリック十和田教会)(1932)　236
6-2-6:宇都宮天主公教会(現カトリック松が峰教会)(1932)　239
6-3　聖母病院……244
6-4　名古屋市南山中学校本館(現南山学園本館)……251
6-5　上智大学校舎(現上智大学１号館)……258

第７章　ヒンデルの建築観 ―― 274
7-1　「新しく家を建てる人々へ」にみられる建築家観……274
7-2　ヒンデルと日本建築……276
7-3　ヒンデルの作風……279

第３部　田上義也

第８章　田上義也の経歴と作品活動 ——— 284
8-1　早稲田工手学校時代まで……284
8-2　Ｆ．Ｌ．ライトとの出会い……285
8-3　建築家田上義也の誕生……287
8-4　戦後の活動……291
8-5　戦前期の作品活動……292

第９章　田上義也建築作品展と建築畫集 ——— 295
9-1　田上義也建築作品展覧会(1925)……295
9-2　第３回田上義也作品展覧会(1930)……300
9-3　田上義也建築畫集(1931)……304

第10章　住宅作品 ——— 309
10-0 住宅作品に見られるライト風スタイルからの離脱……309
10-1 大竹虎雄別邸(1922)……310
10-2 高田治作邸(現江口修邸)(1925)……313
10-3 ライト風住宅……315
10-3-1:高松泰造邸(1925)　315
10-3-2:関場不二彦邸(1926)　317
10-3-3:田上自邸(1926)　137
10-3-4:小熊捍邸(現北海道銀行円山クラブ)(1927)　320
10-3-5:坂牛直太郎邸(現坂牛正志邸)(1927)　322
10-3-6:金子実邸(1927)　323
10-3-7:坂敏男邸(1927)　324
10-3-8:佐田作郎邸(現小熊徹邸)(1928)　326
10-3-9:上田久寿子邸(現ＭＯＡ世界救世教北海道地区本部小樽布教所)(1928)　327
10-3-10:アパートメントハウス(1925)　329
10-4 「雪国的造形」住宅……330
10-4-1:吉田角次邸(現袴塚厚三居住住宅)(1928)　330
10-4-2:小川隆子邸(1928)　332
10-4-3:東武別邸(1928)　333
10-4-4:鬼窪重作邸(1929)　334
10-4-5:後藤惣作邸(1930)　336
10-5 片流れと陸屋根の住宅……337
10-5-1:百円の家(1926)　338
10-5-2:澤枝重雄邸(1928)　338
10-5-3:櫻田邸(1928)　339
10-5-4:城下良平邸(1930)　340
10-5-5:太秦康光邸(1931)　341
10-6 インターナショナル・スタイルを意識した住宅……343
10-6-1:相内邸(現大谷邸)(1934)　343
10-6-2:倉田清純邸　345
10-7 東京郊外の住宅作品……347
10-7-1:里美勝蔵邸・アトリエ(1929)　347
10-7-2:外山卯三郎邸(1929)　348

第11章　1920年代の住宅以外の作品 ——— 350
11-0 1920年代の作品の作風……350
11-1 バチェラー学園(1924)……350
11-2 ライト風の作品……355
11-2-1:札幌第一農園Ⅰ(1926)　355
11-2-2:札幌市医師会館(1926)　356
11-2-3:愛隣館(1927)　357

11-2-4:亀屋本店(1928)　360
11-2-5:松岡農場事務所(1928)　362
11-3 日本基督教会札幌北一条教会(1927)……364

第12章　1930年代の作品 ——— 371
12-0 1930年代の作品にみられる作風……371
12-1 商業建築と書き割り表現……372
12-1-1:マリヤ手芸店改修(1930)　372
12-1-2:富貴堂改修(1930)　372
12-1-3:札幌第一農園Ⅱ(1930)　373
12-1-4:岩城新聞店(1930)　373
12-1-5:小笠原商店卸部(1932)　374
12-1-6:千秋庵帯広支店(1933)　375
12-2 カフェー・飲食店……376
12-2-1:亀屋支店(1929)　376
12-2-2:ヤマニ(1930ころ)　377
12-2-3:アポQ(1929)　378
12-2-4:カフェー三條(1931)　378
12-2-5:キャピタル(1932)　379
12-2-6:紀文茶屋(1932)　380
12-2-7:パリジャンクラブ(1933)　381
12-2-8:宇喜代(1935)　382
12-3 病院建築とモダニズム表現……383
12-3-1:浅野炭鉱病院(1930)　384
12-3-2:山下紅療院(1931)　386
12-3-3:池田病院(1933)　387
12-3-4:志田病院(1934)　388
12-4 ホテルと艦船デザイン……389
12-4-1:中島温泉(1930)　390
12-4-2:近水ホテル(1932)　391
12-4-3:十勝川温泉ホテル(1933)　395
12-4-4:町営網走観光ホテル(1936)　398
12-4-5:石狩海濱ホテル(1937)　400
12-5 その他の作品から……404
12-5-1:佐々木座(1929)　404
12-5-2:円山郵便局(1930)　406
12-5-3:幌西巡査派出所(1930)　406
12-5-4:函館毎日新聞社(1932)　407
12-5-5:共同魚菜市場(1934)　408
12-5-6:北見郷土館(現網走市立郷土博物館)(1936)　409
12-5-7:札幌正教会計画案(1934)　410
12-6 北ノ王鉱山と帝産航空㈱落部工場……413
12-6-1:北ノ王鉱山(1937)　413
12-6-2:帝産航空㈱落部工場(1944)　418

第13章　田上義也の作風と建築観 ——— 420
13-1 田上義也と雪国的造型……420
13-2 著作に見られる建築観……423

結章　北海道建築界と二人のフリーアーキテクトーマックス・ヒンデルと田上義也ー ——— 432

図版出典および所蔵一覧……439
主な参考文献……445
関連既発表学術論文および論著……450

序章　地方建築家研究と北海道

0-1　研究の目的

本研究は、北海道の近代建築史上においてほぼ同時代に登場し、かつプロフェッション(職能)を強く意識した建築家の先駆けともいえる２人のフリーアーキテクト[1]、マックス・ヒンデル Max Hinder(1887～1963)と田上義也(1899～1991)をとりあげ、両建築家の経歴、業績、作品・著述活動等について検討し、北海道において本格的な近代建築家像の一端を明らかにすることを目的としている。

次節で概観するように、日本近代建築史研究における建築家研究に関しては、多くの場合中央で華々しく活躍した人物を中心としており、地方に拠点を置いて活動した地方建築家研究については資料の限界などもあってほとんどなされていないし、さらに北海道にあっては戦前期の建築界の活動中心が営繕組織や技術者によることもあって、民間建築家に関する研究はごく少数である。

本論文でとりあげるヒンデルは、作品活動の中心となった札幌では、北星学園や藤学園、テイネパラダイスヒュッテの設計者として関係者の間ではかねてから知られていた人物であるが、北海道の建築界や建築史上にあっては、筆者が調査研究を進めるまでほとんど忘れられていた存在であった。また、田上義也にしても、建築家としてまた文化人として高く評価されていたにもかかわらず、戦前期の膨大な作品や著述活動について、これまで専門的に扱われたことはなかった。

プロフェッショナルな建築家として両者が北海道で活動を開始した時期は、全国的に見ても1920(大正９)年結成の「分離派建築会」[2]を初めとして、「創宇社」[3](1923年)、「ＭＡＶＯ」[4]（同年)、「ラトー」[5](1924年)、「メテオール建築会」[6]（同年)など各種の運動が堰を切ったように起り、近代建築史上めまぐるしい変革が展開することになった時期と重なる。

さらに建築家のプロフェッション確立への機運が高まってきた時期でもあり、民間建築事務所の所長や所員、会社営繕などに属する建築家たちが歩調をそろえ、1914(大正３)年にわが国最初のプロフェッショナルアーキテクトの団体「全国建築士会」(翌1915年日本建築士会と改称)を誕生させ、さらに1917年には関西建築界では片岡安を中心に、「建築家の団結と社会への貢献を求めて」[7]「関西建築協会」(1919年日本建築協会と

1：ここでは、建築組織に属さずに活動した自営建築家をさす。

2：ヨーロッパやアメリカの20世紀初頭に興った近代建築運動の思想を初めて本格的に把握し、「過去建築圏より分離し」、「建築圏を創造せん」とした建築運動。

3：岡村蚊象(山口文象)を中心に逓信省営繕課の技手たちによって結成。岡村を除く同人はすべて10代であった。

4：大正末の建築を含めた幅広い芸術団体。ドイツ帰りの村山知義を中心に、尾形亀之助・大浦周蔵・穴明共三・W.ブブノアが創立会員。ソビエト構成派の影響が濃い。1924年の帝都復興創案展に参加。

5：東京帝国大学建築学科卒業生によって同年催された帝都復興創案展参加のため、結成した建築グループ。1922年卒業の岸田日出刀らが中心メンバー。

6：帝都復興創案展参加のため、早稲田大学出身者で結成したグループ。助教授今井兼次を中心に、猪野勇一・佐藤武雄やその同窓生が集まる。

7：日本建築学会編『近代日本建築学発達史』(丸善㈱、1972.10.20)

改称)が設立されている。

1925年「日本建築士会」は、設立当初からの宿願であった「建築士法」案の建議を第50回帝国議会に提出した。以後1940年までの15年間に12回にわたって提案された[7]ものの、結局戦前に実を結ぶことはなかった。

北海道でも少数派とはいえ、建築家のプロフェッションをたえず意識しながら、ヒンデルのようにはっきりと「建築に関する計画と監督は建築家にまかせよ」[8]「建築家は、……自由なる判官として一般社会と建築依頼者と、または建築主と請負業者との間に立つ」[8]「自ら請負業者を兼ねて居る限りそれに建築家の称号を冠せしむるわけにはいきません」と建築家の職能への理解を新聞を通じて啓蒙したり、田上義也のように住宅作品でも「設計報酬」の必要を認めさせ、建築家の職能を社会的に確立していった建築家達が存在していたことは、わが国の近代建築史上にあってもっと評価されてもよいように思われる。

1923(大正12)年の関東大震災が、わが国の建築界に大きな影響を与えたことはよく知られていることだが、田上義也が24歳の若さで来道する直接のきっかけとなったのもこの震災であった。また、偶然とはいえ37歳のヒンデルの来道は翌1924年のことであり、しかも両者はこの年1924年に札幌で同時に設計活動を開始した。F.L. Wright[9] の薫陶を受けた田上義也と、ヨーロッパの近代建築思潮を身に付けたヒンデルが、同時期に活動を開始したことは、北海道の近代建築の本格的な幕開けとして、いかにもふさわしくまた象徴的な出来事でもあった。

本論文では、両建築家の経歴や作品活動にふれる前に、２人が活動を展開した札幌を中心に、大正・昭和前期(1920～30年代)の北海道建築界についての概観を試みている。これまでの北海道における近代建築史研究として、遠藤明久『開拓使営繕事業の研究』(1961)や越野武『北海道における初期洋風建築の研究』(1990)など、明治期を対象とした労作はあるものの、その後の大正昭和戦前期を扱った概説書[10]は見出せなかったからである。

なお研究資料として、ヒンデルに関しては、新聞投稿記事「新しく家を建てる人々へ」(北海タイムス 1925.12.13～12.20)、ＯＡＧ東洋文化研究協会講演集「Japanische Bausitten(日本の建築風習)」(1929.1.8)のほか、関係者からの聞き取り、個々の作品についての設計図書、旧写真の収集、沿革調査の積み上げによって、建築活動を総体的に把握した。

一方田上義也研究に関しては、田上義也から寄託された 500点以上に及ぶ設計図書、 125葉ほどの竣工写真、田上所蔵初期のスクラップブックのほか、「田上義也建築作品展覧會」(1925)、「同」(1930)パンフレット、『田上義也建築畫集』(1931)、『芸術学研究 第一輯』(1929.12.1)、『同 第二輯』(1930.5.1)、『同 第四輯』(1930.11.20)で展開した「建

8：『新しく家を建てる人々へ』(北海タイムス、1925.12.13～20)

9：1867-1959。アメリカの建築家。初期の住宅建築は独自の空間構成を示し、大草原様式と呼ばれる。日本では旧帝国ホテル(1919-22) の設計者として知られる。同ホテル現場事務所に田上義也は1918年から通訳兼所員として勤務。田上は1919年12月から1921年4月までライトに師事した。

10：遠藤明久『北海道住宅史話(上)(下)』(住まいの図書館出版局、1994.6.21)では、寒地住宅の模索で大正期の農家住宅について、および都市化の様相の中で田上義也についてわずかにふれているにすぎない。

築論」や、投稿記事「北国にふさはしい建築一考察」(北海タイムス1929.25,26,30)、「雪国の小住宅」(小樽新聞、掲載年不明)、「建築家の見た一九三〇年の旭川」(新聞名不詳 1930.12.25)、「帯廣都市計画一考察」(十勝毎日新聞 1933.5.16)、北方文化研究会編『田上義也建築抄』(らいらっく書房 1966.5.1)などを史料として採用した。ほかに、経歴、年譜などについては、以下に挙げる著述を参照した。

蝦名賢造『北方のビジョン／地域開発における人間研究』(らいらっく書房 1966)
『わたしの道』(北海タイムス社 1974)
小山一男『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上)(下)』(現代出版社 1977)
田上義也『私と北海道の建物』 (月刊住宅ライフ連載 1983.3～1984.3)
『私のなかの歴史３』(北海道新聞社 1984)
『受賞に輝く人々(昭和五十三年)』(北海道 1979.3.29)

著述内容はいずれもほぼ同様であるが、詳しさの点では『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉』を挙げることができる。上巻では、誕生からライトに師事した後、渡道前後のいきさつ、戦前期のいくつの代表作を通じての田上のパーソナリティー、戦後の活動、交友関係などにふれている。田上の監修も経ているが、「建築家ではないし、建築についての知識も皆無である」[11]と著者も述べるように、個々の作品に則した分析は欠けており、本論では特にこの点を中心に扱った。下巻では、戦後の田上の随想、講演、交友記のほか年譜を添えている。この年譜は、田上からの提供資料によってまとめられたものと思われ、田上の活動の全容を把握する上で基本資料となるものである。本論文でもこの年譜を参考としながらも、できるだけ個々の作品や遺存図面との照合にあたり加筆訂正することにつとめた。

11：小山一男『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉』下巻 p.197

0-2　従来の地方建築家研究

日本近代の建築家に関する研究としては、神代雄一郎『近代建築の黎明 明治･大正を建てた人びと』(美術出版社、1963)や、村松貞次郎『日本近代建築史ノート　西洋館を建てた人々』などが知られるが、取り上げられている建築家は、いずれも中央で活躍の主流派といえる建築家たちである。後者ではさらに、建築家誕生前の建築家として、初期の棟梁、技術者達を論じているが、北海道に関しては安達喜幸の名を挙げるにとどまっている。

村松貞次郎『日本建築家山脈』(鹿島研究所出版会、1965)は、建築家をいくつかの群としてとらえ、総合的、集団的に扱ったユニークな建築家論であるが、主要な建築家群の中には、地方で、そして孤立した活動

をなした建築家についてはふれられていない。もちろん彼らを無視していた訳ではなく、「日本の近代建築の発展史に欠かすことのできない人びと」と評価しつつも、「山脈として、群として処理することができなかった」ためである。

近代建築家像を精力的に概観した、村松貞次郎ほか『日本の建築［明治大正昭和］１～10』(三省堂、1979～82)に所収の年譜には、53名の建築家が取り上げられているが、北海道の建築家としては、初期の官僚技術者安達喜幸を除くと、わずかに田上義也が扱われているにすぎない。

さらに外国人建築家に関しては、明治期の著名な建築家コンドルに関する多くの研究のほか、ウォートルス[12]やガーディナー[13]、ハンセル[14]などを扱ったもの、エンデベックマンに関する藤森照信の一連の研究[15]、また『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』(1993年)ほかヴォーリズに関する山形政昭の一連の研究、ライトに関する谷川正己の研究などがみられるが、いずれも中央で活躍した建築家たちで、ヒンデルのように地方で活動した在日外国人建築家に関する研究は、筆者の管見したところでは極めてまれである。

北海道における建築家研究は、営繕技術者や営繕組織を対象とするものが主である。遠藤明久博士の『開拓使御用係安達喜幸について』（日本建築学会北海道支部研究報告集、1961)、『森山武光と中村一正(開拓使物産売捌所の研究 第５報）』(日本建築学会論文報告集№104、1964)や、『開拓使営繕事業の研究』(1971)中の「開拓使営繕機構および技術者」、『北海道事業管理局炭鉱鉄道事務所の建築技術史料』(日本建築学会北海道支部研究報告集№32、1969)中の「炭鉱鉄道事務所建築課の建築技術者」など一連の営繕技術者に関する研究のほか、営繕組織を扱った越野武他『開拓使函館支庁の営繕組織について』（日本建築学会大会学術講演梗概集 1988)、大條雅昭ほか『函館市(区)の営繕組織について』(日本建築学会北海道支部研究報告集№56、1983)などがあげられる。

民間建築家に関しては、本論文の基礎となる筆者の一連の研究であるマックス・ヒンデルおよび田上義也に関するもの以外に、中村式鉄筋コンクリートブロックを考案し、函館の防火建築にたずさわった建築家中村鎮に関する、伊藤俊英他『建築家中村鎮と中村式鉄筋コンクリート』(日本建築学会北海道支部研究報告集№55、1982)、『建築家中村鎮と北海道』(日本建築学会大会学術講演梗概集 1982）や、小坂映王他『建築家石井喜助(1893～1977)』（日本建築学会北海道支部研究報告集№56、1992)、遠藤明久『指田近之助の経歴と業績』(日本建築学会北海道支部研究報告集№66、1993）などのほか、実測調査にともなう簡単な設計者調査として、札幌美以教会設計者間山千代勝[18]や道外建築家として札幌独立基督教会・クラーク記念会堂の設計者高松政雄[17]などに関するものがみられるにすぎない。

12：村松貞次郎他『ウォートルスの経歴について』（日本建築学会論文報告集№103、1964)や菊池重郎の『英人Ｔ.Ｊ.ウォートルスの事績に関する研究』1～4（日本建築学会大会学術講演梗概集1974、日本建築学会論文報告集№228、229、243、1975)などの研究がある。

13：菊池重郎『明治13年来日米人Ｊ.Ｍ.ガーディナーの人と作品』（日本建築学会論文報告集№103、1964)、松波秀子『James McDonald Gardiner の来日までの経緯―日本聖公会の建築史的研究2』(日本建築学会大会学術講演梗概集1993.9)など。

14：坂本勝比古『英人建築家Alex. N. Hansell(F.R.I.B.A.)の経歴と作品について』（日本建築学会論文報告集№69、1961）、同『建築家Alex N. HansellのF.R.I.B.A.入会経緯とその作風について』（日本建築学会大会学術講演梗概集1987)など。

15：藤森照信『エンデベックマンによる官庁集中計画の研究』1～5（日本建築学会論文報告集№271～273、1978、№280、281、1979)など。

16：小山道ほか『札幌美以教会（明治37年)について』(日本建築学会北海道支部研究報告集№54、1981)

17：越野武・角幸博『札幌独立基督教会クラーク記念会堂(1922)についてその1』(日本建築学会北海道支部第35回研究発表会、1971)

0-3　本論文の構成と要旨

本論の構成と要旨は以下のとおりである。

序章　地方建築家研究と北海道

本研究の目的は、北海道の近代建築史上において同時代に登場した２人のフリーアーキテクト、マックス・ヒンデルと田上義也をとりあげ、両建築家の活動、著述の検討を通して、北海道におけるプロフェッションを意識した本格的近代建築家像の一端を明らかにすることである。両建築家研究の背景として、日本の近代建築家研究が主に中央で活躍した主流派ともいえる人物が中心であり、外国人建築家に関しても、中央で華々しく活躍した建築家たちを対象とし、ヒンデルのように地方で活躍した人物を扱ったものはまれであること、北海道における建築家研究はこれまで営繕技術者、営繕機構を対象としたものが主で、民間建築家に関しての研究はごくわずかであることなどを指摘した。

第１章以下は大きく３つの論旨で展開し、第１部では両建築家が活動した時期の北海道建築界の動向を概略把握し、２部でマックス・ヒンデル、３部で田上義也をとりあげた。

第１部　大正・昭和前期の北海道建築界と建築家

第１部では、２人の建築家の昭和戦前期の活動期が、1924年頃から1930年代にかけての時期、つまり大正末から昭和初期であることに着目し、２人が建築活動を展開した札幌を中心に、大正昭和初期（1920～1930年代)にかけてのモダニズム期の北海道建築界の動きを概観した。

第１章1-1 では、第３部に扱う田上義也の市街地作品群で特徴的なジャンルとしてカフェー、喫茶店などのあることを念頭に、『大札幌案内』(1931年)でとりあげられた札幌のモダニズム期を代表するデパート、映画館、カフェー、喫茶店などの市街地施設の概要にふれた。

1-2、1-3では、市街地における銀行や商社など大規模商業施設の多くが道外の建築家や建築事務所で設計されていることを指摘し、さらに道外建築家の代表例として、札幌組合教会(1913年)設計の荒木賢治、札幌独立基督教会(1922年)の曽彌中條建築事務所高松政雄、1921年函館大火復興に寄与した中村鎮の３人についてについてふれた。

1-4は、1-3で指摘した中村式コンクリートブロック造のほか、鉄筋コンクリート造の函館における展開を、東本願寺函館別院(1915年)や施工業者木田保造、市会議員岡田健造の小学校不燃化の提唱、1934年大火復興事務局の活動などについてふれた。第３部で後述するように、田上義也の民間市街地建築の中には、鉄筋コンクリート造を想定した計画案が数多く見られるが、実施段階ではすべてが木造モルタル仕上げとされる

など、市中の中小建築では鉄筋コンクリート造の採用は、まだまだ少数派であった。

1-5 では、戦前期の北海道建築界の活動の中心をなした北海道庁と、札幌、函館、小樽、旭川など主要自治体の営繕作品年表を試作した。また、地場の民間設計事務所がほとんどない状況を反映して、営繕技術者による民間建築設計例について、逆に専門建築技術者を擁することのできなかった地方自治体での嘱託建築技術者の雇用例として、12市町村の営繕事業に関与した音江村(現深川市)石井喜助(1893－1977)の特筆すべき存在を指摘した。石井は、本論で扱うヒンデルと田上義也（いずれも1924年活動開始)よりも数年早い1920年に岩見沢に事務所を開設したが、活動の多くが営繕事業を中心とするため、本節で扱っている。

1-6 では、北海道における外国人建築家の活動として、旧函館英国領事館(1913年)設計の英国上海工事局や札幌カトリック教会聖堂(1916年)設計のフェルゲット神父を例にとり、北海道に居を構えた建築家としては、ヒンデルが唯一の例であることを指摘した。

第２章では、都市文化の高揚に大きな影響を与えた５つの博覧会をとりあげ、設計スタッフ構成やパビリオンの施設概要を中心に述べた。このうち、国産振興博覧会(1926年)や国産振興北海道拓殖博覧会(1931年)では、田上義也がパーラー施設や、野外舞台設計に関与していることを指摘した。

第３章では、市民生活に密接な影響を与えたと考えられる住宅地と住宅建築について札幌市を例としてとりあげ、新興住宅地の開発が中流住宅の建設に拍車をかけたこと(3-1)、「モダン住宅」、「文化住宅」などと呼ばれる意匠的にも平面的にも目を引く住宅が、建築家の設計(3-2) ばかりでなく、施主や棟梁たちの手によって創造され(3-3、3-4)、また近郊農家住宅にもみられる(3-5)ことに注目した。 建築家設計の住宅のうち、札幌市を中心にマックス・ヒンデルや田上義也の作品が多数注目されるが、これらについては、第２部、第３部で扱うこととした。

第２部　マックス・ヒンデル

マックス・ヒンデル(1887-1963) は、1924年に来道、３年半の札幌滞在後横浜市に移住し、1935年設計事務所解散、1940年ドイツバイエルン地方レーゲンに旅立つまで、在日外国人建築家として活躍した。ヒンデルが札幌で活躍したころの北海道建築界は官庁営繕組織や営繕技術者達が主流を占めており、組織に属さないかつ職能に自覚的な自営建築家の存在は、第３部で扱う田上義也と共に、きわめて少数派であった。

第４章は、マックス・ヒンデルの経歴と作品活動の概要にふれ、第５章では札幌時代の作品を、住宅建築(5-1)、学校建築(5-2)、宗教建築(5-3)、スキーヒュッテ(5-4)など建築種別ごとに概説し、5-5 ではジュネーブ国際連盟会館設計案についてふれた。

第６章横浜時代の作品は、 ヒンデル邸(1927)を含む住宅建築(6-1)、宇都宮天主公教会など宗教建築(6-2)のほか、聖母病院(1931、6-3)と名古屋市南山中学校本館(1932、6-4)についてふれ、上智大学校舎(1932、6-5)では、図面資料を基に設計過程をやや詳細に追いながら建築概要にふれた。

第７章では、ヒンデルの建築家観、建築観、作風についてまとめ、建築家の職能について市民啓蒙を図ったこと、日本建築や日本文化を積極的に理解しようとしたこと、ヒンデルの作風として、住宅では、急勾配の裾広がりのフレアード屋根、こけら葺きや鉄板葺きの外壁防寒処理、引き戸、引違い窓の採用など、住宅以外の作品ではロマネスク様式への顕著な傾倒を中心に、住宅に通じるフレアード屋根の扱い、鐘塔、尖塔の付加など共通のモチーフなどを指摘した。

第３部　田上義也

田上義也(1899－1991)は、1918年帝国ホテル現場事務所に採用され、翌1919年12月来日のライトに１年４ヵ月ほど師事し、通訳として、日常生活を通じてライトから建築家のプロフェッションについて学んだ。1923年11月、関東大震災の被災地東京から北海道に渡り、一時バチェラー博士宅に寄留、翌年道東の旅を契機に北海道での建築活動を決意し、1925年札幌時計台で第１回建築展を企画し建築家としてデビューした。その後1928年第２回建築展、1930年札幌と旭川で第３回建築展を開催し、1931年には田上義也建築畫集を刊行している。1920年代には住宅を中心、1930年代には「雪国的造型」をキーワードに、住宅および住宅以外の作品も含め、多産ともいえる精力的な活動がみられたが、1930年代後半から設計依頼は激減し、1937年北ノ王鉱山、1944年帝産航空㈱落部工場などの産業施設を最後に戦後1951年の再出発まで建築家としてまったくのブランク期をむかえることになった。本論文で扱う作品活動もこのブランク期以前とした。

第８章は、田上義也はＦ.Ｌ.ライトに師事し、関東大震災後の渡道までの東京時代(8-1、-2)、北海道における戦前期の活動(8-3)、戦後の活動(8-4)を概説し、8-5では、戦前期の作品活動の全容を概観した。

第９章では、３回の田上義也建築作品展覧会のうち、資料の残る１回展(1925)と３回展(1930)および、初めての作品集『田上義也建築畫集』(1931)にみられる田上義也の設計理念や制作姿勢について論考した。

第10章の住宅作品では、1920年代に見られるライト風スタイルから1930年代に展開する「雪国的造型」への過程を、ライト風から脱却して独自の作風を求めた過程と位置づけ、独自の作風を求めた萌芽と考えられる大竹虎雄別邸(1921、12-1)、北海道初の住宅作品で、かつ雪国的造型への模索がみられる高田治作邸(1925、12-2)のほか、代表作をライトの影響を強く受けているライト風住宅(10-3)、田上的作風として確立した

「雪国的造型」住宅(10-4)、「雪国的造型」にいたる習作としての片流れと陸屋根住宅(10-5)、インターナショナルスタイルを意識した住宅(10-6)、東京郊外の住宅(10-7)に分類し、個々の作品を通じて田上の設計姿勢、建築観を考察した。

第11章は住宅以外の作品のうちライト風の影響の強い1920年代の作品についてふれている。

第12章では、1930年代の活動範囲が住宅から市街地建築に移るものの、「雪国的造型」を第一目標としながら、ライト風スタイルからの離脱志向がより顕著であることを指摘した。多くの作品を、看板建築ともいえる書き割り表現のみられる商業建築(12-1)、モダニズム期の代表建築としてのカフェー・飲食店(12-2)、陸屋根表現などインターナショナルスタイルを意識した病院建築(12-3)、艦船デザインを意識したホテル建築(12-4)、その他の作品(12-5)とに分類し、この時代の作風の変化についてふれている。

また、12-6では、この時期の最後を飾る作品として、それまでの田上の作品には見ることのできなかった大規模な産業施設計画である北ノ王鉱山と帝産航空㈱落部工場をとりあげ、作品活動の激減期に鬱積した創作エネルギーの格好の発散の場であることを指摘した。

第13章では、上述の作品概要をふまえ、1920年代と1930年代とでは大きな変化がみられ、それはライトの精神を土台にしながらも、むしろライトの作風から抜け出すことを意識しつつ、積雪寒冷地に適した建築作品の創造に向けての過程の到達点の一つが雪国的造型であること(13-1)、著作に見られる主張でも一貫して「雪国的造型」意図の確立であることを指摘している。

結章では、第２部、第３部のヒンデルと田上義也の個々の作品、著作活動の検証、検討をふまえて、両者に共通する北海道近代建築史上における位置づけとして、(a)建築家の職能についての市民に対する啓蒙、(b)北国の設計条件を取り入れた北海道向き建築の提案、(c)安易な国際様式傾倒への警鐘、(d)設計ジャンルの多様性の４点を指摘した。

第１部　大正・昭和前期の北海道建築界と建築家

第１章　大正・昭和前期の北海道建築界

本稿で扱う２人の建築家の戦前の設計活動期は、いずれも1924年頃から1930年代にかけての時期つまり大正末から昭和初期である。ヒンデルは、札幌で1924～27年、横浜で1927～39年にかけて活動し、田上義也も1924年以来設計活動の中断する1940年頃までを戦前の活動期としていた。

本章では、２人が建築活動を展開した札幌を中心に、大正昭和初期（1920～30年代）にかけての北海道建築界の動きを概観してみたい。

大正期がいろいろな意味で、それまでの明治期とは異なった雰囲気を醸し出していたことは誰しも認めるところである。無我夢中で外国文化の摂取模倣に執着した明治期の段階が終わり、やっと落ち着いて、ゆとりを持って芸術、生活文化を考えることの出来る時代がやってきて、何かしら若やいで、明るく自由な雰囲気が感じられる時代であった。この時代には「文化生活」や「文化住宅」という言葉が流行したが、「文化」という文字があまりに乱用されすぎる傾向もあった。文化鍋、文化机、文化寝巻、文化せんべい[1]から文化餅[2]までが現れている。しかしこの言葉は必ずしも定義づけられたものではなく、いわば近代的なというくらいの意味で使われたようである。

文化住宅は、ホワイトカラー、官吏あるいは医師、弁護士など自由職業の新中間層[3]の理想となった住宅形式であった[4]。文化住宅の典型例は、谷崎潤一郎の『痴人の愛』の主人公が住んでいたような「勾配の急な、全体の高さの半分以上もあるかと思はれる、赤いスレートで葺いた屋根。マッチの箱のやうに白い壁で包んだ外側、ところどころに切ってある長方形のガラス窓。そして正面のポーチの前に、庭と云ふよりは寧ろちょっとした空地がある。……中に住むよりは絵に書いた方が面白さうな」（『痴人の愛』 1924.3)住宅であった。

1923年発行『建築図案 文化生活と其の住宅』は、建築技師山中節治[5]の作品や設計案を収録したものであるが、同書内の作品解説にも、「青い野に赤い瓦は非常によい調和であります、ですから之れはどうしても赤瓦を主張致します、壁は黄土の漆喰壁がよろしふ御座います、柱「ハーフチンバー」等は「クレオソート」塗が適当であります。」（「菜園中の小さな家」）とか、「二つの尖った三角形の「ゲーブル」と勾配の緩やかな家とが具合よく調和されて居ります……赤い「セメント」瓦を使用致します」（「S博士の住ゐ」）、「赤瓦が温か味があってよろしふ御座います」（「簡易住宅拾種(其の二)」)、「尖った屋根は赤瓦葺きにして」（「簡易住宅拾種(其の七)」)などとあり、急勾配の赤い屋根、卵色の妻壁が随所で推奨されており、当時の明るい色彩の「文化住宅」の姿をかいま見ることができる。



図1-1-1　『建築図案　文化生活と其の住宅』表紙

「文化」の言葉が一般に広く使われるようになったのは、1922年の平和記念東京博覧会で、14戸のモデル住宅を展示して、これを文化村と呼んだことに始まるという[1]。 第１の呼びものともなったこの文化村は、わが国最初の住宅実物展[6]であり、「所謂文化生活に適応する」[7]ことを意識したモデル住宅群であった。東京材木問屋同業組合出品の物を除く13棟は、建築学会が一般募集する際に決めた15項目の条件にのっとって工夫を凝らされたものであったが、条件をまとめると、「一椅子式を主とする事　二家族本位なるべき事　三開放的ならざる事　四建築費は坪当たり約二百円程度なるべき事」[7]などであった。この条件によって設計された住宅を通観すると、一つは設計の出発点を「日本家の概念から出発して洋式の生活に適合せしめやうとしたもの」[7]、 いま一つはこの逆に「洋式住宅の概念に出発点を置き、日本人の住宅にしやうとした」[7]もの、いわば和洋折衷の住宅であったが、「何処となく妙な不自然味」[7]が感じられたという。

これらについては様々な評価が下されたようだが、ここでは当時の雑誌からいくつか拾うだけに止めておく。

1922年の『建築之普及』５月号(No.26)では、「文化村とは余りにも見苦しい名称である。建築工業あめりか屋生活改善會上遠組銭高組其他の住宅の見本品である。洋風生活唱導の一法となればよい。（アンダーラインは筆者）改善宣傳には建築家が付かれている。文化村の建築を説けば大問題と成る。文化村其物を一見したのみでは問題外であります。只此處には不安なる哉『文化的改善住宅』と申上げておくに止めます。」と、かなり批判的ではあるものの洋風生活を主導する手段の一つという点では評価しているように感じられる。

同誌６月号(1922年)の社説では、「現代目標とされている『文化』に對する人々の、生活及至は住宅建築の上によい出発點を示し、夫が一般人士の生活の上に多いなる参考を與へたといふ事は確かである。……詳細に就いては随分と難點を見出す事が出来るが、……其評する處は多種多様で、主催者側の失望も少なくないとのとである。然しながら主催者は之に失望せず建築なる一分野を斯くの如くにまで進め得たことは誇りとして気力を捨て去らぬ事が大切である。少なく共『住宅普及』『改善助長』の上に於いて今度の『文化村』は多いに意義があったのであるから。」と細部には問題点があるものの総体的には好意的に扱かわれている。

北海道でも「文化村」と呼ばれた住区が誕生している。函館では、現在の本町、杉並町、松蔭町、当時の「開発（かいほつ）」の一画が1915年ころか

1：『さっぽろ文庫・別冊札幌生活文化史＜大正・昭和戦前編＞』(1986.2.20)p.42
2：中尾保「顫れる文化生活」(『建築と社会』第2号 1925.2.1)
3：南博＋社会心理研究所『大正文化1905～1927』p.249
4：『大正文化1905～1927』p.250
5：『建築図案　文化生活と其の住宅』（建築書院、1923.2.11)序文によれば、「早稲田大学工学部建築学教室撰科生」とあるが、稲門建築会名簿には記載されておらず、卒業年など不祥。
6：内田青蔵『「昭和改良会」の活動からみた大正・昭和初期(戦前)における「洋風系独立住宅」の導入と成立に関する研究』(1986年)
7：早稲田工学士 山本外三郎「「文化村落の」建築に就いて」(『建築之普及』6月号(No.27)1922年)

8：『ふるさとの想い出写真集　明治大正昭和 函館』(1978.9.30 国書刊行会)
9：池上重康、角幸博他『北大医学部文化村について』(日本建築学会北海道支部研究報告集No.67、1994.3)、同『北海道大学医学部文化村にみられる文化生活の導入』(日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)、1994.9)に詳しい。
10：『大正文化1905～1927』p.7
11：南博編『日本モダニズムの研究』(ブレーン出版、1982.7.30) p.6
12：『大正文化1905～1927』(勁草書房、1965.8.10) p.118
13：『日本モダニズムの研究』p.viii
14：南博編『近代庶民生活誌③世相語・風俗語』(三一書房、1985.5.31)

ら郊外住宅地として発展し、「文化村」と称された[8]し、札幌では北海道大学医学部の初代教授連が1922、23年にかけて、北海道大学官舎隣接地（北10～11条、西３丁目）に、急勾配の半切妻屋根、ハーフティンバーの外壁という、類似の外観意匠で住宅を新築し、「医学部文化村」[9]と呼ばれたことなどが知られている。

大正文化がひとつの頂点を迎え、その特色をもっとも鮮明にしていた時期は、第一次世界大戦(1914～1918) 終戦の頃から関東大震災(1913年)までといわれる[10]。第一次世界大戦は、ヨーロッパ的世界秩序の崩壊とアメリカの台頭をもたらした世界史的イベントであった[11]が、アメリカ同様わが国にも様々な領域で飛躍的な発展・繁栄をもたらした。工業界は空前の活況を示し、映画、ラジオ、雑誌、新聞などのマスメディア産業（または文化産業[12]）が興隆し、電車、バスなど都市交通の営業開始、映画館、カフェー、デパート、レストランなどの商業・風俗営業施設の開店・成長、博覧会などの華やかなエキシビションの開催など、都市化を促進する新しい動きがみられた。

さらに大正末から昭和初期にかけて、「文化」に変わり「モダン」という言葉が盛んにとりあげられるようになった。日本におけるモダニズムは、年代的にはほぼ大正中期から昭和10年代にかけてあらわれた日本的な近代化現象をさすという[13]が、1930年あたりを頂点とする近代化のうねりであった。

昭和に入って新語・流行語の辞典が続出し、たとえば『モダン語辞典』（1930年）、『一般的共通的誤字誤読モダン語の新研究』（1934年）など[14]は、当時の世相をよく浮き彫りにしていた。当時のジャーナルリズムにもしきりに「モダン生活」や「モダン相」などがとりあげられ、同様の風潮は北海道でもみられた。

たとえばその頃の主要紙である『北海タイムス』の見だしを挙げてみよう。「ペーチカ付きのモダン交番」(1928.12.5)、「札師校(筆者注:札幌師範学校)のモダン校舎成る」(1929.10.23)、「北大土木専門部モダン講堂竣工」(1929.12.25)、「超モダーンな偉容　北大理学部の誕生」(1930.4.1)、「西創成小学校のモダン図書館落成する」(1931.6.10)、「古い狭い山鼻校　今やモダーン校」(1932.3.4)、「発寒川右股にモダンヒュッテ」(1932.4.16)、「海員モダン会館」(1932.4.20)、「山鼻幼稚園モダン園舎落成式」(1933.10.2)、「ヒュッテ造りモダン軽川駅落成」(1934.2.20)など、モダンという語が随所に使われている。

1-1　大札幌案内

このモダニズム期の札幌の街の状況、雰囲気そしてモダン相をよく紹介していると思われる文献のひとつに、大塚高俊著『大札幌案内』(1931年)をあげることができる。「朗らかに明るく大衆的にしかも気品」（大塚)をモットーに、「スマートに動く札幌のプロフィル」(木下三四彦）を良く表現した著作で、どのページにもモダニズムの息吹がほとばしっている。市会議員で弁護士の木下三四彦[15]が序で評しているように、「全巻映画・レビュー・カフェーの紙上跳躍」であり、「紙上ネオンサイン」でさえあった。

大塚高俊は当時小学校の青年教師[16]であったが、人名録等には収録されておらず詳しい人物像は不明である。『大札幌案内』の序によれば、この著書をもって「近世社」という出版社を開設したようである。

発行所の「近世社」(札幌市南７西５）というネーミングを始め、巻頭を飾る「札幌行進曲」[17]、「札幌の印象」の章に並ぶ「都市のスタイル、都市美、街路・並木・建築」など「都市」というフレーズの連発、「享楽の札幌」の章に展開される「デパート、劇場、映画常設館、カフェー、喫茶店、ダンスホール」など、「モダンライフ」を象徴する建物群がリズミカルに紹介されている。

「享楽」ということばは、意味があいまいであり、それよりも文化的に高いレベルの楽しみは、「享受」という別な言葉で表現された。芸術作品を観賞し楽しむことは享受であり、酒を飲んだりダンスをしたり芸者と遊ぶような楽しみを享楽といって、そこに上下の差別をつけるのが、ならわしであったという[18]。

本項では、「享楽の札幌」の章にとりあげられ、またこの時代のモダニズムを代表する施設と考えられる、デパート、映画館、カフェーなどについて、高塚の論評を引用しながらふれておきたい。

2-1-1:デパート

「華麗なる殿堂、流行の源泉！」「スマートな姿誇りかに都市のスカイラインを畫するデパート」「そこには都会の一切のものがある」と謳われた[19]デパートは、まさにこの時代の「都会生活者のメッカ」[19]でもあった。北海道で最初の百貨店は、1906年に開業した五番館であるが、初めてデパートメントストアと呼称したのは1912年のことという[20]。瓦葺き寄棟屋根の木骨煉瓦造２階建ての店舗は、１階に大きな弓形アーチのファンライトを連続させ、華やかなショーウインドウが外観を飾っていたが、デパートらしい外観といえば丸井今井百貨店本店がまず挙げられよう。

15：1883年室蘭生まれ。1899年北海道師範学校に入学するが中途退学、東京の順天中学校を卒業、熊本第五高等学校を経て、1912年東京帝国大学法科大学英法科卒業、1913年３月東京地方裁判所所属弁護士となった同年、１月札幌に転居し、同年10月代議士の兄成太郎(しげたろう)が発刊した「日刊北海道報」の副社長に就任した。札幌体育会の創設、野球協会の助成スケート協会の創立などに奔走し、また日本製麻㈱法律顧問、帯広電気㈱取締役、札幌理髪青年会長、札幌魚商仲買協会長、札幌教育会議員などの公職を歴任した。(『札幌之人』『札幌人物史』による)
16：大塚高俊『大札幌案内』（近世社 1931.7.20)
17：「札幌行進曲」大塚高俊作詞、中山晋平作曲

香るアカシアミス・サッポロの
シーク姿の直線美
めぐる高層行くハイヒール
バスと電車のシンフォニー

恋のステップ鈴蘭通
プロムナードの華やかさ
乱れ渦巻くセーラーズボン
星のまなざし月の眉

ジャズと五色の光の巷
こゝは薄野キネマ街
右は山鼻左にしよか
恋の十字路一思案

鐘が鳴りますあの時計台
せめて今宵の更けぬやう
逢うて悩んで別れて泣けば
楡の梢に月淋し

18：南博「総説」(南博編『近代庶民生活誌⑩享楽・性』(三一書房、1988.7.15))
19：『大札幌案内』 p.99
20：『札幌市史 産業経済編』(札幌市役所、1958.4.30) p.295



図1-1-2　『大札幌案内』表紙

21：『丸井今井百年のあゆみ』(1973.12.1) p.187
22：近江栄・堀勇良『日本のモダニズム(日本の建築明治大正昭和10)』(三省堂、1981.8.30)
23：『札幌大案内』p.100。 正面中央階段脇で、ピアノ、バイオリン、チェロの三重奏楽団が終日演奏したという。(『丸井今井百年のあゆみ』p.189)
24：『丸井今井百年のあゆみ』p.188
25：『札幌大案内』p.100

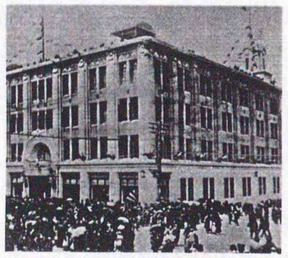


図1-1-3　今井百貨店本店(1926)


図1-1-4　今井百貨店本店(1937)


図1-1-5　今井呉服店(1916)

今井百貨店本店

客用エレベーターを本道で始めて設置したＲＣ造４階建ての今井百貨店本店は、1924年に焼失後、設計を鉄筋コンクリート建築界の第一人者遠藤於菟[21]に依頼し、1925年４月木田組の請負で着工、翌1926年４月末に総工費80万円をかけて竣工した。遠藤於菟は本店に先立つ1923年10月に竣工したＲＣ造４階建ての今井呉服店小樽支店（12月３日開店）もてがけている[22]。

５月13日に開店した新館は、地階下足預り所、１階玄関側下足受渡し口、メリヤス・洋品雑貨、食料品のほか演奏所[23]、２階呉服、洋服売場、３階家具、家庭洋品売場、催場、４階食堂、楽器、玩具、ラジオ、時計貴金属品のほか写真撮影部、美容部、５階屋上遊園場となっており、オーチス会社製客用エレベーター１基と貨物用エレベーター１基を備えていた[24]。昭和６年４月には内外人旅行者に旅行上の便宜を提供するジャパン・ツーリスト・ビュロー案内所が設けられた[25]。

1937年、当時の札幌市の人口は20万人余であったが、10年後の人口25万人に目標をおいた本店の大増改築が着工した。木田組の請負で２月に着手、10月28日竣工、11月１日開館披露された新店舗は、地上７階、屋上広場、航空灯台、展望台延べ4,162坪(13,000㎡)、売場1,845坪(6,089㎡)と、1926年店舗の２倍の大きさとなった。

外壁は白っぽい磁器質タイル貼りで、１階蛇腹は本磨きの花崗岩を使用し、1926年店舗で柱型頂部を飾っていた円形装飾は、新店舗では垂直線を強調した幾何学的な彫刻に変えられた。１階南１条電車通りに面した中央と東側に大玄関２、南西側に小玄関１、電車通り玄関両脇に８つのショーウインドウを設けていた。各階の構成は以下のようであった。

１階：婦人雑貨、和洋酒、食料品売場、商品券、喫煙具、ツーリストビューロー、紳士靴鞄、荷物預り場
２階：紳士、婦人服、メリヤス肌着売場、小催場
３階：呉服、和装小物、高級呉服陳列売場、特別和室
４階：貴金属、時計、和洋家具、家庭用品、催場、婦人着付け室付属の美容部、理髪室
５階：300人収容大食堂と食堂別室２室、楽器、玩具、書籍売場
６階：大ホール（椅子席400人収容）、お好み特別食堂、大温室、茶室雄勝閣（４畳半と２畳台目席の２席と６畳控間）
７階：子供大遊園場
屋上：動物園、庭園式広場、航空塔下大展望台

さて1924年焼失の煉瓦・石造３階建て店舗は、1916年９月末竣工、10月１日に開店したものであった。設計は市役所建築課長遠藤喜三郎技師、請負は小樽大虎組名義で札幌の新開新太郎がてがけた。今井本店の百貨店化は1910年度の役員会から計画されたが、背景には東京や関西での百貨店開設という情勢への敏感な反応があった。

1904年には東京三井呉服店が百貨店業を開始し、1907年高島屋大阪店、1908年松坂屋上野店、松屋、1909年大丸が大阪店、京都店、1910年名古屋松坂屋と、いずれも大呉服店が百貨店方式に変更されている[26]。

百貨店の開設準備は1913年の土地買収から始まり、1915年５月に着工した。総建坪1260坪のセセッション様式の建物は、東北随一を誇るものであり、北海道初の貨物用エレベーターも備えていた。正面玄関上と３階軒下廻りに電飾を採り入れ、夜ともなれば建物のシルエットが浮かび上がり、１階ショーウィンドゥの豪華さは目を見はるものであったという[27]。

１階は一部呉服の座売場、玩具、化粧品、写真機材、文房具、雑誌、などの陳列式売場、メリヤス売場、洋服部、事務室、解荷場、暖房室、店員宿舎、２階陳列売場、休憩室、事務室、電話交換室、店員宿舎、３階陳列売場、食堂、催場、事務室、店員宿舎となっており、当初は客の下足を預かり、靴にはカバーをかけて上った時代が続いた。今井が下足預かり方式から土足のまま入店できる大衆商法に切り換え、日用品販売に廉売方式をとるようになったのは、1929年以降のこと[28]という。

1930年には釧路鶴屋、帯広藤丸などと地方都市にも百貨店が誕生し、1932年には三越札幌支店が開業した。

三越札幌支店

1932年５月１日開業した三越札幌支店は、鉄筋コンクリート造地上６階地下１階一部８階建ての建物であった。当時の新聞(北海タイムス 1932.4.27）には、「屋上の展望が消防の望楼よりやや低い程度」の「全市唯一の高層建築」と報じられている。

外観は大きく３層構成の表情をみせ、１階上と５階上の水平胴蛇腹が各層を分節している。１階は腰部を稲田産花崗石張り、ほかは富国石張りの白っぽい外壁仕上げ[29]とし、２～５階は大オーダー風に扱った無装飾の柱型の分節が古典的な固さをみせている。隅部のパラペットに三越のマークを掲げる６階は、下階の固さを和らげるように半円の３連アーチをみせ、隅切りした隅部のみ４連アーチとしている。２階以上は人造石洗い出し仕上げ及び煉瓦小口形タイル張りで仕上げられていた[29]。

設計監督桜井小太郎建築事務所[30]、施工木田組の手で行われた工事は、1931年４月16日地鎮祭、同年９月17日鉄筋コンクリート工事完了、10月20日上棟式を挙げ、1932年３月31日竣工した[29]。

『建築雑誌』1932年８月号(第560号）記載の工事概要によれば、敷地面積425.1坪(1,402.8㎡)、建築面積313.1坪(1,033.2㎡)、地階331.4坪、１～６階313.1坪、７階72.0坪(237.6㎡)、８階18.0坪(59.4㎡)、延べ面積2,300坪(7,590㎡)。軒高は６階パラペット上端まで80.5尺、高さ８階パラペット上端まで98.5尺。各階階高は地階13.0尺、１階15.0尺、２～


図1-1-6　三越札幌支店(1932)

26：『丸井今井百年のあゆみ』 p.150
27：『丸井今井百年のあゆみ』 p.157
28：『丸井今井百年のあゆみ』 p.159

29：『建築雑誌』第560号(建築学会、1932.8) p.57
30：桜井小太郎は1870年東京神田生まれ。1887年第一高等中学中退、渡英して建築を学ぶことを決意。1892年英国王立建築士会の資格試験に合格、英国公認建築士 ARIBAの称号を得る。1893年帰国。1896年海軍技師に就任、1913年退官後三菱合資会社入社、三菱地所課技師長として丸ノ内ビジネス街の建設に寄与した。1922年三菱銀行本店、1923年丸ビルの竣工後、三菱合資会社を退職、桜井小太郎建築事務所を開設した。三越札幌支店が竣工した1932年には63歳であった。1935年66歳で第一線を退き、1953年84歳で他界した。(『日本の建築[明治大正昭和]８様式美の挽歌』(三省堂、1982.8.10)参考)

5階12.0尺、6階12.5尺(売場他)、15.0尺(ホール)、7階12.0尺、8階10.0尺である。

内部構成は、以下のようであった。

1階：売場(文房具、下駄、傘、髪飾品化粧品、タバコ、写真機、商品切手など)、進物相談所、買上品渡場、飾窓、事務室、荷扱所、宿直室、警防員詰所など
2階：売場(洋品雑貨、洋服、帽子、靴、鞄、時計、貴金属)、休憩室、事務室
3階：売場(呉服類)、特別陳列室、支店長室、書記長室、応接室、電話室、事務室
4階：売場(図書、楽器、運動具、玩具、家具)、休憩室、理髪室、結髪室、美容室、着付室
5階：食堂、土産物売場、喫煙室、別室、写真撮影室、社員食堂、厨房、給仕更衣室
6階：催物場、ホール、楽屋、別室、事務室
7階：園芸品売場、喫煙所、昇降機々械室、屋上庭園、噴水、動物小屋、子供遊場、温室、稲荷社
8階：昇降機機械室、換気機械室、水槽、展望台
地階：売場(食料品、食器、格安雑貨品)、冷蔵庫、汽罐並に機械室、電気室等

エレベーターは、客用2基、店員用1基、厨房用1台を備え、いずれも日本エレベーター製造㈱製であった。もうひとつ同社製で買上げ品の運搬に供されたスパイラルシュートというのも備えていた。4階以下の各階に投入口があり、1階の買上げ品渡場に出口を設けたユニークな設備であった。

1-1-2:映画館

「映画とスポーツ！。この二ッが話せないでは完全なる現代人たる資格がない」[31]とまで大塚にいわしめたキネマは、「性別を超越して、素晴らしい魅力と恐ろしいテンポとをもってモダーンの尖端に立ち時代の流行を決定するところまさに民衆娯楽の帝王」[31]であった。

こうした人気を受けて営業する映画常設館の筆頭は、札幌松竹座であった。1927年2月16日南4西3にあった木造建築の映画館が焼失[32]し、1929年4月同位置にRC造3階建ての建物を起工、同年12月に竣工した。その「ウルトラモダン」[33]の建物は、総工費27万円、総坪卯数580余坪、約2,000人を収用できた[34]。観覧席の大部分は下足廃止、椅子席で、「酸素発生装置」[33]や最新の暖房装置を施し、食堂、娯楽室の設備も併設された[34]。いち早く外国トーキーを紹介したのもこの館であった。

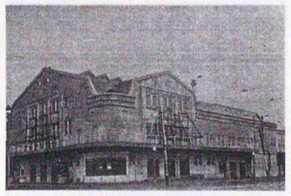


図1-1-7　松竹座

松竹座と並ぶ幌都の双璧、日活系の美満壽館も、1930年に内外大改造を施して面目を一新し、12月29日開館式をあげた[35]。外国映画専門の三友館は、若者に人気の館で、やはり新装を予定していた。

『大札幌案内』発刊後に誕生した南5西2の札幌寳塋座は、1935年8月中旬上棟式をあげ、建坪890坪、300人を収容するRC造3階て、流線型のモダンなものであった。木材業者中村卯太郎の個人出資経営で、総

31：『大札幌案内』p.106
32：北海タイムス(1927.2.17)
33：『大札幌案内』pp.107、108
34：北海タイムス(1929.12.6)
35：北海タイムス(1930.12.27)

工費30万円、設計施工は指田近之輔であった[36]。

この映画館を設計施工した指田近之輔の経歴と業績については、遠藤明久博士の研究[37]があり、「在野の建築家として、めざましい活躍をした大書されるべきデザイナーのひとりである」とするが、1927年から1929年にかけては設計業務を専業とするものの、以後は設計および土木建築請負業者として活躍しており、本論文でとりあげるM．ヒンデルや田上義也などの専業建築家と、一線を画する建築家とみるべきであろう。

指田は、1897年(明治30年)東京府北多摩郡の出身。1920年、私立東京工科学校建築科を卒業(22期)後、東京市役所技手補、富士屋ホテル本社建築技師を歴任。1922年函館市役所に移り、関根要太郎設計と伝えられる市立病院外来診療所の工事の監督員として従事した。

1923年、札幌伊藤組に移籍し、1926年末まで同社に在籍、1927年独立して建築事務所を設立、1929年まで設計を専業としたが、以降1939年に活動を停止するまで、土木建築請負業者として活躍した。1935年、本門仏立講（日蓮宗在野仏教教団）に入信後、1939年に得度して僧籍に入り、事務所は所員に譲られ「指田組事務所」と改称した。

この間1928年からは、庁立札幌工業学校建築科の施工教師を委嘱されて、教育にたずさわったり、1927年から1929年にかけて、北海タイムスや旭川新聞に住宅設計の啓蒙記事[38]を寄稿している。また建築設計図案展を、1928年頃に札幌丸井呉服店、1929年旭川丸井呉服店を会場に開催したり、1931年には札幌工業学校建築科の卒業作品とともに自らの設計案65点を札幌ビルで展示している。後述(第11章)の田上義也の建築展覧会とあい前後してのこの建築展開催は、この期の北海道建築界での見逃せない潮流の一つとして特筆できるものであった。

1-1-3:カフェーと喫茶店

「機械文明線ＡＢが、人間生活線ＣＤと１点Ｏにて交はる時、其交点をカフェーなりとす。而して社会の進歩復〻雑に従ひ此の種交点は無数に其数を加ふ。」[39]という「超モダーン定理」[39]に基づき、この時期に「幾何級数的」[39]に増加した施設のひとつとして、都市の「享楽」[40]を代表するカフェーが挙げられる。このモダン情緒の代表格である「カフェー繁盛の因」[39]を、『大札幌案内』は、物質文明進歩の結果、生活の圧迫や「生存競争」[39]は、日に日に激しくなり、「人々は月に疲労」[39]し、「神経の興奮を強烈な」[39]刺激に求めようとしたことであると述べている。

カフェーは、フランス語でコーヒー店。当初はコーヒーを専門に売る店で、1888年(明治21年)に開店した東京下谷黒門町の可否茶館のようなコーヒー店は、やがて喫茶店と呼ばれるようになり、カフェーはビヤホールにかわる洋酒酒場の名称になったという[41]。カフェーの先駆けとな

36：北海タイムス(1921.7.17)

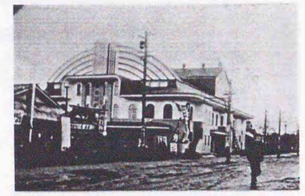


図1-1-8　寳塋座

37：遠藤明久『指田近之輔の経歴と業績』（日本建築学会北海道支部研究報告集№66 1993.3)
38：「千円内外で出来る中流の文化住宅」(1927.10.14、北海タイムス)、「防寒秘法(1)(2)」(1928.1.31、北海タイムス)、「千円内外で出来る文化住宅」(1929.4.9、旭川新聞)など。

39：『大札幌案内』pp.112、113
40：『大札幌案内』p.89
41：『世界大百科事典４』(平凡社、1965.2.10)

42：植田満文『明治大正風俗語辞典』（角川書店、1979.11.25）
43：坂本太郎監修『風俗辞典』（東京堂出版、1981.10.10）
44：林喜代弘「昭和初年大阪歓楽街展望」（南博編『近代庶民生活誌⑩享楽・性』（三一書房、1988.7.15）
45：『大札幌案内』pp.113～115
46：『大札幌案内』p.127
47：『大札幌案内』pp.116～117
48：『大札幌案内』pp.119～122

ったのは、1911年３月[42]に京橋区日吉町に洋画家松山省三が店を出したカフェー・プランタンで、さらに同年12月京橋区南鍋町にカフェー・パウリスタができてから、銀座はカフェーの時代に入ったという[42]。1923年前後には、カフェーは美人の給仕女を置いて、その方で客を呼んだが、内容的にはビールを飲ませるのが主眼に変化してきた。この傾向は洋食屋まで滲透して、いずれもカフェー何々と名乗って、洋酒・洋食の飲食をサービスするようになった[43]。

こうして明治末年に芽生えたカフェーは、大正後期には一段と伸長し、昭和初期には「モダニズムの尖端」をたくみに流入して、独自の世界と調和させ、押しも押されもせぬ風俗産業の王座についた。気軽に遊べる美の殿堂、色情をたのしむ恋愛遊戯、極彩色の室内装飾、ジャズと流行歌のやるせない扇情、歓楽王国の夢があやなす官能の世界に魅せられて、遊ばせ上手の女給との一夜の仇情を夢みる浮れ男が足繁く通うこととなった[44]。



図1-1-9　カフェー三條

『大札幌案内』に幌都のクインとしてまず紹介されているのが「株式会社組織で企業化され」[45]たカフェー三條。「清楚、気転、高雅の三大信条を以て、ホテルの気品とカフェーの和やかさの中間を行く高踏的カフェーの先駆」[45]をうたい文句に誕生したモダーンなカフェーで、1931年５月に田上義也設計で、設備、装飾共に新しく、座席は船室のようなつくり[45]で再誕した。『大札幌案内』に掲載の広告には、「敷地百四拾坪、建物百八十坪、石造ライト式五段床面、建築美と女性美の一大オーケストラ」[46]とあり、建築家が関与して、空間にも力を入れた様がよく表現されている。

三条の筋向かいの錦糸は、広告塔を聳えさせた新装の店舗で、見違えるほど明るい「モダーン振り」[45]で、この頃進出のキリンビールを扱うビヤホールであった。

夏の「鈴ぶら」（鈴蘭通り＝現狸小路）連の絶好のオアシスであった映画館三友向いのツバメは老舗。「モダーン紳士」[47]が客層のエルムは、ツバメと共に古参のカフェーであった。薄野の岡田屋は、札幌で一番大きくウエートレスも多い、市内唯一の大阪式カフェー。ツエッペリン食堂というものを増設して、窓、客席をツェッペリン号風にしつらえるなど「超突端」[47]的な施設でもあった。

日本酒の名をとっているが洋風レストランの北の誉バー、「五色の明滅燈に埋まる」[47]豪華なミミー、カフェー三條と同じ５月に誕生した「新様式建築」[48]のマリモのほか、サロン錦水、太陽、キャバレエロ、コマドリ、ララー、春、ライン、アサヒ、マツヤ、バッカス、芳蘭、クロバー、アザミ、モンナミ、銀河、銀座、北洋、モンパリ、ミマス、スズラン、パンドラ、五条などの店名が並べられている。

モダーンな外観の嗜好は喫茶店でも見られた。「回転式五彩色広告塔」[48]を高く掲げた３階建ての明治製菓売店は、１階は正面左右にショウウィンドーを配した売店と喫茶、２階は喫茶室と撞球場、３階は集会用に当て、「新時代の慰安所と健全な社交場としての役割を果たす」[48]べく、1930年に狸小路に登場した。そのスマートな容姿は、「鈴蘭街の女王」[48]とも謳われ、開店早々サラリーマンと学生の街の要求にピッタリとあって押すな押すなの繁昌振りであった[48]。またメインストリート南一条十字街の亀屋も田上義也の設計で新装をこらして登場した。「モダーンサッポロの心臓に地の利を占めて」[48]「ラッシアワーには若いサラリーマンで、レジスターは猛烈な回転を開始する」[48]繁昌ぶりであった。

ほかに「尖端人種の注意をのがさない」[48]だけのスタイルと装飾をもったルビーや、坊ちゃん、ポプラ、ニグロ、ヤスノ、白樺、ネヴオなどがあげられている。

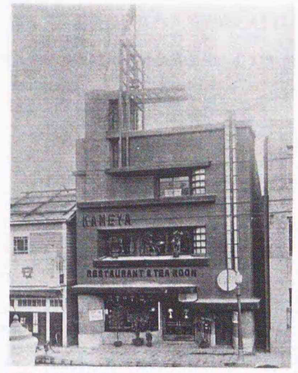


図1-1-10　亀屋

1-2　道外建築家の活躍

もちろん市街地には、銀行や商社など大規模な商業施設も生まれているが、多くは、道外の建築家、建築事務所によって設計されていた。既知のものを年代をおって一覧すると以下のとおりである。

1913年　北海道拓殖銀行旭川支店　大高精・矢橋賢吉
1919年　北海道銀行滝川支店　渡辺節[49]
　　北海道銀行旭川支店　渡辺節[49]
1920年　函館海産商同業組合　関根要太郎
1921年　第一銀行函館支店　西村好時・八木憲一
1923年　北海道拓殖銀行小樽支店　矢橋賢吉・小林紹・山本万太郎
　　小樽今井呉服店　遠藤於菟
1924年　第一銀行小樽支店　中村田辺建築事務所
1926年　十二銀行函館支店　木子幸三郎
　　百十三銀行本店　関根要太郎
　　丸井今井本店　遠藤於菟
1927年　三井銀行小樽支店　曽禰中條建築事務所
1928年　第一銀行札幌支店　西村好時
1929年　千代田生命保険㈾北海道支部　曽禰中條建築事務所
1933年　大同生命札幌支社　W．M．ヴォーリズ
1937年　三井物産㈱小樽支店　横河工務所

このほか、曽禰中條建築事務所の作品では、1918(大正７)年開道五十年記念博覧会で中村順平、1922年札幌独立教会クラーク記念会堂では高松政雄らが担当し、また、ガーディナー[50]の1913年札幌小田良治邸や、助手の荒木賢治の担当した札幌組合教会(1913)、札幌北二条郵便局(同)、札幌エンジェル館(同)や、関根要太郎[51]の1919年亀井邸(函館)なども道外建築家設計の代表例として挙げることができる。また、1921年函館大火の復興に関わった中村鎮も、忘れてはならないであろう。

開道五十年記念北海道博覧会については 2-2で後述するので、本節では道外建築家が関与した作品から、荒木賢治の札幌組合教会と高松政雄の札幌独立教会について若干ふれ、中村鎮については次節で述べることにする。

1-2-1:札幌組合教会と荒木賢治

1913(大正２)年に完成した札幌組合教会(現日本基督教団北光教会)は、荒木賢治の設計によった[52]。会堂の概要を述べる前に、同教会『札幌北光教会七十年の歩み』(1966.10.2)から会堂新築までの沿革に多少ふれておこう。

関西を中心に発展してきた組合教会の北海道伝道は、1882（明治15）年に、日高荻伏（元浦河）に入植した赤心社の第２次移住のときから開始され、教会は1886年に設立された。

49：『日本の建築［明治大正昭和］６都市の精華』p.178
50：J.Mcdonald Gardener(1857-1925)は、1879年ハーヴァード大学建築学科卒業。1880(明治13)年立教大学校長として来日。1925年死去まで45年間にわたり在日建築家として活躍した。
51：1889―1959。1907(明治40)年秩父郡立農学校卒。1911年セセッションスタイルを得意とした三橋四郎建築事務所に入所、三橋の死(1915年)後、日本勧業株式会社を経て1920年独立。
52：『建築世界』第8巻第2号(1914.2.10)

1895(明治28)年５月、米国伝道会社(アメリカンボード)は、札幌に北海道伝道局を開設する目的で、宣教師ウイリアム・W・コルテスと伝道師田中兎毛の二人を派遣した。当時の札幌は人口27,000人、すでに札幌バンドによる札幌基督教会(独立教会)、札幌美以教会、札幌日本基督教会、北一条カトリック教会、ハリストス顕栄教会があり、聖公会も伝道を開始していた。ほかに札幌長老派伝道教会スミス女学校(現北星学園)も開校しており、札幌農学校では札幌バンドの佐藤昌介、宮部金吾、新渡戸稲造らが教鞭をとっており、札幌はキリスト教的色彩の濃い街として発展を続けていた。

二人は山形屋に宿をとり伝道の準備にかかり、８月には家族と共に再度来札し、南１条西３丁目に一軒屋を借り、仮集会所を開設した。当時(1896年)の会員は17名、うち７割は商人かその家族で、「商人の教会」としての色合いを深めていった。

1897(明治30)年札幌美以教会移転の際に旧会堂を買入れ、修繕、模様替えのうえ、９月５日移転式をあげた。1899年北１条西３丁目の元札幌県令調所広の土地 140坪を借りて、新会堂を建築。間口４間、奥行８間の会堂は、会員松原儀八によって建設され、３月上棟式、５月に奉堂式を挙げた。

この会堂はあくまでも仮のものと意識され、新会堂の建築計画は、1903(明治36)年ころから進められ、1909(明治42)年会堂新築を決議、予算12,000円を計上した。会堂新築委員として、集金主任太田建五郎、建築主任松原儀八、会計主任古谷辰四郎・藤井太三郎、顧問相談役ローランド宣教師らを委嘱した。建築設計には松原、藤井、ローランド等が東京、関西方面へ出向き、実地見聞したり専門家の意見を聞き、設計監督は荒木賢治が担当[51]した。

荒木賢治(1881～1948)は、1881(明治14)年４月23日誕生[52]。1898（明治31）年東京工手学校(現工学院大学)の建築学科第19回次卒業[53]の建築家で、1913(大正２)年当時ガーディナーの助手として、小田邸の監理で来札しており、ほかにエンゼル館や北二条郵便局の設計にもたずさわったという[54]。詳しい業績は、今後の課題として残されているが、1939年『建築学会会員名簿』には「建築士荒木建築事務所」とある。

1913年５月、会員の献金 4,000円で札幌区南１条西１丁目14・15番地の760㎡(229.5坪)を買収し、会堂定礎式を行い、同年10月28日竣工した。

1914年の『建築世界(第８巻第２号)』には、「設計監督　建築技師　荒木賢治君」と記載され、正面外観写真、立面図、平面図が収録されている。

会堂は、急勾配の亜鉛鍍鉄板葺き切妻屋根をかけた広間式で、正面性を強く意識したデザインとしている。２階ギャラリー部の大きなゴシック窓、１階や破風上部ニッチの尖頭アーチなど開口意匠に中世主義の表



図1-2-1　札幌組合教会(『建築世界』第８巻第２号)

53：古林龜治郎『現代人名辞典』(中央通信社、1912.6.27)
54：『工学院同窓会会員名簿』(1939.12.1)
55：北海タイムス(1913.7.10)

現がみられるが、上部の小ニッチはトスカナ式円柱と小尖頭アーチをパラディアンモティーフ風にアレンジしたようにとれるし、正面三角破風の稜線の段状の折れ曲げや頂部を水平にカットした玄関廊左右の柱型、玄関廊のパラペットなどの採用に、独自の造形への試みがみられる。

レンガ造３階建て、建坪68.92坪(227㎡)。間口37尺、奥行62尺(以後の尺寸法は心々)の矩形平面で、地階は児童用会堂、１階が会堂である。

１階は、北側玄関廊に続いて奥行11尺部分を「階段之間」(間口11.5尺)、「広間」(間口14尺)、「予備室」(間口14尺)と３分割し、会堂部分は10尺間で４ベイの奥行、南側ベイ(奥行11尺)の中央に「講台」(間口21尺)、西「階段之間」(間口8尺)、東オルガン室(8×6尺)、物置(8×5尺)を並べている。

会堂は、左右各３本の独立束ね柱を立てた三廊式平面。身廊、側廊それぞれ24尺、6.5尺のスパンで、身廊部の天井は、曲面弓なりの板張り。各柱部分は漆喰細工の半円リブヴォールトで結ばれている。会堂部分のゴシック風の装飾に比べ、尖頭アーチの漆喰額縁で縁取られただけの講台廻りは、無装飾の白壁が印象的なシンプルな空間であった。

会堂北側２ベイ分は、２階ギャラリーとし、段状に会衆席がしつらられていた。

地階は、北側に１階と同じ奥行の前室部分に、「階段之間」「広間」(いずれも間口11.5尺)、「教室」(間口14尺)が並ぶ。中央の児童用会堂(24×32.5尺程度)の南端に講台を置き、裏は「機罐室」、「教室兼台所」「教室」(いずれも8.5×7.5尺)、階段室などである。さらに中央の会堂を囲むように、東西各３教室、北側両端に各２教室を並べていた。

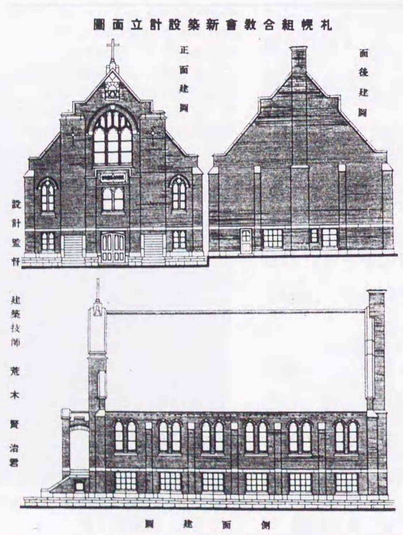


図1-2-2　札幌組合教会立面図(『建築世界(第8巻第2号)』)

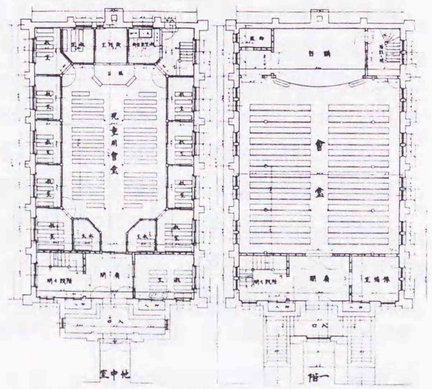


図1-2-3　札幌組合教会平面図(『建築世界(第8巻第2号)』)

1-2-2:札幌独立基督教会・クラーク記念会堂と高松政雄

1970年７月、札幌市南大通西７丁目に建つ札幌独立基督教会・クラーク記念会堂が取り壊された。この会堂は、1922(大正11)年創建のものであるが、それに先立つ独立教会の創設と旧会堂の建築についてまずふれておこう。

札幌独立基督教会の創設と旧会堂(1885年)

札幌独立基督教会は、札幌農学校第１、第２期卒業生（1877、1878年卒業）のうち、同校教頭W・S・クラークによる「イエスを信ずるものの誓約」署名者(31名)を中心に、1882(明治13)年12月に結成された「教派の区別無く日本は日本の教会に依て行く」(内村鑑三)[56]ことをめざした新教団である。教団結成前の1881年から札幌市南２条西６丁目開拓使払下官舎(いわゆる白官邸)の一部を仮会堂として使用していたが、1885年５月南３条西６丁目に木造の会堂を建設した。切妻屋根の簡素な建物で、正面両開き扉口とその両脇の窓にアーチを飾り、妻上部には四葉形トレサリーの円窓をあけている。軒コーニス部分には飾り板(barge board)を張り付けている。側面の窓は質素な上げ下げ窓で、水平下見板の外壁とともに、開拓使洋風建築の延長上にある初期洋風建築の好例の一つといえる。大正時代、新会堂建設のため人手にわたり、直ちに壊されたという[57]。

明治末期にはこの会堂の老朽が著しく、新会堂建設の声が聞かれ始めた[58]。1912(大正元)年10月、たまたま来札中の内村鑑三によってクラーク記念会堂新築の建議がなされた。直ちに新築準備が開始され、翌1913年大通西７丁目に敷地を購入している。しかし、当初の５ヵ年計画も資金が十分集まらず、さらに第一次世界大戦による物価の高騰によって延期を重ね、1921年８月ようやく工事契約を結ぶに至った。

既に工事の始まっている1922年２月の独立教会機関紙は、新教会堂着工に至る経過を説明し、請負工費 5,600円および諸設備費のためさらに寄付金を集めねばならないことを訴えている[59]。この請負金額 5,600円は、当初構造を石造として設計見積が７万円に達したため、煉瓦造に設計変更し、さらに請負業者伊藤亀太郎（伊藤組）の好意によるものであった。

工事は、1921年８月工事契約、同年10月30日クラーク博士の令孫を招いて定礎式を挙行、約13ヵ月の工期を経て翌1922年８月28日完工、翌９

56：札幌独立基督教会機関紙『北海教報　第53号』(1901.11.8)
57：『北海教報　第116号』(1922.9.15)
58：たとえば『独立教報　第61号』(1912.3.15)
59：『独立教報　第109号』(1922.2.15)によれば、請負工費56,000円、設備費10,000円、合わせて66,000円のうち、集まった金額は、申込み15,000円、旧会堂売却費20,000円、合計35,000円であった。

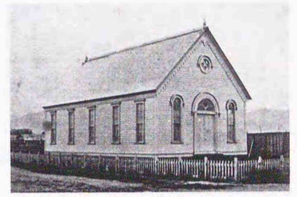


図1-2-4　札幌独立基督教会(1885)



図1-2-5　札幌独立基督教会新会堂(1922)

月献堂式を挙げている。

以降40年歴史の風雪に耐え続けたが、1962(昭和37)年７月三越に売却され、1970(昭和45)年取り壊された。

新会堂の概要

煉瓦造半地下付き２階建て、延べ面積約 666㎡のこの建物は、本体北側屋根が寄棟、南側が切妻と異なる屋根形式を有し、さらに北側寄棟部分に切妻屋根のポルティコを付属する。創建時には亜鉛引き鉄板瓦棒葺きであった。

外壁は、礼拝堂部分では煉瓦をそのまま露わしているが、玄関ホール部分およびポルティコでは、煉瓦の上に人造石洗出し仕上である。正面の付柱も、外壁と同様人造石洗出し仕上である。正面壁は、三角ペディ

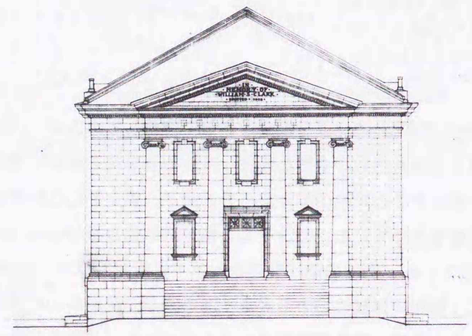


図1-2-6　北立面図(1970年実測)

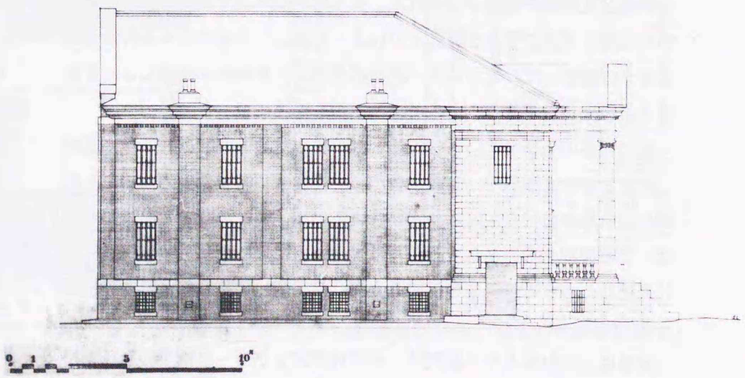


図1-2-7　東立面図(1970年実測)

メントをのせた二つの盲窓と、４本のタスカンオーダーの付柱によって構成されている。

ポルティコ部分は、前柱式(Prostyle)のローマンスタイルを顕著に表わしているが、これは19世紀のクラシックリバイバルではよく使われたパラディオ風のスタイルである。

高い基壇上にベースの付いた４本の太いイオニア式独立柱が立ち並び、大階段が会堂へと導いていた。大階段の左右には夜灯が備えられ、両端の独立柱と主棟の付柱間にはバラスターが付いていた。

大ペディメント下のフリーズ部分には、「札幌独立基督教会」と、ティンパヌム部分には、「IN･MEMORY･OF･WILLIAM･S･CLARK･ERECTED･1922･」と銅製文字をはめこんでいた。

東西側面では、窓は上げ下げであるが、さらに外側に両開きの銅扉が

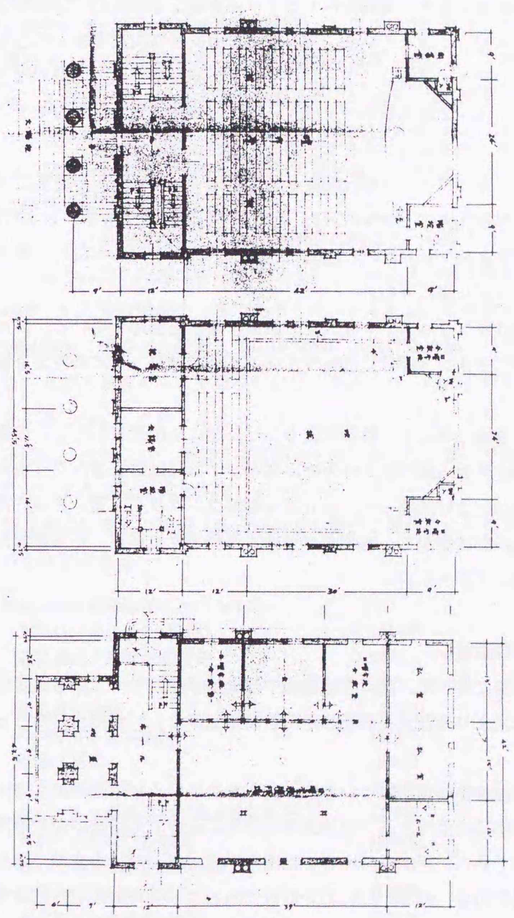


図1-2-8　平面図(札幌独立キリスト教会蔵)

付けられており、窓台および楣には石が用いられていた。地階北側前室部には東西両面に出入り口がつけられ、外側にシャッターを備えていた。

南面は、正面の様式的スタイルとはうって代わって、倉庫のような印象を与える、煉瓦壁面の単純な切妻スタイルである。

平面は、間口42尺、奥行51尺の礼拝堂の北側に、間口43.5尺、奥行12尺の前室を置き、さらに北側前面にポルティコ部分(27x9尺)を付属している。１階は「礼拝堂」(以下「　」付きの室名は旧図面による)として使用され、南側正面にはアーチのついた講壇が、正面東側に「図書室」(9×9尺)、正面西側には地階へ通ずる階段室(9×9尺)があった。

２階へは、西側階段より上り、玄関ホール上部に「会議室」(12×11.5尺)、「記念室」(12×17.25尺)の２室がある。

礼拝堂上部は吹き抜けで、ギャラリーがコ字型に廻り、北側は12尺の奥行で会衆席を置き、両端のギャラリーが南側正面左右の「日曜学校分教室」(9×9尺)に通じていた。天井にはアカンサスの葉をあしらったメダイオンが付き、隅部分にモールディングを施していた。内部の仕上げは漆喰仕上げ、２階北側のギャラリーは、曲線を描いた大きなモディリオンと、２本のタスカンオーダーの化粧角柱が支えていた。

地階は、ポルティコ下部は物置として、ホールをはさんで南側に大きな「日曜学校礼拝堂」(39×27尺)、それを「日曜学校分教室」３室(12×16尺の２室と15×16尺)、「私室」２室（12×16尺、12×15尺)、階段室(12×12尺)がＬ型に囲む。

小屋組はキングポストトラスで、釣束に鉄筋を使用している。ポルティコのペディメント部分には鉄骨が使用されており、２本の控えで固定されていた。

本体の構造は煉瓦で、礼拝堂部分では外壁にそのまま露わし、正面玄関ホールは表面人造石洗出仕上げ、ポルティコ部は鉄筋コンクリート造、人造石洗出仕上げであった。独立柱も鉄筋コンクリート造、人造石洗出仕上げ、内部は空洞で、内側を木造捨て型枠で丸く造り、そのまわりに鉄筋を配してあった。

設計者高松政雄

教会資料によって、設計者は曽禰中條建築事務所で、「両者監督の下に最近欧米より帰朝せる同事務所所員高松工学士」[60]が担当したことがわかる。

曽禰中條建築事務所については、あらためていうまでもない。1908(明治41)年に設立された、明治末から昭和にかけての指導的設計事務所のひとつである。設計委託の経緯は明らかではないが、中條精一郎が札幌農学校新校舎(1903年７月)の設計者であることを考えれば、新会堂建設委員の一人である宮部金吾(札幌農学校教授)その他教会関係者との知

60：『独立教報　第109号』

悉関係は容易に想像できるところである。

実際に設計を担当した高松政雄(1885～1934)については、『高松政雄君の制作と著作』(1935.9.5)に詳しい。

同書によれば、高松政雄は1885(明治18)年11月５日横浜市長住町生まれ。1910(明治43)年東京帝国大学建築学科を卒業、卒業論文「建築家の修養」は、伊東忠太の推薦でその年の建築雑誌にも掲載された。また卒業した年の12月建築学会臨時通常会においてＪ・コンドルの講演「公共建築に関する私見」を臨時に通訳するなど、その秀才ぶりを物語るエピソードである。

同年７月曽禰中條建築事務所に入所、翌11年10月から1914年９月まで病気静養のため２年間の一時休所があるものの、1934(昭和9)年3月11日の死去まで20年間にわたって同所員として活躍した。1920年エコール・デ・ボザールに留学する前の中村順平、同年早稲田大学理工学部建築学科選科生になる前の蔵田周忠らが、高松の同僚・後輩として机を並べていた。この間、1911年日本建築学会正員、1918年には工手学校建築科において建築構造法を教授(1920年まで)、1920(大正９)年２月日本建築士会および煖房冷蔵協会（のちの衛生工業協会）正員として入会、1922年には病院建築研究所を創設している。

1920年９月業務視察のため北米合衆国に派遣され翌年５月に帰朝している。海外出張の詳細は明らかではないが、次の大作日本郵船ビル（1925年竣工）の設計準備のためであろうか。とすれば、札幌独立教会は高松が帰朝後、郵船ビル設計までの中間期に手掛けた小品ということができる。北国の新興キリスト教派の会堂の設計には、訪米の体験も活かされたに違いない。クラシックリバイバルの国アメリカからの伝道を象徴するのに、クラシックな様式は適切なものであった。まじり気の少ない、まことにすなおな様式を実現している。

独立教会以外に、前掲『高松政雄君の制作と著作』によると、以下のような作品がある。

曽禰中條建築事務所に於ける作品

東京海上保険会社(旧館)	1918年
慶応義塾大学医学部校舎	1918～1920年
慶応義塾大学医学部付属病院	1919～1932年
東京自治会館	1922年
永田町井上眼科病院	1924年
稲葉子爵邸	1924年
井上医学博士邸	1926年
慶応義塾大学医学部付属食養研究所	1927年
東京府医師会下谷病院	1928年
慶応義塾大学予防医学教室	1929年
駿河台井上眼科病院	1929年
東京海上保険会社(新館)	1930年
㈱東京計器製作所	1930～1931年
日本精工株式会社事務所	1934年

病院建築研究所に於ける作品

芝医院	1922年
大阪難波病院付帯設備	1924年
私立松山病院	1925年
産科婦人科濱田病院	1926年
産科婦人科濱田病院付属産婆学校	1926年
社団法人実費診療所横浜支部病院	1928年
社団法人実費診療所大阪支部病院	1932年
財団法人東京慈恵会医科大学付属東京病院	1930年

個人としての作品

富士見町日本基督教会	1916年頃
松江税務署	1923年
Ｉ邸	1924年
Ｓ邸	1924年
渡邊忠雄邸	1925年
加藤守一邸	1926年
田島定雄邸	1928年
本間良道邸	1929年
Ｓ氏邸	1929年
堤経長邸	1930年
東京府立第三高等女学校御真影奉安所	1930年

著作も多く、すべてを挙げることは控えるが、卒業論文以来終始一貫して建築家の職能、道徳的立場を強調し、晩年は建築士法制定の促進運動にも尽力した。『高松政雄君の制作と著作』にも、建築士法に関して、「建築士法と建築士の対社会の義務」(日本建築士 1929.4.)など６編、建築士の業務に関して11編、建築競技に関して、「建築の競技と建築の職業と」(日刊土木建築資料新聞・土木建築界全貌号 1932.8.15)など８編が収録され、建築一般に関しては、前述の「建築家の修養」のほか21編、講演として「横浜の復興と建築」(1924.9.27)「病院建築に就て」(1926.4.2)などが掲載されている。ほかに、採録しなかった著作目録が付記されており、実に 165編の著作が挙げられているが、多くは1920年以降のものである。

卒業直後の華々しい活躍を思い起こすと、「10年間の沈黙は長すぎる」[61]ように思えるが、高松は、当時東京海上火災保険会社旧館（1918年竣工）という大作の設計をかかえて設計業務に忙殺されていたのであろう。同時に、「筆の人たり口の人たるは吾人の使命に非ざる……断じて実行也」[62]という高松は、専心建築設計に打ち込んだのであろうか。「勤勉で」[63]「周到綿密」[64]な執務ぶりであった高松らしい一面と思われる。

61：蔵田周忠「建築評論家として」(『高松政雄君の制作と著作』追憶記)
62：「建築家の修養」(『建築雑誌 285号』(1910.9.25) p.455)
63：中村琢治郎「緒言」(『高松政雄君の制作と著作』)
64：黒崎幹男「事務所の先輩高松政雄氏」(『高松政雄君の制作と著作』追憶記)

1-3　中村鎮と不燃建築

中村鎮マモル（1890～1933）は、1914(大正３)年早稲田大学卒、以降昭和初期にかけて活躍した建築家である。『建築ト装飾』などでの評論や、「中村式鉄筋コンクリートブロック」の特許、この構法による函館での建築活動などで知られている[65]。

65：村松貞次郎『日本建築家山脈』（1965.10.20）、村田專三郎『函館建築工匠小伝』(1958.函館市史資料集31集)、『日本近代建築総覧』(1980.3.30)など。

1-3-1:中村鎮の経歴[66]

中村鎮は、1890(明治23)年10月福岡県糸島郡波多江村に中村彌次郎の次男として生れた。1908(明治41)年、福岡市の市立中学校を卒業後、台湾総督府土木局傭として台北水道水源地でＲＣ造倉庫などの設計、現場管理助手を務めたが１年余で依願解職、早稲田大学理工科建築科に入学した。在学中は、書生として佐藤功一宅に寄寓していた[67]。在学中『建築ト装飾』に評論を発表し、1913年には同誌の編集主任をつとめた。1914年卒業、翌1915年には陸軍技手になるが、同年野田俊彦も陸軍技手に任ぜられている。

1917(大正６)年病気のため陸軍をやめ、一時アメリカ屋につとめたようであるが、1918年東洋コンクリート工業株式会社技師長に転じた。コンクリートブロック構造の考案に手を初めたのは、両社在職中のことである。1920年５月、日本セメントを辞職独立し、日比谷交差点で建築相談所を開いた。翌1921年４月の函館大火を機に同地に赴き、「銀座街」火防線建設に加わった。同年、中村建築研究所を設立、特許中村式鉄筋コンクリートブロック造の普及、研究に努めた。1926(大正15)年には都市美協会を主唱設立、1928年には早稲田高等工学校で建築歴史学の講師をつとめた。1933(昭和８)年、東京市杉並区荻窪に自案「新軽量構造」の自宅を新築し移転したが、同年８月19日病没した。

66：中村音羽編『中村鎮遺稿』(1936.9.5)による。
67：『中村鎮遺稿』の佐藤功一序から。

1-3-2:中村式鉄筋コンクリートブロック構造の概要

中村鎮考案のブロック構造については、自身が1923(大正12)年『早稲田建築学報』に発表した『「コンクリートブロック」より鉄筋「コンクリートブロックまで」』に詳しい。

この構造は、Ｌ字型のブロックを組み合わせ、壁体をつくり、これを型枠として鉄筋コンクリート造の壁柱を打ち込み、床スラブは、中空部をもつ小梁スラブとするもので、いわゆる型枠コンクリートブロック造の一種である。中村鎮は、特に関東大震災後、中村鎮式鉄筋コンクリート造と称している。これは、震災で耐震性に弱点を現わしたブロック造のイメージを避けるためと思われる。

前掲『早稲田建築学報』の論文では、ブロック構造の利点として、

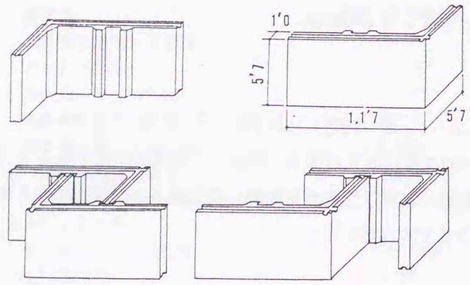


図1-3-1　中村式Ｌ字型ブロック(『早稲田建築学報 第二号』(1923.7))

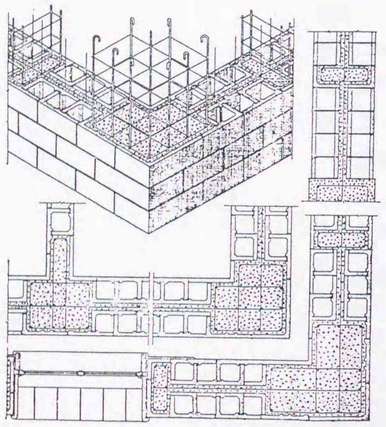


図1-3-2　中村鎮式ブロックの床スラブ(『中村鎮遺稿』)

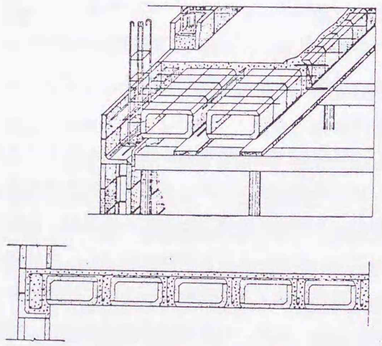


図1-3-3　中村式ブロックの壁の構造例(『中村鎮遺稿』)

①保温、防湿、②材料および基礎の軽減、③型枠の削除、④施工の迅速、⑤価格の低廉、⑥外観の優良ー壁厚が厚くなることによって「壁面を内外とも非常に豊かに落付多く見せる事」および、天井、壁に梁柱型の突出しないことー、⑦配管配線の便利、⑧耐震耐火性の８点をあげている。これらは鉄筋コンクリート構造の弱点を補うものとして考えられている。

余談であるが、この中村式Ｌ型ブロックの特許に対し、疑問を述べた人もいた。ベルリン在の早大工学士古塚正治が『建築の普及』（1922年５月号）という雑誌に「中村式Ｌ型特許ブロックと所感」と題して、この形式のブロックがすでにドイツでは使用されているもので、特許に値するものかどうかと報じている。古塚は、1920年ミュンヘン市ブリュックマン図書会社発刊「小住宅と小台所」に小住宅の経済的方法として使用されている点をあげ、さらに同年６月号に、「再び中村君のＬ形ブロックに就て」と題してドイツにおけるＬ形ブロックについての詳細を補

足している。それによれば、1917、18年頃のドイツ国内の経済的困憊を背景に、民衆の住宅問題の解決として『経済的建築施設博覧会』が開催されたこと。その出品作のひとつとして、ハッケの「アムビイ石建築施設（即ちＬ形ブロック）が、優良名誉一等賞金杯が授与され、一名ハッケ人造石とも称されたこと。カタログには、このアムビイ石の建築方法によれば、その利点として、一般鉄筋コンクリート建築物と同様に鉄筋の併用ができることはもちろん、単なるコンクリート造としても、煉瓦造の壁厚１枚半以上の強度を有し、施設の簡易と迅速、仮設工事を要しないこと、仮枠代わりになることなどがあげられている。またドイツにおける戦時中からの石炭其他の燃料の欠乏する状況下で、煉瓦のように燃料がいらず、準備工事の軽敏な点について、当時の審査長であった枢密顧問官、ベルリン高等工業学校長、都市開拓役所最高委員ヨット・ブリックスの賛言を得たこと、そしてヨハンニスタールのドイツ政府開拓役所がただちにこの方法を採用して多くの住宅建築に好結果を納めていることも付記している。古塚は、ベルリンで実際に中村のブロックを見たわけではなく、雑誌のニュースから単に形態に対してこうした意見を述べたわけで、たとえば中村式ブロックの長い方の「足」の腹部の２本のリブの工夫や、Ｌ形の組み合わせ法などについては見逃している。

中村は、前掲『早稲田建築学報』の論文中で、このアムビー（古塚のいうアムビイ）式建築法にふれ、ドイツの特許の方法であること、非常に優れた方法とは思わないが小建築（低い３階くらいまでの物）には適当な方法で、鉄筋柱を小さいながら完全に組み合わせている点など、鉄筋コンクリート構造の大切なところを誤っていないが、中建築および大建築に用い得ないのは、この方法に限らず多くの鉄筋コンクリートブロックの共通の欠点であると、自らの構造との違いを強調している。

1-3-3:中村鎮の作品

『中村鎮遺稿』(1936年）の中の「制作年表」には128件の作品が載録されているが、うち119件が「中村式鉄筋コンクリート構造」であった。この構造は、前述のようにＬ字型コンクリートブロックを型枠として壁体、壁柱、小梁スラブを形成するもので、いわゆる型枠コンクリートブロック造の一種である。

119 件の同構造建築は、東京周辺の45件を主として全国に分布しているが、特に初期の30件が北海道（うち25件が函館）に建てられている。1982年現在での道内の作品30件を表1-3-1 に示した。函館で２件１棟のものが２例あったので、建物棟数は28棟となる。うち17件（15棟）の現存を確認した。不明３件、他は滅失している。さらに「制作年表」以外に同じ構造で建てられた６件、ブロック寸法など形式は異なるが類似構造の４件を見出したので表に併記しておく。

1-3-4:1921(大正10)年函館大火復興と中村鎮

中村鎮と函館の結びつきは、同市中心街49町歩余を焼失した1921（大正10）年４月14日の大火による。中村は、早稲田大学卒業後、陸軍省、アメリカ屋、東洋コンクリート工業、日本セメント工業株式会社を経て、大火の前年1920年に独立したばかりであった。函館区蓬莱町(現宝来町)の映画館「錦輝館」（1920年10月起工）設計を機に函館への往来が始まり、工期中に大火に逢ったものと思われる。

「耐震耐火の鉄筋コンクリート建築（又は其以上のもの）を、如何に廉価に能率よく又如何に衛生的に造るべきか」（『建築経済の問題』（中村鎮遺稿）原文の傍点をアンダーラインで示している）を使命とし、新構法を考案した中村にとって独立直後に遭遇した函館大火とその復興は絶好の機会であった。函館の側からしても中村の貢献は大きかった。中村自身の言を借りれば、「全くの田舎町に過ない函館が……東京や横浜が（そうして大阪が）その実現難を嘲って居る軒並防火建築の完成を僅々一二年の間に成し得」（同上）たのである。



図1-3-4　錦輝館
（『早稲田建築学報 第二号』(1923.7)）

函館区会は、大火直後、街区改正と火防線の設定を議決した。火防線は街路両側または片側の５間幅に防火建築を建てる構想で、甲種火防線として蓬莱町「銀座街」（街路両側）および「二十間坂」（片側）が指定された。この火防線建設に中村がかかわる経緯は自身の回顧によればおよそ次の通りである[68]。

区側の目論見では通常の坪当建設費木造の80円と、ＲＣ造 160円の差額を補助および低利融資でまかなうはずであったが、実勢にあわず難行していた。そこへ中村が自身の特許鉄筋コンクリート（ブロック）造なら予定の 160円以下で実現できると提案、受入れられたという。「制作年表」中16件が、1921年７月一斉に起工、同年12月に竣工しており、11月16日には盛大な連合上棟式が行なわれている。函館の永年にわたる防火的都市づくりの、重要な一里塚であった。

68：中村鎮『建築経済の問題』『いわし屋大磯商店の建築―中流商店建築の一実例』(いずれも『中村鎮遺稿』)

1-3-5:「銀座街」火防線の建築

函館はこうした都市防火の努力にもかかわらず、13年後の1934（昭和９）年３月21日の大火で市街の大半を焼失した。「銀座街」火防線も「道路を横断して延焼した形跡」[69]こそなかったが、惨禍をくいとめるには無力であった。「銀座街」の建物自体も多くが内部を焼失している。日本建築学会の大火調査報告[69]によって「銀座街」の概要を知ることができる。街路両側66棟のうちＲＣ造24棟、コンクリートブロック造19棟、煉瓦造15棟、他に木骨鉄筋コンクリート、土蔵造が混在していた。中村の作品は、現存の確認できるもの13件(12棟)、確認できなかった3棟も、所在地から推してこの中に含まれそうであるから、「銀座街」のコンクリートブロック造19棟の大半を中村が手がけたことになる。

69：『函館大火(昭和9年３月21日)調査報告』(建築雑誌1934年６月号)

表1-3-1　北海道における中村式および類似鉄筋コンクリートブロック建築(1982年現在)

（番号は「制作年表」の建物番号、○印現存）

	旧名称	現名称	所在地	階	工期	現存
3	小川商店		函館市旧恵比寿町	2	T10.7—10.12	不明
4	石塚商店		〃　〃	2	〃	不明
5	外川商店	小野寺商店他	〃　宝来町23-3	3	〃	○
6	岡本商店	スナックカトレア他	〃　〃　23-5	2	〃	○
7・12	関、藤原商店	銀座そば他	〃　〃　22-16	3	〃	○
8	柳川商店	割烹料理う志ほ	〃　〃　23-2	2	〃	○
9	本田商店	居酒屋まさこ他	〃　〃　〃	3	〃	○
10	亀山商店	青函設備工業	〃　〃　23-6	2	〃	○
11	青木商店	三愛梱包運輸他	〃　〃　21-12	2	〃	○
13	千秋製パン株式会社	真光堂作業場	〃　〃　24-2	2	〃	○
14	丸北	共立ビル	〃　豊川町1-4	3	〃	○
15	外村商店	住友建設函館出張所	〃　〃　1-15	3	〃	○
16	能見商店	喫茶ブロスパー	〃　末広町7-16	2	〃	○
17	北川商店		〃　〃　〃	2	〃	S9解体
18	目貫商店	道南石油社宅	〃　〃　17-16	4	〃	○
19	錦輝館	スーパーホリタ銀座店	〃　宝来町22-18	3	T9.10—11.10	○
20	相生町交番		〃　元町29-9	1	T11.3—11.6	戦後解体
21	中村建築研究所函館出張所		〃　旧蓬莱町	3	T11.3—11.8	不明
22・23	石川、高島商店	井上正義アパート	〃　宝来町25-15	2	T11.6—11.10	○
24	西本願寺別院庫裡		〃　東川町12-12	1	T12.4—12.7	S9焼失
25	地蔵町交番		〃　豊川町7-1	1	T11.6—11.12	S55解体
26	函館市役所自動車車庫		〃　豊川町23-17	1	T12.6—12.8	解体
34	西本願寺別院塀		〃　東川町12-12		T10.10—11.4	S9焼失
37	札幌測候所	国鉄札幌電気工事事務所	札幌市中央区北8西9	2~3	T12.8—13.2	○
45	北海道庁倉庫		〃　〃　北3西6	2	T13.8—14.6	S41解体
46	旭川新聞社印刷工場		旭川市5-10	2	T13.5—13.10	S46解体
63	北海道電燈株式会社倉庫		〃　4-10	2	T14.8—14.9	S40s解体
84	室蘭市社会館		室蘭市幸町1-2	3	T15.5—15.11	S36解体
中村鎮「制作年表」以外の中村式鉄筋コンクリートブロック建築						
		旅館海龍	函館市宝来町8-3	3	S4	○
	室蘭市公益質屋及び倉庫		室蘭市幸町1-2	1	S3	S36解体
	室蘭市立病院		〃　常盤町2	2	T15	S26解体
	杉村工務店住宅	畑江邸	札幌市中央区南16西7	2	S5	○
	北海道拓殖銀行滝川支店		滝川市本町1	2	S8	○
	北海道拓殖銀行紋別支店		紋別市本町3	1	S7	○
類似のコンクリートブロック建築						
	大浜崎畳店	大浜崎畳店	函館市宝来町25-2	2	T10—12頃	○
		山田そば店	〃　〃　〃	2	〃	○
		薄木麻雀荘	〃　〃　22-12	2	〃	○
		田口美容院	〃　豊川町1-2	3	〃	○

中村が自作に数えていないコンクリートブロック造の建物がいくつか見出された。大浜崎畳店はＲＣ造フレームに型枠ブロック張壁を用いているが、ブロック寸法は中村式より大型であった。山田そば店、薄木麻雀荘も同様の構造と思われる。田口美容院では、スラブは中村式であるが、壁体に１尺角のブロックが用いられていた。旅館海龍(1929年)の壁体は中村式と同寸のブロックを積んでいる。

1-3-6:函館以外における中村式構造の建築

「製作年表」には、函館のほか、札幌、旭川に各２件、室蘭１件の作品が載せられている。札幌測候所(1924年)は、札幌市中央区北７条西10丁目にあって、1939年以降は国鉄札幌電気工事事務所（現国鉄清算事業団北海道支社札幌事務所)として使われている。『札幌気象百年史』(1976年)によれば、鉄筋コンクリート造２階建て、延べ241.5坪の建築であ

70：『旭川新聞』1924.8.13
同記事中に「赤阪技師は此の最新発明者たる中村氏の実兄で同時に中村氏築造の主宰者である」とあるが詳細は不明。
71：『室蘭市史　下巻』(1941.6.25)
72：杉村工務店および拓殖銀行の建築については、北海道設計監理㈱広田基彦氏の教示による。

った。北海道庁倉庫(1925年)は、1966年に取り壊された。

旭川新聞印刷工場(1924年)は、中村の報知新聞社（1921年、東京麹町区）が、「昨秋の大震大火に際して些の被害な」かったので「専賣特許中村式鉄筋混凝土に依り赤阪工務所赤坂準吉（準一？）技師に設計施工を嘱し」たという[70]。この建物は1971年頃、また北海道電灯株式会社(1925年)も1960年代に取り壊された。

室蘭市社会館(1926年)は、市立職業紹介所庁舎として新築されたもので「本館間口十八間、奥行八間……合計三百二十三坪八合」の建物であった[71]。戦後市分庁舎などに使われたが、1961(昭和36)年解体された。

函館市以外でも、「制作年表」にない中村式鉄筋コンクリートブロック造の建築がいくつか建てられている。室蘭市社会館付設の公益質屋および倉庫(1928年)、さらに室蘭市立病院（1926年、1951年焼失）が、中村式鉄筋コンクリート造で建てられた[71]。誤って「制作年表」からもれたのでなければ、構造特許を使用して独自に設計したものであろう。

札幌では、北海道庁倉庫を施工した杉村工務店が、その後中村式ブロックの製造と普及を目的として営業したという。札幌の畑江邸は、杉村工務店のモデル住宅として建てられたものである[72]。

北海道拓殖銀行滝川支店(1933年)は、コリントオーダーの古典様式建築であるが、構造は中村式鉄筋コンクリートブロック造である。設計者臼沢長吉は、1877(明治10)年岩手県生れ。1907(明治40)年から1919（大正８）年まで道庁技師として勤め、同行紋別支店(1932年)もてがけている[72]。


図1-3-5　北海道拓殖銀行滝川支店

中村自身、自身の考案した鉄筋コンクリートブロック造を、むしろ積極的にＲＣ造の欠陥を補うものと考えていた。函館や札幌、室蘭、滝川などで、自作以外の中村式ないしこの類似構造の建築が建てられたことは、この構造がＲＣ造の普及確立の過程期において、一定の役割を果たしたことを示すものと考えられる。

1-4 鉄筋コンクリート造建築と函館

函館では、1921(大正10)年大火を契機に、前述の中村式鉄筋コンクリートブロック造などの防火造建築が普及し、耐火造建築の商店群で構成された「銀座街」などを生み出していったが、北海道で初めて鉄筋コンクリート（以下ＲＣと略）造の建物が誕生したのも函館である。

1-4-1:東本願寺函館別院

ＲＣの使用は、1907(明治40)年頃、函館区技師渋谷源吉が汐見町の道路境の擁壁に採用したのが最初の例といわれる[73]が、本格的に建物に採用されたのは、1912(明治45)年７月３日起工式[74]、1915(大正４)年11月完成の東本願寺函館別院本堂である。

同別院は、本道初のＲＣ造建築であるとともに、我が国最初のＲＣ造寺院としても名高い。伝統的な寺院建築の様式そのままに、細部に至るまでＲＣで造った傑作であり、柱上部組物、虹梁などは構造部材と同時にコンクリートを打ち、外部に見える棰は１本ずつプレキャストして釣り込んだ。入母屋瓦葺き屋根の小屋組は鉄骨造、使用された異型鉄筋は、米国トラストコンクリート、スチール社製という[75]。また外廻り開口部には開き戸形式の鉄製防火戸も採用され、耐火への細心の注意が払われていた。

間口32.7m、奥行33.1m、建築面積1,084.67㎡の大規模な本堂は、内陣左右に余間を配し、前面に柵内、一段下がって外陣、その前面に入側を置く、典型的な本願寺本堂形式を踏襲している[76]。

1907(明治40)年大火で類焼した本堂の再建は、初め酒井建築事務所[77]の設計によって行われる予定で、酒井啓次郎、大淵金也両名が担当[78]。木造伽藍の外側に煉瓦を貼り付ける防火措置を施したものであった。模型を造る段階まで進んでいたが、壇信徒総代３代目渡辺熊四郎が率先してＲＣの不燃構造を主張、酒井案は廃案となった。

ＲＣ造によって新本堂を建てることについて、辰野金吾博士は様式と構造がマッチせぬ故不可能と断言したが、帝室技芸員伊藤平左衛門は可能であるとし、設計の嘱託を引き受けた。また伊東忠太博士も可能としたらしく、工事監督に石丸又吉を推薦している[79]。施工請負は10世伊藤平左衛門即ち吉太郎工学士であるが、実際には伊藤の配下にいた木田保造に一任された。

木田保造は、1882(明治18)年１月13日千葉県君津郡大貫町小久保で、宿屋と網元を業とする旧家の長男として生まれた。２歳で父親と死別、1910(明治34)年17歳で横浜の大工鈴木栄吉の徒弟として修業したが、鉄道院募集の大工に応募し上京、築地の夜間工手学校に入学した。1906年

73：村田専三郎『函館建築文化雑記』函館名匠顕彰義会(1943.11.25)
74：函館毎日新聞(1912.7.4付)。同紙1912年11月13日付けでは、起工式を挙行したが、明治天皇崩御により、実際には1912年10月22日から着手とある。


図1-4-1　東本願寺函館別院

75：函館毎日新聞(1912.12.1)
76：遠藤明久『大谷派本願寺函館別院(大正４年)の構造形態』日本建築学会大会学術講演梗概集(1978.9)
77：主宰酒井啓次郎。末広町渡辺熊四郎本店西隣に所在。村田専三郎「建築アラカルト」(『建築士/函館地方建築士会10周年記念　1962』)による。
78：村田専三郎「函館の建築(一)」(『郷土昔話』1951.9.11)
79：村田専太郎「建築アラカルト」(『建築士/建築士10周年記念　1962』)

大蔵省臨時建築部に「雇」として奉職し、1910(明治43)年に依願解雇、この頃白木屋の改築工事を手掛けていた伊藤平左衛門の知遇を得ている。翌1911年土木請負の木田組を赤坂溜池で開業、翌年明治が大正と年号が改まったばかりの８月に結婚、1913年東本願寺別院再建に取り組むため来函した[80]。

工事の最大の苦心は資金調達もさることながら、保造傘下の職人や専門技術者達がＲＣ工事に未経験で、理解と知識が欠けていることだった。保造は毎晩彼らに講義を続け、工事の円滑化を図り、さらに別院工事中の1913年６月30日から函館毎日新聞紙上に『火防建築に於いて』という記事[81]をのせ、ＲＣ構造の啓蒙も図っている。主な部分を抜粋すると

「而して防火上必要なるものは、家屋の構造、防火壁の設置、道路の改造、消防の完備等なるも、(中略)私は只この家屋の改造及防火壁設置に就て、少しく述べんとす。都市の中央にある諸学校は第１に之を不燃質物にて造ること、之と同時に官衙其他公共物寺院等の大建築物は、之れも不燃質物を以て造り、斯くして一般に布及せしむべく、斯る不燃質の大建築物が都市に散在する時は、一朝火災の起りし場合には、其延焼を防遏し、且つ消防上、非常なる利益を得るものにして一つの大防火壁を造りしと異ならざるべし。」[82]と、防火帯としての不燃建築物の利点を述べ、また、鉄筋コンクリートが、土木建築界に広く応用されるに至った理由として、「△第一工費の非常に低廉なること。△(二)振動及激動の抵抗の大なること。△(三)防錆なること。△(四)耐久的特性を有すること。△(五)形成容易にして外部の美観を得、且つ施工の迅速なる事。」[83]を挙げ、「実地に付いては、目下当区元町別院に於て再建せらるへき本堂工事に、此の鉄筋コンクリートを以て築造しつつあるので、之れは日本古式の御堂造りであるが、工場としては、札幌鉄道院管理局の工場及室蘭の機関庫等がこの鉄筋コンクリートの施工中である。今後に於ける、我国の建築も別に旧套を墨守するの必要はないから、此の経済と美観と実用とが相待って調和されて居るといふ此の新方式をやるがよかろふと思ふ。そこで有志の仁は各其の手近の工事場の実地に付いて見聞し、研究せらるるは最も参考となるべき事と思ふ。」[83]と書き、連載の締めくくりに、別院建築工事の概要も述べている。

この不燃質構造採用には、明治以来、３度類焼の憂き目をみた本堂再建への檀家衆の並々ならぬ意気込みをみることが出来るが、何といっても初めてみる構法。工事が進行して「繊弱なる鉄棒と鋸肌の枠に依って、泥土に等しき不浄極まる混凝土を流し込みて造る」本堂をみて、一部の檀徒から「木の香馨しかるべき新御堂が、其の真髄から仕上げまで、得体の解らぬ泥工作では、御仏様、御先祖様に対し何共申訳ない」と建設資金の寄付が途絶えるという事態もあったという[84]。渡辺熊四郎の一計により、上棟式(1914年11月10日)を早め、多数の檀信徒を床スラブに招き、構造に何の懸念もないことを実証した[84]というが、いかにもＲＣ造の草創期らしいエピソードである。

また総代渡辺熊四郎も、ＲＣ造啓蒙のため、木田保造の設計・施工で、自己経営の書店大正堂をＲＣで1913年７月に着工、完成は別院本堂よりも１年早い1914年11月であった[84]。

1916年には相馬哲平の寄付によって、辰野葛西建築事務所設計の函館図書館行啓記念書庫が竣工した。ＲＣ造5階建て延べ122坪の建物で、施工は、地元の村木喜三郎であった[85]。

80：木田保太郎『木田保造』(1942年4月16日旧版発行、1976年 4月16日再版発行)
81：1913年７月11日まで連載。
82：函館毎日新聞(1913.7.3)
83：函館毎日新聞(1913.7.5)
84：山崎英雄『道南の槌音／函館建設業界史』(函館建設業組合 1982.4.1) p.105
85：川島龍司『はこだての文化財　古建築編』(函館市文化財保護協会 1971.12.20)

1-4-2:村田専三郎と建築同好会

一方、1916年９月から６ヵ月間、函館工業補習学校でも、本道初の鉄筋コンクリート工法の特設科が開かれている。東京高等工業学校附設教員養成建築科出身の村田専三郎（1916年４月訓導として来任）が、「鉄筋コンクリート法」と「万国建築条例」の講義を行った。村田によると、「当時はまだ鉄筋鉄骨に関する参考図書も少なく主として蔵前で習った「ノート」を基にして「ロンドン市鉄筋コンクリート条例」や「東京市建築条例案」（1913年東京市が建築学者に委嘱してつくったもので実施には至らなかったもの）を虎の巻にした」そうである[86]。

この講義には各方面の技術者が多数参加し、修了後全員が引続き建築研究のために「建築同好会」を組織したといわれている。函館工業補習学校建築科主任小田千太郎(1914.４～1925.３まで在職)を会長に、会員には、函館区役所の職員、鉄道院函館保線事務所の所員ら43名の参加があり、中には岡田健蔵函館図書館長の名も見られる。会の趣旨は、主として不燃建築の研究発展進行であり、建築座談会、通俗講演会等を教育会と提携して開いたり、希望者から賞金を預かって住宅の設計図案懸賞募集をしたともいわれる[86]。

86：「建築士會以前(函館建築団体のあれこれ)」(『北海道建築士』Vol.16 1956.1.26 pp.31～33)
87：前掲『函館建築文化雑記』

建築同好会会員名簿[87]

函館区役所	沼崎梅吉、駒林善三郎、布目清重、志子田新吉、清水弁
専売局	西沢亀之助
要塞司令部員	飯尾采吉、岩佐常三郎
監獄署	伊藤重治
図書館	岡田健蔵、岡田哲郎
函館支庁	武部四郎
税関	村上頼、太田秀雄
鉄道	福井静、佐藤留之助
築港	岩淵数衛
学校	藤木源吉、斉藤文五郎
建築業	新庄新太郎、斉藤正次、斉藤良治、山本金作、松野梅次郎
大工	西川市太郎、二本松勝次郎、八日市登喜松、田浦正吉、葛巻長松、杉田芳太郎、平野忠治、三束粂次郎、桜井吉雄、越田庄太郎、小安土與市、小池源作
建具木工	加賀彦一、山田彌惣吉
其ノ他	奥村銀平、梶塚吉蔵、萬年正次、河部三蔵、青木幸次郎

88：岡田健蔵『小学校建築の不燃化に就て』(函館紅茶倶楽部、1923.4)
89：小野基樹「鉄筋混凝土小学校建築調査報告」(『函館市広報』1923.7.15)
90：『播州解纜 —小南武一の生涯—』(1982.1.20)

1-4-3:公共建築の不燃化

前出のように木田保造は、小学校建築を第一に不燃化すべしとの意見を既に1913年に述べているが、こうした建築界の不燃化への動きに大きなはずみとなったのが、1921(大正10)年４月の大火である。市の公共建築の不燃化に関して、建築同好会の会員であり、また市会議員であった岡田健蔵が口火を切った。

岡田健蔵は、青森県出身の大工、岡田丹蔵の子息であり、そのためか建築に寄せる関心は並々ならぬものがあった。1916年完成の行啓記念書庫も、鉄筋コンクリート工法に強い興味を持つきっかけとなったに違いない。岡田はまず1923年２月14日の第１回函館市会で、谷地頭小学校々舎の不燃化を提唱する。この提案は市側には結局受け入れられなかったが、同月19日から25日にかけて、函館毎日新聞紙上に『小学校建築の不燃化に就て』と題する論説を連載し、広く一般市民に問いかけた。さらには、これらをまとめて同年４月函館叢書第１冊同題パンフレット[88]を発行、坪当り350円（岡田の試算の3倍弱）を要するとした市の技術部の計算に対し、建築費のわずかな増資で不燃質校舎が実現し得ることを試算によって強調したものであった。

市役所側も岡田のこうした主張をむげに退けた訳ではなく、積極的な対応を示したようである。岡田のパンフレットが発行された同じ1923年、土木課長小野基樹は、６月17～30日に東京、大阪、神戸を視察し、結果を『函館市広報(大正12年７月15日)』に「鉄筋混凝土小学校調査報告」として報告した。内容は、各地の鉄筋コンクリート造校舎の特徴を詳細に説明し、特に工費については広いスペースをさいて重点的に報告している。また、最後に付記された小野の意見の中で、技術者に関する項は、市側の方針に大きく影響した。

東京、大阪両市のように建築技術者を集めやすい役所でも、鉄筋コンクリート小学校の設計はほとんど全部著名な事務所に頼んでおり、「優レタル技術家ヲ聘スルニ困難ナル当市ノ如キニ於テハ」[89]「高級ナル技術家ヲ平素ヨリ多数聘シ置クヨリ」[89]も依託の方が経済的であるとする意見を受けて、市長佐藤考三郎は、曽彌中條建築事務所宛にＲＣ造建築の経験者を「任期１年」という条件で推薦を依頼した[90]。中條は、技師三戸義雄（1883～1938)、技手小南武一(1897～1976)、荒木善三郎(？～？)の計3名の派遣を決定、函館市の公共建築不燃化は、彼らの来函（三戸は1925年３月、技手２名は同年４月赴任）を機に本格的に始まることになった。

彼らの赴任とほぼ同時に、1925(大正14)年５月１日、土木課営繕係は建築課に改められ、継続中の建築工事と並行して、西川町市民館（1927年３月１日竣工)、函館図書館本館(1928年７月17日開館式）、新川小学校（1927年11月15日竣工)、函館女子高等小学校(1929年９月28日竣工)

91：「彙報 市民館開館式 工事概要」(『函館市広報』1927.4.15)

などが、ＲＣ造で次々と建てられていった。

市の工事初のＲＣ造の市民館は、「工事概要」[91]によれば、設計並に監督には三戸、小南に加え、技術員田村久吉、臨時技術員石井仁作、篠木幸吉らがあたった。

図書館本館は、小南が設計を担当したが、竣工当初は現状の洋瓦葺き勾配屋根とは異なり陸屋根で、市民館と類似の意匠をみせていた。

新川小学校は、荒木の担当といわれるが、これら一連の初期ＲＣ造建築の設計監督業務の中心が、三戸であったことはほぼ間違いない。三戸は、その実力を請われて道庁に転職、1927年８月８日付で函館市役所を退職、小南は同月26日付で建築課長代理を命じられることになる。課に昇格したころ８名であった職員は、２年半後には18名まで増えたが、一連のＲＣ造建築工事に目処がつき、1927年12月１日建築課が廃され土木課建築係となるにおよんで、職員数も10名程度に減少している。荒木も1928年に退職し、その後市内の瀬崎組に入社している。

営繕組織の規模が縮小された反面、小南を中心とした組織は、かなりまとまった形態をとりはじめたともいえる。1926年に臨時技術員で採用された石井仁作、篠木幸吉は函館工業高校の卒業生で、いわば最初の函館市役所子飼いの技術者といえる。彼らは、1934年大火の目覚ましい復興に活躍することになるが、小南のもとで、この頃からすでに復興を可能にする下地が作られつつあったということができる。

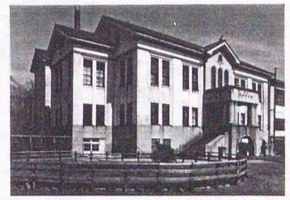


図1-4-2　函館市立図書館本館

1-4-4:1934(昭和９)年大火復興

92：『建築雑誌』(1934.5)

1934年３月21日の大火は、火防線として期待されていた銀座街沿線の建築群のほとんどを延焼し、過半数が今後の使用に耐えられないまでに損傷を受け、中には崩壊したものさえあった。市中では、ＲＣ造建築の不燃性に対して不信が囁かれるようになった。このため日本建築学会では、市民の建築知識啓発のため、『耐火建築の注意』[92]と題するパンフレットで「耐火、耐震、耐風、耐久の諸性質を合せ備へた最も優秀な構造は、鐵筋コンクリート造である」と力説し、また『鐵筋コンクリートが火に弱いといふ誤解を解く（函館市民諸君に告ぐ）』[92]というリーフレットを作成、市役所及び警察署等を通じて全市民に配布した。

学会は、その中で、(誤解は)「まがひの鐵筋コンクリート造を本當の鐵筋コンクリート造だと誤認してゐたからである。今回の場合でも本當の鐵筋コンクリート造の建物は火災を免れて燒跡の中に完全に残って居る」とし、具体的に建築名をあげた。西川町の函館郵便局電話分室、真砂町（実際は鶴岡町）の商工会議所、地蔵町の十二銀行、末広町の松下商店、風月堂、東濱町の大森商店などに並び、市営繕設計の市民館があげられ、また修理可能な損傷軽微なものにも、新川小、函館女子小が含まれていた。このことは、小南率いる技術者たちの大いに自信を深める

ところとなったに違いない。

1934年12月28日に函館市復興事務局が創設され、局長のもとに庶務、区画整理、工事の３課が置かれ、翌35年１月工事課内に建築係が設けられた。係長は小南武一の兼務である。復興建築事業は、市役所土木課建築係の技術者たちが担当したと考えられ、職員数もその時期に増大している。大火前に11名であったのが、大火後の1935年７月には37名、10月には47名にもなっているが、復興事業が一段落つき、復興事務局から建築係が廃された1937年10月１日以降は人員が削減され、翌1938年７月には14名まで減少している。

公共建築の復興は、新川、函館女子小の２校舎をはじめとする罹災建築物の復旧工事がまず行われ、さらに焼失小学校校舎７校にかわる不燃質小学校５校（青柳、高森、東川、的場、大森、1935～37年）の新設がなされた。また、財団法人共愛会の建物群のように直営事業外のものも手掛けた。

共愛会は、1934年9月12日、函館市火災救援会に交付された資本金137万円を基に、西川町函館市役所（大火後半焼だった西川町市民館内に市役所を置いた）社会課内に設置された社会事業団体である。その事業はおおよそ、住宅建設、職業紹介所、簡易宿泊所、児童保護の四種類に大別される。このうちＲＣ造の共愛会館（1937年竣工）、蓬莱アパート（同年竣工）、ＳＲＣ（鉄骨鉄筋コンクリート）造の大火記念慰霊堂などは、小南武一を中心とする市の復興建築スタッフによる設計であった。

蓬莱アパート

蓬莱アパートは北海道初のＲＣ造集合住宅である。土地買収費6,493.57円、工事費34,392円、設計監督費2,264.20円[93]をかけ、1936（昭和11）年8月14日着工、翌1937年10月25日竣工[93]した。1,500㎡の敷地に建つ３階建ての建物で、建築面積1,084.95㎡、塔屋の192.46㎡を加えて、延べ床面積3,447.31㎡である。

１階を店舗併用住宅とする64世帯収容の賃貸下駄履きアパートで、全館を１号より６号館に区画[93]し、１階は店舗と１室（6畳）または２室（4、6畳および6、8畳）の４タイプと一部２室（Ｄタイプ）の住戸、２、３階は、４タイプ（Ａ～Ｄ）の２室でまとめられている[94]。Ａ、Ｄは、８畳・６畳と玄関、流し、Ｂ、Ｃは４畳・６畳と玄関、流しで構成され、４戸ごと（一部５戸）に階段室を設けた階段室型で、１階は街区内裏庭へ通り抜けられた。上階裏庭側には非常用バルコニーを張出し、非常階段や各室専用階段とも連絡するなど避難動線も考えられていた。飲料水は市上水道、洗濯他雑用水は敷地内の井戸から各階に配水された[93]。便所は水洗式であった。また共同洗濯場、物干場、共同倉庫を備えていた[93]。「各室の独立性と採光換気に特段の注意」[93]を払って設計されたアパートの

93：『函館市史資料集 第6集』（函館市史編纂委員会、1956.12.22）
94：「函館共愛會蓬莱ビル案内圖」（北海道大学建築史研究室蔵）による。



図1-4-3　蓬莱アパート

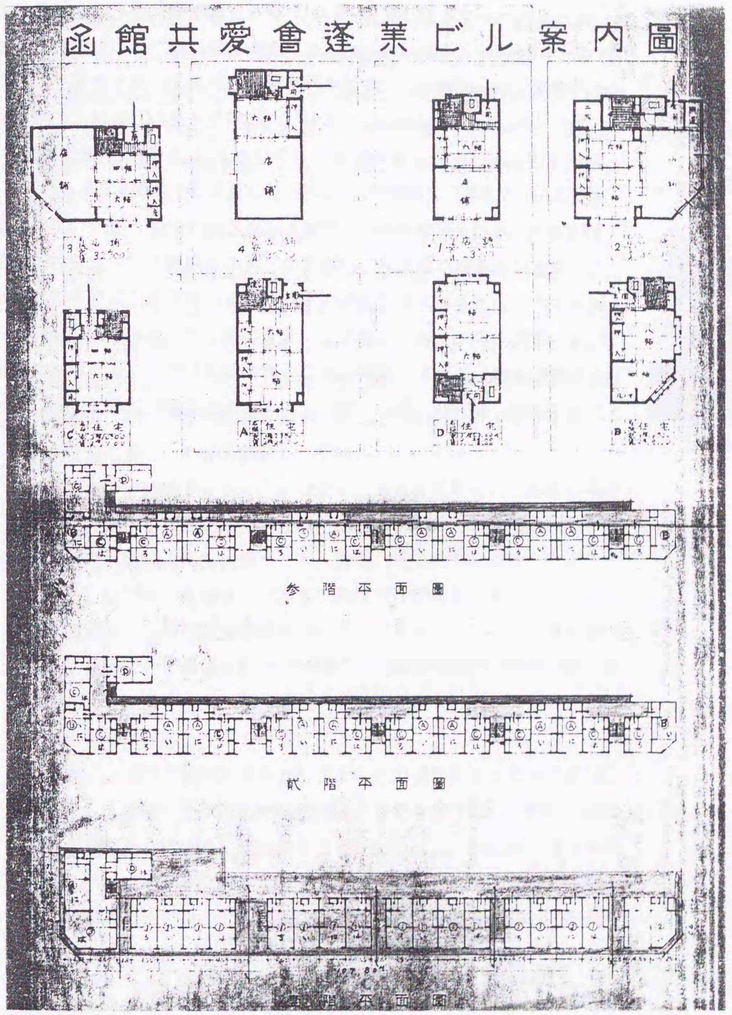


図1-4-4　蓬莱アパート平面図

家賃は次表のようであった。

蓬莱アパート家賃(円)

			2階	3階	1階
店舗併用 1	23	住宅A	24	23	／
2	35	B	19	18	／
3	32	C	17	16	／
4	30	D	24	23	18

大火記念慰霊堂

もうひとつ異彩を放つものとして、大火記念慰霊堂がある。名前が示すように1934年大火後、殉難死者の供養を目的に建てられた堂宇である。その管理には、高龍寺、大谷派本願寺別院、称名寺、実行寺等、計12寺が当たった。設計は1936年に始まり[95]、1937年４月19日に着工、翌1938年9月30日に竣工した。鉄骨鉄筋コンクリート(ＳＲＣ)造平家建瓦葺き、建築面積185.5坪、工事費111,493円、設計監督費2,040円であった[96]。

広間兼祭場と火灯窓風意匠の祭壇からなる間口10間、奥行15間の主屋の奥左右に事務室や祭具室、控室用の９坪の付属棟をつけた左右対象の建物である。大きな入母屋屋根の主棟の妻側に唐破風の向拝を突出させ、懸魚、蟇股、平三斗組、木鼻など、ＳＲＣ造ながら木造寺院の細部意匠を忠実に採用している。設計は主に小南が担当したらしく、新築工事図面の「技師」および「設計」欄には、小南の印が捺印されている。



図1-4-5　大火記念慰霊堂

95：「慰霊堂新築工事設計図 昭和11年6月」による。
96：『函館市史資料集 第6集』

1-5　官庁営繕建築家と市街地建築

戦前期における北海道建築界の活動中心は、北海道庁や主要都市（函館、札幌、小樽など）、北海道帝国大学などの営繕組織や営繕技術者たちであった。そしてこの傾向は、ヒンデルや田上義也ら少数のフリーアーキテクトが誕生した時期でも変わらず、主流を占めることになる。

北海道における営繕組織や技術者については、体系的な研究がそれほどなされているわけではない。早い例では、遠藤明久博士の『開拓使御用係安達喜幸について 第1報 履歴とその業績の概要』(日本建築学会北海道支部研究報告集 1961)、『開拓使の建築技術者』(日本建築学会論文報告集 Vol.103 1964)、『開拓使営繕事業の研究』(私家版 1971) など開拓使技術者に関するものや、北海道事業管理局炭礦鉄道事務所技術者に関する報告[97]があり、また北海道庁の営繕組織と技術者[98]、函館の営繕組織[99]、小樽の営繕組織[100] などに関して断片的に報告されているに過ぎない。

表1-5-1 は、大正・昭和前期(1912～1940)における北海道庁と札幌、函館、小樽、旭川の営繕組織の主な作品を年表化したものである。北海道庁の活動については、1980年２月６日実施の「橋本理助・広田基彦両氏を囲んでの座談会」での聞き取りおよび橋本氏作成の営繕年表メモを、主要自治体の作品については、札幌市事務報告、函館市事務報告、小樽市事務報告、旭川市事務報告を基本資料に、上記報告によって補足しているが空欄も多く、今後の課題として残されている。

こうした学校建築や官公庁庁舎などの公共建築設計という本来の業務以外に、北海道では民間設計事務所がほとんどなかった状況を反映して、民間市街地建築物の設計依頼なども、営繕技術者たちに寄せられることがあった。1934年の札幌グランドホテルなどは好例といえるが、その他にも、札幌区土木技師遠藤慶蔵設計の今井百貨店(1916年)、小樽市技師成田幸一郎設計の小樽組合教会(1926年)、北海道帝国大学営繕課長萩原惇正設計の日本メソジスト函館教会ハリス監督記念会堂(1930年)など、いくつか例をあげることができる。

また逆に、専門の建築技術者を擁することのできなかった地方自治体などでは、北海道庁土木部の建築技術者の援助を受けたり、外部の建築技術者を嘱託として臨時に雇用することが行われた。特に音江村（現深川市音江）の学校建築に嘱託としてかかわった石井喜助は、個人事務所としても延べ12市町村の営繕事業に関与しており、北海道における市町村営繕技術者の中で、特筆すべき存在ということができる。

97：『北海道事業管理局炭礦鉄道事務所の建築技術資料(その1)』(日本建築学会北海道支部研究報告集№32 1969)
98：吉田実『北海道における学校建築に関する史的研究―道庁設置以降の初等・中等学校建築をめぐって―』(1980年度北海道大学建築学科修士論文)
99：越野武ほか『開拓使函館支庁の営繕組織について』（日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) 1988)
大條雅昭ほか『函館市(区)の営繕組織について』（日本建築学会北海道支部研究報告集№56 1983)
100：小坂映王ほか『昭和初期における小樽市の営繕事業について』（日本建築学会北海道支部研究報告集№63 1990)

表1-5-1 北海道庁と主な自治体の大正昭和前期営繕年表（1912－1940）

建築年	北海道庁	札幌	函館	小樽	旭川
1912 T1	滝川警察署 木2 稚内警察署 木1		第二東川小学校 工費:28,598.950円 7.12完成引渡[1] 若松小学校校舎付属工事 工費:33,700.800円 11.12竣工[1]		
1913 T2	札幌第二中学校 木2 渡島支庁旧管理事務所	豊平尋常高等小学校[2]		堺尋常小学校 木2 設計:蛭田某,施工:松前宗太郎[2]	上川第六尋常小学校[2]
1914 T3	庁立函館師範学校 木2 11.24上棟，T1.8.10着工，施工:萩越増太郎[2] 庁立小樽商業(現緑陵高校)		高砂町大森町公設便所 工費:367円(2ヵ所) 高砂小学校 工費:26,352.110円,T2.着工 住吉小学校 工費:32,619.590円,T2.着工		
1915 T4	上川支庁庁舎 木2		消防本部 新川小学校体操場		
1916 T5	庁立室蘭中学校 木2 11.-竣工，T6.6.10開校式[2] 庁立札幌工業学校 木1 12.-竣工，T6.6.10開校式[2]	豊水尋常高等小学校御大典記念文庫[2]	伝染病院(移転改築)		
1917 T6	札幌女子尋常高等小学校 施工:伊藤組[2]	千代ヶ岱小学校校舎及付属屋 6.28受渡			
1918 T7	開道50年記念博覧会中島拓殖館 木2 旭川警察署 煉瓦2 北海道農業会館 木1				
1919 T8	空知支庁庁舎 木1				
1920 T9	士別警察署 木2 庁立室蘭高等女学校 木2 真駒内種畜場第3牛舎 武華駅逓 木1屋一部2 庁立錦路高等女学校 木2 1.31竣工，T8.7.13着工[2]	信濃尋常高等小学校 木1[2]	若松小学校増築工事 5.31落成[1] 松風小学校校舎其他建築工事 6.22竣工[1] 工業補習学校 10.9落成式[1] 千代ヶ岱小学校増築工事 10.27竣工[1]		
1921 T10	自治講習所 木3 広尾警察署 木1 庁立滝川高等女学校 木2[2]		巴小学校校舎付属屋新築工事 12.26受渡[1]		
1922 T11	庁立函館商業学校 木2一部1 庁立網走中学校 木2[2] 庁立札幌第一中学校 木2	円山尋常高等小学校[2] 豊水尋常高等小学校 木2[2]	常盤小学校校舎付属屋新築其他工事 5.22竣工[1]	量徳女子小学校 小樽水上警察署 稲穂小学校(増改築) 手宮小学校	
1923 T12	庁立八雲中学校 木2 庁立稚内中学校 木2 名寄警察署 木2 羽幌警察署 木1 北海道庁別館 RC3 札幌測候所 CB2 庁立帯広中学校 木2 庁立岩見沢中学校 木2[2] 庁立名寄中学校 木2[2] 庁立野付牛中学校 木2[2] 庁立旭川師範学校第1期工事 木2 11.-竣工 施工:宇佐美常次郎[2]		谷地頭小学校校舎新築工事 12.28竣工[1]	市立小樽図書館 木2 11.-竣工[4] 長橋小学校 木2 12.-竣工[4] 手宮小学校(増築) 潮見台小学校(増築) 色内小学校(増築) 稲穂小学校(増改築) 量徳女子小学校(増改築)	

建築年	北海道庁	札幌	函館	小樽	旭川
1924 T13	庁立室蘭工業学校 木1 庁立旭川師範学校第2期工事 木2 10.-竣工 施工:宇佐美常次郎[2] 庁立函館商船学校 木2，施工:瀬崎組 庁立帯広中学校増築 木2 庁立留萌中学校 木2[2]	西創成尋常高等小学校 木	精神病院新築工事 9.27竣工[1] 肺結核療養所新築工事 7.25完成[1] 巴小学校新設工事 7.25完成[1] 弥生尋常小学校模様替工事 7.1完了[1]	奥沢小学校(増改築) 手宮小学校(増築) 稲穂小学校(増築) 花園小学校(増築) 堺小学校(増築)	
1925 T14	庁立函館高等女学校 RC3，施工:瀬崎組 庁立旭川師範学校第3期工事 木2 12.-竣工 施工:宇佐美常次郎[2] 庁立苫小牧工業学校 木2，木1 一部2 庁立余市中学校 木2 6.20竣工，T13.7着工[2] 庁立永山農業学校 木2 庁立網走中学校 RC3 庁立倶知安中学校 木2 10.17竣工,T11.9着工[2] 北海道農事試験場 RC3? 17丁目官舎 木1，約50戸 豊平橋高欄	幌西尋常小学校 施工:大星賛平[2] 北光尋常小学校[2]	第二東川小学校校舎其他増築工事 10.6竣工[1] 千代ヶ岱小学校校舎其他増改築工事 11.17竣工[1] 巴小学校校舎其他増改築工事 11.17竣工[1]	職業紹介所 長橋小学校(増築) 小樽中学校	
1926 T15	北海道工業試験場 RC2，施工:伊藤組 帯広警察署 RC2 庁立留萌中学校 木2 北海道大沼学院・寮 木1 農業試験場根室支場(標津) RC2 網走支庁庁舎 RC3一部木1 錦路支庁庁舎 RC3 庁立函館水産学校(元商船学校を改め増築) 木2 庁立余市中学校 木2 函館森林事務所 木1 真駒内種畜場大牛舎(サイロ付き) 木1 幣舞橋高欄 行啓記念北海道庁立図書館 煉瓦造2一部3，T14.着工，施工:鈴木与兵衛， 真駒内種畜場種豚舎および北豚舎・官舎各1棟	平岸尋常高等小学校[2] 東橋尋常高等小学校 木2[2]	柏野診療所消毒所増築工事 東部公設市場新築工事[1] 幸小学校校舎其他増改築工事 10.6完成[1]	若竹小学校 木2 11.15竣工[3] 量徳女子小学校(増改築)	
1927 S2	庁立小樽水産学校寄宿舎 木2 錦路警察署 RC3 庁立函館高等女学校(現西高校) RC3 10.20竣工[2] 農業試験場練習生実験農場校舎 木2 庁立旭川師範学校中央寄宿舎 木2 12.-竣工 施工:宇佐美常次郎[2] 農業試験場上川支場 煉瓦2 留萌森林事務所 真駒内種畜場犢舎・蕃殖牝馬厩・豚舎・寄宿舎・官舎各1棟		市民館新築工事 3.1竣工[1] 萬年橋小学校新築工事 4.20竣工[1] 市役所庁舎増築工事 大森尋常高等小学校 木2 設計:三戸義夫 施工:森川組[2] 新川尋常高等小学校 RC3 11.15竣工， 施工:萩越組[2]	真栄保育園 木2,1 9.-竣工 担当:大槻啓一郎技手[4] 手宮保育園 木2,1 9.-竣工 担当:大槻啓一郎技手[4] 若竹小学校(増築) 手宮小学校(増改築)	新北門尋常小学校 RC2 11.26竣工，設計:倉辻吉次郎，施工:多東清吉
1928 S3	伊達警察署 木1 庁立網走中学校 RC2，9.10竣工，S2.8着工[2] 庁立旭川師範学校第4期工事 11.-竣工 11.12落成式 施工:宇佐美常次郎[2] 北海道水産試験場庁舎(余市) RC3 工業試験場増築工事 RC2?	東尋常高等小学校 木2[2]	市立函館図書館新築工事 7.17開館式[1] 柏野小学校新築工事 4.2落成[1] 弥生女子小学校増築工事 10.8完成[1] 函館市公益質屋新築工事[1]	第一(入船)高等小学校 木2,1 10.15竣工 担当:青山實治技手[4] 長橋病院(増改築) 労働職業紹介所 第三消防派出所 奥沢火葬場番人住宅(増築)	新北門尋常小学校(第1期増築) RC2 11.24 啓明尋常高等小学校 RC2 11.30竣工， 施工:多東清吉[3]

建築年	北海道庁	札幌	函館	小樽	旭川
1929 S 4	真駒内種畜場大牛舎(サイロ付き) 木1? ヒュッテ銀嶺荘(十勝)? 木3 旭橋高欄 根室警察署(改築) RC2 庁立札幌師範学校 RC3，9.30竣工，S3.4.-着工，施工:今井組[1] 檜山支庁庁舎 RC2一部木2 水産試験場滅水(ﾛｶﾙ)実験室(水族館) RC2および1 本庁文書課書庫 CB2 公設質屋 RC2,道内各地 留萌森林事務所 木1	札幌療養所本館 S5.10.1 開所式 札幌第一高等小学校 木2[2]	函館女子尋常高等小学校 RC3 9.28竣工,S3.4.23市立旭小学校として着工 施工:鼓越組[3]	第一高等小学校(増築) 花園小学校(増築) 手宮西小学校(増築) 長橋小学校(増築) 色内小学校(増築) 手宮小学校(増改築)	青雲小学校校舎他(増築) 工費:14,150円，7.20着工,11. 6竣工 中央小学校(改築) 工費:50,354.590円，7.29着工，12.18竣工 近文火葬場 工費:5,013.950円，7. 2着工，9.30竣工
1930 S 5	庁立滝川中学校 木2 庁立深川中学校 木2 庁立帯広商業学校 木2 遠軽警察署 木1一部2 北見紋別警察署 木1一部2 網走警察署 木2 北聴事務所 庁立函館工業学校 RC3 8.26竣工，S3.10.12着工，施工:瀬崎組[1]	屠場(改築)工事 494坪,工費:85,660円 4.-起工，9.- 竣工，9.29 落成式 療養所住宅他 140坪,工費:13,077円 第七部消防火ノ見櫓他 延47.37坪,工費:5,540円	萬年橋小学校増築工事 9.9落成[1] 柏野小学校増築工事 9.9落成[1] 1F 270㎡ 2F 540㎡	第二高等小学校 木2，1，7.5着工，10.20竣工 工費:72,185円[4] 入船(尋常)小学校 木2，7.12着工，10.20竣工 工費:44,279円 担当:野村秀平技手[4] 北手宮小学校 木2，1，7.5着工，10.20竣工 工費:55,652円[4] 潮見畚小学校(増改築) 奥沢小学校(増築) 若竹小学校(増築)	旭川市公益質屋 工費:7,000円，S4.10.20着工
1931 S 6	札幌土木事務所 木2 協会病院武徳殿 RC2地下1 庁立江別高等女学校 木2 北海道拓殖博覧会施設 有栖川宮記念碑(東尻島) 川西(現十勝)支庁庁舎 RC2 北見拓殖実習所(置戸) 木2 十勝拓殖実習所(大樹) 木2 弟子屈拓殖実習所 木2	第二高等小学校 延1,686.423坪,工費:124,532.020円，S5.10.2起工，7.20竣工 山鼻小学校校舎(増改築) 延1,031坪，工費:42,500円 西創成小学校御大典記念文庫 延65坪，近世式RC2，工費:12,000円,請負:伊藤組，6.7竣工，S5.10.1起工		小樽病院(増築) 第二高等小学校(増築) 木2 8.1着工 11.15竣工 工費:24,249.47円[4] 色内小学校(増築) 潮見畚小学校(増改築) 量徳女子小学校(増改築) 入船小学校(増築) 7.31起工,11.10竣工 工費:25,400円 担当:野村秀平技手[4]	
1932 S 7	岩見沢警察署 RC2 十勝岳ヒュッテ 木3 工業試験場実験室 木2 札幌神社別館(斉館) 木2 消防会館 木2	豊水小学校校舎(増改築) 685.33坪，工費:37,000円 東北小学校校舎(増築) 延29.662坪，工費:10,220円 消防本部(増築) 延20坪,工費:2,900円 山鼻小学校御真影奉置所(改築) 1.173坪 札幌病院小児病棟他(増築) 延404.536坪 工費:44,000円	中島小学校新築工事 12.30竣工[1] 1,2階延面積6,152.227㎡ 松風小学校体操場其他増築工事 10.11完成[1] 延190坪余 函館市青年会館新築工事[1] 施工:瀬崎初三郎 9月着工 延面積1,007.54㎡ 函館土木事務所長官舎新築工事 木造2階建，延58.833坪 消防第五部望楼その他新築工事 S造三脚型火見櫓	長橋小学校(増築) 北手宮小学校(増築) 木2 6.28着工 9.25竣工[4] 第一高等小学校(増築)	旭川師範学校附属小学校 工費:59,286.573円，4.1.着工，11.13竣工,請負:鶴間禮蔵 近文野球場スタンド 工費:3,800円，6.15着工，7.20竣工 新北門小学校校舎(増築他) 木造鉄網コンクリート2 工費:6,000円，7.7着工,10.23竣工 啓明小学校(増築) RC2,木造2 工費:39,169.182円,S6.8.3着工，7. 1竣工 中央小学校(改築) 近世式RC2，木造2 9.19竣工，S6.7.20着工,工費:142,119.447円 RC造延877.25坪，木造延326.75坪
1933 S 8	庁立池田高等女学校 木2 十勝拓殖実習所(女子部) 木1 札幌隧保館 木2・1 旭川赤十字病院 木2 真駒内種畜場新築工事・犢牛舎・幼牛舎 木2	豊平小学校校舎(増築) 延1,515.458坪，工費:72,835円 市立診療所(増築) 21.745坪,工費:1,900円		小樽市庁舎 RC3，10.15落成式，S7.4.8地鎮祭，9.4定礎式 担当:中村義英技手[4] 稲穂女子小学校(増改築) 量徳小学校(増改築) 消防第二派出所(増改築) 長橋病院(増改築) 稲穂火葬場(増改築)	
1934 S 9	札幌警察署庁舎 請負:木田組 札幌中央警察署 RC3半地下1 北海道旭川療養所 木2 遠軽営林署庁舎他 木2一部1	幌北小学校 1,145.722坪，工費:74,000円 S8.8.24着工，5.15竣工 市立回山病院(復旧仮設工事) 293.250坪，工費:13,000円 札幌療養所研究室他(増築) 24,900坪,3,000円		天神小学校 木2 1.8竣工，S8.8.11着工，担当:青山寅治技手 工費:54,950.68円[4] 高島鹿苑焼却場(増築) 量徳小学校(増改築) 第一高等小学校(増築) 手宮小学校(増築) 小樽病院(増改築)	

建築年	北海道庁	札幌	函館	小樽	旭川
1934 S 9		市立札幌病院附属精神病舎 1,193.1847坪，工費:125,027.37円 東北小学校(増改築) 1,495.040坪，工費:111,800円 桑園小学校(増改築) 552.002坪，工費:48,300円 工務課操車場 RC造，11.24竣工		稲穂女子小学校(増改築) 消防第三派出所(改築)	
1935 S10	グランドホテル(商工会議所共) RC5一部6，地下1 請負:木田組 庁立室蘭高等女学校講堂 木1 池田警察署 木2 名寄森林事務所 木1 名寄中学校校舎増築 木1 請負:浜崎組 春香山ヒュッテ 木3	札幌市塵芥焼却場 延1,451.80坪，工費:92,502.74円 清華亭修繕工事 工費:2,094.61円	青柳尋常高等小学校 RC3 12.25竣工 施工:森川組[1]	量徳小学校(増改築) 稲穂女子小学校(増改築) 花園小学校(増改築) 高島鹿苑焼却場(増改築)	青物卸売市場
1936 S11	小樽警察署 RC3地下1 請負:野上 江別警察署(復旧工事) 木2 釧路拓殖実習所 木1 行在所他工営施設(天皇巡幸陸軍特別大演習) 北海道庁第3仮庁舎 木2 北鎮会館 RC2地下1 林務部課長官舎3棟 木1 滝川種羊場羊舎・畜舎・官舎他 12棟 木2及び木1 請負:鈴木与兵衛 函館移民世話所移築工事 木2	幌南小学校 工費:83,800円,S10. 8.15起工，5.- 竣工 東小学校校舎(増築) 工費:8,950円，S10.10.25起工，5.- 竣工 大通小学校校舎(増築) 工費:19,000円 S10.10.27起工，6.-竣工 東橋小学校校舎(増築) 工費:33,000円 S10.10.27起工，6.- 竣工	東川尋常高等小学校 RC3 9.9竣工 施工:瀬崎組[1]	市立精神病院 花園小学校(増改築) 色内小学校(増改築)	
1937 S12	函館警察署 RC3 厚岸林務署森林事務所 木2 庁立十勝農業学校 RC3 農業試験場島松支場庁舎他 木1一部2 土木試験室 木1 水産試験場進場実験室油庫 木1及びRC1 請負:鈴木与兵衛 旧土人住宅設計及工事指導 木1 道内各地 小樽警察署 RC3地下1 担当:田子秀次郎 林業試験場木材製造工場 木1及び煉瓦造 庁立空知農業学校 RC3 12.26落成式 施工:大星組[2]	第二高等小学校(増築) 延196坪，工費:20,400円 稲穂小学校(移転改築) 延1,570.855坪，工費:135,000円，S11.10.1着工，7.15竣工 幌北小学校(増築) 延768.02坪,工費:64,300円，S11.10.24着工，7.21竣工 札幌市庁舎 延2,358.216坪,工費:547,480円,請負:木田組，S10.7.2着工，S12.3.31竣工	大森尋常高等小学校 RC3 6.29竣工 施工:渋谷源吉[1]	色内小学校(増改築)	
1938 S13	木古内警察署(復旧工事) 木2 野付牛赤十字病院 木2 請負:鈴木与兵衛 庁立八雲中学校 木2 庁立札幌師範学校寄宿舎 木2 3棟 請負:大森組 函館師範学校屋体改築他 木1 請負:谷沢 森林治水気象試験場 木1一部2 S12.着工 開拓神社 木1 請負:鈴木与兵衛 林業試験場人繭人繊無水アルコール実験室 木1 土木試験室恒温実験室 RC木1	札幌消防組第一部詰所(改築) 60.698 坪，13,600円，6.8竣工，S12. 9.18起工 札幌市立療養所(増築) 385.967坪，工費:48,800円，7.25竣工，S12.10.12着工 市立高等女学校(復旧工事) 1,811.049坪，工費:206,185円，8.8竣工，S12.9.1起工 桑園小学校(増築) 252.500坪，工費:31,760円 北九條小学校(増改築) 582.749坪,工費:56,829.60円,内既存建物移転修築其他模様替201.5坪 札幌市立診療所(模様替増築) 80.420坪,工費:2,113.20円	弥生尋常高等小学校 RC3 12.25竣工 施工:森川組[1]	長橋小学校(増築) 緑小学校(増築)	
1939 S14	庁立名寄中学校(復旧工事) 木2 滝川種羊場羊舎他増築工事 木1 北海道小樽保健所 木2 請負:大森組	札幌市機械工訓育所 工費:29,113.44円 6.12竣工，S13.10.20起工，請負:松下秀楠 市立札幌診療所(復旧) 6.27竣工，4.28起工，工費:2,500円		天神小学校(増築) 木2 7.15着工 3.31竣工 工費:21,500円 請負:野上善太[4]	

建築年	北海道庁	札幌	函館	小樽	旭川
1939 S14	北海道旭川保健所 木2一部1 桧山職業安定署 木2 傷夷軍人七飯療養所 木2・1 請負:島藤 登別療養所 木2 豚舞傷夷軍人療養所 木2 帯広保健所 木1	市立高等女学校温室(移転改築) 9.5竣工, 7.10起工 大通西四丁目公共便所(改築) RC 5.19竣工, S13.11.28契約,請負:下山種次郎工費:500円			
1940 S15	道議会庁舎 木2 請負:鈴木与兵衛 庁立釧路工業学校 木2一部1屋 北海道室蘭保健所 請負:杉山組 庁立小樽工業学校(現千秋高校) 木2一部 1 請負:荒巻組 伊達赤十字病院及び教員療養所 木2 豚舞傷夷軍人療養所継続工事 名寄農業学校屋体他 木1				

注:1.大條雅昭『函館市営繕組織の史的研究』(北大昭和57年度卒論) 2.吉田実『北海道における学校建築に関する史的研究 ―北海道庁設置以降の初等・中等学校建築をめぐって―』(北大昭和55年度修論) 3:東出雅仁『北海道における初期鉄筋コンクリート造学校建築に関する史的研究』(北大昭和55年度卒論) 4.小坂映王『昭和初期における小樽市の営繕事業について』(北大平成元年度卒論)による。

1-5-1:札幌グランドホテルと北海道庁土木部

北海道における本格的ホテルである札幌グランドホテルが、現在地北1条西4丁目に開業するのは、1934(昭和9)年12月11日である。



図1-5-1 札幌グランドホテル
(札幌グランドホテル蔵)

落成式と開業披露は、ホテルと同居の北海道商工奨励館および隣接の札幌商工会議所の落成式とあわせて、商工会議所2階大講堂で行われた。

建物の設計スタッフは、北海道庁の土木部総務課技師福岡五一をチーフに、設計担当会田久三郎、構造担当橋本理助、図面担当高岡仁三郎、本間永作技手たちである。民間企業の施設を北海道庁技師たちが設計というのも妙な話であるが、実はこのホテル、当初は北海道庁の官営ホテルとして計画されたもので、それが最終的に民間企業の形で開業したのであった。

官営ホテルといっても自治体の直営ではなく、土地と建物を提供して民間企業が運営にあたる方法がとられた。札幌グランドホテルが開業する前後の1933年から1940年にかけて建設された官営ホテルは、全国で16にも及ぶという[101]。 うち14ホテルが大蔵省預金部の低利資金による一種の国策観光ホテルであった[101]。

101:阿部要介『札幌グランドホテルの50年』(1985.4.25) p.13

1929年に可決された「外人来居遊に関する建議」は、輸入超過となっている国際収支を観光収入で改善しようとしたもので、外人客誘致のため国家事業としての機関として、翌1930年4月鉄道省に国際観光局が創設され、海外宣伝用映画の作成や内務省との協力による国立公園指定などをてがけたが、最も力をいれたのが、ホテルの新設、改造の推進と資金の斡旋、ホテル関係法規の整備であった。観光というおなじみの単語も、時の鉄道大臣江木翼が易経の「観㆓国之光㆒利㆑用㆑賓㆓千王㆒」からとったもので、このときにはじめて官庁用語として使われたともいう。いわば政府推進の観光ホテル開発の時代であった[102]。

102:『札幌グランドホテルの50年』p.14

旅館しかなかった札幌に外国人や中央の賓客を迎えるための相当な洋式ホテルがほしいというのは、「札幌を往来する人々の年来の要望」[103]でもあった。当時の旅館には茶代という不明朗な料金制度があり、宿代のほかにチップと違って直接旅館経営者の懐に入る代金、いわば北海道価格のようなものがあり、宿泊客には不評で、明朗な料金システムのホテルが望まれたこともあった。また1928年の秩父宮来札の際の冬季オリンピックなど国際的行事の開催に備えてのホテル施設が必要との意向も大いに影響したに違いない。

103:『創立趣意書』(1933.5)

104:北海タイムス(1932.3.9)

札幌に観光ホテル建設の計画が具体化したのは、1932年ころからという。大蔵省より低利資金を受けて、北海道物産館を改築、ホテルと物産陳列所を開くため、当時の北海道庁商工課長が3月上京し、大蔵省や鉄道観光局を訪問したことが新聞に報じられている[104]。 また、北海道庁の観光ホテル計画が報じられる1ヵ月半前の1月の記事には、商工会議所の「近代的大ビル」[105]建設計画も報じられたが、結局両者の抱き合わ

105:北海タイムス(1932.1.22)

せ案に決定した。

しかし、大蔵省資金の内諾は得たものの、客室数や集会、宴会設備等が政府資金援助の規格にあわず、またホテル建設の主体も、道庁から札幌商工会議所に転貸する形式は認められなかった。結局北海道銀行の資金融資で建築することが決定したのは、1933年７月のことである。早速その年の８月21日に地鎮祭が行われた。施工業者は、その５日前の指名入札の結果、大林組 493,700円、伊藤組 513,700円、田中組 528,000円、今井組 537,500円、大星組 535,000円、大倉組 544,285円などを抑えて、木田組の448,300円に落札した[106]。途中建物規模の縮小や設計変更を受け中断したが、やっと９月21日に着工している。

106:北海タイムス(1932.8.17)
107:北海タイムス(1934.11.25)

同年12月19日、株式会社札幌グランドホテルの創立総会が豊平館で開催された。ホテル経営を担当する会社の設立計画は、道庁と札幌商工会議所が中心になって進められ、「株式会社サッポログランドホテル創立趣意書・予算・工事概要」が、同年5月各界に配られた。6,000株のうち450株は発起人、残り 5,550株が公募され194人の株主が決定した。

筆頭は、三井合名会社三井高弘の 700株、次いで三井系の王子証券㈱藤原銀次 500株、ほか小倉正恒(住友合資会社)、原邦造(明治製糖)、森廣蔵、浅野総一郎、大倉貴七郎、穴水熊雄といった中央財界人、遠藤石太郎、小熊幸一郎ら道内経済人や名士のほか、佐藤昌介、高岡熊雄、時任一彦、越智貞見、中村豊、大野精七といった北海道帝国大学の教授連も名を連ねている。

代表取締役社長に発起人代表美濃部俊吉(元北海道拓殖銀行頭取)(50株)、取締役に五百本竹四郎(丸之内会館社長)(同)、岡本康太郎(函館商工会議所会頭)(同)、藤田昌(大日本麦酒札幌工場長)(同)、木田保造(木田組社長)(同)、平塚直治(帝国製麻札幌工場長)(同)、岩田彦二郎(札幌商工会議所理事)(30株)、村田不二三(札幌市議会議長)、小竹文次郎(北門貯蓄銀行専務)の2人が監査役、相談役に札幌商工会議所会頭大瀧甚太郎が就任した。常勤の岩田彦二郎は当初からホテル計画の中心的人物として活躍したが、ホテル営業は五百本竹四郎に一任された。

五百本は1887(明治20)年四国宇和島生まれ。17歳の頃から横浜クラブホテルのコックを経て築地精養軒に移り、1915(大正４)年28歳の時に東京ステーションホテルの精養軒の支配人に抜擢され、その後精養軒の社長になった人である。精養軒は関東大震災で廃業するが、その後上野精養軒、丸ビル精養軒、仙台精養軒の他、丸之内会館、長良川ホテルを経営するホテルマンであった。地元採用の役員にホテル経営の経験者が一人もいないため、得意先の美濃部社長から特に参画の要請をうけたのであろう。

設計変更の多かった工事も1934年６月22日には、５階ホテル屋上で上棟式を挙げるまで進み、同年11月10日に竣工した。

この間に道庁チームは、ホテルと道路一本隔てた北１条西５丁目にＲＣ造３階、地下１階の札幌警察署新庁舎も手掛けた。設計および工事監督は技手田子秀二郎が担当した。1933年11月12日着工、翌1934年７月９日上棟、同年11月17日に竣工している。こちらも請負は木田組であった。

望楼風の塔屋を載せたグランドホテルと角地の正面をゆるやかな局面とした面札幌警察署の出現は、中心市街の「時代の動きと共にグングン伸び行く活発な姿」[107]としてとらえられ、ホテル南側に建設予定の札幌市役所を含め、「二、三年後にはサッポロのビル街！として華やかな一頁を本道発展史に刻み込む」[107]と報じられたが、さらに筋向かいの北２条西３丁目では竹中工務店設計の帝国生命札幌支店(1935年)、北３条西３丁目ではヴォーリズ設計の大同生命札幌支社(1933年)が建築中で、ＲＣ造ビル街の誕生は、「躍進サッポロ」[106]の印象を強烈に市民に与えたに違いない。

107:北海タイムス(1934.11.25)



図1-5-2　札幌警察署
(『札幌市写真帖』)

「サッポロの未来を約束づけるが如」き「遊覧船のような華美な巨体を横たへ」[107]た建物は、当初案から何度も設計変更を受け、当初 3,030坪であったのが、最終的に2,799坪127となった。鉄骨量 680トン、コンクリート1,000立坪(約6,000㎥)、延人員48,000人の工事であった[108]。

108:『札幌グランドホテルの50年』P.33
109:『札幌グランドホテルの50年』pp.172～179

鉄筋コンクリート造の外壁は、黄褐色の「二丁掛テラコッタータイル」[109]で覆い、１階部分を花崗岩張り、張出窓の枠廻りや、玄関軒先、３階蛇腹の装飾は、テラコッタ製であった。宿泊部分と宴会食堂部分は、外観意匠にも意識的に表わされ、４、５階部分の平坦なタイル仕上げ面と、連窓の下階とは、装飾的な水平蛇腹ではっきりと画されながら、東側階段室の張出しが、テラコッタ製の方立で垂直性を強調しつつ、上下階のつながりを表現している。

開業時の平面図[109]によると、１階は、北側に突出させたホテル玄関や、事務室、ホール、グリル、理容室などホテル部門と、ショーウィンドーにはさまれて引っ込んだ東側玄関に直接通じる物産陳列所と会議室が独立した構成をとり、２階は、一部吹き抜けの大食堂と東正面のテラスや配膳室、休憩室、食堂、クラブルーム、小会議室、３階は、和室宴会場、食堂(洋室宴会場)、パーラーなど、食堂、宴会部門がとられた。宿泊部門は、４階に和室11、洋室12、５階に貴賓室１、洋室26が設けられた。

地下１階は、調理場やボイラー室、洗濯室、大工部屋などサービス部門の他、ビリヤード室、スキー乾燥室や、洒落た都会風の雰囲気が客の優越感をくすぐったといわれる喫茶室などがあった。

同時に竣工の商工会議所については平面などは省略されているが、規模については『グランドホテルの50年』に記載があるので、内訳を次に示す(単位：坪)。

	ホテル	会議室	小　計
地階	434.180	155.022	589.202
1階	435.805	147.249	583.054
2階	341.496	72.916	414.412
3階	283.013	68.749	351.762
4階	259.013	68.749	327.762
5階	259.013	68.749	327.762
塔屋	90.840	14.333	105.173
合計	2,103.360	659.768	2,799.127

1936年11月、５階屋上に和室を増築、「６階空の茶屋 Sora no Chaya」[110]を開業。「味覚のデパート　札幌グランドホテル」[111]と謳った庶民的な料理の食べられる食堂であった。

1945年９月26日連合軍将校官舎として接収され、1952年８月31日に解除された。北海道では、ほかに小樽北海ホテル、越中屋ホテル、登別グランドホテル、旭川北海ホテルなども接収されたが、小樽北海ホテルは1946年６月、越中屋ホテルは1955年と解除の時期はまちまちであったという。

接収で荒廃した建物は、解除後、改修工事が進められ、1952年11月８日から営業開始したが、営業再開時には、１階の物産陳列所、会議室は、喫茶室と大食堂に変更され、地下のビリヤード室と喫茶室は、お好み食堂、ビヤホールに、３階の和室宴会場は客室に、ロビーも広々としたものに改造された。

1964年に隣接の札幌商工会議所移転に伴い、新館(現本館)の新築工事が着工、1966年６月29日落成し、さらに17階建ての新館(現東館)が着工されるに伴い、創業時の旧館は、1973年２月に解体された。

110:『札幌グランドホテルの50年』p.76
111:「空の茶屋」開業広告（北海タイムス、1936.4.1）

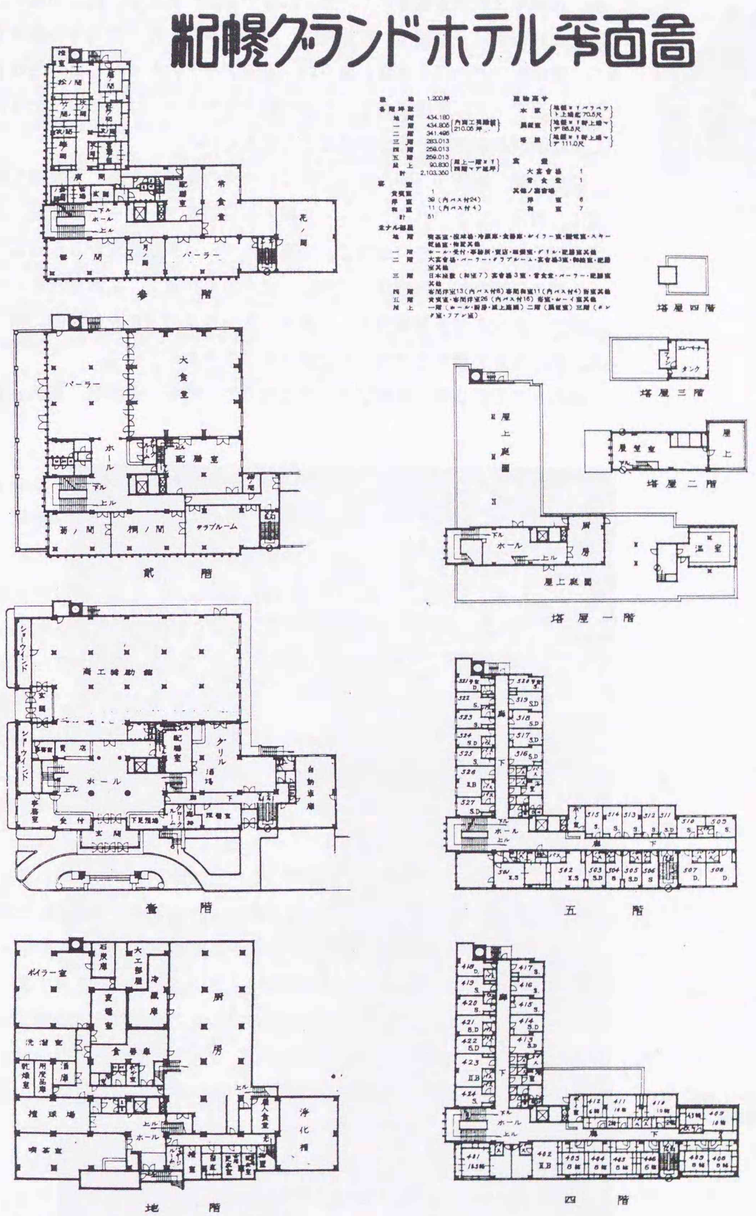


図1-5-3　札幌グランドホテル平面図



図1-5-4　小樽組合基督教会

1-5-2:小樽組合基督教会(1926年)と成田幸一郎

小樽市花園公園に通ずる公園通りに面して建つこの教会は、1926年８月定礎式、同年11月献堂式を挙げた。1902年７月20日献堂の初代会堂から、1908年２代目会堂をへて、第３代目の会堂にあたる。創立70周年にあたる1972年に土台替え、軸組補強、屋根葺替え、礼拝堂天井の張替えや二重窓化などの部分改修が施され、尖頭アーチのがっしりとした玄関部も３連アーチに変更されて、当初の姿をやや失ってはいるが、全体としては設計者成田幸一郎の作風をよく伝えている。

間口５間、奥行10.5間の矩形平面に11尺角の塔屋を付属した単純な形態に、角塔部屋根のバルトメントや軒下の尖頭盲アーケード状装飾、主屋正面の尖頭アーチの大窓など、簡略したゴシック風意匠がみられる。

１階は日曜学校、牧師館、２階は一廊式の礼拝堂で、礼拝堂正面には尖頭アーチをみせる講壇部とし、露出したトラスの方杖を装飾的に扱って、船底天井の単純な空間を引き締める効果をあげている。

成田への設計依頼の経緯は明らかでないが、教会の受洗者、転入会者

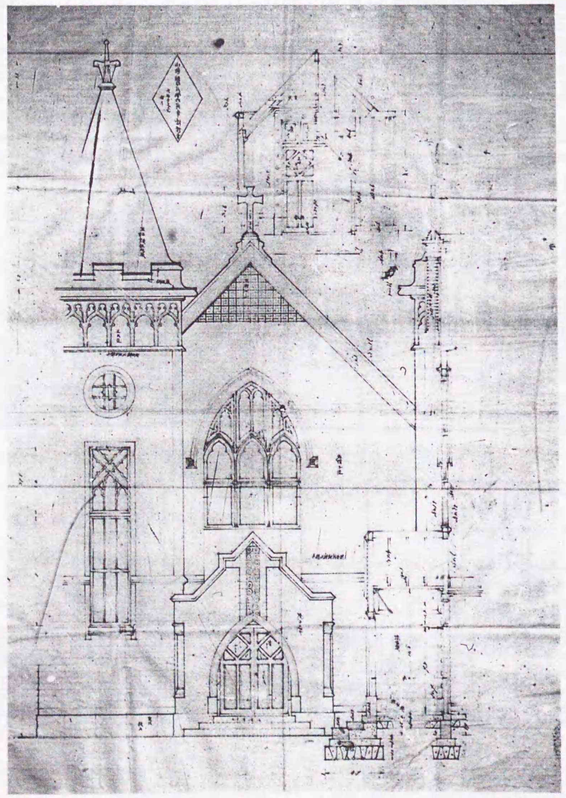


図1-5-5　小樽組合基督教会設計図(玄関部詳細)(日本基督教団小樽公園通教会蔵)

名簿に名前が見られないことから、信者としての関わりでないことは推察される。この時期には、ほかに寿原商事ビル(1925年)などの設計依頼がみられ、営繕技術者が民間建築と関わらざるを得なかった状況の一端を示しているものと考えられる。

成田は、1888(明治21)年２月７日小樽区石山町で生まれた。1912年東京高等工業学校建築科を卒業と同時に逓信省経理局の営繕課員となり、1914年同省逓信局技手、大臣官房経理課営繕係員を経て、1920年依頼免官、免官後ただちに㈱鹿児島銀行建築工事監督を嘱託されている。翌1921年４月、32歳で小樽区に技手として奉職するが、ただちに土木課営繕係主任という営繕担当部門では最高のポストを与えられている。翌1922年技師に昇格、1928年には営繕係長となるが、小樽組合基督教会や寿原商事ビルは、この間の仕事である。以後、1939年に50歳の退職までに、小樽市小学校五箇年継続設備計画、市庁舎改築を始めとする多くの事業をこなし、小樽市営繕の歴史に一時代を築きあげた人物ということができる。

1-5-3:日本メソジスト函館教会ハリス監督記念会堂(1930年)と萩原惇正

函館市元町の日本基督教団函館教会(旧メソジスト函館教会)は、1931年２月22日献堂式をあげた。鉄筋コンクリート造一部２階建てで、着工は前年1930年８月10日、同年９月定礎式をあげている。

重厚な安定感のある外観で、塔部にはピナクル付きバットレスや、尖頭アーチを連続したロンバルド帯をみせ、中央入口や窓は尖頭アーチで縁取り、さらに外壁の多葉飾りや玄関上部のフィニアル風装飾など、全体にゴシックを意識したデザインとしている。

内部は、説教壇廻りをヴォールト天井やステンドグラスの円窓などで飾るものの、比較的簡素にまとめており、やはりゴシック風意匠を展開している。両側面には、１ベイに２つ背の高い尖頭アーチの窓が並び、明るい空間をつくりだしている。腰壁の木製パネルも、尖頭アーチを連続させた意匠としている。説教壇前のコミューンレール(聖さん欄)が、メソジスト派の教会であったことを伝えている。

総工費37,811円74銭５厘、伊藤組の施工で完成したこの建物の設計は、北海道帝国大学総長佐藤昌介の紹介によるものであった。佐藤は札幌農学校一期生の15名の一人で、函館美以教会宣教師M．C．ハリスから洗礼を受けた[112] 札幌教会創立以来の信徒であり、函館教会の創始者と強く結ばれていた人物である。

1907年８月大火後に再建の第４代会堂は、1909(明治42)年12月献堂式をあげたが、設計は文部省建築課札幌出張所技師新山平四郎が関わっている。新山は1896年文部省へ入省、1903年同省札幌出張所に赴任、中條精一郎技師のもとで札幌農学校移転新築工事にたずさわった。1907年札

112:『川畔の尖塔―札幌教会75年史―』(日本基督教団札幌教会 1964.9.13)



図1-5-6　日本メソジスト函館教会立面図(1982年実測)

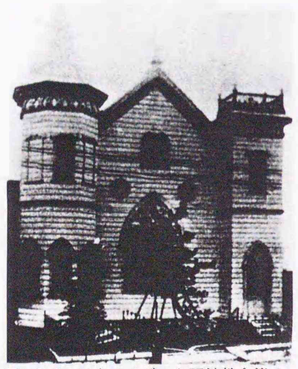


図1-5-7　日本メソジスト函館教会第４代会堂(1909)
(『日本メソジスト函館教会五十年記念史』)



図1-5-8　北海道大学理学部本館

113:履歴については北海道大学庶務部人事課所蔵履歴書による。

幌出張所所長となり、東北帝国農科大学新築工事を1909年まで担当し、在任中に小樽高等商業学校本館(1912年竣工)をてがけたことで知られる。

新山設計の第４代会堂は1921年大火で焼失し、仮会堂を経て、萩原設計のＲＣ造第６代会堂となるわけで、佐藤昌介の紹介とはいえ、営繕建築家が２代にわたって関与した点で、興味深い教会建築である。

萩原惇正[113]は、1892(明治25)年静岡県小笠原郡横須賀生まれ。1911年関西商工学校建築学科卒業後、河合(浩蔵？)建築事務所入所。翌1912年依願解雇後、宇治川電気㈱臨時雇い、日本製油㈱建築工事(1917年)、大阪税関ほか新営工事(1917～1920年)、神戸高等商船学校(1920年)、第二十四高等学校(1923年)などを嘱託されている。

1923年８月北海道庁土木部建築課に勤務し、古典的な要素とセセッション風の意匠を加味した北海道庁立図書館などを担当した。その後1927年から1934年まで、北海道帝国大学技師、営繕課長(1927年9月26日拝命)として在任し、理学部本館(1929年)、農学部本館(1935年)などを担当した。理学部では、ロマネスクスタイルを基調に、玄関車寄せの尖頭アーチや内部のアインシュタインドームと愛称されるリブヴォールトなどにみられるように、ゴシックを加味するなど、中世リバイバル様式を得意とした。農学部では、サラセン風やバロック風の装飾細部を加える一方で、端正な幾何学的構成を展開するなど、多彩な面をみせていた。

1-5-4:石井喜助と地方営繕事業

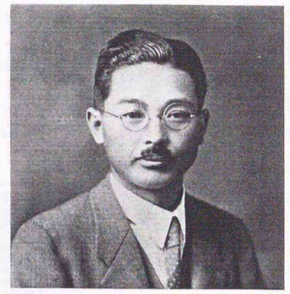


図1-5-9　石井喜助(石井家蔵)

建築家石井喜助(1893～1977)は、1920年岩見沢に設計事務所を開設、1929年には音江村(現深川市)に事務所を移し活動を続けた。北海道における個人事務所開設の建築家は、本論文で扱う田上義也とマックス・ヒンデル(共に1924年から札幌で設計活動開始)らが知られているが、石井はこの２人よりも数年早く、加えて都市部ではなく地方に事務所を開き、活動範囲も空知地方を中心とした農村部であった。

石井喜助は、1893(明治26)年６月25日秋田県太平村(現秋田市太平)に生まれた。父は嗟峨姓であったが、喜助だけは戸籍上、母方の籍となり石井と名のった。1909年秋田県立工業学校建築科（現秋田県立工業高等学校)に入学、３ヵ年の建築教育を受けた。卒業後すぐに北海道に渡り、1912年４月石狩石炭株式会社に工手として入社、新夕張工業所勤務。1916年４月からは北海道炭鉱汽船株式会社の仕事も手がけ、1918年11月より大倉鉱業株式会社へ技術員・工作主任として入社、茂尻炭鉱（赤平村平岸)に勤務した。

1920年１月大倉鉱業株式会社を辞し、同年２月岩見沢町で設計事務所を開設した。

1929年８月、音江村(現深川市音江)の４小学校の改築設計に伴い音江村に住所を移し、自宅の１室を事務所とし、「石井(建築)工務所」とした。以後、満州に渡る一時期を除き、ここで設計業務をおこなった。

音江村時代の設計は、石井が書き残した「最近ニ於ケル主要設計」[114]より、1933年度から1940年度まで詳しく知ることができる。また、その前後については、石井宅に残されていた図面や仕様書類等が参考となる。これらの資料をまとめたのが表1-5-2である。

戦前期の石井の設計活動は、石井の住んでいた音江村を含む現深川市域を中心とした北空知地方での仕事が多いものの、空知地方全域に広がり、さらに上川、宗谷地方にまで及んでいる。その設計内容は、地方町村営繕と産業組合営繕の関係がほとんどを占めている。

営繕事業の進め方としては、納内尋常高等小学校工事のように、1928年9月から翌1929年8月まで、納内村(現深川市納内町)から主任監督として嘱託されたり、音江村内小学校改築設計及び工事監督のように1929年8月から翌1930年12月、1933年1月から翌1934年1月、1935年4月から翌1936年9月 の３回に渡って音江村に勤務などの形態をとった。ただし、納内村と音江村の最初の２回の勤務は、職員としての雇用であるが、音江村の３度目の勤務[115] と、それ以外の市町村では、職員としての雇用記録はみあたらない。事務所として外注を受けたのかもしれない。また職員の場合でも、設計監理業務の期間だけ勤務し、仕事が終われば辞める形態を取り、延べ12市町村もの営繕に関わった。

1943年４月に満州に渡り、建築土木請負会社「玉置工業公司」の工事

114:1933年から1940年までの間に、石井が行った設計を年度別に列記したがり版刷りのもので、石井宅に数枚残されていた。

115:最初の２回の音江村勤務は、『音江村事務報告』(道立文書館蔵)の1929年度、1930年度、1933年度、1934年度版の「有給吏員調」に技手として石井の名が見られる。しかし、1935年度、1936年度版には、石井が勤務した記述はない。

主任を経て、翌年６月から建築土木請負会社「日露工務所株式会社」の取締役及び工事部長として終戦を迎えた。1946年10月満州から引き揚げ、再び音江村の自宅で設計活動を続けた。戦後の設計も町村営繕と農協関係が多いが、活動はほとんど現深川市内に限られた。1965年代まで精力的に設計活動を続け、1977年３月28日、享年83歳で他界している。

表2-5-2 石井喜助設計一覧

年次	建築名	階	資料	現存
1933	音江村音江尋常高等小学校 ☆	2	書図	○
	音江村音江西尋常高等小学校 ☆	平	書図	○
	音江村内大部中央尋常高等小学校 ☆	平	図	
	音江村内大部尋常小学校 ☆	平	図	○
	豊寒別尋小（現浜頓別町） 増築	平	図	○
	下頓別尋高小（現浜頓別町） 増築	平		
	秋田県太平村太平尋常高等小学校	2		
	音江村産業組合煉瓦造倉庫			
	納内村産業組合倉庫			
	北龍村板谷農場産業組合倉庫			
	浜頓別産業組合倉庫			
1934	多度志村幌成尋常小学校 増築	平		
	多度志村宇摩尋常小学校 増築	平		
	幌向村南幌尋常高等小学校及び奉安殿	平		
	幌向村東幌尋常高等小学校及び奉安殿	平		
	幌向村晩翠尋常小学校及び奉安殿	平		
	音江村産業組合煉瓦造倉庫			
	滝川町信用組合煉瓦造倉庫			
	上北龍産業組合ＲＣ造倉庫			
	江部乙村産業組合石造倉庫			
	幌加内村産業組合煉瓦造倉庫			
	新十津川村信用組合上徳富煉瓦造倉庫			
	新十津川村信用組合ＲＣ造倉庫 ３棟			
	幌向村産業組合煉瓦造倉庫			
	上川郡辺別村旭農場産組煉瓦造倉庫			
	上川郡上多寄産組煉瓦造倉庫 ２棟			
1935	沼田村共成尋常高等小学校奉安殿			
	多度志村役場庁舎	平	書図	○
	音江村産業組合肥料配合所・煉瓦造倉庫			
	秩父別村商業組合煉瓦造倉庫			
	新十津川村信用組合下徳富事務所	平		
	新十津川村信用組合倉庫			
	幌向村教員住宅２棟			
1936	多度志村産業組合集乳所・肥料配合所	平		
	秩父別村産業組合煉瓦造倉庫 ２棟			
	幌加内村産業組合煉瓦造倉庫			
1937	沼田村沼田尋常高等小学校 増築	平		
	沼田村共成尋常高等小学校 増築	平		
	沼田村奥御料尋常高等小学校 増築	平		
	多度志村石橋尋常高等小学校 増築	平		
	多度志村湯内尋常高等小学校 増築	平		
	多度志村宇摩尋常小学校 増築	平	書	
	多度志村鷹泊尋常小学校 増築	平	書	
	音江村教員住宅５棟			
	音江村産業組合集乳所			
	一已村産業組合ＲＣ造書庫			
	一已村産業組合煉瓦造倉庫		書	
	沼田村産業組合煉瓦造倉庫・作業場・澱粉工場・乾燥場・孵化育雛場			
	幌向村産業組合事務所購買部	2		○
	浅野雨龍砿業㈱浅野炭砿(現沼田町) 事務所・役員合宿所・坑夫合宿所・社宅５種類・浴場ほか			
1938	深川町北空知中学校	2	書図	
	北龍村碧水尋常高等小学校・教員住宅	平		○
	幌向村夕張太尋常高等小学校	平	図	
	音江村教員住宅			
	多度志青年会館	2	書	○
	多度志村産業組合倉庫			
	一已村産業組合煉瓦造倉庫			
	江部乙村産業組合石造倉庫			
	秩父別村産業組合煉瓦造倉庫			
	北龍村板谷農場産業組合煉瓦造倉庫			
	幌加内村産業組合倉庫			
	添牛内村産業組合煉瓦造倉庫			
	沼田村産業組合倉庫			
1939	北龍村役場庁舎			
	北龍村役場村長住宅・吏員住宅			
	音江村産業組合肥料配合所			
	音江村産業組合煉瓦造倉庫		書	
	深川町産業組合石造倉庫			
	多度志村産業組合事務所店舗	2		
	沼田村産業組合事務所	2		
	沼田村産業組合石造倉庫			
	添牛内村産業組合事務所 増築			
	幌加内村産業組合煉瓦造倉庫			
	北龍村板谷農場産業組合煉瓦造倉庫			
	幌向村産業組合煉瓦造倉庫			
	幌向村産業組合精米飼料配合製縄工場			
	長沼村商業組合煉瓦造倉庫			
	滝川町産業組合石造倉庫・木造倉庫・作業場			
1940	幌向村鶴城尋常小学校	平		
	旭川市職業紹介所 増築模様替	2	図	
	音江村産業組合加工場			
	多度志村産業組合幌成倉庫			
	北龍村板谷農場産業組合 和加工場・碧水加工場・肥料倉庫			
	秩父別村産業組合醤油工場・加工場			
	滝川町産業組合倉庫			
	幌加内村産業組合正和倉庫			
	上川郡剣淵村産業組合煉瓦造倉庫			
1941	豊富村役場庁舎	平	書図	
	某産業組合事務所及び店舗	2	図	
1942	庁立深川中学校（旧北空知中） 増築	2	書図	
	音江村吉住国民学校奉安殿		書	
	多度志村産業組合倉庫		書	
1943	音江村菊丘国民学校 ※	平	図	○
1948	多度志農協事務所	2	図	○
1949	音江村菊丘小中学校 増築 ※	平	図	○
1950	音江村音江中学校 ※	平	図	
	音江村向陽中学校 ※	平	感	○
	音江村吉住中学校 ※	平		○
	多度志村幌成中学校 ※	平		○
1951	音江村音江中学校体育館 ※	平	図感	
	音江村内園小学校 増築	平	図	○
	多度志村幌成小学校	平		○
	音江村公営住宅１号		書	
1952	音江村向陽中学校 増築 ※	平		
	多度志村多度志中学校体育館 ※	平	感	
	音江村菊丘小中学校体育館	平	図感	○
	多度志村湯内小学校	平	図	○
1953	音江村稲田公民館 ※		感	
	加納邸	2	図	
	音江村役場庁舎 増築	2	図	○
1954	多度志村鷹泊中学校体育館 ※	平	感	○
	多度志村宇摩小学校 ※	平	感	○
	多度志村幌成小中学校屋内運動場 ※	平	感	○
1955	音江村向陽中学校 増築 ※	平		○
1956	音江農協事務所（ＲＣ造）	2	図	○
1957	多度志村土地改良区事務所 ※		感	
	多度志村役場 増築	平	図	○
	多度志村農協倉庫		感	
1958	音江村吉住中学校体育館 ※	平		○
	音江村内園小学校体育館	平	図感	○
	音江村向陽中学校体育館	平	図	
1959	多度志村幌成小学校 増築	平	図	○
	北竜村農協碧水乾燥場（ＲＣ造）	2	図	
	北竜村農協ＲＣ造倉庫	平	図	
1960	音江村農協内園倉庫	平	図	
	音江村農協木造倉庫	平	図	
1961	加藤邸	平	図	
	宮崎邸	2	図	
	某住宅	2	図	
	音江村共同種付場	2	図	
	多度志村公民館	2	図	○
	多度志小学校屋内体操場	平	感	○
	菊丘小中学校体育館 ステージ増築	平	図	○
	江部乙農協農業倉庫		感	
1962	石井邸	2	図	
	本橋邸	2	図	
	一乗寺納骨堂（ブロック造）	平	図	
	多度志町幌成小中学校 特別教室増築	平	図	○
	多度志町教員住宅	平	図	
	多度志町診療所 増築模様替	平	図	
	音江村消防会館	2	図	
	多度志農協事務所店舗 増築	2	図	○
1963	太田邸	2	図	
	上田清一邸（ブロック造）	2	図	
	宮田善郎邸	2	図	
	音江農協更進支所 模様替	2	図	
	音江農協資材店舗	平	図	
	音江農協石炭油庫	平	図	○
	音江食糧検査所・住宅	2	図	
	音江中学校 特別教室増築	平	図	
	多度志町鷹泊小中学校 増築	平	図	
	多度志町立家政女学校 増築	平	図	
	多度志町弥栄消防番屋	2	図	
1964	深川神社社務所及職舎	平	図	○
	音江農協第二豚舎	平	図	
	多度志町鷹泊教員住宅	平	図	
	多度志町公民館幌成分館	2	図	
	音江村農協精米場及物品倉庫 補修	平	図	
1965	後藤邸	2	図	
	岡本邸	2	図	
	納内伊藤旅館	2	図	
	音江農協事務所 増築模様替	平	図	○
	多度志町公民館鷹泊分館	2	図	
	多度志町役場庁舎 増築模様替	平	図	○
	多度志町役場車庫	2	図	
1966	長谷部邸	2	図	
1967	津田旅館	2	図	
	暑寒荘	2	図	
	某住宅	2	図	
1968	深川農協斉藤邸		図	
	加納邸	2	図	
	雨竜農協曽田梅市邸	2	図	
	音江農協梶本邸	平	図	
	音江農協ガソリンスタンド住宅	平	図	
1969	斉藤邸	2	図	
	長谷川邸	2	図	
	山西功邸	2	図	
	音江農協ＬＰガス格納庫（ブロック造）	平	図	○
	不明（２戸１住宅）	平	図	
	北空知信用金庫役員住宅	2	図	
1971	音江農協育雛場	平	図	

注記
①年次は設計年で表わした。設計年不明のものは竣工年で表し、※印を付した。
②資料 「書」…仕様書、積算書他工事関係書類が残るもの
「図」…設計図が残るもの 「感」…感謝状が残るもの
③階(階数) 「平」…平家建 「２」…２階建
④現存 1992年時点で現存が確認できたもの
⑤☆ 1933年設計の音江村内４校は、1935年に再設計

1-6 外国人建築家と北海道

戦前期に北海道に居を構えて設計活動した建築家としては、滞在期間がわずか３年半とはいえ、マックス・ヒンデルが最初で最後の人といってよいであろう。ヒンデル来道前後にも、外国人建築家の作品はみられるが、いずれも道外在住の建築家である。

古くは、Ｊ.Ｊ.スワガー設計の厳律シトー会灯台の聖母トラピスト修道院本館(1908＝明治41年)をあげることができるし、W.M.ヴォーリズ設計の大同生命札幌支社(1933年)、遺愛女子高等学校集会室(1935年)や北星女学校女教師館の基本設計(1923年)、ガーディナー設計の札幌小田良治邸(1913年)などのほか、函館英国領事館(1913年)のように英国上海工事局といった在外営繕組織設計の建物が知られている。

本節ではヒンデル以外の外国人建築家の例として、外国人営繕組織の英国上海工事局と、建築家ではないがカトリック施設の設計を手掛けたフェルゲット神父の２例を取り上げたい。

上海工事局と旧函館英国領事館

函館市元町33－14に所在の函館開港資料館は、旧英国領事館の建物を転用したものである。1913年副領事館として新築落成し、創建時には副領事 E.L.S.Gordon、Shipping Officer(海事監督官) John Will、書記畑中昌太郎らが同居[116]していた。



図1-6-1 旧英国領事館(1960年撮影)

この建物の設計図書が Public Record Office(英国公文書館)[117]に所蔵されている。「Maps and Plans : Public Buildings Oversea」中、WORKS40 に分類されているもので、212～215の４葉である。同分類には、1872(明治５)年の配置図211も含まれている。

WORKS40/212(図2-6-2)は、「HAKODATE : Proposed Rebuilding of Vice-Consulate Plan of Boundary Wall」(1912)[118]（配置図および周壁の平面、立面図)のタイトルがつき、縮尺「16feet to an inch」(1/192)、WORKS40/213～215までは、同じタイトル「H.B.M.Vice-Consulate HAKODATE」がつき、縮尺はいずれも「8 feet to an inch」(1/96)、「May, 1912」の記入がある。

図213 (図1-6-3)は平面図、図214は断面図および使用人棟立面図、図215は主棟の立面図(図1-6-4)が描かれている。212～215までの図面には、いずれも設計機関である「H.B.M.Office of Works, SHANGHAI(上海工事局)」の記載がある。従来、英人技師キーツの名が挙げられており[119]、工事局の担当技師の可能性も高いが、これまでの調査では特定できず今後の研究にまちたい。

116:『ジャパン・ガゼット英文日本人名録』(市立函館図書館所蔵)
117:Ruskin Avenue Kew, Richmond Surrey TW9 4DU, London
118:図面には年号の記入はないが WORKS40のファイルに記入の年号による。
119:坂本勝比古『明治の異人館』(1965.9)に村田専三郎氏談として掲載。

フェルゲット神父

専門の建築家ではないが、カトリック系の宗教施設の設計者として、札幌カトリック教会司教館（旧会堂、1898=明治31年)のラフォン神父や灯台の聖母修道院附属円聖堂(1915年)のイヴォ神父、ヨハン修士などの名が伝えられているほか、札幌カトリック教会聖堂（1916年）や函館亀田教会(1912年)のインテリア設計のフランツ・フェルゲットのように、絵画や建築の素養をもつ神父の設計もみられた。

フランツ・フェルゲットは、1876(明治９)年８月24日オーストリア生まれ[120]。ローマのサン・アントニオ大学で修学したばかりの1909(明治42）年６月４日、札幌に着任した[121]。「絵をかくのが上手」[121]で、『フランシスコ会北海道布教小史』[121]には「古い教会になら今でもまだ、師の彩管を揮った絵がどこにでも見られる」とあり、また数々の祭壇の設計図もかいたという[121]。

1912年９月竣工の亀田教会小聖堂の内部装飾もフェルゲットの設計で、「狭いながら落着いた、いかにもフランシスコ会のものらしい祭壇と飾りで」「周囲の窓硝子は色硝子をはめて全体がうす暗く、天井からはハイカラな花飾りの電灯が下がっていた」[122]。信者でもある松川豊吉が請負った[122]。 教会には、フェルゲットが描く聖フランシスコと聖アントニオの絵があったという[121]。

亀田教会の基礎は、1901(明治34)年ベルリオーズ司教が購入した民家に築かれた[122]。1909年6月フランシスコ会が引継ぎ、翌10年モーリス・ベルタンが派遣された。まずモーリス設計の修道院が完成、7月14日祝別され[122]、同時にフェルゲットとヘルクラン修士とが転任となった。同教会は、1915年３月フランシスコ会から再び外国宣教会の受け持ちとなっている[122]。

フェルゲットは1911年7月から18年[123] 9月まで、倶知安天主公教会司祭として在任、この間に1916(大正５)年竣工の札幌カトリック北一条教会の設計も担当したと伝えられる。1918年９月小樽天主公教会司祭として着任、在任中の1928(昭和３)年８月24日、小樽市富岡町に聖堂工事を起工した[124]。設計施工は三浦才三と聞く[125]が、フェルゲットの深い関与があったことも推察できる。聖堂は1929年６月30日に献堂式を挙げる[124]が、フェルゲットは完成を待たずに、その年の２月11日札幌へ栄転した[124]。

1932年12月から翌年４月まで札幌北十一条教会の主任司祭に着任するが、重い糖尿病をわずらい、1940(昭和15)年札幌フランシスコ修道院に籠居後、天使病院に入院し1944年７月25日昇天した。享年67歳であった[126]。フェルゲットについては、以上の在職経緯が知られるのみであるが、カトリック系宗教施設の設計者として注目すべき人物といえ、関与した建築作品や装飾など今後の研究課題として残されている。

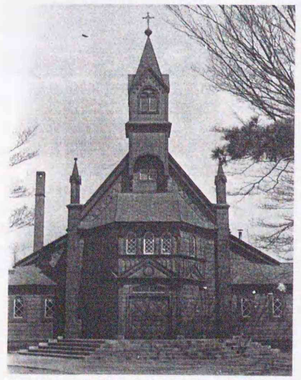


図1-6-9　札幌カトリック北一条教会

120：新川珠子氏(小樽昭和高校勤務)の教示による。
121：「フランシスコ会北海道布教小史(二)」(『光明附録』1957.1.20発行)
122：『函館・宮前町聖ミカエル教会改新築記念誌』(1965.11.7)
123：『倶知安カトリック教会五十年記念誌』(1962.7.8)では、フェルゲットの在任を1911年7月―1919年9月としているが、ここでは次掲『回顧五十年』によった。
124：『回顧五十年』（小樽）天主公教会(1941.6.25)
125：沖田啓子氏(三浦才三子女)からの聞き取り。
126：新川珠子氏からの教示。

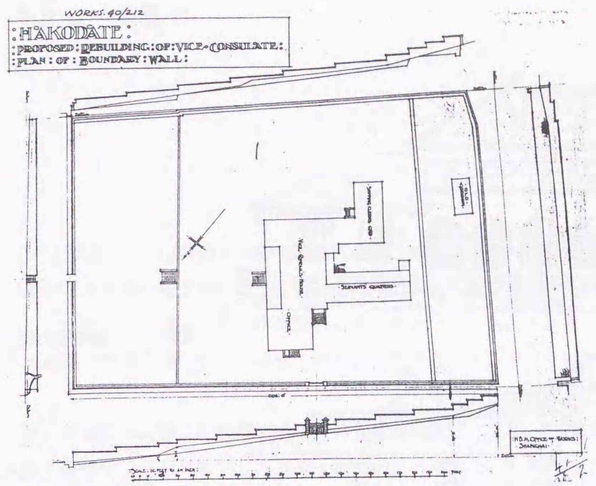


図1-6-2　在英資料[図212](配置図)

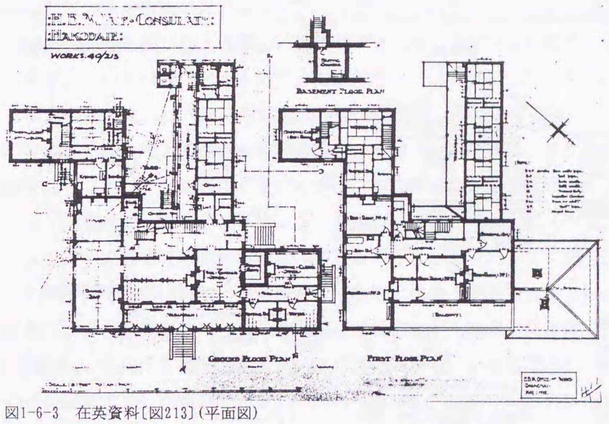


図1-6-3　在英資料[図213](平面図)

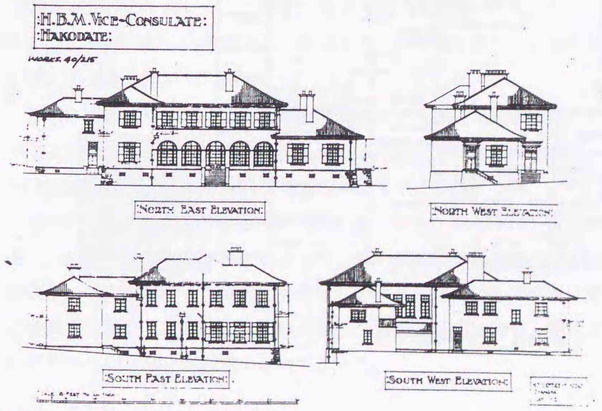


図1-6-4　在英資料[図215](立面図)

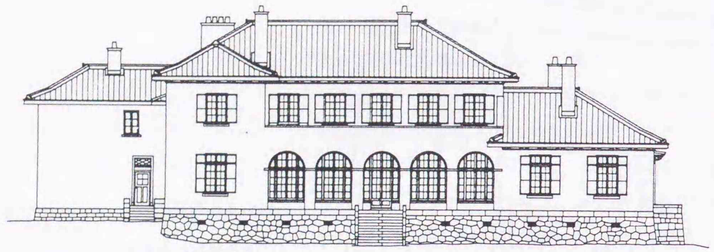


図1-6-5　北側復原立面図

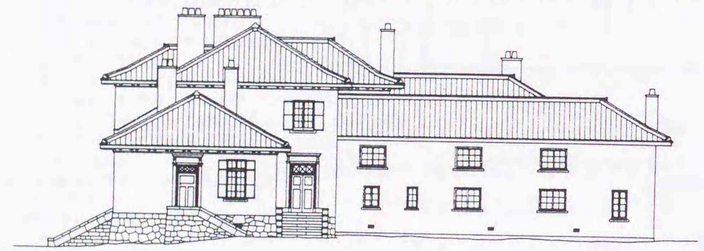


図1-6-6　西側復原立面図

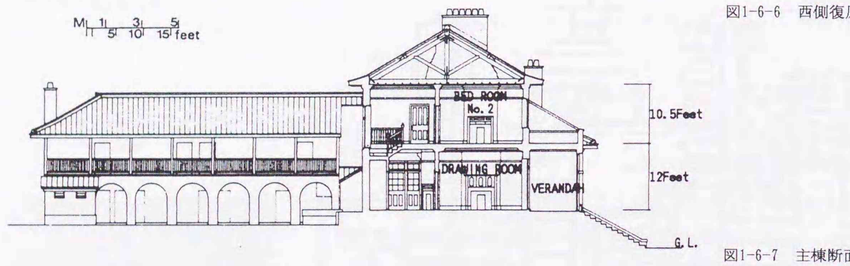


図1-6-7　主棟断面図

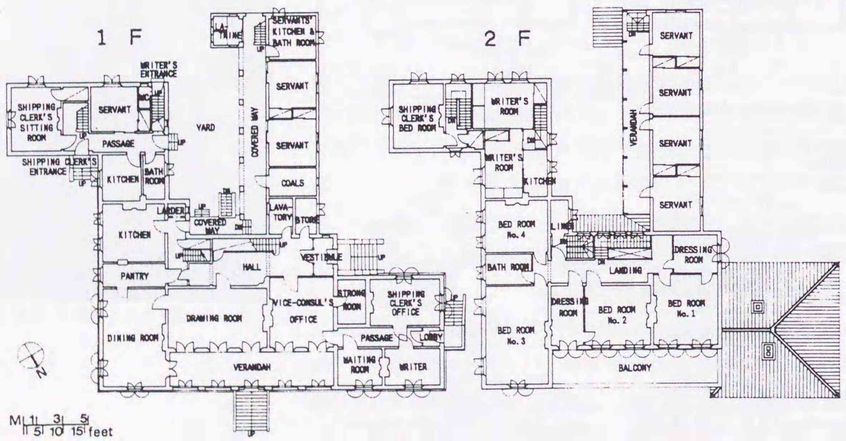


図1-6-8　復原平面図

第２章　博覧会

1918(大正７)年の開道五十年記念博覧会は、1914年東京大正博覧会も手掛けた中條精一郎を顧問とし、曽禰中條建築事務所の中村順平が担当した。北海道における本格的な博覧会の第１号といえるものであり、また大正期の市民生活に新しい息吹を吹き込んだ大きなエポックでもあった。

この博覧会を契機に札幌電気軌道㈱の電車が開業し、現在の札幌市営交通の基礎がつくられた[1]し、巡査・郵便配達・車掌などの制服の採用[2]、女子や子供に至るまでの洋服化への移行[2]、洋食店や酪農品などの発達など衣食住全般にわたる極めて大きな変化がみられた。

準備に数年を要した大規模な1918年開道五十年記念博覧会に続き、５、６年周期でいくつかの大きな博覧会も開催された。1926(大正15)年には「国産振興博覧会」、1931(昭和６)年「国産振興北海道拓殖博覧会」、1937年には「北海道大博覧会」が開催され、「本道ノ面目ヲ発揚」[3]する大規模なパビリオンや「瀟洒な」[4]セセッション風、ドイツ表現派風のデザイン、「垢抜けのした」[5]パビリオンなどが出現し、夜ともなればイルミネーションや投光機の照明が博覧会ムードをいっそうかきたててくれた。

もちろんそれ以前にも、農業博覧会や物産共進会、畜産共進会といったものが多数開催されている。北海道における物産共進会の開催は、1878(明治11)年10月札幌で開いた第１回農業仮博覧会[6]が最初である。その後1882年まで、札幌、函館と交互に毎年開かれ、1883年に初めて北海道物産共進会と改称し、この時から根室も交代開催地に加えられた（図2-1-1)。1887(明治20)年まで毎年開催され、その後中断し、1892年札幌開催の共進会(図2-1-2)が最後となった。

以後、各郡区町村で小規模な品評会、畜産、果実、工業等の専門的な共進会は多数開催されたが、全道各種の生産品を網羅した共進会は、1906(明治39)年の北海道物産共進会まで中絶することになる。

表2-0-1 は、これまでに筆者が収集した博覧会・共進会の一覧である。未完の試みであり今後の研究によって、さらに増える可能性は大きいが、開道五十年記念博覧会より前のものは、いずれも道民の殖産興業に対する啓発を目的とした物産展の意味が強く、施設設計も地味で、博覧会という華々しい名称には程遠いものであった。

1：『さっぽろ文庫７　札幌事始』（北海道新聞社、1979.1.30)
2：『札幌生活文化史〈大正・昭和戦前編〉』(札幌市、1986.2.20)
3：『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』(1920.3.30)
4：『国産振興北海道拓殖博覧會誌』(1932.8.20) p.11
5：『国産振興北海道拓殖博覧會誌』p.53
6：1883年に北海道物産共進会と改称、1887年までほぼ毎年開催されたが、1892、1906年の共進会以来は久しくとだえていた。

表2-0-1　北海道における戦前期の主な博覧会・共進会一覧

開催年月日	事業名	開催地	備考	
M10(1877) 8.21	［第１回内国勧業博覧会］	東京(上野公園)	～11.30	［国史10］
11(1878) 10.15	第１回農業仮博覧会	札幌(大通西3)	以後札幌，函館隔年開催	［市年表］
12(1879) 9.	［第１回製茶共進会］	横浜	共進会の初め	［近代年表］
10.11	函館第１回農業仮博覧会	函館(海岸町)	５日間	［區史］［新撰年表］
13(1880) 2.15	［綿糖共進会］	大阪	～4.5	［国史 4］
14(1881) 3. 1	［第２回内国勧業博覧会］	東京(上野公園)	～6.30	［国史10］
9.20	開拓使他４県連合米繭共進会	札幌		［市年表］
10.21	函館第２回農業仮博覧会	函館(海岸町)	５日間	［區史］［新撰年表］
15(1882) 10.21	第３回札幌農業仮博覧会	札幌(区博物場)	～.27	［新撰年表］［報18］
16(1883) 10.	函館県北海道物産共進会	函館		［區史］
17(1884) 10.21	北海道物産共進会	札幌	～.25	［市年表］［報19］
18(1885) 4. 1	［繭糸織物陶漆器共進会］	東京(上野公園)	～6.20	［国史 4］
11. 2	根室県北海道物産共進会	根室(弥生町)	～.5	［根室要覧］［報12］
19(1886) 10.	北海道農業博覧会	函館(海岸町)		［區史］
20(1887) 7.	北海道物産共進会	札幌		［市年表］
22(1889) 10.	根室外二十七郡聯合水産物品評会	根室		［根室要覧］
23(1890) 4. 1	［第３回内国勧業博覧会］	東京(上野公園)	～7.31	［国史10］
24(1891) 11. 2	和田村農産物品評会	和田(共集館)	２日間	［根室要覧］
25(1892) 8. 1	北海道物産共進会	札幌(中島遊園地)	～.31	［報13］［市年表］
28(1895) 4. 1	［第４回内国勧業博覧会］	京都(岡崎)	～7.31	［国史10］
34(1901)	室蘭外五郡水陸産品評会	室蘭	以降室蘭支庁内で小規模な品評会開催	［報 7］
10.	小樽外六郡水陸物産共進会	余市		［報 1］
35(1902) 3.	第１回上川農産品評会			［報 4］
8.	第１回日高産馬共進会	静内		［報15］
36(1903) 3. 1	［第５回内国勧業博覧会］	大坂(天王寺)	～7.31	［国史10］
8.	第２回日高産馬共進会	浦河		［報15］
8.	第１回日高物産共進会	浦河		［報15］
37(1904)	第１回家畜品評会	札幌		［市年表］
6.	北海道畜産共進会	札幌		［市年表］
38(1905) 9.	第３回日高産馬共進会	浦河		［報15］
9.	第２回日高物産共進会	浦河		［報15］
10.	網走外三郡聯合水陸物産品評会	網走		［報 2］
39(1906) 9.10	北海道物産共進会	札幌(中島公園)	～.30 大規模共進会の最後	［報14］
40(1907) 8.	第２回北海道畜産共進会	函館		［區史］
	北海道馬匹共進会	札幌		［市史］
11.	第２回上川農産品評会			［報 4］
11.	十勝物産品評会	帯広		［報 8］
11.	第３回日高物産共進会	幌泉		［報15］
41(1908) 8.	第３回北海道畜産共進会	札幌		［市年表］
8.	第２回北海道馬匹共進会	札幌		［市年表］
8.11	小樽商品陳列会	小樽(稲穂尋常小学校)	～.25	［報 6］
8.	北海道水産共進会	小樽		［報 6］
11.	第４回日高物産共進会	様似		［報15］
42(1909) 11.10	室蘭外五郡物産品評会	室蘭(町役場)	～.16	［報 7］
11.10	室蘭外五郡畜産共進会	室蘭(電信浜)	～.16	［報 7］
11.	第５回日高物産共進会	三石		［報15］
	上川米麦品評会			［報 4］
43(1910) 8.	第４回日高産馬共進会	浦河		［報15］
11.	第６回日高物産共進会	静内		［報15］
	第１回馬匹共進会	札幌		［市史］
44(1911) 7.	第７回日高物産共進会	門別		［報15］
8.	第５回日高産馬共進会	門別		［報15］
	第１回檜山外五郡物産共進会	江差		［報 5］
	第２回馬匹共進会	札幌		［市史］
45(1912) 7.	第６回日高産馬共進会	静内		［報15］
	第３回馬匹共進会	札幌		［市史］
T. 2(1913) 8.	第７回日高産馬共進会	浦河		［報15］
8.	第８回日高物産共進会	浦河		［報15］
9.	十勝馬匹畜産共進会			［報 8］
10.20	後志物産共進会	倶知安(第3尋常小学校)	～.26	［報 1］
3(1914) 3.20	［東京大正博覧会］	東京(上野公園)	～7.31	［近代年表］
8.	第８回日高産馬共進会	浦河		［報15］
8.19	御大典記念檜山外五郡物産共進会	江差(柏樹尋常高等小学校)	～.23	［報17］
8.19	御大典記念檜山外五郡馬匹共進会	江差(松の岱)	～.22	［報17］
T 4(1915) 8. 8	第９回日高国産馬共進会	三石(大字姨布村)	～.12	［報15］
8. 8	第９回日高物産共進会	三石(尋常高等小学校)	～.12	［報15］
9. 1	十勝網走聯合馬匹共進会・第２回十勝畜牛共進會	帯広	～.5	［報 8］
10.23	大禮記念空知外三郡物産共進会	岩見沢(尋常高等小学校)	～.29	［報 3］
11. 5	第２回十勝物産共進会	帯広(尋常高等小学校)	～.9	［報 8］
	第２回檜山外五郡物産共進会	瀬棚		［報 5］
	第１回農業品評会	札幌		［市史］
	第１回蚕糸品評会	札幌		［市史］
5(1916)	第４回産馬共進会	札幌		［市史］
8. 4	第10回日高産馬共進会	浦河		［報16］
8. 4	第10回日高物産共進会	浦河(尋常高等小学校)		［報16］
9.21	網走外三郡物産共進会	網走(尋常高等小学校)	～.25	［報 2］
10. 6	上川外四郡旭川區聯合物産共進会	旭川(区立女子職業学校)	～.15	［報 4］
3.15	［遷都五十年記念博覧会］	東京(上野公園)		［図誌］
7(1918) 8. 1	開道五十年記念北海道博覧会	札幌，小樽	～9.19	［事務報］
8.16	開道五十年記念北海道産馬共進会	札幌	～8.25	［事務報］
8(1919)	第５回産馬共進会	札幌		［市史］
8. 8	第３回札幌工業品品評会	札幌(中島公園)	～.22	［報20］
9(1920)	北海道農具共進会	札幌		［歴写集］
11(1922)	［平和記念東京博覧会］	東京(上野公園)	～7.31	［近代年表］
8.16	第３回檜山外五郡物産共進会	江差(柏樹小学校)	～.20	［報 5］
12(1923) 8.	工業品品評会	札幌(中島公園)		［市年表］
14(1925) 3.15	大大坂記念博覧会	大坂(天王寺公園)		［図誌］
15(1926) 8. 1	国産振興博覧会	札幌	～8.30	［会誌1］
S 2(1927) 8. 1	第５回札幌工業品品評会	札幌(中島公園)	～.20	［報21］
5(1930) 6.26	工業資料展覧会	札幌(工業試験場庁舎)	～7.2	［報11］
6(1931) 7.12	国産振興北海道拓殖博覧会	札幌	～8.20	［会誌2］
7.11	小樽海港博覧会	小樽(海岸埋立地)	～8.20	［会誌3］
8. 1	国産愛用巡回展覧会	第一班(札幌、小樽、倶知安、函館、江差、室蘭、浦河、岩見沢)	～9.18	［報 9］
8. 2	国産愛用巡回展覧会	第二班(留萌、旭川、稚内、網走、釧路、根室、帯広、名寄)	～9.15	［報 9］
7(1932)	発明国産奨励展覧会	札幌		［市史］
9(1934)	畜産共進会	札幌		［市年表］
10(1935) 3.23	北海道新興商品展覧会	札幌(北海道庁商工奨励館)	～.27	［報10］
7.	北海道工業振興共進会	札幌		［市年表］
12(1937) 7. 7	北海道大博覧会	小樽(小樽公園，海岸埠頭)	～8.25	［文化史］

注：事業名の［　］は北海道外のもの。

参考文献名略語

［近代年表］『近代日本総合年表』(1968.11.25) ［図誌］『明治大正図誌17 図説年表』(S54.7.31)
［国史 4］『国史大辞典４』(S59.2.1) ［国史10］『国史大辞典10』(H1.9.30)
［市史］『札幌市史(産業経済篇)』(S33.4.30) ［市年表］『札幌市概説年表』(S30.8.15) ［區史］『函館區史』(M44.7.15)
［根室要覧］『根室要覧』(T2.) ［新撰年表］『新撰北海道史第７巻年表』(S12.11.10)
［事務報］『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』(T9.3.30) ［歴写集］『札幌歴史写真集〈大正編〉』(S58.2.25)
［会誌1］『国産振興博覧會誌』(S2.12.20) ［会誌2］『国産振興北海道拓殖博覧會誌』(S7.8.20)
［会誌3］『小樽海港博覧會誌』(S7.4.10) ［文化史］『小樽文化史』(S49.11.3) ［報 1］『後志物産共進會報告書』
［報 2］『網走外三郡物産共進會報告』(T6.4.7) ［報 3］『大禮記念空知外三郡物産共進會報告』(T5.8.15)
［報 4］『上川外四郡旭川區聯合物産共進會報告』(T7.2.25)
［報 5］『第三回檜山外五郡物産共進會事務報告』(T12.9.15) ［報 6］『小樽商品陳列會報告書』(M41.12.23)
［報 7］『室蘭外五郡物産品評會及第一回室蘭外五郡畜産共進會報告書』(M42.12.28)
［報 8］『第二回十勝物産共進會 十勝網走聯合馬匹共進會 第二回十勝畜牛共進會事務報告』(T6.3.15)
［報 9］北海道庁『国産愛用巡回展覧會々誌』(S6.3.25)
［報10］北海道庁経済部商工課『北海道新興商品展覧會々誌』(S10.3.)
［報11］北海道工業試験場『工業資料展覧會報告』(S6.6.30) ［報12］根室県勧業課『北海道物産共進會報告』(M19.2)
［報13］北海道庁『北海道物産共進會報告』(M25.12.28) ［報14］『北海道物産共進會報告及審査報告』(M40.9.23)
［報15］日高實業協會『第九回日高國産馬共進會第九回日高物産共進會報告書』(T5.3.10)
［報16］日高實業協會『第十回日高國産馬共進會第十回日高物産共進會報告書』(T6.2.5)
［報17］『御大典記念檜山外五郡物産馬匹共産會報告』(S4.6.1)
［報18］札幌県『第三回札幌農業仮博覧会報告』(M16.3) ［報19］札幌県『北海道物産共進會報告』(M17.10)
［報20］札幌商業会議所『第三回札幌工業品々評會報告』(T8?)
［報21］札幌商業会議所『第五回札幌工業品々評會報告』(S2.8)

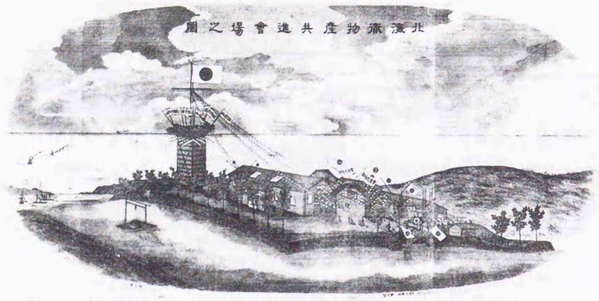


図2-1-1　北海道物産共進会(1886、根室県)(『北海道物産共進會報告』1886)

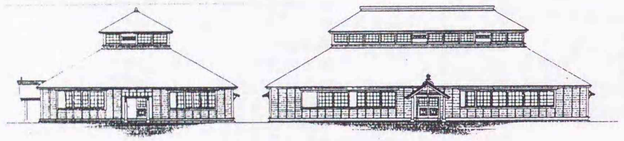


図2-1-2　北海道物産共進会(1892、札幌)第一館(『北海道物産共進會報告』1892)

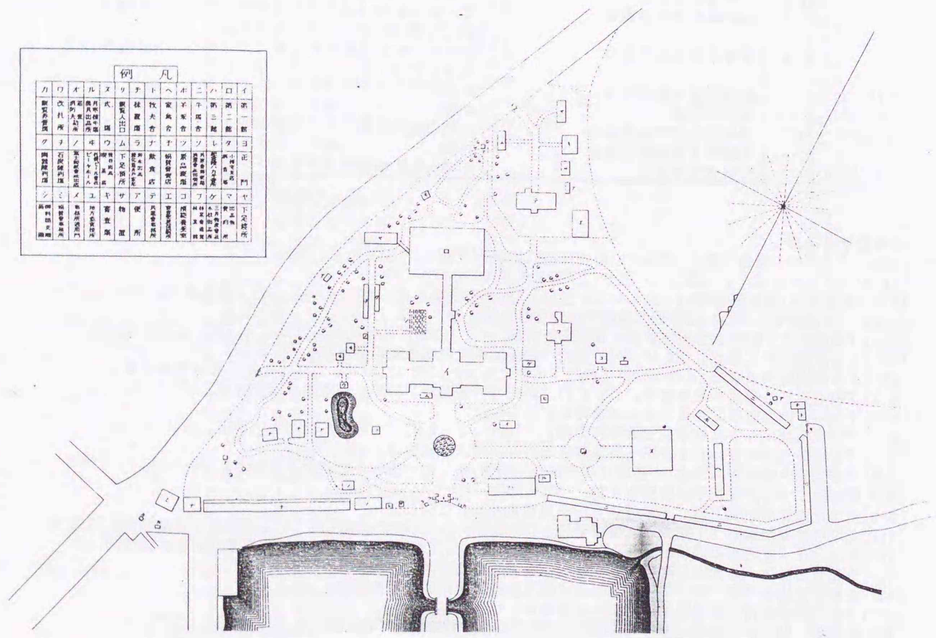


図2-1-3　北海道物産共進会(1906、札幌)会場配置図(『北海道物産共進會事務及審査報告』1907)

2-1　1906年北海道物産共進会



図2-1-4　北海道物産共進会(1906)第一館(『北海道物産共進會事務及審査報告』1907)

1906年の北海道物産共進会は、第１回農業仮博覧会から12回目にあたるが、11回目までが開拓使、北海道庁の官設なのに対し、こちらは北海道農会、北水協会、北海道蚕糸会、北海道畜産協会、北海道林業会、北海道園芸協会の６団体の共同事業であった。

会場は札幌中島遊園地、期間は1906年９月10日から30日までの21日間であった。会頭は北海道庁長官園田安賢、副会頭道庁事務官第一部長大塚貢ならびに札幌農学校長北海道農会長佐藤昌介が務め、 114名に及ぶ評議員が関係し、実務は、庶務係、出品係、会場係、会計係、審査係の５係が担当した。うち陳列館やその他の建築、配置計画などの設計は、会場係が掌握した(図2-1-3)。

会場係の構成は、係長道庁技師池田音次郎、係長代理藤村信吉や道庁技手湯浅純彦、小泉粂次郎、菅原庚午郎、江刺家昂、國分茂八、道庁技術員家田於菟之助、橘高茂一郎、竹越小一郎、坂井菊次郎など総勢17名であった。

この会で使用した建築物は28棟1,041坪5勺。うち新築は21棟753坪5勺、在来の建築を修理充当したもの７棟であった。新築建物のうち、最大の建物でかつ閉会後も永久保存とされ、開道五十年記念博覧会では農業本館として使用され、1958年6月まで建っていた第一館(図2-1-4)が注目される。

この永久館である第一館の設計大要が、『北海道物産共進會事務及審査報告』(1907年９月23日発行)に詳細に収録されている。多少長いが、建物の概要を示しているので、要約して以下にあげる。

(1)基礎工事：幅３尺５寸、深４尺以上布堀し、栗石、目潰砂利入れ。厚１尺毎に60貫目以上の重量の真棒で突き固め、その上にセメントコンクリートを厚６寸に敷き詰め、上に焼過煉瓦の上等品を長手２枚半ないし１枚半13層積みとし、床下換気窓の上下は硬石。

(2)正面玄関及び各非常出入口の階段：硬石の小叩き仕上げ。据付け土間はコンクリートで、その上に焼過ぎ煉瓦を網代形に敷き詰め。

(3)中央２階部：梁間7間、桁行9.5間、建坪66.5坪、軒高土台下端より軒桁上端まで34尺、軒出1.3尺、小屋組は「洋式陸屋根形」、方形造（マンサード屋根)、勾配１尺１寸。屋上に幅３間、長さ5.5間の露台を設置、周囲に高欄を取り付け、床は「ラバロイト」の上、セメントコンクリート敷き詰め。中央に方10尺隅切形の塔を設置。塔の高さ露台上端より軒桁下端まで11尺。屋上避雷針を設け、地上から避雷針先端まで高さ79尺。

(4)左右本家平屋部：各梁間６間桁行６間、左右角家は各梁間６間桁行11間。合計坪数 204坪。軒高は、土台下端より軒桁上端まで17.5尺。軒出1.25尺。小屋組「陸屋根形」方形造(マンサード屋根)、勾配１尺１寸、陸屋根勾配は２寸５分。屋上の所々に半円形または切妻形の屋根窓を設置。

(5)構造：柱５寸角、陸梁５×９寸、合掌５×７寸。小屋組は５～６分の鉄ボールト、平鉄で締め付け。

(6)内部：床は１寸板本実矧。壁は木摺５度塗の漆喰。天井は格天井。

(7)外部：付土台上は厚８分幅８寸の板で、「石目明き6分に」垂直に打ち付け、入口、窓際は化粧柱、隅は定規柱と柱型で２本とする。軒先は蛇腹形。
(8)用材：えぞまつ又はとどまつ。鼠色ペンキ３度塗り。
(9)屋根：６分板張りあわせ、その上に２寸足の土居葺きを施し、さらに亜鉛引き薄鉄板８ツ切を菱葺き、上にコールタール２度塗り。
(10)窓：内法３尺、高さ７尺５寸の二連窓。南側は幅３尺、高さ１尺５寸の欄間を設置し、採光面積を床面積の約1/4弱とする。

第一館の建築工事は、大島喜一郎（札幌南４東２）、大倉組土木請負部(同北３東２)、阿部久四郎（同南６西６)、伊藤亀太郎（同北８西２)、篠原要次郎(同北４西11)、阿部與之助(豊平村)６名の指名入札とし、1906年４月入札の結果、篠原要次郎に落札し、同年９月竣工している。

2-2　開道五十年記念北海道博覧会

1918(大正７)年、「明治二年開拓使設置以来既住五十年間」の本道における拓地殖民の経過、殖産興業、道路交通並びに経済状態を広く紹介することと、「本道五十年間ノ進歩ヲ紹介シ且ツ将来ノ発展ヲ豫示スルモノナル以上能フ限リ大規模ヲ以テシ本道ノ面目ヲ発揚」[7]しようとの目的で「其ノ規模内容ニ於テ本道空前ノ」[7]博覧会が開催された。セセッション様式を主調とした主要パビリオン数15棟、内国製自転車、改良背鞍、馬橇、趣向を凝らしたストーブ、製鋼所の兵器類や、各府県のお国自慢の優秀品なども出品された。

第１会場に札幌区中島公園(56,772坪45)があてられ、第２会場として同北１条西４丁目に工業館(元区立女子尋常高等小学校跡地、1,665坪)が、第３会場小樽区区営第二埋立地（3,500坪)には水族館が建設された。札幌停車場前には歓迎門が飾られ、期間中の８月12日には馬鉄にかわって電車も開通し、博覧会ムードは最好調に達し、８月１日より９月19日までの50日間に入場者数延べ 140万人余を集めたという。各館は午後５時に閉館したが、会場は午後11時まで開放され、北極塔やパビリオンにはイルミネーションが輝いた。

1916年２月博覧会準備委員が決定し、北海道庁土木部からは、理事官序野康雄、土木技師家田於菟之助[8]、属浅見鐵也の３名が任命された。同年７月博覧会事務規定が決められ、庶務課、出品課、審査課、経理課、出納課、工務課、警備課の７課を設置、施設工事担当の工務課職員として、工務課長序野康雄(大正７年５月退職)、同友部泉蔵以下、土木技師家田於菟之助、技手山崎進、土木技手高野守衛、金垣幸助、佐藤信雄、和田與、古川龍五郎他[9]が任命された。監督に家田技師、第１会場主任金垣技手、第２会場は山崎技手が主任となって[10]、工事がすすめられた。

7：『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』 p.2

8：1867(慶応３)年岡山県備中国吉備郡足守町生まれ。1884年県立岡山中学校退学。鉄道局建築課勤務。東京芝区攻玉社量地校数学専修科入学。昼は、英国建築技師ツリビチックおよび工学博士山口半六の教えを得たという。1886年攻玉社卒業、1888年鉄道局依頼解雇、文部省会計局営繕係雇、1891年文部省依頼解雇、新潟県土木課勤務、富山県、岡山県、奈良県、静岡県などに短期奉職後、1902年北海道庁に勤務。1908年より土木技師として活躍した。

9：他に属竹内勝次、技手三浦吉四郎(兼務)、神尾正(同)、高橋正男(同)らの名がみられる。

10：小樽新聞「道博会場めぐり」(1818.4.30)

設計者と施工者

設計は、1916年５月曽彌中條建築事務所の中條精一郎に顧問を嘱託、新人所員の中村順平が担当して、翌1917年１月30日完了した。

第１会場建築工事は同年２月19日札幌区伊藤亀太郎に落札し、２月25日起工、４月23日地鎮祭を挙行、函館区藪越増太郎が請負った第２会場工業館は、７月７日地鎮祭を行った。10月７日両会場の上棟式を経て、翌1918年７月31日竣工、８月１日の開会式を迎えた。

設計顧問中條精一郎は、札幌農学校新営工事(1899～1902)や、博覧会後の独立教会(1922)の設計など、北海道との由縁もよく知られているが、東京大正博覧会(1914)の設計者でもあり、これに先立つ愛知県(1910)、富山県(1913)の共進会にも関わってきた。

また、中條のもとで担当した中村順平も東京大正博覧会を経験しており、新人ながら中條から深く信任を受けていた人である。1910(明治43)年名古屋高等工業学校建築学科を卒業、同年曽彌中條建築事務所に入所、27歳の若さで東京大正博をてがけ、1920年巴里国立最高美術学院に入学するまでに、開道五十年博や東京如水会館(1919)などを担当した。

なお出品の陳列装飾には、元東京美術学校教授で、日英大博覧会その他共進会に経験の深い菅野真(すがの まこと)を装飾顧問として嘱託した[11]。

小樽区第２区埋立地に開設された第３会場は、水族館を除く、演芸場、売店、歓迎門、橋梁装飾、塔その他の設計は、東京市趣味工業社が担当[12]、1918年2月13日設計図到着[12]、工事は松前宗太郎が請け負った[13]。

11：小樽新聞「開道記念博覧會◇其内容と施設(五)」(1918.1.29)

12：小樽新聞「道博第三会場設計図」(1918.2.24)

13：小樽新聞「道博会彙報」(1818.1.20)

配置計画

第１会場にあてられた中島公園は、1886(明治19)年遊園地として札幌区に編入されたのに始まる。物産共進会や競馬会がおこなわれたり、花苑・屯田兵招魂碑が設けられ、1908(明治41)～10年には東京市公園技師長長岡安平設計により公園整備が進められたが、「その後は予算の不足、植樹の枯死等で施工に困難を極め、せっかくの設計も実現されないままに競馬場跡地も広場となり……」[14]という状況であったらしい。第１会場の主空間には、この「競馬場跡地」があてられた。

配置計画にあたってのもうひとつ重要な要素は、既設の旧物産陳列場(1906年)と池および池の中島であり、陳列場と中島を結ぶ一軸はそのまま博覧会の副軸として生かされ、陳列場を農業本館に改装、軸上に奏楽堂を置き、中島には橋を架けて迎賓館を新営した。

南隣りの競馬場跡地を主広場とするが、この既設の副軸に平行して主軸が設定された。主軸の奥端にむかって、中央の水産館と左右の林業および鉱業館、参考館が馬蹄形に配され、広場の軸上に水産館ドーム、北

14：札幌市史編集委員会『札幌市史政治行政編』(1953.2.20)



図2-2-1　開道五十年記念博第一会場
（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』1920）

1	正門	10	參考館
2	迎賓館	11	土木・交通館
3	奏楽館	12	機械館
4	農業本館	13	京都館
5	繭・蚕糸業館	14	第二參考館
6	農業別館	15	北極館
7	園芸館	16	動物舎
8	林業及工業館	A	売店・飲食店地区
9	水産館	B	娯楽・遊戯施設地区

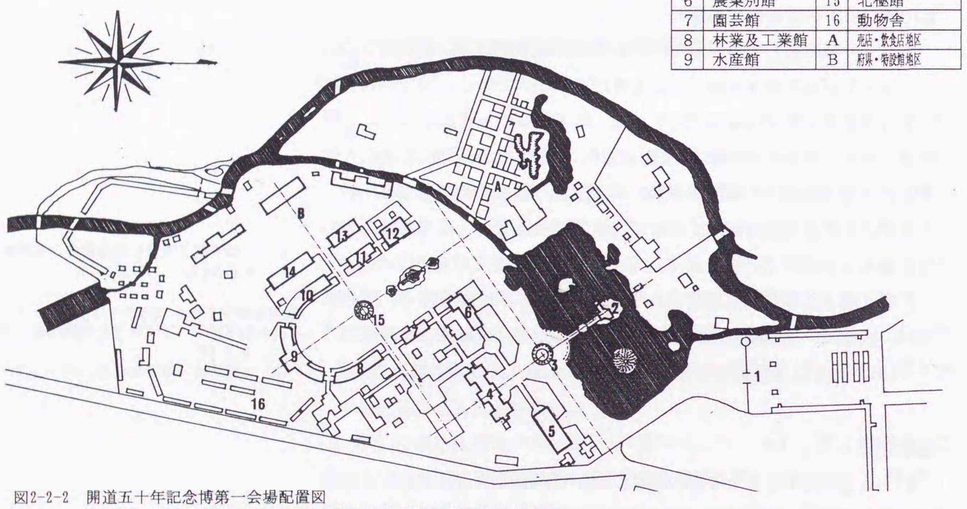


図2-2-2　開道五十年記念博第一会場配置図
（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』掲載配置図より作成）

表2-2-1　開道五十年記念博　主要施設一覧

施設名	構造	面積	工費
		(坪)	円
［第１会場］			
水産館	木造漆喰塗	23.275	16,658
林業及鉱業館	〃	199.380	11,316
參考館	〃	200.000	9,282
土木交通館	〃	100.500	5,077
園芸館	〃	100.500	5,077
機械館	〃	150.000	6,299
農業別館	〃	149.490	7,528
拓殖教育衛生館	木造モルタル塗２階建	253.049	28,765
迎賓館	木造漆喰塗	61.116	3,826
音楽堂	〃	8.727	1,602
農業本館	木造ペンキ塗り	在来建物	
第二參考館	木造漆喰塗	203.000	14,426
北極塔	木造漆喰塗	１基	2,887
郵便局舎	〃	23.275	1,327
警官救護消防詰所	〃	34.000	1,510
［第２会場］			
工業館	木造モルタル塗２階建	202.247	31,478
［第３会場］			
本館	木造漆喰塗	56.500	7,827

表2-2-2　開道五十年記念博覧会特設館

名称	坪数	建設者
東京館	200 坪	東京博覧會協會
京都館	100	京都市役所
新潟縣特設館	138	新潟縣
富山縣特設館	126.5	富山縣
石川縣特設館	132	石川縣
帝室林野管理局特設館	50	帝室林野管理局札幌支局
富士製紙株式會社特設館	25	富士製紙株式會社
三井物産株式會社特設館	24	三井物産株式會社
帝國製麻株式會社特設館	20	帝國製麻株式會社札幌支店
二二商會特設館	13.75	札幌區北一條東四丁目九番地 二二商會 齋藤榮吉
堤商會特設館	6.25	函館區西濱町 堤商會
桐山商店特設館	1.5	札幌區北二條東二丁目一番地 桐山捨吉
三田銃砲店特設館	6	札幌區南一條西四丁目 三田義正
御園化粧品特設館	70	東京市芝公園内 伊藤胡蝶園
レート化品特設館	15	東京市日本橋區馬喰町 平尾賛平
ライオン齒磨特設館	20	東京市本所區外手町 小林富次郎
クラブ化粧品特設館	10	大阪市東區二丁目 中山太一
千代田香油特設館	6	東京市日本橋區馬喰町 山岸三之助
金鶴香水特設館	12	東京市日本橋區藥研堀 山川昇太郎
淺沼商店特設寫眞館	30	東京市日本橋區本町 淺沼藤吉
岩田兄弟工場特設館	10	東京市神田區龜住町 岩田繼清
佐藤製衡所特設館	5	東京市日本橋區室町 合資會社佐藤製衡所
安部電氣部特設館	6	東京市麹町區内幸町 安部幸兵衛商店電氣部
淺野スレート株式會社特設館	12	東京市深川區東元町 淺野スレート株式會社

表2-2-3　開道五十年記念博覧会休憩所、広告塔、掲示場

名称	坪数
北海タイムス社休憩所	4 坪
札幌實業聯合會休憩所	28
十勝國休憩所	26
北海道造林合資會社休憩所	12
北海道農會休憩所	32餘
大日本人造肥料株式會社休憩所	50
朝鮮總督府休憩所	15
佐渡郡役所休憩所	25

名称	坪数
戸出物産株式會社休憩所	15.5坪
野田醤油株式會社休憩所	10
青山染工場休憩所	20
網走外三郡特設塔	10
今井合名會社廣告塔	
堀井勝寫堂廣告塔	1箇處
安藤井筒堂廣告立像	1基
東京日々新聞社掲示場	1箇

極塔、花壇が置かれた。

会場内花壇ほか庭園造成に関しては、北海道帝国大学教授農学博士星野勇造、同助教授農学士前川徳次郎に設計を嘱託し、高橋（正男？）技手監督のもとに札幌壽仙園主河井茂樹が担当した[15]。

水産館、林業および鉱業館、参考館ファサードは、広場を囲むタスカンオーダーの擬コロネードとされた。この馬蹄形列柱は、東京大正博における副軸上の列柱広場の手法を展開したものでもあった。

停車場通り(西４丁目)突き当たりの正門から導入される観衆の流れは、これら正副の２軸と直交する池前の大通路、農業本館側面および背面の建物から主広場へ向かうやはり直交軸によってさばかれている。つまり、平行する正副２軸と、これに直交する２軸によって、会場主要部の配置が決定されたといえる。

15：『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』

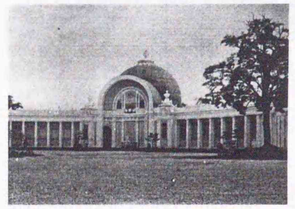


図2-2-3　水産館(『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』)

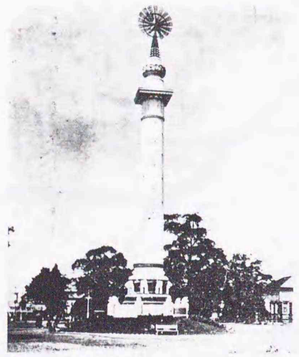


図2-2-4　北極塔(同上)

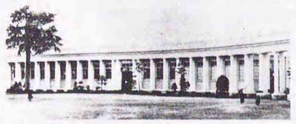


図2-2-5　林業及鉱業館(同上)

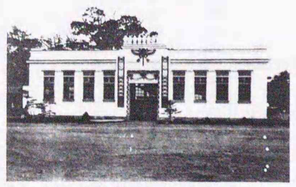


図2-2-6　園芸館(同上)

主要施設の概要と意匠

主会場を構成する水産館(図2-2-3) 以下の建物は、列柱と低いエンタブラァチャーによって統一されている。水産館は中央にセセッション風のドームをのせ、正面に大アーチをひらいて主軸を強調している。

ドームと主軸上で対峙する北極塔（図2-2-4)は、木造漆喰塗り、高さ100尺の塔で、先端には北極星を表す星がデザインされ全体としてセセッションの色合いが強い意匠とされた。基壇は円形で、段状に重ねた１段と２段目に彫像の置物を配置し、塔身上部に正方形の角板をのせ、さらに上をすぼめ、円錐の柱塔が載っている。柱頭の先には北極星輝きを図象化した星章を飾っていた。

両脇の第１考館、林業及鉱業館(図2-2-5) は水産館の列柱をそのまま延長し、次の土木交通館、園芸館(図2-2-6) は扁平なピラスター、機械館は平壁と順次ファサードのリズムを押さえる構成である。これらの陳列館では、建物の水平性を強調するため片流れの緩勾配屋根をかけ陸屋根にみせている。機械館では屋根を内勾配として、トップライトを設ける試みもみられた。陸屋根のデザインは、他に新潟館、水族館（第３会場)でも踏襲された。

これらに対し、拓殖教育衛生館がマンサード、農業別館が寄棟屋根とされたのは、会期後の利用を想定したためであろう。拓殖館入口のアーチ、両脇の角塔、壁面のジャイアントピラスターの装飾などは、東京大正博の美術館ファサードにもみられるものであった。

主要施設の一覧を表 2-2-1に示したが、以下主要陳列館の外観の特徴を中心に紹介しよう。

会場主要部にあたる林業及び鉱業館、水産館、参考館の３館は、水産館を中心に半円形を描き、陳列室の前面回廊は、前後２列の列柱を並べ、ほとんど装飾のないエンタブラチュアを載せている。屋根は片流れ、正

面からはコーニスに隠されている。水産館中央部は、球状の大ドームを載せ、前面は四分の一球の断面をみせる半円アーチで、大きなテルメ窓の意匠をみせる。半円アーチ左右の塔や大ドーム頂部には壷状の置物を載せている。

園芸館と土木交通館は、中庭をはさんで対称に配置され、同じデザインでまとめられた。屋根は片流れであるが、正面からはパラペットで隠され、外観は水平、垂直線でソリッドに構成されている。入口廻りに幾何学模様の装飾を施し、左右に「園芸」あるいは「土木交通」の装飾的なレタリング看板を掲げている。中央入口上部にエジプト風の羽飾りを掲げ、園芸館では鍬と鋤、土木交通館はスコップを交差した飾りを付加し、入口上部陸屋根の徳利状飾りとともに目を引いた。

機械館は、土木交通館の北西側に並ぶ建物で、馬蹄形の端部にあたる。パラペットに隠れて外観からはわからないが、屋根中央に向かって逆勾配の屋根で、中央にトップライトを設けた。入口の配色を変えた円形意匠、コーニス部の縄状模様などが正面を飾る。入口には、「リベット、ボイラー、スチームゲージ」[16]の装飾が施されていた。

第２参考館は、参考館の南西に並び、全体に控えめな建物であるが、正面入口部のみ水平コーニスを楣形に反らせ、上に成の低い三角ペディメントを載せる。

拓殖教育衛生館(図2-2-7) は閉会後の利用を目的に建設された。設計は家田技師、木造鉄網モルタル塗り２階建て「近世式ルネサンス」[17]様式の建物である。基礎はコンクリートで、建坪 250坪、間口25間、奥行10間、軒高32尺[18]。正面入口左右に高さ50尺[18]の角塔を配し、両塔を装飾付き楣型アーチで結ぶ。この楣形は、寄棟屋根のドーマー窓の形式にも採用されている。

外壁はモルタル上を白色の漆喰で上塗りし[18]、片蓋柱と窓を交互に配し、窓枠外側を細く窪ませさらに「鼠色」[18]で着色してアクセントを付けた。角塔や片蓋柱上にセセッション風の装飾も付加した。屋根は「浅野スレート」[18]で葺き、入口の石段は「八垂別産札幌硬石」[18]を使用した。

２本の角塔内は、「電話室、看守控室、物置」[18]などにあて、１階は拓殖館、２階左半分は教育館、残りを衛生館として使用した[18]。

農業本館は、前述のように1906年の元物産陳列場建物を修繕して使用したもので、木造下見板張り。２階建ての中央棟と左右平屋の翼棟を平家の主棟が結んでいる。主棟は切妻、中央棟、翼棟はマンサード屋根とし、中央棟正面に吹き放しのポーチを突出させ、屋根にパラディアンモティーフの盲窓、１、２階に３連アーチの開口をみせる。

農業本館の西前方、第３軸の大通路から中庭に出る角にある農業別館は、長方形平面に馬蹄形に沿って僅かに突出しをもつＬ型平面の平家。正面中央の入口左右に方形の屋根をのせた角塔を立て、左右の入口には

15：小樽新聞「道博会場めぐり」(1918.4.30)

16：小樽新聞「開道博の大設備」(1917.2.27)

17：小樽新聞「永久的の建物たる教育衛生拓殖館」(1918.6.17)

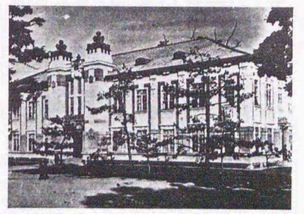


図2-2-7　拓殖教育衛生館(『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』)

千木をのせた急勾配の切妻小屋根をかけている。外壁上部パネルや塔の上部には縄編み模様や波形の装飾を施している。

農業本館の軸上正面の奏楽堂は、八角形の周囲に双柱を廻らした吹き放しの建物である。中央にドームをのせ、腰部に円形に欄干を廻らしたバロック風の建物であった。

奏楽堂前方の中島にある迎賓館は建坪約60坪、内部は玄関（2坪）、広間(8坪)、食堂(15坪)、婦人室(6坪)、化粧室(2坪)、厨房(6坪)、露台(9坪)、手洗場(1.5坪)、便所(2.5坪)、下足場(1坪)、廊下(5坪）外にプラットホーム(2.5坪）を張出し[19]、ボートの乗り降りに供した。迎賓館には、名誉橋と命名された白塗の木橋が架けられた[20]。

ほかに24棟の特設館(表2-2-2)、11棟の休憩所や4基の広告塔、掲示場(表2-2-3）、演芸館などが併設された。自費建築の特設館の中には、新潟県特設館のように博覧会工務課に設計を委嘱する[21]ものもあった。同様に協賛会主催の「模範的劇場スタイル」を目指した演芸館も博覧会工務課設計[22]、請負は売店と共に藪越組[23]であった。

第２会場の工業館は、閉会後北海道物産陳列場としての使用を目的に建てたもので、木造モルタル塗２階建ての建物である。建物の隅をがっしりした角柱で押さえ、正面中央入口の上部には櫛形アーチを載せ、その上を石目地を見せるブロークンペディメントとする。外壁は、１階を石積み風に、２階は平滑に仕上げ、１階窓は半円アーチ、２階はキーストーン付き縦長窓としている。

第３会場の水族館は、第１会場の水産館正面のテルメ窓風の意匠を踏襲し、入口左右に角付け柱をみせ、柱間には水中を描いた壁画をあしらっていた。建坪約72坪、機械室と入口出品陳列室を除いたものが主体で、長さ12間、幅３間、12間の片側に水槽を12個並べる。本館左右の両翼各12.5坪部分は淡水水族用で、陳列台に大型や小型の水槽を並べた[24]。ほかに小樽区協賛会の施設として、東京趣味工業会社設計の次のようなものがあった[25]。

接待所及案内所1棟(5×3.5間)、便所2棟、歓迎門1基(幅10間、高さ24尺)、板塀(50間、高さ6尺)、橋梁一式(32尺、長さ115尺)、事務所１棟(3×4間)、宝袋売渡場1棟(3.5×4間)、広告応用電灯柱、鯨胎内めぐり(長さ15間、幅4間、高さ3間)

19：小樽新聞「開道記念博覧会彙報」(1917.7.23)
20：小樽新聞「開道博の大設備」(1917.2.27)
21：小樽新聞「開道記念博覧會◇其内容と施設(四)」(1918.1.25)
22：小樽新聞「博覧会彙報」(1917.4.8)
23：小樽新聞「博覧会の案内記(上)」(1918.6.2)

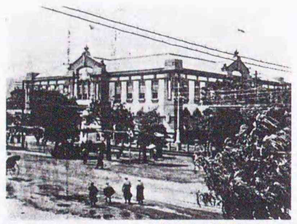


図2-2-8　第二会場工業館(『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』)

24：小樽新聞「水族館の内容」(1918.6.15、6.16)
25：小樽新聞「道博小樽協賛会」(1918.5.23)

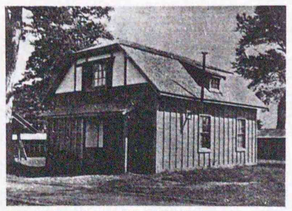


図2-2-9　農家住宅模範家屋
(『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』)

農家住宅模範家屋

この博覧会では、華やかなパビリオンに交じり、御園化粧品、浅野スレート株式会社など趣向をこらした特設館も建てられたが、中でも北海道庁土木部建築課出品「農家住宅模範家屋」(図2-2-9)が興味深い。

現在の護国神社に近い位置に建てられた小規模な特設館で、前年1917年、北海道農友会懸賞募集の当選案を参考に、北海道庁建築課が設計したものである。元札幌地方裁判所書記斎藤仙悟の遺言による 1,000円の寄付提供によって建築された[26]。

木造２階建て、腰折れ柾葺屋根の住宅で、建坪22坪(72.6㎡)。外壁は、押縁竪羽目板張り、一部２階妻壁に漆喰壁を見せていた。窓は、１階上げ下げ、２階引違いガラス窓、内部に障子をはめた２重窓として屋根裏部屋採光用に屋根窓も備えていた。

屋根裏２階は寝室と養蚕室の８畳２室で構成され、１階は、家族居間、台所、食堂、客間などのほか、屋外作業時の便を考慮して、作業服、わらじ履きのまま食事が出来るよう土間に椅子、テーブが採用されていた。防寒に対する配慮として、ロシア式ペチカの採用、２重張りで中間に木挽きくずを詰めた床のほか、床高を大きくとって空気の流通をよくする衛生的配慮もなされていた。

内部には、模範家屋の建築材料の内訳、建築費のほか、オンドルやペチカの模型も展示されていた[26]。

さて前記の懸賞募集は、1917(大正6)年北海道農友会機関紙[27]『北海之農友』第９巻第３号に「五町歩農業経営法懸賞募集」と共に２大懸賞「農家家屋設計懸賞募集」として発表されたものである。

「本道農家の住宅は、風土気候の関係上、並に衛生及経済上は勿論、一家団欒休養の場所として、其缺陥甚だ少なからずを以て、本會は一家の上より、将又(はたまた)本道拓殖の上より、忽緒(こっしょ)に附すべからざるものあるを認め……本道農家の幸福増進を期待せんが為め」「農家改造の急務を認め」てのコンペである。

募集要項として、

①本道５町歩経営程度の普通農家に適合したもので、衛生防寒及び作業上最も都合良く、且つ建築材料を節約して経済的であること。
②家族数５、６人。
③設計対象は、甲乙の２種とし、平面図及び設計大要を記すこと。乙は、移住後土地を成墾して掘立小屋から改築する程度のものとし、甲は、乙に比べ生活水準が向上し建築費もやや高く、移住後およそ20年前後経過したものを想定。
④審査は、北海道庁に委嘱し、賞金は、１等100円、２等40円、３等15円、４等５円。
⑤道庁は、優秀案に則り、もしくは意匠を参酌して模型を製作し、開道五十年記念博覧会に出展の予定。
⑥締切は大正６年６月30日。

などが列記された。

さらに、このコンペに道庁が賛同したこともあって、当時の道庁長官俵孫一が「農家模範家屋の設計に對する所感」を『北海之農友』第９巻第４号(1917年)に寄せている点も見逃せない。

「本道のような寒気凛烈な地では、家屋構造について防寒衛生上講究を要することは勿論であるが、本道向きの家屋が生まれないのは、構造研究上の欠如が原因であるためで、本道に適した農家家屋の考究は急務

26：小樽新聞「水族館裏に建てられた本道の模範農家」(1918.8.8)、小樽新聞「道博彙報」(1918.8.10)、遠藤明久「北の事典―続・北海道住宅五十話」(北海道新聞、1978.2.2)

27：1909年設立。農事の改良発達を図ることを目的に結成された団体。月刊機関紙『北海之農友』を発行のほか、数冊の農業書籍も刊行した。

である。今考案すればただちに理想的なものが出来うるものではないが、研究を重ねれば、何時かは理想的な設計ができあがると思われる。北海道人は暖かい府県の家屋になれた移住民であるから、直ちに本道向けの家屋が考案出来ないのは無理もないが、たとえば満州朝鮮で使われているオンドルの構造を北海道的に変更するような案も期待したい。」など、かなり具体的に住宅問題に触れ、またオンドルの導入を唱えている。

俵長官は、1915(大正4)年8月から1919年4月まで在勤したが、1906(明治39)年11月から1912年3月まで朝鮮統監府および総督府に勤務しており[28]、韓国勤務の体験をふまえての発言であったが、わざわざ朝鮮オンドル家屋の構造模型を取り寄せるなど、オンドル導入には並々ならぬ意気込みが感じられる。

28：遠藤明久『北の事典―続・北海道住宅五十話』(北海道新聞、1978.2.2)

この懸賞設計の結果は、『北海之農友』第10巻第４号(1918年)に発表された。応募総数は134件にのぼったが、「何れも低級にして、直に取りて以て模範とすべき程度のものあるを認めず」、４件を比較的優良なるものとして採択したものの、すべて４等賞とした。しかし、これらも直ちに模範とするには足らず、「何れも現在農家の實況を熟知せざるものゝ如く、従って改良上其意見設計等の見るべきものなく、むしろ都市住宅に類するもの多きを認むるは遺憾とする所なり。……また建築設計に関する知識、幼稚なるに起因せるものと認めたり」と、手厳しい審査評である。

審査員は、勧業課技師山田勝伴、同石澤達夫、衛生課警部一色則之、同小松悟楼、建築課技師家田於菟之助、同技手橘高茂一郎ら６名である。審査員が期待した点として、

①建坪は甲種30坪内外、乙種20坪内外。
②３室以上とし、寝室を設けること。
③屋根裏利用のこと。
④出来るかぎり小屋構造を簡単にする。
⑤現況農家の改良すべき次の事項に留意すること。
(イ)南側を利用し、採光を十分とること。(ロ)周囲の壁は土壁又は板張とし、下張にボール紙や「タールペーパー」を用い、天井張をして、防寒構造とすること。(ハ)換気方法を適当にすること。(ニ)現在の住宅にみられる縁側などを設けることによる面積増大や利用不便な間取りを改善のこと。(ホ)住宅と作業場を区別すること。(ヘ)土間を縮小すること。(ト)薪炭の経済衛生上、焚火を廃し、ストーブ又はペチカを設備し、煙筒は永久的設備とする。(チ)建具はなるべく普通障子を廃し、板戸、硝子戸、腰高障子を用いる。(リ)やむを得ない室以外は畳を廃し、板張り、敷物を使用すること。(ヌ)畜舎、倉庫、作業場等は、勝手口から廊下で接続する。

以上の要件を考慮して応募案を甲乙丙丁の４種、すなわち甲乙丙は再考の余地のあるもの、丁は全然なきものとして分類した結果、甲なし(0%)、乙28件、丙25件あわせて53件(39.6%)、丁81件(60.4%)となった。1917(大正６)年９月から翌年２月まで数回審査会を開催し、53件に対して審査を重ねた結果、甲は葛西友幸(旭川区第三区7番地4号)、佐藤信雄(札幌区苗穂町5番地)、乙は長谷末次（夕張郡登川町第三区)、中村寅吉(札幌区)の4件が選ばれた。

いずれも在来の農家住宅に比べて格別見るべきものがあるわけではないが、凍害や暖房まで意識して基礎にまで言及しているのは、『北海之農友』第10巻第４号(1918年)に掲載されている香西案だけである。掲載の要旨によれば、寒地住宅故に「庇、下屋等を以て圍繞し、直接居室等に外氣の浸入するを遮り」、農家住宅である故「台所、炊事場、庭等を比較的容積を大」きくし、屋根裏２階には雇人室、物置、作業場をとって、「冬季間農家の副業」に備えていること、また降雪耐寒を考慮し、凍害(シガモリ)(ママ)の猛烈な状況に対し、次の点をあげている。

①基礎は柱下を鉄筋コンクリート杭打ちとし、布石を配列、切込砂利を入れて地形の凍害を予防すること。
②壁は、外部大壁塗り内部真壁とし、何れも漆喰壁(外部セメント入)仕上げとし、外部腰部は積雪の関係上、簀子下見板張りとする。
③屋根は独逸式小屋組に倣い、鉄板葺葺きペンキ塗仕上げ。
④床板張り、畳下は「フェルト」類敷込み、板床は２重張り。
⑤座敷及び居室は竿縁天井とし、天井上は厚２寸、防寒土塗天井とする。
⑥暖房装置として、台所は炉、居室は暖炉とする。

こうした応募案の設計要旨と審査員側の理想要件を受け、北海道庁建築課が新たに設計し直したものが、このモデルハウスであった。

2-3　国産振興博覧会

国産振興博覧会は、北海道における有力紙の一つであった北海タイムス社（後の北海道新聞社)創立25年を記念する事業として、1926(大正15)年に開催されたものであるが、総裁に北海道庁長官を擁し、広く道庁や札幌市、北海道商業会議所聯合会などの協力のもとで、官民一体となって開催されたものであった。会場も、開道五十年記念北海道博覧会（1918年)と同じ、第1会場札幌市中島公園、第２会場札幌市北１条西４丁目北海道商品陳列所（旧工業館）に定めたが、開道五十年記念博覧会の施設規模を100余坪も上回る博覧会となった。

以下『国産振興博覧會誌』(1927年、北海道大学北方資料室所蔵)および当時の『北海タイムス』紙を参考に、概要にふれる。



図2-3-1　国産振興博覧会ポスター
(『国産振興博覧會誌』)

博覧会の意図と開催経過

国産振興博覧会は上述のように、北海タイムス社創立25年の記念事業の１つとして、1926年８月１日から30日まで開催された。

29：1927年から20ヵ年の計画期間を持ち、昭和恐慌期から太平洋戦争後の1946年まで続く長期大型拓殖計画。背景には大正末期の米騒動や植民地米の流入という食糧問題と、慢性不況下の失業、農村の過剰人口の滞留という人口問題などの解決を北海道に担わせようというねらいがあった。（北海道大百科事典）

30：『国産振興博覧會誌』(1927.12.20) p.2

31：1870(明治３)年福井県阪井郡春江村千部寺生まれ。1881(明治14)年土佐国高知で大工職徒弟、1888(明治21)年小樽加藤忠五郎の雇人となる。1904(明治37)年大虎建築部札幌出張店主任となる。1907年大虎支店名義で独立。札幌農科大学科学科教室、札幌市役所、北海道拓殖銀行旭川、樺太支店、札幌丸井今井、札幌北門銀行、王子製紙社宅、帯広日甜工場、日赤旭川病院のほか、札幌市内の代表的邸宅をてがけた。1925年北海道土木建築請負業連合会組合長ほか、札幌商工会議所議員、札幌区会議員、自衛消防隊連合会長、札幌実業組合連合会長などの公職を務め、1945年没。（北海道建設新聞社編『風雪の百年』1970年、『北海道人名辞書』1923年などによる）

当時は、第１次大戦後の不況と1923年の関東大震災後の全国的な後遺症がまだ回復していない状況であり、国内産業の開発振興を図り、財界の回復と国運の隆盛を願うことが当面の課題とされていた。また、人口や食料問題解決の上から、国内の拓地殖民、天然資源の利用を図ることも急務とされており、北海道はその解決のための根拠地として注目される位置にあった。折しも、北海道第２期拓殖計画[29]確立のために調査研究が開始された時期とも一致し、本道の生産物を陳列することで広く北海道の実情を紹介し、全国各地の生産品を紹介することで、「北日本文化の顯揚と産業の振興とに貢献する所多」[30]く、国産振興の一助となることを確信して開催されたものである。

計画は1926年３月から着手され、同月12日会場敷地や諸規定の起案づくりを開始、19日北海タイムス紙上に博覧会開催計画が発表され、さらに４月７日には市内東京庵にて博覧会計画披露会、同月10日東京丸の内鉄道協会にて国産博覧会披露会、同23日市内旗亭いずみにて奥羽地方商業会議所代表者招待会が催された。19日の紙上発表以降約６ヵ月の間、社告や記事によって新聞宣伝が 200回にわたってなされ、さらにポスター（図2-3-1）、宣伝ビラ、広告板、電車広告、自動車、飛行機を動員しての宣伝がくりひろげられた。

使われた装飾自動車５台は、車体に「北海タイムス社主催國産振興博覧會」と大書した装飾布を付け、７月25日札幌市内を、27、29日には小樽市で宣伝し、博覧会気分を高揚させた。飛行機は、社機サルムソン式二Ａ二型第2号機(230馬力、のち北斗号と命名)を使い、会期中８月20日から会場および札幌市上空、小樽、旭川市および沿道各町村に宣伝ビラの散布を行った。また東京朝日新聞社の訪欧飛行に使われた「東風」機も８月５日立川から札幌へ無着陸飛行を果たし、その後22日に離道するまでほぼ連日のように札幌、小樽、旭川同付近町村を訪問飛行し、宣伝ビラの散布に協力した。

博覧会事務所は開催計画発表の３月19日、ひとまず北海タイムス社内に開設し、６月１日中島公園内事務所に移転した。総裁には北海道庁長官中川健蔵、副総裁北海道庁内務部長百濟文輔、会長北海タイムス社長東武、副会長本社理事阿部良夫、本社監事持田謹也らが名を連ねた。

６月29日には、札幌市および札幌商業会議所が事業の協賛、協力を目的に札幌市協賛会を組織し、事務所を札幌商業会議所内に置いた。会長は札幌市長高岡直吉、副会長札幌商業会議所会頭大瀧甚太郎が務め、庶務係、接待係、設営係、経理係の4係で組織された。札幌駅前歓迎門(図2-3-2)や市街の装飾、休憩所設備などを担当した設営係は、係長商業会議所議員新開新太郎[31]を筆頭に、副係長札幌市土木課長津田美之助ほか、市会議員、商業会議所議員ら15名で構成された。

施設のいくつかは５月下旬からすでに着工され、６月８日に地鎮祭を



図2-3-2　札幌駅前歓迎門
（『国産振興博覧會誌』）

挙げ、７月末日に竣工、８月１日の開会式を迎えた。

開会式から30日の閉会式まで、会期中第1会場377,589人、第2会場135,462人、計513,051人の入場者を数え、「予想以上の成功を収め」（博覧會誌）ることができた。９月11日事務局を北海タイムス社内に移し残務整理を行う一方、同月７日には第１府県館(後述)、参考館(後述)その他の建物の一般払下げ入札が行なわれ、特設館その他施設の取壊しは同月中旬に完了、公園内の道路、樹木等の原状復旧も終了した。

主要施設の設計と工事経過

博覧会事務局は、庶務部(4)、編纂部(5)、出品部(9、ほかに嘱託委員11)、経理部(5)、装飾部(11)、営繕部(3)、宣伝部(11)、接待部(9)、余興部(6)、警備部(2)の10部が事務規定で組織され、ほかに参与の河野常吉を主任とする歴史部(5)があった。

(　)内は、部長を含めた職員数であるが、会場や施設工事を担当すべき営繕部の職員数が３名と少く、しかも部長以外の２名は、経理部と兼務である。当初計画では、２会場とも既設建物である拓殖館、農業館、元式場や北海道商品陳列所を利用し、新築は歴史館、余興場などにとどめ、ほかは公私特設館を受け入れる規模で考えていたからと考えられるが、当初から博覧会参与を務める北海道庁建築課長福岡五一ほか道庁建築課スタッフに依存する予定であったのかもしれない。　公務の余暇をさいて、３ヵ月内外という短期間で設計、工事監督をこなしたのは、1922年７月土木部建築課長に就任した福岡以下、萩原惇正技師[32]、技手佐藤信雄、雇技術員内田寛ら[33]である。施工は伊藤組が中心に請け負った。

32：1892(明治25)年静岡県小笠原郡横須賀生まれ。1911(明治44)年関西商工学校建築学科卒業、同年河合建築事務所入所、翌年同所依頼解雇後、宇治川電気㈱、日本石油㈱建築工事、大阪税関、官舎新築工事、神戸高等商船学校などの設計監督の嘱託を経て、1923年８月北海道庁土木部建築課に勤務、1927年８月北海道帝国大学営繕課長となる。

33：『大正15年北海道庁職員録』によれば、建築課雇技術員は、大場善太、浅田年、速水マメ、畑山英一、枝元秀男、内田寛、建築技師萩原惇正、建築書記高野守衛、小泉鐵馬、建築技手小島硯次郎、柏木米藏、佐藤信雄、日田三二、渡邊音治郎、橘高茂一郎、永野美光、柿崎信愛、岩佐右門、館雄二、柳澤金次郎、村田正一、十日市喜一、西村将賢、高島徳太郎、續木里次、高橋辰己、本間永作、岸本榮藏、阿部謙太郎らの名がみられる。

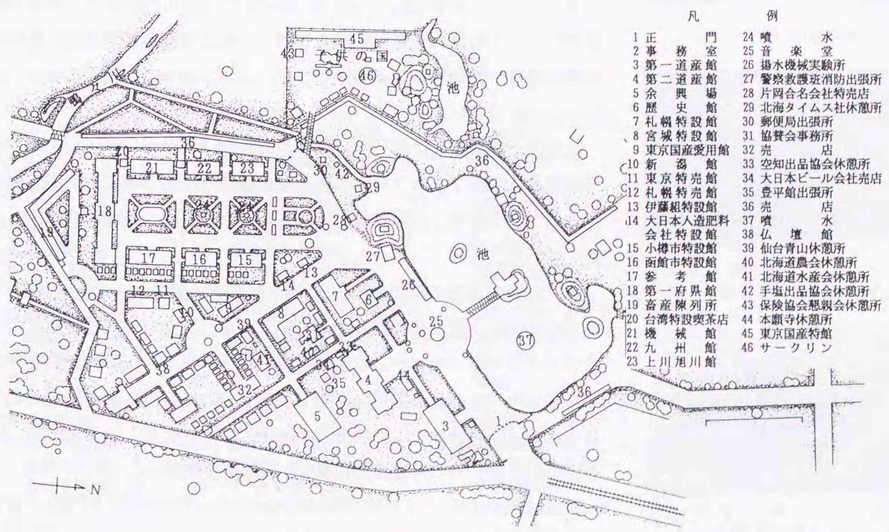


図2-3-3　国産振興博覧会第一会場配置図（『国産振興博覧會誌』掲載配置図に加筆）

34：貸付期間1926年7月15日～9月10日
35：貸付期間1926年6月1日～9月30日
36：貸付期間1926年5月1日～9月15日
37：土地建物とも貸付期間1926年6月1日～9月30日



図2-3-4　第一府県館
（『国産振興博覧會誌』）



図2-3-5　機械館（同上）



図2-3-6　参考館（同上）



図2-3-7　歴史館（同上）



図2-3-8　旭川上川館（同上）

会場と主要施設の概要

会場は、開道五十年記念博覧会の敷地であり、また利用しうる既存建物がある中島公園および北海道商品陳列所が候補地とされ、公園[34]および付属拓殖館[34]および林業館[35]については1926年２月24日付、同拓殖館事務所[36]については同年４月８日付で北海道庁長官宛に、中島公園の土地および元農業館、八角堂、元式場建物[37]については３月18日付で札幌市長宛に使用願が提出された。また「子供の国」用に公園隣接の岡田花園から敷地2,000坪を借り受けた。

既存建物のうち、第２会場の北海道商品陳列所は第二府県館に、拓殖館は第一道産館、農業館は第二道産館、元式場は一部改造の上演芸館にあてられた。北海道商品陳列所は、開道五十年記念博で工業館として建築されたもの、拓殖館は同博覧会で拓殖教育衛生館として建築されたもので、いずれも将来の使用を前提に建設されていたものであった。農業館は、1906（明治39）年の北海道物産共進会の際に第壱館として建設され、開道五十年記念博で農業本館として利用されたもの、元式場も物産共進会第弐館を修理したものであった。

したがって新築された施設は、第一府県館、機械館、参考館、畜産館、歴史館、演芸館のほか、特設館として、札幌館、小樽館、函館館、旭川上川館、九州館、宮城県館、新潟県館、札幌聯合館など38棟（表2-3-1）、休憩所12ヵ所、広告塔20ヵ所などであり、第一府県館など主要施設は「出来得るだけ拓けゆく北海道をシンボライズする」「瀟洒な」（福岡五一）ものとされた。

電車停公線（札幌駅前－中島公園）の終点に面し、公園の北東端に位置する幅24間奥行1間、「木骨漆喰」軒高20尺の正門からの主要路は、池沿いまっすぐに「子供の国」入口跨渡橋脇の裏門（幅15尺奥行6尺、木骨漆喰、軒高20尺）と結ばれ、左手手前から第一、第二道産館、歴史館、札幌特設館が並び、南奥端に第一府県館を中心に大広場を囲むように会場主要部が形成されていた。

広場の大花壇正面に第一府県館、左右に同一ファサードの機械館、参考館を配してシンメトリーを意識した主要部は、右手機械館に続き九州館、旭川上川館を、左手参考館に続き函館市特設館、小樽市特設館を配置していた。

第一府県館（図2-3-4）は、間口49間奥行７間、両袖84.6坪、合計427.6坪「木骨漆喰、屋根便利瓦」の大建築である。正面中央部には段状の持送りとピラスターを付け、左右の袖廊ではピラスター上部に装飾的なアーキトレーブをみせる単純な形態であるものの、ピラスターには星をあしらった装飾模様が、中央部の段状屋根には「ダイヤモンド電燈飾」を、さらに高さ31.5尺の塔屋頂部には「北斗星装飾」を飾っていた。

機械館（図2-3-5）および参考館（図2-3-6）は、間口20間奥行7間、「木骨漆喰、屋根便利瓦」、軒高22尺の同一意匠の建築で、「近世式」を意識しながらも、開口部やスパンドレル、胴や軒コーニスなど、かなり自在に装飾的に扱っている。「工場風に堕せぬやう工夫」（福岡）した結果であろう。

北海道の拓殖を考えるには過去の北海道も知らねばならないという見地から開設された歴史館（図2-3-7）は、小さいながらひときわ目を引いた。千木や破風木舞をつけた柾葺きの神社風の屋根と、校倉風の胴部をアレンジした混合様式で、間口10間奥行５間、「木骨板張ペンキ塗り及漆喰」、軒高17.8尺の建築であった。

白亜の札幌館や「分離派風クリーム色漆喰壁」の小樽館など、特設館の意匠は様々な工夫がみられたが、会場主要部の左翼を締める旭川上川館（図2-3-8）は、旭川市技手倉辻吉次郎[38]の設計、同市請負業鶴間礼三[39]の施工で建設され、「モダーン式のクリーム色漆喰塗」のパビリオンであった。隅角部玄関を高さ60尺の高塔および15尺の国旗柱で強調し、側面30尺の高さから滝を落とし、夜間には５色の投光が施すなどの演出もあって異彩を放った。こうした演出は内部展示にも発揮され、陳列場中央に設けられた「百万石上川米」の「米の瀧」は、電気式エレベーターで滝の米を落下させ、岩石や森林も雑穀やでん粉その他農作物が使用されたという。

会場には、建築家田上義也設計の野外ステージも設けられた。会場配置図では確認出来ず、資料もないので詳細は不明であるが、帰欧したばかりの舞踏家石井漠[40]一行が昼夜５日間（8月23日～27日）にわたり上演し好評を博したという。

38：1986（明治29）年大阪府河内郡河内村生まれ。大阪市立大江尋常小学校、市立西区第四高等小学校卒業（1910年）後、1911（明治44）年大阪市立大阪工業学校建築科入学。1915（大正４）年同科卒業後満州に渡り建築活動に従事。1919年一時帰国後、1921年再度満州に渡り、翌22年自営。1924年８月から1928年10月まで旭川市技手として勤務した。

39：1877（明治10）年新潟県猿橋村字中曽根生まれ。1898（明治31）年来道し、旭川福田倉吉、酒井治三郎のもとで修業し、1918年独立。旭川土木建築請負業組合長（1925～1945年）、旭川商工会議所会頭などを務め、1945年4月死去。（北海道建設新聞社編『風雪の百年』1970年）

40：1890～1962年。本名石井忠純。1911（明治44）年創設の帝国劇所歌劇部の第１期生。音楽をユンケル、ヴェルクマイスター、三浦環に、洋舞をローシーに学び、帝劇上演のオペラに出演、芸名を石井林郎といった。1915年独立、1917年浅草オペラの旗あげ公演後、1922年渡欧し４年間滞欧。帰国後、1928年石井漠舞踏研究所を創設。国産振興博覧会公演はこの翌年である。来札の一行は、石井漠、石井小波、石井欣子、石井菊子、崔承喜、松山峯子、石井八重子（舞踏解説）、松浦旅人（同）、石井五郎（ピアニスト）、石井博志（舞台係）。

表2-3-1　国産振興博覧会特設館

名　称	坪数	建設者	名　称	坪数	建設者
札幌館	156	札幌実業組合連合会	トバタ館	12	同 磯々商店札幌支店
小樽館	135	小樽出品協会	発動機揚水ポンプ	9	札幌市 札幌農興商会
函館館	133	函館出品協会	稲扱器藁取器	9	同 玉木子三郎
旭川上川館	118	旭川上川協賛会	発動機揚水ポンプ	4	同 福田重助
九州館	121	九州人会	同	5	同 川北電気企札幌支社
宮城県特設館	73	宮城県出品協会	機械館	12	同 今田福馬
新潟県特設館	68	新潟県出品協会	発動機揚水ポンプ	15	同 興農園
札幌特設館	118	札幌各商店連合代表高橋達一	仏壇館	28	札幌仏壇商代表奥山柳造
ライオン機械館	20	愛知県岡崎市柴田鉄工所	発動機揚水ポンプ	4	同 山田商会
新農館	24	山形市農蠶土壌肥料研究会	護岸工事模型	27	東京市 川崎工場
国産愛用館	40	東京市 眞子重三郎	パイプハウス	3	同 啓正社
国産館	60	同	籾剥機	6	同 岩田継清
同 付属機械館	28	同	大日本人造肥料特設館	20	大日本人造肥料株式会社
東京特売館	76	同	機械館	4	札幌市 本多商店札幌支店
同第二特売館	30	同	発動機館	8	同 齋藤栄吉
伊藤組特設館	20	札幌市 伊藤亀太郎	種物農用薬品館	4	同 尾崎哲之助
日の丸商会特設館	20	同 松本菊次郎	農具機械館	15	同 ヤマト種苗農具株式会社
本庄会館	12	同 内野太郎	発動機揚水ポンプ	12	同 内野太郎
鑿岩機	10	同 中山商店	畜力発動機館	9	大阪市 香西鐵太郎

2-4　国産振興北海道拓殖博覧会



図2-4-1　国産振興北海道拓殖博覧会ポスター(『国産振興北海道拓殖博覧會誌』)

本節では1931(昭和６)年北海道拓殖博覧会の概要を述べるが、第３会場として開催された小樽海港博覧会は、当初から小樽独自開催の予定であり、主催団体や設計主体も異なるため独立してとりあげた。資料として1932年発行『国産振興北海道拓殖博覧會誌』を使用している。

北海道庁、札幌市、札幌商工会議所主催の国産振興北海道拓殖博覧会は、「優良国産品の愛用奨励」「本道産業の発達及拓殖の進展を図り因って以て経済難局打開の一方途たらしめる」[41]ことを目的に、第１会場中島公園、第２会場北海道物産館(北２西４)で開催された。1931年４月23日地鎮祭、６月８日上棟式をあげ、７月12日開会式を迎え[42]、会期は８月20日までの40日間であった。

第１会場の概況

入場者数延べ 650,081名を数えた第1会場(図2-4-2)は、開道50年記念博覧会と同じ中島公園とされた。68,000坪の敷地に大小 160棟、総坪数6,540坪の建物が設営され、既設の４棟800坪の建物も利用された。図2-4-3は、配置の概略図である。

主要施設として、260坪の中央府県館(図2-4-4)と間口60間奥行8間480坪の東西両府県館、中央府県館南側の機械館、池に張出した迎賓館、アールデコ様式ともいえる演芸館(280坪)などがあげられる。いずれも「色漆喰の極めて瀟洒」[43]なものであった。

迎賓館は、間口８間奥行７間の平家で、ほとんど会場中央にあり、東北側に池水を眺めるテラスを張出し、食堂、婦人室の接待室２室を設け、他に厨房、化粧場を備えていた。

場内東南端に建築された演芸館（図2-4-5)は、総延坪276.95坪２階建て、椅子席定員650名の「近代建築の粋を蒐めたモダンな建築」[44]であった。

正門近くの北海道館は既存建物を利用し、第一は拓殖館、第二は農業館および元式場の建物に「鮮烈な化粧塗を施した」[45]ものであった。

府県館前には100尺の飾り塔が、北海道館前に110尺に達する高塔が設けられた。東西、中央府県館と府県特設館に三方を囲まれた巾24間、奥行 100間余りの広場には花壇がしつらえられ、池中に65尺の大噴水塔、池畔に高さ９尺の雪洞燈119本をめぐらした。

建築費は総額74,794円50銭(演芸館建築費33,961円42銭は協賛会支弁)、基本設計料（岡田信一郎)、竣工後の模様替え、倉庫料など計7,013円11銭を加算すると、総工費81,807円61銭を要した。

41：『国産振興北海道拓殖博覧會誌』(1932.8.20)
42：博覧会を機に臨時の市内大掃除も行われた。(7月6日～12日)
43：『国産振興北海道拓殖博覧會會誌』p.11
44：『国産振興北海道拓殖博覧會會誌』p.169
45：『国産振興北海道拓殖博覧會會誌』p.11

主要工事の設計

博覧会事務局は、総務課、庶務課、出品課、会計課、建築課、土木課、警備課の７課で構成され、会場主要施設は建築課が担当した。パビリオンは、「それ自体一つの出品物として、会の宣伝振作の上にも重大な役割を演ずる」から、「建築様式は会期終了まで支障なき堅牢さの程度に甘んじ、その主眼とする処は寧ろ「垢抜けのした建物」と云ふ点に譲るべき」とされた[46]。当初、札幌商工会議所の単独計画で、設計は工学士岡田信一郎に依頼、設計図は1931年２月中旬に完成提出されていた[46]。

その後、北海道庁、札幌市役所との共催に変更され、建築事務一切は道庁建築課で主管した。岡田の基本設計は、公園内の立木や地勢にあわない点もあり、建築課長福岡五一指揮のもとに、営繕技師三戸義夫、技手高岡仁三郎、田子秀二郎、佐藤信雄ら[47]が設計変更に着手した。３月２日から４月17日までの昼夜にわたる設計作業が続き、第一次に府県館、事務局の設計を終え、漸次設計の完了をまって起工した。主要施設の建築概要を、表2-4-1に示した。

表2-4-1　拓殖博覧会の主要施設

名　称	着　工	竣　工	建坪其他	建　築　概　要
中央府県館	4.22	7．5	258.000	中央間口10間奥行10間軒高37尺5寸両翼間口9間奥行8間軒高25尺3寸前面6尺毎に高さ16尺の化粧柱並列
東・西府県館	〃	〃	480.000	間口60間奥行8間軒高20尺3寸前面6尺毎に高さ16尺の化粧柱並列左端高50尺の装飾塔付
機　械　館	〃	〃	100.000	間口10間奥行10間軒高20尺中央府県館と化粧柱で連絡
事　務　局	〃	〃	168.165	間口30間奥行5間他に便所休憩所等左端に正門装飾塔2ヵ所付軒高12尺3寸
迎　賓　館	5．7	6.24	59.000	間口8間奥行7間縁側付軒高16尺6寸一部12尺
郵　便　局	〃	〃	15.250	間口5間奥行6間(菱形)軒高17尺正面装飾塔21尺
演　芸　館	5．9	7．5	延278.950	間口12間奥行18間軒高30尺前面装飾塔高61尺観覧席一部2階
音　楽　堂	5.20	7．5	30.000	間口8間半奥行5間前面32尺5寸後部12尺5寸四半球型
塔(府県館前)	〃	〃	(１基)	高さ100尺下部6間角の休憩所付
第一北海道館	〃	〃	(修繕一式)	建物内外修繕前面装飾門建設
第二北海道館	〃	〃	(修繕一式)	同上
塔(第二北海道館前)	6．3	7.11	(１基)	高さ120尺下部30尺に10尺角の化粧柱建柱高15尺
噴　水　塔	6.24	7.11	(１基)	高さ65尺下部径24尺の台付

46：『国産振興北海道拓殖博覧會誌』p.53
47：事務局名簿では、建築課長福岡五一、事務委員として、三浦嘉門、三戸義夫(営繕技師)、高野守衛(営繕書記)、齋藤熙(営繕書記)、佐藤信雄（営繕技手)、兼田健次郎、田子秀二郎(営繕技手)、佐藤貞二、佐々木五郎、内田寛、高橋利一郎、久保田金藏(技手)、三上一郎(技手)、渡辺末治(技手)、高岡治三郎(営繕技手)、佐藤満、鴇彌之助の名が並ぶ。( )内は、「昭和六年一月一日現在北海道庁職員録」に掲載されている官職である。なお鴇彌之助は、1931年５月から８月まで北海道拓殖博覧会建築現場に勤務、８月24日小樽市技手に任じられ、1934年６月４日まで在職した。

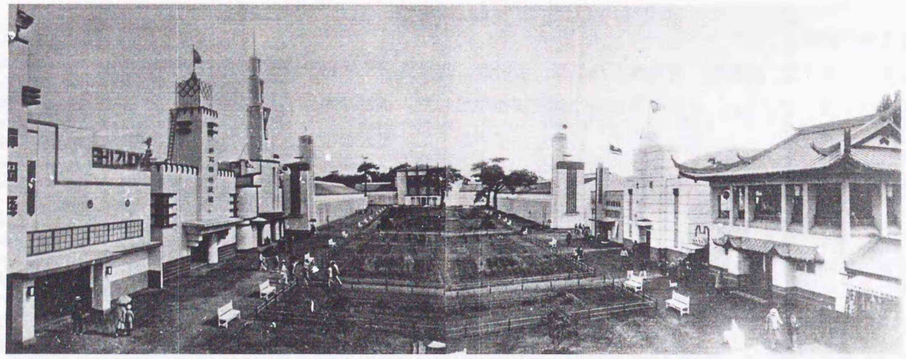


図2-4-2　国産振興北海道拓殖博覧会第一会場全景(正面中央府県館、右は西府県館に続き特設館、左は東府県館および特設館)(『国産振興北海道拓殖博覧會誌』)

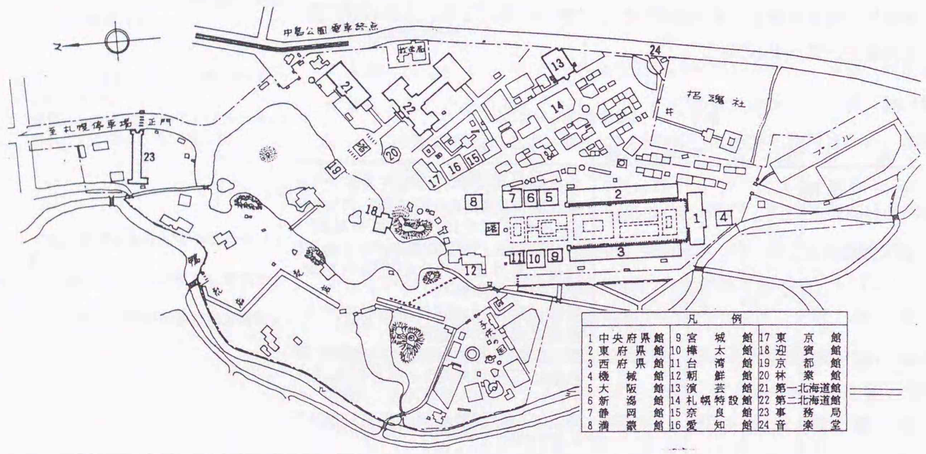


図2-4-3　国産振興北海道拓殖博覧会第一会場配置図
(『国産振興北海道拓殖博覧會誌』掲載配置図より作成)

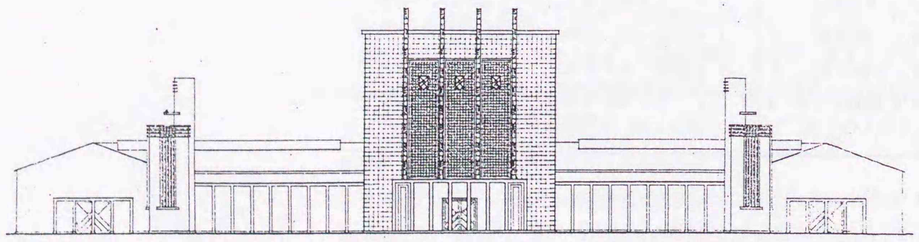


図2-4-4 中央府県館立面図(『国産振興北海道拓殖博覧會誌』)

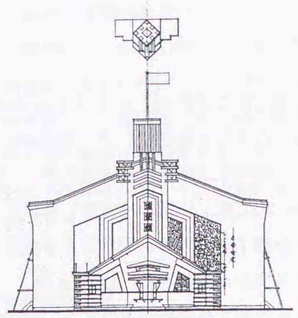


図2-4-5　演芸館正面図(同前)

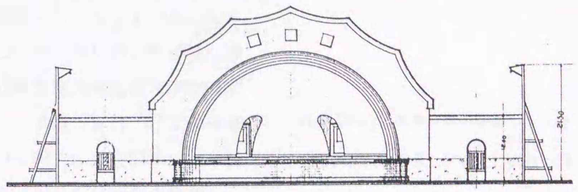


図2-4-6　音楽堂正面図(同前)

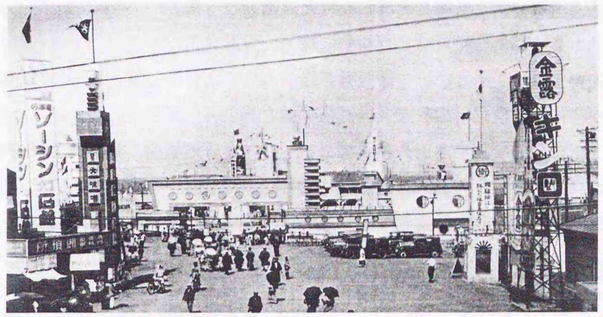


図2-5-4　小樽海港博覧会正面前広場の景(『小樽海港博覧會誌』)

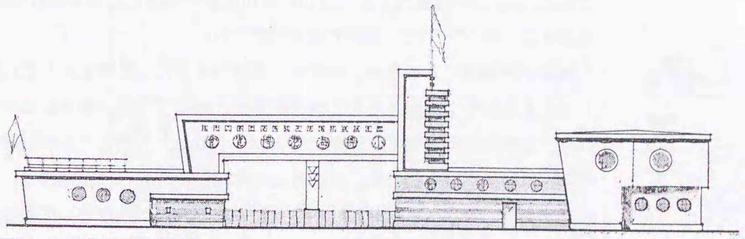


図2-5-5　正門正面図(同上)

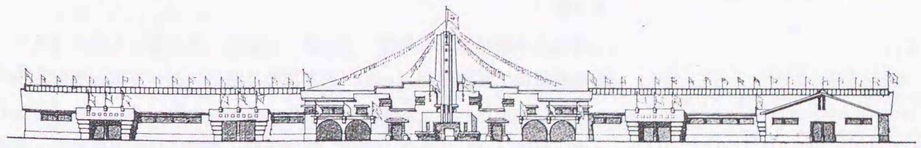


図2-5-6　水族館・海事海運館・産業貿易館正面図(同上)

2-5　小樽海港博覧会

小樽港は、1897(明治30)年の第１期工事に始まり、1921(大正10)年第２期工事竣工によって主要港湾としての地位を確立したが、1929年から第２期拓殖計画(1941年完成)が着工、港湾修築事業は継続された。この間1922年市営運河式埋立(現小樽運河)の完成、1928年市営第２期埋立工事が着工している。約３万坪の造成が終了したのは1932年８月であるが、前年1931年埋立地の一画で小樽海港博覧会が開催された(図2-5-2)。

小樽港の充実を背景に、小樽市と小樽商工会議所が主催する「海事智識ノ普及発達並ニ本道産業貿易ノ振興ヲ図ル」[48]目的の博覧会で、北海道拓殖博覧会とは独立したものであるが、対外的には「国産振興北海道拓殖博覧会第３会場」と称し札幌と連携をとった。

主要建築物の設計は３月中旬に終了、設計完了は４月下旬であった。主要工事は、４月28日の請負業者指名入札により野上善太(小樽市緑町)が落札[49]、埋立地の庭園造成は横浜植木㈱小樽代理店柴野某があたった。

工事監督を技手多田久義が担当し、５月２日地鎮祭、同27日上棟式を挙げ、７月11日開会式を迎えた。当日、小樽、南小樽両駅の前には、工営課設計の壮麗な歓迎門が設置された。会期は８月10日までの41日間、入場者は延べ474,814名を数えた。

48：『小樽海港博覧會誌』(1932.4.10) p.76

49：最高23,837円、最低14,450円であった。



図2-5-1　小樽海港博覧会ポスター
(『小樽海港博覧會誌』)



図2-5-2　小樽海港博覧会位置図

会場の位置と配置

会場敷地は、市営第２期埋立地の一画(現堺町7、8丁目および港町7丁目付近) 約6,300坪を借入れ、ほかに河川敷地 384坪と公有水面4,810坪を加えた。図2-5-3 は、会場の施設配置である。

会場正門両脇に、事務局、宿直室、郵便局を設け、広場を介して正面中央に高塔付き水族館、左右に海事海運館と産業貿易館が水平に延びていた。広場中央に音楽堂、周囲に樺太館、ソヴェート館などの特設館や、売店、無料休憩所を配した。鉄道をはさんだ余興地域へは跨線橋で結ばれ、中央橋のサッポロビール、キリンビールの 6、70尺の高い広告塔が、会場ににぎわいを添えた。余興地域には、遊覧船発着所、水上飛行機、演芸館や、軍艦マストを模した北海タイムス塔などが配置された。

工事設計

博覧会事務局は、総務課、出品課、工営課、経理課の４課で構成され、会場建設は工営課が担当した。工営課の11名のスタッフは、市の営繕課を中心に構成され、工営課課長に小樽市技師成田幸一郎、主事に書記水上泰、村田始一、技手青山寶治、田中六郎、書記に技手中村義英、遠藤吉次郎、藤原喜七、西尾豊二、技手に小樽市技手多田久義、雇長岐孝之助らの名が見られる。

課員は、「建築の様式、色彩の調和、建物の配置」の方針を定め、「昼夜兼行に設計に没頭し、３月中旬に至って略々略主要建築物の設計を終わった」[50]。成田課長は、内容の整備、外観の意匠ほかの完璧を期すため、当時開催中の浜松産業博覧会、東京化学工業博覧会、神戸海港博覧会跡水族館を視察し４月中旬帰樽、さらに補足して４月下旬設計製図を完了した。

50：『小樽海港博覧會誌』(1932.4.10) pp.103、104

主要施設概要

［正門］起工５月１日 起工６月30日 (図2-5-5)

梁間６尺桁行52尺、地盤から軒桁まで高さ30尺の門で、海事思想普及の意味を込め汽船を意識した意匠とした。陸屋根に防水工事を施し、全体を漆喰塗り仕上げ、出入り口上部に高さ９尺のパラペットをかけ、「浮出金色彫刻文字」を配列した。マストを意識した40尺の高塔には７色の「ダイヤ硝子」が嵌め込まれ、赤、青の点滅イルミネーションが付き、屋上には500ワット投光器２基が回転していた。

表2-5-1　小樽海港博覧会の主要建物

主要建物名		起　工	竣　工	坪　数
正　　門		1931年 5月 1日	6月30日	(坪)
内訳	切符売場			6.13
	警備員詰所			5.25
	新聞記者室			3.50
	事務局			43.50
	郵便局出張所			10.00
	使丁詰所			6.00
水　族　館		5月 1日	7月 8日	
内訳	本館			200.60
	宿直室			10.50
迎　賓　館		5月10日	7月10日	33.00
事　務　局		5月10日	7月10日	33.00
海事海運館		5月 5日	6月30日	255.00
第一産業貿易館		6月15日	7月 8日	245.00
第二産業貿易館		5月 3日	7月 9日	345.00
場内売店飲食店		6月15日	7月 8日	54.00
臨時警官派出所		7月 3日	7月10日	10.00
海獣遊泳池		6月20日	7月10日	18.00
便　所(２棟)		6月20日	7月10日	10.00

［水族館・迎賓館・事務局］起工５月１日(迎賓館事務局は10日)竣工７月８日(同10日)(図2-5-6)

会場の中心的施設である水族館本館は、正面中央に60尺の高塔を付けた木造平家建て。梁間９間桁行13.5間、地盤からパラペット上端まで40尺、左右に木造２階建の迎賓館、事務局を連続していた。塔を中心に左右対称の棟は、梁間5.5間桁行6間、軒高26尺、１階をトンネル通路とした。左右の通路上大壁は黄色、軒蛇腹、庇は橙色の帯状彩色を施し、中

央入り口周囲は黄色の「サイン球」イルミネーションで飾るなど軽快な意匠とした。外部漆喰塗り、内部布張り、羽目板張り、床板張り、木部の見え掛りはペンキ塗りとした。

本館の高塔正面に「水族館」の浮出彫刻文字を配し、先端に20尺の旗竿を建て、塔上部には５色の「サイン球」355個の径12尺の自動回転式風車状電飾装置が華やかさを添えた。

［海事海運館］起工５月５日 竣工６月30日（図2-5-7）

水族館左手に続く棟で、海軍逓信鉄道各省の出品、北海道庁港湾課出品本道主要５港(函館、室蘭、釧路、留萌、小樽)の模型(1:2500)や、東京、新潟、長崎各港などの模型を中心とした展示があった。

梁間10間桁行25.5間、軒高15尺、屋根柾葺クレオソート着色、４寸勾配の切妻屋根、小屋組はクインポスト丸太小屋組とし、スカイライトをつけていた。外部大壁は黄色仕上げ、腰廻りは橙色、木部はすべて赫錆色のペンキが塗られた。内部は白布張りで、出品物のディスプレーに自由度を与えていた。

［産業貿易館］第１館 起工６月15日 竣工７月８日 第２館 起工５月３日 竣工７月９日 （図2-5-7）

水族館右手に第２館、西側正門側にＬ型に第１館が連続していた。第１館には府県出品、第２館には本道出品物を展示した。第１館は梁間10間桁行24間、第２館は梁間10間桁行27間に10×7.5 間の棟がＬ字に接続していた。いずれも軒高15尺、切妻屋根にスカイライトをつけ、第２館の棟頂部には海運館同様、会旗竿を立てて博覧会ムードを高めていた。

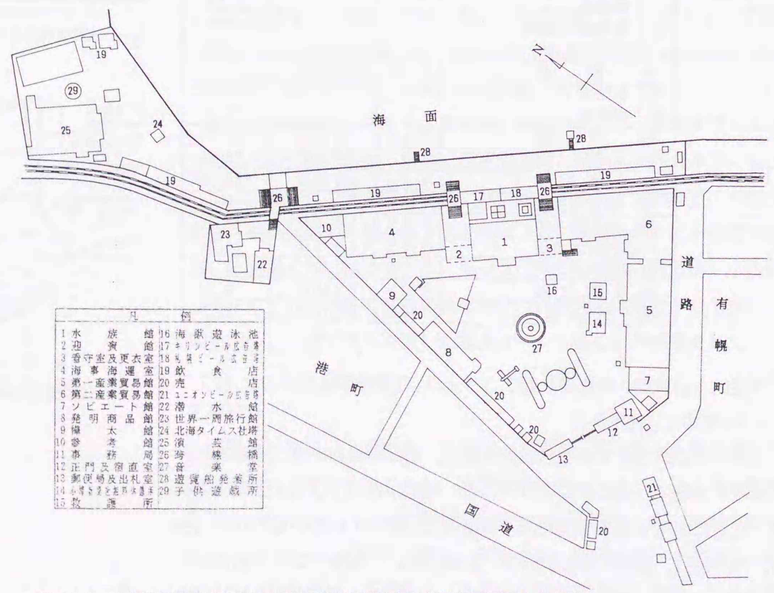


図2-5-3 小樽海港博覧会配置図(『小樽海港博覧會誌』掲載配置図より作成)

2-6 北海道大博覧会

小樽市が国際港として躍進した時期に開催した1937(昭和12)年小樽市主催北海道大博覧会は、戦前期の最後を飾る博覧会である。北海道第２期拓殖計画[51]による檜形埠頭３基中の１基の竣工を機会に、「北日本唯一の国際港小樽の覇気」と「跳進小樽の面目を強く紹介する」と共に、産業の振興と貿易の進展を促進し、開道70年の北海道の姿を広く紹介するとともに、「道民の自奮を喚起し」「健全なる本道拓殖並に産業の発達に寄与すること」を意図したもの[52]であった。同(1937)年７月には日支事変の導火線となった蘆溝橋事件が勃発し、一時中止の気運もあったが実行され、入場者数 163万5000余人という記録を作った。

博覧会は、1937年7月7日から８月25日までの50日間、小樽公園と1935年度来建設中の埠頭埋立の一部を利用した海岸会場の２ヵ所で開催された。小樽公園は市の中央部花園町にあり、繁華な花園街を控え、小樽、南小樽、色内の３駅からも近い上に、前面に石狩湾を隔てて遠く石狩手塩の連峰を望むことができ、「土地高燥眺望絶景」[52]の敷地である。天然の丘陵を巧みに利用することによって、変化に富んだ会場となり、また博覧会終了後は、公園改良の一部となる一石二鳥の意図も盛り込まれた。

海岸会場は、1931年小樽海港博覧会の開催場所と地続きの埠頭用埋立地で、単に敷地難からだけでなく、港湾を生命とする小樽市にとって小樽湾を紹介する有意義な場所であり、水族館のような海水を必要とする施設の配置や納涼を兼ねる点でも絶好の敷地であった。会場の決定と共に、1936年７月以来工営部員を動員し敷地の測定を開始したが、公園会場は起伏高低差が甚だしく平地が少ないため、計画には多大の苦心を要したという。

本博覧会は、博覧会終了後『小樽市主催　北海道大博覧會誌』が刊行される予定であったようで、小樽市立図書館に会誌の 200字詰生原稿が902頁分残されており、本稿はこの資料をもとにしている。

主要施設の設計と工事経過

博覧会事務局は、庶務部、経営部、土木部、工営部、経理部、整備部、衛生部の８部で組織され、会場主要施設は工営部が担当した。工営部は市役所営繕課を母体とし、主事成田幸一郎(営繕課課長)以下青山賓治、中村義英、野村秀平ら技手など16名[53]で構成された。

施設計画の完璧を期するために、1931年の海港博覧会も経験している成田幸一郎と技手中村義英は、1937年４、５月の２回にわたり東京、名古屋、大阪、福岡、富山の各市に博覧会および事務視察調査のために出張し、その結果を基に建物の配置、様式、色彩の調和等の方針を決定し

51：1927年から1946年までの20ヵ年計画。小樽港では、副防波堤、接岸荷役による大型埠頭の建設が計画された。

52：編纂委員川口喜八郎寄贈による『小樽市主催　北海道大博覧會誌』原稿(1940年か)

53：ほかに、兼井高春、鎌田正夫、野口進、山岸鶴三、佐々木甲、事務員松本秀盛、佐野喜作、倉義雄、小畑イト、磯西政雄、橋本仁三郎、池内健二郎、嘱託田辺順。

54：早稲田大学1920(大正９)年卒業。『住宅』誌上に、1922年２月号から23年４月号まで連続してライト風の門や住宅作品を発表しているが、経歴、活動に関しては不明。内田青蔵(東京工大附属工業高校)氏は、1922、23年頃あめりか屋技師であったと推定している。

た。さらに東京から高島司郎[54]を招へいして建物設計を依頼、さらに高島を東京、名古屋両市に出張させ、「我が国建築界の権威に夫々設計の査閲を請ふ」[52]などの万全を期している。

1937年３月中旬に主要建物の設計図書が完成、指名競争入札の結果、主要工事は野上善太、萬伴作、荒巻よしゐらの請負となり、４月１日付けで契約している。４月21日、公園内の樹木花卉その他諸設備の移植移動を開始、６月下旬終了。５月11日には、小樽公園飛躍塔建設地で地鎮祭施行、同年５月26日公園会場産業本館で上棟式が行われた。

主要施設の概要

会場の施設配置は、設計図書として唯一小樽市建築課に残る「北海道大博覧會會場配置圖」(図2-6-1)に示される。「Ｋ Ｉ」の署名があるので、作図は工営部の池内健二郎が担当したものかもしれない。各会場に建設の主要施設を表2-6-1にまとめた。

55：『北海道大博覧會誌』原稿中「工営概況」

博覧会の建築物は、「バラック式の然も急造のもの」[55]であるが、「建築様式は総て新興建築に則り華美煩多を避け、時代精神の具象化に努めると共に……博覧会建築の一大要素たるへき建築の美術化に就いても特段の意を用ひ」「建築様式と色彩と相調和して一見観衆を魅了し興味を喚起せしめるもので」「観覧上の便宜を考慮して多数の建築物の配置を適当に定めねばならぬ」とされた[56]。

56：『北海道大博覧會誌』原稿中「建築様式構造の概要」

また多数の観覧者を迎え、多くの貴重品を陳列すべき性質上、一時的にもせよ構造は堅牢を第一の条件とし、採光、通風、雨漏り等についても十分の注意を要し、構造は、木造平家建一部２階建て、屋根は「生子板葺き」[56]、内部腰高ラワンベニヤ板張り上部人絹布張り、床は簡易舗装一部板張り、外部はモルタル仕上げで、その色調も「明快清楚を旨とし」[56]、地色も５色を以て統一を図った。また用材は、落葉松挽き割を主材とし、とど、えぞまつを混用した。

設計上特に留意した事項を列記すると、

1 公園会場は起伏が著しく平地が極めて僅少であるが、凹地のグランドに集中することは避け、雄大であるべき主要館のみ建設し、通路も十分にとり、館の軒高もパラペット高大体10ｍを標準とし、屋根も高台からみて見苦しからぬよう施工し、内樋式として雨漏りに備える。
2 館内の採光は天窓式を採用するが、直接光は陳列物を損なうのみならず、小屋組の露出は「館内の美的調和」[56]を破るため、総て布越しの間接採光とする。
3 会場が山丘地帯および海岸地帯にある関係から耐風に対しても考慮するが、控え柱は概観上「面白からざる」[56]ため、内側あるいは裏側にのみ控えを設けることを原則とする。やむをえず外観に設ける場合は化粧柱とし、外観を損なわぬよう配慮し、塔にはワイヤーロープを以て控えとする。

など、かなり細かく注意を払ったことが伺える。

公園会場は、公園西側広場（現グランド）に中心施設を配置し、南側西山、東側東山、北側嵐山の３丘陵に施設を配置した。市役所南西側の正門(図2-6-2)は、公園入口のセンの巨木と事務局を一線に結ぶ長さ18ｍの門で、上部波形線の中央に小樽市のマーク、左右に菱形文字で「公園会場」とレタリングし、左上部に北海道地図を掲げた。

正門南側に接続された木造一部２階建て「事務局」は、ガラス開口を十分に取った外観をみせ、水平性を強調したパラペットの線状模様や２階ルーバーと、40ｍの角型塔の対比の美しさがまず入場者を迎えた。

正門からの主要通路は、東山と嵐山に挟まれて中心広場へと導くが、観覧者の動線処理を円滑にするため、東山と嵐山とは延長82.50ｍ幅4.5ｍの「陸橋」で結ばれた。Ｉ型鋼梁の採用などの構造的配慮のほか、橋裏天井や柱型は色モルタルおよび色漆喰塗とされ、手摺りの要所にはライトボックスが設置されて、会場の美観を損なわぬよう配慮された。

公園広場の中央池には、高さ35ｍの木造漆喰仕上げの「飛躍塔」がそびえ「北海道の開拓に伴う産業文化の進展を祝福」[56]していた。面積 1,098㎡、深さ80㎝の池には噴水が備えられ、夜には「紅、紫、青、白、黄」の５色の反射燈が交互に彩り、周囲にはパーゴラや植栽が施され、腰掛も配されて、納涼、休憩、慰安の場とされた。

池の西側には最も大きな中心施設「産業本館」(図2-6-3)が「新興建築型」[56]で建てられた。正面入口に 25.25ｍの塔を立て、隣接するスリット状の曲面副塔「線状型塔」[56]には、電飾で浮かび上がる「躍進日本」[56]地図が掲げられた。白い平滑な壁面には、舷窓に擬した通風採光用の丸窓が並んでいた。

産業本館の東側には「北海道館」、「近代科学館」、南側に「三菱館」を配置し、「北海道館」(図2-6-4)は、「躍進北海道の姿を展開すへき」[56]主要建物として設計には多大な苦心が払われた。平面形は北海道の地形「カスベ型」[56]をモチーフに、入口上に張出す庇は「橇型」[56]を軽快にデザインし、曲面の隅部にはマスト風の塔を立ち上げていた。

北海道館、近代科学館の裏手の中丘地に「拓殖館」が置かれた。三菱館南側、「第二産業館」をはさんだ高台に「小樽館」が置かれ、小樽館後方西山中腹の雑木林内に「衛生館」、西山山頂忠魂碑西側に「教育館」、「大阪館」が配置された。いずれの施設も、軒高としてパラペット高約10ｍを標準とし、屋根面も高台からの眺望を意識し、「見苦しからぬ様厳重なる監督の下に」[56]施工された。

公園中央部東山には「朝鮮館」や売店、食堂などが並び、北側「台湾館」の北に陸橋が架けられた。台湾館の北東下「仏教館」は、市公会堂(1911年、現存)が充当された。

公園北端の嵐山中腹に建設された「迎賓館」(図2-6-5)は、パビリオンの中でも秀作といえるもののひとつで、博覧会終了後も記念建築物として戦後まで保存された。階下は応接控室と食堂、厨房、階上は貴賓室とし[57]、建坪76.27坪、用材は道産材の椴、えぞ松を使用し、外部白セメ



図2-6-5　迎賓館(小樽市博物館蔵)

57：『北海道大博覧会誌』原稿中「14.迎賓館」

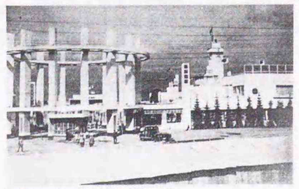


図2-6-6　海岸会場正門

ント仕上げ、内部腰高羽目板はベニヤ壁テックス張り、床はフローリングおよびタイル張り、窓ははめ殺しまたは上げ下げ、両開きの二重窓とした。１階の壁体や屋根の曲面、円形小窓、白セメント仕上げの外観が、瀟洒な印象を与える作品であった。

迎賓館下の「演藝館」は、梁間23.40ｍ 桁行39.60ｍ高さ13ｍ、総面積1,010㎡ の劇場建築で、観覧席は丘陵の自然勾配を利用して固定席を設けた。

海岸会場では、まず正門（図2-6-6)が目を引く意匠であった。小樽の樽を型どった直径21.60ｍ、高さ16.85ｍの円環を13本の柱で支えたもので、夜間には柱形に組み込まれた５色のネオン管が一層の効果を与えた。

階上の中央に「テレビジョン館」、「オットセイ放飼池」、海側に「国防館」、陸側（北側）に「海洋館」「交通観光館」を配置したが、中でも軒高9.80ｍ、面積1,433㎡の国防館(図2-6-7)は、屋上には回転装置の探照燈を設置し、マストをかたどった塔、喫水線風に塗り分けした外観、舷窓など、まったく軍艦を想起させる意匠であった。

表2-6-16　北海道大博覧会主要工事一覧表

館　名	面積(㎡)	経費(円)	起工	竣工	請負人
[公園会場]					
事務局	827.01	11,031.39	4月 2日	7月 2日	野上善太
正門	36.58	5,902.17	〃	〃	〃
教育館	629.94	5,261.34	〃	〃	〃
衛生館	547.97	5,268.22	〃	〃	〃
仏教館山門	56.00	2,342.92	〃	〃	〃
陸橋	82.48	4,342.08	〃	〃	〃
産業本館	4,446.93	26,944.66	5月30日	6月30日	萬 伴作
同別館	391.15	4,135.00	〃	〃	〃
北海道館	1,791.268	13,944.17	〃	〃	〃
小樽館	534.60	6,169.99	〃	〃	荒巻よしゐ
近代科学館	775.14	6,733.30	4月 2日	6月30日	〃
拓殖館	696.60	7,172.58	〃	〃	〃
中央池	1,097.81	2,114.38	〃	〃	萬 伴作
休憩所	317.52	2,633.46	〃	〃	〃
中央塔	高さ35m	7,352.16	〃	〃	〃
売店(49戸)	476.28	2,569.50	5月30日	〃	〃
ラジオ館	255.15	2,598.00	5月 5日	6月25日	直　営
[海岸会場]					
事務局	507.45	9,516.82	4月 2日	6月30日	荒巻よしゐ
国防館	1,433.10	12,828.86	〃	〃	〃
交通観光館	1,137.24	7,878.99	〃	〃	〃
海洋館	674.05	7,794.22	〃	〃	〃
テレビジョン館	159.30	2,250.00	6月 2日	〃	〃
中央池	一式	1,200.00	〃	〃	〃
売店(32戸)	311.04	1,440.00	〃	〃	〃
[会場外]					
小樽駅歓迎門	高さ29.5m	3,704.57	4月 2日	5月30日	野上善太
同案内所	32.40	600.00	6月 2日	7月 5日	〃
南小樽駅歓迎門	一基	700.00	〃	6月30日	荒巻よしゐ

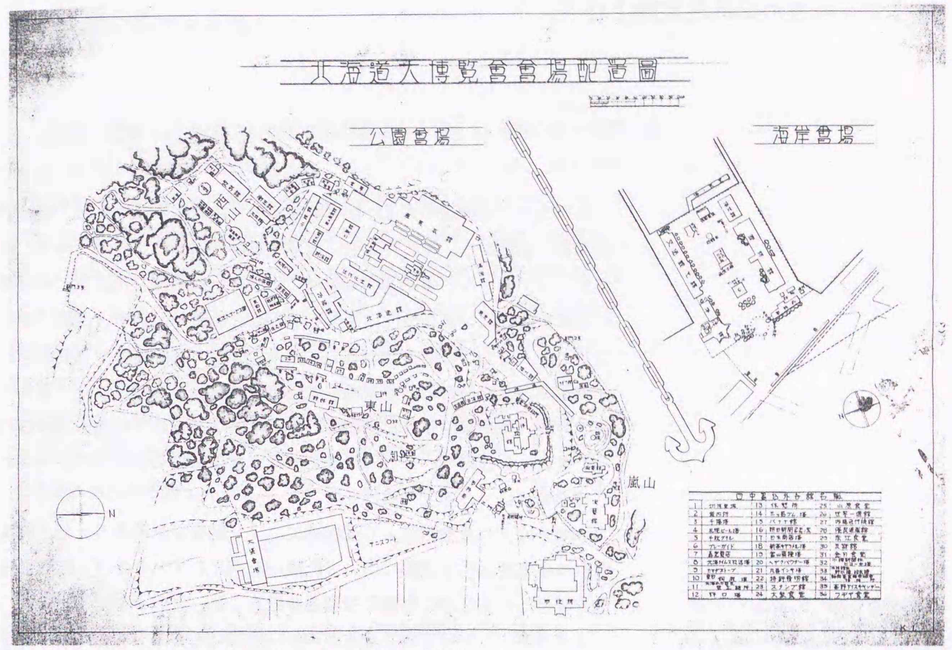


図2-6-1　北海道大博覧会会場配置図(一部筆者加筆)(小樽市蔵)



図2-6-2　公園会場正門

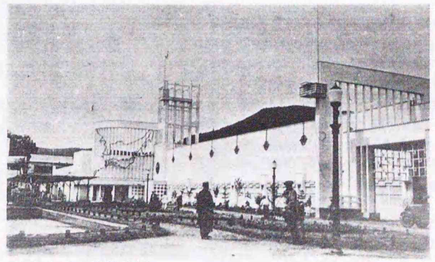


図2-6-3　産業本館



図2-6-4　北海道館と飛躍塔

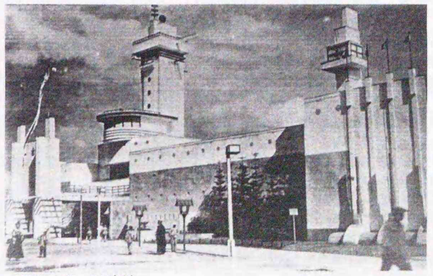


図2-6-7　国防館

第３章　札幌の郊外住宅地と住宅

前章では、北海道の大正、昭和前期をモダニズム期ととらえ、北海道建築界の動向から、特に目を引く市街地建築の代表としてデパート、映画館、カフェーなどの商業建築を紹介し、さらに銀行や商社など大規模な商業施設のほか教会や住宅建築などの設計に道外建築家の活躍がみられたこと、またこの期の建築界の活動の中心は、北海道庁や主要市部、北海道帝国大学などの営繕組織や営繕技術者たちであったこと、道外在住の外国人建築家や在外営繕組織による作品が、少数ではあるがみられたことなどを指摘し、さらに市民生活に大きな影響を与えたエポックとして博覧会についてとりあげた。

本章では、市民生活により直接的に、より密接な影響を与えたと考えられる住宅地と住宅建築について札幌市を例としてとりあげ、新興住宅地の開発が中流住宅の建設に拍車をかけたこと、「モダン住宅」とか「文化住宅」とか呼ばれる意匠的にも平面的にも目を引く住宅が、建築家の設計ばかりでなく、施主や棟梁たちの手によっても創造されていった点に注目した。建築家設計の住宅のうち、札幌市ではマックス・ヒンデルや田上義也の作品が多数注目されるが、これらについては、第２部、第３部で扱うこととした。

3-1 札幌の郊外住宅地

市街地の繁栄・発展は、郊外住宅地の整備をも誘引し、都心部へ通勤する中流サラリーマンの住宅地として拡大していったことは、多くの都市でみられた現象であるが、札幌でも大正期以降、市街地拡大にともない周辺に住宅地が開発された。なかでも山鼻、円山住宅地は、規模も大きく、郊外住宅地として、あるいは文教地区として発展した典型的な地区といえるものであった。いずれの住宅地も自治組織による自主的な計画であり、ともに1922(大正11)年以降実施され、前者は1929年、後者は1927年に完成している。

本節では、これらふたつの住宅地計画の背景、実施過程を中心に、さらにこれまであまり知られていなかった温泉経営と結び付けた札幌温泉土地株式会社が経営しようとしたユニークな分譲地についてみていきたい。

3-1-1:山鼻地区

山鼻は、1875(明治８)年の屯田兵入殖以来の歴史を持つ地区で、主として東北地方からの移民を中心に形成された兵村である(図3-1-1)。240戸の兵屋は、中央に石山道路[1](西11丁目通り)をはさみ、約5丁を隔てて東西両屯田に分けられ、東屯田は南８条から23条に至る間を西８丁目と９丁目との両側に兵屋が片側60戸ずつ建設され、西屯田は南６条から21条間、西12丁目と13丁目の両側に、東屯田と同様に、間口20間 奥行7.5間[2]、150坪を一宅地として片側60戸ずつ建設された。宅地には奥行75間の耕地が続いていた(図3-1-2)。

両屯田のほぼ中央、現在の南14条西11丁目には、中隊本部の事務所である週番所(1885(明治18)年以降中隊本部と改称された)が置かれ、診療所が併設(1888年)されたり、1878(明治11)年には隣接して山鼻小学校が開設されるなど、地区の中心的な役割を果たした。

1902(明治35)年に屯田兵制度が廃止されるが、同時に「屯田兵土地給与規則」[3]も廃止され、土地の売買も自由になった。1906年山鼻村と後述する円山村が合併し藻岩村となり、住居表示は「札幌郡藻岩村大字山鼻村〇番地」となったが、この頃には、山鼻村の札幌区編入が検討されており、1910(明治43)年４月には、豊平町、白石村、苗穂村とあわせて山鼻村の旧兵村部分が編入され、山鼻村の中心部のほとんどは藻岩村から分離されている。

山鼻地区の編入以降、土地区画整理、道路整備に対する住民の強い要求もあったが、その理由として、山鼻は都市住宅地として発達すべき条件を持っているが、「兵農を兼ねた特殊な型体をもって区画し移住させ

1：現在の石山通。札幌の中心街から山鼻を貫通して石切山、定山渓へと通ずる国道 230号線の通称。開削は1870(明治3)年。 1872年八垂別で硬石山を、同年穴の沢に軟石山を発見、その運搬輸送路として重要性を増した。(『札幌地名考(さっぽろ文庫1)』1977)

2：『山鼻創基八十一周年記念誌』山鼻創基81周年記念会(1957.5.29) p.58 ほかには奥行10間とある。当初は、南北と東西に通じる十字路をほぼ中央に敷設し、両側に並行する道路を通し、１区を横200間、縦170間（標準区画、場所により差がある)とし、その中に裏口が背中合わせになるよう２列に住居を10戸ずつ計20戸配置した。１戸分の敷地は間口20間、奥行85間で、その内間口20間、奥行10間が宅地分(200坪) で、あとは農耕地(1500坪)にあてられた。ところが入地してみると、兵屋の表口に面して細長い給与地が広がり、背中合せの隣家との交際が不便で、日常生活上支障が多かった。このため１戸あたり間口20間、奥行2.5間の宅地(50坪)を道路用に離出した。(札幌市教育委員会編『新札幌市史第二巻　通史二』北海道新聞社(1991.10.19) p.343)

3：1890(明治23)年９月法律第79号で公布。１戸あたり約15,000坪の土地を給与(第一条)、移住より30年間土地の譲渡または質入の禁止(第四条)、屯田地は服役中および満期の年から10年間（1883年以前については20年間)国税および地方税を免除(第三、八条) など、土地制度の一般規則が定められている。(伊藤廣『屯田兵村の百年（下巻)』北海道新聞社(1979.9.10) pp.249、250)

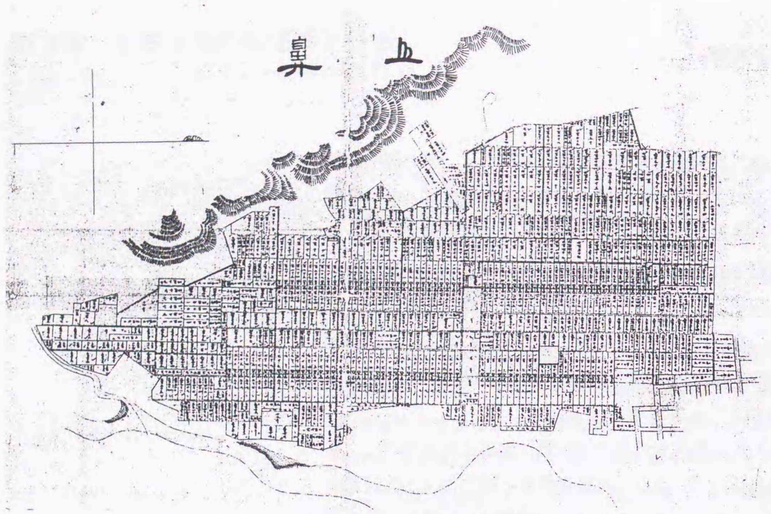


図3-1-1　山鼻屯田兵村(北海道行政資料課蔵、『札幌歴史地図〈明治編〉』より転載)

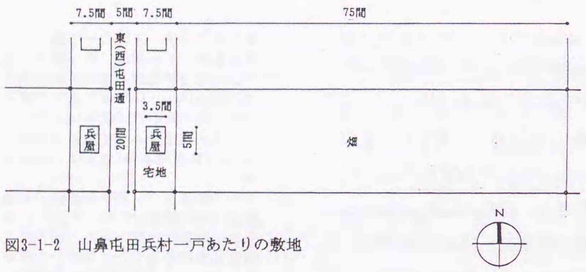


図3-1-2　山鼻屯田兵村一戸あたりの敷地

4：『札幌市史　政治行政編』札幌市役所(1953.2.20) p.103
5：前掲『山鼻創基八十一周年記念誌』p.27

た所」なので、「各地主がそのまま宅地分譲をすることになれば、市街は乱雑となり、将来土地区画整理事業に非常な困難をきたす」恐れがある(札幌市史政治行政篇[4])ことや、「屯田兵村と東本願寺の間には連絡すべき道路がなく、山鼻の発展の障害となっていた」(山鼻創基八十一周年記念誌[5])ことが挙げられている。

1918年開道五十周年記念北海道博覧会が中島公園で開催され、公園入口までの電気軌道も開通して、山鼻地区が良好な郊外住宅地として認められるようになっていき、土地区画整理事業の必要性が強く訴えられるようになっていった。

また、いくつかの学校の設立や移転が、文教地区としての発展に拍車をかけることとなった。1916年札幌工芸学校(現札幌工業学校)が南14条西12丁目に新設され、1922年７月南18条西6丁目に札幌第１中学校(現札幌南高校)が北10条西4丁目から新築移転、翌年12月には前年設置された静修女学校の新校舎が南16条西６丁目に新築、1924年には南５条西17丁

目に北星女学校が敷地を購入し、1929(昭和4)年M.ヒンデル設計の校舎を新築し移転している。この年はまた、北海道札幌師範学校の鉄筋コンクリート造３階建ての校舎が南22条西12丁目に新築され、同校の移転は、札幌市の南進発展を促進する契機ともなった。このほか、1926(大正15)年には、南10条西17丁目に幌西小学校が増設され、山鼻地区の西方への発展に対応している[6]。

こうした文教的な性格は、昭和期にはいってからもみられ、1931（昭和6)年札幌第二高等小学校(現柏中学校)が南22条西12丁目に新築開校、1935年には市立札幌高等経理学校(現札幌経済高等学校、南14西14)設置、翌1936年幌南小学校(南20西５)設置、1944年札幌中学校(南９西22)新築などがあげられる[7]。

1920(大正９)年12月、札幌区会議員の半数改選が行われ、屯田兵村出身の佐藤善七が当選した。佐藤は、山鼻町有志の強い推薦を受け、道路網整備を熱心に訴えており、彼の当選はその実現への足掛かりであった。これを受けて地区では、事業推進母体として山鼻自治会を結成する。

山鼻自治会は、1921年１月、自主的に道路整備計画案「山鼻町豫定道

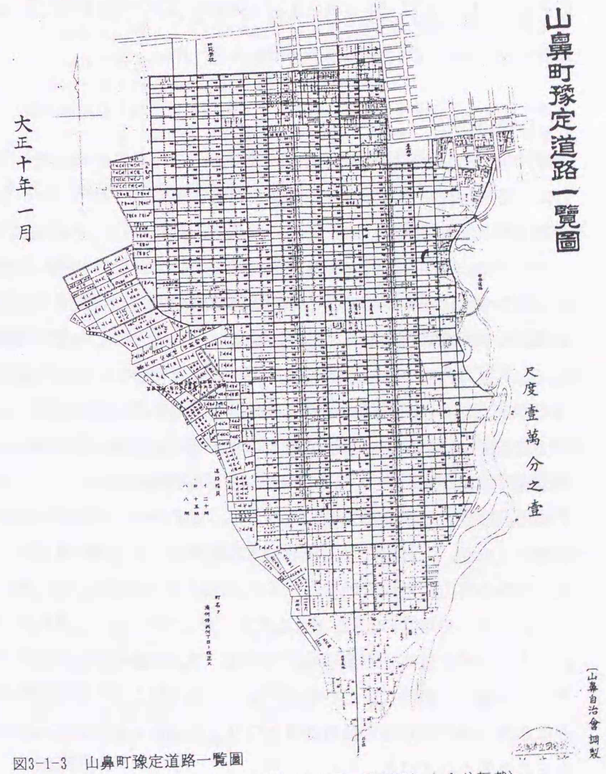


図3-1-3　山鼻町豫定道路一覧圖
(北海道立図書館蔵、『札幌歴史地図〈大正編〉』より転載)

6：『山鼻創基八十一周年記念誌』p.26
7：『山鼻創基八十一周年記念誌』p.32

路一覧圖」を作成し、道路敷地は地主の無償提供によることを決めた。同年２月の区会には、山鼻町道路開削の件が建議され、おりしも札幌区の都市計画法適用を控えた道路整備計画の時期と一致したこともあって、この案件は可決された。予算化されたのは、翌1922年２月であった。実行にあたっての検討のほか、市制の施行(1922年８月)が重なったためである。

「山鼻町豫定道路一覧圖」(図3-1-3)による計画案の内容は次のとおりであるが、道路幅員縮小のほかは、ほぼそのまま実施された。

1．旧屯田兵村の大部分を対象とし、面積462町歩(460ha)、道路延長24里(94.3km)である。
2．道路は既存道路を基礎とし、東西道路を旧屯田兵２戸毎の敷地境界に新設する。
3．道路幅は、石山通りを20間、他の既存道路は15間、新設道路は８間とした（実施案では15間、８間、６間)。
4．住所表示は「南〇条西〇丁目」とする。計画案には条丁境いなど詳細はないが、現在と同じく、およそ80間×80間の中通りのある街区を１住所としたと考えられる。

道路整備事業は、1922年より７ヵ年を要して完成したが、同年８月市制が施行され、翌1923年市電山鼻線が行啓通まで、1925年７月には現南高前まで開通し、住宅地拡大の契機ともなった。

3-1-2:円山地区

1870(明治３)年に開拓使募集の農民が酒田地方などから入植した円山村は、村道(現西25丁目通り)の両側を耕地とする農村集落であった。この道路および敷地割は、大正前期まで基本的に変わらなかった。

1906(明治39)年４月円山村と山鼻村は合併して藻岩村と称したが、前述したように1910年に札幌区との間で行政区域の大幅な変更が行われ、山鼻村のうち旧東西屯田兵村部分、つまり中心部分ほとんどが札幌区に編入されされたのである。この後円山村は藻岩村の本村として発展していくが、この間1903年に、札幌区は区共同墓地を円山村に設置[8]したり、円山養樹園(御料地)を公園予定地として貸下げを受け、翌1904年から整備造成に取りかかった[8]。これが現在の円山公園である。

明治末期から札幌市街の拡大がおよび、地主の住宅誘致の意向は強まっていったが、大正期には、貸地収入が農業収入を上回るほど[9]となった。当時の円山の宅地貸地料は、１坪当たり２～３銭で、坪３銭とすると１反当たりで年間100円を超える計算となる[9]のに対し、農作物の価格は、大正11年産価格で蔬菜平均が73円強[9]で、しかも粗収入であるからこれから種子や肥料代などを考慮すると、畑作収入より宅地貸地のほうがはるかに高収入が得られる計算となり、地主たちが宅地化に積極的になることもうなずける。

1922(大正11)年、電気軌道の円山延長計画を機に、円山地主全員による地主会が結成され、道路網建設と土地区画事業が計画された。円山地主会会則第３条[10]にも、「東宮殿下の行啓を記念し、円山村の開発進歩の趨勢に鑑み、大札幌の将来を達観し、適切なる道路網を案出決定し其の遂行を期し会員の親睦を図るを目的とする」(アンダーラインは筆者)と、はっきりうたわれている。

8：『円山百年史』円山百年史編纂委員会(1977.6.25) p.67
9：『円山百年史』pp.73、74

円山地主会の発足は、1922年７月５日、「円山尋常高等小学校ニテ開会ノ藻岩村大字円山村東宮殿下行啓記念道路網計画ニ関スル地主会」が開催された。同年９月第２回地主会では、道路網計画案の承認の件、道路網計画案実測の件などが議題となったが、結論の出ないまま閉会、11月の地主会で全体の計画案と事業の協力への合意を得るに至っている。

道路網計画案と考えられる『札幌郡藻岩村大字圓山道路網圖』（1922年 図3-1-3）や『円山地主会議事録』[11]、『円山百年史』によれば計画内容は以下のようなものであった。

1．山林を除く円山村全域を対象とする。面積約270ha。
2．円山村の共有財産を売却して、うち 158,000円を市街地区画道路網新設予算とし、道路用地は地主の寄付による。
3．札幌市の街路が村界(現西20丁目)まで延長されている北５～南１条はその街路を延長し、それ以外は札幌市の60間×60間街区を基本とするが、北５～南１条間の東西道路、西20丁目～25丁目の南北道路は既存道路に規定されて40～70間間隔と乱れている。
4．既存の敷地境界には規制されず、道路に分断され不整形となる各地主の土地の交換、整形などの整理は行わない。また旧道路も廃止しない。
5．住所表示は「南／北〇条西〇丁目」とするが、「条」は札幌に一致させ、「丁目」は円山村独自に１丁目(現西20丁目)から定める。

道路建設は、1923(大正12)年から1927(昭和２)年まで円山村により実施され、これにより南７条以北、北１条以南がほぼ完成した。

円山村の道路網整備事業は、当初から宅地分譲、あるいは貸地による収益を目的としていたので、1925年円山地主会は円山振興会と改称し、さらにポスターやチラシを配布して、住宅勧誘の宣伝活動を行った。費用は、村内の地主により、所有面積に応じた予定額を定めて寄付を募ったが、村内を１等地から４等地まで区分し、１等地の所有者には３割増、２等地には１割増の寄付金を求めている。所有反別と寄付金予定額は、３町歩以上10円、２町歩以上７円、１町歩以上４円、３反歩以上２円、３反歩以下１円とし、これ以上の額を希望している[12]。集まった寄付金は、次のように予算化された[12]。

第１回支出見込	360 円
宣伝ビラ３万枚印刷	90
新聞挿入料	30
ポスター500枚印刷	125
ポスター広告の送料、謝礼	30
原稿考案料	20
新聞記事記者謝礼	50
雑費	15

10：札幌市資料館所蔵『円山地主会議録』ほか円山地主会関係書類
11：札幌市資料館所蔵
12：札幌市資料館所蔵『円山振興会寄付金芳名簿』(1925年)

13：三関ミン所蔵

印刷したポスターは、札幌市内に 240枚、箱館、小樽、旭川、室蘭、岩見沢、滝川、名寄、砂川の各都市に計 270枚を、宣伝ビラは、市内の湯屋、床屋等に14,000枚、市街は上記10市のうち名寄、砂川を除く８市に計15,500枚を配布するという記録が残されている[12]。

「札幌郊外円山住宅地　円山十勝」[13]と題するカラー刷りのポスター(図3-1-5)は、円山を背景に、円山温泉、札幌神社、円山公園、公會堂、蔬菜市場、小学校、村役場など既存の施設を配置した俯瞰図と電車路線図が添えられ、円山十勝として、住宅地としての利便性、快適性を次のようなコピーで挙げている。

一、円山は北海道総鎮護札幌神社の御在地なり
二、土性水質は勿論天然の風致並に住宅地として絶好適良なり
三、電車は札幌市の南一條線に連絡して円山公園下迄全通す
四、貸地料の低廉なるは他に類例なし
五、道路は圖面のごとく開鑿せられなり
六、學校財産は富饒なり
七、公課金は比較的寡なし
八、市場に於ける蔬菜の廉価るは定評あり
九、電車終點脇に電鉄會社直營の娯樂園あり
十、円山南麓に札幌温泉土地株式會社経營の定山渓温泉浴場あり前者と共に其設備理想的なり

また藻岩村十二勝として１月から12月までの風物詩も添えられ、

一月札幌神社の初詣	七月豊平川の川狩
二月雪中登山(札幌市の眺望)	八月円山の朝市
三月円山山麓の福壽草	九月御料橋の観月
四月円山公園の新緑	十月藻岩山の紅葉
五月札幌神社境内の観櫻	十一月連山の初雪
六月藻岩観音の山開	十二月札幌温泉岱のスキー

最後に朱書で「地主は皆さんの来住を歓迎して居ます　本會は其御取次ぎを致します」と結ばれ、「円山振興会　事務所札幌郡藻岩村役場内」および、取次所として「札幌市外円山　上田萬平、札幌市南１西３　佐々木小太郎、札幌市大通東１　片岡唯一郎、札幌市外円山　蒔森武左衛門、中村萬六、三関武治」らの名が連ねていた。

このポスター宣伝がどれほどの効果を発揮したかは不明であるが、道路網が整備される1923(大正12)年ころを境に円山村の人口は急増している。下に示すように1921(大正10)年から約４年ごとに２倍という速度で増え、10年後の1931(昭和６)年には１万人を突破し、1922(大正11)年から1930(昭和５)年頃にかけての年間人口増加率は、30～40%と最も高くなっている。

1920年	309戸	1,765人[14]
1921	340	1,856[15]
1923	550	2,833[15]
1924	629	3,158[14]
1925	829	4,193[15]
1927	1,215	6,348[15]
1929	1,678	8,647[15]
1931	2,003	10,336[15]

14：『円山百年史』p.72
15：『円山百年史』pp.80,81

さらにこの時期の藻岩村の職業別人口構成の中で、目立った変化が見られるのは、官公吏、会社員、教員、医師産婆をあわせた給与生活者層の増加である。1929(昭和４)年末の職業別戸数をみると、全体の約３分の１におよんでいる[15]。これらの大部分は、村内で就業するものはごく少数であり、村外つまり札幌へ通勤するものと考えられる。農業人口はほぼ一定しており、急速に離農が進んでいるわけではないが、農業以外の人口が急増しているので、有職者全体に対する農業人口の割合は、大正10年67.7%(393人)[16]から昭和８年14.3%(360人)[16]へと低下しており、郊外住宅地化への進展に伴う現象が顕著に現れている。

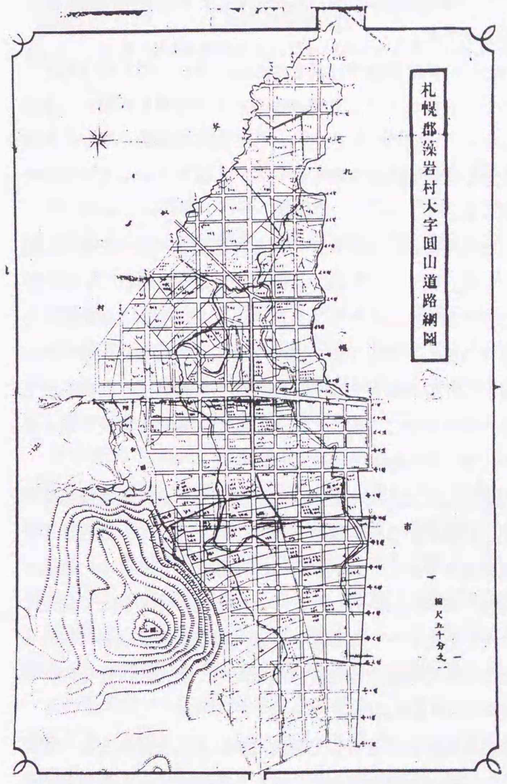


図3-1-4　札幌郡藻岩村大字圓山道路網圖(1922年)(三関ミン蔵)

こうした住宅誘致は、当時は文化住宅地と呼ばれ、円山ばかりでなく山鼻や琴似でも類似の誘致宣伝が行われた[17]という。新しく建つ住宅は文化住宅と呼ばれ、「クレオソート防腐塗装の下見板にトタンぶきの折れ屋根、上下式や観音開きの出窓がつき、どこか洋風な匂いのする、当時流行のモダンな建物が多かった」[17]という。

人口の急増とともに小学校その他公共施設の整備も行われ、円山、八

16：『藻岩村勢一班』（北海道大学北方資料室所蔵）による。



図3-1-5　円山振興会住宅勧誘宣伝ポスター(1925年頃)(三関ミン蔵)

17：『円山百年史』p.81

垂別、白川各校が増改築され、1924年にはブロック造２階建ての円山公会堂(臼沢長吉設計、北１西23)が建設、1926年からは村会議場としても使用されるようになった。大正12年村消防組の番屋の新設、昭和４年役場敷地内番屋に鉄骨製火の見櫓建設、1926年藻岩村巡査駐在所新築移転(北１西25)、1931年藻岩村南巡査駐在所(南５西23)新設、1930年には田上義也設計の円山郵便局(南１西24)も開設されている。

3-1-3:札幌温泉土地株式会社

郊外住宅の分譲の中には、温泉経営と結び付けたユニークなものも札幌に出現した。現在の旭山記念公園(堺川町)下、養護施設南藻園付近に、セセッション様式の温泉場(図3-1-7) を新築し、札幌温泉を経営した札幌温泉土地株式会社である。

同社は1922(大正11)年河原直孝社長を中心に、界川地区を住宅地として分譲する目的で設立された[18]。吉野牧場や双子山地帯を買収し、道路と宅地区画を設定し、1923年から住宅地として売却を開始したが、河原社長、愛須梅次郎らは宝塚式歓楽郷を夢見て[19]、温泉を中心とする住宅地の開発を計画した。

直接の資料には欠けるが、1928年７月14日付北海タイムス記事「札幌温泉と理想的住宅地」(図3-1-6)には、計画の概要が報じられている。記事によれば、同社分譲予定地のうち７万坪中の３万坪を第１期分とするもので、西に藻岩の連山、北に円山の霊峰を擁し、これら連山の大原始林を背景に、眼下に札幌市街を一望の下に収め、東には広く石狩平野を望み、西南の陽光四季を通じて明るく輝き、用水も極めて清冽であるといった自然条件に恵まれた絶好の住宅地であった。

住宅地への交通としては、札幌温泉土地会社の姉妹会社札幌温泉電気軌道株式会社が、同温泉から市営電車円山３丁目、現在の大通西23丁目付近に至る温泉軌道を予定し、1928(昭和３)年８月末か９月中に開通すれば(実際の開通は1929年であったが)、中心市街地まで30分弱で到達できる利便性もうたわれていた。電車停留場は、温泉前幹線道路に設けられ、温泉場に至る道路の両側には商店旅館向用地、高台には住宅向用地を設定し、１戸分100坪より200坪まで分譲した。

さらに「幌都に商舗事務所を有して繁務に携はる人々はもとより官吏會社員住宅地として、又本道教育の中心地たる札幌に子女の教育旁た安住の地を定めんとする人々にはこの際何をおってもこの理想的住宅地を手に入れ一家の資産として子女の為に備へることは最も有利賢明な投資であろう」[20]と投機の有効性さえもうたっている点は興味深い。

この住宅地の中心には、21万円の巨費を投じた一大娯楽場札幌温泉が建設され営業していた。1926年5月開業のこの温泉(図3-1-7)は、定山渓温泉からコンクリート管で引いた湯を「新式の機関釜」[21]で原泉に復活さ

18：『円山百年史』p.205
19：「中央区史探訪4」(広報さっぽろ、1975年1月号)
20：1928年3月14日付北海タイムス「札幌温泉と理想的住宅」
21：1926年5月2日付北海タイムス「圓山の札幌温泉」

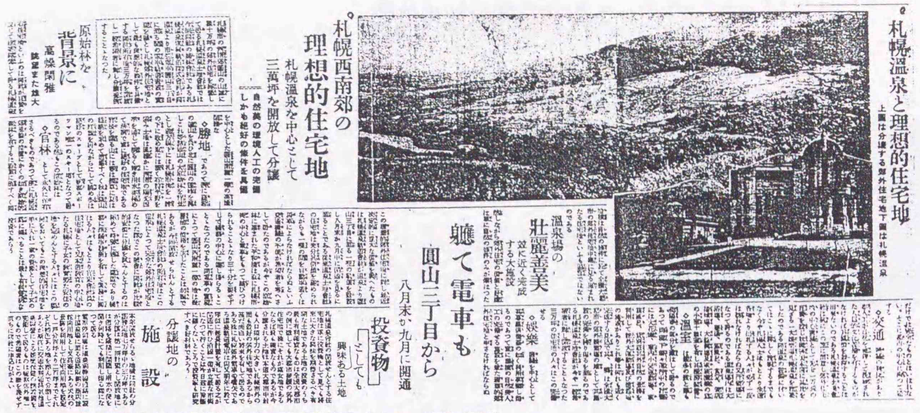

札幌温泉と理想的住宅地
上圓は分譲する郊外住宅地下圓は札幌温泉
札幌西南郊の理想的住宅地
札幌温泉を中心として三萬坪を開放して分譲
自然美の環境人工の完備しかも絶好の條件を具備
原始林を背景に
高燥閑雅
◇勝地
◇官林
◇有林
温泉場の壯麗善美
設に近く完成する大施設
聽て電車も
圓山三丁目から
八月末か九月に開通
投資物
「としても興味ある土地
分譲地の施設

図3-1-6 「札幌温泉と理想的住宅地」記事(北海タイムス、1928.7.14)

せたもので、30kmにも及ぶコンクリート管は、60cm四方の木枠に麻の空気袋をいれ、コンクリートを流し込んでつなぐ工法で実現された[19]。

温泉場は「大浴場、薬湯、蒸風呂、食堂、売店、撞球場、大餘興場及家族団欒の為の小室十数室を有し其暖房装置に温室は厳冬の候と雖も尚陽春の気分を漂わ」[20]す環境であったという。ほかに「大花園、室内小児運動場、家族風呂、貸別荘」も計画され、完成の暁には「全国大都市の郊外娯楽場の雄として……語り得る」施設を有する郊外住宅地となる予定であり、「交通水利通路其他温泉経営による娯楽保健の諸設備を完備しているものは幌都郊外唯一のもの」[20]であった。

1930(昭和５)年秋の電車送電用変電所の火災や石山付近の豊平川大洪水による湯導管の決壊、さらに分譲地の売れ行き不振などが重なり、開設４年足らずの1930年頃には廃業という[22]。廃業届けは遅れて提出されたらしく、札幌市勢一覧昭和９年版の市内及び附近案内の項に、「札幌温泉　藻岩山山麓の高臺に在り、全市を瞰下し眺望佳絶遊覧客多く附近に藻岩温泉、圓山温泉がある（市電圓山三丁目停留場から温泉軌道の便がある)」と掲載されており、翌10年版からは掲載されていない。

その後北海道拓殖銀行の所有地を経て、1946(昭和21)年同銀行が札幌市にスキー用地として 16万5,000㎡を寄付、さらにその周辺の土地を市が買収し、1970(昭和45)年９月旭山記念公園が完成している[23]。

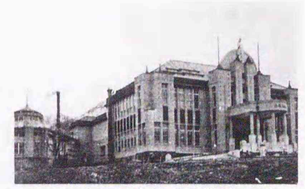


図3-1-7 札幌温泉(札幌市資料館蔵)

22：関秀司・笹木義友共編『ふるさとの想い出写真集明治大正昭和札幌』(1979、国書刊行会)
23：札幌市教育委員会編『藻岩・円山(さっぽろ文庫12)』(1980)

3-2 建築家設計の住宅

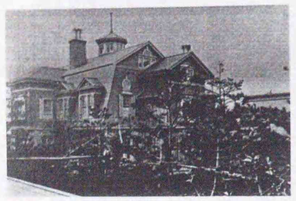


図3-2-1　小田良治邸
（『建築写真類聚 住宅の外観 その二』）



図3-2-2　亀井邸

前述のような新興住宅地には、しばしば「文化住宅」とか「モダン住宅」と呼ばれるしゃれた洋風住宅も建てられたが、その多くは大学教授、医師といった知識人や実業家たちの住宅であった。

現存するものとして、円山地区では、田上義也設計の小熊邸(1927)、鬼窪邸(1929)、城下邸(1830)、相内邸(1934)などがあり、山鼻地区でも、栗谷川邸（1932、能勢某設計)、杉野目邸(1933、萩原惇正・岡田鴻記設計)などを挙げることができる。

まばらに人家の建ち始めた北11条付近にはヒンデル設計の自邸東光園円い家(1924)や大野邸(1925)などもみられ、中流住宅の設計に建築家が積極的に関わるようになった大正末期以降の傾向をよく示している。

それ以前にも、札幌の小田良治邸(1913、Ｊ.M.ガーディナー設計、図3-2-1)、函館の亀井邸（1919、関根要太郎設計、図3-2-2)などのように、建築家設計の住宅が見られないわけではないが、ごく少例であり、田上義也とヒンデルという２人の建築家の出現が、札幌の近代住宅を多数生み出す原動力となったといっても言い過ぎではないだろう。２人の住宅作品については、第２部、第３部で詳説するので、ここでは従来から北海道の建築界をリードしてきた官庁営繕建築家が関与した住宅作品の一例として、萩原惇正(北大営繕課)設計による札幌の杉野目邸(1933)をとりあげよう。

杉野目邸

杉野目邸は、北海道帝国大学理学部教授(1954年以降学長)杉野目晴貞(1892～1872)の住宅で、1933(昭和８)年に上棟式をあげ、11月に完成している。設計は、北海道大学営繕課長であった萩原惇正と岡田鴻記、施工は今野某が請け負った。

設計者萩原惇正(1892～？)[24]については、**1-5-3**の項でも述べており、重複するが、やや詳しく補記しておく。1892(明治25)年５月14日静岡県小笠原郡横須賀生まれ。1911(明治44)年７月30日関西商工学校建築学科卒業後、同年７月31日から翌年２月20日まで河合（おそらく大阪の河合浩蔵）建築事務所に勤め、その後宇田川電氣㈱工務部、大野建築事務所などを経て、1917年２月～８月まで日本石油株式会社の建築工事設計および監督を嘱託され、同年11月からは『建築雑誌』(1920年８月号)には、「設計監督 大蔵省、担当技術者 萩原惇正」とあるように、大阪税関庁舎新築工事の設計および監督を嘱託された。

大阪税関火災復旧その他新営工事(1918年)を経て、1920年９月から文部大臣官房建築課に嘱託および出張所長心得として在職し、神戸高等商船学校創立工事設計監督(1920年)、第二十四高等学校創立工事設計および現場監督(1923年)などにたずさわった。

24：萩原惇正の履歴については、北海道庁総務部人事課所蔵および北海道大学庶務部人事課所蔵の履歴書を資料とした。

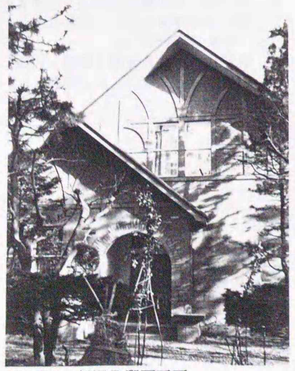


図3-2-3　杉野目邸西正面

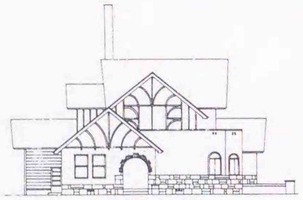


図3-2-4　杉野目邸西立面図
（杉野目家蔵設計図より作成）

1923年８月北海道庁土木部建築課技師に任官、1926年には北海道庁立図書館の設計を担当している。1927年６月から1934年４月に退官するまで、北海道帝国大学技師、営繕課長として在任し、理学部(1929年)や農学部本館(1935年)などを設計した。

理学部や農学部本館の意匠にみられるように、萩原は中世リバイバルスタイルを得意とした建築家で、この杉野目邸でもハーフティンバーや半円アーチのモティーフを展開しているが、ピクチュアレスクなイメージは、教授就任前にイギリス留学(1926～28)した施主からの提案もあったと考えられる。萩原画の完成予想図は、淡い色彩のもので、点景のフォード車と共に1930年代らしい雰囲気を伝えるもので、現在も居間に飾られている。

設計者として名のあがる岡田鴻記は、1928年に神戸商工を卒業したばかりの建築家で、のちに岡田建築設計事務所を開設するが、この住宅設計では助手として関わったものであろう。

木骨煉瓦造一部２階建て、1階78坪、2階13坪、延べ床面積約92坪の建物は、 400坪の敷地に建つ。ハーフティンバーの装飾のある大きな妻面を南、西、北の３方向に向けた高い切妻屋根の建物で、外壁はモルタル仕上げとしているが、１階腰部を目地切りとして、石張り風に表現している。アプローチをゆったりとった西側正面玄関ポーチは、まわりをスクラッチタイルの半円アーチで縁取られている。玄関内部もゆったりとしており、上がり台脇に、ちょっと腰かけられる小ベンチを備えるなどの細かな配慮もみられる。

１階は、玄関をはさんで応接室と書斎を独立して配置し、食堂兼居間を囲むように、東側に子供室、子供勉強室、老人室、西に納戸、老人室、北側に台所、浴室、内玄関、女中室などが配置される。主棟の南側に突き出す書斉には、半円アーチの欄間付き両開き窓がみられるが、同様の半円モティーフは、子供勉強室でも採用されている。

南側に配置された食堂兼居間は、当初から椅子式の使い方をし、当時のナラ材の食卓が今も使われている。居間の南には勉強室とも通じる温室があり、テラスに面している。

西側老人室床脇にあたる南側壁面には、幾何学的なサッシュ割を施した菱形窓がみられ、外壁にランダムにちりばめられたレンガタイルとともに、外観意匠のアクセントとして機能している。

２階は、客間(８畳)と次間(６畳)の続き間とアティック(８畳)で構成されている。

内部仕上げは、漆喰壁が主であるが、書斉、応接室、居間兼食堂及び２階アティックでは、漆喰壁の上に布を張ってさらにペイント仕上げと

している。

暖房は建築時から石炭を燃料とするスチーム暖房が採用され、和室では地袋にラジエーターをさりげなく収めたりするなどの配慮がみられ、水洗トイレにも小型の丸形ラジエーターを備えるなど、寒地にふさわしい工夫もみられた。

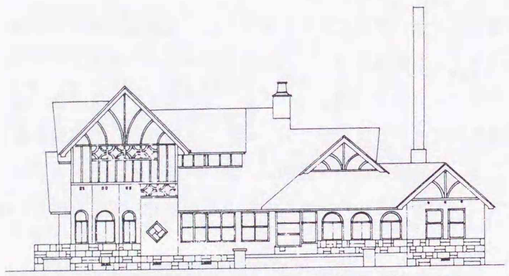


図3-2-5　杉野目邸立面図(1/200)（杉野目家蔵設計図より作成）

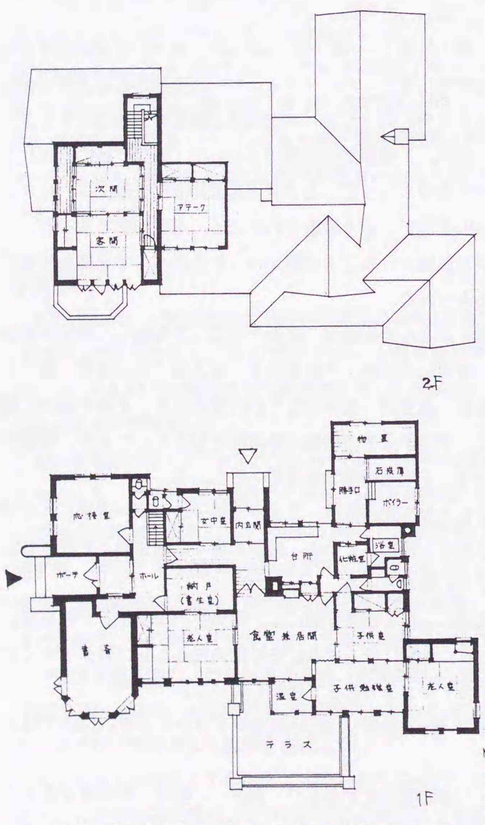


図3-2-6　杉野目邸平面図(1/200)（杉野目家蔵設計図より作成）

3-3 施主設計の住宅

知識人の中には、自ら住宅のプランニングや基本設計を手掛ける者もあった。早くには札幌におけるモダン住宅の好例である有島武郎邸（1913年)をあげることが出来るし、1923年越智卓見邸(札幌市北17西6)、1927年の古藤猛哉邸(札幌市大通東８)や大原邸(札幌市南６西20)、1939年の中谷宇吉郎宅(札幌市南4西16)などはその代表作といえそうである。本節では、有島邸、古藤邸、大原邸、中谷宅の４件をとりあげて紹介しておきたい。

3-3-1:有島武郎邸

有島武郎(1878～1923)は、東北帝国大学農科大学（札幌農学校の後進、のち北海道大学）予科教授在任中の1913(大正２)年、札幌市(現北区)北12条西３丁目に自邸を建設した。



図3-3-1　旧有島武郎邸(1985年撮影)

腰折れ屋根や瀟洒な菱組格子の上げ下げ窓の外観が特徴的な住宅で、平面では中央階段ホールまわりに諸室を配置し、各室はホールから扉で入る独立性の高い設計とされるなど洋風志向が強く働いているが、内部では畳敷きや床の間付き座敷の取合せとなっている。

外観洋風、内部畳敷きという和洋折衷の形態は、北海道では特に珍しいものではなく、例えば明治期函館市街地住宅などにはよく見られるものである。ただし、いずれも襖、障子を建てこんで続き間とする在来和風の形式を採っており、この住宅のように独立性の高い部屋構成と畳敷きの組合せは特異といえるものである。もちろん1873(明治６)年の札幌の開拓使洋風官舎までさかのぼれば、同様の組合せがなかったとは言い難いが、この徹底した洋風化はやがて放棄され、1878年以降の官舎では外観は洋風でありながら和風住宅の平面構成を採用している。明治後期以降、続き間座敷、洋風応接室からなる中廊下型平面の中流住宅が主流であったなかで、この住宅のような平面構成は先進的といってよい計画であった。

創建時の有島武郎邸

有島邸は、札幌市北12条西３丁目の南西隅、約 406坪の敷地にあった。敷地西側西４丁目通りに門を開き、ここから西向きの正面玄関に入った。

外観は、亜鉛鍍鉄板一文字葺き、木造２階建て腰折れ(マンサード)屋根の主棟を中心に、正面西側には三角ペディメント風の意匠をみせる切妻２階建て玄関棟を、北側に平家建て切妻屋根の従棟を突出させ、南と北東に下屋を付けていた。

腰折れ屋根西面に玄関棟をはさんで対称に屋根窓を配置し、東面中央

にも同形の屋根窓がみられる。南側下屋の引違い窓以外の開口部では、井形と菱組の意匠を組み合わせた繊細なサッシュ割りを施している。

主棟は、梁間30尺、桁行35尺、玄関棟は梁間９尺、桁行６尺、北側従棟は梁間15.5尺、桁行20.75尺である。主棟の南側に奥行1.5尺幅15尺の下屋と奥行６尺、幅15尺の下屋が突出し、東側12×12尺の従棟に連続している。北側には奥行7.75尺幅20.5尺の下屋を葺きおろしている。

外壁は素木の下見板であった（図3-3-2)が、創建後比較的早い時期にペイント塗装が施されていたらしい。解体時には隅柱、開口枠とも全て白色に塗装されていたが、白色塗膜の下層に濃暗赤色の塗膜が残存しており、下見板の暗赤色と隅柱や窓額縁などのフレームを白色に塗り分ける意匠であったと考えられる。1957年以前の白黒写真にも明度の低い外壁と白いフレームのコントラストがみられ（図3-3-3)、1950年代まではこの色彩を踏襲していたと思われる。

住宅規模は、１階50.04坪(165.1㎡)、2階28.59坪(94.6㎡)、延床面積78.63坪(259.7㎡)。平面は、中央階段ホール廻りに諸室を配置し、主要各室はホールから扉で入る設計とされている。

１階は正面玄関に続く中央ホールをはさんで南に３室、西から10畳、10畳、8畳が並ぶ。北側西には扉脇にサービス用小窓がつく食堂(12×12尺)、４畳前室、８畳居室が１列に並び、東側3.5尺幅の脇廊下をはさんで、台所(10×14.5尺)がある。台所北側には浴室、洗面所などがあったはずであるが、創建時の姿を復原する手掛かりは発見できない。

南側西端の10畳は、付け長押を廻す表座敷である。南面は地袋棚の上に３連の上げ下げ窓をみせ、西面は床および床脇違い棚の構えとし、床左脇は幅 4.5尺ほどのアルコーブがとられ、菱組格子の小窓に内側小障子を建てこんでいた。北面は木地あらわしのクリア塗装の扉が建てこまれ、東面南端３尺幅の開き戸で東隣の10畳と連絡していた。

中央10畳(図3-3-7、8)は、南側に縁側(「サンポーチ」[25])をもつ家族居間と思われる。東側８畳と扉で通じており、この部屋が「武郎の書斎」[26]との伝聞もあるが、子供室とも考えられる。

食堂は、北西に物入、東面に扉と扉脇サービス用小窓があり、食卓、椅子を使用していた(図3-3-9)。

北端従棟内の８畳および前室は４枚引き襖で仕切られ、同居学生の居室に供されたと思われる。

８尺幅のホール東端の折り返し階段は２階に通じている。２階は中央ホールを中心に、南側２室(15×12尺、10.5×15尺)、北側2室(12×12尺、12×10.5尺)、西側６畳の5室で構成され、北側２室のみ扉で続いている。西側６畳および北東端の部屋は真壁構造であるが、他はすべて大壁構造であり、この２室以外は板敷きの洋室であったのかもしれない。

南側２室は客間にあてられ、北向きに妻安子の部屋または病室があっ



図3-3-2　竣工当初の有島邸玄関(神尾行三蔵)

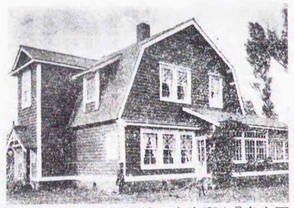


図3-3-3　1957年以前の有島邸(『森本厚吉』1957)

25：北海タイムス(1925.11.16)
26：昭和初期の管理人新井田胖次郎（1936年頃死去）の孫、鳥山瓔子氏による。

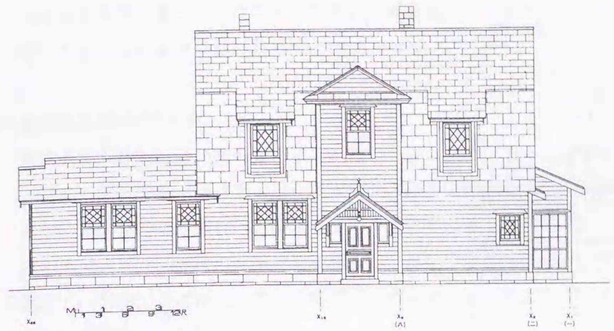


図3-3-4　有島武郎邸復原西立面図(1/300)

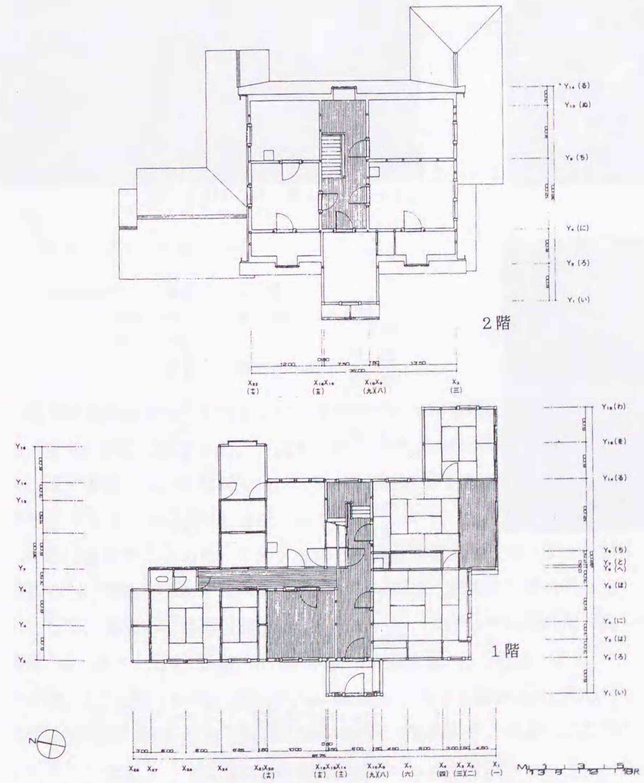


図3-3-5　有島邸復原平面図(1/300)



図3-3-6　有島邸復原南立面図(1/300)

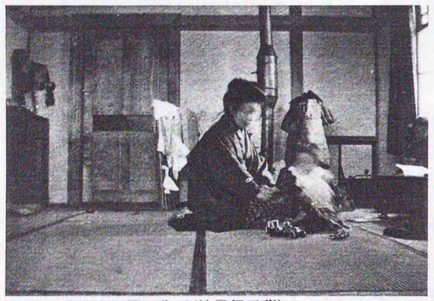


図3-3-7　中央10畳　北面(神尾行三蔵)



図3-3-8　中央10畳　南面(神尾行三蔵)

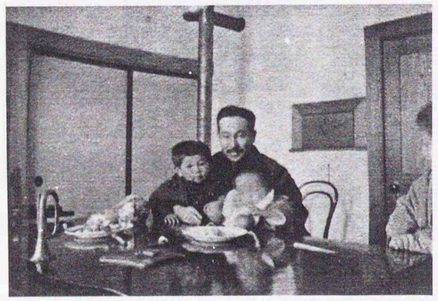


図3-3-9　食堂(神尾行三蔵)

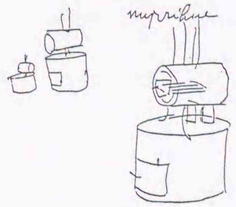


図3-3-10 武郎のストーブのスケッチ
(「手帳七」『有島武郎全集 第12巻』
筑摩書房、1982)

表坐敷　.5
裏〃〃　.4
納　戸　.6
安子室　.5
武郎室　.5
行　室　.4½
　　.29½
女中室　.2
玄　關　.1
風呂場　.2½
臺　所　.4
　　.9½

坐敷五坪　坐敷四坪　29½
　　9½
　　39.

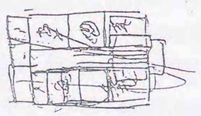


図3-3-11 武郎の住宅スケッチ
(「手帳十四」『有島武郎全集 第15巻』
筑摩書房、1986)

たという[27]。書斎は北向きであったという伝承[28]もあり、もしそうなら北側２室を夫婦で使っていたことになるが、書斎はむしろ玄関上の６畳の方がふさわしいように思われる。

有島武郎の設計について

有島武郎が建築に深い関心を寄せていたことは、ハーヴァード大学でC.H.ムーア教授の「中世およびルネッサンス期の美術」を受講[29]したことや、留学後の欧州旅行の日記からも伺うことができる。作品『迷路』では主人公Aが「M教授の建築史を聴講」し、日記にはゲーテの家や美術館などの見取図が描かれ、ローマのパンテオンでの感動なども『旅する心』に残されている[30]。

さらに日記や手帖に見出せるように、有島はしばしば住宅の設計に関心を寄せることがあった。1916(大正５)年４月５日の日記に「夜、英郎が我孫子に建てる家の設計をして過す」とあるのもその１例であるし、手帖にも住宅の間取りを考えたらしい数葉のスケッチが散見される（明治41「手帖七」、明治43～44「手帖十」)。「手帖七」の間取りスケッチのあとには、ストーブの考案スケッチも描きつけられ、生活改善への意欲もうかがえるのである（図3-3-10)。

さらに「手帖十四」(年次についての明確な記入はないが、1911(明治44)年８月頃までのものと推定される）には、新居関連のメモ、および新居平面に類似のスケッチがみられる。

メモは、以下の表記である。

札幌區北十二條西三丁目二番地
一、宅地　表口十五間　奥行二十七間
一、坪数　四百五坪
一、一ヶ月貸料　三圓五十一錢

住所は新居建設地に相当するが、番地はその後18番地に改められている。宅地の表口(間口)奥行、坪数もほぼ正確で、1984年調査では 15.06×27間と実測され、面積405坪は、1940(昭和15)年10月14日付けで「表示更正」が行われ、406坪62と更正されている[31]。

さらに注目されるのは、そのメモから数頁あとのスケッチ（図3-3-11）であろう。中廊下の左右に部屋を配置する平面は、規模や下屋の有無は別として、遺構の主棟の平面形によく似ている。スケッチの前には「表座敷 .5　裏〃〃 .4　納戸 .6　安子室 .5　武郎室 .5　行室 .4½　女中室 .2　玄關 .1　風呂場 .2½　臺所 .4」などの書き込みがあり、当初は延べ39坪程度の住宅を想定していたこともわかる。有島は、こうしたスケッチをもとに自邸構想を膨らませていったのであろう。

さらに有島自身の設計を裏付ける書簡もいくつかみられる。

1912(大正元)年 9月26日付有島武郎両親宛書簡
「農場よりハ八百円程入金有之　其中吉川出札ニつき尚入金之儀と存居候　家は頻りニ設計ニ入念致居候　其中清書供御覧可申候」

27：「病床のありし二階の室」(1915.3.14付安子宛葉書)「二階北向きのもとの安子の部屋」(1922.7.19付日記)「二階の客間の一方」(1914.5.14付有島生馬宛葉書)などによる。
28：有島武郎の姪暁子(有島生馬娘)が、1962年９月来札した際の思い出「叔父(武郎)子の西洋風の文化住宅を新築したのは大正２年８月のことで、２階の北向きの部屋を書斎にしたそうです。」による。(田中潜『有島武郎と札幌・四十忌の思い出』(『有島武郎記念誌２集』1963.5))
29：佐渡谷重信『評伝 有島武郎』(研究社出版、1978.8)
30：『有島武郎全集』(筑摩書房、1981.2)
31：『有島寮物語』（農林中央金庫札幌支店、1987.1.31)

翌13年７月31日付有島生馬夫妻宛書簡
「新築は妙なぬえ式のものと相成候得共田舎の事とて新聞にまで歌はれ候事気はづかしき極みに御座候。建具ががたつかず冬寒からぬ丈には相成候事と存居候」

などの「家は頻りニ設計ニ入念致居候」や「新築は妙なぬえ式のものと相成」という言い回しは、自身の設計に対してこそ合うように思われる。1912年秋に「独りで小さな所」に引越したのも、同じ敷地内での建築工事を監督する心づもりだったのであろう。

ところで1913年『北海タイムス』中の記事「古い建築　札幌區内の家」に次のような一節がある。

「．．．小田良治氏や有島武郎氏の住宅又新築の組合教会[32]エンゼル館[33]北二条郵便局など皆東京の技師に設計を頼んだものである」(1913.7.9)
「．．．専門の設計師に依頼したならモット廉くてモット立派な建築が出来たに相違ない、此点に於て小田良治君等の遣方がうまい、今新築中のは日本で有数の建築技師米人がアデナア氏[34]（独逸の材木商とは別人）の設計で現に其部下の荒木賢治氏[35]が来札して大工どもの遣方を監督して居る、今度の札幌エンジェル館や組合教会や北二条局の灰殻な建築は皆其部下荒木技師の設計であるそうな．．」(1913.7.10)

上の記事から有島邸は「東京の技師に設計を頼んだ」とあり、後段とあわせると、その技師は荒木賢治であるかのようにも読みとれる。しかし荒木良治氏(賢治３男)に問いあわせたところでは有島邸設計を思わせるような口承は伝わっていないということであるし、後段の記事も注意して読めば、有島邸を荒木設計の建築からはずしている。

おそらく有島自身の略設計に対して建築家からなんらかのアドヴァイスを受けることはあっただろうし、また実施設計図の作成を依頼したことがあるかもしれない。その場合札幌滞在中の荒木賢治の可能性も十分考えられるが、今のところそれらを裏付ける史料はみあたらない。

32：札幌組合教会。札幌市南大通西１丁目。1913年10月28日竣工。のちの北光教会。
33：札幌市北2条西6丁目。1913年８月24日上棟式、同10月17日開館式。
34：「がアデナア氏」はガーデナー氏の誤記。
35：荒木賢治(1881～1948)は、この時期ガーディナーの助手として小田邸の監理のため来札していた。賢治の３男、荒木良治氏は東京都目黒区下目黒２丁目19-2在住。

自邸建設まで

有島は、1896(明治29)年札幌農学校入学、1901(同34)年卒業後、1903年から３年半にわたりアメリカ留学ーペンシルヴァニア州ハヴァフォードカレッジ大学院およびボストンのハーヴァード大学専科ーとヨーロッパ遊歴を終え1907年月帰国、同年12月母校の英語講師（1908年６月から予科教授）の嘱託を受けた。翌1908年正月から森本厚吉宅[36]の８畳間に２ヵ月余り同居し、その後1913年の新居建設まで、およそ５度ほど転居を繰り返している。この間の足跡については、前川公美夫が『有島武郎の札幌の家』(1987.9.30）で詳説しているので、ここでは個条書きであげるに留める。

1908(明治41)年１月16日	北６西１－３森本厚吉借家宅同居
３月19日	学生監部勤務により予科寄宿舎恵迪寮（1905=明治38年竣工)南寮２階に寄宿[37]
10月10日	北２東３－９に移転[38]
1910(同　43)年５月１日	上白石町２に移転[39]（５月15日付書簡[40]）
1911(同　44)年７月頃	北８東２－12に居住（８月４日付書簡)、現北８東７栃内元吉借家[41]
1912(同　45)年５月18日	北３東３第二御料地内[42]に移転（５月22日付書簡）

36：森本厚吉は1907(明治40)年10月札幌農学校講師に赴任、北6条西1丁目の借家に新居を構えていた。
37：佐渡谷重信『評伝 有島武郎』(研究社出版、1978.8)
38：前川公美夫『有島武郎の札幌の家<上>』(北方文芸、1984.12)
39：同借家は「北海道開拓の村」(札幌市厚別区厚別町小野幌）に移築保存されている。
40：以下書簡は『有島武郎全集 第13巻』(筑摩書房、1984.6)
41：前掲14による。
42：前川公美夫によれば、現在の札幌市東区北5条東5丁目あたりという。

1912(大正元)年秋　北12西３－３に移転

この間1909年３月神尾安子と結婚、1911年１月長男行光誕生、翌1912年７月次男敏行が誕生している。

1912年秋、有島は新邸の敷地にあたる北12条西３丁目３番地に転居した。1912年９月26日付書簡では住所は「北３条東３丁目」であり、新住所が確認できるのは翌1913年５月20日付書簡であるが、1912年11月13日付書簡（足助素一宛）に「あまり学校に近く住った報いで此頃胃が悪くって不愉快だ」という記述がみられ、同月19日付書簡(志賀直哉宛)にも「僕は又引こして独りで表記の小さな所にゐます」などとあるし、札幌農学校、東北帝大農科大学札幌同窓会「第二十七回報告」(1912年12月発行)には、10月末現在の住所が「北十二条西三丁目二番地」とあり[43]、10月末か11月初旬には移っていたと思われる。なお、この「小さな所」は、新居竣工後もしばらく残っていたらしく、札幌尋常中学校教師上田寅次郎一家が「有島家の離れ屋敷を借りて住んでいた．．．和洋折衷の小さな平家建て」[44]が、これにあたると思われる。

この小さな家は、新居の裏、東方に位置していたと考えられる。建物資料として、『有島寮物語』(農林中央金庫札幌支店、1987.1)の中に、1979(昭和34)年に有島邸を売却する際の評価鑑定書があげられている。

記載によると、「木造亜鉛鍍鋼板葺　居宅　一棟　十五坪　此評価額金三一五、〇〇〇円(坪当り金二一、〇〇〇円)　同上付属　木造亜鉛鍍金綱〃〃板葺　物置　一棟　建坪　四坪　此評価額　金二四、〇〇〇円(坪当り金六、〇〇〇円)」[45]とあり、この物件が小さな家に相当するものであろう。

新居の着工時期を示す史料はみあたらないが、1913年８月竣工[46]から逆算すると、遅くとも３月初めには着手していたはずであるが、北国の条件を考えるとむしろ前年秋、つまり有島がこの敷地に移転する前後の起工と考える方が無理がないように思われる。

1913年７月９日付書簡(河内完治宛)に初めて新居にふれた個所がみられる。「僕ハ今自家之建築をして居る　此五年間毎年移転して借家住ミをして居た僕が贅沢過ぎる位の建築を始めた心理が一寸可笑しい　先ず気まぐれの業らしい　其中気が向いたらたたき売る丈けの事だ」。

また、同じ7月9日付前出『北海タイムス』に「民間でも此頃建ちかけて居る小田良治氏　や有島武郎氏の住宅．．．」とあって、市民の耳目を集める工事であったことがうかがえる。7月31日付書簡(有島生馬夫妻宛)の「新築は妙なぬえ式のものと相成候得共田舎の事とて新聞にまで歌はれ候事気はづかしき極みに御座候。」は、こうした新聞記事に対してのものである。

８月10日新居への引越しを済ませ、続いて23日東京から両親が訪れて９月８日まで滞在している（1913.9.17付原久太郎宛書簡)。

43：前川公美夫『有島武郎の札幌の家』(星座の会、1987.9.30) p.61
44：石上玄一郎『札幌の有島邸』(筑摩書房、有島武郎全集月報5、1980.8)　石上玄一郎氏は上田寅次郎の息子。
45：『有島寮物語』(農林中央金庫札幌支店、1987.1.31) p.143
46：前掲４に同。

有島武郎離札前後

1913年８月新居に移った家庭には、武郎両親にともなわれて一時東京へあずけていた次男敏行がもどり、さらに12月23日３男行三が生まれた。親子５人そろって平安な正月を迎えた。

しかし、この平安は長くは続かなかった。1914年９月下旬妻安子が肺結核を発病、11月には療養のため一家をあげて鎌倉へ移る。武郎自身も翌1915年３月いったん札幌へもどって農科大学に辞表を出し(休職扱い)、その月末には家財全てをかたずけて札幌を離れることになった。

その後の数年間、主の去った住宅はひき続き苦学生に一隅が与えられ、また他の部屋は貸していたらしい。離札直後の1915年4月16日付書簡(松尾修一宛)に「偖又借人有之候迄小生宅の一間御使用の儀一向不苦候。唯一つ御注意申上度儀は．．．本橋君は唯今非常なる窮境に臨み居られ、学資其他已むを得ざる負債も少なからざる模様にて、．．．生活食料等は全然別になされ．．．別賄の方便宜と存上候。此段御含み被下度候。」とある。

武郎も、その後何度かの札幌訪問にあたってこの家を使った。1916年10月ー8月に妻安子を喪ったあとー 狩太の農場から札幌へ足をのばし数日間滞在した。滞在中、定宿旭館に泊まりながら、ほとんど毎日のように日中を旧宅で過ごした。『観想録』と書簡を以下に引く。

> (1916年)10月23日　月曜「(狩太から)汽車で札幌へ行く。丁度八時に着く。．．．旭館に投宿する。」
> 10月25日　水曜「昼食後、岡田教授の来訪を受けた。それから僕の家へ行く。．．本橋がそこで僕を迎える準備をしていた。家は以前と同じだが、ただ少し汚れている。これまでこんな悲しい思いをしたことはない。過去のすべてが確実な、怖しい現実として眼前にあるのだ。」
> 10月26日「五番館へ行き．．それから家へ行くと．．」10月27日「午前、僕の家へ行った。」
> 10月28日「家へ行って、今晩しなくてはならない講演の準備を一生懸命にする。」
> 10月26日付足助素一宛書簡「安子が死んでから札幌の荒れ果てた家に入った時ほど悲しく思った事はなかった。僕は今日も朝から一日其処で過ごした。．．．明日も其処で過ごす、明後日も其処で過ごす。」

1917年11月、1919年７月の来札時には旧宅訪問の記載はみあたらないが、1922年７月19日ここーこの時は森本厚吉宅ーに一泊している。翌年６月９日自殺した有島武郎にとって、最後の訪問となった。日記を引く。

> (1922年) ７月19日 (水曜日)「．．．札幌に汽車が着くと森本君其他が迎へに来てゐてくれた。森本君之家に泊る事になる。．．．此夜二階北向のもとの安子の部屋で眠る。暑苦しい位なり。」

森本厚吉の購入

1921年武郎はこの旧宅を「北大に寄付して学費の必要な学生のために役にたててもらいたいと申入れた」[47]。大学(同窓会)は、換金のうえで寄付を受けることとしたため森本厚吉が購入、その代金5,000円は「故有島安子記念奨学金」ほかにあてられ[48]、住宅には森本一家が住むことになった。1922年夏に武郎が一泊したのはこの森本宅である。

47：森本厚吉伝刊行会『森本厚吉』(河出出版、1956.12)

48：『(北海道大学)札幌同窓会第四十五回報告』(1923.12)

1925(大正14)年11月16日『北海タイムス』には「有島さんが去ったあとを森本さんが引受た　亜米利加仕込の文化生活であの家の内部をスッカリ洋式に改造して仕舞った」とある。

森本厚吉は、有島武郎、吉野作造らとともに、1922年12月「生活問題を研究しその科学的知識の増進を基調として、精神的および物質的に文化の恩恵を民衆に普及する」ことを目的とした、財団法人文化普及会を設立した。文化普及会は大正15年、東京御茶の水に鉄筋コンクリート造４階建ての「文化アパートメント」を建設する（ヴォーリズ設計）ことになるが、会の設立にあたって札幌の自邸、つまり有島武郎旧邸をその基本財産とした。

森本厚吉は、1924年３月北大教授現職のまま東京に転住する（1932年退官）。札幌邸には来札滞在時の居室を残し、他を外国人教師などに貸していたらしい。先引『北海タイムス』記事は次のように続いている。

> 「森本夫妻は例の文化普及会の事業で東京に居ることが多くあの家全体を森本さんのみの住宅として置くのも贅澤だといふのでボロダストンといふ亜米利加の畜産の先生が住まってゐたこともあった、其後北大予科英語教師のブラウン氏夫妻が住まって森本博士も一緒に住んでいた」

そして森本厚吉は、ブラウン夫妻帰国を機にこの住宅を「上と下とに仕切ってアパートメント」に改造するつもりであったらしい。記事はブラウン夫妻の案内で見せてもらった内部諸室の説明が続く。

> 「階下の南側の部屋は十畳が二つ並んで、一つは違い棚の床の間が残ってゐるけれども一寸も不自然ではない、奥の部屋にスピーキングチューブ(話をする管)があって一つは台所に一つは二階に通じてゐる　南にサンポーチがついてブラウン夫妻はここで朝飯を食べるさうだ、この奥の十畳はアパートメントになると台所になるさうだが一寸惜い様な気がする　此側(そば)は前が女中室、後の方が台所に浴場が続く、アパートメントになるとこの台所が居室に早変りするのだそうだ　二階は南側に客間とベッドルーム　北面して居室、主婦室などがある　居室はアパートメントの食堂になり、主婦室は台所になるのだといふ、二階には浴室も出来るさうだ．．」

昭和初期には、“文化アパート”と呼ばれる高級下宿であったらしいが、1940年７月農林中央金庫は札幌支社開設にあたり有島邸を購入、職員寮に転用した。農林中央金庫「有島武郎寮」時代は1959年まで続いた。この間、1941年２月には黒沢明監督、森雅之主演の映画「白痴」のロケに使用されている。

北海道大学「有島寮」

1959年、三井武光[49]は農林中央金庫から「有島寮」の土地建物を購入、いったん1960年６月財団法人北海道大学住宅建設協会が建物の寄贈を受

49：北海タイムス重役、北海道教育長、クレドール興農社長などを歴任。

け、職員集会所として北28条東３丁目に移築したうえで、11月あらためて大学へ寄付する形をとった。北海道大学所属国有財産沿革[50]から関係分を摘記しておく。

「(北海道大学学長宛)寄付を受けようとする理由
．．．財団法人北海道大学住宅建設協会は同会所有する本学にゆかり深き故有島武郎が、永年に亘り居住したる住宅延 90坪312を本学用地内に原形のまま移築して本学に寄附したいとの申込みがあり、．．．学生の私淑する先輩文豪の遺跡保存の意を含め本建物の寄付を採納いたしたい
昭和35年６月10日
財団法人北海道大学住宅建設協会
理事長　　杉野目晴貞」

「(北海道大学学長宛)引継書
昭和35年11月15日
表記の財産竣工しましたので引継いたします。
記
種目；住宅建　　構造；木造２階建　　名称；職員集会所
数量；58坪812／（延べ）90坪312　　価格；2,947,000円　　備考；昭和35年11月15日竣工」

解体移築工事は、磯部木材(株)の請負で行なわれた。工費は上記建物本体2,947,000円のほか、電灯設備200,000円、打込ポンプ40,000円、排水設備 60,000円、合計3,247,000円であった。工事監理にあたった当時の責任者八戸謙一によれば、「解体材はトラックで運んだ。下見板も全て番号をふって移動した。板は6～8坪しかとりかえなかった。土台は半分程とりかえ、ナラの木を使った」というから、一応は忠実に再建されたようである。

その後、この旧有島武郎邸は職員集会所、独身男子職員寮、さらに大学院学生寮として、1983年3月の閉寮まで使用されてきた。

1983年７月３日、北海道大学将来計画専門委員会・施設計画委員会は、廃寮となった「有島寮」の取り壊しを決定した。これは新聞などで報道され反響を呼んだ。同月24日市民有志の有島寮見学会が行なわれ、席上「旧有島武郎邸を保存する会」(代表更科源蔵)が結成された。北海道大学としての保存は困難であったが、こうした市民運動にこたえて、1984年３月札幌市が建物を譲り受け保存することとなり、翌1985年「札幌芸術の森」へ移築修復、1986年７月から有島武郎旧邸として一般公開されている。

50：『北海道大学所属国有財産沿革（増補）』10冊の内№1

3-3-2:古藤猛哉邸ほか

古藤猛哉邸

豊平川と北１条通にはさまれた大通東７、８丁目の仲通り付近は、大正末期から昭和初期にかけて大学教授の住宅10軒あまりが集まり、「大学村」と呼ばれた区域であった。同村内大通東７丁目にあった古藤邸は、

1927(昭和２)年施主自らが設計し、伊藤組の施工で完成した[51]。

施主である古藤猛哉(1875～1959)は、北海道帝国大学工学部土木工学科鉄道工学第一講座教授。操車場や停車場の設計に関する研究を専攻していたので、自ら設計したことも十分うなずけるし、また自邸建築直前の欧米留学の体験も加味されたと思われる。

切妻の大屋根を強調し、黒々と塗装されたドイツ下見板壁と白く塗られた開口枠や破風との対比がひときわ目を引く住宅であった。

大島登喜代所蔵の住宅設計図は、縮尺 1/100の平面図および立面図を１枚におさめたもので、古藤の自筆と伝えられている。古藤自身「図面は丹念にひいておられた」[52]というから可能性は十分あるものの、図面タイトルは「古藤氏住宅設計図」となっている。自身の設計図に敬称をつけるのは不自然な感じもし、むしろ古藤の意向を受けて建築家が作図したものと考えたい。

図面には説明書として次のような指示がなされており、古藤の注意深い性格をよく示している。

一、主要室ノ外部ニ接スル窓ハ二重窓ニシテ、浴室、台所、便所窓ニハ鉄棒ヲ設ケリ
一、板ノ間ノ部分ハ全部二重張リトス
一、井戸深サ五十尺ニシテ自動スイッチ圧力槽ヲ設備シアリ台所、洗面所、浴室、庭園ニ給セラレル
一、浴室ノ釜ヲ別ニ設ケ、其湯ヲ洗面所、台所ニ導ケリ
一、電燈配線壁中ハ「コンジットチューブ」ヲ使用ス
一、基礎ハ四尺五寸掘下ゲ一尺厚、玉石地業トス
一、本工事ニ使用セル木材ハ坪アタリ四石二ー三斗ヲ要セリ

１階平面は典型的な中廊下型で、続き間はなく、各室は独立し、出入りは扉による。廊下の南側に手前東側から応接室兼書斉(18×15尺)、寝室(和室)(10畳)、居室兼茶ノ間和室(8畳)、女中室(4.5畳)と居室部分をすべて南面させ、寝室と茶の間の南側を４尺幅の縁側としている。玄関広間(9×9尺)の北側に階段室、広間に続く中廊下北側に便所、化粧室、浴室を配置し、中廊下両端にドラフト(空気の流れ)防止用に扉を設けている。廊下の西端は台所(9×15尺) に通じ、台所の北側を４尺幅の土間としている。東端に釜場を置き、釜場の湯は洗面所、台所にも供給されていた。土間西端に下流し(6×6尺)を置き、北側に物置土間、貯炭庫を付属しており、1973(昭和48)年時にはあったが、10年後の1983年調査では付属棟は撤去されていた。

図面に記入は無いが、応接室兼書斉と寝室間、茶の間・女中室間には円形ペチカを採用していたといい、1973年調査時には書斉・寝室間のペチカのみ遺存していた。寝室の東面押入脇の床にあたる部分に無造作に突出しており、炊き口も寝室側に面している。和室のしかも床部分に洋風ペチカが顔をだす様はかなり異様であるが、体裁よりも暖かさをとるという古藤流の住宅改良への強い意欲が感じられる。また各室には当時

51：大島登喜代談。
52：北海道大学工学部名誉教授北郷繁による。


図3-3-12 古藤邸北東外観

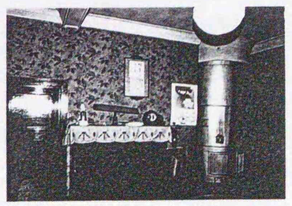


図3-3-13 応接室の円形ペチカ

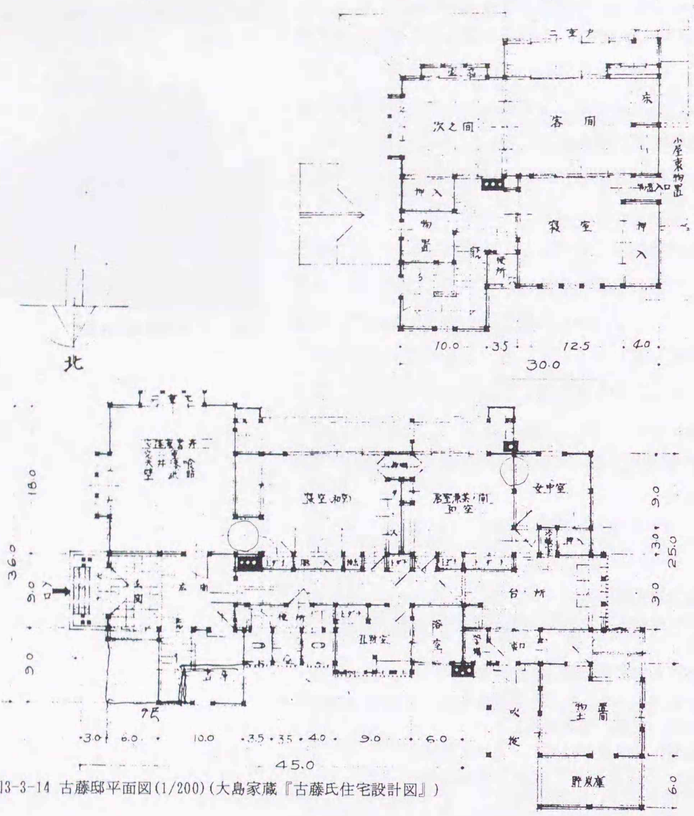


図3-3-14 古藤邸平面図(1/200)(大島家蔵『古藤氏住宅設計図』)

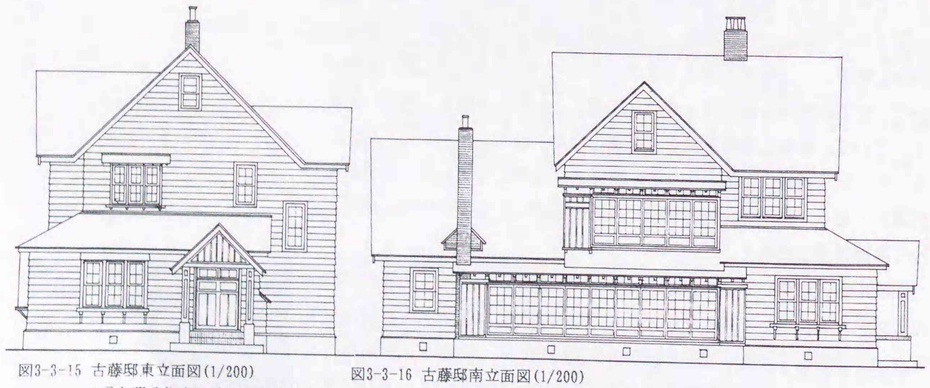


図3-3-15 古藤邸東立面図(1/200)
(『古藤氏住宅設計図』より作成)

図3-3-16 古藤邸南立面図(1/200)
(『古藤氏住宅設計図』より作成)

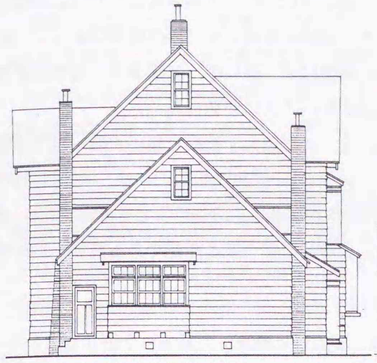


図3-3-17 古藤邸西立面図(1/200)
(『古藤氏住宅設計図』より作成)

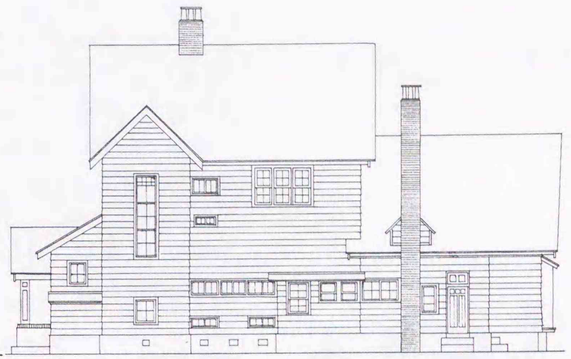


図3-3-18 古藤邸北立面図(1/200)
(『古藤氏住宅設計図』より作成)

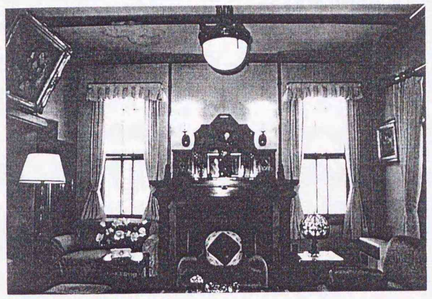


図3-3-19 大原邸応接室

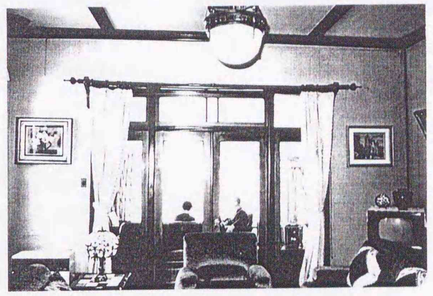


図3-3-20 大原邸応接室、温室

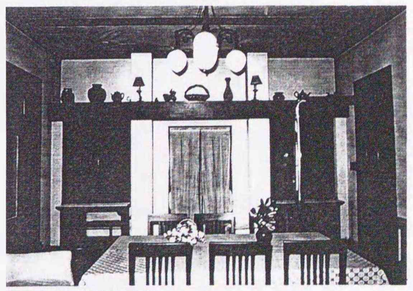


図3-3-21 大原邸食堂

珍しかったコンセントや台所に通じるベルが備えられたという。

２階は、南側客間(10畳)と次之間(８畳)、北側寝室(12.5×12.5尺)であり、３室とも続き間である。客間の南側に４尺幅の縁側があり、二重戸を建て込んでいる。客間の西面は床、違い棚、床脇書院の座敷構えをみせている。寝室には小屋裏物置への入口があった。

1938年古藤教授の退官離札後、北海道大学教授守屋美賀雄（理学部数学科当時助教授）が入居、1950年9月守屋教授転勤により、大島信(1975年死去)が購入入居した。 225坪の敷地は、1963年頃地主足達シンジ(漢字不明）より購入している。大学村に唯一残る洋館であったが、1988年８月取り壊された。



53：大原達談。

図3-3-22 大原邸南側外観(北海道大学建築工学科住居地計画学講座蔵)

大原卯吉邸

100坪を超える広大な敷地に建つ延べ面積約150坪の大邸宅である。

1925(大正14)年から３年間にわたる工事を指導監督したのは、建築に旺盛な興味を持った施主の医師大原卯吉であり、小島与一の請負で1927年に完成した。「英国のホテルを範として」[53]計画されたというが、大きな半切妻の屋根は、あたかもフロックコートを着た英国紳士のようである。

１階を灰色系、２階を薄茶系のモルタルで仕上げた木造２階建てで、西側を切妻、北側は半切妻屋根の妻面をみせ、南側に温室や座敷、２階の展望室などを張出して表情豊かな外観を作り出している。

１階は、玄関ホールの南側に応接室、食堂、座敷(８畳)が並び、西から北にかけて台所、ボイラー室、便所などが配されている。食堂前には広縁がとられ、西の座敷と東の温室を結んでいる。温室は、もとは屋根もガラス葺きであったという。２階の居室も南面し、主寝室、子供室などが並び、さらに藻岩山を望む六角形の展望室が張出している。

当初から石炭ボイラーの温水暖房が採用され、ホール、廊下、階段、温室に至るまで放熱器が設置され、応接室では飾りの付いた鏡付き暖炉風に、ホールや食堂では天板付きの暖炉風アルコーブに納めるなどの工夫も見られる。

中谷宇吉郎住宅

「雪は天から送られた手紙である」と物理現象を詩的に表現した名言を残し、また人工雪の研究者として世界的に知られる中谷宇吉郎は、物理学者としての科学的業績はもちろん、多くの随筆や余技の墨絵でもすばらしいものを残している。

宇吉郎が英国留学を終え、北海道帝国大学に赴任したのは1930年、30歳の時である。1936(昭和11)年肝臓ジストマのため家族とともに伊豆の伊東温泉で療養生活を２年間続け、その間に書いた随筆を収録したのが

最初の随筆集『冬の華』(甲鳥書林、1941年)である。

伊東の生活ですっかり健康体に戻った宇吉郎は、「三年間の伊豆の生活で折角蓄積した、自分や家族たちの健康を、札幌の冬の間に失はない」[54]ために、また北海道の資源開発関係のインフレのあおりで、適当な借家も見つからないこともあって、自ら南４条西16丁目に防寒住宅を設計したのである。

54：「生活の実験」(中谷宇吉郎『續冬の華』1940.7.5) p.362

この住宅については『生活の実験』(『続冬の華』)に詳しいが、また当時の北海道住宅の問題点についても鋭く言及している。

「冷気の侵入は、硝子面を通して、傳導で熱が逃げるのが主な原因であるが、多くの北海道の人々は、それを隙間風のせゐと考へてゐるらしい。そして窓や戸の隙間に目張りをしてそれを防がうとする」[55]「床から畳の隙間を通って侵入して来る冷い空気と、畳や床を通しての傳導による熱の損失とによって、暖房設備から放散される熱は、大部分その儘外へ逃げている」[55]「ストーブを眞赤に焚いて、温った空気を天井に逃がし、冷い空気を床下から吸ひ込んで、まるで住宅に風洞の役目をさせてゐるやうな場合もある。」[55]

55：「生活の実験」pp.358、359

こうした点を踏まえ、次のような条件を設定した。

1．寒国の生活に適したフレキシブルな畳式住宅とする。
2．室内の温度分布、埃の問題から、石炭ストーブではなくペチカを採用する。北海道のペチカは、外側の鉄板を例外なく銀色に塗ってあるが、白い光った面は熱線の輻射には最悪であるから黒く塗る。
3．熱の散逸を極度に防ぐため、家の外気に接する面を出来るだけ小さくする。それには円い家が一番良いが、真四角な家で我慢する。
4．廊下は、家全体を均一な温度に保たない限り、煙突を横にしたような役目となり、家内に対流が起きて熱の散逸を助けるので全廃する。
5．廊下なしで各部屋を独立に使うため、台所を広くとり、流し台と調理台を真中に置くアイランド型とし、周りを廊下がわりに使う。
6．間取り、方位は家族の注文により決定。ペチカを中心に、10畳３つと８畳の４室とし、南側に寝室兼居間、座敷、北側に茶の間、台所、風呂場を配する。
7．南側を全部硝子戸にし、内側に雨戸をいれる。雨戸は、保温と体裁との両方を兼ねて、外側ベニア板、内側布張りの襖で、断熱戸的工夫である。

こうした条件によってひいた簡単な図をもとに、友人の紹介で、札幌では「進歩的な」[56]Ｏ君という若い建築家に依頼した。Ｏ君は遠藤明久博士によれば奥野修造であるという。博士が奥野から直接聴いた話しでは、中谷説の半分ほどは奥野説とのことである。この辺の真偽はともかく、「金をかけないわりにはなかなか上等」[57]な住宅は、1939(昭和14)年８月に完成した。完成してから半年間の住みごこちはどうであったのだろう。

56：「生活の実験」p.373

57：「生活の実験」pp.376、377

宇吉郎は次のように書いている。

「日光の方も通風の方も申し分なくいって、子供たちが一度も病気をしなかったところを見ると、先ず及第である。十一月になってペチカに火を入れ

だした（略）黒く塗ったペチカの姿が畳の部屋によく調和し、それから出るほのかな暖かみが、四部屋即ち家の大部分を均整に暖めてくれた。(略)石炭を炭箱に一杯半宛朝夕二回焚きだしたが、外気が零下五度程度では、それで充分であることが分かった。一日中の室温の最高と最低との差が約五度くらいであった。」[58]

「今度の家の装備では、室内の温度分布の不均整を、従来の家の場合の二分の一及至三分の一にすることができた」[59]

「日当たりの良い部屋の気持の良さ暖かさが、如何に萬遍なく家を暖めてくれる日光に負ふところが多いかゞよく分つた。」[60]

実験は成功であった。設計条件や実験結果を読むと、近年のソーラーハウスや省エネルギー住宅と基本的な考え方は同じであったといえるであろう。この小住宅は1975年春に取り壊されている。

58：「生活の実験」pp.377、378
59：「生活の実験」p.381
60：「生活の実験」p.380

3-4　棟梁設計の洋風住宅

知識人たちの住宅に代表される文化住宅は、庶民には手の届かないごく少数派にすぎなかったが、北国にふさわしい新しい住宅として新聞紙上にとりあげられものもあって、理想の住まいへの憧れとして、庶民の関心を呼ぶことにもなった。もちろん、一般の市街地住宅は、大工棟梁の手に委ねられることのほうが多かったが、棟梁の設計施工で建てられた洋風住宅の中にも、注目されるものが少なくなかった。1983(昭和58)年に実施した「札幌における大正・昭和初期の住宅遺構調査」で、多くの興味深い住宅を採取したので、うち４件ほど紹介しておきたい。

庄司藤吉住宅

札幌市中央区の北１条通と豊平川左岸通にはさまれた大通東10丁目の仲通りに西面して建っていたこの住宅は、1922(大正11)年建設のものである。外観洋風、内部和風の簡素な住宅で、札幌における平均的な庶民住宅として、また棟梁自らが設計施工した住宅の一例として挙げておきたい。この住宅の建つ周辺は、かつて古い木造の長屋が建ち並び庶民的な下町といった雰囲気が残っていた一画であったが、1983年調査時にはこの住宅が残るだけとなっており、1993(平成５)年にはこの住宅も取り壊されている。


図3-4-1　庄司宅北西外観(1993年撮影)

この住宅は、大工棟梁であった庄司藤吉(1886～1960、竣工当時36歳)が自ら設計施工したものである。一部２階建てであるが、これは1933年の増築で、竣工時には平家建て切妻屋根柾葺き、基礎は束石であった。1933年の改造時に、コンクリート製布基礎に、屋根をトタン葺きとした。２階はもっぱら顧客に開放したショールーム的な性格の部屋であったという。1953年には東側浴室部分の増築を行なっている。

下見板張りのごく平均的な市街地住宅で、窓廻りもアルミサッシュに変更されるなど当初の面影はかなり失われているが、外壁から３尺ほど突きだした玄関には切妻屋根をかけ、引違い戸左右に漆喰小壁をみせ、欄間上の妻壁は漆喰壁梁や束型を表す意匠が目を引く。

1933年頃の平面は、西側正面中央の玄関を入ると９尺四方の玄関土間で、３尺幅の廊下越しに８畳の茶の間があり、南側の主座敷８畳と続き間となっていた。主座敷の南面に床と仏壇が設けられている。続き間の東側は１間幅の縁側となっているが、当初は３尺幅の縁側で、庭に面していた。この庭はかつて藤吉が仕事用の材木置場、作業場として使用し、常時いた２～３名の職人たち[61]もまた縁側から出入りしたという。

61：庄司博喜による。

玄関北脇は、かつての応接間兼事務室(12×12尺)である。北面の上げ下げ窓は内側に両開き戸を建てこむ２重窓としている。奥行の深い物入の壁は、当時の新聞の紙型を張って仕上げている。茶の間の北側は、３尺幅の廊下をはさんで出窓付きの事務室、旧食堂(9×12尺）であるが、当初は茶の間北側の間仕切壁はなく、廊下と旧食堂まで畳を敷き、大きな広間として使うこともできたという。事務室の東側は、階段をはさんで食堂と台所(12×12尺)であるが、当初は東端流し部分の幅１間ほどは土間であったという。

増築された２階は、北側に廊下を置き、東側和室６畳に続き、西側が床と違い棚を構えた和室８畳である。仕事の見本として造作した部屋といわれ、材料を吟味し、念入りに施工されたという。

庄司藤吉は、札幌市内の田上義也設計の太秦邸(10-5-5参照)の請負業者として知られており、昭和初期から戦後にかけて札幌で活躍した棟梁である。1886(明治19)年山形県鶴岡湯田川村の米穀商の家で生まれ、札幌の斎藤製材業に嫁いでいた姉を頼って渡道したようで、弟喜一郎（42歳で死去）も大工であった。

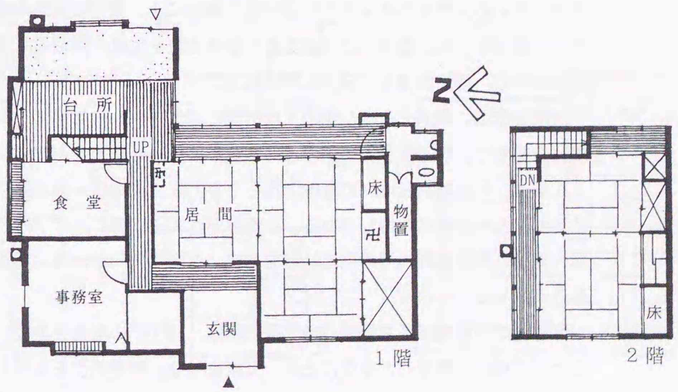


図3-4-2　庄司宅復原平面図(1/200)

藤吉は設計も得意とし、弟が棟梁として施工することも多かったという。職人気質の強い人で、現場ではだめ工事部分の材料をはがすなどの一徹さもあり、設計者とはいつも喧嘩が絶えなかったという[81]。藤吉には子供がなかったため、喜一郎の４人の子供、正喜、重喜、直喜、博喜のうち、博喜を養子にした。

1944(昭和18)年設立の北海道大工業組合連合会の初代組合長を務めたが、同連合会は翌年には北海道大工工事業統制組合に改組、さらに同23年には北海道建築工業協同組合に改組されている。



図3-4-3　富樫別邸南西外観

富樫長吉別邸

札幌市中央区北３条西16丁目にあるこの住宅は、札幌の海産物加工販売業富樫商店の初代富樫長吉(当時58歳)の別邸として建てられた。富樫家は南２条西１丁目に店をもち、本宅として居住していたが、1928年加工工場(現住宅の北隣、愛育病院敷地)隣地に、接客用別宅として建てたものである。敷地はゆったりとして庭木が繁茂し、西側庭園（造園は集楽園）には池が掘られ、かつては南の知事公館敷地の湧水を引いていた。

建物は内外とも原形をほぼ残しており、半切妻屋根のポーチ、ベイウィンドウ、軒先の菱形タイル、屋根窓など、様々な外観デザイン要素を展開し、白い外壁と隅柱や開口枠の暗い赤褐色の塗り分けが、実に楽しげに調和している。

正面5.5間、奥行5間ほどのほぼ正方形平面の寄棟屋根の住宅主棟は、南側正面と西面の外観意匠が目を引く。軒下から窓枠上まで黒っぽいモルタル壁を廻し、南側正面は窓枠縦がまち位置に白いスティック（棒状装飾）を伸ばし、中央に菱形タイルをはめて軒廻りを引き締める。２階には欄間と引違いガラス戸をはめた縦長窓を等間隔に並べ、１階東端に半切妻屋根の玄関ポーチ、西側にベイウィンドウ、さらに西端に上げ下げ窓を配置している。

ポーチの妻面は、モルタル壁に白い３本の持送りとスティックの装飾をみせている。ベイウィンドウの正面欄間部分には、菱形の黄色の色ガラスを嵌めている。部分的に色ガラスをはめこむ手法は、階段昇り口小窓や便所窓、浴室前室など随所にみられる。

西面２階は、軒下モルタル壁の下に引違いガラス戸８枚を建てこむ欄間付き連窓で、窓上部左右に正面と同じ菱形タイルを嵌めこんでいる。

１階は、主棟幅いっぱいの縁側であったが、現在は南側一部を張り出してサンルーム風に改造している。主棟東面は２階北側に上げ下げ２連窓、南側に階段室採光用の引違い窓を付け、１階は1950年改修の応接室部分が張り出している。

無塗装の２階建て下見板張りの北側従棟は、1950年の増築部分で、主棟と同じ棟梁小島与市が手掛けたが、戦後まもない経済状況を反映して

か、質はあまり高くなく、維持状態もあまりよくない。

主棟の平面は、洋風の外観とは対照的に、和室の組み合わせとなっている。南東側玄関部分(15×15尺)は、３尺幅の階段室、奥行６尺の土間、３尺の式台、４枚引きガラス戸をはさんで６尺のホールで構成されている。竣工時にはホール正面、現応接室部分は８畳和室、玄関左手に10畳の続き間が並ぶ。南側は寝室、北側は茶の間で、茶の間にはかつて炉が切られ、自在鍵が天井から下がっていた。続き間西側を縁側とし、茶の間境に猫間障子、寝室境に雪見障子を建込み、上部を竪桟に菱形組子をデザインした障子欄間としている。

２階は接客用で、南側と西側にＬ字型に廊下を周し、西側に10畳２間、東側に南から８畳、６畳、納戸(４畳半)を並べている。西側北座敷は付け書院、床、棚を備え、東側の６畳と４畳半は納戸として使用した。西側和室は、時には隣の８畳も含め、広間として宴会や結婚式などに利用されたという。

設計者の棟梁小島与市は、富樫家の初代長吉の妻キシに可愛がられ、よく富樫家に出入りし、富樫家の借家の仕事なども手掛けていた。

小島与市の長男幸治(調査時北大農学部林産科教授)によれば、与市は

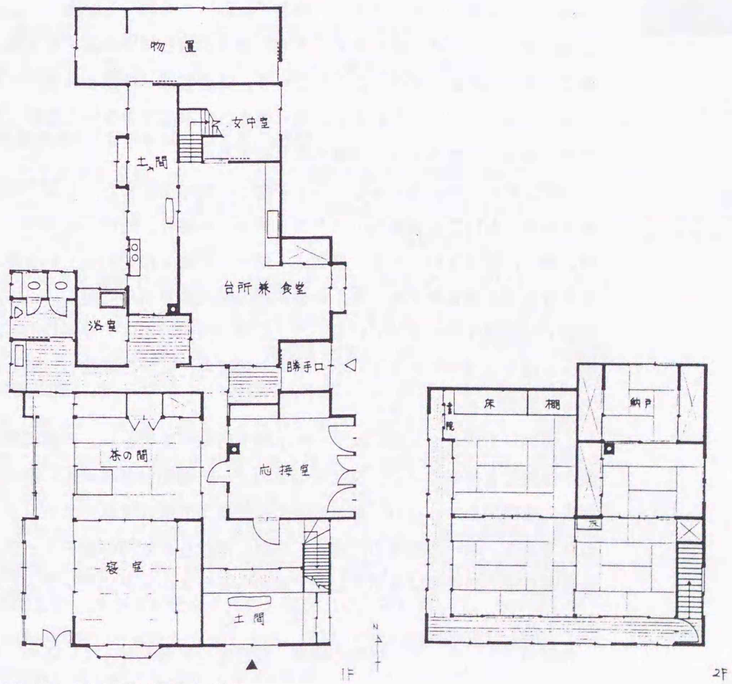


図3-4-4　富樫別邸平面図(1/200)

現在の山形県温海市で1895(明治28)年に生まれた。父の与惣治(1871=明治4年～1930=昭和5年。59歳で没)も大工棟梁であった。山形県の高等小学校卒業後、先に渡道していた父を追って16～17歳のころに来道し、父のもとで大工仕事を手伝うかたわら、札幌区立商工補修学校（夜学、現啓北商業)で、設計製図などの基礎を学んだという。

与市の仕事は主に住宅が多く、現存する大原邸(1927年、3-3-3 参照)や斎藤邸(1934年)などが知られているほか、南大通西４にあった木造３階建て「札幌ホテル」などの仕事も知られる。与市は、趣味にもモダンなところがあって、1921年頃から写真に興味をもち、ドイツ製カメラを手にいれたり、展覧会に出品、入賞したこともあったという。北海道大工工事業統制組合の西支部長(当時与市は南５西10に居住)を務めたこともあって、組合長であった庄司藤吉とも親交があったと聞く。戦後も仕事を続け、1975年11月80歳で生涯を閉じている。

斎藤秀雄邸



図3-4-5　斎藤邸東外観

62：秀雄夫人、斎藤初恵による。

大通西28丁目の仲通り附近にはアメリカ領事館や市長公館もあり、円山公園の東に接する閑静な住宅街ということができる。この住宅地の一画、250坪(825㎡)の敷地に建っているこの住宅は、昭和初期のモダンデザインをよく表現した住宅である。

1934年、味噌醤油醸造販売業斉藤甚之助(当時51歳)が新婚間もない娘夫婦のために建てたものである。婿養子に入った秀男（旧姓磯谷(いそがい)、当時29歳）は京都の公家出身で、この新居は秀雄と親交のあった京都の筆屋・熊谷鳩居堂をモデルにしたという。鳩居堂は「洋館と和風が一緒になった建物」[62]といわれるが、取り壊されて確認できない。設計・施工は、富樫邸と同じく大工棟梁小島与市であった。

外壁はモルタルに淡い栗色のペンキ塗り、腰は正面まわり玄関・居間兼応接室にかけては黄褐色のスクラッチタイル貼り、他は下見板張りで、淡い緑色に塗装されている。屋根は一部一文字葺きに変わっているが、もとは全面瓦棒葺きであった。寄棟屋根の軒天井を水平に廻し、正面は切妻で頂端部を折り下げている。ここに四分円形のポーチが張り出し、扇状の緩勾配屋根をかけている。ポーチ袖壁も円弧状に湾曲し、隅丸のアーチ風開口としている。

正面ポーチ周りや２階にはアーチ小窓や円窓が多用され、外観に表情豊かな変化を与えている。玄関室南側のアーチ欄間付き嵌め殺し窓は、中央に葡萄房をあしらい、青と黄色の色ガラスで構成されたステンドグラスである。ホール正面の円窓は、花瓶に活けられた花のモティーフ、階段踊り場の矩形窓は亀甲型に青と黄の色ガラスのステンドグラスとされている。

内部のうち、ホール、居間応接室、階段室は原形を保っているが、他

は1945年から '51年まで進駐軍の接収時に大幅に改変されている。平面は中廊下型を基本とし、ホール南側に大きく張り出してベイウィンドー付きの居間応接室がとられている。壁、天井は漆喰で仕上げられ、天井中央にメダイオンがあり、当初からの照明器具が下がっている。かつてはダンスなどにも利用された部屋という。ホール西側に洋室の食堂があり、6、4.5、10畳の座敷が西に連続していたが、食堂から4.5 畳までが１室の大きな居間に改造され、10畳奥座敷も洋室に変えられている。食堂と、6畳、4.5畳前の縁側はそのまま残されている。廊下北側には、台所、浴室、便所のサービス部分が並ぶ。２階は、南側に縁廊下をもつ、6、8畳の続き間であったが、これも洋室に改変されている。

棟梁小島与市(1895～1975)については前項で述べたが、父与惣治は北7条西25丁目の第１鳥居前にあったという斉藤甚之助邸(1948年焼失。木造平家で300坪の床面積があったという)を請け負っており、その縁でこの住宅を手掛けることになったという。

棟梁のほか工事関係者は以下の通りである[63]。

配管	山中ポンプ	庭	高重庭師
左官	古市権作	屋根トタン	松崎建具
建具(内廻り)	森木建具	柾葺	新田葺屋
障子・襖	中沢馬車屋	土工	川野倉太郎
ペンキ	木村塗工店	障子	中沢養靖堂
洋塗内装	太田塗工店	畳	小熊辛四郎

63：ＵＲＢ建築研究所圓山彬雄調査による。

建設費は、12,789円10銭、室内家具は、当時開店したばかりの三越百貨店(1931年開店)に、カーテンは丸井百貨店に揃えさせたという。

大島信旧邸(旧カトリック札幌司教館)

北１条東６丁目、カトリック北１条教会敷地の東側にあるこの住宅は、1937(昭和12)年11月、大島信(竣工時42歳)邸として新築された。

この敷地には、それ以前ローランドという米人宣教師が住み、セピア色の木造２階建ての洋館で、幼稚園や英会話教室などを開いていたという。1936年、北２条東８丁目で酒造販売業を営んでいた大島信は、ローランドからこの土地を購入し、洋館を取壊し、親しかった宮大工棟梁吉井繁太郎(1904～)[64]に新居の建設を依頼した。間取りは大島の希望が大きく取り入れられ、「明るく、暖かい家」[65]を目指したという。南側に大きく開口部をとった平面計画であるほか、２重窓や外壁の間に建築紙やオガクズを入れるなどの工夫がなされているという[66]。

外観はほとんど当時のままの姿を伝えている。２階では寄棟屋根の軒天井をそろえて水平に廻し、階高を低く抑えて上げ下げ窓を壁の高さ一杯にあけ、スクラッチタイルの外壁仕上げとあいまって、水平性の強いのびのびとした意匠をみせている。２階の南側連窓の両脇と西面には円形の嵌め殺し窓が配され、昭和初期的なデザインをみせていた。

64：1982年調査時
65：登喜代夫人による。
66：吉井繁太郎による。

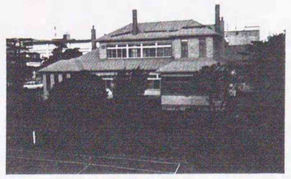


図3-4-7　旧大島邸南外観

１階は、一部南側でスクラッチタイル仕上げとする以外は、白ペイント仕上げの下見板張りである。

設計図が遺されており、竣工当初の姿がわかる（図3-4-8）。西側の玄関を入ると、右(南)側に応接室、正面に中廊下と階段、左に文庫蔵への渡り廊下が続いていた。廊下の南側に８、８、10(茶の間)畳の和室の続き間が縁側に面して並び、北側に便所、女中室、勝手口をまとめている。廊下は東側突き当たりから右に折れて、南北に廊下が伸びている。廊下の東側には、北から台所、食堂、和室(８畳)が並んでいる。２階は、南側の縁廊下に面して寝室(８畳)と座敷(10畳)が並ぶが、２室は廊下で分断されている。縁廊下は東側で鉤の手にまわり、10畳、８畳の続き間と結ばれていた。

大島信は、1950年旧古藤邸(**3-3-2** 参照)に移り、この住宅はカトリック司教館にかわり、1954年頃瀬野勇の設計施工で、表座敷、縁側を広間

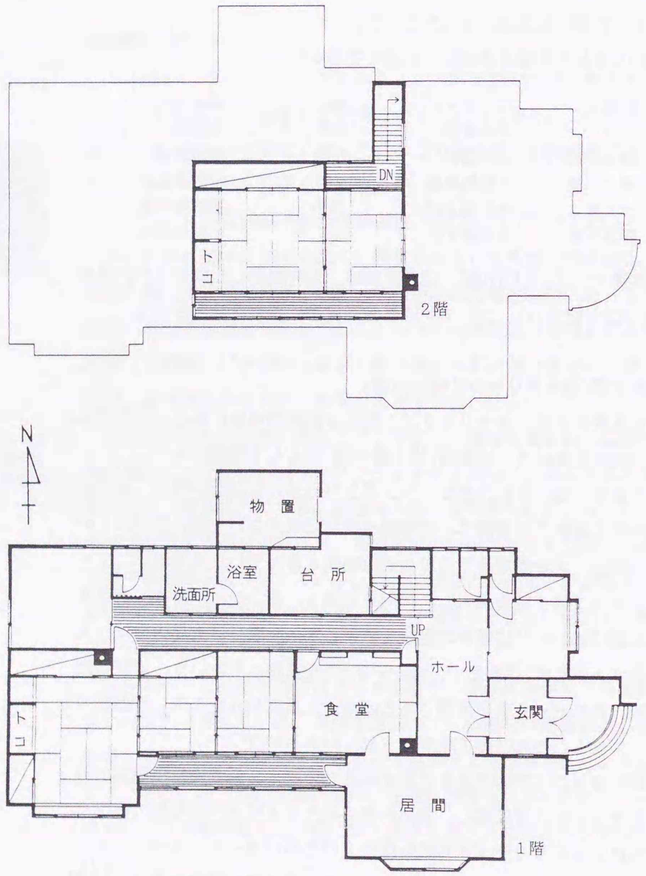


図3-4-6　斎藤邸平面図(1/200)
(北海道工業大学住谷研究室調査図面より作成)

(会議室)に変更するなどの改造が行われている。

棟梁吉井繁太郎は、1904(明治37)年生まれ。新潟県三島郡片貝村の出身で、家は代々の堂宮大工[67]であった。祖父は京都東本願寺の修復に新潟から招聘されたという伝八(６代目)で、父親は伝八の６男の繁治。繁太郎は繁治の長男として生まれた。

1913(大正２)年繁太郎10歳の年に、旭川妙法寺工事のため渡道する父親に家族と共に同行した。1919年３月15歳の年に旭川町立中央尋常高等学校を卒業後、同年４月から父が手がけていた札幌大覚寺山門建築工事に大工見習として参加した。この仕事で大島信の父、金造と知りあい、以後大島家の知遇を得たという。1923年頃から本格的に大工としての仕事を始め、1925年４月からは創成商工学校の夜学にも通うが、父の死去、仕事の多忙さで、翌年中退している。

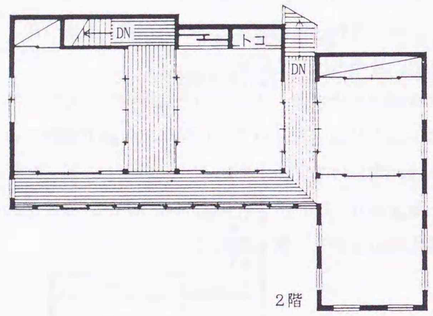
本格的な社寺建築の仕事は、1929年の当別禅寺全久寺からで、以後社寺建築が仕事の中心となったという。1964年に61歳で廃業するまでに、小品も含めれば社寺だけで30以上もある。代表作として、札幌諏訪神社(1934年)、小樽宝泉寺(1937年)、札幌北大寺(1945年)などがある。

以下吉井繁太郎の仕事を一覧しておこう。

名　　称	所 在 地	竣工年	備　　考
大覚寺山門	札幌(北10東11)	1920	大工見習
定山渓鉄道ホテル		1921	大工見習
松沢宅	札幌	1922	
柏野宅	札幌	1924	
定山渓鉄道石山駅		1926	
定山渓鉄道藤の沢駅		1926	
豊田宅	札幌	1927	
大覚寺五百羅漢堂・納骨堂	札幌	1927	
相沢宅	札幌	1928	
島田自転車屋	札幌(大通)	1928	
全久寺(禅寺)	当別	1929	
丹羽宅	札幌	1929	
(十勝の山奥の学校)		1930	
真正寺	厚真	1931	
某寺	滝川	1931	
光明寺	江部乙	1932	
文教寺	当別	1933	
法運寺	芽室	1933	
諏訪神社	札幌	1934	
遠藤宅	札幌(南３西17)	1934	
江南神社	札幌(篠路)	1935	
大成寺・鐘堂	当別	1935	
宝泉寺	小樽	1937	1935年設計
烈々布神社	札幌	1937	1936年設計
伊夜日子神社	札幌	1937	1936年設計
大島宅	札幌	1937	1936年設計
大覚寺・納骨堂	札幌	1938	1937年設計
覚王寺	上湧別	1940	1939年設計
某神社	月形	1940	
氷川神社	新冠	1941	
俊教寺	池田	1943	1941年設計 改築工事一時中断
北大寺	札幌	1945	1942年設計
某寺	北見(相の内)	1948	
某寺	上湧別	1948	
開法寺本堂増築及四ツ足門	根室	1949	

67：吉井越後源重行の名で請負記録があるという。

名　　称	所在地	竣工年	備　　考
法運寺・二重塔	芽室	1950	1949年設計
札幌光星高校修繕工事	札幌	1950	
法勝寺	御影	1951	1950年設計
某寺	御影	1952	
広延寺	芽室	1953	
妙覚寺	清水	1954	1953年設計
開法寺増築	根室	1955	
高桑宅	札幌	1956	
吉川宅	札幌	1957	
井上宅	札幌	1958	
全龍寺	茂尻	1960	1959年設計
斉藤宅	札幌	1961	
開法寺・庫裏	根室	1961	
柿田宅	札幌	1962	
自宅	札幌	1963	



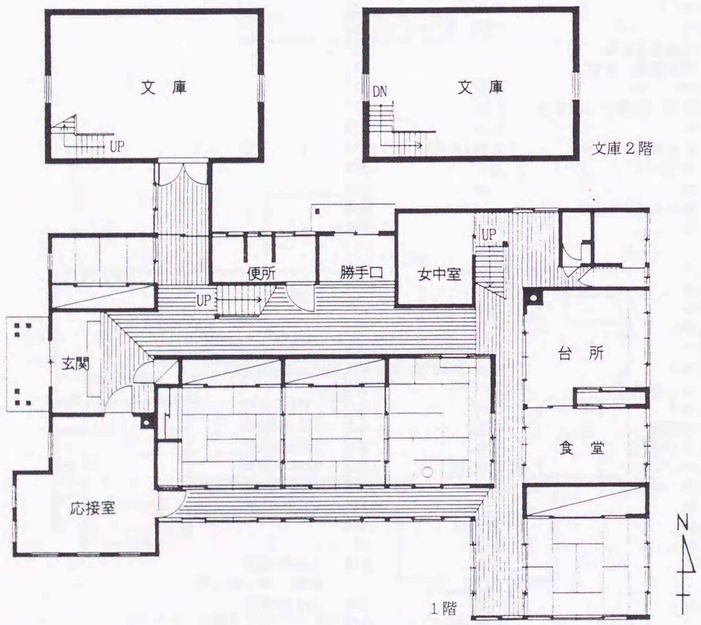


図3-4-8　旧大島邸平面図(大島家蔵『大島氏住宅之平面図』より作成)

3-5 近郊農家住宅

市街地の住宅ほど目立たつことはなかったが、近郊の酪農家でも、斬新な洋風住宅を建てるものが現われている。札幌近郊に建つ旧出納家住宅(1925年)や高倉左輔住宅(1933年)などは、理想的農家住宅のモデルとして注目されるものであった。

旧出納家住宅

札幌市厚別区上野幌の雪印種苗株式会社「ヌ・ポ・ロ・ファーム」内には、石造サイロと旧製酪所（雪印バター誕生記念館）および木造３階建ての住宅が遺されている。いずれもデンマーク農業の紹介者として知られる出納陽一が、デンマーク農法のモデル経営を実行した、宇納農場（のち出納牧場）の中心施設である。

腰折れ屋根の外観が特徴的な住宅では、室内すべてを板間としたり、酪農食（またはデンマーク食）と呼んだ洋式食生活を実践するなど、デンマークの生活様式を強く意識した生活様式[68]を展開する中心的役割をになった建物である。住宅には、実習生や家事見習の若い女性も同居し、出納夫婦は若い男女に、デンマーク農業やチーズの製造、デンマーク風の調理や家事の生活指導の場として家庭を開放し、人造りにも尽力したのであった。

木造３階建て一部平家の遺構は、上部で5/10、裾部で 12/10の急勾配の腰折れ屋根や、木地に防腐剤を塗った黒褐色の下見板張り外壁と白色ペイント仕上げの破風板や各階境の胴帯、開口部額縁、付土台などのコントラストが印象的な建物である。また幅広の欄間下に親子扉を建てこんだＴ字型の白い額縁をみせる東面玄関の入口開口の意匠も特徴的な意匠の一つとして挙げることができる。

腰折れ屋根をかけた梁間５間、桁行５間半の主棟は、南側に切妻屋根の玄関(9×6尺)を突出し、北側に平家の従棟(15×21尺＋15×15.5尺)をのばしているが、創建時の従棟部は、東側に桁行２間、梁間２間半程度突出していたと思われる。

主棟の上げ下げ窓は、額縁に笠木と窓台を付けた形式であるが、東西面の２階窓は同形式の窓を屋根上まで突き出し、６寸勾配の小庇をつけている。西面では、さらに３階採光用の屋根窓も２つみられる。３階両妻面の２つの小窓は、両内開きである。また主棟１階の東面には、窓台と４段重ねの重厚な笠木を備えた２つの嵌殺し小窓がみられるが、創建時には縦軸回転窓であったという。同様の小窓は西面にもみられた。このように全体は洋風窓の意匠を主としているが、１階東西両面では、２つの引違い２重窓の出窓が、まったく対称的に配されている。

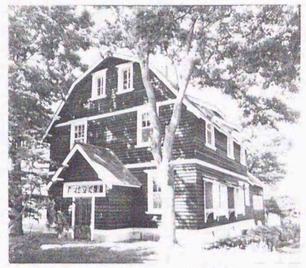


図3-5-1　旧出納家住宅南西外観

68：『出納陽一氏の面影』(同刊行会、1977.5)

裾広がりのコンクリート製布基礎のうち、主棟の東西面で北端部付近で基礎が切れて煉瓦積みとしている部分が見られる。旧写真でも確認することが出来るが、かつて地下室への採光用窓のあった部分であるという。

内部は、従棟部の一部については不明であるものの、主棟部分については概略復原することできる(図3-5-2)。 ここでは現状をふまえながら、創建時の復原平面について概説することにする。

遺構は1階44.200坪(145.86㎡)、2階27.500坪(90.75㎡)、3階23.375坪(77.14㎡)、延べ床面積95.075坪(313.75㎡)の規模である。

間口５間奥行５間半の主棟の南側中央に、幅１間奥行１間半の正面玄関を突出させた１階は、北東側に厨房、食料庫、洗面所を含む従棟（15×21尺）と、北西側に便所と北玄関を含む(15×15.5尺)の従棟を接続している。

正面玄関は、天井板張りで廻り縁をまわし、壁は漆喰仕上げ。北面に同形の片開き戸を２ヵ所建てこみ、西側は閉ざされ、東側は食堂に続く。食堂(15×33尺)は現在１室であるが、南側から２間の位置に袖壁が付き、さらに南側から４間の位置に６寸角程度の柱が立ち、創建時に間仕切が存在したことを示している。

食堂の西側室(現「１号室」)も現在１室(15×24尺)であるが、やはり南側から２間の位置に袖壁が遺存する。同形の２室であったが、北側室には階段が１間ほど食い込んでいる。食堂と西側室の間には円形ペチカが組み込まれており、創建時には同じ広さ(15×12尺)の４室が円形ペチカを中心に田の字型に配置され、東側は南から応接室と食堂、西側はいずれも予備室であった。北側の予備室ではチーズの梱包が行われたという。

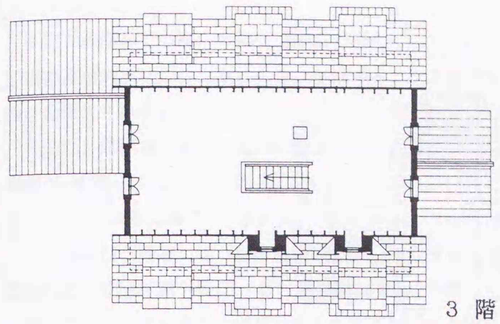
食堂の西側北寄りの入口は廊下に通じ、さらに西側現「２号室」(10.5×9尺)は食料庫として使用された。食堂北側、現状で独立柱が立つ付近から台所（15×9尺)で、台所の南面、食堂寄りに造り付けの大きな食器棚があった[69]。

食堂北側の従棟部分には、厨房と食料庫(6×6尺)および食料庫背面には洗面所が収容されているが、創建時の従棟(15×12尺)には、土間、脱衣所、風呂が収められていた。

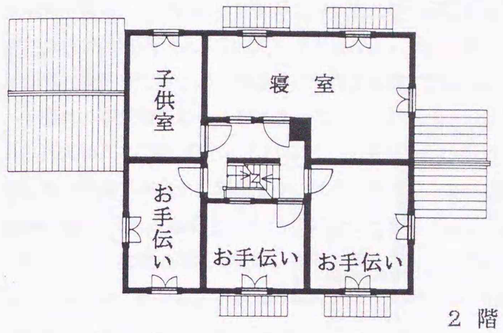
食堂と「２号室」の間の廊下付近には、裏口から直接３階への直通階段と、地下室への折り返し階段があったという。したがって、廊下北側の裏玄関(9×15.5尺）や西側便所部分は創建時とはかなり違っている部分であるが、階段や裏玄関の大きさ、取り付き位置などはっきりせず、復原略平面図では省略している。

地下室は、食料貯蔵用で、外観でも述べたように、東西面北寄りに地下室への採光用窓があった[69]。

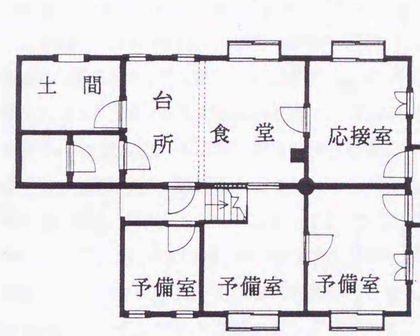
69：出納明子(出納陽一4女、1927年生まれ)および旧写真による。



3 階



2 階



1 階

図3-5-2 旧出納家住宅復原略平面図

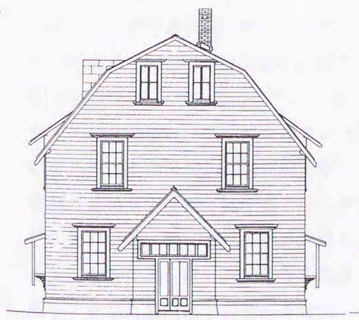


図3-5-3 旧出納家住宅南立面図

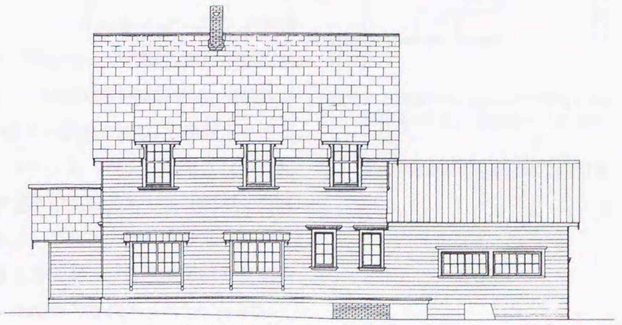


図3-5-4 旧出納家住宅東立面図

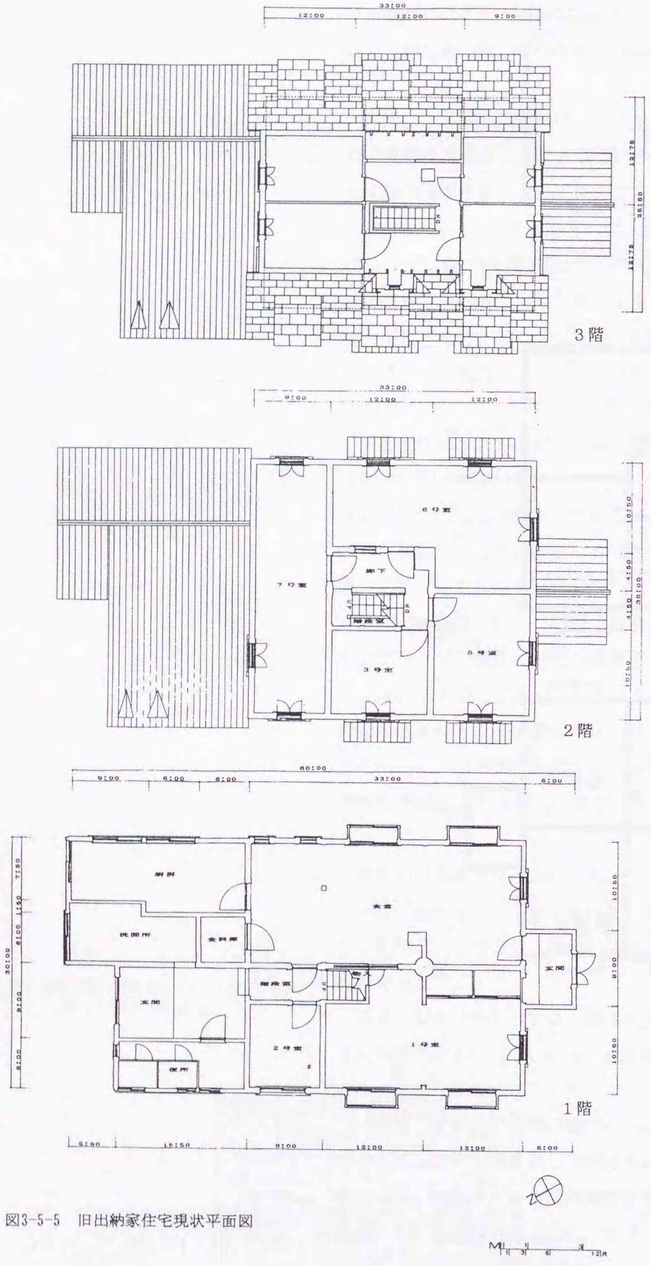


図3-5-5　旧出納家住宅現状平面図

2階への階段とは別に3階直通階段が備えられたのは、実習生と家族や家事見習の男女が一つ屋根の下に生活することを最初から考慮しての設計と考えられる。

2階は、階段室、廊下、集合煙突を含むホール(9×12尺) を中心に、南側「5号室」(15×12尺)、西側「3号室」(10.5×12尺)、北側「7号室」(9×30尺)と、東側L型の「6号室」(15×12尺+10.5×12尺)が囲んでいる。

「3および5号室」は「家事見習い」室、「6号室」は寝室であった。寝室には、北寄り廊下側に、太い額縁(幅 164㎜)を廻した嵌殺しの小窓を開けている。中廊下への採光を考えたものとも思えず、用途については不明である。「7号室」は創建時には2室に分かれ、西は「家事見習い」室、東は子供室(ともに15×9尺) であった。いずれも壁、天井は紙張り、床は現在畳敷きであるが、創建時はすべて板間であった[69]。

3階は、中央階段ホールをはさんで、南側2室(12.75×9尺)、北側2室(12.75×12尺)に間仕切られているが、当初は間仕切のない1室であり実習生用の部屋であった。部屋上部には垂木構造の小屋組が露出し、垂木間隔は概ね1.5尺、屋根窓部分では2尺とし、南側で1尺、北側2尺と調整している。小屋組の部材寸法は、垂木 120×48㎜(成×幅、以下同)、棟木 120×48㎜、腰折れ部を厚さ17㎜の方杖板で補強し、棟木下で左右の垂木をつなぎ材(120×48㎜)で固定している。

出納陽一(1890=明治23～1976=昭和51年)は、1890年9月大分県南海郡上野村(現弥生町)で生まれ、1910(明治43)年9月札幌農科大学予科に入学、1913(大正2)年同大畜産科を経て、1916年卒業後東京下板橋の愛光舎牧場に就職した。1918年宇都宮琴子と結婚、1921年1月デンマークに留学し、酪農経営と機械類、バター・チーズ製造の実習にあたった。1年半ほど遅れて琴子夫人もデンマークに渡り、料理や家事全般の実習にあたった[68]。この時の経験が牧場経営の基盤となっているが、帰国後も徹底的にデンマーク風の生活様式を固執し、またあわせて『丁抹の農業』(1924年)や『デンマーク復興の偉人グルドドビー』(1949年)などの著書や講演会、講習会を通じて、デンマーク農業の普及に努めたのである。

1924年4月に帰国後、義父でもあり、またデンマーク農業導入の提唱者でもあった宇都宮仙太郎(1866=慶応2～1940=昭和15)と共に、上野津幌 815番地(1927年以降の出納牧場)と 933番地 (1927年以降の宇都宮牧場の中心地)を併せた38ha余りの土地[70]で宇納牧場を開設する。同場は、1937年に北海道製酪販売組合連合会(雪印乳業㈱の前身)に譲渡されるが、以後出納は酪農経営の指導に専念するようになった。1941年には満州拓殖公社の招きで渡満、開拓および酪農指導にあたったが、1946年8月終戦により帰国、翌1947年佐賀酪農塾長として九州の酪農人養成にあたった。1949年に退任後、1953年から酪農学園短期大学教授兼野幌機農高校講師、野幌高等酪農学校講師を勤め、その後学園理事(1955～1963年)、

70：『上野幌百年のあゆみ　拓魂』上野幌開基百年記念事業協賛会編集部(1985.9)

同評議員(1959～1964年)、同大学教授(1964～1969年)等を経て、1976年5月他界した。

1925年竣工の住宅は、1937年に北海道製酪販売組合連合会に譲られるまで、1、2階は出納家(夫妻と娘4人)と「家事見習い」が居住し、3階には前述のように実習生を収容した。

当時の生活ぶりや食生活の様子は、『出納陽一氏の面影』中に多数収録されているが、出納家では昭和に入ってから当時わが国では珍しかったプロセスチーズの製造に着手し、風車印の商標で販売し、包装は専ら琴子夫人の手で行われたという。また当時の食事は酪農食と呼ばれ、朝はビスケ(赤星印の小麦粉に若干の麩ふすまを加えた焼きパン)にオートミル、昼はシチューやスープ、馬鈴薯の料理のほか、ポテトカレーや自家産の豚肉、鶏卵、牛乳、瓶詰め果実や試作チーズが並んだという。

住宅と共に畜舎も完成し[68]、さらに製酪所も建設中であったが、ちょうどその年創立した酪聯(有限責任北海道製酪販売組合、翌年北海道製酪販売組合連合会。雪印乳業㈱の前身)が製酪所を無償で借り受けることになり、同年7月から製酪事業を開始した[69]が、この製酪所が現在の「雪印バター誕生記念館」にあたる。同建物は1925(大正14)年7月から翌1926年10月まで、有限責任北海道製酪販売組合のバター製造所および技術員養成所(2階)として使用され、また1950年～1980年に雪印種苗㈱上野幌育種所事務所として引き継がれ、1980年4月雪印乳業㈱が記念家屋として譲り受け、翌1981年12月記念館復原工事が完成し現在に至っている。

宇納牧場は、1927年宇都宮仙太郎の長男勤がアメリカ留学を終えて帰国し、宇都宮牧場(もとの本拠は上白石)を開設した際に分離し、以後出納牧場として独立している。出納牧場の経営概況として1933年のものが残されているので以下に列記した[68]。

土地面積	17ha			
作物別面積	デントコーン	3ha	家畜ビート	2ha
	燕麦(牧草混播)	2.5ha	青刈り牧草	2.5ha
	乾燥用牧草	5ha	燕麦	2ha
家畜	乳牛総数	60頭(搾乳牛35頭,育成牛25頭)		
	耕馬	4頭		
	豚総数	40頭(繁殖豚 3頭,育成豚37頭)		
	鶏(成鶏)	50羽		
建物	住宅	延べ100坪	牛舎	135坪
	農具舎	45坪	豚舎	18坪
	鶏舎	15坪	堆肥舎	20坪
	製酪所	30坪	サイロ	150トン
	尿溜	200石		

出納牧場および建物、施設の一切は、1937年に酪聯が譲り受け、農場は酪農義塾(酪聯が1934年に開設。現酪農学園大学の前身)の実習農場として活用された。旧出納住宅は、1階は講師住宅、2階は講義室と助

手室、3階は学生寮として使用された[71]が、1942年酪農義塾が文部省令に基づく甲種農業学校興農義塾野幌機農学校となった際に、農場は興農公社の種苗部に移管され、住宅の方は興農公社「青雲寮」として1979年まで使用され、この時期に平家部分の増築や内部の改修(3階間仕切壁の取付け、階段の変更など)などが行なわれた。

農場は、1950年種苗部が独立して雪印種苗株式会社になってからも研究農場として活用されたが、1979年同社の長沼移転により、跡地を園芸センター・緑地帯・雪印スケートセンターなどを含む「ヌ、ポ、ロ、ファーム」として整備された。住宅は、1979年に雪印乳業株式会社所有となり、1984、85年に補修が施され、1986年合宿所に改修され、現在に至っている。

71：中曽根徳治(元酪農義塾講師、現酪農学園大学教授。1937年から1944年まで遺構に居住)および元井力治(酪農義塾第8期、1942年卒)からの聞き取り。

高倉左輔住宅

札幌市豊平区北野6条4丁目にある酪農経営者高倉左輔の住宅は、戦前の北海道農家住宅の理想像のひとつといわれた。高倉左輔が現在地に入植したのは1924(大正13)年のことで、入植当初は丸太を組合せた12坪(39.6㎡)ほどの土間式の拝み小屋であった。1927年の木造住宅(24坪)を経て、このユニークな住宅を建設するのは1933年のことである。

農家であればこそ、「都会人から羨まれるような生活が出来る」[72]という高倉の夢を実現したこの2階建ての「明るい農村文化住宅」[73]や農業生活については、1953年出版の『高倉さんの楽しい農業生活設計』(酪農学園通信教育出版部)に詳しい。

著者川村秀男は、まえがきに「高倉さんの農業生活を、多くの農人諸君に知っていただくことは、現在の農村生活に明るい希望を持たせるものだと考えて、この書を刊行することにした」と動機を述べているが、確かにこの書からは、軟石造の耐寒住宅、明るい茶の間と台所、コンクリート土間に机と椅子の食堂、茶の間と台所に続く花いっぱいの温室、冬を知らないペーチカの採暖、自給自足による動物性蛋白質の豊かな酪農食、機械化による労力緩和の農場経営など、高倉家の楽しい農業生活の雰囲気が実に生き生きと伝わってくる。

住宅は、4間×5間の矩形平面で、南北に妻をみせる腰折れ屋根の総2階建て。西に玄関(2.25坪)、南に温室(6坪)を突き出し、東に加工・貯蔵室と便所を付属した形態である。1階は有明産の軟石造で、厚さ8寸(24cm)ほどの軟石を基礎上から2階桁下まで10尺の高さまで積み上げた。

軟石を選んだのは、もちろん耐寒、耐火、耐久性を考慮したものだろうが、高倉がこの材料を選んだのは、まず近くで軟石が切り出されていたからでもある。「耐寒建築材は重いので、運賃で高いものになる。農家の冬は割合ひまになるから、コツコツ馬橇で運べば、ほんの安いものになって材料が入手出来る」[74]点と、耐寒住宅の材料は「郷土に即した



図3-5-6　『高倉さんの楽しい農業生活設計』表紙

72：『高倉さんの楽しい農業生活設計』(酪農学園通信教育出版部、1953.1.20) p.3
73：『高倉さんの楽しい農業生活設計』p.14
74：『高倉さんの楽しい農業生活設計』pp.28、29



図3-5-7　高倉左輔住宅南外観

郷土色の豊かなもので建てることが望ましい」[74]という点が、選択の理由でもあった。軟石住宅の構想に、親戚たちからは「倉庫ならともかく、第一他人に笑われますよ。どこの世界に軟石づくりの住宅なんていうものがありますか。苦労して貯えた金が泣きますよ」[74]という反対もあったが、「その地方、それぞれの特徴あるものが、自らの工夫で考えられなければなりません。北海道の農村で、神代杉のもく目の天井や、黒柿の床柱を誇るようでは、何もほめたことではないと思います」[74]という考えから、断固として初心を貫いた。

防寒、凍上にも細かな配慮が行き届き、コンクリート製布基礎の工事は、地下 2.5尺掘り下げ、玉石を５寸厚さに小羽立に敷き、上に切込みバラスを２～３寸敷き、さらによくついて、１尺幅の布コンクリートを打った。１階天井は、暖まった空気が逃げないように、下地に建築紙を張り、隙間なく厚板を打ち上げた天井とし、ペンキ仕上げとした。窓は２重窓で、北面の窓は最小限に止め、西に面した夫人室の窓は出窓式を採用することで、熱損失を抑えている。

木造の２階は、土壁下地の下見板張り[75]、床は２重板張りの上に畳敷きとし、天井・窓は下階と同様の仕上げで、子供部屋東面の窓も出窓式である。

主屋部の中心に宮崎式丸ペーチカを置き、田の字型に主婦室、居間兼寝室、茶の間、台所を配置した。茶の間と台所の南側前面に設けられた温室は、むしろ茶の間と台所と一体化している。年中花と共生するという理想の実現化である。

丸ペーチカは、北海道ではほとんどが宮崎式で、横島ペーチカ商会が独占的に施工していた。高倉家のペーチカも横島ペーチカ商会の施工である。大正期から昭和初期までの宮崎式ペーチカの設置者名簿には、橋本左五郎、高岡熊雄ら北大教授や医師、北海道庁のお偉方など、札幌の名士たちが並ぶが、札幌に限らずこの年代の道内の上層階級の住宅には、この丸型ペーチカがよく使われた[76]。一種のステータスシンボルともいえる存在であったが、高倉の場合はむしろ冬の暖かさや給湯の便利さ、燃料の経済性などに着目した合理性に裏打ちされた選択であった。

平面の特徴としては、まず台所と茶の間に重点が置かれていることだろう。「台所は、主婦の天国にしてやりたい」[77]という趣旨から、南面させ、さらに温室と一体化することで、明るい台所が実現した。床は、コンクリート土間にすることで、常に水を流して洗うことができて清潔であること、農繁期に主婦が外から直接土足のまま入室出来たり、家族が土足のままテーブルと椅子で食事が出来るという点も考慮された。冬は冷えるので、板敷きにする工夫もなされていた。

水は、牛舎の一画に備えられた動力ポンプが汲み上げ、畜舎２階の大

75：遠藤明久『北の事典「続・北海道住宅五十話」43』北海道新聞(1978.3.13)

76：遠藤明久『北の事典「続・北海道住宅五十話」17』北海道新聞(1978.2.9)

77：『高倉さんの楽しい農業生活設計』p.44

タンクから、台所の流し、湯沸かしタンク、浴場などに供給され、すべてコックをひねるだけで水を使用することが出来た。

さらに主婦の天国化への工夫として、ペーチカの熱を利用した湯沸かしタンクも工夫した。流しの上に木製タンクを置き、２本の鉄製パイプをペーチカに導く循環釜式の温水システムである。コックをひねりさえすればいつでもお湯が使えるわけである。また、主婦労働の省力化のために、ペーチカの温熱を利用した蒸気タンクを取付け、蒸気利用の炊飯タンクと２重釜を考案した。鉄製炊飯タンクは、高さ３尺、横１尺６寸、奥行き１尺２寸の箱型で、内部に６段の棚が設けられ、これに鍋代用の琺瑯引きの容器が納まるようになっていた。汁でも、馬鈴薯でも、豆でも、御飯でも同時にわずか20分以内で完成したという。また２重釜は、「径１尺深さ７寸の小型の鍋で、内部は銅に白メッキとし、外部は鉄製で間に蒸気を導いて調理するもの」[78]である。主婦の労力のかからない、

78：『高倉さんの楽しい農業生活設計』p.51

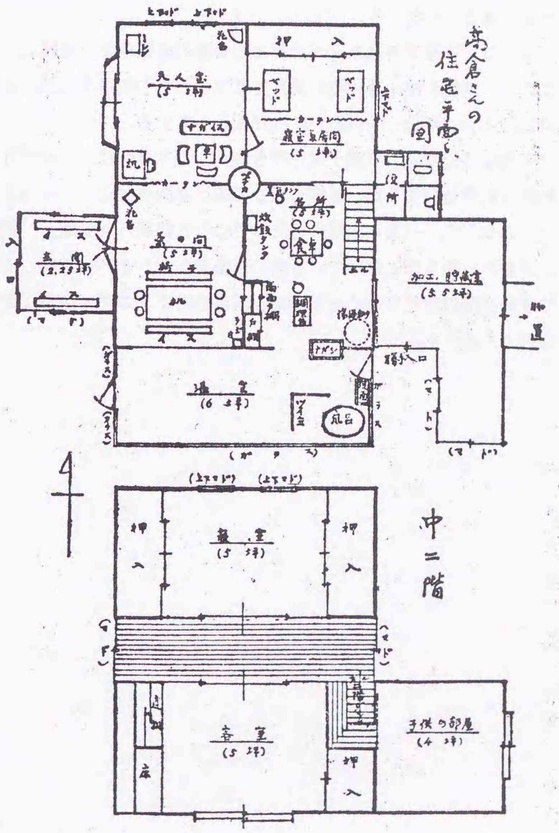


図3-5-8　高倉左輔住宅平面図(『高倉さんの楽しい農業生活設計』)

楽しく働ける台所として、至れり尽くせりの施設である。

茶の間は、一家団欒の食堂であり、親しい友人が集まる談話室でもあった。床はコンクリート土間で、南に大テーブルが置かれ、椅子が配されている。茶の間の西向きの玄関から、土足のまま入室することができた。

茶の間の北側は夫人室で、子供の勉強用のテーブルと椅子も置かれていた。ミシン掛けなど夫人の家事室であるが、また夕食後のひと時を、家族が思い思いにくつろぎ、新聞を読み、ラジオを聞く部屋であった。茶の間寄りの半分は土足用に板張り、北側半分は２重板張りの上にリノリューム敷きとした。

夫人室と台所のいづれにもつづく東北隅の部屋は、居間兼寝室である。２重の板張りで、リノリュームが敷かれているが、時には畳敷きにも出来るようになっていた。

温室の隅にはもっぱら冬季間に使用された「花見風呂」が設けられ、温室の花を眺めながらの風雅な入浴が楽しめた。夏に利用しないのは、屋外に設けた大釜に枝や根株をたいて湯を沸かす行水方式の方がむしろ爽快であるためである。

２階は、中廊下をはさんだ２室とも８畳の畳敷きで、寝室として使われたが、南側は床、違い棚を構えて客室としても利用された。加工貯蔵室上にあたる部分に子供室(４坪)が配されている。

１階全体に徹底した椅子式生活を導入した合理性は、現在も含めてきわめて異例といえるし、温室を通しての日光の享受とペーチカをうまく使いこなして、「長い本道の冬をのびのびとの暮らせる家」「朝起きると湯があり余るほど沸いている楽しい酪農生活」といった楽しく暮らしやすい空間の理想を求めた結果は、現在の省エネルギー住宅に先行するものでもあった。

第２部　マックス・ヒンデル

第４章　マックス・ヒンデルの経歴と作品活動

マックス・ヒンデル[1] Max Hinder(1887－1963)は、大正末から昭和初期にかけて札幌市に滞在したスイス人建築家である。1924年来道、３年半の札幌市滞在後、横浜市に移住し、1935年事務所解散まで在日外国人建築家として活躍した。ヒンデルが札幌で活躍した頃の北海道建築界は、北海道庁や主要都市、北海道帝国大学など、官庁営繕組織や営繕技術者達が主流を占め、加えて大規模な商業施設などに道外の建築家や建築事務所の作品が見られたが、一方で田上義也[2]　など、組織に属さず、かつ職能に自覚的な自営建築家が来道し、北海道に根をおろした時期でもあった。

第２部は、北海道における自営建築家の黎明期に活躍した建築家の一人であるヒンデルをとりあげ、その経歴と作品活動について論じたものである。これまで経歴概要[3]や個々の作品については断片的に報告[4]しているが、来日以前の経歴や家系については子息ハンス・ヒンデル Hans Hinder[5] の教示により、また来日以降の作品活動については、ヒンデル直筆の裏書き付き写真(ハンス氏所蔵)を基本史料に、関係者からの聞き取り、遺存設計図書、契約書による確認、カトリック新聞[6] 記事調査などを根拠とした。



図4-1-1　来札当時(1924年)のヒンデル(岡部洋子蔵)

1：Hinderはヒンダーと表記する方が一般的であるし、交遊関係のあった人々も「ヒンダーさん」と呼んでいるが、1925年12月13日からの連載記事の署名では「ヒンデル」とあり、また自身の事務所印やサインはすべて「ヒンデル」と記載しているので、本論文ではそれに従った。

2：1899～1991。1918年F.L.ライト設計の帝国ホテルの設計事務所に勤務後、1923年の関東大震災を契機に北海道へ渡る。戦前期の作品数約 160件のうち半数以上が住宅である。製作姿勢にはライトの建築精神を生かしつつ、意識的にライト風から脱却し、独自の作風を見出す努力がみられる。

3：拙稿『建築家マックス・ヒンデルについて』（日本建築学会大会学術梗概集、1978）、『建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER の経歴について』(北海道大学工学部研究報告 第83号 1977)など。

4：拙稿『建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER-３ ―名古屋南山中学校について―（日本建築学会北海道支部研究報告集№50、1979）『建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER ３つのSki Hütteについて』(日本建築学会大会学術梗概集、1980)、『北星学園女教師館(大正15年)について』(同前、1981)、『宇都宮カトリック教会(1932)について』(同前、1982)ほか。

5：1909～。マックス・ヒンデルの先妻マリア夫人との間に生まれた子息。1928年から1930年にかけて、上智大学の設計・監理に従事したが、父マックスと過ごしたのは在日の１年間だけであったという。

6：1923年5月1日『カトリックタイムス』として創刊。1931年7月5日『日本カトリック新聞』と改称。

4-1　来日以前の経歴と家系

ヒンデルは、1887年1月20日、スイスのフルンテルン Fluntern自治区のZürichbergstrassel04 で生まれた。フルンテルンは、1894年にチューリッヒ市の一部となったが、当時はチューリッヒ近隣の自治区 selbständige Nachbargemeindeであったという[7]。

父は、ルドルフRudolf Hinder(1864-1943)、母はエミリー・シェーネンベルガーEmilie Schönennberger (1863-1900) 、３人兄妹の長男として誕生し、マックス・ルドルフ・ヒンデルMax Rudolf Hinder と命名された。２人の妹は、エミリーEmilie とルイーズLouise (1891-1985)といった。ルイーズは、のち北海道大学予科ドイツ語教授ハンス・コラー[8] Hans Koller 夫人となった人であり、ヒンデルに札幌行を勧めた人である。

ヒンデル家は、15世紀以来、トゥールガウThurgau 州の小村ヴィレンWilenで代々農業を営んでいたが、祖父グレゴール・パンクランツ Gregor Pankranz Hinder II(1833－1878)の時代、1845年にチューリッヒへ移転し商人となった。父のルドルフは、教師務めの後、チューリッヒ市の社会福祉局 Fürsorgeamt上級公務員となった人である[7]。

母方も、チューリッヒ湖に近いヘルリベルグ Herrliberg という町で18世紀まで農家を営んできた家系であった。ヒンデルは、こうした素性を恥じ、「父は、南ドイツの貴族出身、母はフランス旧家の出身」との虚言すら創作したという。もちろん一族からは、趣味の悪い冗談と、大いにひんしゅくをかった[7] が、自分の出生を飾りたてようとするヒンデルの見栄張りな性格の一面を示すエピソードといえる。

図4-1-2 は、ハンス Hans Hinder(1909年生まれ)が作成したヒンデル家の家系で、17世紀までたどることができる。

マックスは、1887年チューリッヒの小学校に入学、1903年16歳で下級ギムナジウム Untergymnasium卒業後、チューリッヒのBischef & Wandele、チロン Chilonの Schmidt & Rosset[9]のもとで、４年間製図訓練Bauzeichnerlehreを受けた。

当時、建築教育を特別受けずに建築家をめざす者は、一般には最初の数年間Bauzeichnerlehreを修得し、その後事務所を巡って技術を習得する過程をたどった[10]。著名な建築家のもとには、多くの人間が集まり、競技設計Wettbewerbe に参加するなどして腕を磨いたのである。競技設計で成功した者は、建築家 “Architekt”として独立したわけで、必ずしも建築教育を受ける必要はなかったし、この名称にしても明確な基準があったわけではなかった[10]。一方で “Diplom-Architekt” という称号がある。大学で建築教育Architekturstudiumを10-12semesters(学期)終了し、卒業試験Diplom-Abschlußprüfungに合格した者である[10]。ヒンデル

7：ハンス・ヒンデル1988年4月14日付け書簡による。

8：1881.10.4―1925.1.29。1908年より1925年まで、北海道帝國大学予科ドイツ語教師として在勤。

9：ハンス・ヒンデル1976年4月13日付け書簡に“Bauzeichnerlehre bei Schmid & Rosset in Chilon und bei Bishof & Weidele in Zürich”とあるが、個人名か会社名か不明のため、本論ではそのまま使用した。

10：ハンス・ヒンデル1976年3月13日付け書簡による。

の場合は、前者の過程を経て建築家として独立したわけである。

1907年から14年に兵役につくまでの７年間は、さらにヨーロッパ各地の事務所を巡る修業時代であった。チューリッヒを皮切りに、ロールシャッハ Rorschach、アーラウAarau、クール Chur、サン・モリッツ、ミュンヘン、ベルリン、パリ、ブリュッセルなど各地を放浪し、多くの競技設計で成功したと伝えられる[10]。ドイツ工作連盟の結成(1907)やドイツの建築家Ｐ．ベーレンスの活躍、ベルリンでＦ．Ｌ．ライトの最初の作品集の出版(1910)などがあった時代である。

この間1909年には、ハンス誕生まもなく マリアMaria Brennwald夫人(1884－1909)が他界している。

第１次世界大戦中、２年間スイス軍技術将校として兵役後[11]、1916年チューリッヒで設計事務所を開設。作品としてはエブリAebli 邸などがあるという[10]。翌年ウィーンへ移って４年間過ごし、銀行などを手がけた[12]。1921年から２年間オーストリアのチロル地方に滞在し、ランデックLandeck近郊のグリンGrinsに独立住宅を設計したり、“Liceum Alpinum”のためのプロジェクトを発表するなどした[10]。

1924年1月ハンス・コラー夫妻のすすめもあって、北海道に永住[13]する決心で、アニーAnny夫人を伴いマルセイユから乗船した。日本へ到着したのは同年３月であった。この船には、後に施主となる柳壮一夫妻も偶然同乗していた[14]という。

11：山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設(承前)」(『山とスキー』第79号 1928年)では、「世界大戦に塊国士官として従軍し負傷……」とあるが、ここでは前掲資料10によった。

12：山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設」(『山とスキー』第79号 1928年)

13：北海タイムス1925年12月13日記事『新しく家を建てる人々へ』に、「北海道を永遠の住家と定めて」とある。

14：柳壮一の妻福子書簡1976年3月5日付けによる。

4-2　札幌時代（1924－27）

北海道永住の決意は、わずか３年半でくつがえされることになるが、札幌市での滞在期間中、柳壮一や、山崎春雄、大野精七、アーノルド・グブラー Arnold Gublerら北海道大学教授連と交わり、彼らのパトロネ

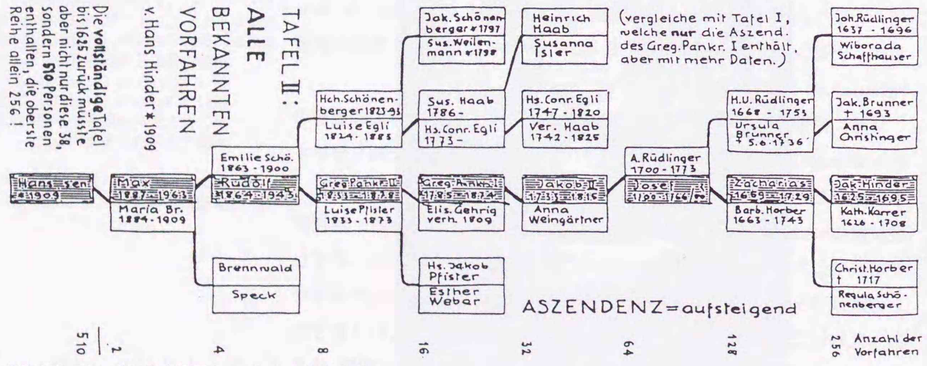


図4-1-2　ヒンデル家家系図(ハンス・ヒンデル作成)

ージを受けながら、精力的に設計活動を行なった。

札幌市内では、札幌藤高等女学校(1924)、北星女学校女教師館(1926)、ヘルヴェチアヒュッテ(1927)などの現存作品をはじめ、パラダイスヒュッテ(1926、1994年倒壊)、札幌藤高等女学校寄宿舎(1927)、北星女学校寄宿舎（1926)、聖フランシスコ修道院（1925)、フランシスコ会神学校(1926)や住宅作品(７棟)などがある。函館天使の聖母トラピスチヌ修道院(1927)、新潟カトリック教会(1927)、日本基督教会札幌教会案(1927)、上智大学基本案(1927)などもこの期のものである。

来札当初、コラー家に身を寄せたが、その年札幌市北11条東１丁目に自邸「東光園円い家」[15](図4-2-1)と呼ぶ16角形平面の木造２階建て住宅を建設し、事務所を併設した。札幌における設計活動の第１歩である。屋根頂部に風見をつけ、こけら張り外壁のこの住宅は、「北海道建築にひとつのヒントを与えるもの」[16]として評価され、新聞にもとりあげられた[16]。ここでは、日本人所員楽間利一郎、書生、女中を雇用していた。

同年札幌藤高等女学校（図4-2-2)を設計、切妻大屋根を強調する意匠や、裾広がりの急勾配屋根が特徴的で、破風に小さな小屋裏採光用丸窓をみせる。その後の作品によく登場する意匠のひとつであった。主棟中央の小塔もヒンデル好みのモティーフの一つで、北星女学校案(1928)や上智大学案(1927)などの基本設計でもみられた。

翌1925年「円い家」のすぐ北側に２番目の自邸(図4-2-3)を建設した。同年来札したグブラーに「円い家」を売却したためであるが、ヒンデル自身満足できる作品ではなかった[17]という。この年、柳邸（図4-2-4)、大野邸、山崎邸（図4-2-5)、林邸など、一連の木造住宅を設計した。イチイなどの丸太杭９尺程度のものを10数本も地面に打ち込むといった慎


図4-2-1　東光園円い家(右から1人おいてヒンデル、アニー夫人)

15：北西女学校寄宿舎設計図には「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」の印がある。

16：北海タイムス1925年10月30日～31日記事『雪國に相應しい新しい建築』

17：ハンス提供の写真裏書のヒンデル直筆の文による。


図4-2-2　札幌藤高等女学校


図4-2-3　自邸(二次)


図4-2-4　柳邸(山崎家蔵)


図4-2-5　山崎邸(山崎家蔵)

18：柳壮一の妻福子書簡1976年3月5日付による。
19：1925年12月13日～20日。
20：日本基督教会札幌北一条教会役員井口政治郎談。

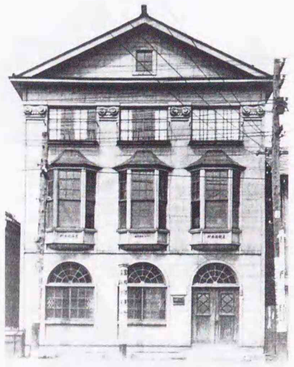


図4-2-6　奥田歯科診療所



図4-2-7　パラダイスヒュッテ



図4-2-8　ジュネーブ国際聯盟会館競技設計案

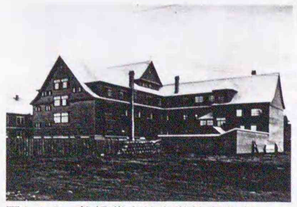


図4-2-9　札幌藤高等女学校寄宿舎

重な構造的配慮、外壁をこけら張りや亜鉛鉄板張りとする独特の防寒処理、引き戸や引き違い窓といった和風建具の採用、通風換気の工夫としての床下開放、フレアードルーフ（屋根勾配を軒近くで緩勾配とする裾広がりの屋根）など、共通の特徴がみられる。

平面でも、居間・食堂・台所・ユーティリティの一連なりの空間処理、南面するサロン・居間など団らんの場の重視、主婦室や居間における主婦空間の確保、個室群の確立など、近代住宅思想が展開されていた。

設計・管理に言葉の障害のあったことは想像に難くないが、「札幌の材料を思いがけぬことに使うので、その道の人はおどろいた」[18]ことなど、大工との間の意志疎通にも苦労が伴ったことであろう。

気短かな性格であったというが、建築家としての使命感と固い信念を持っていたことは、小論『新らしく家を建てる人々へ』[19]からもうかがうことができる。建築家の職能の未確立、同職能への一般の無理解といった当時の状況をふまえると、「建築に関する計画及監督は建築家に一任すべきである」と結論し、住宅を建てる際の施主の心構えや、「建築家は、医師・裁判官・社会学者と同一である」「医師と同様建築家を信頼せよ」「真の建築家は又金銭さえ貰えば如何なる要求にも応ずる奴僕ではない」など、建築家の職能について一般読者への啓蒙に努めたことは特筆すべきことであろう。

設計についても、自邸円い家が『雪國に相応しい新しい建築』[16]として取材された際に語った記事によれば、建築には樹木をとり入れることが建築の生命であること、日本の伝統的な住宅は北海道の冬には適さないため、屋根を簡単で急傾斜のものとし、日を南から入れるようにするなど、北国の設計条件を入れた北海道向きの建築をつくるべきであることを唱えている。鬼門などの家相を戒める一方で、当時の日本建築界における「コンクリートの函が頻に建つ」[16]傾向を「洵に心ない業です」[16]と憂い、「何故日本建築のいい所をとり入れて日本独特の建築を造らないか」[16]と「模倣好きの日本人に対して」[16]疑問を投げかけている。

この年にはまた、日本基督教会札幌教会の設計を、北海道大学農学部林学科教授新島善直を通じて依頼された。同時に北大水産専門部主事佐々茂雄の紹介で、若い田上義也にも依頼されたもので、いわば二者指名の競技設計といえるものである。ヒンデル案は残されていないが、A-1版程の額１枚に透視図を描いたもので、木造切妻平家建ての簡単なものであった[20]。設計費 2,000円ということで教会側が難色を示し、結局田上案が採用されることになる。

1926年には、北星女学校寄宿舎・同女教師館、奥田歯科診療所(図4-2-6)、パラダイス・ヒュッテなどの作品がある。北星女学校の寄宿舎、教師館は、1923年付けヴォーリズの基本案を受けての設計であったが、教師館の平面こそ酷似しているものの、外壁をからし色の鉄板張りとし、

藤高等女学校やフランシスコ修道院、大野邸などと類似のヒンデル風といえる仕上げとしている。

奥田歯科診療所は、木造３階建て、３階上部に４つのイオニア風の柱頭飾りを付けて正面性を強く意識した様式的な建築である。柱頭飾り上には、三角ペディメント、アーキトレーブもみせている。１階に半円アーチの開口部、２階に出窓、３階に手摺りをまわした窓先棚付き引き違い窓とし、外壁はトタン張り、ペンキ塗装の上に、砂を吹き付けて、一見石造風であったという[21]。

パラダイスヒュッテ（図4-2-7)は、北大スキー部15周年事業として計画されたもので、ヒンデルも無償で協力した。日本初のスイス式山小屋ともいわれる[22]ログキャビンである。のちのヘルヴェチア(1927)、秩父宮殿下ヒュッテ(1928)と並ぶスキーヒュッテ３部作の第１号であり、その後の札幌近郊のスキーヒュッテブームに大きな影響を与えるものであった。

この年にはまた、1926年７月25日を期して全世界の連盟国の建築家に対して呼びかけられ、翌27年１月25日を締切期限とするジュネーブ国際聯盟会館競技設計への応募案（図4-2-8)も残されている。透視図と配置図写真が残るのみであるが、透視図は総会会議場を描いたものと考えられる。半円アーチ窓をみせるルスチカ仕上げの下層部と上部４層とで構成し、彫りの深い軒コーニスが頭部を引き締める古典的な意匠で、主棟の中央頂部には手をつないだ人型彫像を掲げている。

翌1927年、天使の聖母トラピスチヌ修道院(函館市湯川)、新潟カトリック教会などの宗教建築や札幌藤女学校寄宿舎（図4-2-9)、ノートン記念館（図4-2-10)、ヘルヴェチア・ヒュッテを中心に、上智大学の基本設計も始まった。

ヘルヴェチアヒュッテ(図4-2-11)は、ヒンデルとグブラーの共同出資により建てられた。ヘルヴェチアHelvetiaは両者の命名で、スイスの古名、スイスを代表する女神の名でもある[23]。８坪の小さなログキャビンで、外壁を柾張り仕上げとした小屋であるが、札幌時代の最後を飾る作品で、ヒンデル自らが「王宮を建てたよりも一ヘルヴェチアヒュッテの建設が自分には深い喜悦であった」[23]と述べている。

4-3:横浜時代(1927—40)以降

1927年10月、ヒンデルは、現在の横浜市中区本牧満坂253 で設計事務所を開設した。この自邸兼事務所は、ドイツ人弁護士邸として現存(図4-3-1）し、当初のこけら張り外壁から下見板張りへの変更を受けているものの、木造２階建ての概形はよく保たれており、居間部分への採光配

21：奥田良雄談。
22：大野精七博士(1885.8.17～1978.9.5)談。



図4-2-10 ノートン記念館



図4-2-11 ヘルヴェチアヒュッテ(山崎家蔵)

23：山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設」(『山とスキー』第78号、1928)



図4-3-1　横浜自邸



図4-3-2　新潟カトリック教会絵葉書

24：堀勇良博士による1985年12月26日実施の川喜田一雄聞き取りメモによる。



図4-3-3　旭シルク㈱住宅



図4-3-4　上智大学



図4-3-5　南山中学校本館(南山学園蔵)

慮、ヒンデル好みの引違い建具の採用など、札幌時代の住宅作品との共通点がみられる。

北海道永住の志を捨て、移転を決心した動機には、25年１月29日のコラーの死去や、同年３月頃のコラー未亡人スイス帰国などがあげられるが、より広い活動領域を求めての転出とも考えられる。

新潟カトリック教会堂は、ヒンデルの横浜移転と同年の1927年９月18日献堂式を挙げるが、竣工絵葉書の全景写真(図4-3-2)の下には、「マックス ヒンデル 建築設計(横浜.札幌)」とあり、すでに横浜転出の準備が行われていたことがうかがえる。

横浜事務所では、札幌事務所開設以来のチーフ楽間利一郎、札幌から転居した竹内一次のほか、鈴木熊作、川喜田一雄らが勤めていた[24]。川喜田(1903.12.20－1988.7.23) は、1921年県立神奈川工業学校卒業後、同年横浜市技手補として勤務、1924年神奈川県庁警察部で建築申請事務を扱っていた[24]が、1929年１月から所員として、事務所解散(1935年)まで勤めた一人である。

この期には、札幌の北星女学校校舎(1929)、秩父宮殿下ヒユッテ（現空沼小屋、1928)、横浜の旭シルク㈱住宅(司令官ハウス、1927、図4-3-3)、名古屋の熱田天主公教会(1929)、恵方町天主公教会(1931)、岐阜天主公教会(1929)、同幼稚園(1930)、金沢聖霊修道院三位一体聖堂(1931)などの木造建築のほか、東京の聖母病院(1931)、上智大学(1932、図4-3-4)、名古屋南山中学校本館(1932、図4-3-5)、宇都宮天主公教会(1932、図4-3-6)などＲＣ造の作品がみられる。これらＲＣ造の作品は、シャープなデザインを意識しながらも、どことなく重く、部分的に装飾的な扱いを見せるなど、ヒンデルの作風の一端を見る上で注目される作品群ということができる。

この期の作品活動では、新潟教会の設計を通じて出会ったドイツ人ラ

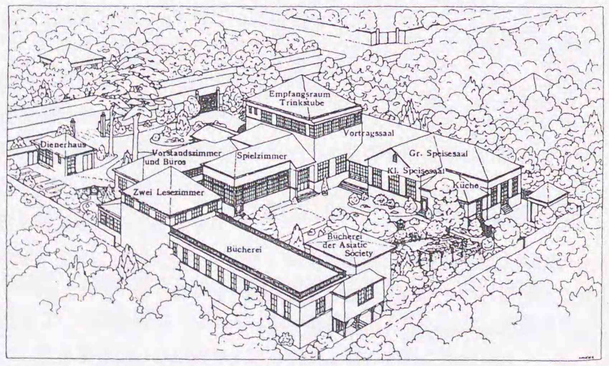


図4-3-7　ＯＡＧ会館(ヒンデルのサイン入りスケッチ)
("Die Geschichte der OAG—1873 bis 1980—")

イネルス Joseph Reiners(1874-1945)神父の存在を無視できない。ライネルスは、1912年新潟教区長に就任、1922年から臨時名古屋教区長を兼任、1926年名古屋区教区長に就任した人物であり、南山中学校のほか、熱田、恵方町、岐阜、金沢の会堂建設の際に、いずれもヒンデルを起用している。

ヒンデルの教会堂は、宇都宮天主公教会に代表されるように、双塔ないし単塔を擁したロマネスク風意匠のものが多く、内部にも半円アーチの多用、彫刻を施した方円柱頭飾りの採用などがみられるが、宇都宮では大谷石の採用、金沢聖霊修道院三位一体聖堂では内部柱に黒漆塗りを採用するなど、地域性を考慮した部分もみられる。クリアストーリーに見られる円窓は、ヒンデルが好んで採用したもので、熱田、恵方町、岐阜、金沢などの会堂で共通してみられるものであった。

1929年にはOAG会館改築の計画(図4-3-7)を無償でてがけ[25]、1933年10月８日には、同年１月から建築が開始されていた大森(現東京都大田区)のドイツ学園（図4-3-8)が落成式をむかえた[26]。学校、幼稚園、講堂の３棟からなる施設で、敷地が大森の住宅地という点で、周囲の環境との調和が考慮され、木造２階建てで計画された[28]。同校は、新校舎建設のため1966年11月26日から翌67年１月14日にかけて解体されている。

設計活動のほか、1927年11月にはドイツ東洋文化研究協会(OAG：Deutsche Gesellshaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens)の新会員となり[27]、翌年からは新委員[28]として活動し、ＯＡＧ便り “Nachrichten der OAG” にもしばしば名前がみられたという[25]。

1929年1月のOAGにおける講演では、“Japanische Bausitten”（日本の建築風習）[29]と題し、家相から地鎮祭、地曳之式、釿初之式、上棟之式など建築に関わる風習や祭事について言及しており、日本文化を深く理



図4-3-9　ヒンデルが川喜田一雄に与えた「證」(川喜田敬忠蔵)



図4-3-6　宇都宮天主公教会(吉田勝夫蔵)

25：アーノルド・グブラー1976年４月14日付け書簡
26：“70 Jahre Deutsche Tokyo” (1974.10)pp25
27：NACHRICHTEN №12(1927.11.5),№13(1927.12.15)の Neu eingetreten欄に「Hinder,Max.Architekt.P.O.Box 90 Yokohama」とある。
28：NACHRICHTEN №14(1928.2.15) からは、Neu Mitgliederとなっている。
29：社団法人ＯＡＧドイツ東洋文化研究協会会報第22号(1931)掲載。翻訳は、北海道大学文学部文学科独文学講座藤本純子助手の協力を得た。

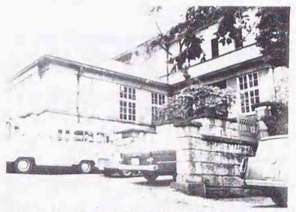


図4-3-8　ドイツ学園(東京横浜ドイツ学園蔵)



図4-3-10 離日前(1939年)のヒンデル
(山崎英男蔵)

30：アーノルド・グブラー1976年４月14日付け書簡
31：注記30資料によるが、どのよう関係の記念祭かは、今のところ不詳。
32：ハンス1976年3月13日付け書簡
33：1984年9月現地調査による。

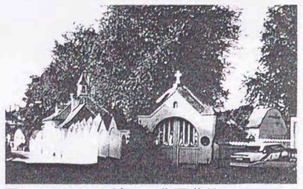


図4-3-11 レーゲンの共同墓地
(1984.9撮影)

解しようとしたヒンデルの一面をうかがうことができる。

1935年５月31日、ヒンデルは事務所を解散する。事務所解散にあたり、1929年１月31日から所員として勤務した川喜田一雄に与えた証明書『證』(図4-3-9)が、㈱川喜田建築設計事務所川喜田敬忠のもとに保存されている。事務所解散後の所員の再就職または独立を懸念して記したものと考えられ、「事務所解散ニ至ルマデ最後ノ一人トシテ勤務セリ」から始まり、事務所で携わった仕事内容、上智大学建築工事監督などに従事したことなどを挙げ、「技能優秀ニシテ着実誠意ノ建築家タル事ヲ證シ大方ノ工事関係者諸氏ニ推薦スルモノナリ」と結んでいる。この証明書のヒンデル建築事務所の住所は、「東京都麹町区平河町弐丁目七番地」とあり、事務所解散時には横浜から東京に本拠を移していたと考えられるが、この点については現在のところ確認されていない。

1936年４月１日にはＯＡＧを脱会[30]、1938年12月22日横浜での記念祭に出席[31]し、翌1939年最後のヘルヴェチア行のために来札し、1940年第２次世界大戦まっただ中のドイツへと出発した。

ドイツ、バイエルン地方レーゲン Regenを最後の郷里と決め、１年間実業学校の教師を務めたこと以外、この期についての詳細は不明である。1963年１月末、レーゲンで76歳の生涯を閉じ[32]、同地の共同墓地(図4-3-10)の一画に埋葬された。ヒンデルにふさわしい素朴な木製十字架の墓標(図4-3-11)には、「20.1.1887／M. R. HINDER／ARCHITEKT」[33]と記されている。

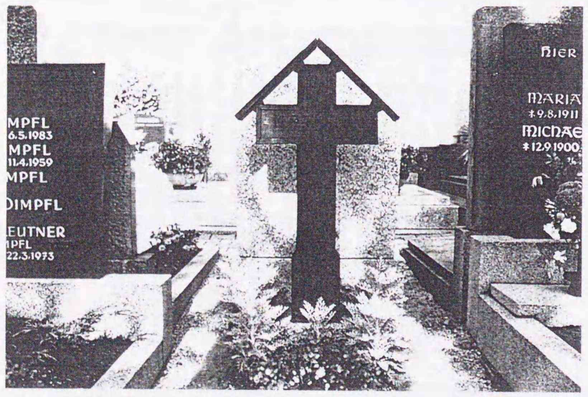


図4-3-12 ヒンデルの墓碑(1984.9撮影)

表4-3-1 M．ヒンデル年譜

年次	年齢	経歴	作品 一般建築	作品 カトリック系宗教施設
1887 明治20		1.20 チューリッヒで誕生		
1893 明治26	6	チューリッヒの小学校入学		
1903 明治36	16	チューリッヒの下級ギムナジウム終了 チューリッヒの BISCHEF & WANDELE, チロンの SCHMIDT & ROSSETのもとで BAUZEICHHNERLEHRE(製図訓練)		
1907 明治40	20	チューリッヒ,ロールシャッハ,アーラウ,クール,サンモリッツ,ミュンヘン,ベルリン,パリ,ブリュッセルなど放浪(～1914) この間、多くのWettbewerbe(設計競技)で成功		
1914 大正３	27	スイス軍技術士官として兵役(～1916)		
1916 大正５	29	チューリッヒに設計事務所開設	AEBLI邸	
1917 大正６	30	ウイーンに滞在(～1921)		
1921 大正10	34	オーストリア チロル地方滞在	"Liceum Alpinum" のためのプロジェクト	
1924 大正13	37	1.－ マルセイユ出発 3.－ 横浜到着	この年 自邸「東光園内いい家」(～1967.2.－)(札幌市北11東１) ☆	9.28*札幌藤高等女学校上棟式(札幌市北16西2) 施工:松川三浦建築工務所(三浦才三) 19 32.2.2一部焼失，3.5復旧工事ほぼ終了☆
1925 大正14	38	12.13「新しく家を建てる人々へ」(北海タイムス)12.20まで５回にわたり連載	7.３ 祁 壮一郎(～1971頃)(札幌市北4西15) 施工:長谷川 清四郎他 ○☆ 11.15 山崎 春雄郎(～1973)(札幌市北4西15) 棟梁:佐々木某 ○ この年 大野 精七郎(～1960)(札幌市北12東2) 施工:沖津組(監理,林 清) ☆ 自邸(２次,札幌市北11東1) ☆ 林邸(札幌市) ☆ 日本基督教会札幌教会案	11.19 聖フランシスコ修道院落成式(～1982) (札幌市北11東2)施工:松川三浦建築工務所☆
1926 大正15	39		9.－ 奥田歯科診療所(～1946)(札幌市南4西4) 棟梁:長谷川清四郎 11.22 パラダイスヒュッテ(～1994)(札幌市手稲山) ○ 12.21*北星女学校女教師館(札幌市南5西17) 施工:松川三浦工務所 ☆ この年 ジュネーブ国際聯盟会館競技設計案 ☆	この年 フランシスコ会神学校(～1960頃) (札幌市北11東２)
1927 昭和２	40	10.－ 横浜市本牧満坂253へ移転事務所開設	1.15 北星女学校校寄宿舎献堂式(～1974.11.)(札幌市南5西17)施工:松川三浦工務所 ○ 9.13*ヘルヴェチアヒュッテ(札幌市)請負:水本小判治，大工:田頭 この年 ノートン記念館(札幌市南15西8) ☆ *横浜自邸(現ゾンデルホフ邸)(横浜市中区本牧満坂253) ☆	7.５*天使の聖母ドラピスデヌ修道院落成献堂式(函館市上湯川) ○ 9.18*新潟天主公教会献堂式(新潟市東大畑通) 施工:コンクリート工業㈱ ○☆ 10.１ 札幌藤高等女学校寄宿舎(～1963) (札幌市北16西3)施工:松川三浦建築工務所 ☆
1928 昭和３	41		4.－ 北星女学校校舎案 ○ 10.27 旭シルク㈱住宅(司令官ハウス)(横浜市中区本牧123) ☆ 12.10*秩父宮殿下ヒュッテ(現空沼小屋)(札幌市)	2.15 熱田天主公教会献堂式(～1945) (名古屋市熱田区) 施工:岩永伊勢松他
1929 昭和４	42	1.８ ドイツ東洋文化研究協会ＯＡＧにおける講演 "Japanische Bausitten"(日本の建築風習)	6.29 ＯＡＧ会館改築起工(旧東京府麹町区平川町)1930.夏竣工 12.２ 北星女学校校舎工事終了式(～1963)(札幌市南5西17) 施工:松浦組 ○	2.28 岐阜天主公教会献堂式(～1945) (岐阜市西野町) 施工:岩永伊勢松他
1930 昭和５	43			5.１ 岐阜天主公教会附属幼稚園開園式 (～1945)(岐阜市西野町)
1931 昭和６	44			6.21 恵方町天主公教会(名古屋市恵方町) (～1989) ○ 11.12*金沢聖霊修道院三位一体聖堂(金沢天主公教会)(金沢市長町1)施工:岩永伊勢松 ○ 12.15*聖母病院祝別・開院式 (東京都新宿区中落合) 請負:宮内初太郎 ○
1932 昭和７	45			2.28*南山中学校本館 (名古屋市昭和区五軒屋町) 施工:大倉土木㈱ ○ 6.12*上智大学(現１号館,東京都千代田区紀尾井町) 施工:木田組 ○ 8.４*三本木天主公教会 (十和田カトリック教会)献堂式(十和田市稲生町12)施工:宮内初太郎 ○ 11.23*宇都宮天主公教会 (カトリック松が峰教会)聖別式(宇都宮市松が峰)施工:宮内初太郎 ○
1933 昭和８	46		10.８ ドイツ学園落成式(～1966) (東京都大田区山王２)	
1934 昭和９	47			2.20 聖母病院第２期増築工事 (東京都新宿区中落合) 請負:山村力松 ○ 4.30 聖母病院看護室第２期工事(同上) 請負:山村力松、梅本敏之 ○
1935 昭和10	48	5.31 事務所解散		
1936 昭和11	49	ＯＡＧの委員会脱退		
1939 昭和14	52	8.５ ヘルベチアヒュッテ(札幌市)行		
1940 昭和15	53	ドイツへ出発、バイエルン地方レーゲン滞在、実業学校教師を１年間務める		
1963 昭和38	76	1.ｘ レーゲンにて没		

＊現存作品 ○ 設計図書,契約書などで特定できるもの ☆ハンス氏提供写真のあるもの

第５章　札幌時代の作品

本章では、1924年に札幌で設計活動を開始してから、1927年10月に横浜に移転するまでの約３年半にかけててがけた作品から、住宅建築、学校建築、宗教建築などの建築種別ごとにとりあげ、さらにスキーヒュッテとジュネーブ国際聯盟会館案についてふれる。

5-1　住宅建築

5-1-1:東光園円い家[1]

札幌市北11条東１丁目　1924年竣工 1967年２月取壊し

ヒンデル来札（1924年）直後の作品で、事務所併用の自邸である。円形平面（正確には16角形）のユニークな住宅で、当時の北海タイムス紙上『雪国に相應しい新しい建築』[2]では、「北海道建築に、ひとつのヒントを与えるもの」として紹介されている。1925年グブラー[3]に売却され、３年後児玉作左衛門（北海道帝国大学医学部教授）所有となり、後何度か所有を変えて1967年取壊された。

敷地は、1878(明治11)年にこの付近１万坪の土地貸付を受けた、札幌の花園の元祖といわれる上島正の土地であった。字東耕と呼ばれていたところから、1885(明治17)年「東耕園」と命名され、後に「東皐園」と改称されたところである。花しょうぶの美しく咲く、風流人達の集まる場所でもあった[4]という。

外観を特徴づけるこけら葺の円錐屋根頂部には、魚をモチーフとする長さ1,084mm(実測値）の鉄製“風見”が異国風の趣を添え、屋根すそはスイス・ドイツ地方の民家同様、緩勾配で折れるフレアードルーフを採用している。こけら板で外壁を葺き、腰部分でわずかに反り、床下は換気用に吹放される。１、２階の間に廻る小庇もこけら葺で、壁面と一体に扱われている。窓はすべて引違い窓で、竣工当初の写真(図5-1-1）から、少なくとも２階は２重窓であったと思われる。外側は12枚入りの細かなサッシュ割りの建具とし、内側の建具は４枚分割のサッシュ割とし

1：「東光園」は、本来「東皐園」と書かれるべきであるが、北星学園寄宿舎設計図に「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」と捺印されてあるので、ここではそれにしたがった。
2：1925年10月30日、31日付。ほかにシリーズとして、田上義也の「小樽高田氏邸」(11月5、6日付)と「有島武郎邸」(11月16日付)が紹介された。
3：Arnold Gubler(1897.6.7—1982.12.15)。1925年～1932年北海道帝国大学予科ドイツ語教師として在任。
4：『北海道人名辞書』(1923.9.30) p.53



図5-1-1　東光園円い家西側外観
(竣工当初)

ている。サッシュは、白く塗装されていたようにもみえる。この引違い窓は、上げ下げ窓や開き窓に比べ、「ガタガタいわずに良い」[5]、隙間風が入りにくい、日本的手法である、などの理由から、ヒンデルが好んで採用したモティーフのひとつであった。

平面は16角形で、1階21.44坪、2階20.94坪である。1925年10月31日の北海タイムス紙掲載の平面図で、おおよその構成を知ることができる。吹放ちの「ポーチ」から玄関に入ると、右手は「小応接」である。訪問者と家人との玄関先での応対の際の防寒を考慮したものである。１階は、八角形の「物置」を中心に、「浴室」「女中室」「仕事室」が囲む。「小応接」や「女中室」には、0.5㎡ 程度の小さな三角形の押入が付設する。収納スペースとしては小さすぎるが、保湿や隙間風防止上から、外壁とのクッションとされている。同様の押入は、２階では、各室に設けられる。便所は、階段室踊場に設置され、両階からの利便性が考慮されている。

2階は、八角形の「客室」を中心に、「台所」「食堂」「書斎」「寝室」「談話室」から構成される。中央「客室」と周囲の部屋との間は引違戸であり、一室としての利用も可能である。「台所」「客室」間にはストーブが置かれ、在来の裏方的な寒い台所の改善や、「客室」とハッチで結ばれた「主婦室」など、主婦に対する細かな配慮もみられる。

残された史料から、外観・平面についてふれたが、補足史料として『大正14年度傭外国人教師二号官舎』設計図書(北海道大学施設部蔵)をあげることができる。設計は営繕課とあり、モルタル仕上の外観も様相を異にするが、平面構成(図5-1-6)、平面寸法 など多くの類似点を指摘することができる。ヒンデルが何らかの形で関与したか、「円い家」がモデルとされたと考えられるのである。

5：『雪國に相應しい新しい建築』（北海タイムス　1925.10.30～31記事）



図5-1-2　円い家北側外観
(1950年代撮影)



図5-1-4　二号官舎西側外観

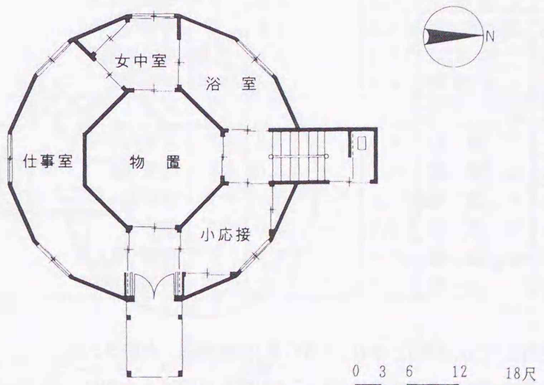


図5-1-3　東光園円い家平面図(「北海タイムス 1925.10.31」より作成)

二号官舎(図5-1-5) は、札幌市北11条西３丁目に、1925年８月８日起工され、1966年６月15日取壊された。床面積は50.539坪で「円い家」よりもわずかに大きい。

１階は、吹放しの「車寄」から玄関に入ると、左手は「取次」で「円い家」の「小応接」に相当する。八角形の「食堂」を中心に、「子供室」「台所」「浴室」が囲み、「女中部屋」「物置」が下屋として付属する。中央「食堂」の天井高は8.6尺、周囲で8.0尺である。２階は、「客室」を中心に、「寝室」2室、「化粧室」「夫人室」「応接室」「書斎」で囲まれ、「客室」と他室間の建具は、「円い家」と同様に引違戸とされ、「腰付石目硝子障子」とある。中央「客室」の天井高は、12.5尺と高く、周囲の室(8.0尺) との差による天井裏は、収納スペースとして利用されるが、「円い家」でも同様の扱いであったという。出入口、押入、窓の内法寸法は、次表に示す如くである(符号は図5-1-6に対応)。

出入口，押入等ノ部

符号	名称	高尺	ランマ高	巾尺	台数	備考
①	腰付両開	6.5	.7尺	5.0	2	階上ランマナシ 石目硝子入
②	引寄襖	6.5	－	6.7	7	三枚建内一枚嵌殺
③	引違腰付	6.5	.6	5.0	13	石目硝子入
④	片引帯戸	6.5	－	2.5	4	二枚建内一枚嵌殺 鏡板ベニヤ
⑤	片引違戸	6.0	－	2.5	5	鏡板ベニヤ(一枚建)
⑥	腰付硝子戸	6.0	－	2.3	3	摺硝子入　二階ノ分板戸
⑦	腰付片開	6.5	－	2.5	1	自由蝶番石目硝子入
⑧	片引唐戸	4.2	－	2.0	1	踊場下
⑨	引違板戸	6.0	－	5.0	1	階下物置ノ分六本桟
⑩	押入襖	6.5	－	4.3	8	引違押入
⑪	引違帯戸	6.5	－	3.8	1	二段四枚建
⑫	引違襖	6.5	－	7.0	2	三枚建二階押入
⑬	引違板戸	6.5	－	2.2	2	中空四枚建
⑭	引違襖	6.0	－	2.5	1	中棚付
⑮	引片板戸	6.0	－	2.0	(空欄)	女中便所
⑯	引片板戸	6.0	－	2.0	(空欄)	中棚付
窓ノ部						
イ	二重窓	4.1	－	5.0	13	外開内引違
ロ	引違窓	4.1	－	5.0	1	物置(階下)
ハ	引違窓	2.5	－	3.0	1	女中室
ニ	嵌殺窓	2.0	－	1.5	1	勝手口
ホ	引違窓	3.0	－	2.0	2	物置(階上)
ヘ	片上窓	1.2	－	.8	2	台所指出口

便所は「大正便所」とあり、「円い家」同様踊場に付設される。

小屋は、ほぼ南北方向に4寸×7寸の梁を平行に２本架け、直交して梁

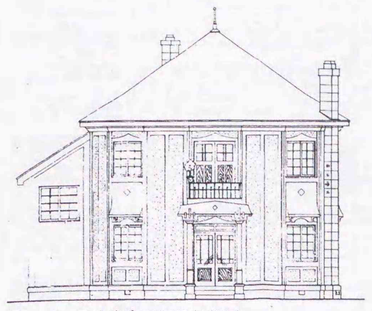


図5-1-5　二号官舎正面図(1/200)

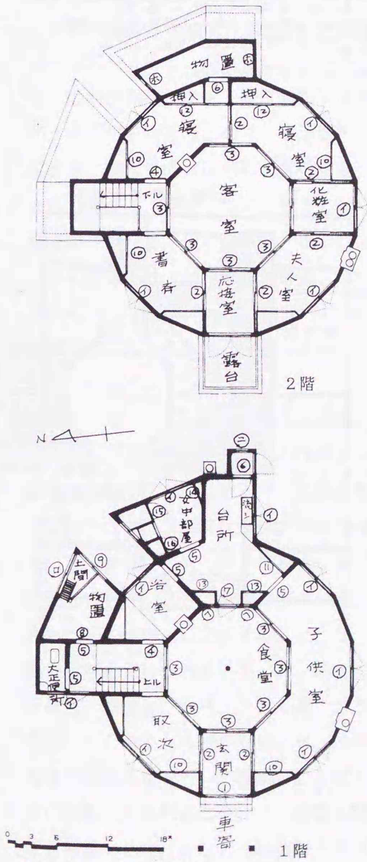


図5-1-6　二号官舎平面図
(原設計図をトレース)

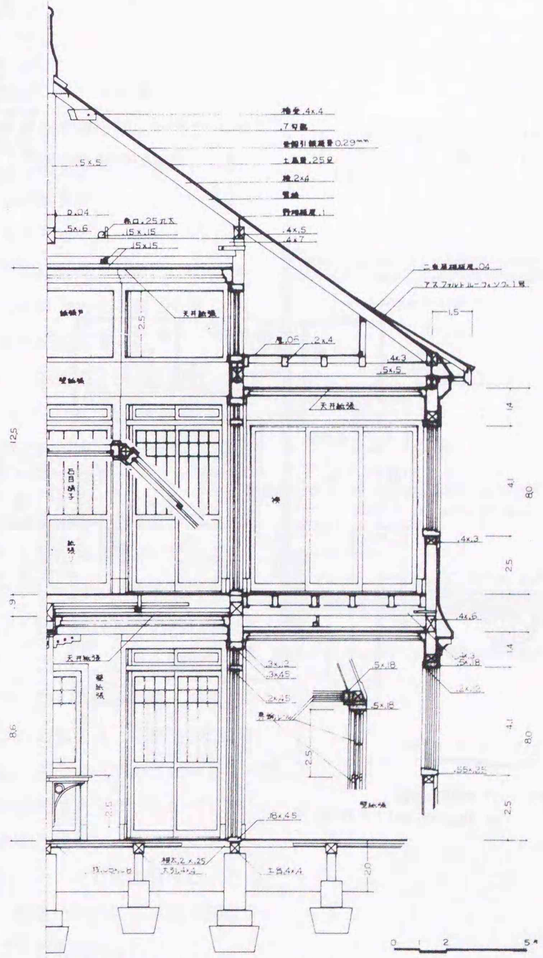


図5-1-7　二号官舎断面詳細図(原設計図をトレース)

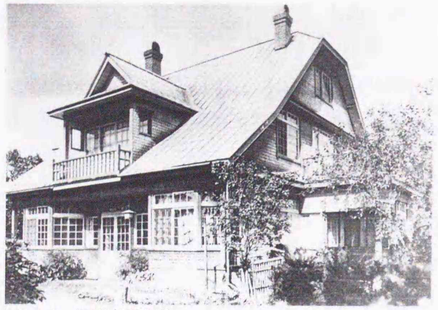


図5-1-8　柳邸南東外観

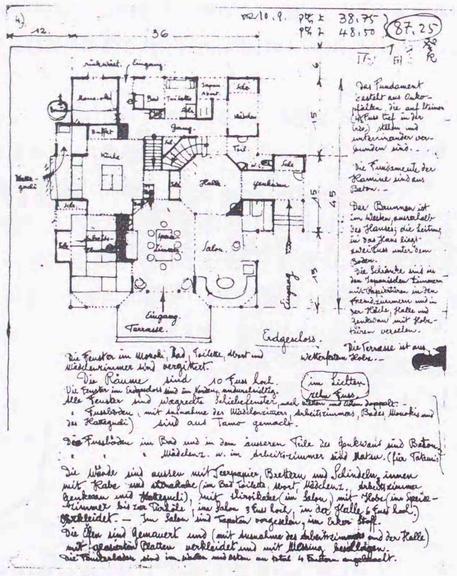


図5-1-10 柳邸 Baujournalの内容の一部

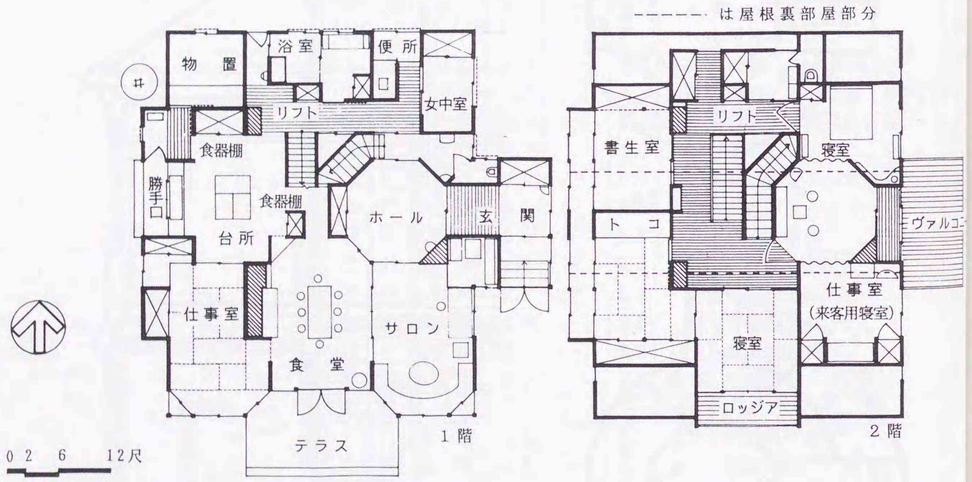


図5-1-11 柳邸平面図
(Baujournalより作成)

ばさみ(5×6寸)を架け、中心に5寸角の束を立てる。束からは、十字に大垂木(4寸角)を7寸勾配で架け、それらを垂木受(4寸角)が緊結する。大垂木間には3本ずつ合計12本の垂木(2×4寸)が放射状に架かる(図5-1-7)。「円い家」でも同様の小屋組架構であったと推測される。

いずれにしても円形住宅では、天井高の高い食堂や客室など人の集まる場を中心に構成され、「夫人室」「主婦室」といった主婦空間の確立、「取次」「小応接」など独特な応対室の設定や、寒い台所の改善、保温・隙間風防止を考慮しての外壁の仕上、開口部建具の選択などが特徴といえよう。なお同類の円形平面は、1925(大正14)年12月竣工の「小樽高等商業学校傭外国人官舎二号」にもみられ、北海道大学二号官舎との類似点が多いことも指摘しておきたい。

5-1-2:柳壮一邸

札幌市北4条西15丁目　1925年7月3日上棟　C.1971年取壊

施主は、北海道帝国大学医学部外科学第二講座教授の柳壮一博士（1890−1956）である。柳博士は、1916(大正5)年東京帝国大学医学科卒業後、同科付属病院助手、慶応義塾大学医学部講師を経て、1922(大正11)年1月医学部助教授となり、文部省在外研究員としてヨーロッパに2年間留学、帰国後の大正14年4月教授として札幌に赴任[6]した。この留学からの帰途で、来道するヒンデルと同じ船に乗り合わせる偶然も重なり、住宅の設計をヒンデルに依頼、翌年この住宅が完成した。

この住宅では、ヒンデル直筆のドイツ語による建築日誌 Baujournal (図5-1-9)が残されている。平面や仕様、仕事の経過、施主と請負、建築家間の規約も記され、現在の請負や設計契約と同種のとり決めが交わされていた。

規約では、「1．総ての職人に対する承認は書面にておこなうこと。2．支払は請求額の9割以上とはせず、残り1割は補償金として保留し、最後の決算で支払うこと。3．日雇労働者に対しては、労働時間に対して支払うこと。日曜日は無休だが、三大節と1日、16日はこの限りでない。8．建築物内では決して裸火を使用せざること。」など、請負との契約をはじめ、「4．施主は個々の職人にではなく建築家や職人の親方またはその代理人に委託すること。5．プランの修正は、不都合のない限りできるだけさけること。6．施主は、設計図のすべてのコピーを受け取り、閲覧し、サインをして返すこと。設計図はあらかじめすべてが完成していなくとも構わない。9．建築家または代理人は、少なくとも週3回現場監理を行い、建築日誌に記入されていることを確認すること。その際施主も同行のこと。10．建築日誌は、施主の希望により週3回は家に持参のこと。」など、建築家と施主間の契約も記載されている。

規約の1、2、3、8については、職人の了解を得たとして記名、捺

6：『北大医学部五十年史』(1974年)、『五十年の歩み　斗楡』(1976.3.31)による。

図5-1-9　Baujournal表紙(柳福子蔵)

印があり、「札幌市豊平町拾七番地　柾製造業　鶴巻新平　㊞、札幌市北八条西一丁目一番地　竹藤三之助　札幌市北八条西十丁目一番地　長谷川清四郎　㊞、札幌郡琴似市字発寒　松澤永吉　㊞、札幌市北十二条東一丁目　高田幸太郎　㊞」らの名がみえる。

さらに、①２階和室の内部造作、西側和室、書生部屋の天井　②カーペット、カーテン、家具、電灯のかさ、メーター　③浴室用湯沸器、浴槽、釜　④塀、門、庭などすべての外構　⑤追加注文の仕事　a）タンクと電気ポンプ　b）屋根裏部屋の板張と壁紙張　及び1925年５月６日以降発注されたものや仕様に含まれぬものは、建築費には含まれず別計算であることも明示されている。建築費は1,500円程度であった。

設計は、1925年５月６日から開始され、工事は垣根（５月９日-28日）、井戸（６月１日終了）、垣根、門などの塗装、樹木の移植（５月21日）などの外構から始まり、並行して施主との間で平面や詳細が決定されていった。上棟（Aufgerichtet）は７月３日で、屋根葺きも始まった。

屋根は亜鉛鍍鉄板葺の東面に妻をみせる半切妻形で、南側に「ロッジア」をもつ大きな屋根窓を突き出す。屋根すそを緩勾配で折るフレアードルーフは、住宅以外の作品でもよく使ったヒンデル好みの扱いである。屋根からは、暖炉用のレンガ造煙突が３本突き出る。外壁は、タール紙上にウロコ型のこけら板を1／2ずつ重ね合わせ、釘留めされている。腰付近でわずかに反り、床下は地上より２尺程度の高さで吹放して、床下換気用としている。

南面する柱間いっぱいの開口は、仕事室、食堂、サロンで、２階はロッジア付き和室である。東側玄関上部は、トタン張りのバルコニーで、夫婦寝室に付属する。窓はいずれも引違窓であるが、北側ではスリガラス入で、女中室や化粧室同様、格子を嵌めている。

床束は、おんこ（水松）の丸太で、地中4.5フィートの（玉?）石上に立ち、オーフェン（ストーブ）下の基礎はコンクリートである。

床面積は、1階38.25坪、2階48.50坪。1階南側に「サロン」「食堂」「仕事室」が並ぶ。「食堂」と「サロン」間は、木製引戸で、一室としての使用も可能である。「サロン」の北東、１坪程度の部分は、応接コーナーとして計画されたものであろうが、実際には蓄音機や飾戸棚で占められてしまった。「サロン」の南側は張出し窓とされ、三方から陽が入る様工夫され、「食堂」からは直接テラスへの出入も可能である。中央の「台所」「ホール」「玄関」をはさんで、北側には「物置」「浴室」「化粧室」「和風便所」「女中室」などがほぼ一列に並ぶ。「台所」「ホール」間には、２つの階段が並ぶ。いずれもナラ製で、一つは客・主人用表階段、他方はサービス用裏階段として利用されたものであろう。

「食堂」「仕事室」間、「ホール」「サロン」間、「台所」ではレンガ造オーフェンが設置され、仕事室、ホールを除いて仕上げは、真鍮びょう留めの

彩陶タイルである。「サロン」では黄色、「居間」緑色、「台所」クリーム色で、色決定は柳博士にまかされた。

１階天井高は、10フィートで、各室の床、壁の仕上は、次のとおりである。

室名	玄　関		ホール	サロン	食　堂	仕事室	化粧室	便所
床	ｺﾝｸﾘｰﾄ		タモ	タモ	タモ	マツ（畳）	タモ	タモ?
壁	スナカベ		6ﾌｨｰﾄまで板張（セン）	シラカベ，腰3ﾌｨｰﾄまで板張（セン）壁紙，出窓部分布張	板戸の高さまで板張（センベニヤ）	マツ	マツ	マツ?
室名	台　所	浴　室	物　置	化粧室	和風便所	女中室	勝手口	
床	タモ	タモ	ｺﾝｸﾘｰﾄ	タモ	タモ	マツ（畳）	—	
壁	マツ	ｽﾅｶﾍﾞ	スナカベ	スナカベ	スナカベ	スナカベ	スナカベ	

２階は、設計当初２つの階段を中心に、東側「仕事室」「書斎」「寝室」、西側「書生室」「和室（７畳）」、北側「化粧室」「便所」で構成される。和室は、床、障子などの造作や西側２室の天井、壁面などは未造作のままであった。南面客室（和室８畳）には「ロッジア」が付属していた。東側主寝室の八角部分はバルコニー付きの夫婦の居間的空間で、３室は夫婦のゾーンとして、どん帳で仕切るだけの一体化した使われ方をするはずであったが、実施段階では、「寝室」の八角部分は書斎に、「仕事室」は来客用寝室（板間）とされて板戸が建て込まれ、南の「和室」でも１間半のトコが西側和室に付くなどの変更があった。

東側「仕事室」「寝室」間には暖炉が備えられ、下階と同様「寝室」側に真鍮びょう留めの青色タイルが張られていた。廊下には、サービス用のリフトや屋根裏部屋に昇可動ハシゴを収納する落込戸棚なども備えられていた。

各室の天井高は、９フィートで、床・壁仕上は次表の通りである。

室名	来客用寝室	客　室	和　室	書　斎	書生室	寝　室	化粧室	廊　下
床	タモ	マツ（畳）	マツ（畳）	タモ	タモ?	タモ	タモ	タモ
壁	マツ	マツ	マツ	マツ	マツ	マツ	マツ	マツ

屋根裏部屋は、東西に引違い窓を持ち、２間幅で木造床が張られる。壁は紙張である。ここには、亜鉛鍍鉄板で内張りした水槽が置かれ、電気ポンプで井戸から揚水した水が溜められていた。凍結を防ぐためであったが結果は思わしくなく、使用は中止されたという。

5-1-3：山崎春雄邸

札幌市北２条西23丁目（旧円山村北２条西23丁目）1925年11月15日竣工
C.1973年取壊

この住宅の施主も北海道帝国大学医学部教授である。1919（大正８）年北大医学部新設に伴い教授に内定した山崎春雄（1910年東大卒）は、1921年５月から解剖学第一講座を担当、1948（昭和23）年に退官している。



図5-1-12　山崎邸北側外観（山崎家蔵）

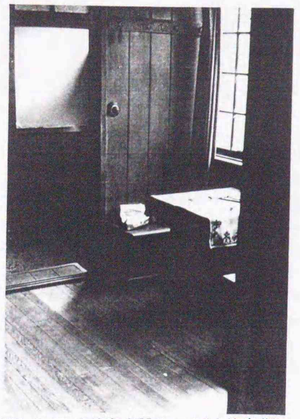


図5-1-15 山崎邸玄関ホール(山崎家蔵)

7：山崎康雄夫人による。

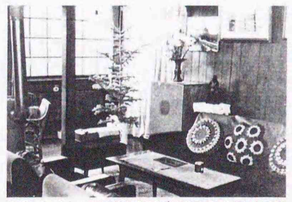


図5-1-16 山崎邸居間南西面(山崎家蔵)

山崎邸では、基本図、一部詳細をフリーハンドで描いたＡ２版の図面が１枚(図5-1-13)保存されている。独語による書き込みやサインのあるヒンデル直筆のものではあるが、相当ラフなものである。他の建築作品の例からみて、もっときっちりとした実施図面があったとも考えられるが、案外住宅クラスではこの程度の図面ですすめられ、詳細は現場指示や口頭によることが多かったのかもしれない。

南北に妻をみせる切妻の大屋根に交差して、西に２間巾の屋根窓、東に切妻屋根が貫入する。屋根すそは、柳邸同様、緩勾配で折れる。鼻隠しの端は、熊の顔を型どるが、スイス地方民家でおこなわれる魔除けであるという。

屋根の西面棟近くに立つレンガ造煙突は、暖炉用であるが、東側の１本は、1933年頃の増築の際に取り付けられたペチカ用のものである。壁面は腰までこけら葺で、１、２階の開口部上小庇も壁面と一体に扱われる。竣工当時、こけら板は明るい黄色を帯び、白く塗られた窓枠やドアと調和した美しい外観をみせ、1939(昭和14)年山本薩夫監督の東宝映画「リボンを結ぶ夫人」の一場面にも登場したという[7]。

南側妻面には、1辺約1.4尺の菱形の小窓が３ヶ所嵌め込まれ、アクセントとなっているが、屋根裏・２階収納スペースへの採光用であろう。この小窓モチーフは、北星学園教師館や同寄宿舎(1926)などにも使われる。窓は、引違窓を主とする。写真（図4-2-5)では、東側翼部に屋根窓がみえるが、後補のものである。

他の作品同様、地面からほぼ２尺の高さの腰部分は、床下換気のため仕上げはなく、床束も柳邸同様、オンコの丸太である。

床面積は、１階35.17坪、２階24.0坪。１階は、南側に玄関、ホール、居間が並び、北側は、台所、浴室、便所などの水廻り部分、東側は和室（８畳）２室である。ホールの玄関脇は、取次コーナー(図5-1-15)としてイス、テーブルが置かれる。

居間では、南側を柳邸と同様張出し応接部とし、北西側は、主婦・家族を中心とする団らんの場である。Ｌ型に、木製長椅子が造り付けられるが、座部は上げぶた式の収納スペースとされている。Ｌ型隅角部奥は、およそ日本的といい難い神棚用小祠であった(図5-1-17)。神棚下には、台所側から米などを収納していた。居間、台所間にはオーフェンが設置されるが、居間側は柳邸同様、緑色の真鍮びょう留めタイルで仕上げられていた(図5-1-18)。居間・台所間の棚はハッチ式で、台所側からのサービス用として利用される。各室の天井高は、8.5尺である。

２階は、ホールを囲んで、書斎、女中室、来客用和室、子供室から構成される。南面する書斎では、廻し縁には草飾模様が彫られ、天井は、頂部で7.0尺のくし型ヴォールトとしていた。

1931年頃の東側２間の増築では、１階に和室(８畳)２室が増設され、

和室４室の中心には円形ペチカが設置された。

山崎邸では、椅子、机、ランプシェードなどのデザインもヒンデル自らが手がけている。細かな装飾は、日本人やアイヌ人の職人に彫らせ、鳥獣・人面・植物・アイヌ紋様などバラエティに富んでいる(図5-1-19)。これらのいくつかは、山崎邸ばかりでなく、グブラー所有のもの(図5-1-20)も残されており、ヒンデルの多才な面をみせている。

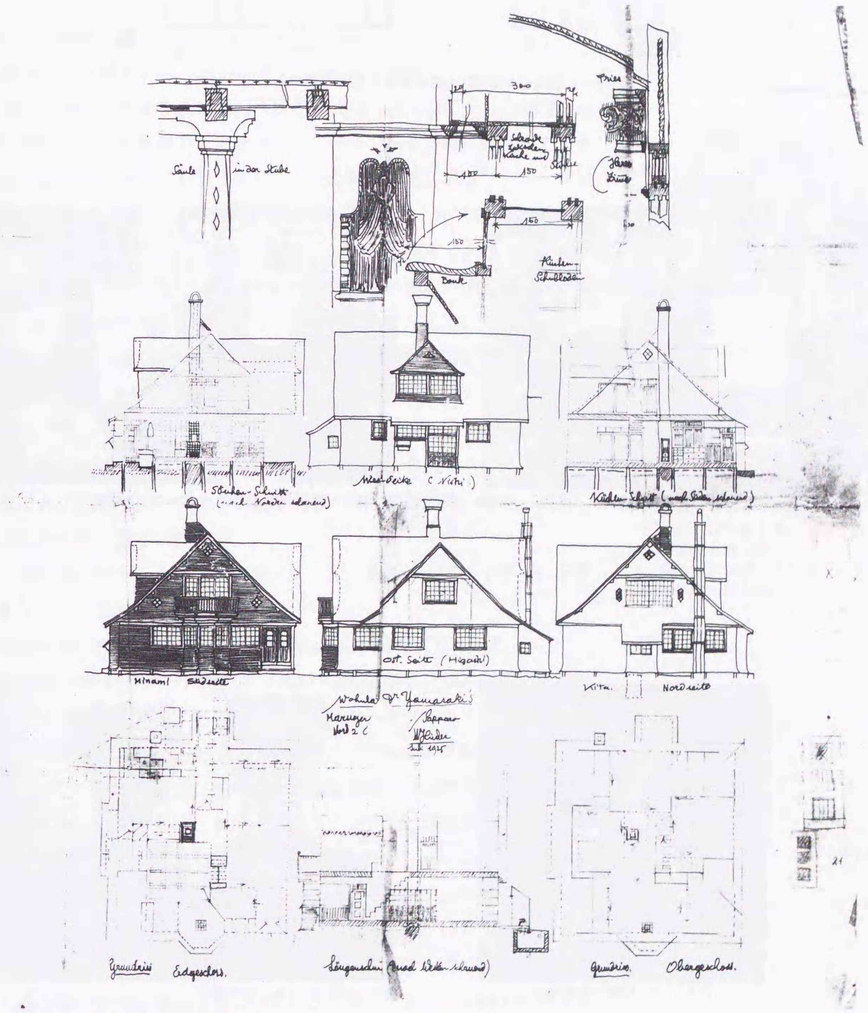


図5-1-13 山崎邸設計図(山崎家蔵)

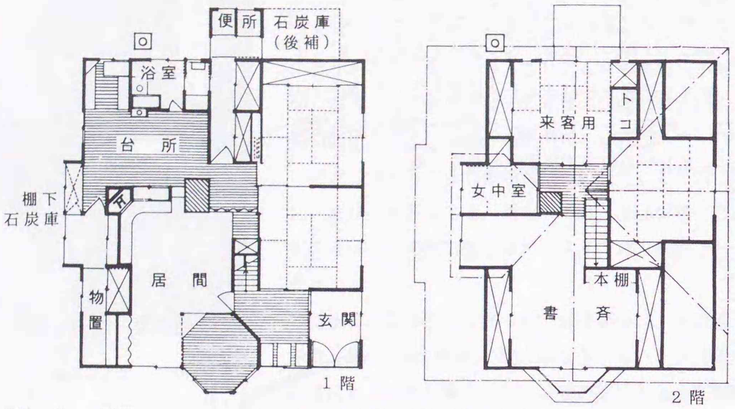


図5-1-14 山崎邸平面図(山崎家蔵設計図より作成)

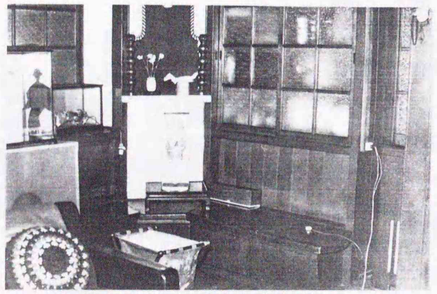


図5-1-17 山崎邸居間北面と神棚(山崎家蔵)

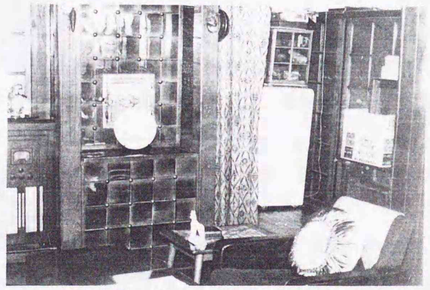


図5-1-18 山崎邸居間のオーフェン(山崎家蔵)



図5-1-19 山崎家所蔵椅子

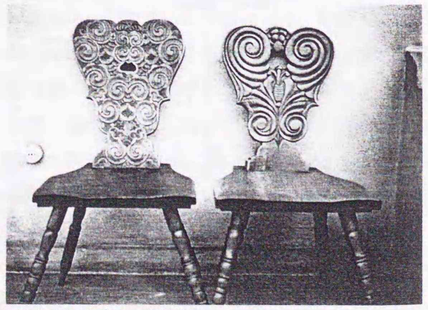


図5-1-20 グプラー所有椅子

5-1-4:林邸

札幌市　C.1925年

竣工当時の写真(図5-1-22)一葉を除いては、詳細は不明であるが、柳邸や山崎邸などと一連の作品とみなすことができる。

ウロコ型のこけら板で外壁を葺き、腰付近でわずかに反り、床下は換気用に吹放されている。引違窓や屋根すその折れなども同様の手法である。屋根交差部のレンガ造煙突は、暖炉用であろうか。切妻屋根方向の妻には、小屋根採光用の菱形小窓が付くなどの同様のモチーフがみられるが、２階の三連引違窓は太い枠で縁どり、中央に半円形の欄間を付けてパラディアンモチーフともとれる扱いをみせている。

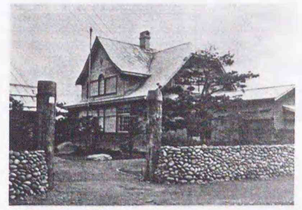


図5-1-21 林邸

5-1-5:大野精七邸

札幌市北12条東２丁目　1925年竣工　1985年頃取壊し

南北に妻面をみせる急勾配の大屋根、西側正面の裾広がりの屋根窓など、ヒンデル流の作風をよく示す小品の一つである。緑に囲まれて黄色い鉄板張りの外壁が目を引く作品で、1982年取り壊しの聖フランシスコ修道院(5-3-1.参照)や、現存する藤高等女学校(キノルド館、5-2-1参照)などと同様の外壁仕上げである。防寒、防火上の配慮であった。

西面中央には細やかに縁取りされた半円形の小屋根が控えめに突出し、入口まわりを軽やかに飾っていた。玄関を入ると、正面に居間、南側に応接室がホールをＬ型に囲む。６坪(19.8㎡)の板敷きの居間には当初暖炉が付設され、時折、蓄音機を鳴らして大黒薫教授[8] 夫人マチルド、木下良順[9] 夫人やクレンプ教授[10]ら外国人を交えてダンスを楽しむことがあったという[11]。居間を中心に東側に和室２室、北側にハッチ式の戸棚をはさんで、ダイニングキッチンが並ぶ。台所の西側は、浴室、便所、東側は女中室、勝手口が並ぶ。

２階は中央ホールをはさんで南北に２室、東西に２室が十字形に配置されていたと思われる。

建築面積は付属の物置も含めて41坪(135.3㎡)程度であった。

大野精七博士(1885－1979)は、1921(大正10)年５月北大助教授を拝命、同年11月末ドイツ留学に出発、翌11年４月から南ドイツフライブルグ大学病理学教室ルドルフ・アショフ教授のもとで約２年間留学、帰朝したのは1924(大正13)年３月、同年４月北海道帝国大学産婦人科学講座教授として札幌に赴任した[12]。来札したのはヒンデルとほぼ同じころであるが、両人の出会いには同じ北大のドイツ語教師コーラーの仲介があったものと考えられる。翌年の1925年夏にこの住宅は竣工したが、設計は無償であった[13]。

現場監督は沖津組、林清一が請け負った。沖津組、沖津熊次郎(?～1947)は小樽の大虎加藤忠五郎につながる人脈の一人で、大虎の札幌店が

図5-1-22 大野邸

8：北海道大学医学部医科学教授（前掲『医学部五十年史』による）
9：北海道大学医学部病理学第二講座教授。1937年大阪大学病理学教授に転任。
10：Willy Kremp 北海道大学予科ドイツ語教師として、1923年８月―1930年６月、1935年４月―1945８月在任。
11：大野精七博士談。
12：前掲『医学部五十年史』による。
13：大野精七博士談。

14：『風雪の百年　北海道建設業界史』（北海道建設新聞社、1980）p.187

あった時代には新開新太郎と協力して事業をすすめた。1918(大正７)年南１条に丸沖・沖津組として独立、北大本部(1937)、由仁小学校、八雲中学校(1944年)、札幌競馬場、琴似結核診療所、札幌時計台改修（1933か)、丸ヨ北の誉工場(1934)、同社長本宅、ムイネヒュッテ(1931）などを手がけている[14]。

5-1-6:ノートン記念館

札幌市南15条西８丁目　1927年竣工

ハンス・ヒンデル所蔵写真の中に、同一の建物を撮影した３枚の写真が残されている。１枚は南西側から撮影したもので、裏に「Miss Northons Häuser(links 2 zum Vermieten, rechts ihr Wohnhaus)」(図5-1-23)とあり、もう１枚は「Houseingang der Miss Northon」と裏書された玄関部(図5-1-24)、３枚目は「Die Stube in Miss Northon's Haus」と書かれた居間内部(図5-1-25)の写真である。

「Miss Northon」とは、ＣＭＳ(英国聖公会の宣教団体 The Missionary Society)の婦人宣教師、ミス・ノートン(Norton, Edith Lonsia Beatrice)のことである。明治、大正、昭和の３世代にわたって約40年間、札幌聖公会の育成のため、また多くの青年たちに英語の聖書講義を通じて伝道し、「バチラー博士が札幌教会の生みの父なら、ノートン師は確かに母の役を勤められた、いわば育ての親である。」[15]とまでいわれた人であった。

1870(明治３)年ころ英国ミデンハムで生まれ、1900(明治33)年ＣＭＳの宣教師となり、同年10月長崎において宣教活動を開始した。1903年函館に赴任し、翌1904年から伝道開始、1908(明治41)年からは札幌に居を移し、伝道をすすめた。婦人への伝道強化、英語クラスの開催、聖書研究会などの活発な働きを続け、また青年層にも大きな影響を与えた。1924(大正13)年退職が決定し、一時休暇のため英国に帰国するが、1927年再び札幌に帰任した。この年、札幌山鼻(南15条西８丁目)にノートン記念館が建てられた。この住宅が、前述の写真の建物である。ノートンの25年間の奉仕を記念して、信者から捧げられたもので、退職後も宣教師として奉仕したノートンの活動の中心となったところである。

1931(昭和６)年休暇のため一時帰国、翌32年帰任するが、1933年日本を離れ[16]、1952(昭和27)年、英国で死去した。享年82歳であった[17]。

その後この建物では、1937(昭和12)年の聖職按手式の執行などが行われ、1941年前川眞二郎牧師が教区監督に就任し、10月15日仙台より移住、1943年９月27日郷里である茨城県笠間に転居[18]するまで居住したが、その後ノートン記念館は売却されることになった。

この住宅に関する写真資料として、ミス・ノートン所蔵アルバム『R-EMEMBRANCE』（日本聖公会北海道教区所蔵)に、ハンス所蔵写真と同一の

15：日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会『教区九十年史―日本聖公会北海道教区』(1966.3.20) p.222
16：札幌キリスト教会歴史編纂委員会編『日本聖公会札幌キリスト教会百年の歩み』(1993.4.10) p.35
17：『教区九十年史―日本聖公会北海道教区』 p.351
18：前川眞二郎著／向山道子編『前川眞二郎歌集―福音の喜びの使者として―』(詩医文学刊行会、1991.12.13) p.149



図5-1-23 ノートン記念館南西側外観

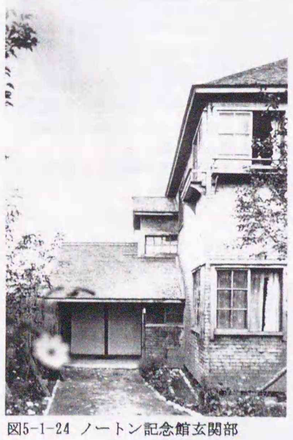


図5-1-24 ノートン記念館玄関部

３枚の写真のほか、東側外観の一部を撮影した写真(図5-1-26)が収録されている。さらに小林三樹北大衛生工学科助教授の所蔵する複写写真の中に、ノートン記念館での記念写真４葉（芥川司祭所蔵アルバムおよび須田家所蔵写真からの複写）が残されている。

内外の概要について詳しく覚えている人はわずかであるが、この住宅に居住した経験のある前川監督３女である林清子北海道女子短期大学講師が、略平面を記憶していた。この略平面と林講師からの聞き取りに加え、上記写真を参考にして、住宅の概要を推測することができる。

それによれば、ノートン邸は木造一部２階建て、柾葺きの寄棟屋根で、外壁はヒンデルお得意の柾葺きとし、１、２階とも南東、南西隅部にやはりヒンデルお気にいりの引違い２重窓を配した簡素な住宅で、写真裏書にあるように玄関の平家部を突出し、その上に中２階をおいている。外回りの建具は、当初素木であったと思われるが、ノートン所蔵アルバム東側外観写真や他の記念写真では白く塗装されており、竣工まもなく塗られものであろう。

3×3.5間の２階建て主棟部分の北側に、間口3間、奥行7間の細長い平家従棟部を付属し、手前 2.5間は台所、風呂などサービス部を含む住宅部分、さらに北側 4.5間部分は集会室として利用された。主棟の西側に突出するのが玄関棟である。

主棟の１階部分南側が煉瓦造の暖炉をもつ６坪程度の居間で、南東および南西部隅部を引違い２重窓としていた。居間の北側は食堂で、庭に出入りできる欄間付き引違いガラス戸を建てこんでいる。食堂北側はハッチ付きの台所と風呂で、東側前面は１間幅の廊下、廊下には戸袋付き４枚引き戸がみられる。

２階は、南側に6畳、押入付き4.5畳の和室を配置し、１階同様南東および南西部隅部は引違い２重窓とし、外側に窓先棚を造り付けていた。北側は6畳相当の洋室である。玄関上部の中2階は、林講師の記憶では納戸的な部屋というが、むしろ階段室踊り場であったとも考えられる。

平家北側の集会室は、西側の２間幅の入口から出入りし、８畳相当および10畳相当の板間２室は、婦人会の集会やクリスマス祝会[19]、聖職按手式[20]などに使用された。

ヒンデルの作品の中で、秀作とは言い難い簡素な住宅であるが、外壁のこけら張りと引違い建具の採用、床下換気への配慮、内部での引き戸の採用など、ヒンデルの住宅に共通する特徴を有した作品の一つである。



図5-1-25 ノートン記念館居間



図5-1-26 ノートン記念館東側外観
（右側がミス・ノートン）
（日本聖公会北海道教区蔵）

19：前掲『教区九十年史―日本聖公会北海道教区』 p.159
20：前掲『教区九十年史―日本聖公会北海道教区』 p.178

5-2　学校建築

5-2-1:札幌藤高等女学校(現札幌藤学園キノルド館)

札幌市北16条西２丁目 1924年竣工

札幌藤高等女学校は、ドイツの聖ゲオルギオのフランシスコ修女会[21]によって創設された。「玉ネギ塔」[22]としてまた「キノルド館」として親しまれているこの校舎は、大正期札幌における代表的な建物の１つであり、ヒンデルが在日設計活動の第１歩を踏みだした作品でもあった。

ヒンデルの設計図は残らないが、藤学園には『昭和29年11月30日作成平面図』(1:400)と現状平面図(1:200)が所蔵されている。1981年７月主に立面図作成の目的で実施した実測調査結果とあわせ、校舎の沿革、建物概要とおよび1932年火災復旧工事についてふれておきたい。

21：フランシスコ会の北海道布教については、5-3-1:聖フランシスコ修道院を参照。
22：『わたしの北海道(1) クサベラ・レーメさん』(朝日新聞、1976.1.13)

校舎の沿革

ヴェンセスラウス・キノルド司教[23]は、布教活動の一環として女子教育推進のため、ドイツから修道女を招いた。1920(大正９)年５月、クサベラ・レーメ他２名の修女はドイツを出発、８月10日[24]横浜に上陸、同15日[25]札幌に到着した。同年札幌に修女会の支部設置、カトリック精神に基づく教育事業を行うことになった。

学校建設の計画は、国内の物価高、ドイツ敗戦によるインフレの影響などで建設資金も不足がちであったが、アメリカのカトリック信者からの寄付などによって、地所の購入と建築資金がまかなわれた。

修女会の修院（マリア院）も校舎隣接敷地内で、1923(大正12)年から起工したが、その完成を待たずに高等女学校校舎の建築準備が開始された。校長ヨンナ・ベルクマン修女は他の修女と共に、その年の５月、約１ヵ月かけて東京その他のカトリック学校の設備・経営状況を見学している。

ヒンデルが来札する1924年３月頃迄には、学校の方針・概要などもほぼ決定していたと思われる。ヒンデルは、来札後ただちに設計を依頼されたことになるが、義弟コラー[26]などの推薦があったものと想像される。5-1-1 で前述したように東光園内に事務所[27]を建築し、設計活動を開始したわけだが、上棟式が同年９月28日であることを考えると、設計にはかなりの速さを要求されたに違いない。

施工は北11条東３丁目の三浦建築工務所(三浦才三)が請負った。その後もヒンデルの作品のいくつかを手がけており、彼が札幌を離れたあとも藤学園付近を中心にヒンデル風の住宅を設計している。仕事を通じて、ヒンデルの住宅設計の手法を三浦なりに学びとっていったのであろう。

1924年12月24日、高等女学校令により５年制の札幌藤高等女学校が認可され、翌年４月８日に第１回入学式が行われた。同年10月11日付『カトリックタイムス』には、次のように報じられている。

23：1871～1952年。1907年来札、1915年札幌教区長、1929年司教。
24：注２の朝日新聞では８月14日。
25：同上では18日。
26：1881～1925。1908年より1925年まで北海道帝国大学予科ドイツ語教師として在勤。
27：拙稿『建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER―２』（日本建築学会北海道支部研究報告集№49 1978.3)

「札幌の北十六條西二丁目に、三階バロック風まがひの建築がそびえてゐるが、これがこの四月から開設された藤高等女学校である。(略)この四月三百数十名の志願者の中から百五十名[28]を入学させたばかりで、職員数十一、教室数十四で、校舎の敷地は千八百坪あり、……寄宿舎も校舎裏にある。門の柱には「みゝづく」の彫刻があり、これは深く考へよといふ意味をあらはしたものださうである。」

校舎主屋の北側には、生徒昇降口の廊下に続いて、東西に延びる平家が付属していた。東側には割烹室、家事室[29]、便所が並び、西側には職員便所、理化室などが続いていた。下見板の外壁の簡素なデザインで、主屋部とはかなり異なっている。第１回入学式が理化室で挙行された[30]というから、主屋部と同時期に竣工したものであろうが、この部分についてはヒンデルの関与はなかったのかもしれない。

1925年には、校舎低層部西側に建坪 204坪の２階建校舎が増築された(図5-2-1)。1階は図書室[31]、地理標本室[32]、作法室[33]、教室、２階は体操場であった。東西の１階入口廻りをアーチで縁どるなどのモダンさもあり、２階に体操場を設ける平面は北星女学校でも見られるが、ヒンデルの関与については不明である。

1932(昭和７)年２月２日午前１時45分、３階音楽室屋根裏から出火、３階 163坪を焼失し同３時に鎮火した[34](図5-2-2)。損害は7,000円、出火原因は、集合煙突に使われた下水用土管の亀裂であったらしい。ヒンデルの材料選択の誤りというべきだが、日本の建築材料への不慣れさゆえの失点でもあった。後述の復旧工事報告書の中で三浦才三は、「…構造とは設計及施工の二つに区別されますが、普通の場合施工者は設計に従わなければなりませんので不注意の点が仮にあったとしても、決して不正工事等の如きは絶対ありません。元来下水用土管は素焼土管と異なり煙突には絶対不適当であります……内部に粘着せし煤火が燃焼する際、過熱の為め亀裂を生ずるのでありますから長年月の内には危険が有り得るのであります」と指摘している。

焼失個所は３階であったが、放水で凍氷被害を受け各階とも内外装補修を要することになった。復旧工事は２月２日に開始、外観はほぼ原設計通りすすめられ、３月５日ほぼ工事終了という早いペースで竣工した(図5-2-3)。またこの機会に、主屋東北部に図画室(１階)、音楽室(２階)に充てる２階建て建坪28坪の校舎が増築された。主屋と同一の意匠で、３月末に竣工している。

1947年本道初の専門学校として、藤女子専門学校が設置された。校舎は、高等女学校主屋の東翼部の１、２階と1932年増築部の１階を利用し、家政科教室、国文科教室にあてた。屋内運動場西端には、建坪36坪２階建４教室が増築され、校舎北側の調理室、家事室、物象室(理化室)、裁

28：『記念誌　藤女子短期大学30年、藤女子大学20年』(1980)では167名。
29：注28前掲書
30：前田光子藤女子中・高校長による。
31：『光明附録』(1957)による。
32：注30に同じ。
33：『昭和29年11月30日制作平面図』による。
34：カトリックタイムス(1932.2.28)



図5-2-2　焼失した藤高等女学校本館
(札幌藤学園蔵)

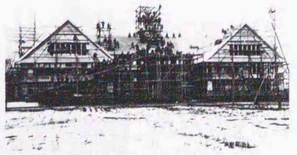


図5-2-3　復旧工事中の本館
(札幌藤学園蔵)

縫室(２階)、屋内運動場と音楽室は、高等女学校と共用した。

1950年藤女子短期大学が設置され、校舎北側一部と専門学校用に増築の４教室が使われた。1961年中学・高等女学校校舎新築に伴い、主屋北側部分は取壊された。同年４月道内初の私立４年制女子大学が発足、残された高等女学校旧主屋部を使用した。

1968(昭和43)年大学校舎新築に伴い、高等女学校主屋部は「キノルド館」と命名され、同窓会、クラブ部室などに使用され現在に至っている。

1932年復旧工事

1932年の火災については前述したが、復旧工事に関しては『藤高等女学校復興記念工事報告書並内容案内』に詳細に述べられている。記念出版物の発行は、三浦才三の発案である。札幌禁酒会会員として1924年頃から禁酒禁煙を実行し、上棟、竣工式の際には飲食せず、禁酒袢天、禁酒手拭などの配布に替えたといい、このパンフレットの配布も同様の趣旨からであった。

復旧工事と仮教室応急処置の着手は２月２日、６日には被災部分の取壊しが始まった。10日中央家建前、11日西翼家建前、12日東翼家建前をあげ、15日には屋根柾葺、外部建具の建込みを終了した。翌日は大雪で工事に支障をきたしたが、28日には外部ペンキ塗りも終え足代も取り除かれた。３月５日には大工、その他の工事も終了し、11日には３階で５年生の授業も開始された。13日内部ペンキ、ワニス及び床塗装を終了、14、15日には新教室で入学試験が行われている。16日、黒板の取付け、ガラス掃除を終了し、19日の卒業式に間に合うことができた。また同時に、音楽、図画両教室の増築工事も進められ、２月25日基礎工事着手、３月10、13日建前、14日屋根柾葺終了、簡単な上棟式をあげ、３月末日に完成した。

こうした工程の途中で、「施工関係者の精神的向上」のため、宇都宮仙太郎禁酒会長及び三浦幹事の講話(2月13日)、ルカ神父の講話(2月17日)、中村禁酒会副会長、西丸札商教諭の講話(3月5日)、西田少佐の講演(3月10日陸軍記念日）などに時間を割いており、当時の施工業界において特異な存在であったと思われる。

外観はヒンデルの原設計通りほぼ復旧されたが、翼部の屋根勾配は当初の１：１からやや緩やか(40度）にされている。また中央塔には、電気時計とマークが付加された。内部は部分的に間仕切の変更も行われ、仕様は次のように変えられた。

①床板　楢板吋乾燥材で改造。天井板と床板の間には防音、防寒の目的で炭殻を充填。
②壁　在来（漆喰壁）を取壊し新規に「トマテックス」等を張り、塗装。
③腰羽目　ベニヤ板等を用い、一部在来にならい青木板を使用、高さその他を変更。
④天井　ベニヤ板、「トマテックス」「ヒノマルテッキス」を用い塗装。⑤

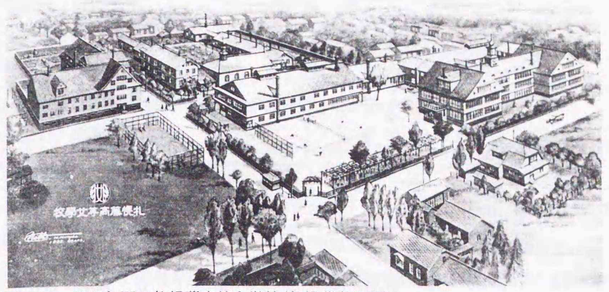


図5-2-1　1933年頃の札幌藤高等女学校(札幌藤学園蔵)

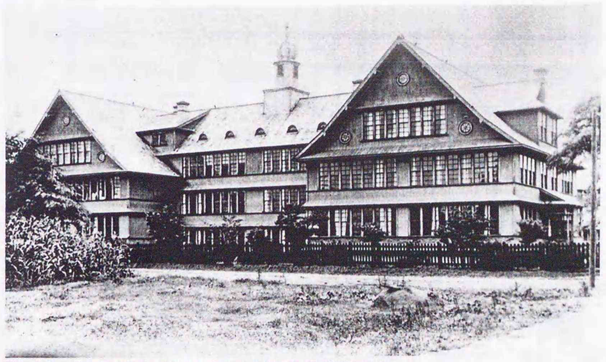


図5-2-4　復旧工事終了(1932年)の本館(札幌藤学園蔵)

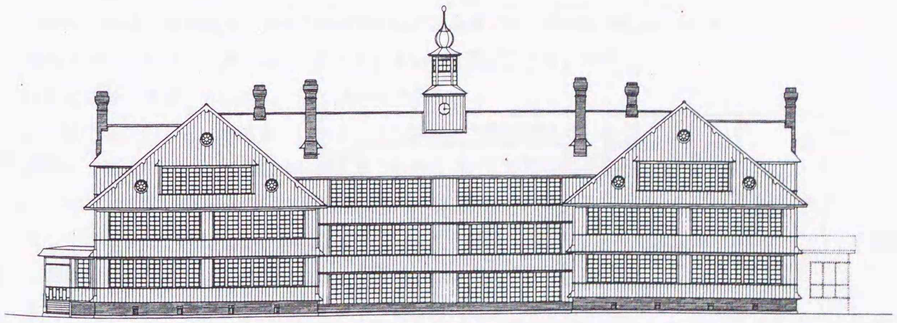


図5-2-6　札幌藤高等女学校南立面図(1981年調査時)

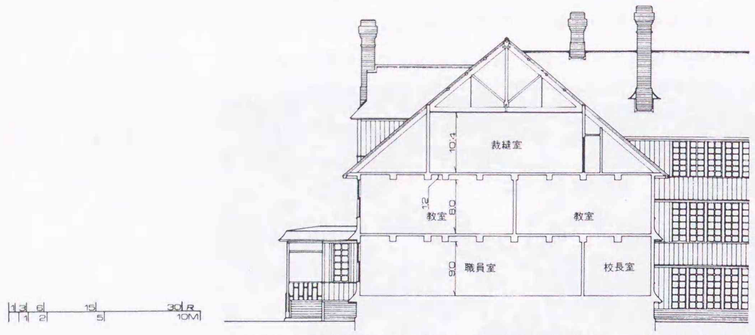


図5-2-7　札幌藤高等女学校本館復原断面図(西翼部)(1/300)(一部推定)

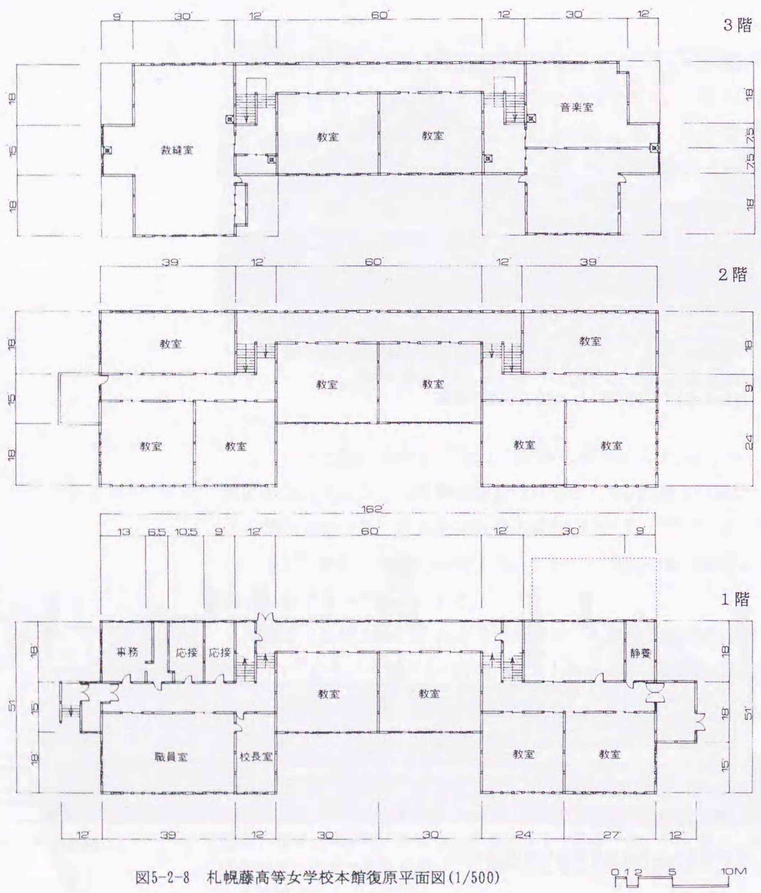


図5-2-8　札幌藤高等女学校本館復原平面図(1/500)

梁包み梁は当初むきだしであったが、ベニヤ板で包み塗装。
⑥建具・入口戸　在来の鉄レールを木レールとし、教室全部に欄間新設。
窓は在来金具を止め、「バネ弾〻」に変更。
⑦室内の換気孔　新設
⑧塗装　内外全部ペンキ及びワニス塗装
⑨煙突　内径１尺の浅野パイプ煙筒の外側を煉瓦で包み、その間をコンクリート充填。横口差込は同パイプ及び軟石使用。煉瓦の外はセメントモルタル３回塗り。木部との接合には「アスベスト」及びスレート板使用。
⑩電気工事　漏電を防ぐため「チューブ」入れ。

建物概要

現存建物は、1932年復旧時の姿を維持しているわけだが、ここではできる限り創建時の姿に復しながら建物概要に触れておきたい。

木造３階建て校舎は、中央主棟の東西に翼部を張り出し、南面に大きな妻破風をみせている。創建時の写真としては、南側から撮影したもの(図5-2-5）が残されているが、ヒンデルが最も力を入れたのも南側のデザインであったと思われる。



図5-2-5　創建時の本館

主棟中央に立つ中央小塔は、ヒンデル好みのモティーフの１つでもあった。実現したものは少ないが、北星女子校案（1928年）や上智大学案(1927年)などの基本設計にもみられる。ヒンデルのこうした塔への執着が、やがて新潟教会(1927年)や宇都宮教会(1931年)の双塔デザインなどに結実していったと考えたい。

切妻大屋根を強調するデザインや、裾広がりの急勾配屋根が特徴的で、大きな破風面には小屋裏採光用丸窓がみられ、破風には母屋鼻を隠すための控え目な装飾板が付く。翼部東西面にはそれぞれ大きな屋根窓が突出するが、３階大教室への採光用である。主棟と翼部屋根との接合部にも屋根窓を付けるが、３階階段室踊場への採光用であろう。復旧工事の際に復原されなかった部分である。

主棟屋根には、小屋裏採光用の小さな半円形屋根窓（窓枠で半径31～38㎝と実測された）が５つ並んでいる。復旧時には復原されたが、1967(昭和42)年頃の屋根葺替え工事の際に取りはずされている。煙突位置は現状と変わらないが、高さは低く抑えられている。煙道に土管を使用したことは触れたが、外装材については不明である。

外壁の鉄板張りは、木造建物にありがちな隙間風の問題解決といった防寒への配慮のほか、簡易耐火的な工夫でもあろう。この期の他の作品(フランシスコ修道院、大野邸、藤学園寄宿舎など)でも多用されており、ヒンデル好みの外装材であった。窓はすべて上げ下げ窓である。

西面には教職員用入口が張り出し、２階はバルコニーである。北側背面については、旧状を知る史料はないが、ほぼ現状通りであったと想像される。ただ現状で、上げ下げ窓の形状の異なる部分があるが、西側部分は生徒昇降口を含む２階建校舎の接合部、東側部分は北側校舎に通じる吹き放しの渡り廊下のあった位置を示している。

平面の第１の特徴は、主屋部と翼部をスキップフロアとしている点であろう。この手法は、1929年竣工の北星女学校校舎にも適用されている。

１階は、西翼部一職員用、中央棟一生徒教室、東翼部一寄宿室、童貞用室の３つの区域に分けられていた[35]。西側の入口を入ると、９尺巾の廊下をはさみ、左(南)側に職員室(24×39尺)、右(北)側に事務室、応接室などが並んでいた。

主棟は翼部から約４尺下がり、北側片廊下(9尺巾)、南側に教室(24×30尺)が２室並ぶ。東翼部は、北側に童貞の部屋(18×30尺)、静養室(18×9尺)、南側に寄宿室的に使われた部屋が２室(24×24尺及び24×27尺)[35]ある。

主棟の西階段寄りには、北側校舎に通じる廊下への入口が２ヵ所並び、東階段寄りには吹き放しの渡り廊下への引違い戸が付いていた。

翼部１階から約７尺上ると主棟２階である。２階東西翼部では、廊下をはさんで北側１教室(18×39尺)、南側２教室(18×27尺及び18×24尺)で、西側の玄関上をバルコニーとしていた。中央棟廊下の西階段寄りには、北側に渡り廊下への引違い戸が２ヵ所あった。

３階は翼部を大教室とし、東側は音楽室、西側は裁縫室であった。東側音楽室は、1932年復旧工事の際に二分された。東西両室とも、小屋裏部分を収納空間としているが、空間を有効に利用するヒンデルらしいところである。各教室とも梁が露出していたというが、階高を抑えながらも、できる限り高い天井高を確保するための工夫であろう。

小屋組は、復旧工事で取り替えられている。キングポストトラス構造で、主棟では 6尺間隔、翼部では9、9、7.5、7.5、9、9尺間隔である。部材寸法は、以下のように実測されている。

棟木	約 90×118 ㎜	陸梁	約235×120 ㎜
合掌	約235×120	母屋	90～91×116～118
真束	約150×120	垂木	約 53×58
方杖	90～92×118～120	屋根板	約 12×17
ボルト	直径 20		

35：前田光子藤女子中・高校長による。

5-2-2:北星女学校女教師館(現北星学園百年記念館)

北星学園は、札幌における女子高等教育機関の草分けといえる。遺愛女学校（1882年、函館)、聖保禄女学校（1886年、函館)に次いで、1887(明治20)年スミス女史によって創設された。当校の沿革については、『北星学園八十年誌稿』(1967)に詳しいので、改めて述べることはないが、ここでは施設の略歴について触れておきたい。

スミス女史は、1887年１月15日、札幌市北１条西６丁目通称赤官邸の厩舎を北海道庁から借り受け、一部を３畳、６畳に改修し、Girl's Boarding School of the Presbyterian Mission, Sapporo（札幌長老派伝道教会女史寄宿学校）を開校した。北星学園創立の日である。

キリスト教主義の女学校は1886(明治19)年頃から増加したといわれ、1987年には全国の高等女学校は、官立１、公立６（栃木県、京都府、大阪府、山口県、徳島県、高知県の各女学校）に対し、ミッションスクールは35を数えたという[36]。本校もこうした全国的風潮の中で設立された。

創設年の夏、北海道庁長官岩村通俊は、さらに建坪18坪(59.4㎡)の２階建校舎(１階礼拝堂、教室、２階裁縫室、寝室)を官邸構内に新築、貸与した。

1889(明治22)年官立の札幌女子小学校が開設されたため「スミス女学校」と改称。1894(同27)年校舎の借用期限が切れたため、北４条西１丁目(現共済ビル)の土地と北海英語学校の校舎を買収、移転と同時に「北星女学校」と改称した。その後、敷地の増設や増改築を重ね[37]たが、1924年現在地の南４、５条西17丁目に5,984坪(19,747㎡)を購入した。

1926(大正15)年７月10日、教師館、寄宿舎の定礎式を挙行、12月21日ほぼ竣工し、外人教師の教師館移転が完了した。翌1927年は創立40周年にあたり、１月15日寄宿舎落成移転献堂式が行なわれた。施工は、ヒンデルの作品を多く手がけた三浦工務所である。

1928年には校舎移転も許可され、翌1929年５月28日校舎起工式が挙げられ、８月14日上棟式、12月２日工事終了式を終えた。同月24日工事竣工届、学校移転届も出され、1930年１月22日献堂式を挙げた。施工は、美深日本基督教会員でもあった松浦周太郎(松浦組)、工事費は39万円余であったという。

３つの建物は、図5-2-9 のような配置で建設されたが、寄宿舎は1974(昭和49)年11月取り壊され、校舎は1963年12月４日焼失している。

36：櫻井役『女子教育史』(1943.2)

37：1901(明治35)年隣接地900坪購入、校舎増改築。1910年教室改修、増改築。1914年寄宿舎改修、増改築。

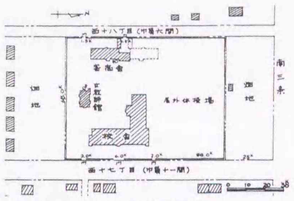


図5-2-9　北星女学校配置図

ヴォーリズの設計案

学園に保存されている設計図書の中に、ヴォーリズ[38]の基本設計案が含まれていた。寄宿舎と教師館に対する以下のタイトルの４枚である。

①PROPOSED・OF・DORMITORY・OF・HOKUSEI・JOGAKKO・SAPPORO　sketch
　＃720 立面図、 平面図
②TEACHER'S・RESIDENCE・for・HOKUSEI・JOGAKKO・SAPPORO　sketch
　＃852 立面図、 平面図

いずれも縮尺は1:100で、W.M.Vories & Co. ARCHITECTS・OMIHACHIMAN・JAPANのサインがある。日付は、①はAug.27th-23、②はSept.10th.1923と記入がある。ヒンデルの来札(1924年)以前に、基本設計がすすめられていたことを示している。

ヴォーリズは、1910(明治43)年ヴォーリズ合名会社設立以来、1922(大正11)年までに教会72、ミッション系学校77[39]を手がけたというから、本道キリスト教関係者の間にも、その名はよく知られていたに違いない。

ヒンデルへの設計依頼変更の経緯は明らかではないが、札幌藤高等女

38：William Merrell Vories(1880―1964)。1905年滋賀県近江八幡に英語教師として赴任したアメリカ人伝道師。1911年近江ミッション（近江基督教傳道團）を設立し、建築活動を同団の事業の一つとした。1941年帰化し、一柳米来留と改姓。代表作として、明治学院礼拝堂(1916)、神戸女学院(1933)、旧下村邸(1932)、大阪大丸百貨店(1923)など。
詳しくは、山形政昭『ウイリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』(私家版、1993.2)ほか一連の研究がある。

38：山形政昭『近江兄弟社を中心に残るW.M.ヴォーリズの建築活動資料の調査報告』（日本建築学会東海大会梗概集 1976.10)

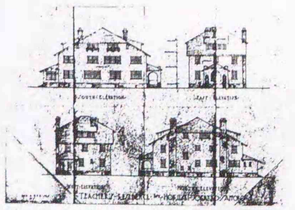


図5-2-10 ヴォーリズ案教師館立面図
(図5-2-10～13は陰画を反転した)(北星学園蔵)

学校が1924年９月上棟式をあげ、翌年９月28日には竣工しているので、北星女学校関係者がこの校舎を実際に見聞した上で、身近な設計者を選んだとも考えられる。もちろん新聞[40]を通じて、ヒンデルについて多少の知識は持ち合わせていたのだろう。またヴォーリズ側もこの期には、活動の場を本道まで拡充する段階ではなかったのかもしれない[41]。仙台に宮城女学校を設計するのが1917(大正６)年だが、この付近を北限としていたのだろうか。

教師館のヴォーリズ案は、スレート葺き、スタッコ仕上のスペイン・コロニアルとも呼ぶべき外観デザインである(図5-2-10)。

平面は、54.5'×31.5'(単位は尺)の長方形平面に、表玄関(東側)と裏玄関(北西側)の下屋を東西に付属する(図5-2-12)。１階は、rest(前室)とHallを中心に、北側RECEPTION ROOM(9'×15')、(表)階段、南側 LIVING ROOM(15'×25')、DINING ROOM(15'×19')を配し、西側に6MATS(畳)、4MATS(畳)、LAUNDRY & BATHなどのサービス空間のほか、KITCHEN(9'×14')、PANTRY、(裏)階段が並び、LAUNDRYは裏玄関へ通じている。

２階は、北側の階段室、W.C.とBATHをU字型に囲むようにして、東西をCHAMBER(12'×12.5')、STUDY(12.5'×19')、南側をCHAMBER(9'×15')、STUDY(15'×15.5')の組部屋を３組配し、３階は南側に組部屋1、北側をGUEST ROOM(12'×12.5')、BATH ROOMとし、東西は屋根窓付きのSTORAGEとしている。

こうした平面処理は、後述するヒンデルの平面と酷似していることから、ヒンデルには学校側から、ヴォーリズ案を活かすよう強い要求があったとも考えられる。

寄宿舎(図5-2-11、-13)は、36'×55'(単位は尺)の主棟に、LAUNDRY、SERVANTS ROOM(6MATS)、MONOOKIを含む12'×34'の下屋を北側に付属するコンパクトな計画である。南側正面は、１階外壁を人造石張りとし、屋根裏階にはパラディアン窓をみせる。

１階は、南端部に玄関ホール、左右の GETA ROOM、トイレ、階段室を置き、STUDY(15'×24')、RECEPTION ROOM(12'×15')、DINING ROOM(15'×36')、KITCHEN(15'×15')、MATR-ONS RM(8MATS)(寮母室8畳)および裏階段が順に並ぶ。２、３階は、南側をLAVATORY、階段室、中央６尺幅のホールをはさみ、10畳(クローゼットも含め15'×15')を東西に３つずつ並べる。屋根裏階は、10畳とGAME ROOM OR DRYING ROOMと呼ぶ18'×35'の大部屋とする計画であった。

40：1925年10月30、31日付北海タイムス「雪国に相應しい新しい建築」でヒンデルの自邸が紹介された。

41：大同生命札幌支社が1933年に竣工している。

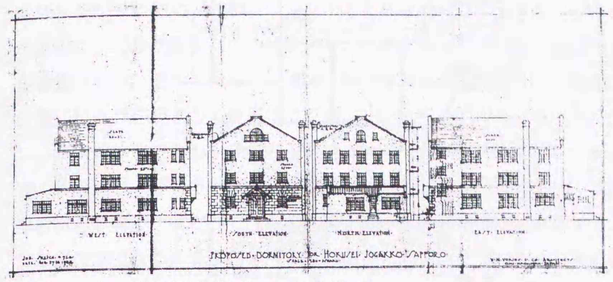


図5-2-11 ヴォーリズ案寄宿舎立面図(北星学園蔵)

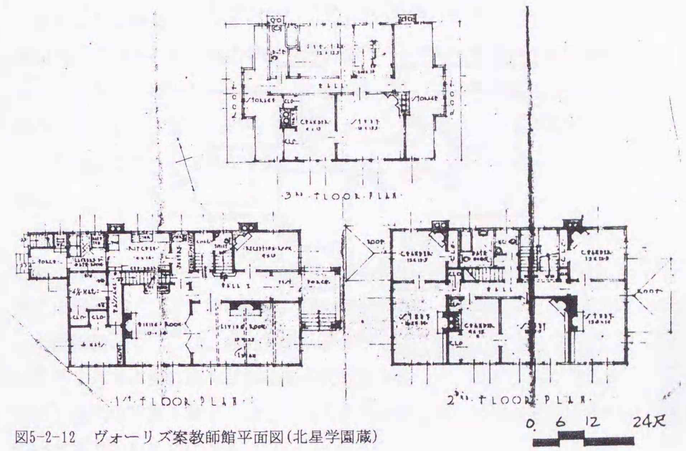


図5-2-12 ヴォーリズ案教師館平面図(北星学園蔵)

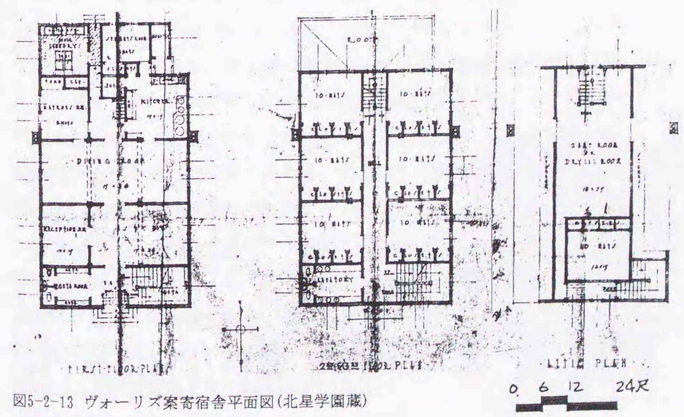


図5-2-13 ヴォーリズ案寄宿舎平面図(北星学園蔵)

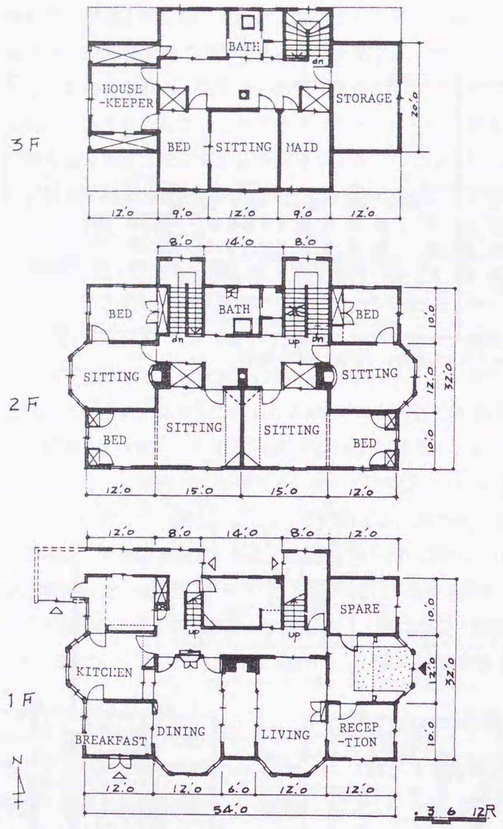


図5-2-17 女教師館復原平面図

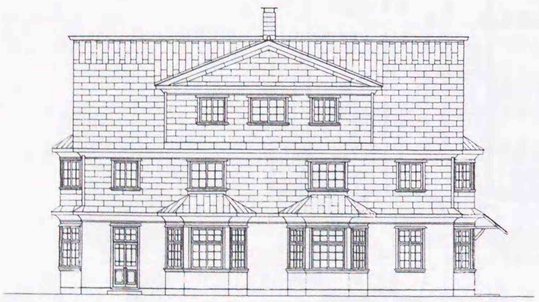


図5-2-18 女教師館南立面図 1/250

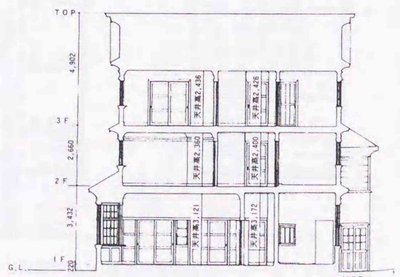


図5-2-19 女教師館南北断面図 1/250

女教師館

1941(昭和16)年太平洋戦争が勃発すると外人教師はアメリカへ帰国し、教師館は一時音楽室として使用された。1945年10月25日米国進駐軍の接収を受けたが、翌年５月９日に退去、1947年戦争終結と共に外人教師は帰任し、再び住居として使用されたが、1961年中高校校舎新築工事に伴い、教師館は旧位置から北側に引き家された[42]。以後、短期大学の研究室、図書室およびクラブ室として使用されたが、昭和62年の創立 100周年の記念事業の一環として、中庭整備と記念館の改修移転が話題となり、60年記念館検討委員会が発足、平成元年９月～11月に移転改修工事が修了し、旧位置よりさらに北側に移転し、外壁や建具の色も復原された。１階ライラック色、２、３階からし色の外壁に、濃緑色の窓枠と薄い緑色のサッシュの取り合わせは強烈で、誰いうことなく「カボチャ館」の愛称がつけられている。

からし色と緑色の組合せはヒンデル好みとしても、１階の色使いには他の作品に見られない明るい軽さがある。ライラック色は、学園を象徴する花の色であることから、おそらく学園側から強い希望があったのだろう。創立者スミス女史は、札幌にライラックを伝えたことで知られるし、明治期の北４条旧校舎(西１丁目)にはライラックの垣根があったと聞く。

修復工事前の同年６月には「さっぽろ・ふるさと文化百選」にも選出され、1991年９月～10月に中庭整備工事を実施、あわせて記念館内部の展示を終えて、11月６日「北星学園創立百年記念館」開館式が行なわれた。

女教師館については、設計図書などが残されていないこともあって、1980年７月基本図作成を目的に実測調査を実施した。また、ハンス・ヒンデル提供の写真３葉が、竣工時の外観および居間、食堂などの内部について概要を伝えてくれる。

図5-2-14は、西側から撮影の写真である。裏に、“Wohn Haus der Hokusei Lehrerinen(Der Kamin ist nachträgl höher gemacht!)”とヒンデルの書きつけがあり、竣工時の姿を伝えている。調査時の外観にほとんど一致するが、主棟西側に9×9尺程度の下屋が付属すること、屋根中央のレンガ造集合煙突がかなり高くされ、さらに煙突から煙道用円筒が10本程突出するなどの相違点がある。現在は３ヵ所に暖炉が残るが、当初はもっと暖炉の数が多かったのかもしれない。

調査時には、１階外壁はモルタル塗り緑色系ペイント仕上げで腰付近にわずかな反りがあり、２、３階はからし色の鉄板張りであった。鉄板張りはヒンデル得意の手法で、現存する藤学園女学校のほか、大野邸などの住宅やフランシスコ修道院などでも同様の仕上が見られる。

東西に大きな破風を見せる主屋根は急勾配(1：1)で、これに交叉して大きな屋根窓が南北に張り出している。主屋根の裾は、他の作品に比べ

42：M.R.ブラウン女史(1953年から在職)による。女史は1953年から５年間居住した。



図5-2-14 女教師館西側外観

43：ハンス・ヒンデル提供の内部写真裏書きによる。



図5-2-15 女教師館居間

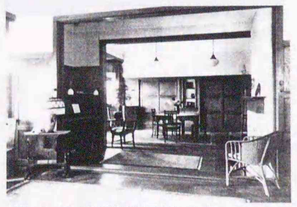


図5-2-16 女教師館居間・食堂

ると控えめだが、緩勾配で広がっている。

西側破風には、中央引違い窓をはさみ左右に１辺約２尺(60cm)の菱形窓がみられる。３階納戸への採光用小窓である。ヒンデル好みの壁面アクセントで、同様な意匠（時に円形、八角形）は他の作品にも必ずといってよいほど使われている。

１階南側、居間・食堂、東西面１、２階の張出し窓(東側１階は玄関)は、柳邸(1925年)、山崎邸(同)など他の住宅作品のサロンや居間でも使われている。採光量を考慮した以上に、ヒンデルの好んだ空間モティーフの一つといえよう。

北側は、南側張出し窓に対応するかのように、２つの階段室が 4.5尺(1.36m)突出する。両階段室の間に並ぶ窓は、上げ下げ窓で、好んで使う引違い窓でないのは、ユーテリティー部分だからかもしれない。

窓回りの処理で興味深いのは、２重窓の外側窓台の両端近くに彫られた溝である。吹き込んだ雨水などの排出か、結露水などの処理用の工夫と考えられるが、内側の敷居付近に同様の溝や穴があけられている。場所によって、細工がまちまちであるのは、大工が意味を理解せずに形態だけを仕上げたせいかもしれない。実際にどれほどの効果があったか疑問であるが、細かな部分にまでゆき届いた配慮をみせたヒンデルの一面を示すものとして興味深い。

次に内部をみてみよう。１階東側張出し部は玄関であるが、ガラス引違い戸が１重であることと、ホール中央に下がり壁が下りていることなどから、ここにさらに引違い戸が建てこまれ、風除室的な造りになっていたのかもしれない。玄関北側室の用途は不明であるが、1954年から５年間在職したM.R.ブラウン女史の時代には、予備室であったという。現在は、スミス女史愛用の机やスタンドが展示されている。南側は、他の住宅作品の平面構成から考えると、応接室として使われたものであろう。玄関ホールと引き戸で仕切られた廊下の北側は、２つの階段室とそれらにはさまれたランドリーらしき空間とが並ぶ。

廊下南側は、張出窓を持つ食堂 Speisezimmer[43]、居間Living-Room[43]である。壁は建具の唐戸と同意匠で鴨居の高さ(実測値 2,172mm)まで板張りとし上の小壁と天井は漆喰仕上である。室内写真(図5-2-15、-16)によれば、両室間の6尺(1.8m)幅の中の間の北側に暖炉が設置され、南側にはアップライトピアノが収められていた。両室いずれ側にも袖壁内に引き込む板戸を建てこんでいたが、修理工事では復原されていない。

南側袖壁のピアノ用の小さな壁灯は省略されているが、食堂の変形楕円状の浅いメダイオンから吊られた２つのチェーンペンダントは旧状にあわせて復原されている。居間、食堂の造り付け書棚と戸棚は当初からのものである。

食堂の東側は、庭側へ二重戸を建てこむ朝食室Breakfast Room[42]、張出し窓を持つ台所が並ぶ。台所北側の小部屋は、廊下と 4.5畳程度の部屋だったと考えられるが、裏玄関的な付属屋に通じていたらしい。

２階は、北側の階段室、浴室、便所、廊下をU型に囲むように、居間Sitting Room[42] と寝室Bed Room[42] の組部屋が４組配されている。東西の張出し窓付き居間には、レンガ造暖炉が現存する。南側の２つの居間には明確な痕跡は確認されなかったが、廊下側隅部にあったとも考えられる。

３階は、南側中央居間Sitting Roomと寝室Bed Roomの組部屋１つを中心に、ブラウン女史の時代には、西側は家政婦の寝室、居間の東隣は若いメイド室、東側の大きな空間は物置として使われたという[42]。

高さ関係の実測値は、1階床高ＧＬより220mm、１階階高3,432mm(11.3尺)、廊下天井高3,172mm(10.5尺)、居間で3,121mm、2階階高2,660mm(8.8尺)、天井高2,400mm(8尺)、３階天井高2,426mm(8尺)(東西室では2,592mm）である。１階床高が異常に低いのは引き家が原因で、当初は2～3尺(60～90cm)あげて、床下換気口も備えていた。

小屋裏には北側浴室上部付近に、鉄製水槽が遺存していた。約52ℓの貯水が可能[44]で、井戸から揚水し水圧を上げて給水したのであろう。

44：外形寸法で765×975×845mm

小屋構造は和小屋である。教師館程度の住宅の場合、大工の裁量にまかされたのかもしれないが、ヒンデルがむしろ積極的に伝統的構造を採用したとも考えられる。

小屋束には番付が墨書され、東西方向は、端部を除き東側から三～十八(四、七、十三は欠)で、小屋組は三～十まで 6、6、4、4、3尺間隔に組まれ、十番を中心に対称に配置されている。南北方向は、南から「ろ」～「る」(「は」欠)で、「と」を中心に左右3、4、4.5、4.5尺間隔で対称的に母屋を架けていた。

部材寸法は、棟木、母屋約118×119(単位は mm、約４寸角)、束111～119×117、振止 99～106×約22、軒桁112～118×約233、陸梁陸約118×233、棟木約60×47@1.5尺と実測されている。

5-2-3:北星女学校寄宿舎

校地の南西側にあった寄宿舎は、女教師館と同じ1926(大正15)年７月10日の定礎式を経て、翌1927年１月15日落成移転献堂式を挙げた。1964(昭和39)年に取り壊されている。

建物関連資料として、以下に掲げるものが北星学園に保存されている。

1 北星 1926 No2. 北星女学校寄宿舎設計圖 壱階平面図 1:100
設計マックス.ヒンデル.建築設計所 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」
2 1926 北星 No3. 北星女学校寄宿舎設計圖 二階平面図 1:100
設計マックス.ヒンデル.建築設計所 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」
3 1926 北星 No4. 北星女学校寄宿舎設計図 三階平面図 1:100
設計マックス.ヒンデル.建築設計所 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」
4 北星 1926 No9. 北星女学校寄宿舎設計圖 断面図 1:50

設計マックス.ヒンデル.建築設計所 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

5 1926 北星 No10 北星女学校寄宿舎設計圖 断面図 1:50
設計ヒンデル建築設計部 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

6 1926. 北星 No11. 北星女学校寄宿舎設計圖 断面 1:50
設計ヒンデル建築設計所 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

7 1926 北星 No13 北星女学校寄宿舎設計圖 正面 1:100
設計ヒンデル建築設計部 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

8 1926.北星 No14:15. 北星女学校寄宿舎設計圖 側面及背面 1:100
設計ヒンデル建築設計部 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

9 1926.No.北星1.-2. 北星女学校寄宿舎設計図 地形伏図及梁伏図 1:100
㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

10 1926.北星 No3.-4. 北星女学校寄宿舎設計図 地形伏図及梁伏図 1:100
設計マックス.ヒンデル建築設計所

11 1926.No.北星4. 北星女学校寄宿舎設計図 断面 1:50
㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

12 1926 No 北星 16-1 北星女学校寄宿舎設計図 筋違配置基準図 1:40
設計㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

13 1926 No 北星16-2 北星女学校寄宿舎設計図 階段詳細 1:20
設計㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

14 No 北星16-3 北星女学校寄宿舎設計図 各部詳細 1:20
1926設計 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

15 No 北星16-4. 北星女学校寄宿舎設計図 耐火建築部詳細 1:20
㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」

16 HOKUSEI GIRLS SCHOOL, PENSION SAPPORO 2ND & 3RD FLOOR PLAN
Sept.13 1926 1:100 PIPING(?) CONSULTING ENGINEER



図5-2-20 寄宿舎西側外観中央部
(1974年撮影)



図5-2-21 寄宿舎東側外観
(『北星学園目でみる100年 1887-1987』)

竣工建物関連の資料がほとんど残らないので、詳しい検証はできないが、現存旧写真などと較べると、図面と実際に建設されたものとでは、細部でかなり異なっているようである。計画案ではコリント風の大オーダーに支持された三角ペディメント(破風)をいただく中央棟をわずかに突出させ、左右対象に翼棟をのばしている。左右棟それぞれに玄関を設置し、玄関真上の３階に同形の屋根窓をみせている。屋根窓は、中央に引違いの連窓をみせる差し掛け屋根と左右のベル型ペディメントをのせた窓を組み合わせた意匠であった(図5-2-22)。

結局中央棟部分と南棟のみが実現され、中央棟を強調した正面意匠も、ペディメント中央上部の紐飾りや４ヵ所の引違い窓上下の曲線飾りが、半円アーチの小窓を３つ並べる簡素な意匠に変更されている。さらにオーダーで垂直に分節された意匠も、南棟と同じスタイルの水平小庇で１、２階を分節する意匠に変更された(図5-2-21)。

背面西面には、中央やや北寄りに八角形の三辺を張出した階段室塔が突出し、北側中央棟にあたる部分では３階の円窓をつけた切妻小破風とその下の中央棟のほぼ幅一杯36尺、床面から 7.15尺(2,145mm)の高さの大きな開口部が目を引く。洗濯室前の廊下を乾燥室として使用するための工夫であった。

中央棟のみ「耐火建築部」(資料15による)、つまりＲＣと煉瓦の混構造とする指示があり、断面図には同構造の区分指示などが記載されている。

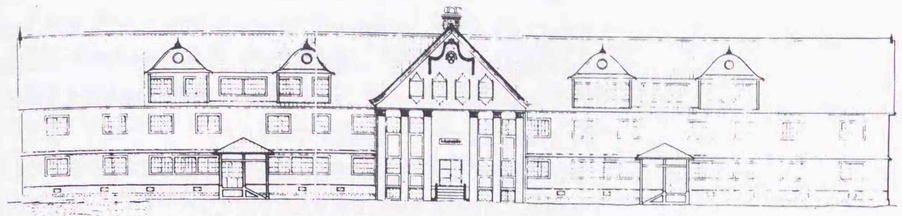


図5-2-22 寄宿舎計画案正面図(資料7)(北星学園蔵)

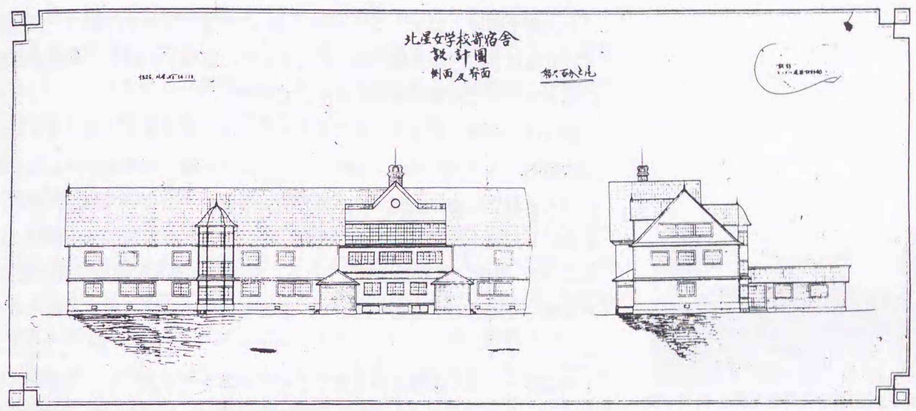


図5-2-23 寄宿舎側面、背面設計図(資料8)(北星学園蔵)

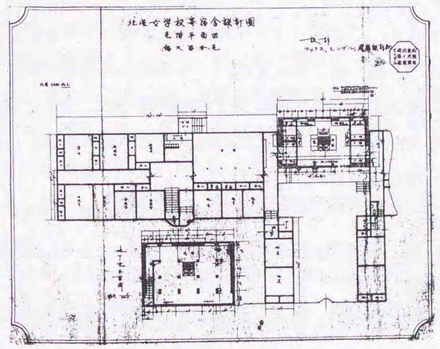


図5-2-24 寄宿舎1階平面図(資料1)(左)(北星学園蔵)

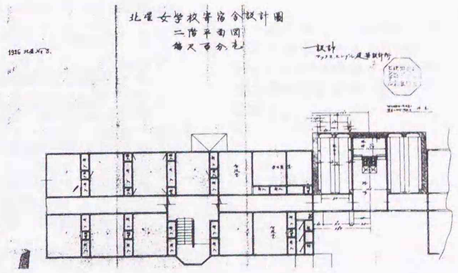


図5-2-25 寄宿舎2階平面図(資料2)(右上)(同上)

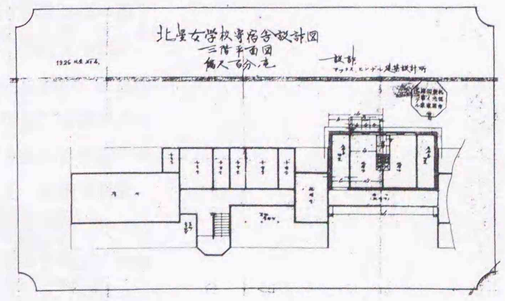


図5-2-26 寄宿舎3階平面図(資料3)(右下)(同上)

外装は、女教師館や後の校舎と同様、鉄板張りとされた。

内部平面は当初から左右対称を意識したものとみえ、平面図は片側棟のみ記入されている。設計図では、北棟部分が記載されているが、実際には南棟部分が完成した。平面に関してはこれらの設計図類以外にはほとんど資料が残らないので、ここでは平面図で南北を読みかえながら、平面計画の概要について概略ふれておきたい。

西面中央やや北寄りに八角形の三辺を張出した階段室が付属している。

中央棟の西面は軒を中央で折り上げた小さなペディメントとしている。計画案では、中央棟の屋根が一段高くなっているが、実際には飾り棟を揃えているので、単調な印象を与える。

中央棟１階は、39×21.5尺(外形寸法)の厨房と西側６尺幅の「渡り廊下」で構成され、中央棟の南に93尺×36尺の翼棟をのばし、翼棟の西側に36尺×12尺の付属物置棟を接続していた。

翼棟は、東側「玄関ポーチ」を入ると「コンクリート土間」(12×3尺)と玄関ホール（12×9尺)。玄関ホールには下足箱と外套掛けらしきものが記入されている。玄関ホールの西側に階段ホール(18×12尺)が続き、南側に６尺幅の中廊下、北側に食堂(30×21尺)、東南側に「応接間」(12×12尺)、西側に階段室を配している。食堂の西側６尺幅の位置に柱(６尺間隔）を配置して通路空間とし、北側端の中央棟境の廊下と結んでいる。

階段ホール境に両開き戸を建てこんだ中廊下の西側には、続き間（12×12尺、9×12尺)と独立室(9×15尺)の「舎監室」3室が並び、南端に「生徒室」(12×15尺、押入含む)を置いた。廊下の東側は、「応接間」(12×15尺(押入含む)、12×12尺)、「客間」(12×15尺、押入含む）である。玄関ホール脇の応接間には、棚、床、押入を構え、客間は床、棚を北面に、南面には押入、棚、押入を並べた。資料14の各部詳細には、押入と棚、床と違い棚の詳細などがみられ、各図に印の見られる所員「楽間」による補助が大いにあったと思われる。

食堂の西側、押入、戸棚を介して並ぶ続き間の「病室」3室(北から9×12尺2室、12×12尺)は、階段室北側の前室から出入りし、さらに階段踊り場下には便所を配置した。

２階中央棟は、中央に「浴場」、南北に洗面所を配置し、浴場の洗い場の東側「浴槽」(内法で11×6.1尺)寄りに集合煙突と、地下のボイラー室から３階まで結ぶ「エレベーター」が２基みられる。おそらく地下ボイラー室から石炭を運ぶためのリフト装置であろう。

翼棟２階は、生徒寄宿部分である。階段室ホールの西側に「生徒室」(12×15尺)、南北両側の中廊下境に両開き戸を建てこんでいる。南側は、中廊下をはさんで両側に３室ずつ「生徒室」(12×15尺)を、北側は、西側「生徒室」２室と便所、東側「生徒室」と「学生監室」(9×12尺、12×12尺の続き間)を並べ、中廊下で中央塔の洗面所と通じている。

中央棟３階は、中央東寄りに「水槽」、煙突、「エレベーター」を並べ、両側に「洗濯場」と「屋根裏物置」を、西側に「廊下(乾燥場)」を配置する。

翼棟３階は、「音楽室」と「広間」からなり、階段室東側に「音楽室」６室（北から6×15、12×15、6×15、6×15、12×12、6×9尺)、南側に「広間」(42×18尺)、北側に「乾燥室」(12×18尺)を配置し、西側小屋裏は、物置として利用することが示されている。

結局北側部分には増築されなかったため、対称形の外観は日の目をみなかったし、内外のデザインそれ自身も、特に眼を引くような秀作とは言い難いが、外壁の鉄板張り仕上げ、大屋根や小庇などの裾広がりのスタイル、階段室塔の張出し部分や３階音楽室採光用屋根窓のベル型屋根などにヒンデル好みが表現され、また中央煙突部上の装飾的な避雷針の扱いなどは、ほほえましい印象さえ受けるものであった。

5-2-4:北星女学校校舎

1927年１月の寄宿舎落成移転献堂式終了後、翌1928年12月28日校舎の移転建築が許可され、1929年５月28日の起工式、８月14日の上棟式を経て、12月２日工事終了式が行われた。同月24日工事竣工届並びに学校移転届を終え、1930年１月22日献堂式を挙げている。延床面積 1,303坪、工事費39万円余、小中学校では初めてのスチーム暖房を採用し、水洗便所も設置されていた。正面玄関の植樹や庭園は、宮部金吾博士の造園計画によった[45]。

竣工した校舎は、東側正面中央３階上に大きなペディメントをみせ、中央玄関部はバルコニー付きの半円形ポーチを張出していた。破風のティンパヌムには上部に北星の星型校章が、下に「北星女学校」の名称がレタリングされていた。半円ポーチはのち改造され（1948年頃の写真ではまだ確認される）、1950年代には三角ペディメントの玄関ポーチに変更された[46]。外壁全体は、藤女学校や女教師館同様鉄板葺き仕上げとされた。

正面各階の一般窓は縦長の引違い欄間付きの引違い窓としていたが、主棟西面は欄間付き引違い窓２連窓、北西棟運動場部は引違い窓を３段

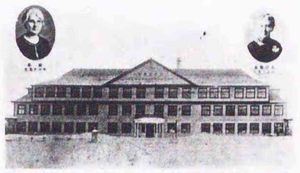


図5-2-28 北星女学校校舎(『北星学園目でみる100年 1887-1987』)



図5-2-27 北星女学校(左から寄宿舎、女教師館、校舎)(北星学園蔵)

45：『北星学園八十年誌稿』(1967.10.1)
46：『北星学園目で見る100年 1887-1987』(1987年)掲載「大学開学当時の南５条校地仮校舎(昭和37年)」写真による。

積み上げた縦長窓を配していた。

外観写真の多くが南東側からの撮影であるため、他の面についてはあまり明らかではないが、南面は２階まで葺きおろした大きな寄棟屋根に３階に相当する屋根窓を突き出し、さらに屋根窓中央に三角破風を付け、下には大屋根の軒先を突き破るように立ち上げた張出し部をみせるなど、複雑な構成をとっている。

中間階に付く張出し部中央の半円形のファンライト付き窓は、ロマネスク建築への傾倒がみられるヒンデルが多用した意匠の一つでもあった。１階を４連の楣形アーチとし、東側２連は吹き放ち、西側２連はアーチ内を引違い窓と小壁で埋めていた。

1963(昭和38)年12月４日、校舎の２階北西側棟のアトリエ付近から出火し、３階の読書室や教室群など1,200㎡を焼失している。

校舎の1929年新築工事実施までには、何度か設計変更があったことは推測されるが、敷地東側の西17丁目道路に正面を向ける構成は共通している。学園に残されていた設計図書は、大きく３つの設計案に分類されるが、一つは左右対称形とした逆Ｔ字形平面案（Ａ案）、二つめは実施案に近い逆Ｌ字平面案(Ｂ案)、三つめは実施案に近いと考えられるもの(Ｃ案)である。

Ａ案に関しては、他の２案に比べ14枚と一番多く設計図書が残されている。設計年月日の記載は無いが、配置図には寄宿舎(南半分)と教師館が既存建物として表示されている。両建物がほぼ竣工するのは1926年12月21日、寄宿舎移転献堂式は1927年１月15日であり、Ｂ案以前と考えられるので、1927年ころの計画であろう。

Ｂ案は、1928年３月付けの図面、平面、立面、断面図の４枚が残されている。図面には、1928.-33．-1～ -4.の一連番号が付記されている。

Ｃ案は、“Max Hinder，April 1928”のサイン入りＡ４版セクションペーパーに色鉛筆で書いたラフスケッチから始められたらしい。ヒンデルは、1927年10月に横浜市へ移転しているが、翌年３月にはＢ案の設計が終わり、さらに４月のスケッチ案に基づき、ほぼ１ヵ月ほどで詳細図等も含めてまとめられたようである。この案の平面図は保存されていないが、立面図や詳細図および『北星学園百年史　資料編』(1990)中の校舎見取図などから平面の概略は推測できる。

校舎の起工式は、前述のように1929年５月28日に行われている。設計からほぼ１年の検討期間があるから、途中の変更等もかなりあったと思われる。さらに『北星学園八十年史稿』には、起工式後、一部設計変更のため、許可申請をしたところ６月25日、同月18日付学教1606号指令で認可されたとの記述が見られるし、さらに８月14日の上棟式後、設計変更を10月14日付学教第2549号で認可を受けている。

Ａ案について

さて、校舎の設計過程をＡ案から順にみていこう。Ａ案関連図書は、次の14枚である。

1 北星学校々舎新築設計図　建物配置図 1:300
2 北星女学校々舎設計図　壱階平面図 1:100
3 北星女学校々舎設計図　弐階平面図 1:100
4 北星女学校々舎設計図　参階平面図 1:100
5 北星女学校々舎新築設計図　正面図 1:100 設計ヒンデル建築事務所
6 北星女学校々舎新築設計図　背面図 1:100 設計ヒンデル建築事務所
7 北星女学校々舎新築設計図　南及北側面図 1:100 設計ヒンデル建築事務所
8 北星女学校々舎新築設計図　小屋梁伏図・参階床梁及屋内運動場小屋梁配置図 1:100 設計ヒンデル建築事務所
9 北星女学校々舎新築設計図　屋根伏図・小屋伏図 1:100　設計ヒンデル建築事務所
10 北星女学校々舎新築設計図　Ａ－Ｂ断面 1:50 設計ヒンデル建築事務所
11 北星女学校々舎新築設計図　Ｃ－Ｄ断面 1:50 設計ヒンデル建築事務所
12 北星女学校々舎新築設計図　Ｅ－Ｆ断面 1:50 設計ヒンデル建築事務所
13 北星女学校々舎新築設計図　Ｆ－Ｇ断面 1:50 設計ヒンデル建築事務所
14 北星女学校々舎設計図　鉄筋床版平面図他

Ａ案は、木造３階建て一部地階付き。主棟の半地下部分のみ鉄筋コンクリート造としている。中央に時計塔をのせた主棟部から、幅60尺奥行12尺分を突出させて、南北を翼部とする。主棟の屋根は８寸勾配、３階屋根窓および翼部の屋根はヒンデル得意の矩勾配で、翼部の屋根は、南北両端で２階まで、中央部昇降口側で１階まで葺きおろし、小屋裏階の妻部には半円アーチのファンライト付き２連窓をみせている。時計塔や翼部の屋根の扱いなど、すでに竣工している藤高等女学校の南側立面と非常に良く似ている。背面に延びる付属棟は５寸勾配の屋根とし、２階の運動場上部には大きな釣り鐘状の丸屋根をつけた換気塔をみせている(図5-2-29、30)。

1階床面積457.5坪、2階433.5坪、3階226坪、延べ面積1,117坪（3,686㎡)の規模の計画で、１階は、中央事務室をはさんで左右に「昇降口」がつき、北側２教室、南側事務室、特別教室３室、中央廊下をはさんで北側職員室、宿直室、南側特別教室３室が並び、廊下南北端に昇降口と便所を配置している。１階床高は、中央廊下で地盤面より６尺高くし、南側廊下はさらに２尺床高をあげているため、昇降口にはいずれも階段室を付属する。

主棟中央背面には棟と直角に従棟がつき、半階分4.5尺下がって、中央に「食堂」と「割烹室」が並び、その南側に東から「作法室」「応接室」「階段室」「食事作法室」「物置」、北側に「洗面場」「着換室」「履物置場」「音楽自習室」(８室)が並ぶ。

２階は、主棟東側南北に各２教室(30×24尺)、西側に北和室（51×21尺)と南和室(30×21尺）を置く。従棟は講壇(奥行12尺)をはさんで講堂（48×54尺)と「運動場」(48×72尺)である。

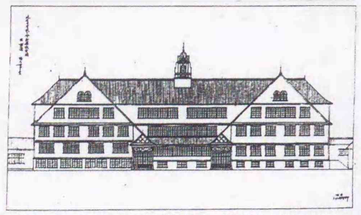


図5-2-29 A案正面図(資料A-5)(北星学園蔵)

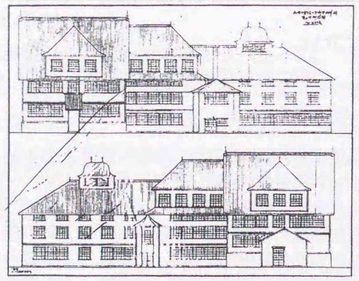


図5-2-30 A案側面図(資料A-7)(北星学園蔵)

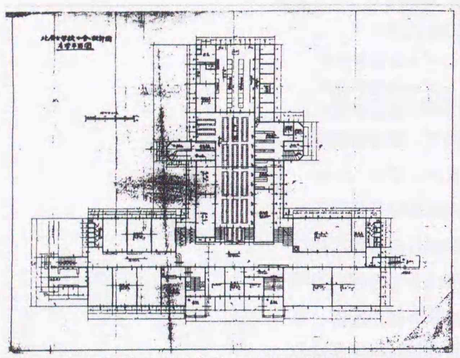


図5-2-31 A案1階平面図(資料A-2)(北星学園蔵)

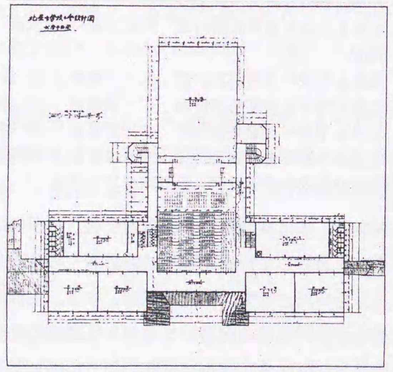


図5-2-32 A案2階平面図(資料A-3)(北星学園蔵)

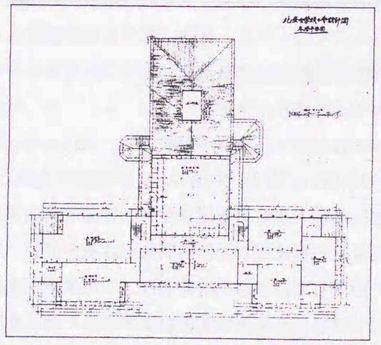


図5-2-33 A案3階平面図(資料A-4)(北星学園蔵)

3階は中央に2教室(30×21尺)、北側に3教室(30×21、33×21、24×27尺)、南側に裁縫教室2室を配し、西側従棟は「図書閲覧室」(48×51尺)としている。

階高は、主棟中央部で地階9.0尺、1階12.0尺、2階11.0尺、3階(陸梁上端まで)12.0尺、翼部では地階12.0尺、1階10.0尺、2階11.0尺、3階(同上)12.0尺、従棟部1階10.5尺、2階運動場部17.0尺、3階(同上)11.6尺としている。

小屋組は、クイーンポストトラスで、棟束下で二重梁と陸(小屋梁)を釣ボールト(φ1寸)で緊結し、合掌尻を踏止めボールト(φ3/4寸)で結んでいる。構造材寸法は以下の通りである。

合掌	0.7×0.4	小屋梁	1.0×0.4
母屋	0.5×0.35	二重梁	1.0×0.4
棟木	0.5×0.35	方形要梁	1.0×0.4
隅棟	0.5×0.4	火打梁	0.6×0.4
棟束	0.7×0.4	振止め	0.5×0.35
対束	0.7×0.4	敷桁	0.6×0.4
方杖	0.4×0.4	桁	0.5×0.4
挟釣束	0.4×0.2		
野地垂木	0.2×0.2		(寸法は尺)

B案について

B案に関しては以下の4枚の図面が残されている。逆L型平面の基本形は、実施案に近いC案に踏襲されていくと考えられるが、塔屋が無い点や正面性の薄い点をC案では中央部の正面性を強調するデザインへと変更することになる。

1 1928.-33.-1. 札幌市北星女学校々舎設計図 壱階、地下室平面図 1:100 昭和三年三月
2 1928.-33.-2. 札幌市北星女学校々舎設計図 弐階、参階平面図 1:100 昭和三年三月
3 1928.-33.-3. 札幌市北星女学校々舎設計図 姿図 1:100 昭和三年三月
4 1928.-33.-4. 札幌市北星女学校々舎設計図 断面図 1:100 昭和三年三月

東側正面の北側に三角破風の屋根をみせ、南側の翼棟には寄棟屋根、主棟には切妻屋根をかける。主棟3階北面はヒンデル流の三角破風をみせ、いずれの破風にも藤女学校にみられるような円窓を配している。

西側に延びる従棟の屋根は寄棟で、釣鐘型屋根をかけた換気塔を2基載せるが、後の聖母病院(1932年)の塔屋などに共通してみられるモチーフであった。西側翼棟の寄棟屋根には地下のボイラー室用の煙突を立ち上げている。いずれの屋根の裾もヒンデル流のフレアード屋根とし、A案に類似の棟端飾りをつけた屋根は、棟高を翼棟、主棟、従棟と屋根窓というようにわずかずつ低くして、外観にアクセントをつけている。

1階北側の連続アーチで支えられた吹き放ちの生徒用玄関ポーチが、単調な外観に軽やかさを与えており、A案のような左右対称の固さがとれているものの、全体にはヒンデルらしさを十分発揮できない外観とな

っている(図5-2-34)。

平面は、150×51尺の主棟の南端に36×90尺の翼棟を東西に張出し、北側西に向けて48×108尺の従棟を逆L型に付属している(図5-2-35)。

1階は、北側玄関ポーチに続くホール(18×48尺)の東側に「雨具置場」を配置し、ホールに続く廊下(幅9尺)の両側に「理化学実験室」等「特別教室」を10室並べ、南側翼棟は職員用の入口を中心に「職員室」(24×30尺)、「宿直室」(12×18尺)、「事務室」(同)4室など管理諸室が並ぶ。

北西側従棟は、主棟部の床より 5尺下がるスキップフロアとしている。この構成はA案からすでに発想されており、藤女学校などにもみられるヒンデル得意の空間手法であった。ここでは2階に天井高の高い屋内運動場を得るための手段ともなっている。

従棟1階に「割烹実習室」「音楽自習室」「大食堂」が配されている点はA案と同様であるが、ほかに「水浴室」(シャワー室か)が設けられている。

2階は教室群で、南翼棟に3室(いずれも24×30尺)、主棟廊下両側に6室(21×30尺)、北端東側に「作法教室」(21×60尺)が並ぶ。主棟から従棟にかけて「大講堂」(48×54尺)、中央ステージ(30×12尺)と左右前室(9×12尺)、「屋内運動場」(48×72尺)が並ぶ構成はA案と同一である。

3階も2階同様南翼棟に3室、主棟廊下両側に6室(21×30尺、うちひとつは21×42尺)の教室群で占められ、北端部は「図書閲覧室」(48×39尺一部9×12尺は小屋裏)としている。

南翼棟には地下室を置き、「暖房汽罐室」(36×60尺)と廊下、「文書庫」(36×24尺)を予定していた。

C案について

C案については、1928年4月のラフスケッチ(図5-2-36)をはじめとして以下の8葉の図面が保存されている。平面図関係は残されていないが、『北星学園百年史　資料編』中の「南五条所在北星女学校当時校舎図」や立面、詳細図等から判断すると、基本的にはB案の逆L型平面を踏襲しながら実施平面が決定されたと考えられる。断面図によると主棟の地階と1階のみRC造とする計画であった。

1 Hokusei-Gakko (正面図スケッチ) Max Hinder. April 1928
2 北星女学校校舎新築設計圖 見取其他図 1:600
3 北星女学校校舎新築設計配置並見取図 1:600
4 北星女学校々舎設計図 小屋及参階梁伏図 1:100 横濱市ヒンデル建築事務所設計
5 北星女学校々舎設計図 25.-3. 姿図 1:200 昭和参年五月 横濱市ヒンデル建築事務所設計
6 北星女学校々舎設計図 25.-4. A.－B.断面 1:50 昭和参年五月 横濱市ヒンデル建築事務所設計
7 北星女学校々舎設計図 C.－D.断面図 1:50 昭和参年五月横濱市ヒンデル建築事務所設計
8 無題 断面図 1:20

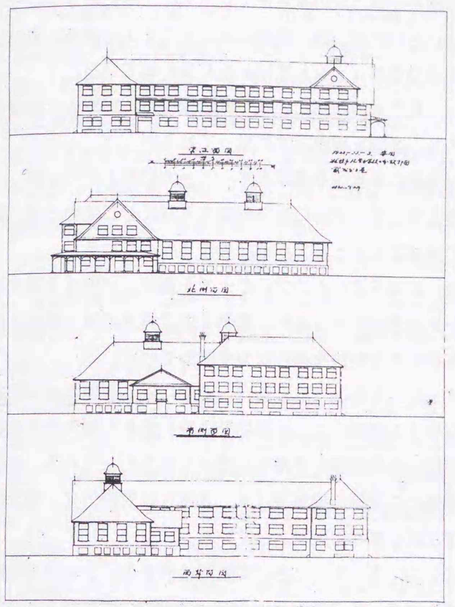


図5-2-34 B案立面図(資料B-3)(北星学園蔵)

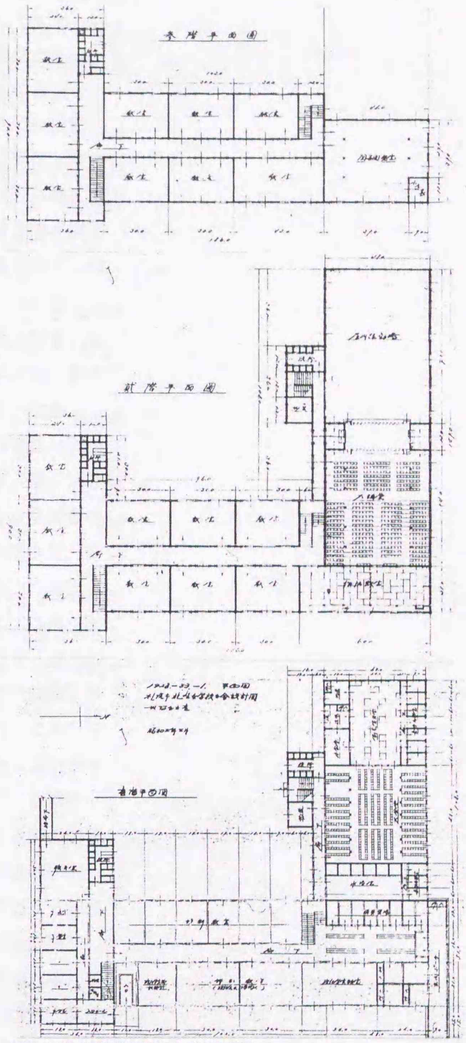


図5-2-35 B案平面図(北星学園蔵)

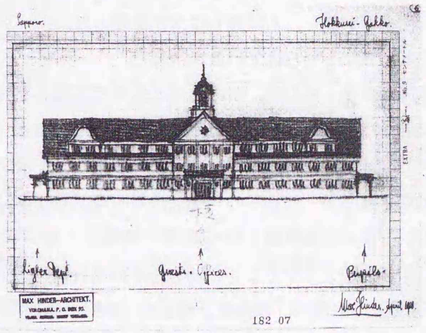


図5-2-36 正面図スケッチ(資料C-1)(北星学園蔵)

中央上部に三角ペディメントをみせる古典的な意匠を採用した東側正面は、１階に半円形ポーチ(半径９尺程度)を張り出し、また主棟頂部にはペディメントの棟から34.5尺の高さまで立ち上げた時計塔が中心性をいっそう強調していた(図5-2-37)。実施にあたってこの時計塔は実現しなかったので、中央のモニュメント性はかなり失われている。

鉄筋コンクリート造の地階基壇上に建つ木造校舎は、寄棟の大屋根を２階まで葺きおろし、３階を屋根窓風に扱っている。

三角ペディメントをみせる中央部は大オーダーの壁柱４本で分節し、２階外壁も柱型で分節して、柱間に窓を配置する意匠としていたが、実際には鉄板葺きの外壁仕上げとして平滑な意匠となっている。

１階左右の昇降口に半円アーチのアーケードをみせ、北側は５連アーチ、南は４連アーチの予定であったが、南側２連は実施段階で欄間付き引違い窓で埋められたので軽快な感じはやや薄れている。

５連アーチのアーケードをみせる北面は、西側にＡ、Ｂ両案同様階高の高い運動場を収容する棟部分で、引違いを３段に重ねた縦長の窓を並べ、一部３階建て部分の屋根窓を寄棟大屋根から突きだしている。従棟の西側半分運動場部分の屋根の換気塔はＡ、Ｂ案とは対照的に、南北両面に付く控え目な三角小屋根に変更されている。

正面のペディメント、ポーチとともに意匠的に目を引くのは主棟の南面である。１階は４連アーチのアーケードで、中央の三角屋根を載せた張り出し窓が寄棟屋根の軒をつき破って突出し、張出し部には大振りな半円欄間付きの引違い開口部が付いていた。北西棟部の南側にも三角ペディメント付きの玄関棟が突出し、入口廻りは女教師館の主玄関に対応するかのように張出し窓風にしつらえている。

平面は、『北星学園百年史　資料編』中の「南五条所在北星女学校当時校舎図」(図5-2-39)から概略を知ることができる。

180×54尺の主棟の北端に48×114尺の従棟を西側に張出し、１階は、北端を５連アーチの吹き放ちアーケードの「高女科昇降口」(9×39尺)と「守衛室」(9×12尺)、「高女科雨具室」(48×30尺)、南端を４連アーチの「専攻科昇降口」(9×36尺)アーケドと「雨具室」(6×21尺)とし、中央玄関の右(北)に「事務室」、左(南)に「校長室」「電話室(控室)」「教科準備室」(いずれも12×15尺)を配置し、中央ホール（60×18尺)と中廊下をはさんで「専攻科普通教室」(15×21尺６室、12×21尺１室)７室と「洗面所、化粧室」(18×21尺)が並ぶ。

東側事務領域の北側は「理科準備室」(12×24尺)、「理科教室」(42×24尺)、「理科家事実習室」(18×24尺)、南側は「教員室」(39×24尺)と「教師休養室」(9×24尺)である。

北西側従棟は、１階は主棟部の床よりおよそ5.5尺上がり、地階は5尺下がるスキップフロアとしているが、この構成はＡ案からすでに発想されている。

従棟地階は、西端中央に「割烹教室」(24×42尺)、北側に廊下をはさんで「器楽練習室」８室(9×6尺)、南側に「器楽練習室」2室(12×12尺)「試食食堂」(12×18尺)を配置し、中央に「大食堂」（36×54尺＋12×36尺)、東側に「更衣室」(36×18尺)と「器楽練習室」４室(9×6尺)を配していた。

２階は教室群で、主棟廊下の西側は普通教室３室(30×21尺)、東側は北から「唱歌教室」(60×24尺)、普通教室(30×24尺)、「作法実習室」(12×24尺)、「作法室(控室)」(48×21尺)が並び、西教室群の北側に「生徒休養室」(12×21尺)、階段室が、南側に「化粧室、洗面所」(18×21尺)が配されていた。廊下の南端は踊り場を張り出した階段室である。

２階従棟部は、主棟から従棟にかけての「講堂」(48×72尺)と「室内体操場」(48×72尺)が並び、「講堂」西端に「講壇」(幅24尺)と左右の「控室」(12×12尺)を備えていた。

３階は、9尺幅の主棟廊下の西側に「図画習字室」(42×21尺)、普通教室(30×21尺)２室、廊下東側は普通教室群4室(30×24尺、24×24尺各２室)、北側に「(高女科)裁縫室」(48×24尺)、「準備室」(12×12尺)を配置し、主棟北端から従棟部にかけて「(専攻科)裁縫室」(48×36尺)と「図書閲覧室」(48×36尺)を配していた。

正面にみられる一般窓は、引違いの欄間を付けた引違い窓で、内法高6.2尺(欄間を含む)、北西棟1階の縦長窓の内法は10.3尺の計画であった。

主棟の天井高は地階9尺、1階10尺(玄関部分)、2階9.5尺、3階9.2尺と表示され、小屋組はクイーンポストトラスである。構造材の寸法が以下のように記載されている。

小屋梁	0.8 ×0.5	山形筋違	0.45×0.35
〃 (昇降運動場)	1.0 ×0.5	行間振止め	0.5 ×0.35
二重梁	0.8 ×0.45	水平筋違	0.5 ×0.35
〃 (昇降運動場)	1.0 ×0.45	棟木	0.45×0.45
合掌	0.5 ×0.45(×2)	母屋	0.5 ×0.35
真束及左右束	0.8 ×0.45	軒桁	0.45×0.45
方杖類	0.45×0.45	屋根垂	0.2 ×0.2
挟鈎束	0.45×0.2	野地板	厚 0.05

(寸法は尺)

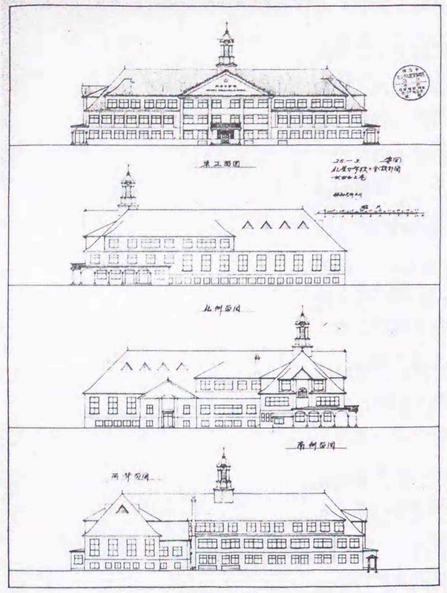


図5-2-37 C案立面図(資料C-3)(北星学園蔵)

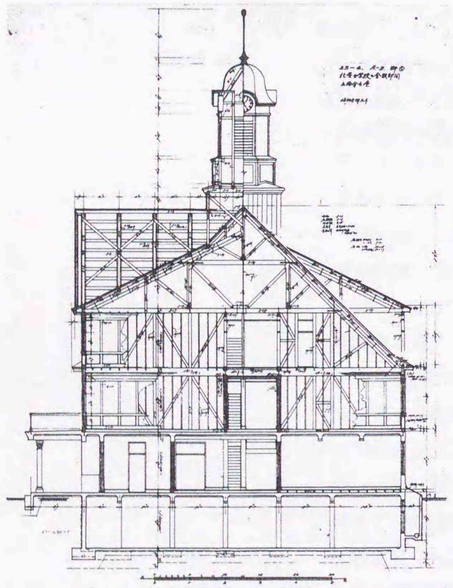


図5-2-38 C案断面図(北星学園蔵)

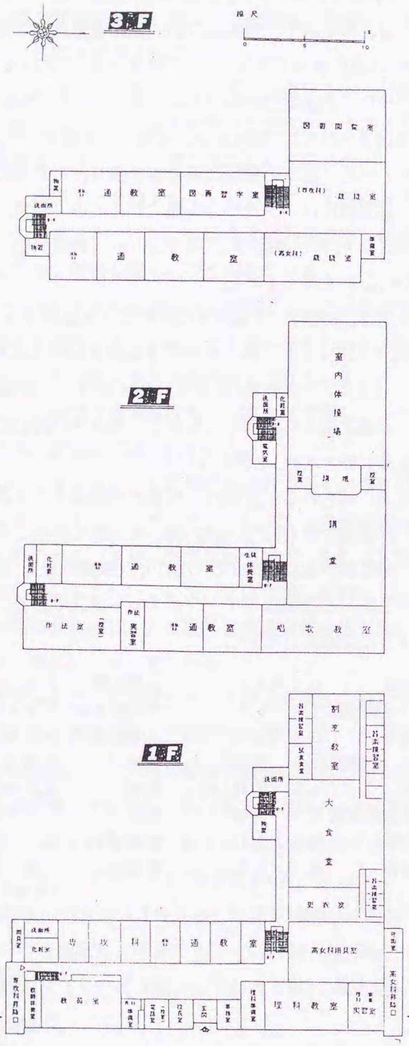


図5-2-39 校舎間取図(『北星学園百年史 資料編』)

5-3 宗教建築

5-3-1:聖フランシスコ修道院

本項では、札幌聖フランシスコ修道院竣工前後までのフランシスコ会の沿革について概略ふれ、あわせて1970年度竹中育英会建築研究助成による文献調査と1982年実施の実測調査結果をもとに、本修道院の建物概要について述べる。

フランシスコ会の北海道布教

フランシスコ会の北海道布教史は、1957年発行『光明附録』(ゲルハルド・フーベル著)に詳しいが、ここでは、1925(大正14)年の修道院竣工までの間の、主に建築関連事項を中心に略述しておきたい。

日本におけるフランシスコ会の布教開始は、1592(文禄1)年、ペドロ・バプティスタらルソン使節の来朝によるという。その後、秀吉による禁制、二十六聖人の殉教(1597年)を経て一担壊滅。徳川家康時代にも布教が展開(1599年)されたが、同和年間には迫害が激しさを増し、1628年頃には全滅状態、奥州山間に潜入の3名の宣教師の殉教(1638=寛永15年)を最後にとだえている[47]。

1907(明治40)年1月19日、ドイツのテューリンゲン管区の会士2名が札幌市に到着、日本布教再開の記念すべき日となった。布教再開の動機は、函館司教アレクサンドル・ベルリオー師が、1905(同38)年渡欧の船中で、ローマのマリア宣教者フランシスコ修道女会に娘のいるフランス人紳士との偶然の出会いであったという。師は、広大な司教区[48]を援助してくれる人の確保と、布教資金を集めるための旅の途中であった。

同年12月、ローマのフランシスコ会の本部修道院を訪問、札幌に修道女会の修院設置を許され、またフランス人司祭マルナ師[49]にフランシスコ会員を札幌に呼ぶことをすすめられ、1906年サンアントニオのフランシスコ修道院会総長ディオジニア・シューレ師によって3人の司祭派遣が承諾された。当時札幌では、外国語教授が要望されていた事情もあって、ベルリオー師は、ドイツ語、フランス語、英語のそれぞれ三ヵ国出身の司祭を派遣するよう依頼していたが、1907年1月ドイツ語担当、ヴェンセスラウス・キノルド師、フランス語担当、モーリス・ベルタン師、遅れて6月カナダから英語担当のペトロ・ゴーチェ神父とガブリエル・ゴットブー修士が到着した。

当初、北1条東6丁目の教会(1898年建設)の客間住いをしたが、1907年4月中頃、北1条東3丁目に2戸建住宅(図5-3-1)を地所つき2,000円で購入。移転数ヵ月後、週2晩2時間の語学教室を開始した。生徒の多くは大学教授、医師、学生達といわれ、当時の札幌における欧米文化摂

47:『キリスト教大事典』(教文館、1963.6.30)

48:当時函館教区は、東北6件、新潟県、北海道及び付属諸島を含み、最大の教区であった。

49:日本布教に熱烈な好意を寄せていた聖フランシスコの熱心な会員。長く日本を旅行、『日本に復活したイエズスの御教』を残す。(フランシスコ会北海道布教小史(一))

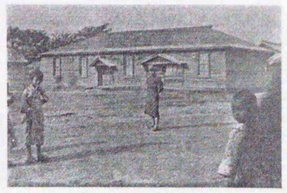


図5-3-1 札幌北1東3仮修道院
(『光明附録』)



図5-3-2　札幌北15条修道院
（『光明附録』）

取の中心的な役割を担ったともいえる。

この年にはまた、北15条東１丁目に、 3,000坪を超える地所を購入、翌1908(明治41)年春から修道院を着工、11月12日に奉献式をあげている。

図5-3-2のような、端正な木造下見板張りの２階建てで、「できるだけ金をかけずに簡素に仕上げた」[50]という。建築費は6,000円であった。写真は南西側からの撮影と思われるが、写真左側、上げ下げのアーチ窓をつけたバシリカ風部分が礼拝堂で、右側は修道院部分であろう。

１階は、引違い連続窓が並ぶガラス面積の大きな明るい部屋のようで、図書室、食堂など集会室的なものが並んでいたのだろう。２階には上げ下げ窓が６ヵ所みられる。屋根には集合煙突が５ヵ所確認できる。

この年、北３条東３丁目には、女子修道院の仮修道院も建てられ、またキノルド師が正式に布教地区の長に認定されている。

1909(明治42)年司祭２名、修士３名が到着したが、この中に、北１条教会(1916年)の設計でも知られるフランツ・フェルゴット師も含まれていた。この年フランシスコ会は、亀田教会(1909年７月14日祝別式)と室蘭教会（1910年５月増改築)の両教会を担当することになる。

1911年フルダ管区に編入されたが、この年には、白老教会（1915年秋閉鎖）、倶知安教会を設立、また修道院敷地内には学生寄宿舎を建設した。９月には、北12条東３丁目に患者約25名収容の女子修道院の病院が竣工(９月14日祝別式)したが、修女用には小屋裏に質素な部屋があてられた。これが天使病院の始まりであるが、後1914年に、同一敷地内南側に修院と小聖堂を建設している。

1913年には、広島村教会設立、岩見沢教会と樺太豊原教会を引き継いだ1915年、函館司教区から独立、札幌知牧区が開設されたが、この年亀田教会は函館司教区に編入、札幌北１条教会、旭川教会、小樽教会を引き継いだ。翌年札幌北１条教会竣工(1916年10月８日献堂式)、1920年春には北11条東２丁目に教区長館を建設した。

1922(大正11)年７月末、北15条修道院の付属聖堂が狭隘化し、また道路にかかることもあって、北11条東２丁目に本聖堂が建った際集会所として使う予定の仮聖堂を、 4,000円で竣工した。この年天使病院も増改築を施している。1924(同13)年聖ゲオルグのフランシスコ修女会の修院(マリア院)と藤女学校も完成した。

1925(同14)年11月19日[51]、北11条東2丁目のフランシスコ修道院(図5-3-3)の落成式が挙行された。翌年、敷地内に神学校(図5-3-4) も建設された。現北11条教会新築のため1960年頃取壊された[51]というこの建物について詳細は不明であるが、写真を見る限りヒンデルの作風によく合致しており、全体のデザインも修道院とよく似ている。

外壁を鉄板張りとする木造３階建の建物であり、屋根裏を緩勾配とし、南側に大きく屋根窓を張り出す。小屋裏採光の窓は、妻側を２連アーチ、

50：「フランシスコ会北海道布教小史(二)」『光明附録』第1174号(1957.1.20)

51：天使幼稚園鈴木園長による。



図5-3-3　フランシスコ修道院北西外観



図5-3-4　フランシスコ修道院神学校

南側を円窓とし、他の窓開口は、蘭間付引違窓を採用している。こうしたヒンデル的モチーフからみて、ヒンデルの作品として間違いはないであろう。

修道院は、1973年６月から翌年２月まで、ファッションドレスメーカー女学院として使われ、1975年２月から天使幼稚園として利用、1982年８月取り壊された。

建物概要

修道院という建物の性格のためか、全体としてやや固い印象を受けるが、反面落ち着いた安定感のある建物であった。ヒンデルのデザインに共通してみられる特徴の一つは、切妻の急勾配の大屋根であるが、この作品でも東西に妻をみせる大屋根が使われ、屋根裾もやはり緩勾配で折れたフレアードルーフを採用し、大屋根と交差して北側に間口９尺の屋根窓が張り出している。また竣工時棟には東西に十字架を掲げていた。

半地下部をレンガ造とした木造３階建てで、外壁は鉄板張りである。外壁鉄板は、各階窓の庇先まで連続している。

北側正面には玄関部と礼拝堂脇の小部屋が張り出し、各々の屋根も大屋根と同じく裾で勾配を変える。張出した脇小部屋の北側外壁中央には、ＡとＭの文字(アヴェ・マリアを意味するという)を図案化したものがみられる。こうした装飾デザインも、ヒンデルの得意とする一面であった。ただ全体としては装飾が極めて少なく、礼拝堂や脇小部屋の窓に飾りサッシュを用いる程度であった。

東側には「便所」、南西部には「台所」「食料庫」を張り出し、変化をみせている。

半地下部はイギリス積みレンガ造であり、窓台より上を普通レンガ、下の部分は多少黒味がかった光沢のある釉薬レンガが使われていた。防水を考慮してのことだろう。壁厚が木造壁のほぼ２倍あるが、１階外壁下端のフレアによってうまく処理されている。このフレアは雨仕舞を考慮しての工夫でもあろうが、建物に安定感を与える要素のひとつとなっている。

窓は半地下、便所、玄関を除きすべて上下げ窓であったが、３階妻面、北側屋根窓、礼拝堂の他は２連窓である。

３階小屋裏階は旧状のままであったが、１、２階部分は幼稚園に転用する際大幅に改造され、窓枠や小庇も取りはずされ、アルミサッシュの引き違い窓に変えられていた。特に礼拝堂部分は、開口が広げられている。当初は復原北立面図(図5-3-5) に見られるように、菱形の装飾組子を施した上げ下げ窓であった。

玄関ポーチの柱上部には、菱形の連続した彫刻が施されている。前述の礼拝堂窓にも同じ形が使われており、他の作品にもみられることから

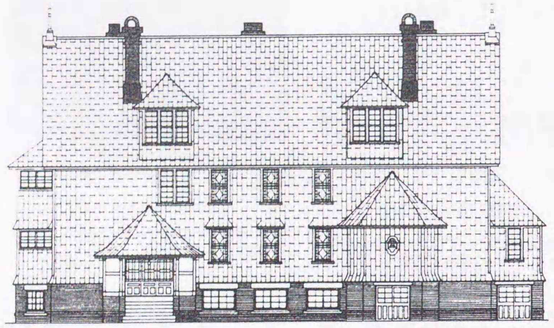


図5-3-5　復原北立面図

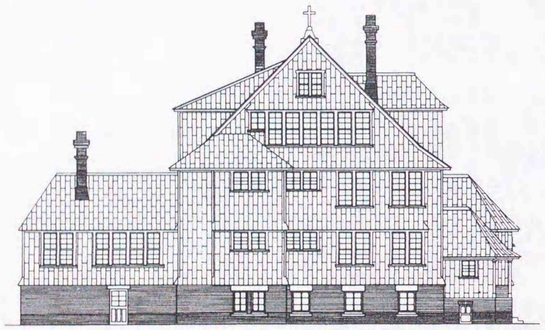


図5-3-6　復原東立面図

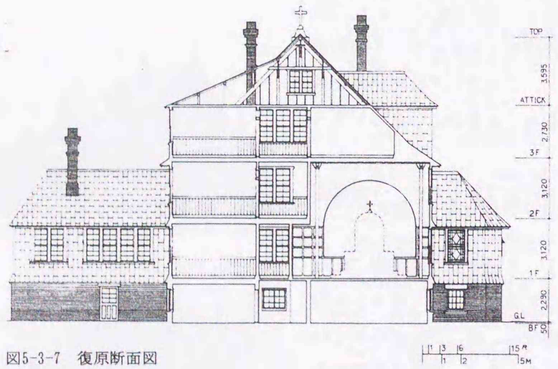


図5-3-7　復原断面図

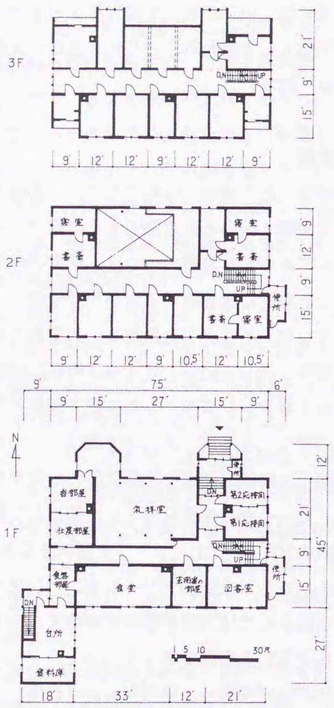


図5-3-8　復原平面図

ヒンデル好みの意匠の一つといってよいだろう。

内部は、建具、間仕切りが幼稚園転用時に大きく改装されたが、園舎としては１、２階が主として使われ、３階は竣工時の状態をほぼ継承していたので、旧状を概略知ることができる。竣工時の平面は、図5-3-8のように復原されるが、１階は主に集会用に計画されており、２、３階は個室群としている。

１階北東部の張り出しは玄関で、土間の東側には来客用の便所が設けられていたという。ホールと廊下の間には引戸が設けられており、一般者の立入りを禁ずるいわば聖俗の結界となっていた。ホール右手に「礼拝堂」があり、北側に張り出した脇小部屋に続いて奥に「仕度部屋」と「香部屋」がある。礼拝堂は当初１、２階吹き抜けであったが、1973年ファッションドレスメーカー女学院に転用される際に床を張り、教室としたらしい。幼稚園時代は、１階を園児室、２階を音楽室に使用した。

２階音楽室西端には、装飾柱や半円部分と格子状に組んだ板壁が残されており、壮麗な祭壇(図5-3-9)をもつ礼拝堂の名残であった。また主祭壇とは別に、廊下側壁面に２ヵ所、脇小部屋に１ヵ所副祭壇が設けられていたという[51]。天井は格天井で、細かな繰形のついた格縁が組まれていた。同様の格縁は、玄関ホールの一部、食堂、図書室にもみられる。礼拝堂２階は東側１スパン分をギャラリーとし、２階からも出入りができた[51]。

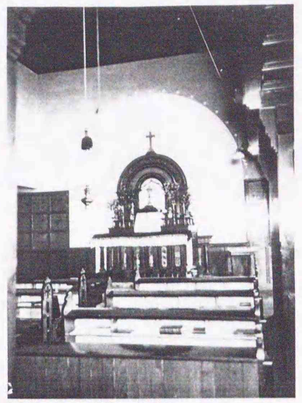


図5-3-9　礼拝堂・祭壇

ホール左手に応接間が２室あった。廊下の南側には、東から「図書室」「玄関番の部屋」「食堂」と続き、南西部には「台所」と「食料庫」棟が続いていた。廊下東側に階段室があり、踊り場に便所を設けている。西端には水くみ場があり、地下から各階に水道管が通されていたという。調査時にも立ち上がり管がそのままになっていた。

２階は修道士達の居室で、北東、北西および南東の部屋は寝室と書斎が続く組部屋となっている。その他の部屋も居室に使われたと思われるが詳しいことは不明である。

階段室踊り場部分には１階と同様、便所が付属していた。内部仕上げは、廊下、室内共に大和張り(あるいは綾目張り)の腰壁と天井であり、壁上部は漆喰塗りになっている。これは３階も同様である。

３階は調査時ほとんど使用しておらず、建具、窓も旧状を残していた。復原平面でわかるように廊下をはさんで細かく仕切られた部屋が並ぶ。２階と同じく修道士の個室や、来訪者の寝室として使われたという[51]。北側中央の３部屋は、3×2尺のはめ殺し窓が屋根面に設けられているが、竣工時の写真では見あたらない。間仕切り(３階平面図中の点線部)も後補のようで、当初の用途は不明である。修道士の人数が増えたために間仕切りや窓をつけて個室にかえたのであろうか。

各室ドアの鴨居部分に部屋番号として、北東部屋の「23」から左回りに

連続し南東の「36」で終わっていたが、当初のものか不明である。

小屋裏にあたる東西端部は、収納庫として隅まで使用できるようになっている。ヒンデルの平面計画の特徴とも言えるものである。廊下の西側端部には避難口が設けられている。

レンガ造の半地下も中廊下をはさみ南北に部屋が並ぶ。北側に東から「酒蔵」「物置」「裁縫室」、南側に「石炭庫」「浴室」がある。南側中央３室はしっくい仕上げがしてあり居室として使われたというが、居住環境から考えると、長期間の使用はなかったと思われる。南西突出部には台所への直結階段があり、食料貯蔵用に使われたのかもしれない。天井は梁、根太がむき出しになっている。

小屋裏は床を張り、北側には押入を備え、物置として使用している。東西妻面に採光用の２連窓がそれぞれついている。

小屋組はクイーンポスト・トラス構造であるが、やや異形とも思われる部分が残る。施工者の不慣れさのためだろうか。部材寸法は、棟木・束 約150×150㎜、母屋 約118×118～120㎜、方杖約72×84㎜、合掌約236×150㎜、垂木 約75×46㎜と実測されている。

5-3-2:天使の聖母トラピスチヌ修道院

函館市上湯の川 346にある「厳律シトー会天使の聖母大修道院」は、上磯町にある男子トラピスト修道院と同じシトー会に属する女子修道院で、男子修道院より１年数ヵ月遅れの1898(明治31)年、フランスのウベクシにある聖ヨゼフ聖母修道院から派遣された８人の修道女により創立された[52]。明治末期にレンガ造本館が建設され[53]、1913(大正２)年までに園内の庭園、畜舎、製酪場や司祭館などが完成した[54]。

1925(大正14)年10月16日[55]、原因不明の出火で、聖堂、司祭館、新築中の建物を残して、レンガ造本館のほとんどが焼け落ちた[55]。1925年11月11日付け『カトリックタイムス』は、次のように報じている。

「寝室と食堂にあてられる新館が建築中で、もう二三週間で落成するという所であったので、そのために来てゐた大工等が非常なる熱意をもって二階と下のものは大抵はこび出した。……新館と院外聖堂、司祭館、台所を残して本館は皆焼け、地下室も燃えてしまった。(略)」

本館部の第１次再建は1927年に完成し、同年７月５日[56]献堂式が挙行された。修道女の中には前年入ったばかりの川田龍吉男爵の令嬢もおり、男爵が献堂式に参列したことが知られている[56]。

1925年竣工予定の新館部分の設計者は不詳であるが、再建部分は1927～30年にかけてヒンデルが担当した。焼け残ったレンガ外壁を生かし、また当初のデザインを踏襲して、正面南西棟、北西側聖堂棟(1927年)、北東棟(1930年)が完成した。南東食堂棟は前述のように火災前から着工していたもので、設計者不詳部分である。

52：『北海道大百科事典<下>』(1981年、北海道新聞社)
53：天使の聖母トラピスチヌ修道院による。
54：『函館市誌』 (1935年、函館日々新聞社)p.924およびトラピスチヌ修道院による。
55：カトリックタイムス (1925年11月11日付)記事
56：カトリックタイムス (1925年８月１日付)記事



図5-3-10 トラピスチヌ修道院
(1960年撮影)

口型平面の本館の北西側に付属する建物は、被災を免れた司祭館 (1913年竣工)である。本館の南西側下手、南西棟と結ばれた(地下通路か)２階建ての建物は応接室棟で、ヒンデル設計で1930年に竣工した。

関連史料としては、A『契約書』、B『大正拾五年六月九日　トラピスト修道院工事契約書』、C『建築工事請負契約書』のほか、以下の６葉の断片的な図面が残るのみである(図面番号は便宜上つけたもの)。

T1 トラピスト修道院設計図 断面 縮尺四拾分ノ一 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家 ヒンデル」
T2 トラピスト修道院設計図 御堂内部壁龕之図 壱 縮尺二十分ノ壱
T3 トラピスト修道院設計図 断面図 縮尺二十分ノ壱
T4 トラピスト修道院詳細圖 縮尺二十分之一
T5 2. 湯ノ川トラピスト修道院増築工事設計図 壱百分之壱 姿図 昭和四年七月 ㊞「横濱市ヒンデル建築事務所設計／無断複製謄寫轉載発行其他公表厳禁」
T6 5 湯ノ川トラピスト修道院増築工事設計図 五拾分之壱及弐拾分之壱断面及詳細図 昭和四年七月

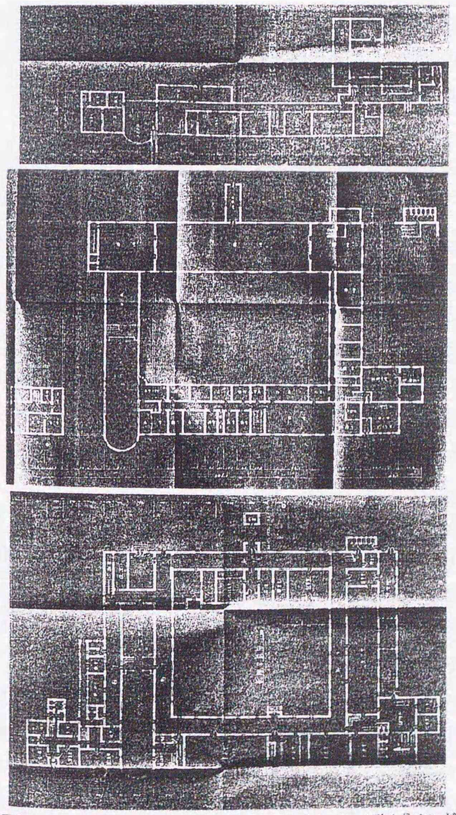


図5-3-11 トラピスチヌ修道院平面図 下から1、2、3階(『はこだての文化財』)

史料Ａは、修道院と「北海道札幌市北十一条東一丁目建築設計者マックス、ヒンデル」との「トラピストクロスター新築設計」契約であるが、契約内容については残念ながら入手できず、詳細は不詳である。

史料Ｂは、1927年建設時の請負工事契約書と考えられる。施工業者として、「函館市湯ノ川通十七、川原石太郎の名が確認できるが、契約書そのものの書式は、標準契約書の形式をなしており、第弐條。契約請負金額、第参條。工事竣工期限などは「別紙ニ記載ス」とあって具体的な記載はない。

契約書の内容としては、第壱條。契約の目的物件、第弐、参條は前述、第四條。契約保証金、第五條。請負契約金額の支拂、第６條。強制處置、第七條。契約解除などについて述べられているほか、第八條。請負人の契約の履行や契約によって生ずる債権を施主の許可無く第三者には譲渡できないこと、第九条。請負業者の代理人は工事現場に常駐し、工事監督員と打合せすること、工事監督員が素行技術の面で不適当と認めた職工、人夫は工事場より退去させることができること、第拾條。契約書や工事仕様書に「工事監督員」とあるのは、設計者及びその代理者として施主よりその権利を委託されたもの、第十一條。契約書には工事仕様書及び図面（枚数の記載なし）を付属することなどが記載され、契約の証として３通をそれぞれ甲施主、乙請負業者、工事設計者が所有することをうたっている。

史料Ｃは、1930年建設部分の契約書である。やはり表書きのみの提供で、内容については不明であるが、付せん紙に「注意　見積書提出期日

昭和四年七月二十五日午後二時三十分、見積書提出場所　亀田郡上湯川村天使園(トラピスト修道院)、改札立會ノ為當事務所主任楽間利一郎ヲ出張セシム　七月二十四日午後十時函館桟橋着（ー此ノ間ﾈﾄ宮沢旅館ニ於イテ不明ノ点アレバ御説明スベシ　七月二十五日正午出口湯川天使園行キ」という一文がある。さらに㊞「横濱市ヒンデル建築事務所／MAX HINDER／本牧町満坂一八五一／私書函横濱局九〇番／電話（2)-3400」という事務所印と札幌事務所時代からの主任所員であった楽間の印が押されている。

ヒンデルは、1927年10月には札幌から横浜に事務所を移しており、1927年竣工の正面南西棟と北西聖堂棟は札幌事務所で、北東棟と応接室棟を横浜事務所で設計したことになる。そのことは保存されている図面に残された事務所印からも判断できるが、上に挙げた図面のうち、1～4が札幌事務所で、5、6が横浜事務所で描かれたと考えられる。

図面T1(図5-3-12)は聖堂部分の断面図で、中央吹き抜けの聖堂部の左右に廊下を付属してバシリカ風の断面を示している。聖堂部のレンガ壁体をＲＣ造の柱が補助し、さらに壁体上部を梁とスラブが緊結し、その上に木造小屋組を架けている。左右廊下の差し替け屋根部もＲＣ造の表

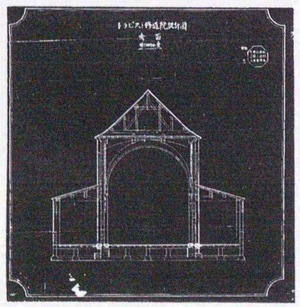


図5-3-12 トラピスチヌ修道院聖堂部断面(図面T1)（天使の聖母トラピスチヌ修道院蔵）

現がなされ、木造床面もＲＣ基礎で支持されている。図面T4は、その廊下部の詳細断面を示している。

図面T2(図5-3-13)は、聖堂内の１柱間の内壁展開詳細であるが、腰の飾りパネル、方円柱頭風の飾りを付けた木製角付け柱や組紐模様の山型帯装飾、上部半円高窓などに、ヒンデルのロマネスク好みが表われているように思える。

図面T3(図5-3-14)は断面図で、図面ではＲＣ造の外壁、２階床スラブおよび梁、基礎と木造の１階床まわり、小屋組を組み合わせた混構造としている。半円欄間付き上げ下げ窓の「南側窓詳細」の意匠などが正面棟に類似しており、１階の間仕切位置なども正面棟とほぼ合致するが、焼け残った煉瓦壁面を生かした外観とはなっていない点では、実現案と決定的に異なっている。

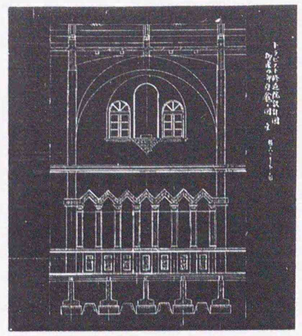


図5-3-13 トラピスチヌ修道院聖堂内部詳細図(図面T2)（天使の聖母トラピスチヌ修道院蔵）

図面T4とT5は、1916(大正５)年竣工の北東棟の側面図と断面、および２階の窓回り部分詳細図である。ＲＣ造煉瓦積み構造で、１階床とキングポストトラスの小屋組は木造である。半円欄間付き引違い窓の意匠が昭和２年完成部分とは異なり、またＲＣ造の柱型を強調する意匠もこの棟の特徴である。図面上では柱型に煉瓦タイルを施すことになっていたが、実施段階ではＲＣの柱型をそのまま露出させている。欄間部も図面でのはめ殺しが、回転窓に変更され、引違い窓も図面では上下二分しているものを、類似のサッシュ割りとした引違い建具をはめこんでいる。細部で改変は見られるが、大枠では、この図面通りに実現したものと考えられる。

一般の人が煉瓦造の塀越しに望める正面棟は、焼失前の姿をほぼ踏襲して復原したことになるが、煉瓦壁体の落ち着いた色調と、半円アーチの開口部や尖塔アーチの破風を付けた小屋根の妻、小壁龕の聖母や天使像などの清楚な白い色調の取合せが、厳しい雰囲気の中に柔らかな優しさを漂わせている。聖堂内陣部の上に立ち上がる白い木製の小さな八角尖塔は、当初の意匠にはなくヒンデルが付加した意匠と考えられる。

1930年竣工の応接室棟は、寄棟屋根２階建て、棟中央に集合煙突を立ち上げた小規模な建物である。ＲＣ造煉瓦積みと推測できるが、これといって特徴的な部分が目立つ建物ではないが、煉瓦の胴蛇腹で上下階分節したり、窓回りの楣と窓台で石の色をわずかに変えたり、１、２階壁面を赤黄色の煉瓦で仕上げるのに対し、基礎部は黒っぽい焼き過ぎ煉瓦とするなどの控えめな扱いがみられる。屋根の裾をフレアードルーフとする手法や玄関棟頂部の床下換気口の菱形模様のグリルなどは、ヒンデル好みの部分である。

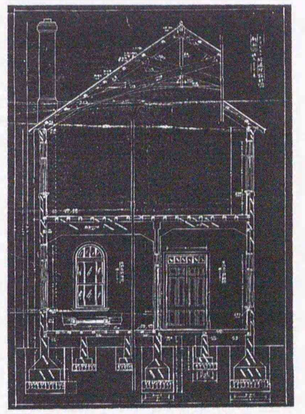


図5-3-14 トラピスチヌ修道院断面(図面T3)（天使の聖母トラピスチヌ修道院蔵）

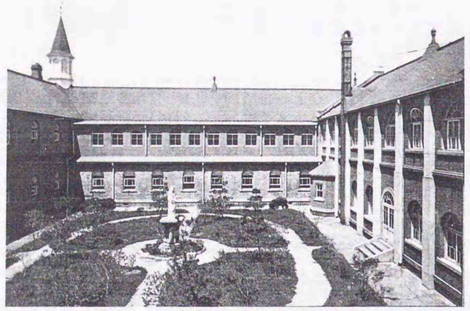


図5-3-15 トラピスチヌ修道院中庭(絵葉書『天使園』)
(左側正面棟、中央聖堂棟は1927年、右側棟は1930年増築)



図5-3-16 新潟カトリック教会聖堂
絵葉書(ハンス・ヒンデル蔵)



図5-3-17 ライネルス宛の葉書
(南山学園蔵)

5-3-3:新潟カトリック教会

新潟市東畑通1番地656に現存する同教会は、正面の双塔が特徴的な木造平家一部２階建て、間口７間、奥行13間(玄関部３尺、アプス9.5尺分を除く)の建物である。

竣工時の記念絵葉書(図5-3-16)が残されているが、全景写真下に「新潟カトリック教會　聖堂全景／マックス ヒンデル 建築設計（横濱．札幌)／ MAX HINDER ARCHITEKT YOKOHAMA－SAPPORO」という説明がある。同教会は、1927(昭和２)年９月５日竣工、同18日に献堂式を挙げるが、同年10月にはヒンデルは横浜に事務所を開設することになる。とはいえ、札幌とまったく関係がなくなったわけではなく、同年10月には札幌藤女学校寄宿舎が、翌1928年12月には秩父宮殿下ヒュッテ、1929年12月には北星女学校校舎工事終了などと、札幌での仕事は続くことになる。こうした状況から、札幌と横浜の両市に事務所があるかのような表現をとったものであろうし、絵葉書を設計事務所の広報手段の一つとして利用したものであろう。

同じ絵葉書を使用した「昭和３年12月24日」消印のライネルス宛の葉書が南山学園に保存されている。葉書の表書きには「名古屋市東区主税町三丁目天主公教会　ライメルス様〻〻」「Fröliche Weinachten und ein gesegnetes Neues Jahr wünschen Ihnen. Max u. Anny Hinder」(クリスマスおめでとうございます、そして祝福された新年となりますように。マックスおよびアニー　ヒンデル）とあり、ヒンデル夫妻からの横浜からの便りとなっている。

ライネルス(1874－1945)は、名古屋南山中学校を設立(1932年)した神父として知られ、1909(明治42)年に来日し、1912(大正元)年11月新潟教区長に就任、1922年から臨時名古屋教区長兼任して、1926年６月新潟教区長を退任し名古屋教区長に就任した人物である。新潟教会の建設を通じ、ヒンデルとの交流が深まり、以後1928～29年にかけての名古屋教区内での多くの教会設計の依頼や南山中学校の設計依頼へとつながっていったものと思われる。

教会の沿革と新聖堂

新潟地方にキリスト教宣教師が最初に来港したのは、1869(明治２)年のことであるが、翌1870年にはプチジャン司教[57]は、函館在住のアンブルステ神父に新潟の状況視察を命じている。４年には新潟教会の最初の主任司祭としてエヴェラル神父が赴任し、片原の八間小路にあった渡辺喜兵衛宅２階に最初の布教所を開設した[58]。その後市内の土地を転居しながら、現在地に移転したのは1921(大正10)年である。「新潟名所十二景」の「異人池」[59]に沿った敷地で、教会堂も移築され、一部は司祭館として現存している。

1926年12月３日、「柾谷小路の突き出し高等学校下の池畔」[60]の新聖堂建設用地が祝別され着工、竣工は1927年９月５日、９月18日に献堂式を挙げた。教会所蔵のスクラップブックには、当時の新聞記事の切り抜きが整理されており、新潟新聞、新潟民報、新潟時事新聞、新潟毎日新聞、東京日日新聞などに報じられた竣工ま近い会堂の紹介や献堂式の様子などを知ることができる。各紙ともほとんど内容は同じで、カトリックタイムス紙[61]でも1927年９月11日記事は、新潟新聞の同年８月26日記事と同一内容、同年10月11日、21日記事は献堂式の様子を２回にわけて連載している。

新潟新聞(1927.8.26)によれば、建築概要として、「間口七間奥行十四間[62]建坪九十八坪の木造平屋建で地盤線より屋上迄三十三尺前面の鐘楼は五層よりなり上端まで七十五尺、建築様式はローマン、ルネサンスの折衷式外部は堅牢耐火の金網ロックスタック塗り」「内部は正面に大祭壇、左右に副祭壇を設け中央には祭壇へ向ふ通路、その両側は約五百人を楽に収容し得る座席、後の階上は聖歌隊の席になってゐる、天井丸窓の色ガラスを透して入る光線は祭壇の上に美しい影を作り高い白天井、クリーム色の壁などよく調和して落着いた気分を出してゐる」と報じている。この内容は同じ日付け新潟時々新聞、さらに８月28日付け新潟毎日新聞、新潟民報、新潟毎日新聞、東京日日新聞とも同一である。

教会堂建設と同時に、伝導館兼愛児幼稚園舎が新築された。聖堂の西側に現存する教区長館は、旧陸軍の将校クラブの払い下げを受けて、1928年以降移築したものという[63]。その奥の「聖ヴィアンネー小神学校」(通称ヴィアンネ館)、「ベビーホーム天使園」「シスターの修道院」は、1933年(昭和８)頃建てられたもの[63]で、ヒンデルの関与についてはどこにもふれられていない。教会に残された資料でも確認出来なかったが、ヴィアンネ館は屋根中央に塔屋を立て、半円の屋根窓をみせ、屋根の裾をわずかに緩勾配とするヒンデル風の意匠がみられるし、隣の天使園（現保育園）の屋根裾の扱いも同様で、ヒンデル風といえるものである。推

57：1829年フランス生まれ。1859年パリ外国宣教会に入会、翌60年日本布教のため派遣された。琉球、横浜を経た後、1863年長崎へ行く。大浦天主堂建築を手伝いながら、長崎奉行の依頼で語学所のフランス語教授にもたずさわった。1865年２月19日の献堂式に続いて、3月17日いわゆる「信者発見」に遭遇した。1866年日本代牧に任命され、翌67年ローマで教皇ピオ９世に日本の状況を報告、1869年、1876年にもローマを訪れた。1884年長崎で死去。(H.チースリク訳『宣教師の見た明治の頃』(1968.11.3、キリシタン文化研究会)p.58による。)

58：小野忠亮『北日本カトリック教会史』(1970.3.18、中央出版社)p.224

59：新潟毎日新聞(1927.9.3)

60：新潟新聞(1927.9.19)

61：1923年1月1日発行『公教青年時報』(月2回)を前身とする新聞で、同年5月1日『カトリックタイムス』（月3回)が創刊した(第9号)。1931年7月5日(第299号）から『日本カトリック新聞』と改題した。現カトリック新聞社に保存されている。

62：玄関部3尺とアプス部9.5尺の突出部分を足した概数で、いずれの新聞も奥行14間としている。

63：佐藤敬一新潟司教からの書簡(1994.6.30)による。



図5-3-18 新潟カトリック教会遠景(カトリック新潟教会蔵)
(左からヴィアンネ館、教区長館、聖堂)

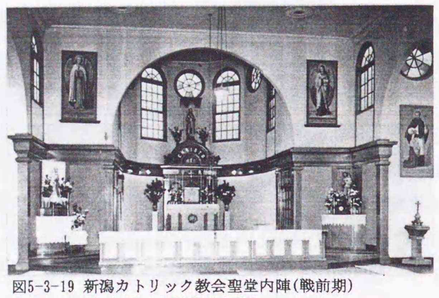


図5-3-19 新潟カトリック教会聖堂内陣(戦前期)
(カトリック新潟教会蔵)

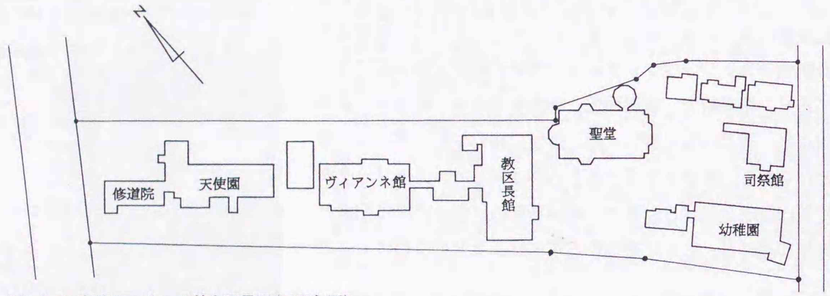


図5-3-20 新潟カトリック教会配置図(1980年頃)

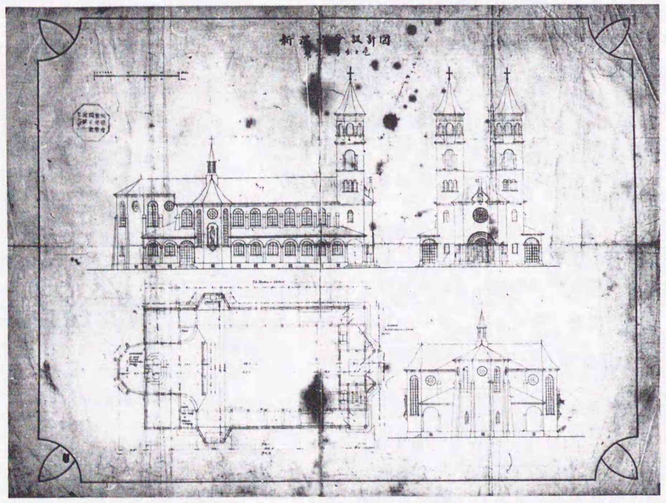


図5-3-21 新潟カトリック教会設計図(図面1)(カトリック新潟教会蔵)

測の域をでないが、ヒンデルの関与があったとも考えられる建築群である。

伝導館兼愛児幼稚園舎は、教会堂の前にある建物で、「間口十二間奥行五間の総ガラス張り」、また敷地の表入口に築かれた６寸角の御影石の門と塀は、「明治十五年第四銀行時代からの由緒ある」(引用はいずれも新潟新聞(1927.8.26))ものが、第四銀行から寄贈された。

９月18日の献堂式は、新潟新聞(1927.9.19)には「荘厳に行はれたカトリック教会献堂式／多数名士を迎へて異人池々畔に挙行」とある。東京駐在ローマ法王使節ジャルディニー大司教を迎え、午前９時から挙行され、来賓として藤沼県知事、金澤内務部長、澤田医大学長をはじめ、各学校長、市会議員、実業家など多数の名士が参列した。

献堂式は、11時半に終了し、引き続き新築の伝道館で祝賀会が催され午後１時散会。午後３時からは聖堂内で御聖体降福式があり、午後７時からは伝道館で、講演会や聖劇会が催された。

教会には「聖堂祝別証明書」が保存されていて、ラテン語で「主であるイエス・キリストを名称として、聖マリアを保護者として1927年祝別した」とあり[64]、新潟教区長アントニオ・チェスカと名古屋教区長ヨゼフ・ライネルズが参列したことが記されている。

教会堂の竣工にあたり、新潟県庁に名称変更届を提出(県庁昭和2.10.4受付新潟市役所経由)している。それに(新潟県指令社兵第8-89号)よると、「新潟カトリック教会」名称変更の件許可す、新潟県知事　藤沼庄平」とある。欄外に鉛筆で「明治９年」認可とあり、「天主堂」の名称は、1876年の認可と思われる[65]。

その後、1928年２月19日鐘塔の鐘が祝別された。この鐘はドイツの熱心な信者達から寄贈されたもので、「目方八十貫独逸フウムベルト、ブリロン会社」[66]で鋳造された。1929年5月ドイツ製パイプオルガン設置、1933年7月には長谷川工務店(新潟市東大畑1番地)の施工で会堂の外壁塗替工事をしている。

外壁塗替工事を担当した長谷川工務店長谷川龍雄の履歴書が教会に残されており、それによれば1929年５月工務店開設、土木建築工事一般施行並設計監督に従事した。工務店開設以来の主な工事は、 表5-3-1にまとめた。

表5-3-1　長谷川工務店主要工事等一覧

工　事　名	構　造	着工及び竣工	工事費
新津町桂邸新築工事設計並びに施工	木造	1929.7～29.10	12,000円
新潟市小黒館新築工事設計並びに施工	一部木造 一部ＲＣ造	1930.3～30.7	73,000円
新潟市村田医院新築工事設計並びに施工	木造	1930.3～30.7	14,500円
五泉町佐藤医院新築工事設計並びに施工	木造	1931.3～31.9	7,300円
新潟市中野邸設計並びに施工	木造	1931.7～1932.3	14,000円
新潟市安達病院新築工事施工	木造	1933.6～1934.3	43,000円
白根町白根役場改築工事設計並びに入札請負	ＲＣ造一部木造	1933.6～1934.3	43,500円
新潟大学附属医院洗濯場その他工事入札請負	ＲＣ造	1933.9～33.12	14,700円

63：畔柳武司、角幸博『新潟カトリック教会堂について』(日本建築学会東海支部研究報告、1982.2)

64：前掲『新潟カトリック教会堂について』による。

65：新潟新聞(1928.2.20)

1964(昭和39)年６月16日の新潟大地震で被害を受け、その直後より補修を始め、翌1965年６月聖堂中央入口の屋根に聖心像を設置した。さらに、1981年ローマ教皇の来日を記念して、聖堂北側に小聖堂が増築されている。

史料と建築概要

教会には、ヒンデルの設計図と考えられる以下の図面がＡ１版４枚の青焼で保存されている(図面番号は筆者が便宜上つけた)。

N1 新潟教會設計図 縮尺百分之壱 ㊞「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」
N2 新潟教會設計圖 縮尺百分之壱 弐階平面圖 各軸割 小屋伏圖 弐階床伏
N3 新潟教會設計図 詳細図 縮尺弐拾分之壱 地形平面 床平面 縮尺百分之壱
N4 新潟教會堂設計図 ①塔及階段詳細断面図 縮尺五拾分之壱

図面N1は、ヒンデルの事務所印があるもので、正面図、背面図、側面図と１階平面図を含んでいる。平面寸法は尺貫単位で記入されており、部分的にドイツ語の説明が付加されている。

図面N2は、下段に２階平面と小屋伏を配置し、上段に軸組と２階床伏を書き込んでいる。

図面N3は、下段に基礎伏図と１階床伏図を並べ、上段に正面入口の立断面詳細と脇入口(非常口)の立断面詳細が描かれている。

図面N4(図5-3-22)は、Ａ１版を縦位置で使用し、主棟断面のほか塔屋部の縦断面、小屋組、各階床伏などを描いたものである。

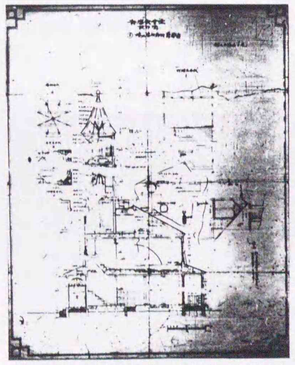


図5-3-22 新潟カトリック教会堂設計図
①塔及階段詳細図(図面N4)
(カトリック新潟教会蔵)

細かな点を除けば、現存する会堂は、竣工時の姿をよく維持しており、設計図とも合致している。正面に立ち上げた双塔が特徴的な聖堂で、ヒンデルが得意とするロマネスク様式を基調としており、それらは主棟中央のポルタイユ(主入口)まわりの扱いやバラ窓などの表現に端的に表われている。ラテン十字形平面で、身廊と側廊の幅比が５：１のバシリカ形式をとり、幅の狭い側廊部の側面は、交差廊の張出し部までトスカナ式角柱を付けた半円アーチを７連みせ、内陣部では脇入口と２つの窓を結ぶ３連アーチとしている。

身廊部高窓は、側廊部の開口とも呼応し、半円欄間付きの引違い窓で、窓間には斜め控え柱をみせている。同様の控え柱は、アプス張出し部でもみられる。袖廊および内陣、アプス部の高窓で特徴的なのは、半円縦長窓と交互に配置された丸窓であろう。ヒンデル好みの窓意匠といえるもので、札幌藤高等女学校(1924年)の小屋裏採光小窓を手始めに、名古屋の熱田天主公教会(1928年)、御器所天主公教会(1931年)、金沢聖霊修道院三位一体聖堂(1931年)などでも見られた。

交差廊中央の棟の小尖塔も、教会建築の定型という以上にヒンデル好みの意匠といえる。ヒンデルの関与を推測した聖堂後方のヴィアンネ館にも見られるが、札幌藤高等女学校での使用や上智大学案(1927年)や北星女子校案(1928年)などでもみられる。こうした塔への執着が、新潟教会や宇都宮教会(1931年)の双塔デザインに結実したことはすでに触れた通りである。

図面N4によれば、正面双塔の高さは地上から66.5尺、十字架頂部までは72尺(21.8m)と、新聞報道の75尺とはやや異なっている。９尺角の正方形平面で、向かって左側塔屋部には、「打鐘室」、「時鐘室」、「展望室」をおさめていた。

外壁は、木構造の上に「堅牢耐火の金網ロックスタック塗り」仕上げとした。主棟の高さは地上33尺(10m)、コンクリート製布基礎は２尺と、図面から読み取ることができる。

内部は、広い身廊部の左右に幅６尺の側廊をもち、天井は平天井、身廊部の天井高は21尺、正面アプス前の幅18尺と左右の袖廊部幅12尺に半円アーチの垂れ壁をみせている。正面の大アーチの高さは、18.7尺である。身廊部には現在長椅子が備えられているが、竣工当初は板床の上に薄縁を敷いて、床座式の礼拝を行った。身廊部やアプスの高窓や丸窓の色ガラスを透して入る光線が、明るい堂内を演出し、現在は天井、壁とも白漆喰であるが、当初は「白天井、クリーム色の壁」[67]であったという。

工事請負は、コンクリート工業株式会社（新潟市東仲通り二番地　代表者　和田岩一）が担当した。教会には、『天主公教新潟教會堂新築工費明細書』、『新潟天主公教會堂新築工事請負契約書』、『新潟教會堂新築工事工費内譯書』、『天主堂床板張工事変更費用調書書』、『両袖祭壇見積書』、『本祭壇見積書』、『請求書』、『天主堂工事費清算書』などの書類が残されている。

それらによれば、教会堂新築工事の請負契約は、1927年４月13日に交わされている。請負契約金28,700円、工事竣工期限は「昭和2年７月31日まで」とある。『天主堂工事費清算書』によると、本堂のほか、幼稚園、保母宿舎、雑工事を含め、総額37,658円91銭が、コンクリート工業株式会社に支払われている。1928年４月発行の『請求書』によれば、１回目3,104円43銭、２回目33,209円25銭、３回目1,345円23銭とあった。上述の『天主堂工事費清算書』には工事別に工事費が記載されているので下にあげておく。

工事名	事項	金額(円)
本堂	請負金	28,700.00
幼稚園	同上	7,220.00
本堂模様替	増工事	665.16
保母宿舎	実費	478.00
表石塀工事	同	431.44
鉄條柵及排水	同	35.76
構内整理費	同	210.84
雑役人夫及雑品	同	146.67
釣鐘工事費	同	65.18
本館工事の内変更減額分		294.14
差引合計金		37,658.91



図5-3-23 新潟カトリック教会正面
(1982年撮影)

67：新潟新聞(1927.8.26)

5-4　スキーヒュッテ

北海道に近代スキーが伝わるのは、1908(明治41)年。７月に命を受けたスイス人ハンス・コラー Hans Koller(1881～1925)は、札幌農科大学ドイツ語教師として９月赴任、会話教本として２冊のスキー書[68]紹介した。翌年12月、本国に注文した１台のストックなしのノルウェースキーを予科生に試させたのが本道での初滑り[69]で、このスキーを見本に、予科生達は馬橇屋で試作し、学内の斜面で練習を始めることになった[70]。コラーは、ヒンデルの妹婿で、1925年夫人と子供３人を残して他界する[71]が、ヒンデルの来道(1924年)は夫妻のすすめによるものであることは、第４章でも述べた。

スキー登山を目的の山小屋は、Berg Hütte に対しSki Hütteと呼ばれる。本道の山小屋は、ほとんどがSki Hütte であるが、大正期までは本格的なものはなかった。営林局の山野林巡視小屋、造林造材小屋が登山者のためにわずかに需要を満たしていた状態であり、パラダイスヒュッテは、本道初の山小屋であった。

森本光彦『Berg Hütte と Ski Hütte に就いて』[72](1951年)によれば、ベルクヒュッテの古いものでは、八海山小屋（御岳山黒澤）や弘法小屋(富山県立山)などのように1913(大正２)年までさかのぼることができるという。また、スキー登山の拓けた立山の「五色小屋」は1923年頃、北アルプスの「猿倉小屋」も1919年の建設であるが、いずれも夏山客を対象としていたものを、スキー登山客が入り込むようになったため、途中から冬山客も対象とする小屋としたものであった。在来のベルクヒュッテをスキーシーズン中に利用する程度であったため、乾燥設備や積雪に対する考慮もほとんどなされていない不完全なものであった。

スキーヒュッテとして専用小屋を新設する機運は1929～30年以降であり、1930年に山スキーの大家ハンネス・シュナイダーが来朝したことが一層拍車をかけることになるが、パラダイスは、こうした機運の盛り上がる以前のものであり、Ski Hütte としては、わが国最初のものとされている。

パラダイス建設から始まったヒンデルの一連のヒュッテ作品は、いずれも札幌に現存しており、その後のSki Hütte 建設に大きな影響を与えた[73]が、ヒンデルの作品の中では、いずれも小規模なものである。スイスでHütte Leben の経験を持つ者であれば、容易にまとめることができたであろうし、デザインを展開するほどのものではなかったかもしれないが、のびやかに、楽しげに腕をふるっている。

本節では、札幌から横浜に活動の拠点を移した転換期を飾る代表的な作品群としても位置づけられるパラダイス(1926年)、ヘルヴェチア（1927年)、空沼小屋(1928年)の３ヒュッテについて概観する。

68：Henry Hoek “Der Ski”(1911)
M.Zdarsky “Alpen(Lilienfelder) Ski-fahrtechnik”(1911)

69：瓜生卓造『スキー風土記』、熊谷隆「北大とスキー―その実践の奇跡―」(『えるむ』第20号、1977.2.25)

70：『北大百年史 部局史』(1980)

71：『さっぽろ文庫61 農学校物語』(北海道新聞社、1992.6.24)p.106

72：北海道大学工学部建築工学科1951年度卒業論文。

73：中山ヒュッテ(1928)、朝里ヒュッテ(1929)、奥手稲山の家(1930)、無意根山小屋(1931)、余市ヒュッテ（1941)など、毎年建設されていった。

5-4-1:テイネパラダイスヒュッテ

建物は、札幌市手稲山、滝の沢上流、旧北海道造林会社所有地（現王子緑化所有地）内借地に位置していた。北海道帝国大学文武会スキー部15周年記念事業として、1926(大正15)年７月10日[74]起工、同年11月２日、2,946円94銭[75]で竣工した。

1925年５月のスキー部幹事会でスキーヒュッテの建設が決まり、６月14日大野精七部長宅で設計および費用に関する懇談、建設地は予科教師グブラーArnold Gubler(在任1925～'32)が教示、ヒンデルも無償で設計協力、建具を寄付している。テイネパラダイスヒュッテの命名は、スキー部長大野精七博士による。1928年２月には秩父宮、翌年１月には高松宮が一泊されたこともあった。

周辺環境との調和、プロポーションの良さ、1階「広間」(Aufenthaltsraum)や2階通路の腰掛や板張り寝台などののびやかで楽しげな扱いなど、素朴な中にもスイス人建築家のいかにも手なれた作風を読み取ることができる作品である。 またヒンデル直筆の原設計図[76](図5-4-4)が、札幌市冬のスポーツ博物館に残されている点でも貴重な例の一つといえる。

丸太材のトドマツ 191本(末口径８寸～４寸、66石)は、北海道造林会社所有地から伐採し、1926年２月立木調査、造材は軽川の山下勤之助が１本80銭で請け負っている。途中４寸丸太 180本が不足し、落葉松丸太(末口４寸～５寸)を追加したという。ヒンデルとの言葉の行き違いからの誤算であったという[77]。板材、角材等は、大島製材所から購入、大工はヒンデル紹介の藤川万吉が 600円で契約したが、途中で絶縁し、留目熊吉が引き継いでいる[77]。

５間×３間の校倉造２階建。１階は、玄関・薪置場(旧救護室)を除き一室空間であるが、創建時には北西側に広間（Aufenthaltsraum）、南東側に玄関、階段ホール、台所、救護室を一列に並べていた[77]。

広間は、壁際に造付け腰掛(Wandbank) を廻し、東西に食卓を置く。広間、台所間には、ストーブと煙突（土管を積上げ、周囲を亜鉛鉄板張りの板で囲む)[78] を置く。玄関はスキー置場を兼ねた。救護室は、外部の戸に鍵をかけず、担架などを備え、薪置場も兼ねた。

２階は約30名収容の寝室である。中央通路の南北は、板張り寝台で、当初通路側に８度ほど傾斜させていたが、後に水平床に変更されている。通路側にはリュック置場を兼ねた腰掛を備えている。

5寸勾配の屋根は、当初2尺×3寸の6分板葺きとし、上に丸太を並べて石置きの予定であったが、工事費の不足から柾葺きに変更された[77]。

1931(昭和６)年秋に煙突の不備から屋根を半焼した以外は、大きな改修はなく、1928年秩父宮殿下来訪に備え室内に便所を設置、1931年床板、



図5-4-1　建設中のパラダイスヒュッテ(酒井隆太郎蔵『酒井隆吉アルバム』)

74：佐々木政吉「新設記念ヒュッテに就て」(『北海道帝国大学文武会スキー部創立拾五周年記念』 (1926.12.10)による。「舊い Hütten-Buch から」(『山と雪』3号、1931)p.121および、向井四郎「テイネパラダイスヒュッテのことども」 (北大スキー部々報1933)p.168では起工７月11日とある。

75：「舊い Hütten-Buch から」(『山と雪』3号、1931) p.121および、向井四郎「テイネパラダイスヒュッテのことども」(北大スキー部々報 1933) p.168による。『大野精七の歩み』(1981)p.122では、2,960円94銭とある。

76：ヒンデル作“Grundrisse der Ski-Hütte am Tene Berg”

77：佐々木政吉「新設記念ヒュッテに就て」(『北海道帝国大学文武会スキー部創立拾五周年記念』 (1926)

78：1931年煙突の不備から屋根を半焼している。



図5-4-2　1951年ころのパラダイスヒュッテ(『Berg Hütte と Ski Hütte に就いて』)

ストーブ、窓などの修理、1934年土台、屋根の改修、1946年土台上げ、1950、51、53年に屋根などを含めた修理、1955年に土台、柱、便所、ベッドの修理、1969年ストーブ、煙突とりかえ、1970年屋根修理、北西側土台補強、西側支え、便所新設が行われるなど、部分的に手を加えながら使用されたが、1978年７月に閉鎖された。

1994年４月には倒壊し解体されたが、同年2月に発足した手稲パラダイスヒュッテ再建期成会(会長有江幹男北海道工業大学長)により、旧ヒュッテの約400ｍ西の敷地に外観復原がおこなわれ、ヒンデルの原設計図をもとに山本幹雄理事が設計、本間組建工施工により同年12月新「手稲パラダイスヒュッテ」が竣工している。

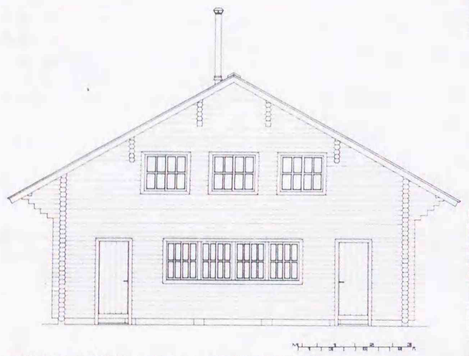


図5-4-3　パラダイスヒュッテ正面図(1/150)

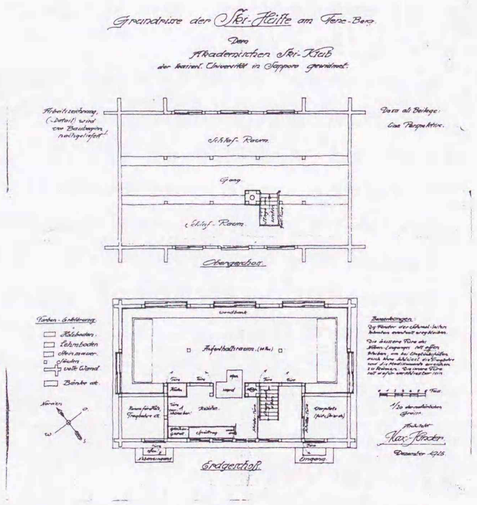


図5-4-4　パラダイスヒュッテ設計図(札幌市冬のスキー博物館蔵)

5-4-2:ヘルヴェチアヒュッテ

道々小樽定山渓線沿い、股下山下小樽内川の上流の白樺林にある。3間×２間４尺、平家建約８坪、12人程度収容の小品で、ヒンデルとグブラーの共同出資および山崎春雄[79]名義の個人ヒュッテであった。「ヘルヴェチア」Helvetia は、スイスを象徴する女神であり、スイスの古名である。

1927年２月頃から構想が練られ、帝室林野局支局との交渉などの実務面は山崎がおこなった。帝室林野局からの敷地の貸し下げや用材の払い下げは、山崎春雄名義で許可され、５月29日敷地選定、７月８、９日に用材調査を実施した。用材は、設計によると６～７寸の丸太延長 3,200尺、立木数 100本以上、その他柾材で、うち長材は、土台、窓下、棟木、母屋などに用い、短材は２～３本継ぎとし、上下を木栓で固定された。

79：北海道帝国大学医学部教授。1886(明治19)年群馬県前橋市曲輪町生まれ。1911(同44)年東京帝国大学医科大学卒業、1913(大正２)年から1918年まで熊本医学専門学校教授。米仏スイス留学後、1921年北海道大学医学部に解剖学講座開設。第3代(1929～1931)、8代(1937～1939)医学部長歴任。1949年定年。

1927年５月20日着工、同年９月13日竣工、請負は、漁いざり(現恵庭市漁村)の水本小判治。千歳川上流から江別付近で丸木舟造りの名人として知られた。途中、銭函の大工田頭でんどうも雇用された。

工事中ヒンデルも共に山で暮らし、大工に指示し、時にモデルで説明したという[80]。ヒュッテのカッセー(金庫)の細工や棟木の彫刻はヒンデル自らが腕をふるった。

スキー・靴置場を兼ねた玄関(１坪)と引違い板戸で隔てられた室内には、ストーブを囲み、４隅に上下２段の寝台がある。左右寝台間には、一部（50cm）折畳み自在の食卓と腰掛を造付てある。丸太から削出した流しの左側は、床下への開口である。床は、地上から約４尺上げ、床下を薪置場とする。コンクリート製束基礎は、当初トドマツやタモであった。柾材として径１尺５寸のトドマツ２本、建築用丸太材は、６～８寸のシラカバ141本が用意されたという[80]。校木の隙間にはコケを充填したというが、現在は、丸太表面にアスファルト紙下地のこけら張である。床の一部にはヤナギ、机にタモ、流し、木舞板、扉、雨戸等は、トドマツである。

５寸勾配の屋根は、２重葺きとし、下層を３尺長柾、表層を短柾で葺いたという[80]。トドマツ製の雨戸・入口扉は白く着色され、赤い放射状パターンのデザインは斬新である。扉は多雪時に備え、上下２分されている。棟木の木口には、前述のヒンデル作の魔除けの人面彫刻が彫られ、下面には竣工年「1927」と刻まれている。

ヒンデルはこの年10月には横浜へ転居するので、在札中最後の作品であり、「王宮を建てたよりも…深い喜悦であった」[80]と述べるほど、力を注いだ作品であった。

1934年北海道大学に寄贈され、以来北大学生部の委託により、同大山岳部が維持管理している。

1985年８月、改修工事が施され、外観では、屋根はアスファルトシングル葺き、水切り銅板葺きに、外壁は、グラスウールによる断熱改修の上、耐水ベニア張り、とど松手割柾で張り替え、ポーチ部の増設、丸太

80：山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設」(『山とスキー』第78号、第79号、1927)

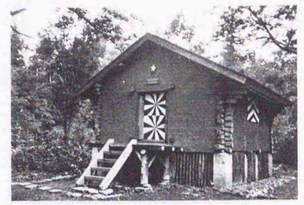


図5-4-5　改修後のヘルヴェチアヒュッテ(1986年撮影)



図5-4-6　建設中のヘルヴェチアヒュッテ(『山とスキー』、1927)

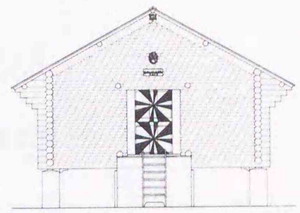


図5-4-8　ヘルヴェチアヒュッテ東立面図

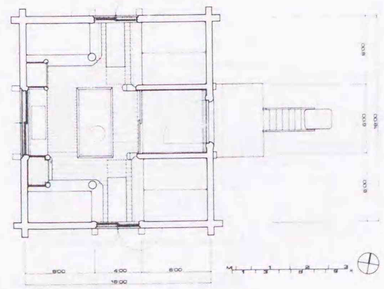


図5-4-7　ヘルヴェチアヒュッテ平面図

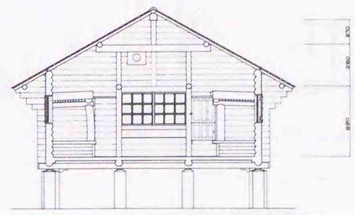


図5-4-9　ヘルヴェチアヒュッテ断面図

材の防腐剤処理などがおこなわれた。斬新なパターンデザインの入口扉、窓板戸は復原新設、ステンレス製煙突も新設である。内部では、床は断熱処理のうえナラフローリングに全面張替え、流しの復原造りかえ、収納庫新設、テーブル作り替えなどがおこなわれたが、当初のイメージをほぼ忠実に伝えている。同年10月６日、改修完成披露式が行われた[81]。

81：北海道大学山岳部部報13号(1990)

5-4-3:秩父宮殿下ヒュッテ（空沼小屋）

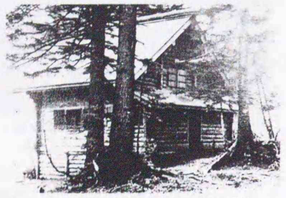


図5-4-10 秩父宮殿下ヒュッテ(『Berg Hütte と Ski Hütteに就いて』)

札幌市空沼岳、万計沼北側湖畔に所在する。1928年２月秩父宮殿下からヒュッテ建設の希望があり、７月末プラン作成終了、８月初旬大野精七博士が上京して宮家へ報告、８月25日宮家から工事一切を北大にて司るよう下命を受けた。９月10日ヒンデル来札し建設地検分、同28日着工、10月17日地鎮祭、11月16日上棟式を経て、12月10日竣工。施工は、伊藤組が請け負った[82]。地鎮祭には、北大総長代理根本事務官、大野精七、山崎春雄、萩原惇正営繕課長、帝室林野局沖野技師、工事請負伊藤豊次らが参集した。

4間×3.5間の主屋に奥行４尺の下屋を付属した校倉造２階建で、壁は角材、軒下３段までの校木小口に鼻隠板が、装飾的に付加する。ガラスを中央に入れた桟戸風雨戸の丁番金物も、装飾的に扱われている。１階は、下屋東側を薪置場、西側を玄関とし、扉を隔てて台所、東側は小屋守室である。当初、玄関部を物置、小屋守室側を前室としていた[83]。広間は、ストーブを囲み、東西に寝台と造付けの腰掛･食卓が並び、南西正面にはコの字型に腰掛が造付けてある。

２階は、中央の吹き抜け（6.5尺×13尺)と通路をはさみ、通路側に約3.5度の勾配をもつパラダイス式の寝台であった。

1929年１月高松宮が宿泊された際、「空沼小屋」と命名され、翌年２月11日から一般開放され、1947年北大に寄贈された。

82：小川玄一「秩父宮殿下ヒュッテの竣工に當って」(『山とスキー』第89号、1929.1.1)

83：森本光彦『Berg Hütte と Ski Hütte に就いて』(1951)

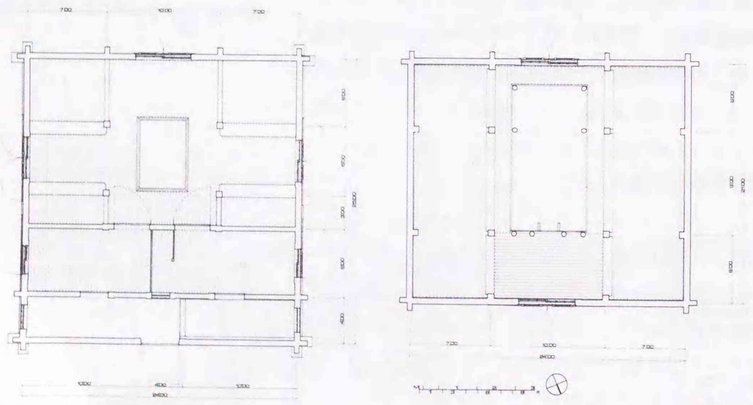


図5-4-12 秩父宮殿下ヒュッテ平面図

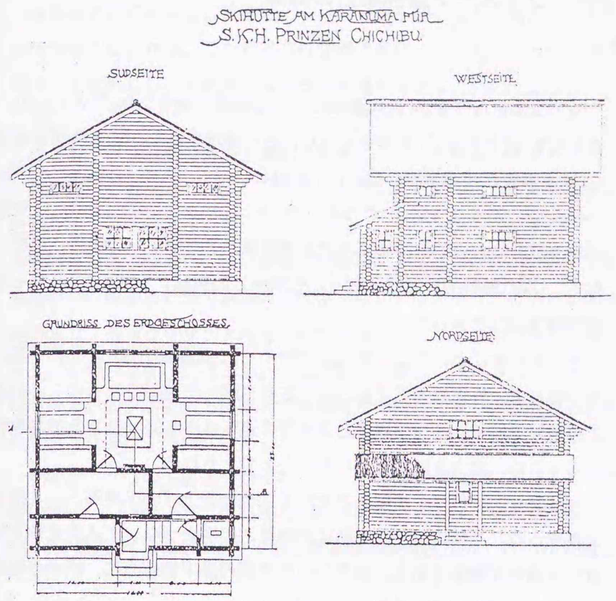


図5-4-11 秩父宮殿下ヒュッテ設計図(『山とスキー』第89号、1929)

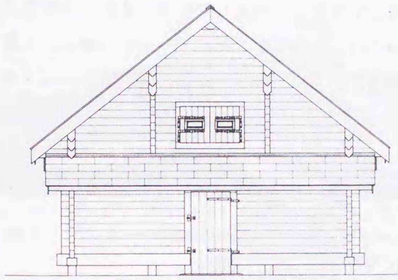


図5-4-13 秩父宮殿下ヒュッテ北立面図

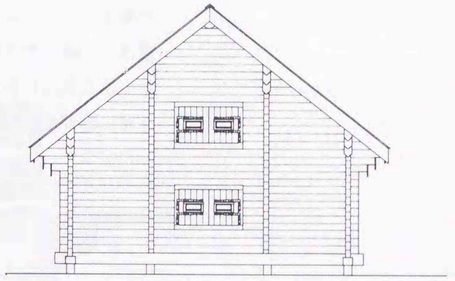


図5-4-14 秩父宮殿下ヒュッテ南立面図

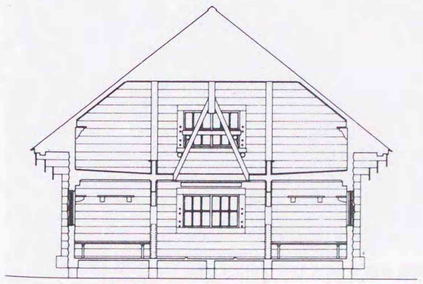


図5-4-15 秩父宮殿下ヒュッテ断面図

5-5　ジュネーブ国際聯盟会館案

ル・コルビュジエが「近代建築の一つの規範を確立した」[84]といわれ、また最も「近代的な」[85]内容をもちながらも採用されなかった事情を有する「国際聯盟会館建築設計競技」Architectural Competition for the erection of a League of Nations Building at Genevaは、「官庁建物の設計において、始めて現代の建築家がアカデミーの慣例に挑戦した」[86]「現代建築史におけるもっとも輝かしい挿話」[86]のひとつとなった国際競技設計であった。

ヒンデル案については、透視図(図5-5-2)と配置図(図5-5-3)の写真が残るのみで、詳細は不明であるが、古典主義的な建築であったことはみての通りである。６つの翼廊と２ヵ所の連絡通路を張り出した円形建物のパースは、総会会議場を描いたものと考えられる。

会議場は、半円アーチ窓をみせたルスチカ仕上げの下層部と上４層とで構成され、主棟の中央頂部には16体ほどの手をつないだ人型彫像を掲げた古典的な建物である。おそらく中央部円形平面部分に、総会会議場を配置しているのであろう。

主棟から張出した８つの翼廊部分では円柱柱型を４層部分まで通し、柱間をスパンドレルと窓とで構成し、張出し部にはさまれた主棟部の外壁は、２層目を成の低い角柱とエンタブラチュアーで引き締め、３層目から上を張出し部と同様の意匠としている。彫りの深い軒コーニスが、５層目頭部全体にまわっている。

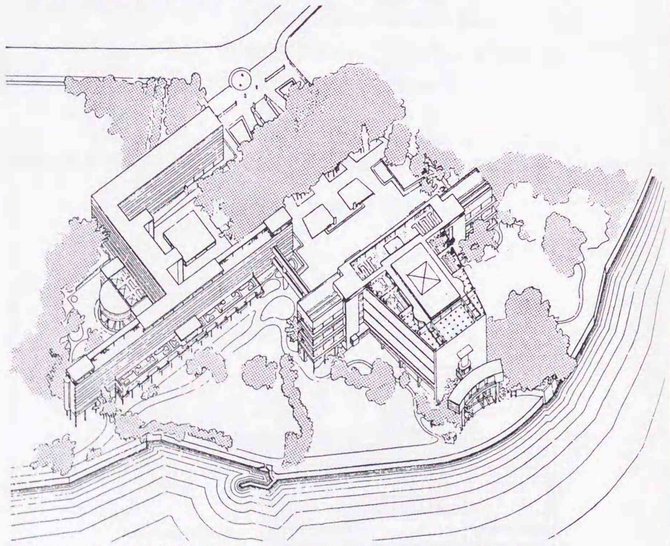


図5-5-1　ジュネーブ国際聯盟会館ル・コルビュジエ案(Charles Jencks "Le Corbusier and the Tragic View of Architecture" 1973)

84：『新訂 建築学体系6 近代建築史』(彰国社、1968.7.1 第2刷)p.188

85：ペーター・ブレイク/田中正男、奥平耕造訳『現代建築の巨匠—20世紀の空間を創造した人びと—』(彰国社、1963.8.10)p.84

86：S.ギーディオン/太田實訳『空間・時間・建築2』(丸善㈱、1955.5.25)p.555

会議場北側に接続する建物は、３つの中庭を囲い込んだ対称形平面の事務局棟と思われる。これだけでは評価できないが、おそらく古典的デザインを基調とした外観意匠であったと考えられる。

ここで、競技設計の過程と綱領、結果について、概説しておきたい。

競技設計の募集は、1926(大正15)年７月25日に開始され、締切期限は、翌1927年１月25日とされた。

建築雑誌第 488号(1926年)掲載の1926年４月７日付け「ジュネーブ國際聯盟会館建築設計競技綱領竝に規定」(訳文) によれば、敷地は総面積66,406㎡、西はローザンヌ街道に面し、東はジュネーブ湖に接し、南はモン・ルポー公園、北はバルトン氏の地所に隣接している。バルトン氏地所は、建設予定敷地と国際労働事務局との間に位置し、後日連盟所有の敷地となるはずの部分であった。

建物は、２つの主要部分からなり、２つは回廊(ギャラリー)または柱廊(コロネード)によって連絡する別々の建物にするか、または控室（ロビー)、回廊(ギャラリー)などを有する単一の建物とし、１つは「総会会



図5-5-2　ジュネーブ国際聯盟会館ヒンデル案 透視図



図5-5-3　ジュネーブ国際聯盟会館ヒンデル案 配置図

議室」、「理事会室」、付属室、他の１つは事務局である。

事務局は、事務総長のもとに 480名の職員から構成され、次の諸室を必要とした。

事務総長および事務次長室、国際事務局部、政治部、法律顧問室、
行政委員会及び少数民族問題部、軍備縮少部、経済財政部、保健部、情報部、
委任統治部、社会問題及び阿片売買部、交通通過部、会計部、
ラテンアメリカ局の部局、総務課、議事録編纂・出版・販売課、
通訳及び翻訳課、記録課、配布課速記タイピスト溜り、謄写課、図書館、他

総会会議室は、 400名の代表者席を設け、それらを階段的、または傾斜的に配置し、正面には議長、事務総長、通訳が座る高座を設け、左右に事務局員(各10名)用席を、議長席下に演説及び投票のためのプラットフォームを必要とした。ほかに新聞記者席、約1000名収容の公衆席などが要求された。理事会関係室として、 120名の公衆用ギャラリーを備えた公開会議室、議長室、秘密会用室、新聞記者室、湖水に面する食堂などが条件とされている。

ほかに付属建物として、自動車25台、自転車約 100台のガレージ、運転手控室、さらに約75台の自動車用差しかけ屋根または、ギャラリーを設けることなどが記載されていた。

応募者が提出すべき設計図および書類として、次のものが要求された。

(a)建物及び庭園を含む配置図—縮尺500分の1
(b)地階及び他の初階(地下室及びガレージを含む)の平面図—縮尺200分の1
(c)立面図(三方)—縮尺200分の1
(d)湖に面する立面図—縮尺100分の1
(e)縦横四断面図—縮尺200分の1
(f)総会会議室詳細図、平面図一、断面図二—縮尺50分の1
(g)透視図二、うち一は鳥瞰図
(h)応募者に配布した価格表及び見積書見本に基いて作成した見積書
(i)設計の概要及び構造、暖房装置並びに換気法説明書

注意として、図面はストレッチャー(画布台)又は厚いボール紙に糊張りすること、インディアン・インクで書くか、又はポーシェ(poches)を施すこと、断面図及び立面図は、線仕上げ、または単彩仕上げとすること、透視図の仕上げは応募者の随意とし、単位はすべてメートル法によることが記載されている。

審査員は、H.P.Berlage(ヘーグ)、Sir.J.Burnet(ロンドン)、Charles Gato(マドリッド)、Joseph Hoffmann(ウィーン)、Victor Horta(ブリュッセル、委員長)、Carles Lemaresquier(パリ)、Karl Moser (チューリッヒ)、Attilio Muggia(ボロニア)、Ivar Tengbom(ストックホルム) の９名で、補欠審査員として、W.Kromhout(レンクム・アルンハイム)、H.S.Goodhart-Rendel(ロンドン)、Pascual Bravo (マドリッド)、Eugene Steinhof (ウィーン)、Franz de Vestel (ブリュッセル)、Gabriel Heraud(パリ)、Camille Martin(ジュネーブ)、G.B.Milani(ローマ)、Erik Lallerstedt(ストックホルム)らが名をつらねていた。

審査員の事務実行は聯盟事務総長が準備し、審査員の義務として、

(a)募集綱領を起案すること
(b)図案を審査し、所定の条件に最も適し且つ美術的実用的見地より最も満足すべきものと認むる図案を選択すること
(c)賞金及び選外賞金の振当てをなすこと
(d)応募の結果に基月、実施すべき図案を決定すること
(e)事務総長より聯盟各国政府に送付すべき報告を作成すること
(f)応募者の氏名が外部に漏れざる方法を講ずること

以上があげられた。

この競技設計の募集規定について、長野宇平治が1926年９月16日の日本建築学会通常会で評論している。その内容を要約すると、

①国際建築士大会 International Congress of Architectsの1906年第７回大会で決めた国際建築競技の規定 Regulations for International Architectural Competitions にほぼ従っていること。
②設計すべき建物については、所要室は延べ5,343坪、それに予備室や廊下、ホールなどの面積を加えると約 8,000坪の大きさになるが、日本の相場で考えると示された工費ではかなり困難な建築で、応募者は余程考えなければならない。
③総会会議場の議員席配置はゆったりしており、膨大な面積となって設計者にとっては苦痛なところで、また設計の優劣の分かれるところである。
④予算総額は 1,300万フランときめられており、主な材料の単価、工賃も記されているが、予算編成は苦痛かもしれない。
⑤競技者のため文書は十分なほどの量が配布されているが、ジュネーブの建築法規というものが掲げられておらず、おそらく建築法規適用の除外地区と推量できること。
⑥賞金総額165,000フランは、建築費1300万フランの100分の1.269にあたり、少し少ないように思われること。

などをあげている。

締切りは、1927年１月25日を期限とされ、65回にわたる[87]審査会の末、同年５月５日[88]の最終審査結果が６日に公表された[89]。 応募総数は377点[89]、優良９点賞金12,000フラン、佳作１級９点賞金 3,800フラン、佳作２級９点2,500フラン、計27点の入選作が発表された。「其の大半は募集規則に合わせざる故に所定の等級を附せず優等一等及二等各九を選び最後の決定を聯盟總會に委するとゝせり各等を通じ本邦人の入選なし應募圖案の展覧は六月末の豫定なり」[89]と、国際聯盟東京支局から通知されている。

審査会の経緯については、『現代建築の巨匠－20世紀の空間を創造した人びと－』中のル・コルビュジェの節に詳しいが、コルビュジェの計画案をベルラーヘ、ホフマン、モーゼルら「新建築のための真摯な闘いの真只中に」[90]ある人物たちが支持し、ジョン・バーネット卿、レマレスキエら新建築運動反対派やアカデミー派の人物たちは反対した。

近代精神による作品の選考に賛同するグループは、委員長オルタの支持を受けることによって過半数を構成するはずであったが、オルタが伝統主義者側に加わることによって、反アカデミック案が選ばれることが

87：前掲『現代建築の巨匠—20世紀の空間を創造した人びと—』p.85
88：『建築雑誌』(No.497、1927)p.150
89：『建築雑誌』(No.497、1927)p.149
90：前掲『空間・時間・建築2』p.561

91：『建築雑誌』(No.506、1928)p.194

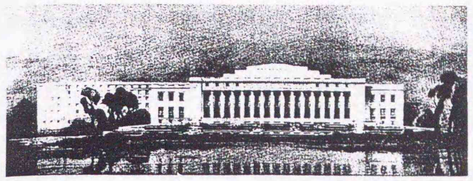
不可能となり、ル・コルビュジェ案を含む９つの１等賞を決めることによって表決に到達し、９人の受賞者から聯盟本部の仕事を受け持つ建築家１人を選ぶことは、聯盟の政治的手腕に委ねられることになったのであった[87]。

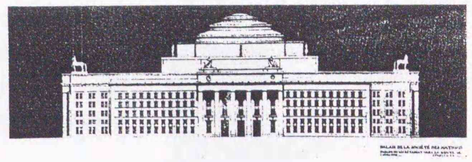
1928年１月19日付け国際聯盟事務局東京支局のコミュニケ第58号[91]によれば、第8回聯盟総会では、安達大使を委員長として、オススキー(チェコスロバキア)、ポリスチ(ギリシャ)、ウルチア(コロンビア)、サー・エドワード・ヒルトン・ヤング(イギリス)の４名からなる委員会を設け、９案を審査し、最も実際的並びに審美的要求を充たすと認められた１案を、必要があれば修正を加えて選定することが決められた。この委員会は、1927年11月及び12月19日から22日までジュネーブに会し、次のように決議した。

1. 委員会が不十分ながらも要求を充たしているとするのは、387号 H.P.ネノーとJ.フレーゲンハイメルの合作案である。
2. 委員会では本 (387号)設計図案に不満の点があるので、これに修正を加える。新設計図案は、387号ネノー(パリ)、フレーゲンハイメル(ジュネーブ)両名と、117号ブロツギ、ヴツカロ、フランツチ(ローマ)、 143号ルフェーブル(パリ)、431号ヴァゴー(ローマ)の5名および国際聯盟事務局の協力を得て作成する。
3. 基本案の作者及び上記協力者は委員会の提案する修正を容れた新図案を作成すべし。委員会は先ず其の新図案を審査し、しかる後これを承認する。
4. ジョーン・デイ・ロックフェラー(子息)が国際聯盟図書館の建設並びに財団として提供する寄付金を考慮に入れ、基本案の図書室設計は取消し、新図書館に対して別の設計図案を作ること。
5. 会館の新設計図案と図書館の設計図案の建築工事費は建築家に対する報酬を加えて、国際聯盟会館に対しては 1,950万スイスフラン、図書館に対しては約400万スイスフランを超えてはならない。
6. 略
7. 委員会では建物がモンブランに面する様に設計されるよう、且つ湖岸の樹木をできるだけ多く保存するため、湖岸よりなるべく奥に引っ込んで建てるよう設計すること。
8. 新設計図案はその作成に当たって協力した建築家全員の署名を要する。

こうして競技設計が実施されてから10年後の1937年になってやっと会館建物が使用されるようになったが、その日から聯盟の複雑な機能に対処できないことが判明したのであった[92]。実施案はまったくの失敗であった。

92：前掲『空間・時間・建築2』p.651および前掲『現代建築の巨匠—20世紀の空間を創造した人びと—』p.87による。





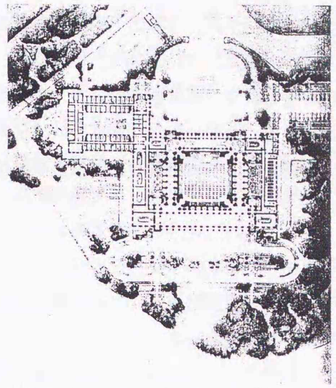


図5-5-4　387号ネノー、フレーゲンハイメル案
(『建築雑誌』1927.11)

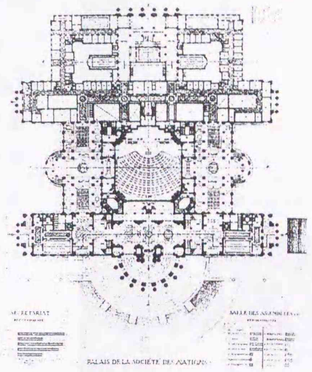
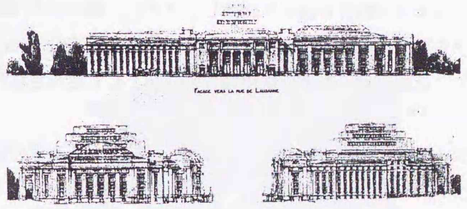
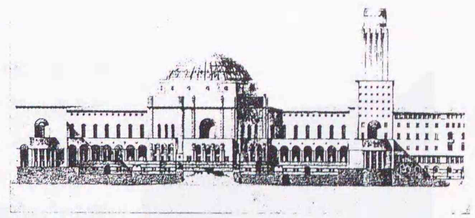


図5-5-5　117号ブロツギ、ヴツカロ、フランツチ案
(同左)





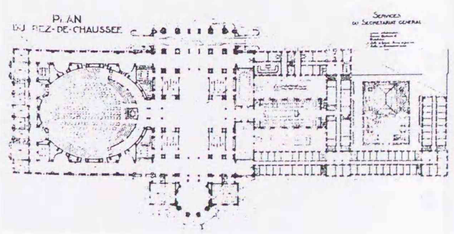


図5-5-6　143号ルフェーブル案(同上)

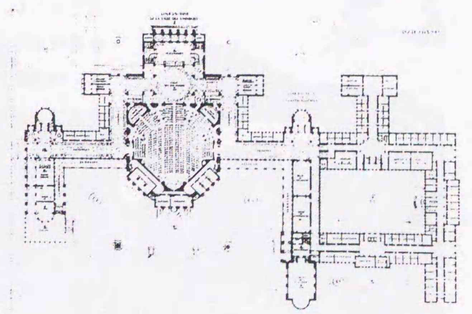


図5-5-7　431号ヴァゴー案(同上)

第６章　横浜時代の作品

第４章でも述べたように、ヒンデルは、1927(昭和２)年10月横浜に活動の拠点を移した。1935年に設計事務所を解散するまでの８年間にてがけた作品として、名古屋、岐阜、金沢、十和田、宇都宮などのカトリック教会及び幼稚園、上智大学（東京)、南山中学校（名古屋)、聖母病院(東京)、ドイツ学園(東京)など教育、医療施設のほか、自邸を含む横浜の住宅建築を２つ明らかにすることができた。本章では、住宅、宗教建築のほか、南山中学校、上智大学、聖母病院など、横浜事務所時代の作品を通覧しておきたい。

6-1　住宅建築

6-1-1:ヒンデル邸

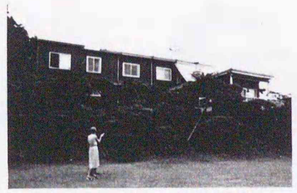


図6-1-1　旧ヒンデル邸南東側外観


図6-1-2　旧ヒンデル邸居間南東面

1927年10月にヒンデルが設計事務所を開設したとされる横浜市本牧満坂には、旧ヒンデル邸が現存している。現住所は、中区本牧満坂 253にあたる。おそらく、札幌同様、当初は事務所併用住宅として使用されたものであろう。

現在は、ドイツ人弁護士ゾンデルホフ邸となっているが、所有者の変遷などの経緯については不詳である。

高低差のある敷地の北西側の高台に建つ木造２階建て下見板張りの住宅であるが、当初は、うろこ形のこけら張り仕上げであった(図6-1-6)。金属板瓦棒葺きの屋根はヒンデル好みらしい裾広がりのフレアードルーフ、棟端飾りは、函館のトラピスチヌ修道院応接室棟(1930年)の玄関部屋根にみられるものと酷似している。

現居住者の意向で、平面等の調査は実施していないが、内外とも維持状態は非常に良い。現居住者が取得後、長い期間同一の設計事務所を通して、模様替えや維持管理を行っている結果であり、特にインテリアに関しては家具にいたるまで現居住者のこだわりが感じられる。従って、内部意匠、造作に関しては、ヒンデル設計のオリジナル部分が残っている部分は少ないように思われるが、南東の庭側に突出した平家部分の居間のように、三方に窓を配した明るい空間は、札幌時代からの住宅作品にみられる共有空間への採光面での配慮に通じるものである。また、上下２段に分割した窓開口も、できるだけ大きな開口部をとろうとする手法で、各所で上下とも引違い窓としており、ヒンデルが好んで採用した日本的なもののひとつである。


図6-1-3　旧ヒンデル邸居間北面

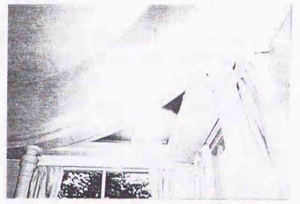


図6-1-4　旧ヒンデル邸居間天井隅部

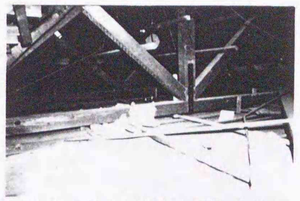


図6-1-5　旧ヒンデル邸小屋裏(バランスウェイトの玉石がみられる)

正方形平面に近い居間は、円形天井とし、４隅にできる曲面三角形部分（図6-1-5)には、擦りガラスをいれて天井照明としている。円形天井の梁部は細い円柱で支えられ、円弧上に８本立つようになるが、北北東隅部の１本は、開口位置の関係から部屋隅部に配置し、浅い収納庫の両側を飾る付け柱風の扱いとしている。南東庭側の４本は独立円柱、北西側では付け柱が曲面三角形の両頂点を挟む位置にそれぞれ２本ずつ立っている。北側の隣室との間の開口は現在建具が取り払われているが、引違い板戸であったと考えられる。

曲面三角形部分の天井照明の方法は、小屋裏に玉石をバランスウェイトとした白熱球を下げ、照度調整は、白熱球の高さを変えることによってコントロールするといった工夫がなされている(図6-1-5)。

２階子供室などに見られる８角形小窓は、札幌藤女学校(1924年)の妻部にみられる円形小窓、北星女教師館(1926年)や山崎邸(1925年)にみられる菱形小窓といった幾何学的形態の小窓の延長上にある意匠ということができる。

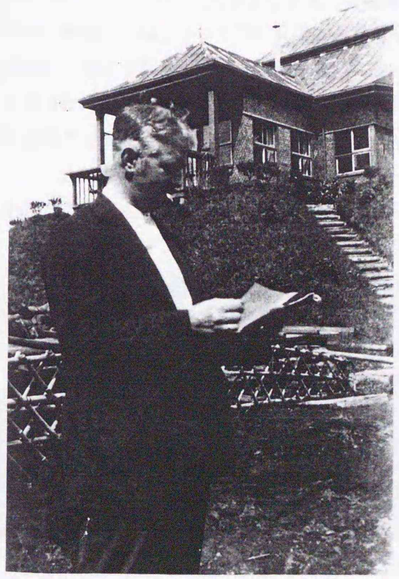


図6-1-6　竣工後まもないヒンデル邸


図6-1-7　旭シルク㈱住宅外観

6-1-2:旭シルク株式会社住宅

横浜市中区荒井 123にあった木造瓦葺き平家一部２階建ての住宅は、旭シルク株式会社住宅として1928(昭和３)年10月27日[1] 建築された。ハンス・ヒンデル所蔵の外観写真が２枚残るのみで、詳細は不明であったが、横浜開港資料館堀勇良博士による、建物登記簿調査、土地台帳調査、横浜防衛施設局調査、および元旭シルク株式会社取締役藤林佐太郎氏の教示によって、多少概要が判明した。

本建物は、輸出用生糸の検査官としてアメリカから派遣されたクーパー Cooper 一家の宿所用貸家として旭シルク㈱が建設したもの[2] で、土地は1928年５月23日、同社が渋谷徳蔵から購入した[3]。

小屋裏階への採光用屋根窓をみせた成の高い寄棟屋根の主棟の両側に袖翼のばした住宅で、１階は「客間兼食堂、居間、寝室３(うち浴室付き２)、使用人室３、厨房、その他(WC、外套室、食器室)」、２階は「屋根裏部屋」、地階は「倉庫、使用人室(WC付き)」[1] などで構成されていた。主屋の屋根は、瓦葺きではあるが、はっきりと裾広がりの意匠を採用しており、白い外壁とのコントラストがシャープである。窓開口は、開窓き風に見えるが、外側に両開きの鎧戸を建てこんでいる。

写真手前の翼部には、戸袋とガラス戸、ガラス戸越しに竪額入障子もみえ、縁側付きの和室群が並んでいる。主棟との間に楣形アーチをかけた吹き放ちの土間部分がみえる。

戦時中は空家となり、接収以降は、賃貸借契約により米軍に供され、通称「司令官ハウス」と呼ばれた。1954(昭和29)年3月31日[1]、200万円[2]で買収されて国有財産となり、土地447坪、建物延べ99坪(1階83坪、2階5.4坪、地階10.8坪)[4]は、総理府の所有となった。

1982年頃取り壊されている。

1：横浜開港資料館堀勇良博士による横浜防衛施設局調査

2：元朝日シルク株式会社取締役藤林佐太郎書簡（1988年4月18日付)による。
3：堀勇良博士による土地台帳調査。

4：ここでは、横浜防衛施設局調査の数字によったが、「昭和28年7月31日受付 第19020号保存登記」によれば、「建坪69.5坪、外2階5坪、地下5坪」とある。



図6-1-8　旭シルク㈱住宅遠望

6-2　宗教建築

6-2-1:熱田天主公教会(1928)

名古屋市熱田区図書町１－11（旧南区豊門町３丁目11）にあった教会で、1928年2月15日献堂式をあげた[5]。瓦葺き木造一部２階建て、開口部の枠周りを白くし、外壁を黒っぽく仕上げている。モルタル仕上げと想像され、竣工まもないカトリックタイムス(1928年５月11日)掲載の外観写真をはじめ、『素顔の名古屋教区』(1968年)には同様の写真(図6-2-1)が掲載されている。瓦葺き木造２階建て司祭館も、聖堂と同時に完成している。いずれも1945年５月17日の空襲で全焼した。

次節に述べる岐阜教会と意匠的によく似たバシリカ形式を採用し、屋根は裾広がりの瓦葺き、袖廊中央には鐘塔を立ちあげている。この小塔には、1929年10月27日教皇使節マリオ・ジャルデニー閣下により祝別された釣鐘が納められた[6]。 この鐘塔のほか、交差廊両側面上部、アプス部両側面にはヒンデル好みというべき円窓をみせ、アプス中央や外陣側面にはロマネスクに傾倒するヒンデルが好んで採用する半円欄間付き縦長窓がみられる。いずれも色ガラスを建てこんでいたと思われる。

なおこの教会の外観写真と考えられる写真２葉が、南山学園に所蔵されている。外壁を白っぽい横羽目下見板張り、開口部枠はやや黒っぽい色のツートンカラーとしており、写真隅に写るルルド（1932年11月26日祝別）や司祭館はまぎれもなくこの熱田教会である。いつ頃の写真か判然としないが、１枚には「S・11・10 シェプラ師銀祝記念」との記載がある。最初のSは、５とも読めるが、『素顔の名古屋教区』掲載の1932(昭和７)年11月26日ルルドの祝別写真では黒い外観であるので、1930年とは考えがたく、ここでは1936(昭和11)年10月撮影写真としたものの、なお疑問の残るところである。

5：『素顔の名古屋教区』(1968.10.15)
6：『カトリックタイムス 第233号』(1929.11.21)

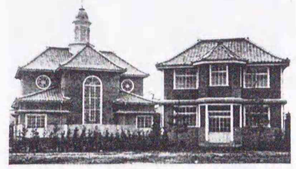


図6-2-1　熱田天主公教会 聖堂と司祭館（『素顔の名古屋教区』）



図6-2-2　熱田天主公教会聖堂袖廊部(1936年頃か)(南山学園蔵)

6-2-2:岐阜天主公教会(1929)と付属幼稚園(1930)

岐阜市青柳町３丁目(旧西野町６)に建てられたこの教会は、1929年２月28日献堂式をあげた[7]。

『カトリックタイムス　第200号』(1928.12.21)によれば、1926(大正15)年7月岐阜市長住町３丁目の普通住宅に設置された天主公教会は、1928年４月、岐阜市内西野町６丁目に約 500坪の土地を購入、８月着工、年末には外観がほとんど完成した。「県庁公会堂と共に岐阜新名門(ママ)の一つに数えられるようになった」[8]という。

ヒンデルについては、「ジェネブ(ママ)の国際会議場[9]をはじめ新潟教会、熱田教会等を設計せる其界の権威独逸人(ママ)ヒンデル技師」[8]と紹介し、請負は「熱田教会其他で腕を鍛へし岩永伊勢松氏の率ゆる浦上信徒の一

7：『カトリックタイムス 第209号』(1929.3.21)

8：『カトリックタイムス 第200号』(1928.12.21)
9：1926年実施のジュネーブ国際聯盟競技設計でヒンデルの応募案が知られている。

10：『カトリックタイムス 第200号』(1928.12.21)
11：『カトリックタイムス 第209号』(1929.3.21)



図6-2-3　岐阜天主公教会 聖堂と司祭館(神言神学院蔵)



図6-2-4　岐阜天主公教会聖堂内陣と側廊(神言神学院蔵)

団」[8]と報じている。

教会は、間口５間半、奥行10間、建坪55坪の木造平屋で、地盤から屋上まで35尺、前面の鐘楼は４層から成り上端まで70尺、バシリカ様式を採用して、外部は「美麗なる」[9]人造石で仕上げられていた。側廊の半円欄間付き引き違い窓に対応するように、身廊のクリアストーリーは、半円縦長小窓を二連ずつ配置している。

内部は、中央通路の左右を畳敷きとする坐式の会堂とし、入り口側のギャラリーは、聖歌隊席である。身廊と側廊とは、方円柱頭付き木造円柱をつなぐ半円アーチ開口の「白色」下がり壁が分節している。下がり壁のアーチは、アプス部分を半円状に回りこんで連続するが、全体にやや重苦しさを与えている。

側廊両面の開口部や身廊部のクリアストーリーは、半円アーチの欄間付き窓を並べ、聖堂内部に十分な明るさを提供していたようである。聖壇前面交差廊の妻壁には、ヒンデル好みの円窓もみられる。いずれも色ガラスをはめ「ステンドグラスを透して流れ込む光は美しい綾を織り、セピア色の碁(ママ)(格か)天井、白色の壁と共によく調和して神秘な気分を起させ」[10]る効果であった。内部正面の大祭壇は、ウィーンの「美術の泰斗フレベル博士の設計監督」[10]で製作された。

同時に建てられた教会堂前の牧師館は、木造２階建て18坪の住宅で、２階正面には聖母子像を飾り、外壁は会堂同様に人造石仕上げであった。入口の石門、石塀も同時に完備された。

工事は1929年２月に完成し、28日に献堂式をあげている。参列者 300数十名の盛大なもので、金沢知事、同夫人、徳川好敏、同夫人、松尾市長、野々村商工会議所会頭、税務署長、岐阜駅長ら[11]の来賓が参加した。『岐阜日日新聞』では、「夕日に輝く十字架の聖堂」と題して 250行からなる記事を２日間連載し、発行部数第一の『新愛知』でも教会の全景を紹介するなど[11]、中部地方において大いに注目された会堂であった。

1929年10月29日、教会塔屋内に熱田教会と同様ジャルディーニ教皇使節により祝別された「アンジェルスの鐘」が設置された。「ドイツ、ドリーボルヒのフランシスコ・ザベリオ高等学校生徒がまごころこめて贈って呉れた」[12]ものである。翌1930年には、内陣部正面の壁に「日本カトリック画壇の双擘黒澤、佐々木両画伯」[13]により、「ペンテコステの壁画」[13]が描かれた。



図6-2-5　岐阜天主公教会外観(神言神学院蔵)

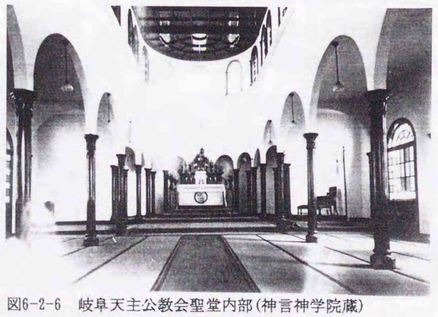


図6-2-6　岐阜天主公教会聖堂内部(神言神学院蔵)

また1929年5月1日、併設の木造２階建て総坪数23坪の天使幼稚園が開園式をあげた。聖堂に隣接した敷地の南側に運動場を、北側に園舎を配し、階下に遊技室、保育室、保母室を置き、80名の園児を収容した[13]。「独逸幼稚園の粋をとり入れ、換気に採光に保温にすべてが理想的に完備」[13]したもので、ヒンデルの日頃の主張をよく反映した作品の一つであった。

1945年７月９日空襲により、聖堂、司祭館、幼稚園など敷地内のすべての建物を焼失している。

6-2-3:御器所天主公教会（カトリック恵方町教会)(1931)

当教会については、名城大学理工学部畔柳武司の調査、研究[14]があるので、本節では簡単に触れておきたい。畔柳の1989年調査では、ヒンデル関連資料として「名古屋市ごきそ天主公教会設計図」と題する「昭和五年拾壱月」付けのＡ１版図面７枚が確認され、筆者も部分コピーを資料として使用したが、改めて筆者による1994年調査では、教会でも所在が不明で現物を確認することはできなかった。ほかにも仕様書や1930年12月19日付けの建築申請書、玄関部増改築および塔屋図書（1949年１月12日）などの資料もあったというが、これらも同様に不明である。新聖堂、新司祭館が1985年３月に竣工し、旧聖堂は重度身体障害者の福祉団体「ＡＴＵ自立の家」の事務所兼権作業室として転用後、1989年９月２日に解体されたことや、司祭の交代などが重なったためと思われる。ヒンデル資料として貴重なものだけに所在の確認が課題として残されている。

さて本教会は、ライネルス教区長が1928年当時教皇長使節として在独していた後のピオ十二世に寄付を請い、その浄財を基礎に、その後ベルリンのカトリック新聞社社長ローレンツ・ツアッハ博士が中心となって建設資金が集められた[15]。1931年２月22日定礎式[15]、６月21日献堂式[15]を挙げたが、施工は名古屋市中区新栄町２丁目８保坂工務所が担当し、建築申請書では同年２月24日起工、竣工は同年10月30日とある。

1945年５月名古屋空襲の折に焼夷弾により被災し、内陣の一部を破損している[14]。設立当初から通称桜山教会あるいは御器所教会と呼称され[15]、1948年10月25日恵方町教会と改称された[14]。1949年１月12日、北川建設株式会社(名古屋市西区牛島町106）により玄関部を改築し塔屋を増築、1954年ベルリンから鐘が送られ鐘塔に取付けられた[14]。1974年８月聖堂内の畳敷きが板張りじゅうたん敷きとされている[14]。1985年新聖堂、司祭館が竣工し、旧聖堂は前述のように福祉団体の事務所兼作業室に転

12：『カトリックタイムス 第233号』(1929.11.21)
13：『カトリックタイムス 第246号』(1930.4.1)



図6-2-7　岐阜天主公教会司祭館(神言神学院蔵)

14：畔柳武司『恵方町カトリック教会堂建築について』名城大学理工学部研究報告(1990)
15：『カトリック恵方町教会五十周年記念誌』(1981.6.21)p.15



図6-2-8　恵方町教会南側遠望(玄関・鐘楼は1969年増築)(恵方町教会蔵)

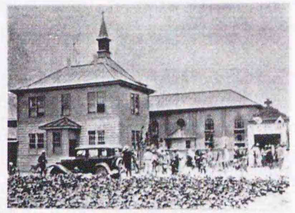


図6-2-9　竣工時の御器所天主公教会(『恵方の鐘 第19』1967)

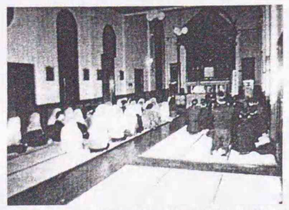


図6-2-10 1974年以前の恵方町教会(畔柳武司提供)

用後、1989年９月２日解体された。

聖堂は、木造一部２階建て、南側に木造２階建ての司祭館を併設していた。内陣部分を一段高くし方形屋根を架け（内陣塔と呼ぶ）、上に鐘塔を掲げる。外陣部分は寄棟屋根である。外壁は、腰部を横羽目板張り、上部を竪羽目板張りとし、各ベイごとにドーリック風の付け柱をみせ、半円欄間付き上げ下げ窓のほか、南北告解室の張り出し部上部に丸窓をみせる。半円欄間および丸窓頂部にはキーストン風の装飾を付ける。内陣塔の高窓も半円アーチ窓とするが、アーチの起格点下にはコリント式オーダーを模した小さな付け柱を付ける。ヒンデルの他の教会同様ロマネスクを意識しているのは明らかである。

平面は単廊形式で、東側ナルテックス部分（33×9尺)に玄関と客室を納め、間口21尺、奥行45尺の外陣、21尺角の方形内陣部とからなる。内陣部の北側に袖廊部（10.5×9尺)と納戸(同)とを張り出し、南側袖廊に当たる部分の納戸を介して司祭館が続く。司祭館は、２階建て主棟と西側平家部とで構成され、主棟１階は玄関、応接室、食堂、台所、２階に居間、寝室、客室など、平家部は居間、台所などが配置されていた。

外陣の天井は格子平天井、内陣は、亀甲模様の天井でともにワニス塗りとされた[14]。内陣中央の天蓋付き主祭壇は、岐阜天主公教会同様、ドイツ美術協会会員フレーベルの設計[15]によるのものであった。

6-2-4:金沢聖霊修道院三位一体聖堂[16](1931)

北陸地方でのカトリックの布教は、1880年伝教師見習水田若吉が金沢市片町に講義所を創設したことに始まる。1900年代に入ると布教活動は停滞状態になり、神言会がその任に着き、1911年ライネルス(1874.3.20—1945.8.28)が担当、同年新潟教区長に任命された[17]。彼の布教精神である「病院は目の前に苦しんでいる人を救い、学校は将来社会に役立つ人をつくる」[18]に基づいて、1914年聖霊病院を設置し、その拡充に専念するが、1926年名古屋教区長に就任し、以後東海地方の学校や宗教施設の建設に努めることになる。ライネルスとヒンデルとの出会いは、新潟教会堂建設の時と推測されるが、以後名古屋に移ってもヒンデルに設計を多く依頼することになった。ドイツ人であるライネルスが、ドイツ語を巧みに話す建築家を便利に思うのは当然とも思われるが、この出会いが、北海道、関東に並び、中部地方に作品圏を形成する重要な機会となっていった。

ライネルスが担当した代表的な建築のうちヒンデル設計のものは金沢聖霊病院付属聖堂のほか、新潟教会(1927年、現存、**5-3-3** 参照)、熱田教会(1928年)、岐阜教会(1929年)、同付属幼稚園(1930年)、名古屋恵方町教会(1931年)、南山中学校本館(1932年、**6-4**参照)などがあげられる。

16：ヒンデルの図面では金澤天主公教會とあるが、本論では竣工時の名称に従った。

17：畔柳武司、角幸博『金沢聖霊病院附属礼拝堂について』日本建築学会大会梗概集(北陸)(1983.9)

18：『南山学園の歩み』（南山学園、1964.11.1)

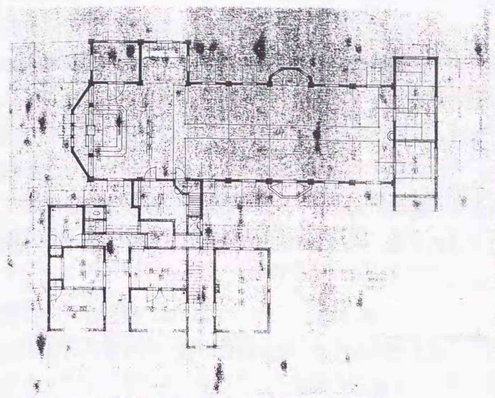


図6-2-11 御器所天主公教会1階平面図(畔柳武司提供)

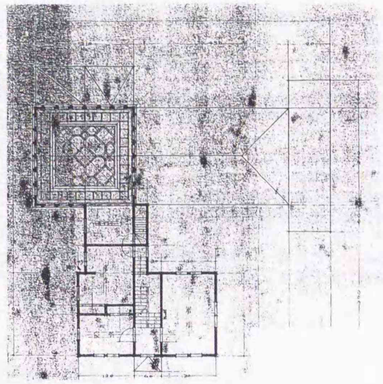


図6-2-12 御器所天主公教会2階平面図(畔柳武司提供)

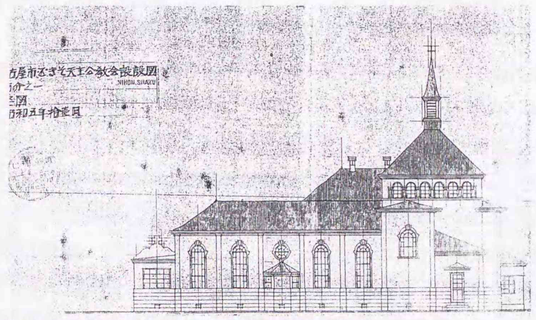


図6-2-13 御器所天主公教会北立面図(畔柳武司提供)

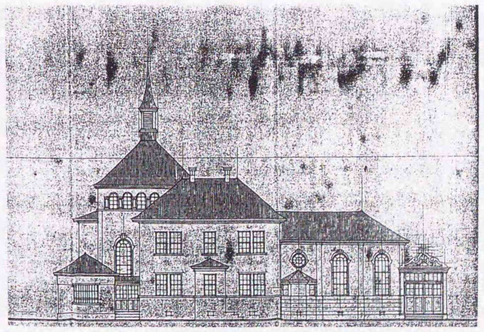


図6-2-14 御器所天主公教会南立面図(畔柳武司提供)

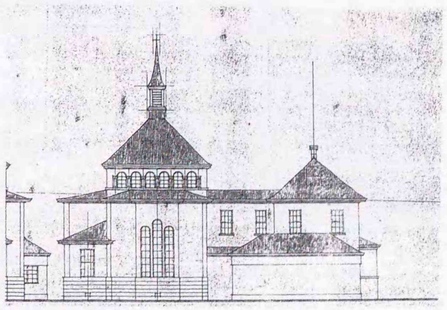


図6-2-15 御器所天主公教会西立面図(畔柳武司提供)

19：『社会福祉法人聖霊病院のおいたち』(1983)
20：畔柳、角幸博『金沢聖霊病院附属礼拝堂について』
21：金沢聖霊修道院法人台帳および各代修道院長記録簿「グローニック」による。
22：『カトリックタイムス 第319号』(1931.11.22)
23：『金澤天主公教会増築設計図』より。
24：畔柳、角『金沢聖霊病院附属礼拝堂について』
25：『石川の近代建築 25 金沢聖霊修道院聖堂』朝日新聞石川版 (1980.10.16)



図6-2-16 金沢聖霊修道院三位一体聖堂南東外観(南山学園蔵)

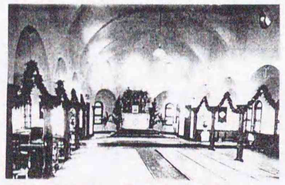


図6-2-17 三位一体聖堂内部(竣工時)(金沢聖霊修道院蔵)



図6-2-18 1941年以降の三位一体聖堂内陣(カトリック新潟教会蔵)

1914(大正3)年7月ライネルスは、現在地の金沢市長町1－5に約2000坪の敷地を購入し、院舎を建築、聖霊会の修道女にその経営を委託した[19]。秋田からセシリアーナ修道女を長とする４名が到着、医師２名、ベッド数32で開院された[20]。1930年には、小室工務所により木造２階建洋風の病院本館が増築された[20]。

本節にとりあげた聖堂建築は、この病院の附属聖堂と金沢布教所を兼ねた教会堂として計画され、1931年７月４日起工、同年８月30日建築認可となる。９月４日鐘塔が完成し[21]、同年11月12日献堂式を挙げた[22]。ライネルス名古屋教区長、チェスカ新潟教区長らを含め、約 200人参加の盛大な式であったという。

『カトリックタイムス 第319号』(1931.11.22)は、設計者「スキス人ヒンデル技師」、施工は熱田教会、岐阜教会同様、名古屋教区信徒岩永伊勢松が担当したことを報じている。。

金沢聖霊修道院には1931年６月付けの設計図２葉が所蔵されている。

『金澤天主公教会増築設計図　百分之壱　平面、姿図、断面図 昭和六年六月』
『金澤天主公教会増築設計図　百分之壱　姿図及断面図　昭和六年六月』

と題するもので、図面には「横浜市ヒンデル建築事務所」の丸印がおされている。

木造下見板張りのあっさりした作品であるが、「間口六間半奥行十二間高さ三十五尺(ママ)堂々たるもので赤銅色の屋根と卵色の外観、六十尺の鐘楼上には金の十字架が燦爛として輝いて」[22]いた。主棟の棟高28尺[23]、鐘楼の屋根頂部までの高さは51尺[23]、屋根部14.5尺[23]、基部31尺までは９尺角の角塔[23]、屋根部は八角錐の尖塔、その上に金箔張りの十字架を掲げている。現在は、尖塔の屋根は緑色、主屋根を赤色、外壁は白色に塗られているが、竣工時の姿はよく維持されている。

隅角部の付け柱や窓枠は、こげ茶色で引き締め、半円アーチ欄間付きの縦長窓を、妻壁では下層５連、上層３連、両側面では１ベイあたり２連ごとに５ベイ分、および内陣部下層に並べる。窓は、２枚に分割したほぼ正方形の回転窓である。クリアストーリーは、ヒンデル好みの円窓で、木製サッシュの割り付けは、熱田や岐阜の天主公教会と共通している。

窓に色ガラスを入れるが、「ドイツのステンドグラス」[22]は、「アンジェルスの鐘」[22]と共に献堂式には間にあわず、1931年12月６日到着[24]した。近年修道院の物置で、ドイツから送られた色ガラスの10枚入りの古い梱包が発見された[25]というが、おそらくこの時のものであろう。

内部は三廊式のバシリカ形式で、間口39尺、奥行63尺の矩形平面から９尺分アプスを突き出し、広い身廊（巾21尺）の左右に身廊巾の半分程の側廊（巾９尺）を配する。身廊部よりも一段低い側廊部の天井は、交差ヴォールト天井、身廊部は左右の円柱を横断アーチでむすび、半円形

ヴォールト天井としている。身廊部の天井高22.5尺(設計寸法)、側廊部は11尺(同)である。

円柱は、ロマネスク様式特有の彫刻を施した方円柱頭をもち、黒漆塗りで仕上げられた美しいものである。伝統的な工芸の漆の採用は、ヒンデルの持論とする伝統との調和の積極的な展開であり、それがみごとに成功した「北陸の一角(ママ)に異彩を放つ」[22]秀作のひとつといえる。

天井、壁とも当初は「白亜」[22]であったが、現在は天井を祭室部を除きアイボリーに塗り、壁は淡いブルーで統一され、アーケード列の連続アーチとアプス部の横断アーチは鮮やかな群青が塗られ、さらに金色で縁取られている。

内陣部の壁画は、1941年(昭和16)５月、病院付司祭であったマチヨクによって付加された[26]もので、この際内陣の一部が増改築されている。アーチの群青や縁取りの金色は、この際の改装と思われる。ヒンデルの黒漆の起用と、金沢特有の鮮やかな群青のとりあわせが、この聖堂空間の魅力を一層ひきたたせている。

26：前掲『素顔の名古屋教区』

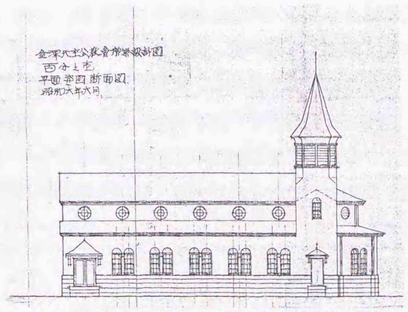


図6-2-19 金沢三位一体聖堂東立面図(1/400 陰画を反転)(金沢聖霊修道院蔵)

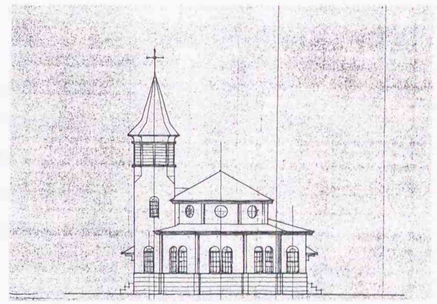


図6-2-20 金沢三位一体聖堂北立面図(1/400 陰画を反転)(金沢聖霊修道院蔵)

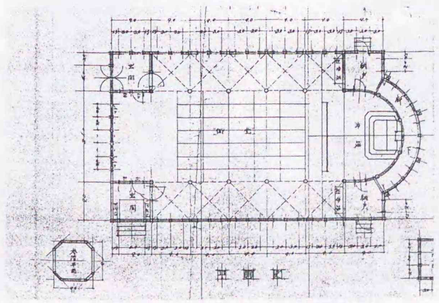


図6-2-21 金沢三位一体聖堂平面図(1/400 陰画を反転)(金沢聖霊修道院蔵)

6-2-5:三本木天主公教会(現カトリック十和田教会)(1932)

十和田市稲生町12－24に所在するカトリック十和田教会は、三本木天主公教会として、1932年に竣工した。1954年(昭和29)三本木町が十和田市と改称するのに伴い、同教会も1956年10月十和田カトリック教会と改称した。

教会には、「昭和六年拾二月」付け「三本木天主公教會設計図　百分ノ一　姿圖及断面圖」と題したＡ１版設計図(図6-2-24)が１枚残っている。ヒンデルの印やサインは見られないが、図面タイトル欄の様式は、ヒンデル作の北星女学校や南山中学校の図面のそれと共通のもので、ヒンデル事務所の作としてよいであろう。

この図面と創建時の写真(図6-2-22)をもとに、同教会付属幼稚園所蔵年代不明「カトリック幼稚園平面図」を参考にして、竣工時における教会堂、園舎、司祭館の配置関係や外観のあらましを多少知ることができる。なお「カトリック幼稚園平面図」は、幼稚園が新築される1964年以前の姿を示したものと考えられ、園舎部分は創建時に比べかなり増築されている。

教会施設は、611.59坪(2,022.12㎡)のほぼ長方形の敷地に建ち、北東奥に聖堂を配置し、聖堂の南東に園舎、西南に司祭館を接続しており、他のヒンデルの作品にはみられない複合施設となっている。

司祭館は、木造寄棟２階建て一部平家、南東側正面やや西寄りに玄関を置き、２階には２ヵ所の屋根窓を見せる。梁間約21尺の下階に対し、２階は梁間約12尺と狭く、２階外壁から南北両側に葺きおろした屋根は、ゆるやかな曲線を描くフレアード屋根となっている。屋根窓以外の窓は、上下２段の引違い窓を採用し、できるだけ大きく開口し南側採光をとろうとする意図がみられる。



図6-2-22 創建時の三本木天主公教会(カトリック十和田教会蔵)

園舎は、「幼児教育を一歩先取りしたような」[27]建物で、木造２階建て半切妻屋根、２階の東西に大きく切妻屋根窓を張出し、大屋根から東西に葺きおろした屋根も司祭館同様、曲線を描いたフレアード屋根としていた。１階は21×36尺の矩形平面で、西側中庭に面して、司祭館同様上下２段の引違い窓で大きく開口している。

幼稚園の玄関ホールは、聖堂前室を兼ねており、浅い袖廊をもつ三廊式の平面の聖堂と連絡していた。間口24尺、奥行66尺の聖堂の身廊部は、当初金沢聖霊病院附属聖堂などと同様に、中央通路をはさんで左右を畳敷きの床としていた。創建時の内部写真(図6-2-23)によれば、暖房にはストーブを採用している。

袖廊および内陣部は、側壁を隅切りにしてクロバー型にし、内陣と袖廊境はアーチ型の垂れ壁としている。内部は白漆喰仕上げで、身廊部は平天井、袖廊部は４分ヴォールトとしている。

身廊部と側廊部とは半円アーチで分節され、アーチを支持する木製円柱はワニス塗り、円柱柱頭部には、金沢聖霊病院附属聖堂や宇都宮教会

27：小野忠亮『青森県とカトリック』(百年史出版委員会、1982.9)p.257

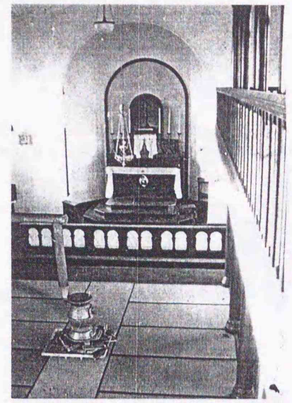


図6-2-23 創建時の三本木天主公教会内部(カトリック十和田教会蔵)

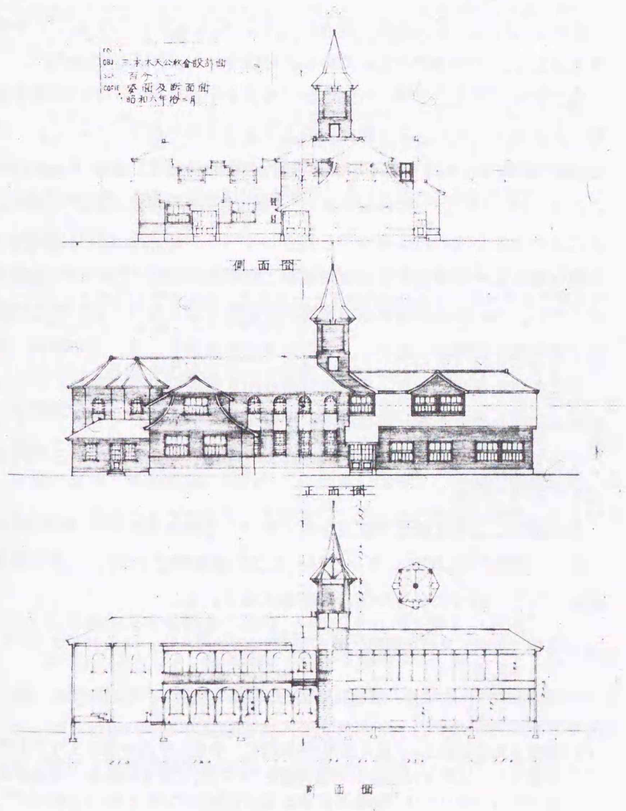


図6-2-24 三本木天主公教会設計図(カトリック十和田教会蔵)

などでも採用された、彫刻を施した方円の柱頭飾りがみられる。側廊上部と身廊部入口上部に、コの字型にギャラリーをまわし、入口側聖歌隊席は当初園児席として利用された。

木造平家、棟高30尺[28]の切妻屋根の聖堂は、前面に園舎が付属していたので、正面の意匠は表にあらわれないことになるが、正面妻面には新潟教会と類似の円窓が付いており、入口側上部に小鐘塔を立ちあげている。高さ50尺の鐘塔は、８尺の角塔の基部に八角錐の尖塔屋根を架け、その上に十字架を掲げている[29]。

下見板張りの外壁に、側面では、上げ下げ窓と半円形の高窓を上下に規則正しく配列し、窓の組子は正方形を組み合わせ、それに緑、紫、黄色の色ガラスを配した意匠としている。

「三本木天主公教会及附属建物新築工事」[30]は、1932(昭和７)年１月開始、７月末に完成し、同年８月４日、聖堂、司祭館、幼稚園の献堂式、落成式が行なわれた。教会所蔵『建築工事請負契約書』（1932年１月16日）によれば、当初は1932年５月26日竣工引き渡しの予定であった。同契約書には、建築主「北海道函館市元町三拾七番地　三本木天主公教會　代表者デウマス、アンドレイ」(デュマス Dumas 教区長)、請負人「横浜市中区本牧町台二五三番地　宮内初太郎」、立会人マックス・ヒンデルの署名がある。工費は教会堂、園舎などを含み、11,100円であった[30]。

施工者宮内初太郎(1892－1957)は、横浜を中心に多くの近代建築を建設した技術者である。宮内初太郎および宮内建築事務所については、岡田義治(栃木県立真岡工業高等学校教諭)の詳しい研究[31]があり、それによれば、1892(明治25)年横浜生まれ、1900(明治33)年初太郎が８歳のときに父半太郎が宮内建築事務所を創立している。初太郎は1911(明治44)年県立横浜第一中学校卒業後東京高等工業学校(現東京工業大学)建築科に入学し、1914年卒業後東京市建築局営繕課技師となり、1917年には蔵前工業専修学校講師も勤めた。1920年東京市技師を退職、同年宮内、西山建築事務所を設立した。1924年同事務所を解散し、父の設立した宮内建築事務所を継承、初仕事は横浜紅蘭女学校の設計であった。ヒンデルの作品ではこの三本木天主公教会のほか、宇都宮天主公教会(1932年)などを手掛けている。

契約書には工事仕様書が添えられており、それによれば、1階建坪101.36坪、２階建坪33.57坪、ギャラリー及び塔屋建坪15.36坪。工事の構造概要として、以下のような項目が記載されている。

(1)基礎：側廻り及び主要間仕切り下は布コンクリート、床大引下はコンクリート基礎。
(2)構造木材：土台は桧、梁類は桧または米松を使用し、その他は杉、桧、米栂を使用。
(3)屋根：野地板の上に「日ノ出印」建築用紙一号品二号品を重ね３寸以上で乱張りし、上葺きは亜鉛引平板28番を「リブ型」に葺き納める。雨樋鼻は光明丹３回塗りの上「オイルペイント」３回塗り。

28：畔柳武司「建築家マックス・ヒンデルとカトリック十和田教会堂建築について」(『カトリック十和田教会堂の建築 光を受けて』)

29：「十和田教会のあゆみ」（カトリック十和田教会リーフレット）

30:『建築工事請負契約書』(1932.1.16)

31：岡田義治『栃木の建築文化 カトリック松が峰教会』(1986.11.8)

(4)外壁：下板エゾ、「日ノ出印」建築用紙二号品を重ねて３寸以上に張り廻し、上板として杉上並４分幅厚２寸を見え掛り１寸で下見板張りとし、軒天井は板張り、「オイルペイント」３回塗り、基礎コンクリート表面は、セメントモルタル塗りニ刷毛引仕上げ。
(5)内壁：御堂、住宅は、漆喰仕上げ、集会所及び集会所上の日本居間、台所、便所等は、「日本漆喰真壁造り」「色」仕上げ。浴室は「セメントモルタル」塗りに刷毛引き仕上げ、腰羽目板張り。
(6)床：御堂は、植正目板厚６分幅２寸長さ４尺５寸以上で実矧ぎ張り、ワックス磨き。住宅並びに廊下、台所床は、杉厚６分幅２寸長さ４尺５寸以上で実矧ぎ張り。御堂の一部、教室、集会所、集会所上の日本居間は、「機械締メ十四通シ床ニ」「小松引通シ表ヲ使用シ」た畳敷きとし、下板はエゾ松板割材で表面荒鉋仕上げのものを合決りに張り、玄関浴室はコンクリート３寸仕上げに表面セメントモルタル塗り。
(7)天井：御堂、住宅は、「下地小舞ヲ継手乱ニ空間五分乃至六分ニ釘板巾二本打チトナシ葭簾ヲ針金五寸間隔ニ張リ上ゲU型亜鉛鍍金釘ニテ止」漆喰大面塗り仕上げ。日本居間及び集会所、教室は、無節杉材板厚「並四分巾八寸以上羽重ネ八分以上」の竿縁天井。台所、廊下、便所、浴室は、「正三分巾五寸羽重ネ六分以上杉巾揃無節ヲ以テ面取大和張リ」。
(8)造作用木材：外部用は桧、内部用は杉、米杉、米栂等を指示に従って使用。表面はすべて砥粉２回塗りのうえ、布磨き。
(9)窓：御堂部分は、分胴付き上下げ窓及び回転窓とし、色ガラスを指示に従い取付け。窓枠窓桟は、桧製。
(10)建具：腰付きガラス戸または「パネル」戸。日本居間押入は襖、廊下と日本居間境は、廊下側「パネル」戸、居間側障子戸。ギャラリー手摺、階段手摺の材料は、杉または米杉、階段板、入口靴摺は桧。
(11)取付造作物：登壇台は巾９尺長８尺蹴上五寸階面１尺のもの１個、巾７尺長６尺蹴上５寸のもの１個。祭壇前手摺長５尺１個。ほかに食器棚、流し、手洗い流し、下駄箱や和風青色大便器４個、同小便器５個など。
(12)煙突：浅野または朝日煙突４寸、見え掛周囲は「パネル」箱型に施工。
(13)排水工事：建物４周および台所前に１尺５寸平方のふた付きマンホール作製。
(14)便所：汲取便所。
(15)電気設備：御堂祭壇前アーチに間接照明。中央部２灯は、エナメル塗り１インチパイプを天井より約８尺下げ朝顔形器具を３個の割合で取付け。ブラケット４個、５インチ直付け10個。

1955年12月園舎の物置部分を焼失、さらに1964年３月保育室から出火し園舎焼失、同年７月に新園舎の改築工事を終えた。この際に聖堂と司祭館を曳き家し、補修している。1968年５月十勝沖地震で聖堂が大被害を受け改修工事を実施、1979年には聖堂の改修と、正面の改築がおこなわれ[32]、現在のような聖堂の正面意匠が表わされた姿に変更されている。



図6-2-25 カトリック十和田教会正面現状

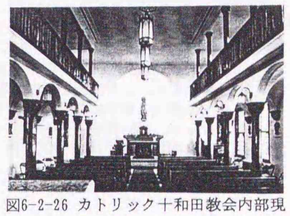


図6-2-26 カトリック十和田教会内部現状

32：「十和田教会のあゆみ」（カトリック十和田教会リーフレット）

6-2-6:宇都宮天主公教会（現カトリック松が峰教会）（1932）

当教会については、岡田義治『栃木の建築文化　カトリック松が峰教会』（日本建築学会関東支部栃木支所、1986.11.8）の詳細な報告があるが、筆者も1979年４月関係者からの聞き取り、古写真の収集など事前調査、同年８月実測調査を実施し、実測図を作成する機会を得たので、1979年調査結果を基に上記報告書を参考に論考した。

1873(明治６)年の切支丹禁令の解除以来、関東地方の布教には２、３名の宣教師が巡回していた。1883年、北関東一帯担当のヴィグルス神父の助任として、松ケ峰教会の創立者カディヤック神父が赴任した。カディヤック神父は、1888(明治21)年川向町に土地建物を購入、最初の教会と伝導用学校を開設し、1905(明治38)年頃には松ケ峰町に約 1,450坪を購入[33]して司祭館を建設、1910年には聖堂も建設したが、神父は「よそから人が見にくるような」「ルルドのような」[34]聖堂を建てることを一生の念願としたという。

カディヤック神父は1930年に他界したが、1928年には「フランスからの輸入パイプ鉄材も到着」[35]していたというから、新聖堂の設計は生存中からすすめられていたのであろう。

新聖堂は、1931年７月着工[36]、翌年11月20日竣工[36]、同11月23日聖別式が挙げられた。聖堂建設寄付金の積立総額は、 8,885円41銭で、建築費は53,000余円[36]であった。設計料は、総工費の15％程度という[37]。

施工は三本木教会と同様、横浜市本牧の宮内建築事務所(宮内初太郎)が請け負い[38]、大谷石の納入、張石・石垣工事は、宇都宮市小幡町 安野半吾が請負った[38]。大谷から石の切出しを担当したのは三枝伊佐男、現場で石の加工、石張りは、越後生まれの石工、江部留吉、新野常吉ら10名ほどが関わった[38]。

33：登記簿コピーによる(船渡川武四郎氏蔵)
34：田中美智子『歩く宣教師 イポリト・ルイ・カディヤック』(1978年)
35：カトリックタイムス(1928.4.11付)
36：岡田義治『栃木の建築文化　カトリック松が峰教会』p.68
37：信者高木省一談。
38：前掲『栃木の建築文化　カトリック松が峰教会』 p.69。本書p.116によれば、安野は1872(明治５)年横川村江曽島生まれ。この教会のほか宇都宮商工会議所(1928年)などの施工でも知られる。1951年没。
39：カトリック新聞(1932.11.6付)


図6-2-27 カトリック松が峰教会正面外観(1979年撮影)


図6-2-28 宇都宮天主公教会創建時正面外観(山根寛吉蔵)

聖別式

聖堂の竣工については、『下野新聞(1932.8.20)』に「宮の名物＝天主公教会出来上る」、『日本カトリック新聞(1932.10.30)』に「壮麗なる石造殿宇都宮聖堂竣工」の記事がみられ、『カトリック新聞』では「……壮麗さは東京地区の諸聖堂中其の右に出るものなかるべし……広さは東京大司教座たる関口聖堂と同様なるのみか……市の中央に位置せる高台二千坪の構内に屹立して居る為め市の何處よりも望見し得べし」と報じている。聖別式は、1932年11月23日であったが、それに先だち信者の団体参列募集[39]も呼びかけられている。

式当日の様子は、『カトリック新聞(1932.12.4)』に詳しい。「日本最初の聖別式に教皇使節大阪札幌二司教以下数十名の教区長修道会長及び東京信者百名参列／……十時半荘厳ミサはメーラン師の補佐、ファビエ、ブレンギェ両師の名誉助祭副助祭、今村、松下両氏(ママ)の助祭副助祭で東京大司教によって挙げられ……イエズス会ドミニコ会、フランシスコ会、神言会、マリア会等各修道会の代表者や教区長、諸教会主任司祭、上智大学々長大神学校長以下……五百を算し、流石に横七間半(ママ)十五間の大聖堂も一杯であった。……午後二時半地下応接室に於いて……一般献堂祝賀式が開かれ、……午後四時教皇使節閣下の盛大なる聖体降福祭があって同三十分無事式を了した」と報じられ、各界から多くの人を集めたこの聖堂の竣工が、当時のカトリック界にあって大きな出来事の一つであったことを伝えている。

建物概要

教会は、東武宇都宮駅近く、宇都宮市松ケ峰一丁目一番地に位置している。高さ約24.3mの双塔を持つ東側を正面とし、双塔上には厚い金箔を張った[40]という十字架を上げる。間口50尺奥行80尺（アプス、聖具室を除く）、鉄筋コンクリート造の内外両面に白目大谷石を張る。『日本カトリック新聞(1932.10.30)』には、「外部と内面全体を大谷石を以て覆ひ内外両面の間四、五寸を鉄筋コンクリート造とせる厚さ数尺(ママ)の堅牢無比なる石造」とある。柱下には、松杭を２本くらい連結し、１丈３尺程の深さに打ちこんだ[41]。

１層目(地階)の外壁はルスティカ仕上で、ビレット(切り棒状飾り縁)で縁どられた正面地階入口のティンパヌムには、組紐模様と竣工年である「1932」を刻む。1981年にアルミ製建具に変更されるまでは、小さな菱形窓や菱形ノブのいかにもヒンデルらしい木製戸を建込んでいた。正面左右の階段を上ると吹き放しのポーチから聖堂入口へ通じる。ポーチのアーチ下面には、細かな幾何学文様がみられる。

２層目(１階)の外壁は、びしゃん仕上げの整層切石積みで、軒下にロンバルド帯を廻して外観を引き締めている。付柱で分節された４ベイの身廊部は切妻屋根で、創建時には半円形の屋根窓が４か所、ベイに対応して付設していた。軒コーニスと屋根裾間には横樋が走り、縦樋は付柱に１つおきに埋めこんでいる。

窓開口部はいずれも鉄製サッシュで、聖堂部は半円形欄間付突出し窓で、色ガラスを入れている。

地階は集会用ホール、１階は三廊式の聖堂部分である。西側にアプスと聖具室を突出させる。身廊は平天井、側廊は柱間を交叉ヴォールトとする。創建時、身廊は畳敷き、側廊は椅子式とした。左右４本の円柱の方円柱頭には、組紐文様がみられる。アプス側の角柱間には横断アーチがかかり、アプス部のアーチ縁部には、当初金文字のラテン文が記されていた。

正面左右の祭壇、入口脇の聖水盤も大谷石製の造り付けであり、細かな幾何的装飾が施されている。ナルテックス上部はギャラリー、塔屋北側は、階段室及び鐘楼として使われた。

1943年秋、教会名物のフランス製アンジェラスの鐘[42]を供出している。1945年７月12日、空襲による焼夷弾で屋根、内部を被災、1947年４月６日にほぼ旧状どおり復旧された。

1970年大谷石造の祭壇を白大理石の祭壇に変更、1976年祭壇を改修し[43]、1978年には創立90周年を記念してパイプオルガンを設置した。1980


図6-2-29 宇都宮天主公教会創建時北側外観(山根寛吉蔵)

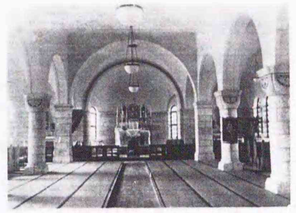


図6-2-30 宇都宮天主公教会創建時内部(吉田博蔵)

40：信者高木省一談。
41：信者小林定安及び高木省一談。
42：高木省一によれば、輸入当時 150円であったという。
43：前掲『栃木の建築文化　カトリック松が峰教会』p.13

年聖堂大屋根を銅板に葺きかえ、翌81年夏、地階中央の木製戸をアルミ製に変更、左右の壁灯を新設し、1986年双塔の八角屋根の修理と塔上部の十字架を塗り替えている。

本教会は、ヒンデルの数多い教会作品の中で、代表格ともいうべきものである。規模の大きさばかりでなく、良い石工に恵まれたことにもよるのだろうが、得意とする装飾デザインが細部に至るまで良く実現されており、教会に関する彼の素養が、遺憾なく発揮された作品であった。

ロマネスク様式の採用も、カディヤック神父の希望ばかりでなく、重厚なモニュメントを造ろうとしたヒンデルにとっては、これまで手掛けた教会建築の集大成として有効な表現法の１つであったと思われる。

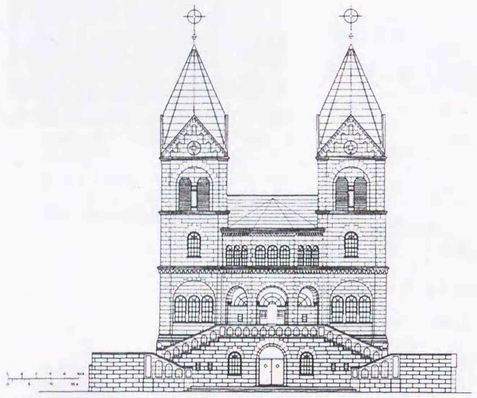


図6-2-31 宇都宮天主公教会正面図(東面)(1/400)

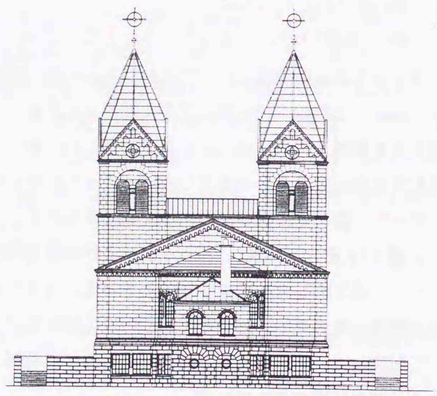


図6-2-32 宇都宮天主公教会背面図(西面)(1/400)

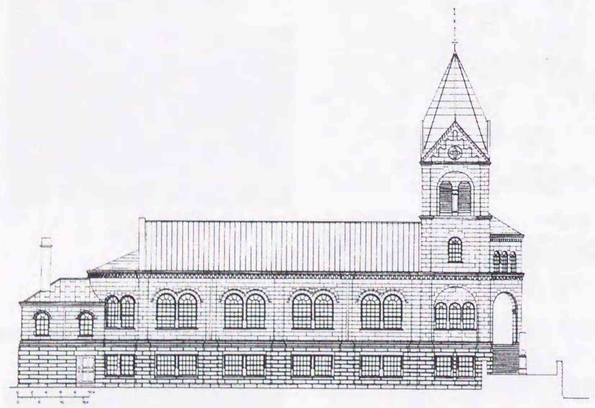
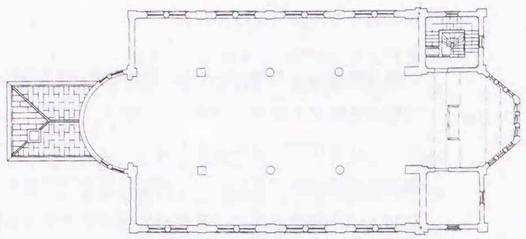
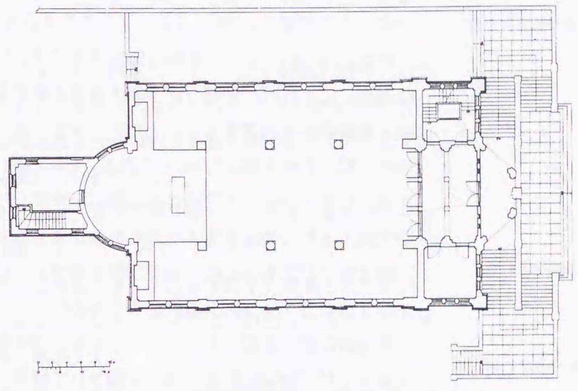


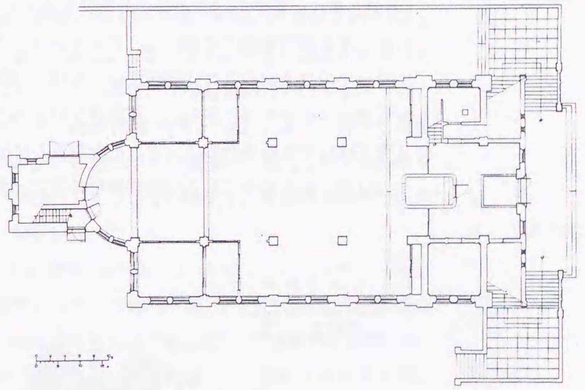
図6-2-33 宇都宮天主公教会側面図(南面)(1/400)



２階



１階



地階

図6-2-34 宇都宮天主公教会平面図(1/400)

6-3　聖母病院

東京都新宿区中落合2-5（旧東京府豊多摩郡落合町大字下落合670、1932年地名変更で東京市淀橋区下落合２丁目670）[44]に現存する聖母病院本館は、1930(昭和５)年５月24日、アレキシス・シャンボン大司教により礎石祝別式があげられた。「病院の敷地の中央に設けられた式場に、二尺四方の花崗岩の真中に直径三寸程の穴を穿った礎石が用意されて前以って大司教閣下始め諸霊父外交団の署名された祝別文を円筒に入れ礎石の中に大司教閣下が納め」（カトリックタイムス1930.6.1)祝別された。

病院に残されている「昭和五年四月拾五日」付け『聖母病院新築工事仕様書』によれば、建築主は「東京府豊多摩郡落合町大字下落合臺〇番地／聖母病院／代表者マリー・センジャン・キリゾストン」、請負は宮内初太郎、請負金額287,000円である。「本工事ハ昭和五年四月弐拾日迄ニ起工シ昭和六年四月弐拾日迄ニ竣工引キ渡シヲナスベキ」とあるが、着工竣工ともに当初予定より遅れたのかもしれない。仕様書に書かれた建築主キリゾストンとは、病院建設を準備していたマリアの宣教師フランシスコ会のクリゾストム管区長である[45]。

聖母病院創立の話がもち上がったのは、1925年医学博士でもある戸塚文卿神父(初代病院長)が司祭に叙階されて帰朝したときであるという[46]。「博愛と奉仕、科学的治療と精神的慰安を病める人々に与える」[47]ことを目的とする病院開設の必要性は、アレキシス・シャンボン大司教を通じてローマのフランシスコ会総長に伝えられ、1928年４月４日付けで病院経営承諾の通知が届けられた。戸塚神父はさっそく準備に着手、同年６月現在地にあたる落合の広大な土地を購入している。

1931年「来たる十二月八日落成挙行の予定」(カトリック新聞1931.11.22)のところ「十五日に日延べ」(同1931.11.29)となり、12月15日祝別ならびに開院式が行われた。同日午後、「同院の屋上、極めて見晴よきバルコニー」(同1932.1.3)で落成の大祝賀会が開かれ、来賓500余名が参集した。創立記念日は、役所の認可がおりた12月21日とされている[48]。建築費は、約330,000円であったという[48]。

当時の辺りの様子を『聖母病院50年のあゆみ』では、「一帯は一面の雑木林と野原であり、両側の高台を除いては病院から下落合駅付近まで家はまばら、目白通りにやっとバスが通っていた程度。近くに西武新宿線が昭和２年に開通していたが、最寄駅の「下落合」は野原の中にポツンと建っていた。」[49]と記述している。

病院は「四千坪の敷地を有し、鉄筋コンクリート六階建八百坪、内外共近代的設備が完全せる(ママ)優秀なるもの」（カトリック新聞1932.1.3)で、屋上からは「帝都の北端より数里四方を眺め得、且富士の英姿を仰ぎ得る眺望絶佳の好位置」（同前)にあった。

紙上で６階建てとあるのは、地下１階、地上３階一部４階部分にさらに塔屋部を含めての階数である。

1933年11月には、第１期増築工事にあたる木造平家病棟と渡り廊下、付属防火壁２ヵ所の工事が着工した。病院所蔵『昭和八年拾壱月国際聖母病院第壱期増築工事仕様書』には、ヒンデル事務所の丸印がおされ、「請負人　東京市淀橋区東大久保弐丁目弐百参拾弐番地　山村力松」の名が見られ、請負金額、病棟と渡り廊下で6,500円、付属防火壁900円とある。1933年11月30日までに起工、1934年２月20日迄に竣工引き渡しすることが記載されている。この工事は、『聖母病院50年のあゆみ』中の「昭和８年11月ベネディクト病棟(結核病棟）完成」にあたる部分と考えられ、仕様書と『あゆみ』に記載の年代の相違は、着工と竣工期の取り違いとも考えられる。「白いしょうしゃな建物で、聖母病院の新しい名所」[50]であったという(図6-3-2)。

1934年４月頃には、「看護婦室第弐期工事」が竣工した。やはり「マックスヒンデル建築事務所」名入りの病院所蔵『昭和八年拾弐月国際聖母病院増築工事仕様書　看護婦室第弐期工事』には、「請負人　山村力松・松本敏之」とあり、1934年１月30日までに起工し、同年４月30日までに竣工引き渡しを行うべきことが記載されている。

さて聖母病院本館に関する設計図書として、次のものが病院に残されている。Ａ～Ｄの分類は、内容によって筆者が便宜上つけたものである。

A1.(各階平面図）東京府下下落合フランシス病院設計図
　弐百分之一(米突）昭和四年拾月
A2 欠
A3.(姿図)(タイトル一部破損）ンシスコ病院設計図
A4 欠
A5.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図



図6-3-1　聖母病院正面外観(『聖母病院50年のあゆみ』)

44：聖母病院50年史編集委員会『聖母病院50年のあゆみ』(1982.12.21) p.14

45：『聖母病院50年のあゆみ』p.21

46：『聖母病院50年のあゆみ』p.20

47：『聖母病院50年のあゆみ』p.14

48：『聖母病院50年のあゆみ』p.16

49：『聖母病院50年のあゆみ』p.17

50：『聖母病院50年のあゆみ』p.19

弐百分之一 伏図 昭和四年十一月
A6.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐百分之一 壁配置図 昭和四年十一月
A7.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
百分之一 基礎伏図 昭和四年十一月
A8.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 構造図 昭和四年十一月
A9.東京府下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 構造図 昭和四年十一月
A10.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 スラブ詳細図 昭和四年十一月
A11.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 スラブ詳細図 昭和四年十一月
A12.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 梁 昭和四年十一月
A13.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 柱 昭和四年十一月
A14.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 柱 昭和四年十一月
A15.東京府下下落合フランシスコ病院新築設計図
弐拾分之一 基礎 昭和四年十一月
B1.東京府下下落合聖母病院新築設計図
百分之壱 平面図(弐階平面図) 昭和五年六月
C1.国際聖母病院各階平面図 縮尺弐百分之壱
La Plan de Construction Principal. Echelle du 1/200
Unite metre. Copie Et Inspection. S. Hayakawa Le 20 Nov. 1934

ほかに、A.P.TETENS, CONSULTING ENGINEER から、ヒンデルあての「ESTEMATE／ DRAWINGS for St.Francis Hospital」(見積書)では、暖房パイプ、蒸気パイプ経路、給湯経路、ラジエーターなどを記載した図面が残されている。

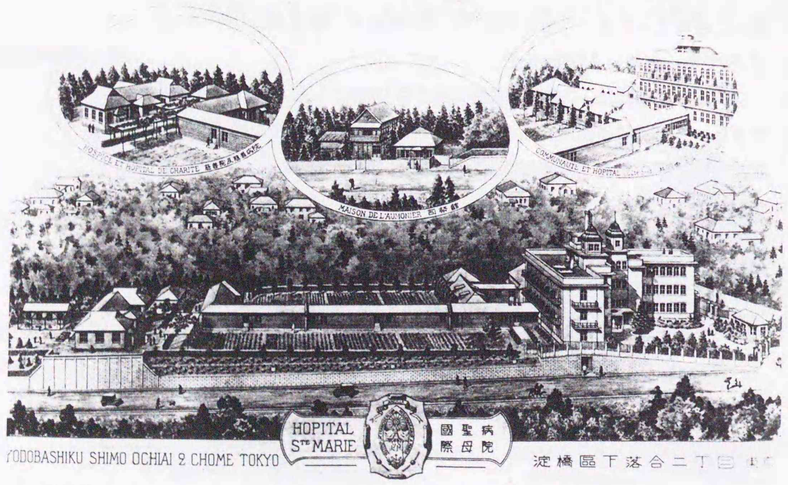


図6-3-2 病院本館とベネディクト病棟(『聖母病院50年のあゆみ』)

D1.BASEMENT PLAN／FRANCES HOSPITAL TOKYO／1:100／JULY 12.1930
／3748
D2.FIRST FLOOR PLAN／FRANCES HOSPITAL TOKYO／1:100／JULY 12.1930
／3749
D3.SECOND FLOOR PLAN／FRANCES HOSPITAL TOKYO／1:100／JULY 12.1930
／3750
D4.THIRD FLOOR PLAN. FOURTH FLOOR PLAN. FIFTH FLOOR PLAN.
／FRANCES HOSPITAL TOKYO／1:100／JULY 12.1930／3751
D5.PIPE CHANNEL FOR HEAING PIPE ON BASEMENT.／ST.FRANCIS HOSPITAL
／CHANNEL DETAIL／1:20, 1:50／July 27.30／3783

C1の平面図は、図面に記載のように1934年11月20日付けで複写されたもので、この資料によって竣工当初の平面を知ることができる。A系およびB系の図面は、柱芯で寸法を記入し、C1では、柱芯寸法と柱芯ー壁端寸法とが混在しているが、複写の際の食違いと考えたい。

B系の図面は1枚しか残されていないが、記載日付は、礎石祝別式の5月24日よりもあとの6月になっており、着工後もぎりぎりまで設計が行われていたことを示している。A系の図面とB、C系の図面とでは、建物規模、部屋配置などの大要はほとんど変わらないが、部分的に実施段階で変更のあったことを知ることができる。

平面図A1(図6-3-3)とC1(図6-3-4)との大きな違いのひとつは、1階のアプローチ部分で、A1では、正門の左右、対称形に「守衛住宅」と「庭師住宅」とが配置されているのが、C1では正門右手「庭師住宅」のかわりに、同じ平面の「門衛住宅」1棟に変更されている点である。

「門衛住宅」は、4×8mの長方形平面の左上端(南東)部を隅切りした形態で、玄関、居間2室、台所で構成され、背面に押入と便所(いずれも1㎡)を突出させた32㎡の小住宅である。

病院本館は逆L字型平面で、南棟、西棟にあたる両翼、幅 8m長さ35m(柱芯)の交差部に階段室、便所、昇降機などを配置している。1階は外来診察室で、便所、浴室、階段室にはさまれた交差部中央に、庇を大きく張出した玄関を配置し、南棟では各室を3m幅廊下の南側に配置し、幅4mの外来待合室(図6-3-6)の左(東)側は応接室、電療光線室、X光線室、控室、診察室、右(西)側は事務室、薬局とし、東西廊下の東端は医員宿直室、西端は非常口としていた。西棟では、廊下の西側に看護婦室、試験室、診察室(4室)、処置室などが並び、北端部は待合室およびバルコニー付きポーチを張出した出入り口である。建築面積は、 649.4㎡とある。

2階は、病室階で、南棟には東から病室[1]～[12](9は欠番)が並び、東端に配置された [2]室には奥行2m幅4mのバルコニーを、また南側病室前にも奥行1.5m 長さ32.5mのバルコニーを付属していた。廊下西端は非常口とし、外側に奥行1.5m幅7mのバルコニーと外階段を付属していた。西棟は北端に奥行2m幅4mのバルコニーをもつ大部屋の病室[13]、ほかに手術室(2室)、消毒室、看護婦室などが並ぶ。床面積は627.44㎡。

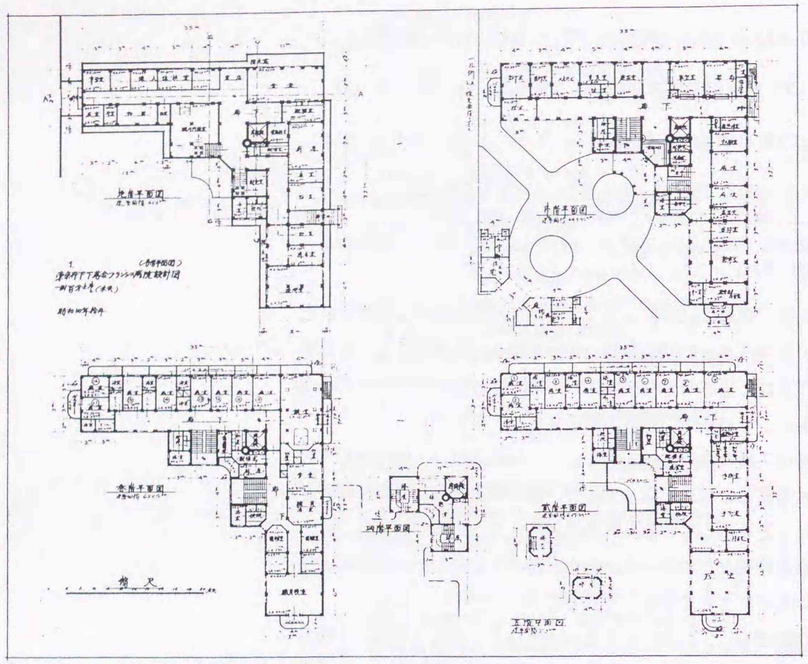


図6-3-3　A1. 1929年設計平面図(聖母病院蔵)

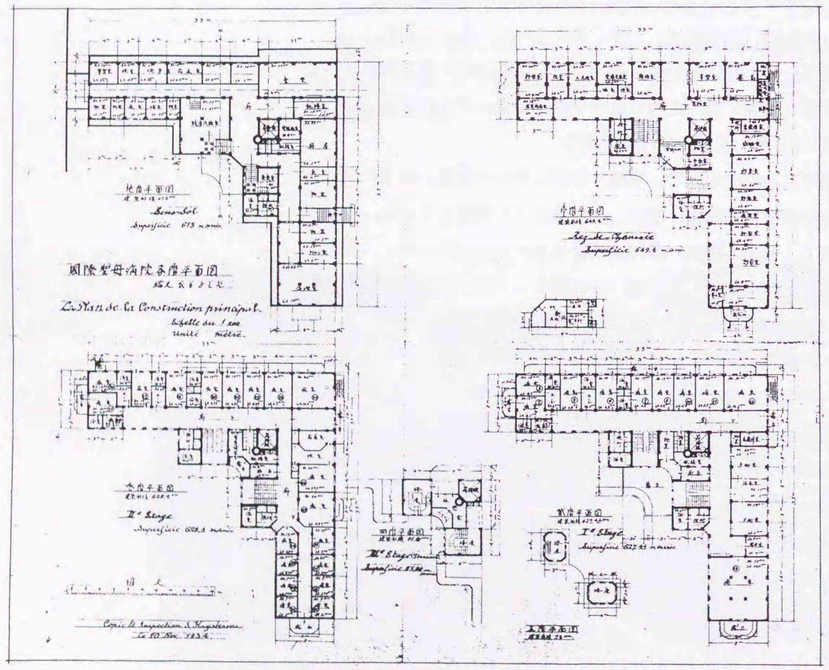


図6-3-4　C1. 1934年複写平面図(聖母病院蔵)

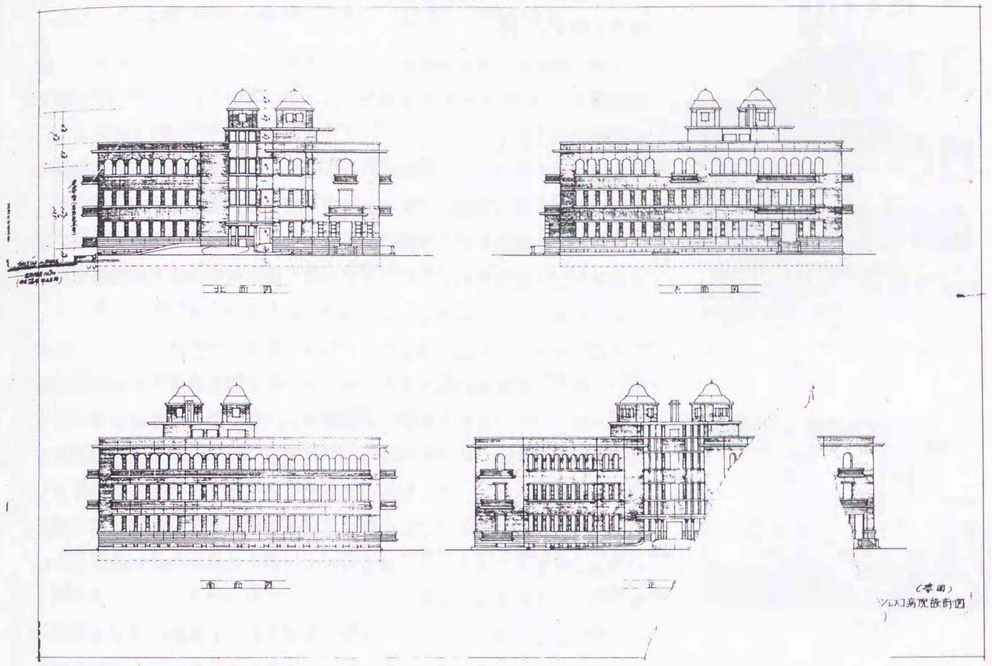


図6-3-5　立面図(聖母病院蔵)

３階も病室階であるが、西棟部分は竣工当初修道院として使われた[50]。この頃の使われ方は、A1資料の３階平面に示されたようなものであったろう。南棟西端に幅6m奥行10mの「講堂」が配置されているが、北側をわずかにふくらませて内陣風にしており、聖堂として使用したものと思われる。西側にバルコニーで外階段と結ぶ非常口が設けられている(図6-3-7)。

続いて北側に「食堂」、「職員居室」、中廊下をはさんで左右に「職員寝室」(4室)、北端に大部屋の「職員寝室」の室名記載があり、修道女たちの居住部分と考えられる。この部分がC1資料では、病室に変更されており、「講堂」は病室[35]と廊下、宿直室、北端大部屋の「職員寝室」は中廊下型の病室４室に変わっている。病院南側に木造平家の修道院が建てられた後の変更である。

３階南棟には、[14]～[23]、[35]の10病室を置き、２階同様東端病室[15]にはバルコニー、講堂改造後の廊下西端は非常口で、前述のバルコニー付き外階段に結ばれていた。西棟は[24]～[34]の10病室とされている。床面積は、628.4㎡とある。

逆Ｌ字の隅角部は、昇降機、地下ボイラー煙突を囲むように、１階では物置、守衛室、玄関、２階では配膳室、物置、厨房、３階では配膳室、厨房、看護婦室、バルコニーとし、北東側正面は各階とも両側の３連窓



図6-3-6　外来待合室(『聖母病院50年のあゆみ』

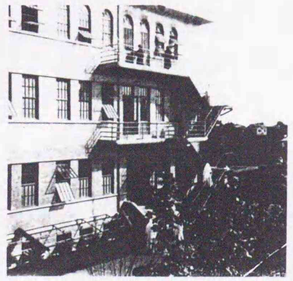


図6-3-7　西棟西面南側のバルコニーと外階段（『聖母病院50年のあゆみ』）

の階段室をゆるやかな曲面壁で結び、さらに両脇を便所、浴室コアの無窓壁で抑えている。

４階は階段室塔屋と休憩室、ベランダを含んで床面積 85.86㎡、５階塔屋部は、4×3ｍの矩計の４隅を 0.5ｍずつ隅切りした８角形の２塔で、床面積23㎡とある。

地階は床面積 613㎡。南棟にあたる部分の南側は、事務室、従業員宿直室、食堂を並べ南側にドライエリア「採光室」をとり、北側は浴室、屍室、暖房汽罐室など、西棟にあたる部分は、厨房、氷室、アイロン室、洗濯室などが収容されていた。「採光室」は、南側のほか、西棟の東西両側、南棟北側、南棟東側非常口部分にとられていた。

外観で特徴的なのは、茶系のスクラッチタイル仕上げの外壁と、粗石張りの地階の組み合わせ、スチールパイプの手摺をめぐらした軽快な扱いのバルコニー、それと階段室塔屋頂部の釣鐘型の屋根であろう。とくに釣鐘型の屋根は、北星学園校舎1928年案（Ｂ案、**5-2-4**参照）の換気塔などにも見られるヒンデル好みのモチーフのひとつといえるものである。

また平面図には、各室ごとに採光面積の記載がある。病室への配慮という点ではあたりまえのことかもしれないが、札幌時代の初期作品から常にヒンデルが意識してきた点でもあった。

窓開口部は、現在アルミサッシュに変更されているが、当初はスチールサッシュで、すべて上下２分した押出し窓であった。１、２階と隅角部の窓の単純な矩形に対し、３階では半円形欄間のアーチ窓がくりかえされ、北面と西面では、柱身にＸ状紐飾りをつけたトスカナ式の付け角柱をみせる。

角柱はすべてのアーチ窓に付くのでなく、西棟東面では、左右２連アーチ窓の真中に２本、中央３連アーチ窓の中央窓両側と左右窓片側という風に立て、両側の対応する部分の柱は省略している。このアーチ窓の単位は、窓台を連続することでも強調されて、バランスを保っている。同様の扱いは南棟北面でもみられ、立面図(図6-3-5)とは異なるが、8ヵ所の窓を２連窓ずつの単位とし、真中に２本の付け角柱を立て両側は省略といった扱いをみせている。

外観の正面性をさりげなく強調する工夫の一つとも思えるが、ロマネスク風の意匠を解体することによって、新たな表現の可能性を求めたヒンデルの試みのひとつといえるかもしれない。

6-4　名古屋市南山中学校校舎（現南山学園本館）

名古屋市内に現存する旧南山中学校校舎は、鉄筋コンクリート（以下ＲＣ）造による上智大学(1932年)、聖母病院(1931年)などの作品と同一線上にあるものと見ることができ、この頃のヒンデルの作風を示す貴重な遺構である。本節では、この中学校校舎とあわせて、本館の東北側、運動場を隔てた低地に建設された中学校付属教師住宅(1934年)がヒンデルの作風に酷似している点にふれた。



図6-4-1　南山中学校校舎南正面(南山学園蔵)



図6-4-2　南山中学校教室前廊下

1926(大正15)年、名古屋教区長にライネルスが就任した。ライネルスは宣教師の陣容を増強し諸教会を新設すると共に、ローマ教皇庁布教聖省の要請に従い名古屋市に男女中学校を設立することを決意し、1928年４月より１年の予定で欧米諸国を巡歴、学園設立募金運動をすすめた。

前年の３月頃から我国では金融恐慌がはじまり、また1929年10月のニューヨーク株式暴落は世界大恐慌に波及し、不況の時代に入りつつある頃である。そのあおりを受けて国内の学校では、中途退学者や授業料滞納者も増加し、廃校に直面するものも少なくなく、文部省では実業学校は別として公私立中学校新設は、容易に許可しない方針をとっていた。

そのような困難な状況の中で1930(昭和５)年10月16日、ライネルスは名古屋市との売買契約により中区広路町字五軒屋（1937年10月昭和区五軒屋に改称)に、6,994坪の学校敷地を手にいれた[51]。

この頃にはヒンデルによる設計もすすんでいたのであろう。ヒンデルはすでに新潟カトリック教会(1927年)、熱田教会(1928年)、岐阜天主公教会(1929年)などを手がけており、ライネルス師の信望も厚かったに違いない。南山学園に遺存する設計図書の中に『名古屋市南山中学校新築設計図　地階平面図　昭和五年十二月』という実施図面前の図面が見られる。中央棟の間口が実施図より３尺広いことや、階段室に便所がないことなど細部で若干異なるが、全体の平面構成は実施図とまったく同じである。

校舎は1931年7月25日建築許可[52]を得て、「設計者 神奈川県横浜市本牧満坂町1851 マックス ヒンデル」[53]「工事監督者 東京府東京市本郷区馬込町923 鈴木熊作」[53]とした。

「建築工事請負　愛知県名古屋市中区新柳町６丁目住友ビル内 大倉土木株式会社名古屋出張所 川辺清之助」[53]により起工された。「昭和六年十月七日」付けで愛知県知事香坂昌康に提出された『水槽便所設置申請書』には本建築の申請書類が添付され、「起工昭和六年七月十三日　竣功昭和六年十二月二十六日」とあるが、『南山学園の歩み』では、竣工1932(昭和７)年２月28日、引渡しは翌日完了としている。

財団法人南山中学校設立と南山中学校設置の許可は、1932年１月21日

51：(学校法人南山学園、1964.11.1) p.12

52：学園史編纂委員松風誠人による。

53：南山学園蔵『水槽便所設置申請書』

付[54]で行われているが、校名「なんざん」は付近の山林地の呼称「みなみやま」からの命名であるという[55]。

ＲＣ造３階建てのこの建物は、南側を正面とし、中央６間巾の玄関部を中心に左右対称のデザインである。玄関部を３尺突出し、１階は４本の円柱の並ぶポーチとしている。正面東隅には、定礎式に祝された「1931」の年号を浮彫りした石板がはめこまれている。

外壁は、「人造石洗出仕上トシ基礎梁下ヨリ扶壁上端迄外壁面全般ニ防水セメントモルヲ以弐回塗厚弐糎以上ニ班直シ下塗ヲ施工シタル後目地付キ石造洗出仕上ゲ」[56]とされている。7.5尺の柱間全面を、１階では腰壁上から庇下をガラス窓とし、２階腰壁上は、ガラス窓ーパネルーガラス窓とする。窓はスチールサッシュで、当初の仕様では5.5尺×2.0尺の回転窓３枚としている(図6-4-6)が、実施段階では写真(図6-4-1)のように上下をはめ殺し、中央を押出し窓としている。各階の窓開口の大きさはすべて同一であるが現状はアルミサッシュ引違い窓とされ、当初の繊細なサッシュ割りは失われている。

地上よりパラペット上端までの高さは、玄関部のみ41.8尺、他は40.5尺である。パラペットは、軒庇(コーニス)上端より4.6尺（玄関部では5.9尺)とし、柱間と同数の五角形の開口を並べる。パラペット部の重量感

54：『南山学園の歩み』p.16

55：『南山学園の歩み』p.20

56：『名古屋南山中学校新築工事設計仕様一覧表』(南山学園蔵)

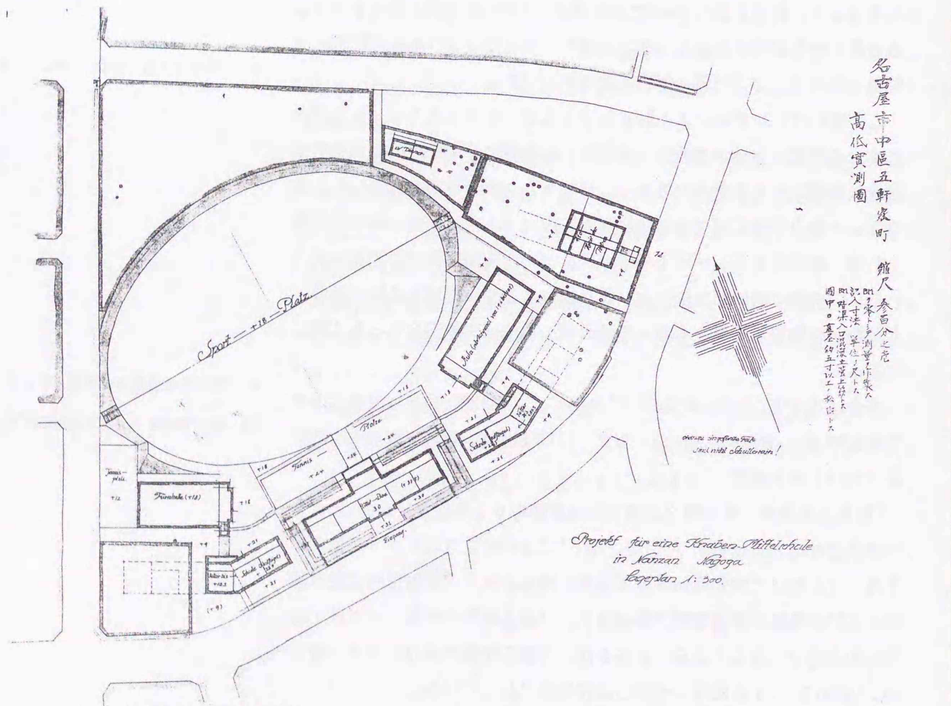


図6-4-3　南山中学校配置図(南山学園蔵)

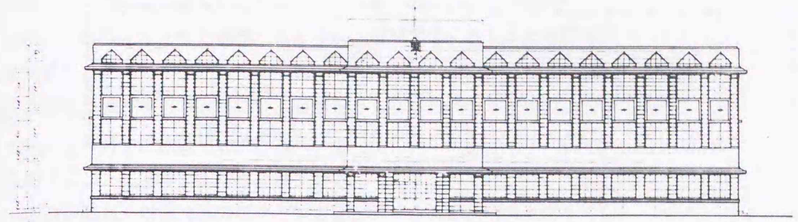


図6-4-4　南山中学校校舎南立面図(南山学園蔵)

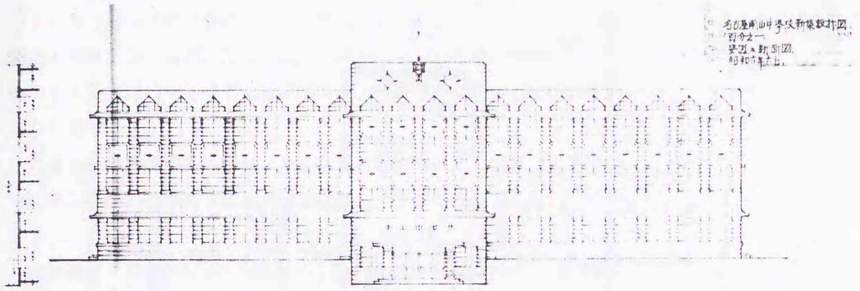


図6-4-5　南山中学校校舎北立面図(南山学園蔵)

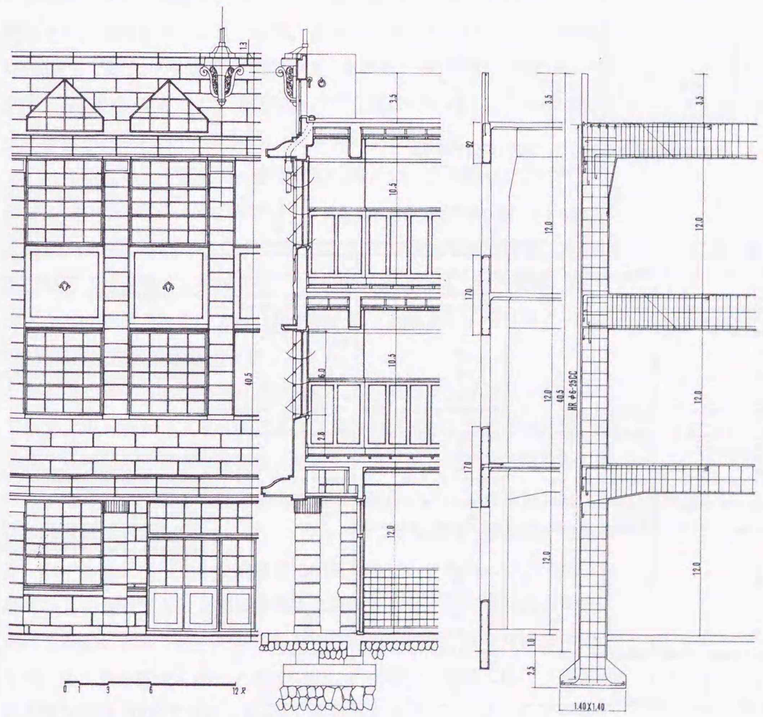


図6-4-6　南山中学校校舎矩計図(南山学園蔵設計図を浄書)

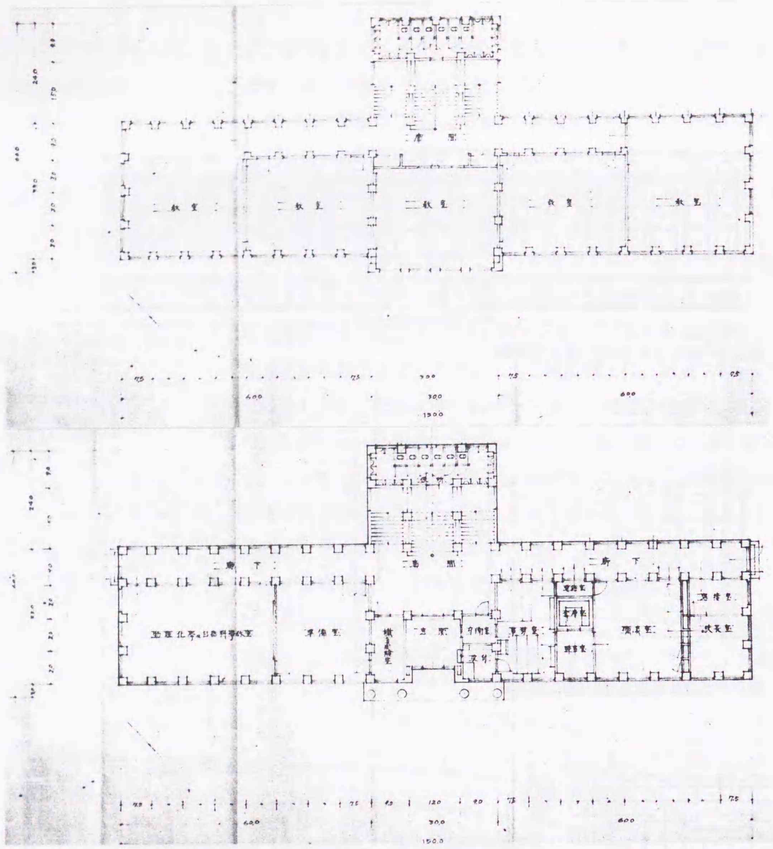


図6-4-7　南山中学校校舎平面図(1、2階)(南山学園蔵)

表6-4-1　南山中学校校舎内部仕様表

室名	天井	内壁	内壁腰廻り	床	取付造作物
地階					
階段下玄関	漆喰塗ノ上ニカゼイン塗仕上げ	漆喰塗ノ上ニカゼイン塗仕上げ	漆喰塗ノ上ニカゼイン塗仕上げ	目地付キセメントモルタル	
一階					
物理化学及自然科学教室	木摺下地ニ小牛ノ毛長 500粍以上縦横 250粍間千鳥ニ壁面一平方米ニツキ70瓦斯鉛縁金釘ニテ打付漆喰塗仕上ゲトス　カゼイン塗	天井ニ同ジ	腰廻り高サ四尺五寸檜羽目張リ 鉛板ベニヤ厚二分板嵌込ムモノトス	檜二重床板張リ下地根太ノ上ニ米松叶板張りとし厚7分中1.6寸ノ檜板実矧張リトスコンクリート上端及米松板上ニ夫々鍮箔紙敷込ミトス	長サ15尺口高サ四尺ノ黒板一ケ
準備室	同上	同上	同上	同上	長サ4.5尺巾2.5尺高サ 2尺ノコンクリート穴蔵ヲ造リ木製蓋板ヲ取付ク
職員実験室	同上	同上	同上	同上	煙瓦斯充満ヲ避ケるためにベントパイプ取付ケ
玄関	同上	同上	同上	タイル張リ	
ポーチ	人造石洗出シ仕上ゲ	人造石洗出シ仕上ゲ	外装ニ同ジ人造石洗出シ仕上ゲ	タイル張リトス　縁石は花崗石張リトス	
受付	漆喰塗仕上ゲ カゼイン塗リ	漆喰塗仕上ゲ カゼイン塗リ	漆喰塗仕上ゲ カゼイン塗リ	檜一重床板張リ(下地上ニ同ジ)	
守衛室	同上	同上	同上	同上	
事務室	同上	同上	同上	同上	テーブル 手摺 カウンター 手洗い一ケ
幹事室	同上	同上	同上	同上	
金庫室	アスベストモルタル塗	アスベストモルタル塗	アスベストモルタル塗	磁器製タイル張リ	金庫室扉ハ特号開閉器付防火式鉄扉ニテ「ダブルパネル」アイベスト充填モノトス
電話室	インシュライト張リ押縁止メペンキ塗	インシュライト張リ押縁止メペンキ塗	インシュライト張リ押縁止メペンキ塗	檜二重床板張リ(下地上ニ同ジ)ンキ塗	電話機押入パイプ取付扉ニハインシュライト張リ硝子ハ二重硝子トス
職員室	漆喰塗上ニカゼイン仕上ゲ	漆喰塗上ニカゼイン仕上ゲ	内法見廻シ高サハ横鎖板張リトス	同上	手洗一個押入四高サハ天井見廻シ迄トシ内法見廻以下二個ノ洋服帽子掛二個書棚押入一個高サ内法迄トシ上部帽子掛下部二洋服掛手洗イヲ設ク
校長室	同上	同上	同上	同上	
応接室	同上	同上	同上	同上	
廊下	同上	同上	腰廻り高さ四尺五寸迄檜腰羽目張リ	同上	
広間	同上	同上	同上	同上	
階段室	同上	同上	同上	同上	
二階、三階					
教室	竿縁天井トシ格間ハベニヤ板張リトス	漆喰塗リカゼイン塗リ	腰廻り高サ四尺五寸迄檜腰羽目張リ	檜二重床板張リ	
廊下	同上	同上	同上	同上	
階段室	同上	同上	同上	同上	
押入	竿縁天井トス	板張リ	同上	同上	-

(『名古屋南山中学校新築工事設計仕様一覧表』より作成)

を軽減するためのデザインであろうか。実際には、この開口の 1.4尺分は屋上床スラブでふさがれ、パラペットの実質高は3.2尺(玄関部4.5尺)となっている。水平性を強調するために、階高を低くみせるための扱いであろう。

玄関部正面パラペット部には、装飾をあしらったポール支持台がレリーフとして付く。妻面は、８尺間３ベイ、９尺間１ベイとし、９尺間部を廊下とし、１階は出入口とされている。

北側背面も、正面同様のデザインでまとめているが、中央６間巾で１階床面より６尺、半階分程スキップさせ、階段室下に玄関をつける。ペントハウス部分にもパラペットと同意匠の開口が並び、その上階段室踊場上の物置にあたる部分には、ヒンデルが住宅などの屋根裏部に好んで使用する菱型開口をあけている。ペントハウス中央に正面と同様のリレーフを付ける。

全体として装飾は抑えられ、厳格な左右対称の中で１階窓上と３階窓上に庇をまわして階高を低くみせるなど、水平性の強調されたデザインとされている。

床面積は、地下20坪(66.12㎡)、1、2、3階160坪(528.96㎡)、屋階27.5坪(90.915㎡)、延べ527.5坪(685.995㎡)である。

南側ポーチから玄関を入ると、正面は「広間」「階段室」である。階段室下は、北側玄関として下駄箱、便所が付設されていた。１階東側は、「守衛室」「受付」「事務室」「電話室」「金庫室」「幹事室」「職員室」「校長室」「応接室」などとし、事務管理部門をまとめている。西側は「物理化学及自然科学教室」「準備室」「職員実験室」が並ぶ。

２、３階は同一平面形で、教室(10室)群とし、両端教室は27.5坪(90.92㎡)、他は20坪(66.12㎡)である。

各室の内部仕様については、表6-4-1 に記した。窓敷居は檜、入口建具(扉厚1.5寸鏡板ベニヤ板３分)、入口敷居、階段材、屋内額縁、廊下、巾木などは楢材である。２、３階では、廊下と教室境の窓は高さ 4.5尺(床上端より)まで曇り硝子としている。

屋上132.5坪 (438.045㎡)は陸屋根とし、「鉄筋コンクリート造床版上アスファルト防水ヲ（日出印アスファルトルーフイング弐号品二枚、壱号品二枚ヲ指示、順序ニ継目重ネ拾糎ニアスファルトヲ以テ四枚貼り合セ施工スベシ）扶壁上端迄立チ上ゲ施工シ表面ハアスファルトヲ以テ貼付ケ二重詰メ」[58]とされている。ペントハウスの踊場上は「物置」であるが、わずかなスペースも収納空間に利用するヒンデルらしい工夫がうかがえる。　便所は２、３階段室踊場に設置するが、名古屋市内の学校における最初の水洗式便所であったという。用水は屋上タンクに汲み上げられ、そこから校内に供給されていた。浄化槽の設計施工は、「東京都日本橋区箱崎地町4丁目2 合資会社 河村信之商店」[53]が担当している。

便器は東洋陶器会社硬質陶器１等品を使用し、大便器はフラッシュバルブ方式とする。小便器には、６ガロン入木製内部合板張シスターンタンクをつけ、自動サイフォン装置により、約５分間毎に自動洗浄するなどの方式が採用されていた。

ライネルスも居住した中学校付属教師住宅は、ピオ11世館と呼ばれた木造洋瓦葺きの３階建て建築で、1933(昭和8)年3月15日の理事会で、予算1,100円で建設を可決し、5月25日付で建築許可を受けた[57]。工事途中で、8,973坪の増築申請をしており、竣工予定は1934(昭和9)年３月10日であったが、前年12月には完成し、12月4日建築認可がおりている[58]。

申請書には、「設計者 愛知県名古屋市中区広路町日名山五十三番地 鈴木熊作 工事監督 名古屋市南区春敲町三丁目十二番地 尾鷲政治 請負 直営工事」[59]と記載されヒンデルの名は見られない。しかし、鈴木熊作はヒンデル事務所の所員であった人物であり、本館工事においては工事監督を務めた者である。しかも階段室踊場に便所をとる方法や屋根端部の反りなどのヒンデルらしい作風が随所にみられる。また本館に続いて、教室棟、体育館、大講堂などを建てる全体計画(図6-4-3、-9) が残っており、ヒンデルの基本計画を受けて鈴木が実施設計したと考えたい。

外観は1934年撮影の校内写真に一部撮影されているが、札幌における一連の住宅デザインに酷似している。

延床面積149.816坪(495.293㎡)、各階床面積地下9,833坪(32.508㎡)、１階58.44坪(193.203㎡)、２階47.193坪(156.02㎡)(屋根裏7.6坪)、３階26.75坪(88.436㎡)である。

南山学園所蔵図面によれば、平面は玄関を入ると正面が階段室である。玄関ホールの左側付属屋は「食堂」「台所」で、屋根裏は「物置」。東側南面する室は、各階とも「居間」や「寝室」としている。１階北側は「応接室」「予備室」とベイウィンドウをもつ「図書室」である。２階北側は「礼拝堂」とし、東側色ガラスをはめたベイウィンドウ側を祭壇とし、一般信者の出入も許された学園付属聖堂の役割も果していた(図6-4-8)。

1947年12月14日、２階、屋階を焼失、その後２階建てに大改築[57]されて高等学校女子部教室や大学付属人類学科教室などに利用されたが、1994年から空家となっている。

58：『南山学園の歩み』pp.32～34

59：南山学園蔵『中学校附属教師建物申請書』一式書類

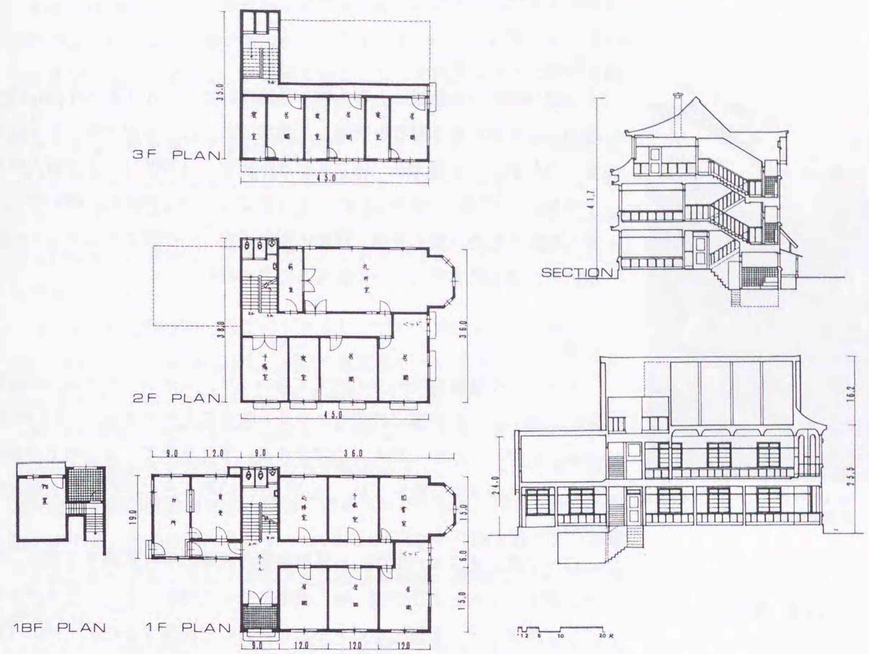


図6-4-8　中学校付属教師住宅平面・断面図(南山学園蔵設計図を浄書)

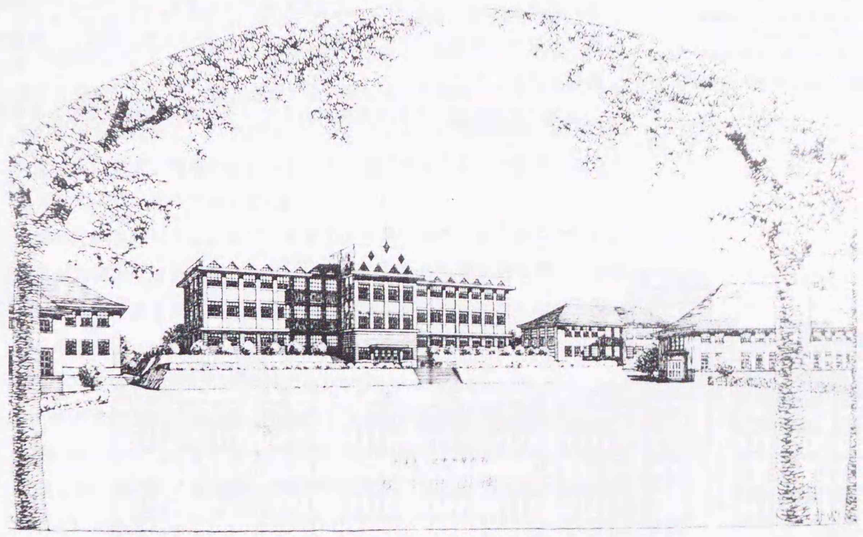


図6-4-9　南山中学校全体計画透視図(『南山学園の歩み』)

6-5　上智大学校舎(現上智大学１号館)

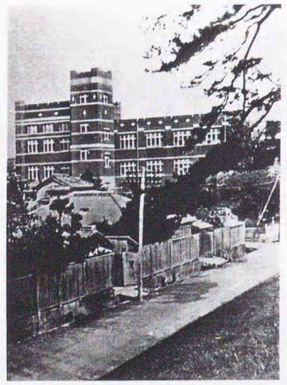


図6-5-1　1914年校舎(『上智大学創立貳拾五年記念』)

1932(昭和７)年落成の上智大学１号館は、ヒンデルがまだ札幌に滞在中の1927年から基本設計を開始した建物であった。本節では、まず同大学の沿革を、『上智大學　創立貳拾五年記念』(1938年)、『上智大学五十年史』(1963年)を参考に1963年ころまでについて概説し、続いてヒンデル設計の校舎（現１号館）建物の設計過程、学校側とヒンデルとの契約内容、建築概要等について論考しておきたい。

沿革

カトリック修道会の一つイエズス会のフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸して、わが国に初めてキリスト教を伝えたのは1549(天文18)年であったが、それから数えて 364年の長い年月を経て、はじめて日本にカトリックの大学が誕生した。1913(大正２)年４月に開校した上智大学である。

ローマ教皇ピウス10世は、日露戦争後の日本の平和克服を慶賀し、同時に戦争中日本および中国、特に戦場となった満州において日本がカトリック教会をよく保護してくれたことに対して感謝するため、1905（明治38）年10月、日本との友好関係の最も厚いアメリカのオコネル司教を特使として日本に派遣した。同司教はアメリカのカトリックを代表する有力者であり、のちボストン大司教枢機卿を務めた人物である。司教は同月31日から帝国ホテルに投宿し、11月10日明治天皇に拝謁し、教皇の親書を奉呈した[59]。

当時の有識者は、これを契機にカトリックの高等教育機関設立を希望し、また日刊紙『日本』の社説で主筆三宅雄二郎博士が掲げた使節歓迎の辞のように、日本布教を有力ならしめんとするなら、高等教育を目的とする学校を設立することが必要であることを力説するなどの動きもあった[60]。

59：『上智大学五十年史』(1963.11.1) p.29

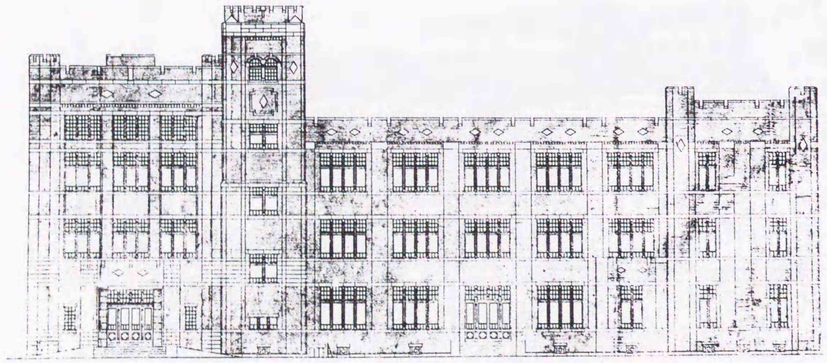


図6-5-2　ヤン・レツェル建築事務所設計1914年校舎立面図(『建築世界』第8巻第1号口絵)

オコネル使節を通じてその進言を受け入れた教皇は、男子の高等教育のため早速各国のイエズス会員の協力を仰ぎ、1908年最初の教授団一行ドイツ人ダールマン博士（Joseph Dahlmann)、フランス人ブーシェ教授（Henri Boucher)、アメリカ人ロックリフ博士（James Rockliff)らが来日した。

1910年には初代学長となる前ファルケンブルク大学哲学教授ホフマン博士(Hermann Hoffmann)や、同じく創立者の一人アメリカ人ゲッテルマン博士(Victor Gettelmann)らも来日している[61]。

翌1911(明治44)年に大学の母体となる財団法人上智学院が設立され、1912年３月麹町区紀尾井町現在の大学敷地が購入された。元陸軍大臣高島鞆之助子爵邸敷地のほか、隣接の陸軍大将大島久直子爵邸、赤星鉄馬邸、田中武兵衛邸敷地をあわせ、4,400坪(14,520㎡）の土地と、２階建て日本家屋や新築したばかりの大島久直子爵邸など数棟を含め、売買価格は43万円であったという[62]。

1913年３月専門学校令による上智大学の設立が認可され、同年４月大島旧邸を仮校舎に授業が開始された。

最初の新校舎はヤン・レツェル[63]建築事務所の設計監督[64]で、1913年12月8日定礎式をあげ翌1914年秋に竣工した。建築面積232坪(765.6㎡)、延べ面積750坪(2,475㎡)の木骨煉瓦造３階建ての建物で、教室数12、大講堂２を擁していた。屋上庭園をもち階段室塔を強調したルネサンス様式の堂々たる校舎で、パラペットのバトルメントが城塞風の印象を与え、外壁の赤い煉瓦と階層毎に走らせた白い横帯や大きな白い窓枠のコントラストが美しい建物であった(図6-5-1、-2)。

当時の四谷駅付近は、まだ平家建ての民家が多く、また濠や土手の松の木が特徴的な地区であっただけに、この見なれぬ煉瓦造校舎の出現は、様々な景観論議を呼んだという。永井荷風などは、せっかくの松と濠の美しさを汚すと非難したし、戯曲作家鈴木泉太郎は、むしろ古い美を一層美しくすると擁護している[65]。

この校舎は、1923(大正12)年９月１日の関東大震災で被害をこうむり、倒壊寸前の危険な状態となったため、２、３階の全部を取壊し、新たに木造２階を増築して修繕補強の手を加えられ、仮校舎として再使用されることになった。

1927年新私立大学令(1918年)による規程供託金を文部省に納めることが出来、翌1928年大学令による上智大学として認可された。その供託金は、ドイツカトリック信者の犠牲的な努力により集められたものである。

60：『上智大學 創立貳拾五年記念』(1938.11.1) p.3

61：『上智大學　創立貳拾五年記念』p.4

62：1908(明治41)年ごろ来日し、デ・ラランデの配下として働く。ラランデ没後は、その後を受けて仕事を続けた。(坂本勝比古『明治の異人館』)

63：『建築世界 第8巻』第1、2、3号(1914)

64：『上智大学五十年史』p.50

このころ大学当局は大学移転問題を考えており、当時のカトリックタイムス紙によれば、「小田原電鉄沿線豊多摩郡千歳村(現世田谷区千歳船橋)に一万五千坪の広大な」[65]土地買収を終えて、1928年中には「近世独乙諸大学建築の粋を採った鉄筋コンクリート三階建の校舎」[65]を建築し、翌1929年中には移転する予定であった。

65：1928年６月11日付『カトリックタイムス』記事



図6-4-3　1932年新校舎

結局大学移転は行われず、ヒンデル設計による鉄筋コンクリート４階建ての新校舎(図6-5-3)は、1930(昭和5)年に起工し1932年６月落成、同月14日落成式を挙げ、翌15日から19日にかけて、記念講演会や学生による英語劇、ドイツ語劇、麹町子供会のための集いや運動会など多彩な行事で落成祝賀祭が続けられた。

1945年４月13、14日の四谷、麹町方面の空襲は上智大学にも被害をもたらし、新校舎ができるまで仮校舎として使用された木造煉瓦造２階建て482坪の旧校舎は全焼したが、1,366坪の新校舎は講堂と2教室の計186坪の被災にとどまった[66]。焼失を免れた新校舎には、同月23日教育総監部が移転してきたが8月21日には転出している。

66：『上智大学資料集　第3集(1928～1948)』(1985.3.30)

戦後の大学の再建はめざましく、1946年２月初めには朝霞米軍キャンプから、終戦まで日本旧陸軍予科士官学校兵舎であった木造２階建て82坪1棟が移築[67]され、また翌1947年には新校舎北側の三角形の土地7,300余坪(約24,000㎡)が所有者板谷商事社長板谷宮吉から購入[68]され、現在の上智大学敷地の概形がほぼ出来上がった。

67：『上智大学資料集　第3集(1928～1948)』p.193
68：『上智大学五十年史』p.158

新校地には、1948年に学生寮ボッシュ・タウンが誕生した。米軍払下げのグリーンのカマボコ兵舎６棟を購入し、１棟を集会所、残りを学生寮にあてたもので、舎監フランツ・ボッシュにちなんでの愛称である。また1949年４月17日には聖イグナチオ教会が献堂式を挙げ、1951年１月には図書館および大学院校舎が着工、翌年７月完成、９月22日に鉄筋コンクリート造３階建て建物の落成式がおこなわれた。

いずれも新校舎を監督したグロッパー修士の設計で、戦後の大学施設建設の出発点ともなる建築であった。

続いて1956(昭和31)年２月学生寮併設の上智会館、1957年５月には法学部校舎、1962年４月ドイツ・クルップ社寄付の実験工場、同年９月理工学部本校舎などが建設され、創立50周年を迎えることになるのである。

現１号館

上智大学には42葉の断片的な設計図類が保管されており、うち３葉には「設計　マックス．ヒンデル　昭和二年九月於札幌市」の署名があって、新校舎（現１号館）の基本設計がヒンデル在札幌時代から開始されていたことを示している。

遺された設計図類は以下のもので、設計図書の年代順に筆者が１～９系に分け、便宜上整理番号をつけている。

1-1.(Blatt7)『上智大学校舎新築設計図　在東京　西正面』
設計 マックス.ヒンデル. 昭和二年九月於札幌市
[PROJEKT FÜR DIE NEUBAUTEN DER UNIVERSITÄT DER PATRES V.D.S.J. IN TOKIO. ANSICHT DER WESTSEITE(SCHULFRONT)]SEPT 1927 MAX HINDER ARCHITEKT. 1:200(図6-5-4)
1-2.(Blatt8)『東京　上智大学校舎新築設計図　並及三階平面』
設計 マックス.ヒンデル. 昭和二年九月於札幌市
[PROJEKT DER NEUBAUTEN FÜR DIE UNIVERSITÄT D. PATRES V.D.S.J. IN TOKIO. GRUNDRISS DES OBERSTEN GESCHOSSES(BIBLIOTHEK)] ARCHT MAX HINDER. SEPT.1927 1:200
1-3.(Blatt9)『東京　上智大学校舎新築設計図　家根伏』
設計 マックス.ヒンデル. 昭和二年九月於札幌市
[PROJEKT DER NEUBAUTEN FÜR DIE UNIVERSITÄT D. PATRES V.D.S.J. IN TOKIO. GRUNDRISS DES DACHES u. SCHNITT A-B.] ARCHT MAX HINDER. SEPT.1927 1:200(図6-5-5)
2-1.(Beil. 4) [Jochi-Daigaku. Tokio KELLER. 1:600]
MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA.P.O.BOX 90.
2-2.(Beil. 5) [Parterre. 1:600]
MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA.P.O.BOX 90.(図6-5-6)
2-3.(Beil. 6) [ⅠObergeschoss. ⅡObergeschoss.] MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA.P.O.BOX 90.
2-4.(Beil. 7) [FACADENSKIZZE DER SÜDFRONT.　SCHNITT SKIZZE]
MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA.P.O.BOX 90.(図6-5-7)
3-1.(Beil. 8) [Parterre. 1:600] MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA. P.O.BOX 90.(図6-5-8)
3-2.(Beil. 9) [Obergeschoss. 1:600] MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA.P.O.BOX 90.
3-3.(Beil.10) [Keller. 3.Stock] MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA. P.O.BOX 90.
4-1.(Beil.11) [JOCHI DAIGAKU,TOKYO.　PROJEKT-SKIZZE ＢＮ.2.] YOKOHAMA.MÄRZ 1928. Max Hinder.Archt.(図6-5-9)
5-1.(Beil.12) [JOCHI DAIGAKU TOKYO TIEFPARTERRE 1:500] (図6-5-10)
5-2.(Beil.13) [JOCHI DAIGAKU TOKYO HOCHPARTERRE 1:500]
5-3.(Beil.14) [JOCHI DAIGAKU TOKYO 1.STOCK & ZWISCHENSTOCK 1:500]
5-4.(Beil.15) [JOCHI DAIGAKU TOKYO (2～5STOCK) 1:500]
6-1.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　GRUNDRISS DES TIEFP -ARTERRES.] 1:200
6-2.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　GRUNDRISS DERS HOCH -PARTERRES.] 1:200 (図6-5-11)
6-3.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　GRUNDRISS DES ERSTEN STOCKES.] 1:200
6-4.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　GRUNDRISS DES ZWEITEN STOCKES.] 1:200
6-5.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　ANSICHT VON NORDEN.] 1:200
6-6.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　ANSICHT VON SÜDEN.] 1:200 (図6-5-12)
6-7.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　ANSICHT VON WESTEN.] 1:200
6-8.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama.　LANGSSCHNITT.] 1:100
6-9.[NEUBAUTEN DER JOCHI DAIGAKU TOKYO. PROJEKT IN ARMIERTEM BETON. -Architekt Max Hinder,-Yokohama. QUERSCHNITT MIT HOFANSI -CHT.] 1:100 (図6-5-13)
7-1.(BLATT.2)[].D.　KOJIMACHI UNIVERSITÄTS-NEUBAU.S.J.　GRUNDRISS DES UNTERGESCHOSSES.　1:200] M.Hinder Aug.1929
7-2.(BLATT.4)[].D. KOJIMACHI UNIVERSITÄTS-NEUBAU.S.J.　GRUNDRISS

DES ERSTEN OBERGESCHOSSES. 1:200] M.Hinder Aug.1929
7-3.(BLATT.5)[J.D. KOJIMACHI UNIVERSITÄTS-NEUBAU.S.J. GRUNDRISS DES ZWEITEN OBERGESCHOSSES. 1:200] M.Hinder Aug.1929
7-4.(BLATT.6)[J.D. KOJIMACHI UNIVERSITÄTS-NEUBAU.S.J. GRUNDRISS DES DRITTEN OBERGESCHOSSES. 1:200] M.Hinder Aug.1929
7-5.[J.D. KOJIMACHI UNIVERSITÄTS-NEUBAU.S.J. LÄNGERSCHNITT MIT QUERSCHNITT D.AULA(BÜHNE.) 1:200] M.Hinder Aug.1929
7-6.[JOCHI DAIGAKU／TOKYO／PERSPECTIVE. ARCH.M.HINDER／YOKOHAMA] (図6-5-14)
8-1.『上智大學校舎新築設計図　縮尺百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所　地下室平面図』
8-2.『上智大學校舎新築設計図　縮尺百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所　壱階平面図』(図6-5-15)
8-3.『上智大學校舎新築設計図　縮尺百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所　弐階平面図』(図6-5-16)
8-4.『上智大學校舎新築設計図　縮尺百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所　参階平面図』(図6-5-17)
8-5.『上智大學校舎新築設計図　縮尺百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所　四階平面図』(図6-5-18)
8-6.『上智大學校舎新築設計図　縮尺百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所　屋上平面図』
8-7.『上智大學校敷地内各種付帯設備配管及配線図　縮尺弐百分之一　マックス．ヒンデル建築事務所』
8-8.『右側面図　左側面図　背面図』(図6-5-19)
9-1.『３．東京上智大學校々舎増築工事設計図　弐百分之一　姿図　昭和五年一月　正面図　背面図』
9-2.『上智大學校々舎増築工事設計図　百分之一　姿図　昭和五年四月』
9-3.『東京上智大學校々舎増築設計図　貳拾分之一　表玄関詳細図　昭和五年九月』
9-4.『東京上智大學校々舎新築設計図　貳拾分之一　正面旗台詳細図　昭和六年弐月』

１系案

ヒンデルが横浜に移転するま近かの「昭和二年九月」のサインのある基本設計は、札幌の事務所で設計された作品のほぼ最後を飾るものと言うことができる。主棟中央にややスケールオーバーとも思えるような八角塔と玉ねぎ形ドームを立ち上げた木造校舎のその意匠は、札幌の藤学園校舎や北星学園校舎の基本設計に見られる小さな塔とは比べ物にならぬくらい大きなもので、大学校舎のモニュメンタリティーの表現として、

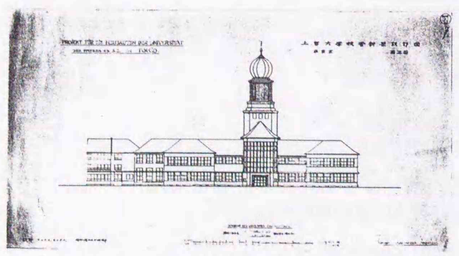


図6-5-4　1系案正面図(資料1-1)(上智大学蔵)

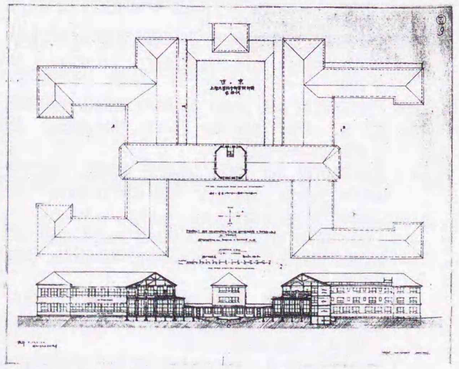


図6-5-5　1系案屋根伏断面図(資料1-3)(上智大学蔵)

意識的に採用したものであろう。

平面構成は、保存史料では分からないが、東西に２つの逆コ字型の２階建て校舎を置き、２校舎のブロックを東西に長い図書室棟が結んでいるようである。この図書室棟中央に、前述の塔屋が建つ計画である。西正面図(図6-5-4)では、中央やや南寄りに学生用玄関を1階に持つ図書室棟の外観をみせ、背後には尖塔までの高さ129尺の塔屋が描かれている。校舎棟の裾広がりの寄棟屋根や、１、２階腰部の裾広がりのデザインなど、ヒンデルが得意とした手法も展開されている。

東棟北側では主梁間45尺のうち東側18尺を３層として、階高10、9、9尺の廊下と教室、西側27尺は１階を天井高15尺のホール、２階は礼拝堂(アーチ天井の頂上まで14尺)とする予定であった。図書室棟北側の中庭にはコロネードが廻り、さらに北側校舎棟が連絡している。

図書室棟北側で校舎の西、東棟を切断した断面図（図6-5-5)で、わずかに全体の空間構成を知ることができる。

２つ目の案は横浜事務所で制作されたもので、鉄筋コンクリート造の計画である。２系のスケッチから、３系、４－１案を経て、５系の平面スケッチのあと、セセッション風の球体を掲げた塔屋を持つ左右対称の６系の図面が提案されたが、最終的には規模が半分程度となり、外観を特徴づける中央塔屋や球体シンボル、フレアードルーフなどをすべて取り払った陸屋根の極めてシャープなデザインに収斂し、７系案以下でほぼ実施図に結び付いていくことになる。

２系案

２系のスケッチは、「MAX HINDER-ARCHITEKT. YOKOHAMA.P.O.BOX 90. TELEGR. ADRESSE: HINDER YOKOHAMA.」と事務所名入りのA-４サイズ程の用箋に、1：600の縮尺でフリーハンドで書かれたものである。随所に室名や空間構成がドイツ語で書き込まれ、「1KEN＝6FUß, 20KEN＝36.36 m」など尺寸法の書き込みなどもみられる。立、断面図には、中央に大きなドームが計画されている(図6-5-7)。

平面は、南北で高低差のある土地の南側に中庭を囲むようにオープンアーケードOFFENE GÄNGEを周し、講堂(西側)と聖堂KIRCHE(東側)を配し、北側の高い敷地の方には、南北軸と45度傾けた軸線に乗せたコ字型の２棟を東西に配置している。

１階(Parterre、以下ドイツ語は図面に記載のもの)は、南側の講堂と聖堂の２層レベルと通りを挟んで連絡し、北側西棟が校舎、東棟が宿舎(修院)で、この構成は６系案まで踏襲されることになる。校舎は、玄関を入って、西に２教室、学生控室、東に談話室、教官室などを並べ、西棟の北翼部を寄宿舎としている。将来はさらに北側に同じ軸線システムで寄宿舎の増築が予定されていたらしく、寄宿舎増築後は学生室に変更

との記入もある。東側宿舎棟には、食堂、居間、談話室等がV字型に並び、北側翼部に将来図書館に転用される２教室、仮遊技室が配置され、必要に応じて増築する旨のことが記載されている。

２階(ⅠObergeschoss)は、８教室をL型に並べ、北側翼は１階同様寄宿舎(将来学生室)棟である。宿舎棟はL型に16の小室を並べ、さらに上階中３階にも同様の小室を重ね、北側翼の図書館棟とでコ字型に構成している。

３階(ⅡObergeschoss)も西側に８教室をL型に並べ、北側の寄宿舎棟には８室を背中合わせに並べた16小室を収容し、将来３教室に変更予定の部分として予定されている。

校舎棟の地階(Keller)には大食堂、厨房、ボイラー室など、宿舎棟には台所、ワイン庫、貯蔵庫などを予定し、前者は大講堂の、後者は会堂の周りを巡るアーケードと連絡していた。大講堂、会堂棟の東西には運動場(SPIELPLATZ)、南側には大運動場(GROSSER SPIELPLATZ)を予定していた。

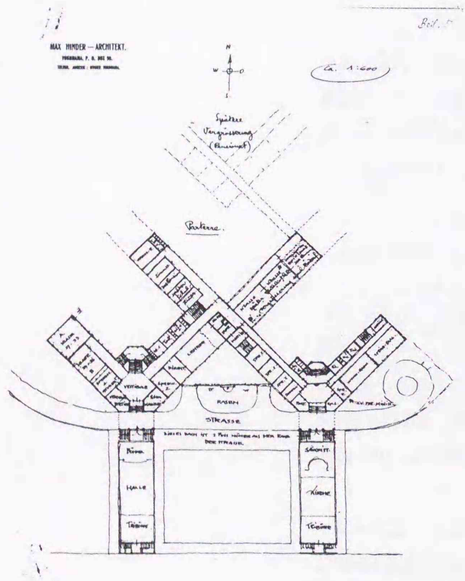


図6-5-6　2系案1階平面スケッチ(資料2-2)(上智大学蔵)

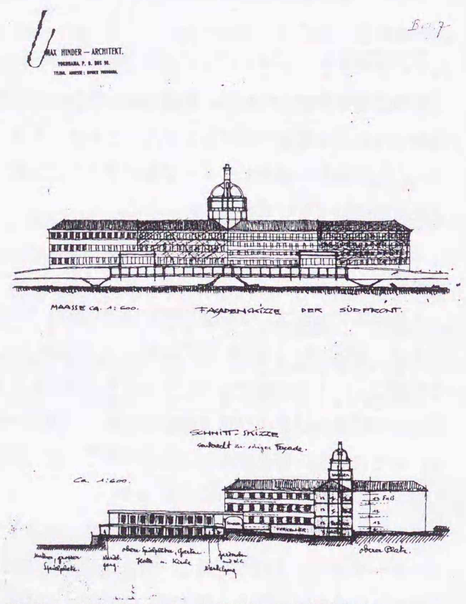


図6-5-7　2系案立面スケッチ(資料2-4)(上智大学蔵)

３系案

３系のスケッチは、２系案の北側棟の軸線を南北軸に合わせたもので、東宿舎、西校舎の棟構成はほぼ前案と同じである。やはり事務所名入りの用箋に、1：600の縮尺でフリーハンドで書かれている。

１階は、中央北側の食堂、厨房を中心に、西にコ字型の校舎、東に逆コ字型の宿舎、寄宿舎棟を配置している（図6-5-8)。東側北翼の寄宿舎

棟は、２名室１、個室３、４人室５、食堂などで構成しているが、この部分は各平面とも大きく×印が付けられている。

校舎棟は、１階では北側に４室、南西側に４室の教室を置き、事務室、応接室(Empfangs Salon)、教官室などを並べ、２階では９教室、ゼミ室３室などを並べている。

寄宿舎棟を省いた逆L型の宿舎棟は、１階は食堂、居間、談話室のほか、南側に面して談話室や郵便局、個室など同じ面積の小室を13室ほど並べ、２階は病室、客室のほか16個室群を配置している。３階は16室の修道士室と礼拝堂を収容し、北側食堂棟にあたる部分は図書室である。食堂棟２階には閲覧室(Lese-Saal) を配し、東西棟と北側１階食堂棟で囲まれた中庭は花園(Zier-Garten)である。

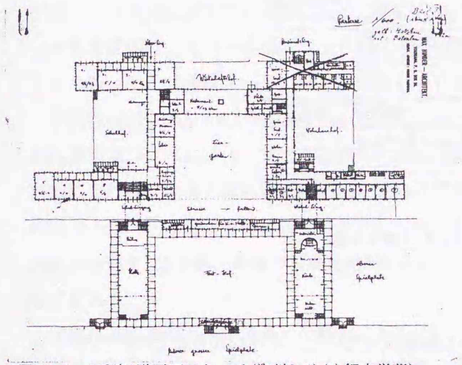


図6-5-8　3系案1階平面スケッチ(資料3-1)(上智大学蔵)

４－１案

２、３系のスケッチを整理し展開した案が、５、６系案といえるが、その間にグラフ用紙１枚に書きつけた平面スケッチ「４－１案」(図6-5-9)がある。1928年３月の日付入りの案で、講堂、会堂部分には変更がないためか、主に道路を隔てた北側(図には方位の記入無し)の校舎棟と、宿舎棟についての基本スケッチである。

地階は、中央に食堂と厨房を置き、東に石炭庫およびボイラー室、西にワイン庫、食料庫を並べる。

地上階(ERDGESCHOSS) は、教官室、談話室のある中央棟を中心に、東翼に３教室、２ゼミ室、西翼に宿舎の居間、食堂、台所を充てている。

１階は、東校舎棟側に５教室や閲覧室、西宿舎棟に図書室、９個室などを置き、２階校舎に８教室、宿舎部に祈祷所(Haus-KAPELLE)や９個室(No.10－18)を配している。２階東側校舎翼を４から３教室へ変更のヴァリエーションも書き込まれている。宿舎棟の中２階は省略され、９個室(No.19－27)の指示がある。

3階は中央棟のみで、東に4教室、西に7個室(No.28－34)を配している。

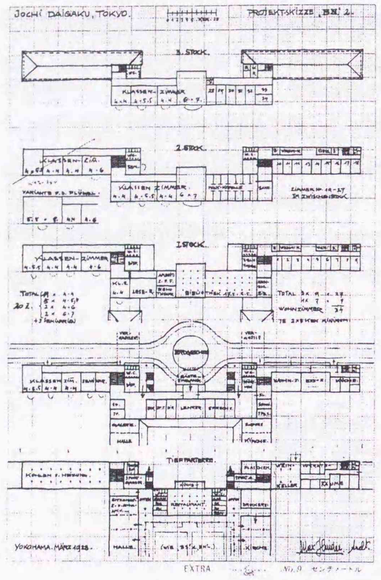


図6-5-9　4-1案平面スケッチ(上智大学蔵)

5、6系案

4－1のスケッチの棟構成をだいたい守りながらまとめたのが、5、6系案である。地上4階地下1階の北側主棟の東西に3層の棟を延ばし、南側東西に2層の翼部を付属した構成で、全体に平滑な意匠の中で、主棟中央には第1案同様塔屋部が強調され、セセッション風意匠の球体が頂部に載せられている。ほかにヒンデル流の扱いとして、裾広がりの屋根、地階の半円欄間付き窓や、ロマネスク風アーチを付けたオープンアーケードなどがみられる(図6-5-12、-13)。

地階は、主棟部分に学生用レストラン、厨房を置き、西側棟に同窓会室(Alt-herren Verband)やボイラー室、ボイラーマン住宅を、東側棟には印刷室や貯蔵庫、樽貯蔵庫、びん貯蔵庫、被服洗濯室などを収容した。西側翼部は演壇付き大講堂、東翼部は礼拝堂である。主棟と翼部で囲われた中庭の南端に屋外体操場(offene Turnhalle)を配置している。中庭には半円アーチを架けたオープンアーケード(offener Laubengang)も廻す計画であった。

1階は、北側主棟中央に円形屋根を架けた玄関を置き、西側を学生ゾーン、東側を宿舎(修道院)ゾーンと2分し、学生ゾーンには、教官室、事務室、予科学生室(Vorbereilungs-Schule)、大講義室などを並べ、西

側翼部は大講堂上のギャラリーおよび吹抜部分である。宿舎部分は、食堂、居間、応接室、裁縫室(Schneiderei)、談話室などで構成し、東側翼部は礼拝堂ギャラリーと吹抜部分である。

2階は、主棟中央から東側が宿舎(修道院)部分で、図書館や病院部門を収容し、さらに中3階は司祭室(Patres)や客室である。西側は閲覧室、講義室、実験室、本科学生控室(Vorbeitungsschule obere Abteilung)、大講義室などが並ぶ。

3階は主棟中央に大講義室を置き、東側はチャペル(Mittkapelle)、香部屋、司祭室、西側は商科(Handelsabteilung)関連の講義室、ゼミ室を置く。

4階は主棟の一部東側に司祭室を設け、西側大部分は文哲科(Literaturableitung)である。

塔屋部にあたる5、6階は、5階をレスリング室 Ring Saal、6階をフェンシング室にあてている。

6系の図面は、5系の単線プラン(1:500)を1:200～1:100 の縮尺にまとめたもので、寸法はメートル法で記入されている。

中央棟は59.4×8.8m(長さ×奥行、以下同)、東西棟50.6×8.8mうち東西端部翼13.2×11.0m、東西の総長138.6m の規模である。断面図の記載によれば、主棟の階高は、地階5.4m、1～4階4m、5、6階 3.5m、塔屋 8.5m、塔屋軒より球体頂部の針状飾り先端まで10.4m、軒上から大屋根頂部まで5.6m、東棟の階高は地階3.5m、1階3.45m、2～4階3mなどである。

図面には鉛筆や万年筆で多くの書き込みがあり、学校側でかなりの検討がおこなわれたことを示しているが、最終的に半分程度の規模となり、ヒンデル側では外観を特徴づける中央塔屋や球体シンボル、ドーリックオーダーの中央玄関、フレアードルーフの大屋根などすべてを取り払った極めてシャープな作品を提示した。

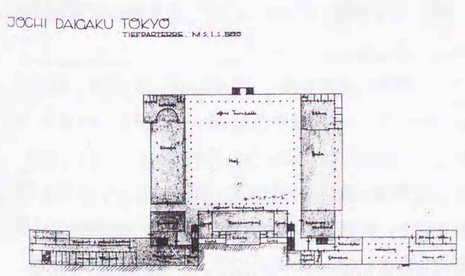


図6-5-10　5系案1階平面図(資料5-1)(上智大学蔵)

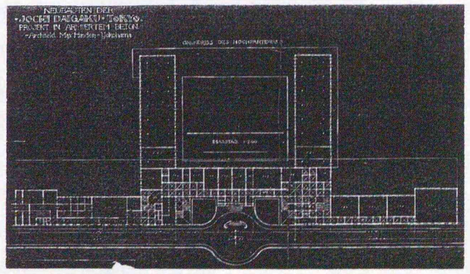


図6-5-11　6系案1階平面図(資料6-2)(上智大学蔵)

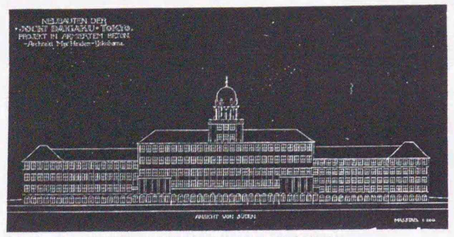


図6-5-12 6系案南立面図(資料6-6)(上智大学蔵)

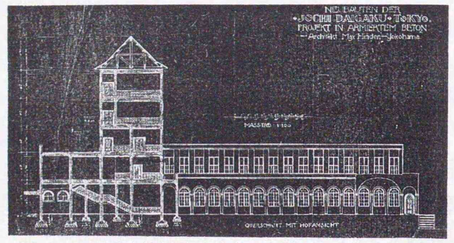


図6-5-13 6系案主棟断面・中庭立面図(資料6-9)(上智大学蔵)

7～9系案

1929年8月の日付のある7系の図面は、8系案以降の最終設計図に至る最終スケッチと思われる。ヒンデルのサインとともに、平面の室名や図面名などはドイツ語で記載されている。7系案と8系案以降とでは、寸法や間仕切構成などで微妙な違いはあるものの、東西約55mの主棟の西側に翼棟を南側に張り出した逆L字平面や、敷地の東端、旧校舎の北側配置などは一貫している。

8系案の平面図は、後述する大学資料集第3集掲載の「新校舎大観」の「各室用途並ニ配置」とも合致しているので、最終平面構成をこの図面をもとにみてみよう。

1階(図6-5-15)は、主棟の東西に階段室と便所を配置し、主棟よりも北側に 4.4m(芯々寸法)張り出している。幅員2.68m(内法)の廊下の南側は、西から「閲覧室」(7.08×18.40m、以下単位はm)、「図書室」3室(7.08×9.20)、「図書館事務室」(7.08×9.20)である。西翼棟は、南側に表玄関と「学生通路」(玄関ホール)、「守衛室」(5.80×3.54)、「部長室」(3.00×3.54)を配置し、「学生通路」の北側「広間」(5.60×17.7)の西側に「事務室」(5.80×7.08)、「幹事室」(5.80×3.54)、「第一応接室」(同)、「学長室」(同)、東側に「第二応接室」(3.00×3.54)、「予備室」(同)、「金庫室」(同)のほか、北側に小「玄関」(貴賓専用玄関)などを配置した。

2階(図6-5-16)は、主棟部に教室4室(7.08×9.20)、「軍事教官室」(7.08×4.60)、「教室」(同)、「教授室」(7.08×9.20)、西翼棟は吹き抜けの舞台付き講堂である。

3階(図6-5-17)は、主棟部に教室6室(7.08×9.20)、西翼棟の講堂上部は、東側に幅3mのギャラリー「講堂中二階」を、南端部に「映写室」を置く。

4階(図6-5-18)は、主棟部中央に「合併教室」(9.76×18.4)、左右に教室2室(7.08×9.20)を置き、西翼棟は片廊下(幅員3.00)の西側に大「教室」2室(8.4×10.62および8.4×10.62+1.50×7.08)を配置する。

屋上は、タンク室や休憩室の他は、遊歩場[69]としている。

主棟部の地階には、「台所」(5.60×4.60)、「食堂」(7.08×18.40)、「機関室」(7.08×9.20)、「配電室」(7.08×2.30)、「浴室」(7.08×4.60)、「更

69:『上智大学資料集　第3集』pp.12、13

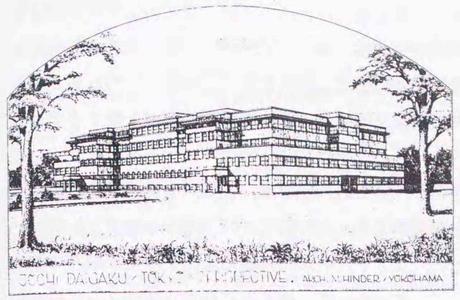


図6-5-14 7系案透視図(資料7-6)(上智大学蔵)

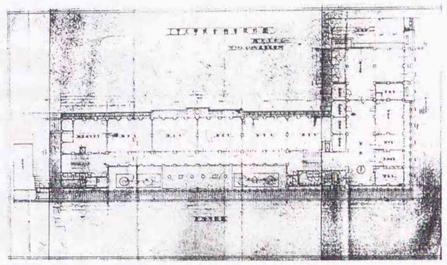


図6-5-15 8系案1階平面図(資料8-2)(上智大学蔵)

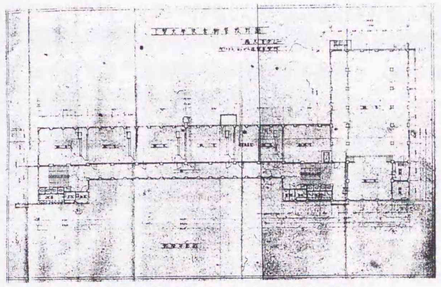


図6-5-16 8系案2階平面図(資料8-3)(上智大学蔵)

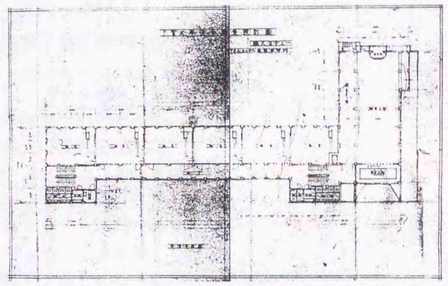


図6-5-17 8系案3階平面図(資料8-4)(上智大学蔵)

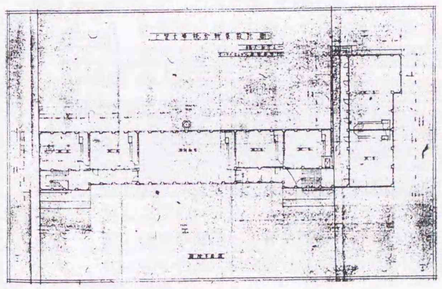


図6-5-18 8系案4階平面図(資料8-5)(上智大学蔵)

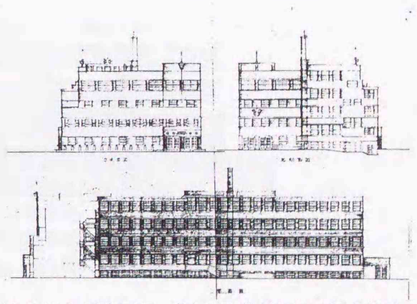


図6-5-19 8系案側面図、南立面図(資料8-8)(上智大学蔵)

衣室」(同)、「書籍倉庫」(同)のほか、「銃架室」(2.78×9.82)などが配置され、地下2階には「石炭庫」(4.40×13.80)が設けられた。

主棟と西翼棟とは、半階分スキップしたヒンデル好みの空間構成とし、地階の床は道路より1.2mさがっている。階高は、地階のみ3.4mと低く、主棟部、翼棟ともすべて3.6mとしている。

竣工時に近い外観は、図面資料7-6透視図(図6-5-14)や、8-8背面、側面図(図6-5-19)、9-1正面、背面図、9-2正面図(図6-5-20)によく表現さ

れている。地階と１階腰部分まで石貼りとし、１階窓台から上はタイル貼り仕上げとし、窓台、窓上楣、パラペット押えなどの水平帯が全体を引き締めている。１階部分では、開口とテラコッタ製装飾パネルを交互に配置し、東西の階段室棟の張出し部分では、１階窓上に外灯を４個ならべ、また正面中央や西面玄関棟最上部に青銅製の旗台を配するなどのアクセントもみられる。

図面ではわからないが、実際の外壁では、２階窓上までやや赤みがかったタイル、その上を黄系のタイルで仕上げ、人造石やテラコッタなどの白っぽい水平帯とのコントラストが、外観に変化を与え、階高の差や段状に後退するエッジとあいまって、固くなりがちなデザインに豊かな表情を与えている。南側背面のボイラー用煙突も同様の表面仕上げを施している。

外壁よりもわずかに突出した「表玄関」(図6-5-21)は、詳細図（図面資料9-3)によれば、線刻を施した花崗石の柱で成の高いエンタブラチュアーを支え、エンタブラチュアーの中には電灯を組み込み、「上智大学」と文字入れした４つの８稜星形小窓を背面から照らす工夫がなされていた。詳細図には、柱やエンタブラチュアー部分に「現寸図参照」の書き込みがあり、より詳細な図面があったことを示している。

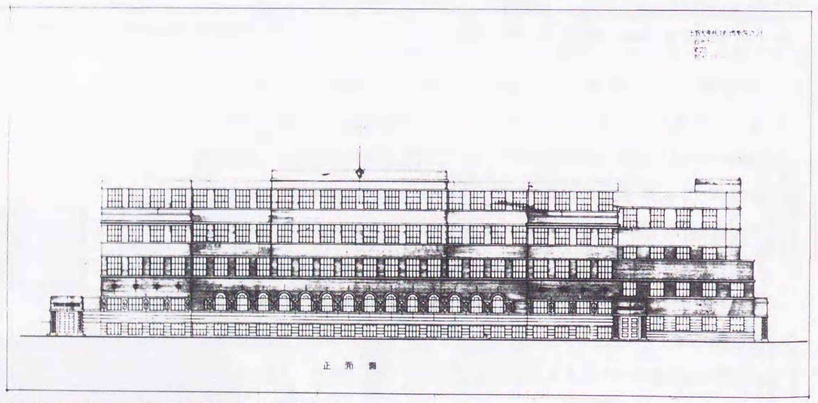


図6-5-20 9系案北立面図(資料9-2)(上智大学蔵)

契約書 VERTRAG

70：『上智大学資料集 第3集』p.14

こうした経緯で計画された新校舎は1930年６月15日起工[70]されたが、ヒンデルとの契約は、1929年７月15日付けでかわされた。契約書の内容は、『上智大学史資料集第３集』に原文(独文)と訳文とが収録されているので、ここでは概略とりあげてみよう。

まず前文で、施主たる「上智学院」は、横浜在住のマックス・ヒンデルに上智大学の講義館、講堂、受付、学生寄宿舎の建設に関し、その施工及び監理を以下の条件で委任し、設計者はこれを請け負うことがうたわれ、15条に及ぶ項目が続く。

第１条　施主は工事に関連する技術上、芸術上の事項に関して、施主の権限の代理権を設計者に与えること。

第２条　設計者は、作業員及び芸術家の選定に関して、提案権、拒否権を有すること。設計作品の作成者として、すべての設計図及びこれに類するものの著作権を有し、施主や第三者は設計者の精神的所有権を直接、間接に他の工事の施工に利用したり、原著者の承諾なしに公表できないこと。

第３条　工事指揮の統一をはかるため、施主は職人と直接契約を締結せず、設計者は職人に、設計者または工事監督者との間に締結された契約及び命令のみが法的効果を有することを徹底させること。

第４条　設計変更や工事見積書の建築費総額を根本的に上回る変更または補充は、施主の要求で、かつ報酬が支払われる限りは遂行されるが、これによって当初計画の建築上の構成がゆがめられるような場合はこの限りではない、と設計者の著作者人格権が明示されている。

第５条　設計者が根本的な変更補充が適切と判断した場合は、その実行にあたり施主の承諾が必要なこと。

第６条　設計者が病気や事故、長期不在、死亡によって、工事を契約通り遂行できず、しかも作業内容が工事監督者が自己の判断で処理できない場合は、設計者は施主の承諾する代理人を任命し、それまでに実施した作業の最終段階の報酬に相応する補償を、本人または相続人に対し行うこと。施主は任命した代理人を拒否し、他の設計者に工事の完成を委任する権限を有すること。契約締結以降１年以内に工事が着手されず、または期間内に設計者の責任によらず工事が中止される場合は、それまでに行われたすべての作業に支払われるべき報酬額の20%増しで支払う。設計者が自己の義務を履行しない場合には、この報酬の請求権は失うこと。

第７条　契約に関する紛争について、オーストリア領事館に提訴し、その判決に両当事者は従うこと。

第８条　段階に応じた設計者の作業内容

１．A　計画決定等を目的とする協議。建設用地の視察。B　建築工事の主要理念を設定した1/500の概略図作成。C　同1/200の概略図作成。

２．A　1/200 の基本設計図の作成―面積あたりの工事見積概算が可能な寸法記入のあるもの。B　浄書した1/200の設計図の作成。

３．A　1/100の実施図面の作成－必要な平面図、断面図、側面図の鉛筆仕上げ。B　同、青写真用浄書図面。C　1/50製作図と1/100鉛筆仕上げのコンクリート図面。D　同、青写真用浄書図面。
E　確認申請用と工費見積書用および工事の最の建築資材、施工方式に関する基本的問題を解決するために、B図とC図を添付した設計仕様書。

４．施工段階
A　建築契約。B　確認申請。C　構造上及び芸術上の詳細図。
D　基礎工事開始までの設計監理。E　最下階工事開始までの設計監理。F　次階工事開始までの設計監理。G　以下同様に、各階工事開始までの設計監理。H　最終決算書の作成。これによって設計者の義務が遂行されたものとみなされる。

第９条　設計報酬
1929年3月20日付書簡による提案および同年7月12日の口頭の協定による決定内容に従い、
A　建物全景の基本設計（正面、側面、背面図）には、別途報酬を支払うものとし、建築委託に含まれていない建物（聖堂、図書館、現居住建物の増築工事）１坪につき１円。

B　建築委託に含まれる建物は、260,000円(1929年 3月提出の設計概要見積工費)までは、その３%、工費260,000円を上回る部分に関しては、日本でのカトリックミッション工事に適用される割合、すなわち４%。権利関係の調整、現存建物及び土地の測量に関する等設計者の手数に関する報酬は別途。

第10条　測量、地質調査等、建築工事に必要な資料は、施主が設計者に提供もしくはその費用を負担し、諸税、印紙税、取次手数料は施主の負担。

第11条　当初の計画範囲内の変更は報酬対象としないが、建築費総額が増大するような大幅変更または追加工事の場合は、報酬も増額とする。

第12条　設計報酬算定基準は、最終建築決算書が提出されない場合には工費見積書が、工費見積書がない場合は、建築延坪また建坪に応じた費用概算とする(日本では床面積１坪につき、木造建物200円、コンクリート建物300円)。

第13条　設計報酬の支払方式

1　報酬総額の30%が、基本設計作成開始の際、第８条の作業１A～Cに対して。

2　報酬総額の30%が、作業２A～Bに対して。

3　工事開始時点に報酬総額の30%が、作業３A～Eに対して。

4　報酬の10%が遅くとも最終決算書の提出時に支払われる。

第14条　確認申請及び工事請負業者による積算が可能となる程度に設計図が作成されながら工事中止の場合の設計報酬は、総工費 260,000円までのコンクリート建物の場合は坪12円、木造は坪８円。家具設計と壁画のスケッチは、報酬総額に含まれない。

第15条　工事監督者

工費が 100,000円を超える場合は、施工工事監督者を求め、設計者はその者の提案権、拒否権を有する。設計者は週１回施工監理を行ない、工事監督者及び請負業者は、設計者の指示に従うことが義務づけられる。施主の要望、疑義は、設計者又はその代理人に対してのみ表明できること。建築現場には建築日誌をおき、これに工事監督者が記入すること。日誌には、毎日の進捗状況、天候、作業員数、受付文書、報告及び回答を記入。施主、設計者は現場訪問ごとに、建築日誌に署名し、その際建築に関するコメントを書き添えることも可。

以上の内容の後に、ヘルマン・ホフマンHerm. Hoffmann、マックス・ヒンデル Max Hinder の署名があるこの契約書では、建築家の著作権や人権の保護が明示され、また設計料について段階ごとにかなり細かく規定されていること、当時の設計料算定基準などを知ることができるなど興味深い資料である。

さらに1930年６月４日付けで「建築工事請負契約書」が施主と「東京市神田区淡路町２丁目14番地木田保造」との間でかわされた。

請負金額は376,120円、工事竣成期限は「昭和五年六月拾日」から「昭和六年六月拾日まで（北側A部建物ハ昭和六年四月三日迄ニ竣工引キ渡シ)」とし、同契約書にはヘルマン・ホフマン、木田保造の署名に並んで立会人としてマックス．ヒンデルの署名もある[71]。

71：『上智大学資料集　第3集』p.11

工事は1930年６月15日に起工され、同年７月29日聖ペトロ・パウロの祝日に、ベルギー、ドイツ、イタリー各大使、帝大入澤博士、高田早大総長ら臨席のもとに定礎式が行なわれた。礎石には、定礎証書のほか、

旧校舎の定礎証書(1913年12月８日付け)と設計図、教職員及び本館イエズス会士名簿、教皇ピオ10世の銀メダル、枢機卿オコンネルのメダル、日本の新硬貨などが埋められた[72]。

72：『上智大学資料集　第3集』pp.1～5

木田組請負で工事延人員47,436人を投入して1932年６月12日に竣工した新校舎は、総面積 4,579.512㎡（地階619.712㎡、１階1,038.893㎡、２階1,027.518㎡、３階912.824㎡、４階847.688㎡、屋階 59.829㎡）の規模[74]であった。各階の部屋構成は、前述の８系案設計図の説明と重なるが、次のとおりであった[73]。

73：『上智大学資料集　第3集』pp.12～15

地下２階　石炭庫、変圧室

地階　調理室、付属室、予備室、食堂、暖房及び機罐室、配電室、学生浴室、更衣室、図書館用物置、兵器庫、物置、便所、廊下

１階　西翼　表玄関、玄関ホール、受付、事務室、幹事室、第一応接室、学長室、貴賓専用玄関、金庫室、予備室、部長室、第二応接室
主屋　図書閲覧室、図書貸出室、書庫、図書館事務室、付属室、便所、廊下

２階　西翼　講堂、舞台、付属室
主屋　教授室、配属将校室、教室５、付属室、便所、廊下

３階　西翼　講堂中２階、映写機室、非常階段
主屋　教室６、付属室、便所、廊下

４階　西翼　大教室２、廊下
主屋　合併大教室、教室４、廊下

屋上　昇降機械室、水槽、換気機関室、屋上遊歩場及び休憩室

主棟の西端に設けられた昇降機は、オーチス・エレベーター会社製。暖房は温水暖房で、ボイラーはドイツデラス会社製、放熱器も同社製、施工はエーピー・テーテンス会社が手掛けた。浴室などへの温水供給装置も同社の施工である。

給水設備は、市の上水道より給水を受け、「モートルタービンポンプ」で屋上に揚水し便所、手洗所などに自動送水した。各階には消火栓設備が２ヵ所あり、５馬力モーターで毎分10立方フィートの水量を噴出する能力の直結消火ポンプが配備されていた[73]という。

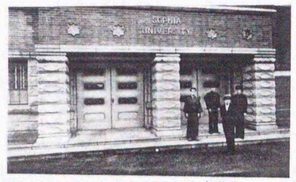


図6-5-21 表玄関外観(山崎家蔵)

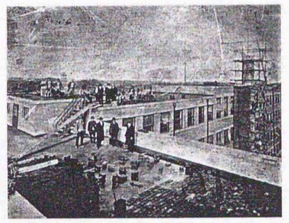


図6-5-22 屋上工事中の景(川喜田敬忠蔵)


図6-5-23 1階西翼事務室前ホール(山崎家蔵)

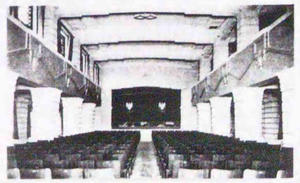


図6-5-24 2階西翼講堂(山崎家蔵)

第７章　ヒンデルの建築観

ヒンデルの作品活動を大きく札幌時代と横浜時代にわけて概観してきた。横浜時代に比べ、滞在期間の短い札幌時代を重点的にふれた感があるが、その理由として、まず第一に本論の目的が北海道近代建築史上におけるヒンデルの業績を明らかにしようとした点にあることに加え、北海道大学教授連との交流を通じてヒンデルの人物像が横浜時代に比べてよく伝えられていること、スイスに似た札幌の気候風土を意識した住宅作品が多いこと、ヒンデル自身が残した建築家の職能に関する小論の新聞への投稿があることなど、ヒンデルの建築観、建築家観をみていく上で重要と考えたからである。

7-1　「新しく家を建てる人々へ」にみられる建築家観

来日以前の経歴(4-1 参照)で述べたように、ヒンデルは専門の建築教育を受けたわけではなく、16歳で下級ギムナジウムを卒業後、製図訓練を経て７年間の修業時代を積み上げた、いわばたたきあげの建築家であった。

ヒンデルが父方、母方とも農業を営んできた家系であることを隠し、「父は南ドイツの貴族出身、母はフランス旧家の出身」[1]という虚言を創作することさえあったということは、ヒンデルの見栄っぱりな性格の一面を伝えていることもあろうが、当時は建築家が社会的地位を確立するためには、まだ家柄のよさといったいったものが、関係していたのかもしれないし、また社会的尊敬を獲得する[2]ための方便であったと考えることはできないであろうか。

いずれにしても、建築家として固い信念をもっていたことは、来札の翌年1925年12月13日から20日にかけて５回にわって北海タイムス紙に連載した投稿記事「新しく家を建てる人々へ」(山崎春雄訳)から知ることができる。

この「新しく家を建てる人々へ」で言わんとしたところは、副題にあるように「建築に関する計画と監督は建築家にまかせよ」、つまり「建築問題を解決するは(ママ)建築家に一任せよ　自ら解決せんとする勿れ」ということである。建築家の職能について格別目新しいことを主張しているわけではないが、個人建築主が住宅などを建築家に設計を依頼することのほうが少数派であった時代に、新聞を通じて建築家の職能についての理解を一般読者に呼び掛けたこの試みは、北の地で設計活動を進めるにあたっての、ヒンデルの所信表明といった印象も受ける。

以下、論説の順に従って内容にふれながら、ヒンデルの建築家観を見てみよう。

まず一般的な住宅建設プロセスとして、建築主が「亜米利加の建築雑誌、新式住宅建築法、組立家屋、郊外住宅、建築上の特許的物件に関する書籍を手当り次第」[3]に買い込み、妻君は台所廻りを、主人は成金然たる客間とか書斎部分を中心に理想の間取りを何度も線引きしたり、新築した友人宅を歴訪したりするうちに予定の建築着手期がせまり、具体的な設計案が出来上がらぬうちに建築請負業者に依頼するケースをあげる。請負業者は配下の建築師に設計させるが、「平面図はいづれ何かのコピーかさ無くとも時間不足の結果十分な考案を凝らしたもので無い事は理の当然です。外観図は矢張り何かの原図をごまかしたものでなくば花嫁然と飾り立てたもの」[3]と、ヒンデルの評価は手厳しい。

ここで「請負者にあらず請負者の奴僕にもあらぬ独立の建築家」[3]について言及し、建築家は建築主から相当の報酬を得るが、建築家の誠意ある周到な研究や正直な工事監督によって建築主が節約できる額に比べれば些細なものである点を強調し、建築が専門職であることを「時計師や裁縫師」[4]同様「専心的習練」[4]を必要とするほかに、医師同様献身的な天職としての努力を要すること。建築家の社会的地位は、芸術的技術方面を別にすれば、医師、裁判官、社会学者などと並ぶものであり、さらに一般社会と建築依頼者、建築主と請負業者との間に立つ「自由なる判官」[4]として、十分な権威が賦与されなければならないと主張する。

次に建築家に対する建築主の心構えとして、

1．建築依頼者はまず建築に必要な諸条件を詳しく個条書きしたものと、自分たちの生活様式、習慣、それに関する意見を正直にいう意志を以て、できるだけ早く建築家を訪問すべきこと
2．建築家を訪問する人は、商店に買物に入るつもりではなく、医師を訪れる気持であるべきで、かつ医師同様に素直に信頼する気持が成功への条件であること
3．最良の建築家といえども魔術師ではないので、物が良ければ値段が高いのも当然で、バラック建築の費用で宮殿級のものを設計せよというのは不可能であること
4．真の建築家は金銭さえもらえば如何なる要求にも応ずる奴僕ではないこと

などをあげ、さらに建築家の職能について、

1：ハンス・ヒンデル 1976年３月13日付書簡

2：スピロ・コストフ編/槇文彦監訳『建築家―職能の歴史』(日経マグロウヒル社、1981.10.20) p.208

3：北海タイムス 1925.12.13付記事。

4：北海タイムス 1925.12.19付記事。

1．建築家は、請負業者を兼ねることはありえず、大工や左官、図工等が自ら建築家と名乗ることは許しがたいこと。また才能ある専門家といえども自ら請負業者を兼ねるものは、建築家の称号を与えるべきではない、建築家という称号は医師や弁護士同様、法律で保証されるべきと、建築家の立場、地位を強調している。
2．正当の日本風住宅の設計には外国の建築家は、なんら交渉をもたないが、西洋風住宅の設計には西洋の建築家の方がかなっていること
3．札幌と東京の建築家に双方の気候条件を共に良く理解せよというのは無理で、北国の建築には北国の建築家が適っていると、自身のＰＲも忘れてはいない。

さらに、住宅は、外観にその品格を表わすもので、道行く人に喜びを与えるようなものや、見るものの「品性向上の一助たる方が望まし」[4]いといった美的条件や景観問題も、費用や坪数同様重要であり、営業上利益の採算を第一義に考えざるをえない請負業者や大工とは異なり、こうした点にまで配慮できるのが建築家であり、単に個人住宅に限らず、すべての公共建築、学校、教会などの建築にもあてはまるとし、「建築問題を解決するは、建築家に一任せよ　自ら解決せんとする勿れ」[5]と結んでいる。

5：北海タイムス 1925.12.20付記事

専門誌などは別として、建築家の職能をこれほどまでにはっきりと語った新聞記事は、筆者の管見するところ、北海道では例をみないものといえる。絶対的な自信をもってのこの発言は、当時の知識階級にも好感をもって迎えられたのではなかろうか。それが、短期間ながらも、札幌で近代建築思想を反映した大学教授連の住宅や学校建築などの設計を実現させる原動力のひとつとなったと考えたい。

7-2　ヒンデルと日本建築

上述したように、ヒンデルは、日本風住宅の設計には積極的には関与しようとはせず、当時しきりに建てられるようになった文化住宅とかモダン住宅とか呼ばれた中流知識階級の洋風住宅の設計には「西洋の建築家の方がかなっている」いるとして設計を進めたが、日本的なものを決して排除したわけではなかった。

引き戸や引き違い窓といった和風建具を積極的に採用したし、生活様式によって必要であれば畳室も取り込んだし、当時の日本建築界における「コンクリートの函が頻に建つ」[6]傾向を憂い、日本の建築家は日本建築の良いところを採り入れて日本独特の建築を造るべきと警鐘を投げかけるなど、風土伝統を意識して創作活動すべきという立場をとった。

6：北海タイムス 1925.10.30―31記事

ヒンデルが日本建築や日本文化を積極的に理解しようとした態度の表

れの一つとして、興味深い講演がある。横浜時代の1929年１月８日に東京のＯＡＧ東洋文化研究協会でおこなったもので、「Japanische Bausitten(日本の建築風習)」と題するものである。北海道大学文学部文学科独文学講座藤本純子助手の協力で講演内容は訳出[7]されているが、在日５年そこそこで関連文献をよみこなし、これだけの講演内容にまとめあげた点は驚異的でもある。当時すでに形骸化していたり、現在では建築関係者ですら知ることのない儀式にいたるまで、ヒンデルはじつに明解に説明しており、ヒンデルが日本理解に傾けたすさまじいほどのエネルギーの一端を感じとることができる。

7：『ノルデン 第30号』(1933.11)

講演内容の概要を筆者なりに解釈しながらふれておくと、導入部分では、当時ですら希少になってきている建築儀式を、「希少になればなるほど、知る価値も高まるというものです。」「このような風習から、日本の建築習慣のみならず私たちが日頃あまり伺い知ることのできない日本的な思考形式についても実に多くのことがわかる」とし、話は、自分たちが施主の一人になったつもりで具体的に追体験するようにすすめられた。

番匠の位を持つ棟梁に依頼して作成された間取図を家相家に鑑定してもらうまでの過程、家相家による「九分法(井田八宅之法)」による敷地分割、家相による諸室の配置や庭木の可否などが述べられ、設計変更後の契約日を迎える。次に契約日の内容と工匠（番匠に次ぐ位）である老職人が語る普請にまつわる神話が続く。

普請などしらぬ神話世界の人間に「天目一箇命」(アマノマヒトツノミコト)が道具を作り、「手置帆負命」(テオキオオイノミコト）と「彦狭知命」(ヒコサチノミコト）が森の木を加工し、日本の家の原型を作ったこと、この神々が人間に墨打糸、釿(チョウナ)、斧、鋸などの使い方を教えた結果、大工の守り神となったと古事記、日本書紀が経緯を伝えていること。占星術をもちこんだ神官による混乱を避けるため、聖徳太子は大工に対して冠位十二階位を制定し、上位三位の者に対し、神官装束を身に着けて、建物祓い浄めの七種の儀式を執り行う権限を授けた。が、太子は家相家の権限を委ねなかったので、普請設計にも門外漢の手が入り込むようになった。「占いは、百害あって一利なし、それどころか邪法之禁厭(ジャホウノマジナイ)、これさえなければ工事はもっと楽に首尾よく進むのに」と老大工の言葉として紹介しているが、ヒンデルにとっても同感だったであろう。

次からは、地鎮祭、地曳之式、地礎之式(イシズエノシキ)、釿初之式(チョウナハジメノシキ)、清鉋之式(キヨカンナノシキ)、立柱之式（タチバシラノシキ)、上棟之式の７つの建築祭式および家堅（ヤガタメ)祭について、式の内容、祭式の祭壇飾りなどについて説明している。

最後に、邪法之禁厭(ジャホウノマジナイ)、つまり迷信や格言のサンプルをいくつか紹介しながら、中には案外真理が隠されている場合もあるとしながらも、自身の関与した例として、ある医者の家で、易者によって台所の位置を変えねば奥さんが病気になるおそれがあるといわれ、後に台所の移設を要求されたこと、またある高名な学者の家では完成した家の出窓が不吉だというので取り壊させたことなどを、おそらくなんの効果もなかったろうと述べながら講演を結んだ。

当時の日本人でも難解な建築儀式を、どのような聴衆を対象に、またどのような語り口で講演したのだろうか。今となっては想像するしかないが、よほど饒舌でなければ、耳新しい神の名や、儀式の細かな中身などが次々と展開するこのような内容を、具体的に理解させることは困難な気がするのである。最初に述べたように、ヒンデルは、外国人から見れば、時間と費用を余計にかける建築プロセスに好奇の眼差しを向けながらも、実に冷静に報告している。日本での仕事を通じ、建築に従事するものにとっては避けることの出来ない日本の建築儀式は、ヒンデルにとって日本文化理解へのひとつの橋掛かりとして位置付けたのだろう。講演抄録の最後に、使用した日本の文献として以下のものが並べられている。

『神代巻（日本書紀一ノ二）』享保十年(1726)(個人蔵)
クロイタ・K.『ヤマトフミ』(1928)
コウダ・N.『古事記』(1928)
『匠家故実録』享和三年(1803) 文化五年(1809)の版(早稲田図書館)
『洛地準則』安政六年(1859) 大正15年版(鶴見寺院図書館)
トツザワ・Sh.『運命三世相』(1928)
トツザワ・Sh.『家相方位図解秘事』(1928)
『本暦』昭和４年版(1929)
『和漢年契』寛政八年(1796)(個人蔵)
『新撰占暦便覧』貞享乙丑七月(1685年)版による享保十七年(1732)の復刊(個人蔵)

これらの文献理解に、建築職人や日本人所員などの助言を受けたことは想像に難くないが、文献名を見るにつけ、入門書的なものは見当らず、何事にも真剣に立ち向かうヒンデルの生真面目さといったものが伝わってくる。

7-3 ヒンデルの作風

５章、６章で見てきたように、ヒンデルの作品には外観からみてヒンデル作と推定できる、いくつかの作風、要素が認められる。

住宅作品では、日本的なものに引かれながらも、日本風住宅を外国人建築家が設計することには否定的であり、また北国の建築には北国の建築家がかなっていると述べるように、北の建築条件を考慮に入れた住宅作品を展開していった。横浜時代の住宅作品が少なく、北海道の作品との比較を必ずしも明解にはできないが、横浜自邸や旭シルク㈱住宅を見るかぎりでは、札幌時代の作風を踏襲しているように思われる。以下、住宅におけるヒンデルの作風を個条書きにあげた。

1．急勾配で裾広がりのフレアード屋根：ドイツなどの住宅にも見られる意匠であり、雪処理の容易さと、最上階の開口部面積の確保を意識したもので、住宅ばかりでなく、学校建築や、聖フランシスコ修道院といった住宅以外の作品でもみられる。5-5 上智大学校舎の設計過程でも、陸屋根の最終案直前まで大屋根への固執をみることができる。
2．外壁の防寒処理：外壁をこけら張りとする外観は、円い家、柳邸、山崎邸、林邸、ノートン記念館などのほか横浜自邸でも試みられた。亜鉛鉄板張りは、簡易耐火的な意味もこめられたようで、大野邸のほか、藤女学校寄宿舎、北星女学校女教師館、聖フランシスコ修道院や、藤女学校校舎、北星女学校校舎などでも採用された。
3．引き戸、引違い窓の採用：ヒンデルがとくに好んで使用した建具で、円い家を皮切りに、ほとんどすべての住宅で採用した。次の採光面積の確保とも関係あるが、大きく開口するために、横浜自邸のように引違い窓を上下２段に組み合わせる手法も採用された。
4．南側採光の確保：平面計画とも関係するが、日照時間の短い北国の建築では、南からの採光は不可欠のものであり、できるだけ開口面積を確保する工夫がなされた。柳邸の１階が好例といえ、南面する壁面すべてをガラス開口としている。
5．外壁アクセントとしての小窓：山崎邸の南側妻面にみられるような菱形小窓は、屋根裏部屋や収納スペースへの採光用としての機能以上に、壁面意匠のアクセントとして好んで採用された。林邸や北星女学校女教師館のほか、藤女学校校舎では丸窓、横浜自邸では八角形の小窓がみられた。
6．団らんの場と主婦空間の重視：サロン、居間などの団らん空間を南面に確保することのほか、円い家では主婦室、柳邸では南面する主婦用仕事室、山崎邸では主婦室兼居間など、積極的に主婦空間が確保されている。

ヒンデルが古典主義的であることは、ジュネーブ国際聯盟会館案(5-5参照）などに示されてと思われるが、住宅以外の作品を概観すると、宗教建築を中心に、ロマネスク様式への顕著な傾倒をみることができる。また、住宅作品にも通じるフレアードルーフの大屋根の扱い、小塔、鐘塔、尖塔の付加など、共通の意匠、作風を指摘することが出来る。

小塔、尖塔は、ヒンデル好みのモチーフの一つである。建築のモニュメンタリティーを表現する上で、塔のデザインは欠かせないものであっ

たのだろう。藤女学校校舎(1924年)を初めとして、天使の聖母トラピスチヌ修道院(1927～1930年)、北星女学校案（1928年）や上智大学校舎案(1927年)などにみることができる。

とくに上智大学では、第１系案から６系案に至るまで、中央に大きな塔屋が計画された。１系案では玉ねぎ型ドームをたちあげ、２系案からは鉄筋コンクリート造に大屋根をのせて中央にドームと尖塔をデザインし、６系案ではセセッション風意匠の球体をのせた塔屋部を強調している。

こうした塔への執着は、新潟教会(1927年)や宇都宮教会(1931年)など精神性の象徴としての宗教建築では遺憾なく発揮され、単塔のほか双塔デザインとして表現することができたといえる。外見上はロマネスク様式ではあるが、ヒンデルにとっては様式の単なる咀嚼以上に意味を持つ表現と考えたい。

塔屋とともにヒンデルが好んだ表現のひとつがロマネスク風デザインである。教会堂建築に限らず、ヒンデルの作品から受ける重さと固さの印象は、北国で育った彼の人間性や精神性の表象ともいえる気がするが、おそらくロマネスクへの傾倒もその線上で理解できるものであろう。ロマネスク建築における地域固有の材料の使用や安定感ある半円アーチの多用、装飾における幻想的、抽象的な文様や図象の展開などは、彼の嗜好に合致するものであった。

ロマネスク様式を採用した教会堂作品は、木造下見板張り、木造「金網ロックスタック」仕上げ、鉄筋コンクリート造大谷石張りなど、表現は多様であるが、目を引く意匠の一つとして丸窓の多用が挙げられる。丸窓の使用は札幌藤女学校(1924年)の小屋裏採光用を手始めとするが、教会堂では内陣や袖廊、身廊の高窓採光用に配置され、新潟カトリック教会(1927年)、熱田教会(1928年)、金沢三位一体聖堂(1931年)、御器所天主公教会(1931年)などで使用された。

また住宅作品においてみられるような、鼻隠し端部の熊の顔のシルエット(山崎邸)や棟木端部の人面装飾(ヘルベチアヒュッテ)、椅子の背のアイヌ文様や悪魔面など(山崎邸)、たくみに装飾を施したヒンデルにとっては、建築装飾も建築表現に不可欠のものであった。その代表格である宇都宮教会では、ビレット(切り棒状飾り縁)で縁取られた正面入口、ティンパヌムの組紐模様、ポーチのアーチ下面の幾何学模様、聖堂内部の円柱の方円柱頭の組紐模様、聖水盤の幾何学装飾など、細部に至るまで建築装飾が施されている。聖堂内部の独立円柱も、宇都宮教会では大谷石張りであるが、金沢三位一体聖堂では黒漆塗りと、地域固有の材料の使用や伝統との調和を意識している。これもまたロマネスクに通じるものであろう。

木造建築を主として手掛けてきたヒンデルの在日活動の最後期を飾るのは、1930年代の聖母病院(1931年)、南山中学校校舎(1932年)、上智大学(1932年)といった一連の鉄筋コンクリート造の作品である。それまでの大屋根デザインからの大転換であるが、聖母病院では塔屋に北星女学校校舎1928年Ｂ案の換気塔などにも見られた釣り鐘型屋根の意匠がみられるし、南山中学校では装飾的に三角開口を配列したパラペットの高い立ち上げがみられる。上智大学のようなモダニズムデザインを意識した作品に至るヒンデルの試行や迷いとも受け取れるが、この上智大学にしても、外観はロマネスク風の印象を受けるし、玄関廻りには紐状装飾をつけた柱が認められ、講堂内部では末細りの柱や段状梁などのアールデコ風の扱いなど豊穣な装飾を展開している。横浜時代の作品のすべてが明らかになっている訳ではないが、これら３作品を見るかぎり、ヒンデルの作風には積極的なモダニズムへの移行はなかったといえるであろう。

第３部　田上義也

第８章　田上義也の経歴と作品活動

1991年８月17日92歳で他界した建築家田上義也の経歴については、蝦名賢造『北方のビジョン/地域開発における人間研究』(らいらっく書房、1966)、『わたしの道』(北海タイムス社、1974)、小山一男『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉』(現代出版社、1977)、田上義也『私と北海道の建物』(月刊住宅ライフ連載 1983.3～1984.3)、『私のなかの歴史3』(北海道新聞社、1984)、『受賞に輝く人々(昭和五十三年)』(北海道、1979.3.29)などに詳しい。あらためて補足する点は少ないが、その後の筆者の調査による新たな知見を加えながら、1945年頃までの第１期制作期を中心に概説しておこう。

8-1　早稲田工手学校時代まで

田上吉也（義也の本名）は、1899(明治32)年５月５日、栃木県那須野原開拓地で生れた。父貞質は、鹿児島県種子島出身の軍人、西南の役で薩摩軍に加担し、官軍に敗れたあと、薩摩を離れ米沢に逃れ、ここで母かねと結婚。吉也の生まれる前年の1898年、栃木県令三島通庸のすすめもあって、那須野原に入殖したばかりであった。母かねは、吉也を産んでまもなく胸をわずらい米沢の実家に帰っていたが、1901年に他界してしまった。



図8-1-1　早稲田時代の田上義也

父は、日清、日露戦争出兵後、那須野に帰らず、西南戦争で行方不明となっていた薩摩時代の妻と再会し、東京麻布材木町の軍人邸に住んでいた。吉也が狩野小学校高等科１年終了のころ、東京の父からの便りで上京し初めて再会、継母や腹違いの姉と同居することになる。さらに、父の意向で、陸軍幼年学校を受験するが、軍人教育は自身に合わないことを自覚、半年後には退学届を出している。

1913(大正２)年、父に無断で青山学院中等科に入学した。月謝は出してくれたものの、本代、小遣いは与えられず、那須野の叔母悦子がこっそり援助してくれた。母が他界してからずっと母親代わりに吉也が慕っていた人である。

学院時代、父の干渉から逃れるために、たまたま友人で学院長の息子高木の遊学であくことになった下宿に住むことにした。下宿の主人は、北村透谷未亡人美那子女史で、1894(明治27)年透谷が自殺後渡米し、帰国後津田英学塾で教鞭をとっており、学院で英語の成績が良かった吉也は、下宿では女史に英会話を学ぶことができた。女史の下宿には、島崎藤村、秋田雨雀、戸川秋骨、荒畑寒村や有島武郎らが出入りしており、彼らの新鮮な話は、文学的表現や評論的表現に強い関心を示す刺激ともなった。

吉也が建築に興味をもつようになったのは、早稲田大学理工科のいとこ田上耕之助(1915年第３回卒業生)の影響である。学院中等科３年の時に、夜間の早稲田工手学校に入学、昼は青山、夜は早稲田に通い、1916(大正５)年７月第８回生として卒業後、恩師内藤多仲教授の意もあって、夜は早稲田高等学院に通いながら、昼は逓信大臣官房経理課営繕係で建築助手として、高輪、神戸の電話局、福島、浅草の郵便局などの現場で実務経験を積むことになる。

8-2　F．L．ライトとの出会い

田上とF．L．ライトの出会いは、1918(大正７)年のジャパンタイムス掲載広告「英語を話せる若い建築家もとむーライト」がきっかけという[1]が、上司渡辺仁技師の勧めもあり、念願の早稲田大学理工科の合格通知を受け取ったものの、ライトに学ぶ方を選択したのである。

当時ライトはまだ帝国ホテルの現場事務所に来所しておらず[2]、事務

1：小山一男『北のまれびと＜エゾライト・田上義也＞(上巻)』(現代出版社、1977)p.20

2：ライトの初来日は1905(明治39)年２～６月、２度目は1916(大正５)年、1919年には日米間を往復したが、1919(大正８)年12月31日ライトとマダム・ノエル、レイモンド夫妻が横浜に着いた。(谷川正己『日本の建築[明治大正昭和]９ライトの遺産』年譜 p.174)

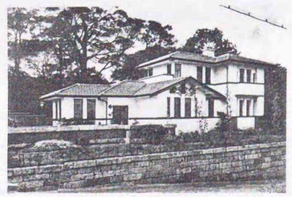


図8-2-1　大竹邸(『婦人画報』、1922.7)

所には、ライトの片腕で構造担当のポール・ミュラー、息子ラルフ、スミス、設備担当のミルズの4人と遠藤新ら日本人スタッフが2、3人いた[3]。田上の初めての仕事は、大谷石のストーンリストを作ることと、アメリカから送られてきた図面を仕分けすることなどであったという。

田上がライトと初めて会うのは、1919(大正8)年12月31日のこと[4]である。ライトは1921年4月ホテルの完成を見ずに帰国[5]するので、わずか1年4ヵ月ほどの付き合いであったが、通訳として、また日常生活を通じて、ライトから建築家のプロフェッションについて学んだ。また、ライトと共に来日したレーモンド夫妻からも、多くを学ぶことができた。週末になると、夫妻は田上を伴って、武蔵野、湘南、鎌倉へと出かけ、民家や社寺の空間構成や日本の美について、講釈してくれたのである。

音楽好きのミュラーは、田上に音楽学校教授のクローンに師事するようすすめてくれた。田上が本格的にバイオリンの演奏法を修得したのはクローンからである。クローンはまた指揮法も教えてくれた。クローンのもとには3年間通ったという[6]。この経験が後の北海道での生活に大いに役立つことになる。

兄弟子遠藤新はライトの帰国後、1922年12月遠藤新建築創作所を開設した[7]。帝国ホテルのスタッフの多くがそのまま移行したと伝えられる。事務所開設前の1920年には遠藤設計の桜楓会アパートメントハウスが起工しているので、帝国ホテルの現場事務所時代に設計をすすめたことになる。この時期、田上も処女作と考えられる大竹虎雄別邸(10-1参照)を設計した。1922年7月から11月頃に工事を完了した住宅作品で、当時の『婦人画報』では「ライト式建築」[8]と紹介している。同記事には、同じ様式の建築として、ライトの帝国ホテル、自由学園（1922年には中央棟、西教室棟竣工)、林愛作邸（1917年設計)や遠藤の桜楓会アパートメントハウス(1921年竣工)、犬養邸(1922年竣工)のほか、田上の大竹邸(図8-2-1)と伝通院ポプラをあげている。

帝国ホテルの完成披露式は、1923(大正12)年9月1日午後から予定されていたが、午前11時58分大地震が突然襲った。帝国ホテルは無事であったものの、東京は焦土と化してしまったが、この関東大震災によって、田上はまた人生の転換期を迎えることになる。レーモンドや遠藤新らからアメリカ留学を奨められ、悩んだ田上は、旅に出てこれからの自ら生きる道を求めようと、同年11月バイオリンを教えてくれた青山学院時代の友人で江別出身の前島実や下宿で会ったことのある有島武郎の農場のことを思い出し、北海道行きを決心したのである。

3：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上巻)』p.25
4：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上巻)』p.26
5：『日本の建築[明治大正昭和]9ライトの遺産』年譜 p.175
6：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上巻)』p.131
7：『日本の建築[明治大正昭和]9ライトの遺産』年譜 p.176
8：『婦人画報』(No.201)(1922.7)

8-3　建築家田上義也の誕生

北海道行きの車中では、田上が日頃口癖の「人生は出会い」の言葉通り、ジョン・バチェラー博士と出会い、札幌行きを勧められる。これが機縁で北の大地に腰を落ち着けることになる。札幌駅に到着したのは、1923年11月18日[9]のことであるが、そのままバチェラー邸の2階に居候することになった。

バチェラー邸(図8-3-1)は、札幌市北3条西7丁目にあった1898(明治31)年建設の木造2階建て住宅である。玄関左右にベイウインドゥがあるほかは飾り気のない簡素な洋風住宅で、1962年に北海道大学農学部付属植物園内に移築されている。

居候中、アイヌの子女にバイオリンを教え、時にはバチェラーのお供で、アイヌ部落をまわることもあったが、いつまでも居候するわけにもいかず、吉也は札幌近郊の円山で借家し、数人の生徒にバイオリンを教えることにした。さらに富貴堂の一隅を教室として借りたが、ここで豊平館のマネジャー杉山安治と出会い、1924年12月24日のクリスマスパーティーでの独奏を依頼された。この会場で、帝国ホテルのボーイを勤めていた青年に声をかけられ、初めて建築家としての吉也が知られることとなったのである。吉也が「きちやっこ」と愛称されるのを嫌い、北海道での心機一転を願って「義也」と改名したのも、ちょうどこの頃である。

1924(大正13)年4月、画家の橇浦泰雄[10]の誘いを受け、橇浦の従弟のいる名寄から稚内、留萌、増毛さらに、北見、網走、根室と道東まで足をのばし、さらに爺爺（チャチャ）岳のある国後島へわたり、終点根室に戻ったのは5月1日のことである[11]。橇浦も大震災後、札幌にいる実兄、市会議員になったばかりの小谷義雄のもとに身を寄せ、ここで田上を紹介されたのである。根室に戻った翌日、橇浦と別れた田上は、根釧原野に向い、開拓民が貧しい粗末な住まいを本拠に、理想に燃えて過酷な自然と戦う姿に感動し啓発されて、北海道で建築活動を開始する決意を固め、札幌に戻った[11]。

同年9月には、橇浦と共に岩内遊楽館で、岩内白水會と北海タイムス岩内支局主催のバイオリン演奏会を開催し、橇浦作歌、田上作曲の「岩内」が披露された[12]。当時の新聞は、「ヴァイオリニスト田上義也氏の独奏會」[13]と報じており、建築家としての田上はまだ世に知られていないことを示している。

この年にはまた、飯田実(セロ)、小川隆子(ピアノ)らと「北光トリオ」(ピアノトリオ)を結成、「第一回大演奏會」[14]を10月17日豊平館で開催[12]、翌1925年10月10日小樽市堺小学校大講堂で「二回北光トリオ大演奏會」[15]をひらくなど、音楽活動への情熱も同時にもち続けた。

9：田上義也談。



図8-3-1　バチェラー邸(1972年撮影)

10：1888～1979。画家、民俗学者、社会運動家。1924年田上と道北、道東、国後を遍歴。田上が北海道定住を決意するきっかけとなった。

11：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上巻)』pp.85-96

12：田上義也スクラップブック。歌は、鎌田羊花夫妻が合唱。会費は30銭であった。1933年7月発行『岩内町郷土誌』（北海道岩内郡岩内尋常高等小学校）に「岩内の歌」として収録されている。

岩内の歌

作歌　橇浦 泰雄
作曲　田上 義也

千里の怒涛　逆巻き返し
玉と砕くる　雷電の
黒き巌に　たゞ一人
ひねもす　吾はもの思ふ。

人の命の　定めなく
消えてはかなき　うたかたの
人の情けは　深きかな。

熱き血汐と　清純の
涙に海も　なごみつゝ
しばしはさゆる　月今宵
影なき鳥の　啼きしきる。

13：田上義也スクラップブック「田上氏独奏会」(新聞名不明、1924年、月日不明)

14：「北光トリオ第一回大演奏會」パンフレット

15：「第二回北光トリオ大演奏會」パンフレット

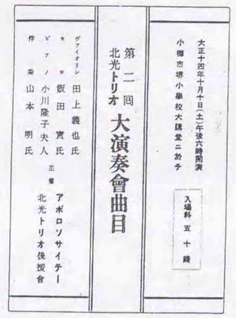

第二回
北光トリオ
大演奏會曲目
大正十四年十月十日(土)午後六時開演
小樽市塔小樽校大講堂ニ於テ
入場料 五十錢
ヴァイオリン 田上義也氏
ヤ ロ 飯田實氏
ピアノ 小川隆子夫人
伴奏 山本明氏
主催 アポロソサイテー
北光トリオ後援會

図8-3-2　北光トリオ第2回演奏会プログラム



図8-3-3　小熊邸



図8-3-4　田上自邸アトリエ

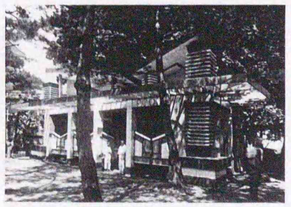


図8-3-5　豊平館食堂

16：『北大50周年記念式典会場』スケッチ

17：『北大百年史　通説』(1982.7.25) p.220

1924年の秋、バチェラーに依頼されてアイヌ保護学園（後のバチェラー学園）を設計。これが北海道における建築作品第一号となった。財政の豊かでない同学園の建設資金集めに、田上はチャリティーのバイオリン独奏会を開くなど積極的に協力した。

さて田上の本格的な建築家としてのデビューは、1925(大正14)年４月札幌時計台で開催した「田上義也建築作品展覧会」といえよう。

北海道初ともいえる建築展の反響は大きく、初日の入場者数 500名、有料の講演会にも北大教授や学生、市民など 300名も聴衆が集まり、これを機に関場博士邸などの設計依頼があり、まず住宅建築家としての田上が知られることになった。

翌1926年には、札幌市南３条西13丁目北海道大学水産科教授西村真琴の家の納屋続きに、５坪強のアトリエを持つことが出来た。この作品を見た小熊博士は、自邸(図8-3-3) を依頼することになる。大きなガラス開口をもつ明るい片流れ屋根の小品で、わずか100円の改築であった。

「さゝやかな中にも建築家の偉大さを思わせる」「木の香も新しい建物が路行く人に何かを囁く如くすくっとたってゐる」と、小樽新聞（1926.4.13)でもとりあげたが、田上を「建築家であり音楽家」と紹介している。このアトリエで、２人の助手と共に、翌年ヒンデルと設計を争うことになる日本基督教会北一条教会の設計などを手掛けていた。この年にはさらに念願のアトリエ付き自邸（図8-3-4)を、南12条西13丁目に持つことが出来た。水平性を強調したいかにも田上らしい作品である。

1926年8月開催の国産振興博覧会では、野外ステージのほかに「HOHEI-KWAN GRILL ROOM」(豊平館食堂)(図8-3-5) の設計もてがけた。豊平館食堂は、バタフライ屋根、スリット飾りを付けた柱型、パーゴラ、幾何学的な自在扉などが特徴的な軽快なデザインの仮設建築であった。

建築以外では、同年５月14日に開催された北海道帝国大学創基五十周年記念式典式場がある。現理学部正面西側の雨天体操場を飾り付けたもので、内部ディスプレーのスケッチ(図8-3-6)と内部写真が残っている。『北大百年史　通説』(1982)には、「青白紫茶色などのまん幕および布をもって天井壁柱を飾り、場内には布で飾った十数個の電燈を点じ、正面壇上には鉢植の棕梠及び松を飾り、この大式典にふさわしい会場であった」と記載されている。スケッチでは、天井に白い布、中央通路の天井、床に白、中央通路天井左右に黄色の蝶模様を並べ、梁から下がる垂れ飾りは「ミドリ」[16]色の先に銀で装飾したもの(材質不明)、三角形の柱型装飾には「沃野」[16]を表現する「グリーン」[16]を主調に、柱型基部を「開拓荒野」[16]を象徴する「セピア」[16]色とし、柱型中央には「太陽」[16]をイメージする赤い円形装飾を配している。簡素な雨天体操場が見事に変身したことだろう。入場者は来賓約1,000名、職員約400名、学生約2,000名、計3,400名が、東西13間、南北30間の会場を埋めた[17]。

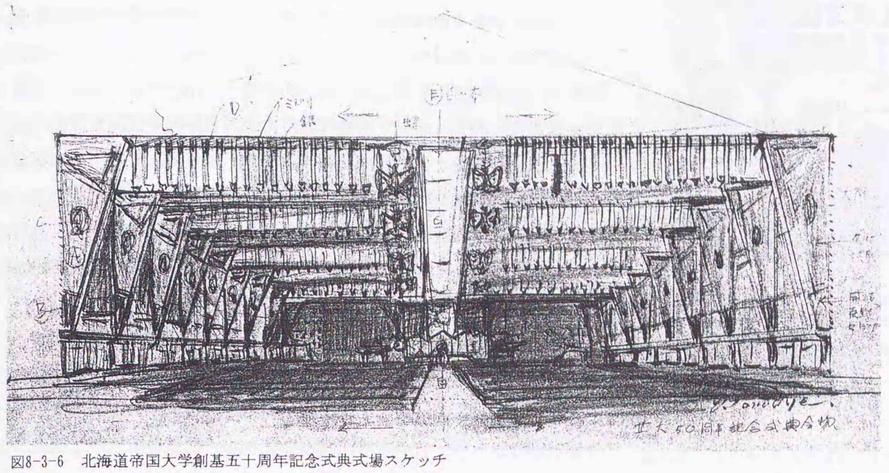


図8-3-6　北海道帝国大学創基五十周年記念式典式場スケッチ

1928(昭和３)年には、第２回田上義也建築作品展と講演会「雪国的造型」を札幌今井記念館で開催[18]、1930年には日本藝術學協會主催、北海タイムス社後援第３回「田上義也建築作品展」を４月25日～29日にかけて札幌今井記念館で、また７月24日～28日にかけて旭川今井呉服店で開催した。札幌では『雪國生活に即せる新精神の家』、旭川では『北國建築に就いて』と題して講演もおこなっている。この３回目の展覧會は、翌年発行の『田上建築畫集』の宣伝効果も考慮されたものと考えられる。

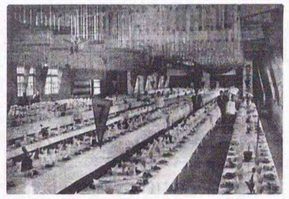


図8-3-7　北海道帝国大学創基五十周年記念式典会場

前年には『芸術学研究 第一輯』(東京 第一書房刊)に「建築論」を発表、ひき続き第二輯(1930年)、第四輯(同)に連載、1931年には『新芸術学叢書6 田上義也建築画集』(日本芸術学会編、建設社)を出版、その後の１、２年を含めたこの時期は、最も充実した初期黄金時代ともいえる。

第３回作品展を開催した1930年には、バチェラー博士のアイヌ保護学園財団法人化を後援する「バチェラー学園後援会」が設立され、前北海道庁内務部長得能佳吉や新渡部稲造らが、基金募金運動を開始した。田上もこの運動に加わり、同年10月11日、司会田上あかし、ピアノ小川隆子、ソプラノ笹仲子、鈴木清太郎指揮、札幌混声合唱団らの賛助出演を得て「バチェラー翁に捧ぐる。田上義也提琴独奏会」(図8-3-8)を豊平館で開催した。

1931年開催の国産振興北海道拓殖博覧会では、第一会場の府県館前の大広場に石井莫のための野外舞台を設計した。大きな１本の楡と２本の楓を取り込んだスクリーン２枚の簡単なものであったという[19]。

1930年代に入ると、『田上義也建築画集』の「建築論」で提示した「雪国的造型意図」が作品活動で大きく展開された。それは、1920年代の作品に見られるライト風の影響からの意識的な離脱過程でもあった。また

18：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(下巻)』年表

19：田上義也スクラップブック記事（新聞名、日付不明）



図8-3-8　田上義也提琴独奏会ポスター

それまでの住宅作品を主とする活動から、市街地内のカフェーや喫茶店などの風俗建築や商業建築、ホテル建築などの作品の割合が増加した。

活動の場も札幌を中心としながらも、1928年頃から旭川、さらに1932年頃からは道東方面にも広がった。弟子屈・近水ホテル(1932)、釧路・キャピタル(1932)、音更・十勝川温泉ホテル(1933)や1935年着工の網走・観光ホテル、郷土博物館などの現場監理が続く中、工事中の網走ホテルの火災(1935年12月５日)や石狩海濱ホテルなどの設計料未払いなどの心労がたたり、暮れには上京先で倒れてしまう。翌1936年１ヵ月程静養し、３月には帰札するが、この頃から仕事にも恵まれず、設計活動は激減した。困窮の日々も続く、失意の時期である。

1937(昭和12)年の北ノ王鉱山や1944年帝産航空株式会社落部工場などの産業施設をてがけたものの、戦後1951(昭和26)年の再出発まで建築家としてはまったくのブランク期ともいえる期間である。この間、田上は音楽活動によって、自分自身の運命を切り拓く決意をし[20]、これまでの建築への情熱を札幌新交響楽団設立に注ぐのであった。

1937年５月31日札幌松竹座で札幌新交響楽団創立記念演奏会「楽聖ベートーヴェンの夕べ」が開かれた[21]。指揮者は田上義也、副指揮者鈴木清太郎がピアノを独奏した。その後同年11月６日「試演会」(豊平館)、第１回定期演奏会1939年12月９日(札幌市公会堂)、第２回1940年12月13日(同)、第３回41年６月11日(同)、第４回41年12月９日(同)、第５回1942年11月28日(同)と続いたが、戦局が深まり、第５回を最後に活動停止状態となった[22]。この間1938年７月９日には札幌音楽協会ほかが主催して札幌公会堂で開いた「バチェラー翁に捧ぐ音楽の夕べ」でバイオリンを独奏するなどの活動もみられた[23]。



図8-3-9　1930年代の田上義也

20：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上巻)』p.140

21：前川公美夫『北海道音楽史』(1992.6.5)p.321

22：『北海道音楽史』pp.326、327

23：『北海道音楽史』p.323

8-4　戦後の活動

1943年帝国産金興業会社の子会社帝産航空株式会社が創設され、田上設計の新工場が完成した。同時に石川博資社長の申し出で、取締役工場長として経営の一翼を担うことになった(1944年6月～1947年3月[24])。会社は木製飛行機に使用するベニヤ単板の製造工場であったが、1947年終戦と同時に閉鎖、帝産航空株式会社は解体し進駐軍への自動車サービスを行う帝産オート会社が設立された。田上は引き続き同社の取締役札幌支店長名義(1947年5月～1951年3月[24])となったが、結局同社の負債を一身に負うことになった。返済完了までに５ヵ年を要したという[25]。

帝産オート会社を整理し終わった1951年８月、田上は建築界に復帰した。田上建築制作事務所としての活動期の始まりである。1958年６月有限会社、1964年２月株式会社へと発展した。

この期の田上に力を与えたのは、北海道銀行頭取島本融との出会いである。島本は田上設計の旧小熊邸を銀行社宅として買い取り居住していた。島本との出会いは、島本邸(旧小熊邸)増築、さらに北海道銀行支店の設計へとつながった。1953年豊平、北見両支店、1955年旭川支店、1956年東京、当別、南一条、羽幌、利尻、伊達、琴似の８支店を設計し、1962年～1964年にかけて山下寿郎設計事務所と共同で本店を完成させている。

戦前の第１期制作期が住宅を中心としたのに対し、戦後は銀行や事務所建築、ホテル、のほかユースホステル、学校、博物館、美術館など幅広く活動範囲が広がった。

1964年日本ユースホステル協会建築功労賞を受賞し、1971年北海道ユースホステル協会長となった田上は、札幌宮ヶ丘(1960)、支笏湖(同)、網走玉川(1961)、北湯沢(1962)、美幌(1965)、富良野(同)、定山渓（1967)、標津(1969)、小清水中山記念館(1970)、室蘭（1971)、インサイダー大沼(1972)、摩周湖(同)、留辺蘂(1974)などのユースホステルを設計している。

設計活動だけでなく公職も増大した。1941年北海道建築士審査会委員を初めとして、北海道建築士会理事(1958)、北海道百年記念塔協議設計審査委員(1968)、北海道新聞野外音楽堂競技設計審査委員長(1969)、北海学園大学工学部教授(同～1973)、日本建築家協会北海道支部長（1972～1974)、北海道美術館建設委員会委員（同)、北海道建築設計事務所協会会長(1976)などの建築界関係、北海道文化賞審査委員(1969)、北海道国際文化協会会長(1970)、北海道文化振興協議会委員(同)、北海道芸術祭実行委員長(同)、ライオンズクラブ国際協会ガバナー(1971)、北海道青少年育成推進協議会会長(1972)、札幌市民芸術賞ならびに文化奨励賞

24：『受賞に輝く人々(昭和五十三年)』p.65

25：『北のまれびと〈エゾライト・田上義也〉(上巻)』pp.151～156

選考委員長(1973)など文化面でも活躍した[26]。

建築のみならず北海道の地域文化向上に貢献した田上にたいし、1963年北海道総合開発功労者知事賞、北海道総合開発道民大会賞、1965年北海道文化賞(芸術部門)、1971年勲四等瑞宝賞、1977年札幌市芸術功労賞、1978年北海道開発功労賞、1982年北海道新聞社会文化賞などが贈られている[26]。

1991年8月17日92歳で永眠した田上の葬儀は、8月19日棺前祈会、20日葬儀式と、自身が設計の日本キリスト教会札幌北一条教会新会堂(1979)で行われた。1927年竣工の旧会堂も田上の設計で、市民にも愛され「北一条教会堂を保存する会」も結成されたものの1979年解体されている。かわって別の敷地に建設されたのがこの新会堂であるが、「北の建築の使徒」として孤軍奮闘した若き日の作品の方に筆者は軍配を挙げたい。本論が戦前の第1期を中心テーマにとりあげるのもこのへんの理由によるが、それとともにフーリーアーキテクトとしての田上自身の個性がより明解に表われていると思われるからである。

26：『北のまれびとくエゾライト・田上義也>(上巻)』pp.166～167

8-5　戦前期の作品活動

表8-5-1 は、1922(大正11)年から設計活動の中断する1940(昭和15)年までの設計作品を、竣工年順にまとめたものである。田上義也から寄託された500枚以上に及ぶ設計図類や竣工写真125点ほどを整理し、さらに文献、聞き取り、現地調査を実施した結果である。

代表作品個々については、10章以降で扱うので、ここでは作品全体の傾向についてのみ述べよう。これまでに明らかとなった戦前期の作品数は、計画案も含め、住宅88件、住宅以外79件、合計167件である。

住宅作品では、札幌44件、小樽13件、他道内9件、道外5件、不明17件と、圧倒的に札幌に作品が集中している。このうち現存の確認されたものは、14件である。

住宅以外の作品を建築種別でみると、カフェー・レストラン14件、ホテル・旅館・会館11件、店舗11件、劇場・舞台9件、病院・診療所6件、宗教建築4件、工場・鉱山4件、事務所3件、学校、墓各2件、博物館、派出所、郵便局、市場各1件、その他9件で、現存は2件のみ確認された。

地域別では、札幌27件、旭川6件、小樽2件、帯広2件、網走2件、釧路2件、他道内13件、道外4件、不明21件と、住宅同様札幌に作品が多い。

表8-5-1　田上義也初期作品一覧

年	住宅 建築名(現名称)		非住宅 建築名(現名称)	
1922	大竹虎雄別邸(東京都港区芝白金三光町)	☆		
1924			バチェラー学園(札幌市北3西7)	☆＊
1925	高田治作(現江口修)(小樽市富岡1-26)	○ ＊	フナミヤ食堂改造[2](小樽市)	☆
	高松泰造邸計画案		西谷工場[2]	△☆
	アパートメントハウス計画案		小林農場[2]	△
	斎藤		北都に建つホテル計画案	
1926	横川(小樽市)		北大五十年祭記念装飾(札幌市北大構内)	☆
	島野一二(小樽市永井町1)		国産振興博覧会豊平館食堂(札幌市中島公園)	△☆
	関場別荘親海荘[2](小樽市銭函)		国産振興博覧会野外舞台(札幌市中島公園)	△
	百円の家(西村真琴宅改築)(札幌市南3西13)	△☆	札幌第一農園Ⅰ(札幌市南2西13)	＊
	田町以信男[2](札幌市北2東2)	△	札幌市医師会館(札幌市南1西19)	☆＊
	関場不二彦(札幌市北1西1)	△☆＊	水野眼鏡店[1](小樽市銭函)	
	田上自邸・アトリエ(札幌市南12西13)	☆＊	希望寮改造[2]	☆
	伊藤[2]	△		
1927	小熊捍(現道銀円山クラブ)(札幌市南1西20)	○☆＊	日本基督教会北一条教会(札幌市北1西6)	☆＊
	高田寿作		延命園[1](札幌)	△
	坂牛直太郎(現坂牛正志)(小樽市入船町5-8)	○☆＊	愛隣館(札幌市豊平)	☆＊
	金子実(札幌市北17東7)	☆＊	眞人園[2](札幌)	△
	坂敏男(現坂輝彦)(小樽市見晴289)	○☆＊		
	上田寿久[1](小樽市)	△		
	佐中直[1](小樽市)	△		
	白雲山荘(札幌市琴似)	△☆		
	友松書斉[2](札幌市)			
1928	小川義雄[2](和寒)		松岡農場事務所(和寒町字西町36)	☆
	織仁三郎[2](和寒)		亀屋本店(札幌市南4西4)	
	吉田角次(現袴塚厚三)(札幌市北16西4)	○☆＊		
	小川隆子(札幌市)	☆＊		
	佐田作郎(現小熊徹)(函館市元町32-10)	○☆＊		
	白浜潔計画案(札幌市)			
	唯是健彦			
	城生(札幌市)			
	櫻田(小樽市)	＊		
	鈴木清太郎(札幌市)	☆＊		
	澤枝重雄(札幌市北2西22)	＊		
	東武別邸(旭川市7-13)	☆＊		
	島彦佐衛門(小樽市)			
	上田久寿子(現MOA小樽布教所)(小樽市入船5-8)	○☆＊		
	小金井(札幌市)			
	青地(札幌市)			
	岡本資敏[2](函館市)	△		
1929	里見勝蔵・アトリエ(東京市外井荻町下井草)	＊	亀屋支店(札幌市南1西3)	☆＊
	外山卯三郎(東京市外井荻町下井草)	☆＊	三条ビル[1]	△
	深澤靖弘(札幌市)		アポQ(旭川市4-8)	☆
	西村勇(札幌市)		佐々木座(旭川市1条6)	
	本間紹夫			
	秋野			
	鬼窪重作(札幌市北1西26)	○ ＊		
	大和田一アトリエ[2](札幌市)	△		
	相川正義(札幌市)			
	遠藤[1](札幌市)	△		
	小谷義男[1](札幌市)	△		
	秋葉幸作[1](札幌市)			
1930	後藤惣作(札幌市大通西27)	☆＊	中島温泉(札幌市南10西2)	☆＊
	安部信明(札幌市)	☆＊	札幌第一農園Ⅱ(札幌市南1西24)	
	桜庭口治・借家(小樽市)		円山郵便局(札幌市南1西24)	☆＊
	城下良平(現城下一夫)(札幌市南5西21)	○☆＊	富貴堂改修(札幌市南1西3)	☆
	安部信明増築(札幌市)		マリヤ手芸店改修(札幌市北2西3)	△☆
	桜庭口治(小樽市)		浅野炭山病院(沼田町浅野地区)	＊
	小島増築(函館市元町32-10)	○△	岩城新聞店(旭川市2-7)	
	瀬川山吾(現西村和男)	○△	幌西巡査派出所(札幌市南11西14)	☆
			ヤマニ(旭川市4-8)	☆
			斎藤家累代之墓(旭川市神居町)	☆
			札幌クリスチャンサービスセンター[2](札幌市)	

年	住宅 建築名（現名称）		非住宅 建築名（現名称）	
1931	太泰康光(札幌市南1西21)	☆	山下紅療院(札幌市南1西9)	○
	ストレートラインタイプ計画案		カフェー三條(札幌市南3西3)	△☆
	小川隆子増築(札幌市)		国産振興北海道拓殖博覧会野外舞台[3](札幌市中島公園)	
	立原・借家(札幌市)			
	国吉(札幌市)			
	西尾(札幌市)			
	大塚謙三(札幌市)			
	大津山弘(札幌市)			
	原忠平(秋田市)			
1932	クラタ氏の住宅		小笠原商店卸部(札幌市北3西2)	
			千秋庵本店改築[1]	☆
			紀文茶屋(札幌市南5西4)	
			近水ホテル(弟子屈町字弟子屈120)	☆
			高等芸術学院	
			函館毎日新聞社(函館市鶴岡町1)施工:木田組	☆
			キャピタル(釧路市末広町2-11)	☆
			高木堂本店(小笠原楠彌)[1]	
1933	白浜潔計画案(札幌市)		パリジャンクラブ(旭川市4-7)	
			千秋庵帯広支店(帯広市西2南9)	
			池田病院(札幌市南2西4)	
			十勝川温泉ホテル(音更町十勝川温泉南13)	☆
			近水ホテル増築(弟子屈町字弟子屈120)	☆
			白雲荘(鹿追町然別湖畔温泉)	
1934	相内(現大谷哲也商店事務所)(札幌市南1西28)	○	帯広観月園(音更町十勝川温泉)	☆
	吉田[1](帯広市)	△	共同魚菜市場(釧路市)	
	豊田[1](釧路市)	△	志田病院(帯広市西2南8)	☆
	佐々木ロシア総領事[1](東京)	○	ハリストス正教会計画案(札幌市)	
			石井 漠のための円形野外舞台[1]	△
1935	吉町太郎一(現吉町晃一)(札幌市宮の森2-7)	○△	カネシマ呉服店[1]	
	小熊・別宅[1](札幌市)	△	宇喜代(岩内町字万代29)	☆
1936	鬼窪・借家(札幌市)		網走観光ホテル(網走市南2西1)施工:三井組	☆
			北見郷土館(現網走博物館)(網走市桂ヶ岡公園)施工:宍戸組	○☆
			青騎手[1](生田原町)	△
1937			北の王鉱山(生田原町)	☆
			是安小児科	
			石狩海浜ホテル(石狩町弁天町)施工:増田鍬平	☆
1938	民衆会社ボーディングハウス(札幌)			
1939			青森文芸館[1]	△
			弘前新光キネマ	
			能代国民劇場[1]	△
			盛岡国民劇場[1]	△☆
1940	西村増改築(旭川市)		仏舎利本殿計画案	
	宮崎増改築			
	改場別宅			
1944			帝産航空落部工場(落部町)	
不明	菅原借家(札幌市)		松竹座計画案(札幌市)	
	国吉借家(札幌市)		組合教会記念会館	
	中村 信似(札幌市)		本間家累代之墓	
	岡本		三条会館将設館	
	佐藤(札幌市)		青少年会館	
	倉田清純		月水館ホテル	
	是安		スタジオ ポプラ	
			報恩学園洗濯工場	
			くりはら氏のレストランと撞球場	
			右翼エンカイ場	

不明は、年代不明の図面資料分
＊：『田上建築畫集』(1931)掲載作品
○：現存
☆：竣工時の写真資料が残るもの
△：設計図書が保存されていないもの

注1：『北のまれびと(下巻)』年譜による
注2：『田上義也建築作品展覧会目録』(1930)による
注3：田上義也スクラップブック添付記事

第９章　田上義也建築作品展と建築畫集

田上義也の北海道における本格的な建築家としてのデビューは、1923年11月の来道後１年間のブランクを経た1925年４月、札幌時計台で開催した「田上義也建築作品展覧會」である。日本近代における最初の建築展としては、1920(大正９)年の分離派建築会展覧会がよく知られているが、個展としては1925年１月日比谷の「世帯の会」事務所で開催した遠藤新の建築展が知られるくらいで、田上のこの作品展は個人展として、わが国ではかなり早い試みであるように思われる[1]。２日間という会期にもかかわらず、北海道初ともいえるこの建築展は注目を浴び、初日の講演会には北海道帝国大学の今裕総長はじめ、西村、柳、関場教授や学生、市民など300名ほども集まった[2]。

その後も1928年、1930年４月、７月と３回の作品展を開催したが、これらの作品展の内容については、これまでほとんどふれられることがなかった。

本章では、残された作品展のパンフレットや当時の新聞記事[3]などを資料に、作品展の概要や新聞評、講演内容および初めての作品集である『田上義也建築畫集』についてふれ、田上義也の初期活動期における設計理念や制作姿勢をみていきたい。

1：遠藤新生誕百周年記念事業委員会編『建築家遠藤新作品集』(1991年9月25日)。山口廣『解説・近代建築史年表』(1968年)および、『日本の建築「明治大正昭和」1～10』を参照したところでは、図集としては1904（明治37）年以前に発行の『山口博士建築図集』が早いが、建築展としては1920年の分離派建築会展覧会を最初とするグループ展が多い。

2：小山一男『北のまれびとくエゾライト・田上義也〉』(現代出版社、1977年)

3：新聞記事は、田上義也氏所蔵のスクラップブックに収録のものを利用した。現在筆者に寄託されており、氏の寄稿や作品について報じた記事、雑誌の切り抜きなどをA-4判 125ページにスクラップしている。1921年頃から35年頃までの記事が多い。記事掲載の年月日がほとんど未記入のため、原則として元記事にあたったが、確認できないものもあり、スクラップ記事そのものを資料とした。

9-1　田上義也建築作品展覧会(1925)

前述のように、北海道で初めての建築展は、1925(大正14)年4月26(日曜)、27(月曜)日の２日間にわたり、札幌時計台で開かれた。

26歳の青年が、北の建築創造へのビジョンや建築への熱い想いをぶつけた実施案や計画案20数点を並べたその展覧会は、「準備の整はない点もあった」[4]が、初日の入場者数は 500名を数えた。青年建築家の熱き想いは、残されているポスター(図9-1-1)からも伝わってくる。 470×580㎜ほどの紙に、太陽や人を線刻した黒地と「田上義也建築展覧会」と線刻した赤地とを組み合わせた版画で、下に日時や会場がなぐり書きされている。建築展開催は決めたものの会場や会期などが直前になって決ま

4：北海タイムス(1925.4.27)「建築展は盛況」

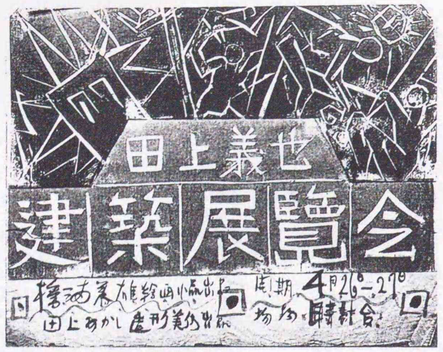


図9-1-1　第1回建築作品展ポスター

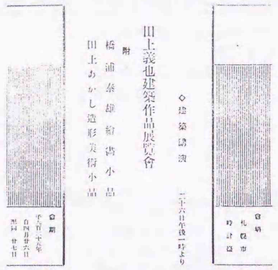


図9-1-2　第1回建築作品展パンフレット表紙

ったためなのかも知れないが、青い絵具の筆の走りが、かえって社会に向けての青年の気負いを感じさせる。

賛助作品として、共に道東を旅した橋浦泰雄[5]の小品17点や、先妻田上あかしのテーブルクロス、クッション、壁掛けなどのテキスタイルの「造型美術小品」[6]も出展された。

北海タイムス[7]は、「各作品を通じて芸術的に洗練された新鮮な線と色彩との交錯が自ら作者の柔らかな質實さを語ってゐて同設計圖でも彼の機械的で固い世俗的な作品とはかうも異なるものかと痛切に感じさせ」、「鋭敏で正確な作者の建築に對する基礎が各作品に一貫し横溢してゐる」と高く評している。

作品は以下のものが出展されたが、そのうちのいくつかは新聞評[7]でも取り上げられた。

1　バチエラー博士に贈られた寄宿舎。
2　アパートメント、ハウス。
3　銭箱山の上に建つ小林氏農場。
4　劇場を可ねた公會堂。
5　教會堂の草案。
6　音樂堂の草案。
7　北都に建つホテル。設計。
8　レストランと喫茶店と。
9　雪國の為の建築。
10　人間共同生活に對する建築的表現。
11　畫家のアトリエ習作。
　(a)日本畫家の為に　(b)洋畫家の為に
12　子供中心の家。
　(a)寝室、勉強室　(b)外部全景、
13　正しく空間を利用せられた家。
14　住居を兼ねた商店建築。
　(a)毛塚食料品店、(b)ストウジオポプラ、
15　住宅設計。
　(a)九坪より五十坪迄の家のスケッチ　(b)小谷氏邸
　(c)小川氏邸　(d)高松氏邸　(e)高田氏邸　(f)木田兄に贈るアトリエ、
16　室内家具の設計。

5：第８章注10参照。

6：「田上義也建築作品展覧會」パンフレット

7：北海タイムス(1925.4.26)「春を彩る建築展/今明日時計臺にて/本日は建築講演會」

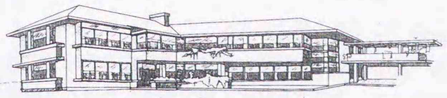


図9-1-3　バチェラー学園

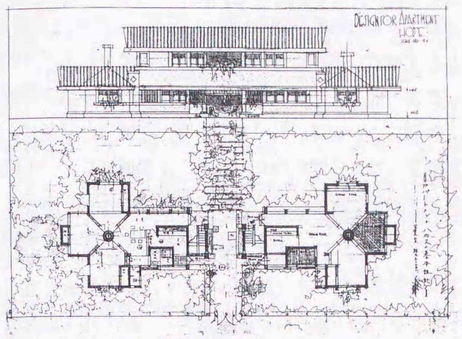


図9-1-4　アパートメントハウスの基本設計

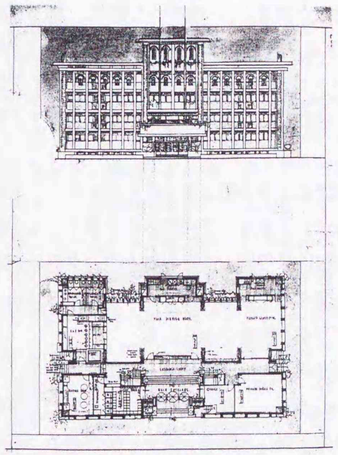


図9-1-5　北都に建つホテル

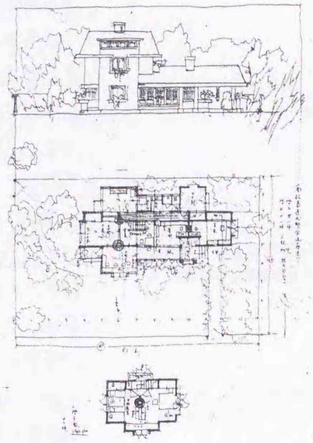


図9-1-6　高松邸

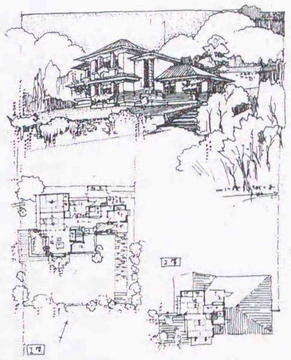


図9-1-7　高田邸

新聞評では、１のバチェラー[8]博士に贈られた寄宿舎(バチェラー学園)は「健ゝゝ牢で質實な點に優れてゐる」、２のアパートメントハウスについては「在来の貧弱な長屋建ての世界を全く脱し切つてゐる。此處に住む人々は自ら温かい人間味に手をつなぎ合なくてはなるまい」、３のような「山の孤寂な農場にもかくてこそ親しみ深い人の安息所は建つ」と感想を述べ、７北都に建つホテルは「僅少な地面とその上層の空間とが完全に活用された點に於いて模範的」とし、９雪國の為の建築では「人もか

8：近年ではバチラーと記述することが多いが、ここでは当時の呼称に統一した。

ゝる建築に住み得る程度に開放されゝば愉快である」という。12の子供中心の家では「ブルヂヨアの子弟でなくてはかゝる完全なホームに住むことが出来ぬと云ふのは建築の罪ではなくてたしかに社會の罪」とし、15の住宅設計では「正しい生活の様式と健全な趣味性とを充分に味あはせる」「浮薄で無駄の多い所謂文化住宅に飽き飽きした吾々は此處に似て非なる」作品を知ることができ、「和洋二重生活の負擔に堪へ切れない現代に」多くの解決をもたらすであろうと結んでいる。

9：仁多見巌訳編『ジョン・バチェラーの手紙』(山本書店、1965年)

1のバチェラー博士に贈られた寄宿舎(図9-1-3)は、1925年7月着工[9]、同年9月に完成した北海道における建築作品第1号である。アイヌ保護学園（バチェラー学園の前身）の寄宿寮として建てられた木造2階建ての寄宿舎である。詳細については、11-1バチェラー学園でとりあげたが、1924年10月の小樽新聞には3日間にわたり記事[10]が連載され、「札幌に生まれた珍しい建物」「通風と採光に苦心した建築家／母に抱かれたような温か味」「勝手の違った建築に大工も驚く／安価な材料で堅牢な建物」などの見出しでとりあげられた。

10：小樽新聞1924年10月3、4、5日(前掲『ジョン・バチェラーの手紙』)

2のアパートメントハウスは、ケント紙に色鉛筆で着彩した1925年3月付けの図面（図9-1-4)が残されている。当時のアパートに対し、あまりにも「孤立的で」「社交性も成長の可能も見られ」[11]ず、住民生活不在の状況であると批判的であった田上が提言した「温かい人間味」[12]ある「手をつなぎ合う」[12]アパート案である。軒高を抑え水平性を強調した2階建て建物で、住棟中央、背後のパーゴラに続く中央通路は、腰掛や机を置いたコミュニティースペース、通路左右に階段室と居室群を配置する計画である。

11：小樽新聞(1925.6.16～6.17)「正しい建築(上)、(下)」
12：北海タイムス(1925.4.26)「春を彩る建築展/今明日時計臺にて/本日は建築講演會」

7北都に建つホテルは、正面図と1階平面とを1枚に収めたケント紙(540×760㎜)の着色図面(図9-1-5）である。中央部のみ5層とした4階建ての建物で、4、5階の開口部に半円アーチをみせるややクラシカルな意匠の建物であるが、中央玄関廻りや2階バルコニーの柱型の装飾や内部の柱型や平面表現にはライト風の影響がみられる。

15の住宅建築のうち図面資料が残るのは、高松邸と高田邸である。高松邸は、B3版程度(342×469㎜)のトレーシングペーパーの下に2階を描いた紙片を張り付け、色鉛筆で着彩した図面（図9-1-6)が残る。高田邸の図面（図9-1-7)は、外観パースとフリーハンドの1、2階平面が、B4版より一回り大きい美濃紙(271×392㎜）に縦位置でバランスよく収められている。10-2で述べるように、北海道における住宅作品第1号として実現したもので、1階各室は「唐紙で仕切られ、広くも小さくもすることができ」[13]、田上の住宅作品に共通するゆったりとした玄関ホールがみられる。「大空を望む」[14]階段室隅窓も特徴的で、洋間の南のベランダからは小樽の全景や石狩の海を望むことができ、「小さい地面と小さい建坪を生かすは自然を庭にすることである」[13]との主張をよく表現している。ベランダ上のパーゴラは、大気との「デリケートな」[13]交歓を意識したもので、住宅作品では多用されたモチーフの一つであった。

13：北海タイムス(1925.11.6)「雪國に相應しい新しい建築」(下)
14：『田上建築畫集』(1931年)

展覧会のパンフレットには、「建築に就いて」と題する田上の一文がある。「正しい建築は生きている。強い並木の様に弾力がある。人間は建築と共に成長する。正しく建築を建てよ、そして生活の基礎を正しく開け。全一なる建築は……美に即した有機的相関である。」と述べ、当時の建築に対し、「いたずらに西洋文明の残滓をとり入れ、且ては美の完璧であった古代日本建築の幽香を毒している」と批判的である。

「自分のめざす仕事は拙い。粗暴であり未完成である」が、「正直に自分自身の鑿で恵れる建築を刻んで行きたい」と決意を表明している。

初日の午後1時からの講演は、この小論をさらに展開させたものであった。「會券二十銭」[12]の有料にもかかわらず300余名の聴衆が集まり、竹内武夫北海タイムス記者の開会の挨拶後、橋浦泰雄が『美と建築』、田上が『建築と自分』と題し講演を行った。

田上の講演は、『正しい建築』と題して新聞[11]にも掲載された。その要旨は、我々は、生まれ落ちてから葬られるまでの一生を「建築の懐にいだかれ」[11]、人間と密接な深い関係にありながら、建築に対して「どれ丈の正しい理解と情味を」[11]持っているだろうか。また、建築から受ける影響が、深くて大きいことを自覚している人もどれほどいるだろうと、建築への一般の理解を喚起し、「正しい建築」というのは、人間の生活の真に必要なものに立脚してのみはじめて生まれ得ると語る。

さらに設計者の態度に関し、多くの設計者が注文者の要求をあまりにも無反省に受け入れすぎ、注文者の気紛れ、偶然性によってのみ建てられていく危険性を秘めていると警告し、注文者の要求を聞くが、その要求を受け入れるか否かは、設計者の側にまかされている。医師の処置に対して、素人が口をはさむことができないように、「建築も建築家のみがあづかり得る独舞台である」[11]とも断言する。

住宅について、「窓でも棚でも椅子でもが皆其の建築全体から芽生え生まれて来るもの」[11]でなければ、「如何に一寸目には美しくても實は醜悪」[11]極まるもので、家具といえども「建築全体と脈絡あり血を分けあったものでなければならない」[11]。 美しい眺望を優先した結果、主婦のための台所その他が犠牲となった住宅は、どこかに犠牲を負わせる社会生活と同じく、正しいものとは思えないという。

さらにアパートにも言及し、あまりにも「孤立的で」[11]「社交性も成長の可能も見られ」[11]ず、「其處からはたゞ不自然な感じのみ受ける。文化生活だ現代生活だと云っている間に貴い人間生活はすっかり埋没されてしまう。」[11]「呼吸し赤い血の脈搏つ建築のみがはじめてアパートメントの土臺となりうる。」[11] と、住民生活不在のアパート建設に一石投じている。

構造や材料にもふれ、「建築の堅牢は材料のマス其のもの」[11]にあるのではなく、それを如何に用いるかにある。強い建築は、五重塔のように弾力を有し自然力に対抗できるものでなければならず、この点で木造建築が優れている。木造建築を正当に扱うことによって、住宅建築は十分に解決される。要するに建築は実用である。美も実用に即してのみはじめて美であると結んだ。

この講演や展覧会の反響は大きく、やがて関場博士邸(1926年)や小熊邸(1926年)など代表作の設計依頼につながり、田上の華々しい活躍のきっかけとなるのである。

9-2　第３回田上義也建築作品展展覧会(1930)

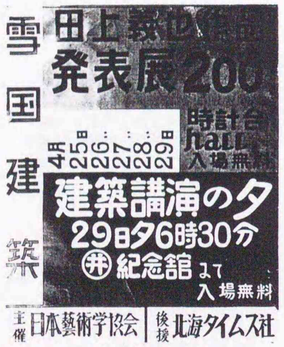


図9-2-1　第3回建築作品展ポスター

1928年に開催された作品展については、『北のまれびとくエゾライト・田上義也>(下巻)』年譜に、今井記念会館にて展覧会と講演会「雪国的造型」を開催との記載があるが、関連資料が見出せず詳細は不明である。かつて筆者は、『田上義也建築作品展について(田上義也研究4)』(日本建築学会北海道支部研究報告集No66、1993.3)で、第2回展の資料として田上所蔵スクラップの年代不祥新聞記事をあげたが、その後の調査で、田上所蔵資料の中から後述の第３回札幌展の目録に、会期、会場と講演題目を旭川版に訂正印刷した帯紙を貼った目録が発見され、第３回展は、札幌会場で４月、旭川会場で７月に開催されたことがわかった。改めて訂正しておきたい。日本藝術學協會主催であることから、翌年２月出版の『田上建築畫集』の販売宣伝も兼ねていたものと推察される。

２度の作品展を経験済みの田上は1930年４月、札幌移住６年を回顧して、３度目の作品展を開催した。日本藝術學協會主催、北海タイムス社後援のこの展覧会は、札幌時計台講堂を会場に、４月25日～29日の５日間の会期で行なわれた。

３回展の縦長(646×520㎜)ポスター「田上義也作品発表展200」(図9-2-1)は、赤と黒と地の紙の色とでたくみに構成し、展覧会名や会場、会期なども丁寧にレタリングされ、テーマとして「雪国建築」がうたわれている。

会期の最終日29日には、18時30分から丸井記念館（札幌市南1西1）で「建築の夕」[15]を開催した。講演は、服部光平『生活の機械的構成』、佐野四満美『歪める建築風景』、菅野利助『田上の家』、福岡伍ㅅㅅ一『住宅建築に就いて』、大黒薫『人体の建築と家の建築』、田上義也『雪國生活に即せる新精神の建築』[15]の順に行なわれた。

15：田上義也建築作品展覧会目録

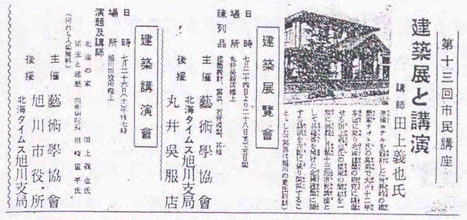


図9-2-2　第3回建築作品展旭川展の案内記事

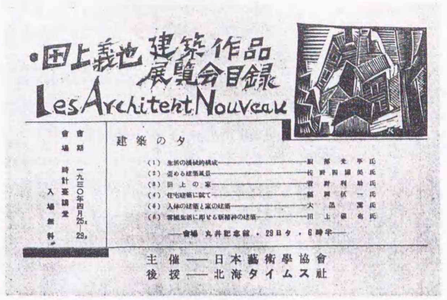


図9-2-3　第3回建築作品展目録

同展はさらに７月24日から28日までの５日間、日本藝術學協會主催、北海タイムス社旭川支局、丸井呉服店後援で、「丸井呉服店樓上」[16]を会場に開催、建築図面のほか、写真や石膏模型などが出展された。

26日(土曜)の午後７時から、「旭川市役所樓上」[16]講堂を会場に、同協會主催、旭川市役所、北海タイムス旭川支局後援で「建築講演會」を開催。入場無料の同講演会は、第13回旭川市民講座を兼ねていた。当日は、猪野田博の開会の辞に続き、竹内武夫が『田上の家』と題して田上の建築業績について紹介、沼崎重平向井病院長は『衛生と建築』で、建築と湿度並びに採光の関係について衛生上から述べ、田上が『北國建築に就いて』と題して、「雪國に即せる新精神の建築に就て」[17]語った。10時に散会したが、聴衆には「鹽谷博士夫妻、原市議、飯島西村組支配人など」[18]文化人、政治家、建築関係者など多数集まったという。

日本藝術學協會(東京外ㅅㅅ外井荻町1,100)、田上建築制作あとりえ(札幌市南12西13)連名で発行された「田上義也建築作品展覧会目録 Les Architekt(ㅅㅅ) Nouveau」(図9-3-2)には、外山卯三郎の序言、1927年作品「雪國に建つ新精神の家(1)」(筆者注一愛隣會無料診療所)写真、作品目録、1927年作品「雪國生活に即せる新精神の家(2)」(筆者注一小熊邸)写真、建築小論の順に収録している。

作品目録は、以下に挙げるように、1924年～29年の６年間に竣工した作品65点を一覧している。このうち○印をつけた25点（畫集は29作品を収録している）が、翌年出版の『田上義也建築畫集』に再録されている。

1924
(1)アイヌ保護學園……建設 ○
1925
(2)高田氏住宅……建設 ○
(3)フナミヤ食堂……改造
(4)小林農場……建設
(5)西谷工場…… 〃
1926
(6)島野氏住宅……建設
1926
(7)觀海荘(関場氏別荘)……建設
(8)関場氏住宅…… 〃 ○
(9)田町氏住宅…… 〃
(10)北大五十年祭記念装飾…… 〃
(11)醫師會館…… 〃
(12)札幌第一農園…… 〃 ○
(13)希望寮……改造
(14)田上アトリエ…… 〃

16：田上義也スクラップブック「第十三回市民講座／建築展と講演」(北海タイムス旭川版か。1930.7.記事)

17：田上義也スクラップブック「田上氏の建築講演」(北海タイムス旭川版か。1930.7.記事)。旭川版目録では、『雪國に即せる新精神の家』とある。

1926
(15)西村眞琴氏書齋……改造
(16)田上の家……建設 ○
(17)伊藤氏住宅…… 〃 ○
(18)同原案…… 〃
1927
(19)日本キリスト教會堂……建設 ○
(20)眞人園…… 〃
(21)小熊氏住宅…… 〃 ○
(22)白雲山莊…… 〃
(23)阪氏住宅…… 〃 ○
(24)友松氏書齋…… 〃
(25)金子氏住宅……建設
(26)愛隣會無料診療所…… 〃 ○
(27)坂手氏住宅[18]…… 〃 ○
(28)坂田氏住宅…… 〃
(29)豊平館パーラー[19]…… 〃
1928
(30)松岡農場……建設
(31)小川義雄氏住宅…… 〃
(32)綾仁氏住宅…… 〃
(33)小川夫人住宅[20]…… 〃
(34)吉田夫人住宅…… 〃 ○
(35)龜屋ティーサロン[21]…… 〃 ○
(36)鈴木氏住宅…… 〃 ○
(37)澤枝氏住宅とアトリエ…… 〃 ○
(38)城氏住宅……建設
(39)水野氏住宅…… 〃
1928
(40)島氏住宅……建設
(41)櫻田氏住宅…… 〃 ○
(42)東武氏住宅…… 〃 ○
(43)上田氏住宅…… 〃 ○
(44)岡本氏住宅…… 〃
1929
(45)外山氏住宅……建設 ○
(46)里美勝造[22]〃氏アトリエ…… 〃
(47)大和田氏アトリエ……未設
(48)本間氏住宅……建設
(49)白濱氏住宅……未設
(50)鬼窪氏住宅……建設 ○
(51)深澤氏住宅…… 〃
(52)西村勇氏住宅…… 〃
(53)佐々木座……未設
(54)龜屋支店……改造
(55)相川氏住宅……建設
(56)三条……改造
(57)秋野氏住宅……建設
(58)アボQ……改造
(59)遠藤氏住宅……建設
(60)中島温泉…… 〃 ○
(61)小島氏住宅……改造
(62)後藤惣作氏住宅……建設中 ○
(63)阿部氏住宅…… 〃 ○
(64)札幌クリスチン、サービス、レグー…… 〃
(65)浅野炭礦病院…… 〃 ○

18：坂牛氏住宅の間違い。畫集でも同じく違っている。
19：1926年開催国産振興博覧会会場に出展の豊平館食堂と思われる。
20：畫集では1927年作品。
21：畫集では1929年作品。
22：畫集では勝蔵。
23：『田上建築作品展覧会目録』による。以下の「　」は、いずれも同目録による。

外山は序言で、田上義也は6年前「新しき力の吹き来る雪國」[23]の「刻一刻と気短に変化してゆく大自然の新鮮なる節奏分割、その創造の真剣さ」に触れることによって、「雪國的造形意図」への「衝動」がおき、この「衝動」によって「如何にしたならば北方的形体〃構成を遂行し得るかを考え」「本格的造型意図構成の為に」「雪國の吹雪の中に踏止まった」と語る。

さらに、「困苦の追及とにがい内的闘争の四年間」に作品60余点を制作したが、それは単に「表面をなでまはした皮相」の計画ではなく、「深くその根を雪國におろした北方生活の核体に突き当た」るものであって、「内面的生活の把握により」咲き出た「荒野の花」にたとえている。

雪国の「健康なる文化の建設こそ他よりの借り物ではいけない　北方独自の必然的芸術によって雪國生活は育てられるべきである」と結ぶこの序文は、田上が一貫して「雪國生活」に適した「雪國独自の形態」を追及する制作姿勢を高く評価している。

この序に呼応するように、後半の「建築小論」では、田上の建築論が展開する。

我々が建築に深い関心を寄せるのは、「生活自体をより正直に更に純粋に形の世界に燃發せしめ、これによって新しく生活可能の方向を十分に追及しようとする衝動にある」。従って建築とは、「生活の反映ではなく、生活の発映であらねばならぬ。生活を強く生き生きと新鮮に発映せしめんとする形体であらねばならぬ。こゝでは傳流の追及を必要としない。」と言い切る。また、20世紀が建築に明るい希望と深い関心を有する理由は、「實生活と物質による内面的に切迫せる今日の事情が、いかなる型に轉生し、いかなる方向に、精神の自由を得て進みゆくか」という一点に要約されており、建築家は、この問題を解決するという任務を帯びて「新しき時代の尖端」を歩んでいくのだという。

雪国の建築は「独自の形態があるべき」で、「暖国の文化の中途半端な焼直しや欧米の寫眞帖の模倣には決して北方生活の解決はあり得ない」。「未だ十分に生活快適の實が完成されない」のは、まず「生活の創造に無関心であるから」で、「生活の正しい認識」こそ「新形態発生」の源であるとも語る。

プランと外観について、「土地の正しい認識」なしでは「間取りは産めない。土地に即して間取りが産まれ、間取りに即して外観が産まれる。よい間取りは必ずつゝましき、たたずまいの外観を産む。間取りの生命は整然たる秩序の分割である。」と述べ、「防寒、保温、すがもり」など技術的解決の「ゾート彼方に最も大切なことは「平面のリズム」」であるという。

さらに「単純で軽い構造が大切」、自重を軽減して外力(雪、風圧、地震)に耐えること、「弾力を有する樹木の如き」強さをもつこと。材料の「利かせ方」は、「力の相互扶助を」正しく考慮し、「強い構造は材料のマス(量)」ではなく「力の経済的組立」にあるなど、構造や材料についても述べ、近代建築が「構造の美」を有する点にも言及している。

当時の貧相な住環境にたいして、衣食よりも「基礎を固め窓を厳重にし、分厚い屋根を持ち、何丈の雪層にもビクともしない建築を造る」ことが急務であるとし、「建築は生活に即して産れる」「環境は個性を形成する」「雪國建築は最善でなくとも健康にして凡ゆる特色を形態化したところに素晴らしい建築が生るべきことを確信する」「雪國における生活改善の前提として新興の精神にみなぎり渡る雪國建築の具現によって吾等の生命と生活を守りたい」と結んでいる。

第１回の建築展を通じて、建築や建築家の正しい在り方を社会に問いかけた若き建築家の主張は、さらに雪国の生活にあった北方建築の造型の追及という目標に向けて結実していった。３つの展覧会は、田上義也の作品を世に紹介するためだけのものではなく、一般市民の建築への関心や意識を高めるための啓蒙活動的な意味合いが強かったが、同時に自らの設計理念の実現を、２、３年おきに自己点検するために、意識的に開催したものとも位置づけられるように思われる。こうした自己目標の到達点の節目として集大成したのが、第３回展の翌年1931年２月発行の『田上義也建築畫集』であったと考えたい。

9-3　田上義也建築畫集

1931(昭和６)年２月23日発行の日本藝術學協會編『田上義也建築畫集』は、新藝術家叢書第６巻として、東京建設社から出版された。東京新しき村印刷所で印刷された同書は、菊版、総アート紙、 111頁、箱入りで、札幌亀屋支店の写真を配した箱は、群青、赤茶色、黒で平面分割され、群青に白抜きで「 LESARTISTES NOUVEAUX ６ 」、丸みを帯びた黒文字で、「田上義也建築畫集」、下段に赤茶色のレタリング「1931 KENSETSUCHAS VERLAG TOKiO」とあり、グラフィカルな構成を意識した美しい装丁(図9-3-1)となっている。

畫集の完成前に作られたと思われる宣伝用ポスター（図9-3-2)では、「Les Artistes Nouveau ６　田上建築画集/二百部限定版・内容/寫眞版40枚 平面圖20葉/建築論 田上義也/田上の建築 外山卯三郎/田上の藝術 里見勝蔵/純フランス装/雪国建築の権威/直接申込以外には配布せず /画集２円申込所/日本藝術學協會/東京市外井萩町井草1,100」とある。実際には、写真44枚、図版25葉、29作品が収録され、定価も２円80銭となっている。

フランス製本されたクリーム色の表紙には、黒文字で「LES ARTISTES NOUVEAU 6, 1931 EDITIONS KENSETSUSHA TOKiO」と、大きめの赤文字で「田上建築畫集」とある。

扉には、恩師Ｆ.Ｌ.ライトが日本からアメリカへ帰る船中から田上に寄せた書翰写真が載り、建築論から始まって、1924～30年までの29の



図9-3-1　『田上義也建築畫集』の箱表紙

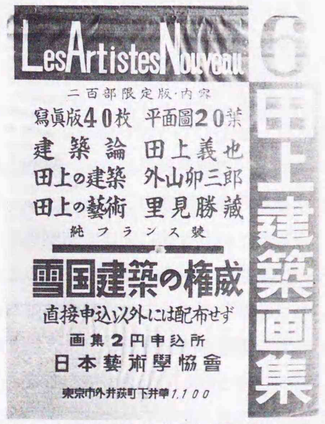


図9-3-2　『田上建築畫集』宣伝ポスター

建築作品が紹介され、評論として里見勝蔵『田上君』、竹内武夫『田上君と私』、菅野利助『田上の藝術』、外山卯三郎『アルヒテクト・タノウエ』と４名の親しい友人らが寄稿している。

同年３月22日夜には、「田上建築畫集出版記念會」[24]が、田上設計の「札幌十字街亀屋支店樓上」[24]で開かれた。この会については、櫻田某が、北海タイムス紙上に「雪國建築への使徒　青年建築家田上君建築畫集出版記念會に臨んで」[25]と題して投稿している。

当日午後６時から催されたこの記念会は、関場不二彦、小熊捍らが発起人となり、田上夫妻を主賓に、北海タイムス旭川支局長竹内武夫が司会をつとめ、発起人の関場博士が、医師会集会のため欠席した以外は関係者が集まったが、「小熊博士、安部子爵、北大医科の相川、服部、菅野三助教授、亀屋主人高橋、櫻田」[25]ら７名参加の小会食会であった。東京朝日新聞北海樺太版(1931年３月27日)には、当日の様子を写真いりで報じている。

デザートに入って、司会者が記念会開催の趣旨を述べ、田上の建築に対する感想を述べたあと、田上が北海道向けの建築に何等かの貢献をしたいと挨拶し、続いて参会者が各々感想を述べた。

小熊博士は、「自分が田上君の建築を知ったのは西村君(筆者注:西村眞琴博士）を訪ふて其隣りに建てられてあったアトリエを見た時で、其全く風の變はつた構造を見てすっかり驚き、早速西村君に誰が設計したのか聞いてみると田上という青年がやつたといふことであった」[26]と馴れ染めを披露し、さらに「家屋と云ふものは、單に實用的であるといふ経濟本位からのみ考へらるべきではない」[26]と述べ、「フランスの新進建築家コルビジェ」[26]に対し「雪國建築」[26]を研究し、フラットルーフによって「雪を外側に落さず家の中央を通して落すことにしたので、暖気によって自然に始末される」「雪と氷から蒙る惨害を完全に防ぐことに成功した」[26]と評価するものの、「家屋をもってリヴイングマシン即ち生活の機械」[26]としている考えには賛成できないし、これは田上も同感であろうとし、「田上君は高い天分を持ってゐる人である。田上君は田上君としてコルビジェとは又別の境地を開拓されることゝ思ふ」[26]と結んだ。

また櫻田は、「田上君が北海道に来たと云ふことは一つの天命である日本の領土において特殊の環境にある北海道の為に遣はされた建築家であると思ふ、我北海道の建築を研究して完成する人として田上君以上の人物があるとは私は考えない希くば田上君がますます精進して其天命を盡くし偉大なる建築家となって雪國建築を完成し北海道人の為に幸福をもたらして貰ひたい」[26]と田上青年の前途に希望を託した。

さらに安部は、田上設計の住宅に住んで非常に幸福感を得たと喜びを語り、菅野、服部助教授らののち、田上夫妻の挨拶があって集会は終了

24：東京朝日新聞北海樺太版(1931.3.27)記事

25：田上義也スクラップブック資料。1931年3月後半の記事と考えられるが、新聞紙名など不祥。

26：「雪國建築への使徒青年作家田上君」(田上義也スクラップブック)

した。

この畫集については、地元の北海タイムスのほか、東京朝日新聞などでも書評が掲載された。

北海タイムスでは、「ライトの偉大さに田上としての豊かな天才的藝術とメロディーとを加へた、そして半歳雪にうもれる北國のカラーに外觀内容ともシックリと調和するように考へ出したのが田上式建築法である」[27]「太い線と多角形なそして変化に富んだ建築を見る毎に一種の強い響きを發する絵畫的の家だと思ってゐる」[27]「従来著者が建築設計した幾千のものゝの中から會心のものを選んで収録したが文字や寫眞で見ると更に其巧みな設計が判る建築家は勿論住宅に關心を持つ人々の好参考書であり又單に余興として寫眞帳として眺めても美しい」[27]本と評され、東京朝日新聞では「親しくライト氏に師事した建築家だが、むしろ藝術家である、數十枚の作品の寫眞とゝもにその建築論は聽くに値するもの」[28]としている。

畫集に掲載された作品は、1924年～30年に建った以下の29点である。作品名はすべて畫集によった。

1 1927年作品 札　　幌　日本キリスト教會堂
2 1926年作品 札　　幌　農園（筆者注：第一農園）
3 1924年作品 札　　幌　バチェラー学園
4 1927年作品 札　　幌　住宅(小熊邸)
5 1927年作品 札　　幌　住宅(小川夫人の家)
6 1926年作品 札　　幌　住宅(田上の家)
7 1928年作品 小　　樽　小住宅(櫻田氏の家)
8 1928年作品 札　　幌　住宅(吉田夫人と子供達の家)
9 1925年作品 小　　樽　住宅(高田氏の家)
10 1926年作品 札　　幌　母と娘の小住宅(伊藤氏の家)
11 1928年作品 札　　幌　ピアニストの小住宅(鈴木氏の家)
12 1927年作品 小　　樽　大家族集團の家(坂牛氏の家)
13 1927年作品 札　　幌　愛隣會無料診療所
14 1930年作品 札　　幌　住宅(後藤氏の家)
15 1928年作品 小　　樽　住宅(上田氏の家)
16 1926年作品 札　　幌　住宅(関場氏の家)
17 1928年作品 札　　幌　畫家の住宅及畫室(澤枝氏の家)
18 1928年作品 旭　　川　政治家の家(東武氏の家)
19 1928年作品 函　　館　住宅(佐田氏の家)
20 1930年作品 札　　幌　住宅(城下氏の家)
21 1929年作品 東京郊外　畫家の住宅及畫室(里見勝蔵氏の家)
22 1929年作品 東京郊外　住宅(外山氏の家)
23 1927年作品 札幌近郊　海水浴地住宅(阪氏の家)
24 1930年作品 札　　幌　小住宅(安部氏の家)
25 1929年作品 札　　幌　住宅(鬼窪氏の家)
26 1930年作品 雨　　龍　病院(浅野炭山病院)
27 1930年作品 札　　幌　浴場兼レストラン(中島温泉)
28 1929年作品 札　　幌　店舗(龜屋)
29 1930年作品 札幌郊外　三等郵便局(圓山郵便局)

さて、畫集の巻頭に展開する田上の『建築論』は、詩的な文体で行変

27：「雪國に調和した建築設計の粋『田上建築畫集』」北海タイムス、1931.3.30)

28：「建築畫集田上義也氏著」（田上義也スクラップブック資料）北海タイムスと同時期の記事と考えられるが、該当記事は現在のところ不祥。

えも多く、表現に飛躍もあって、わかりにくい部分もあるが、かえって若き建築家の熱っぽい情感をよく伝えている。前年の田上義也建築作品展のリーフレットに掲載の「建築小論」をさらに発展させたものと考えられるが、全体は３つの部分に分け、１は「新鮮なる成形は生活を反映する。／フレシュなる生活は純粋なる成形創造を煥発する。」というフレーズで熱っぽく始まる、建築総論的な作家論および有機的建築論。２は建築的形体構成、３は「雪國的造形意圖」について、躍動感あふれる文章で建築論を展開している。

２の建築的形態構成は、さらに「1 用と形体に對する建築的直観、2 純粋平面計畫、3 純粋立体計畫」と３分節されている。

１では、前論の内容と一部重複するが、建築家は「豊穣にして弾力に充てる想念。直截なる判断と透徹せる理念。」「人間生活のあらゆる相、社会的組織の精細なる観察と、これ等あらゆる領域に對する正しい体験と洞察。」を持って、「建築的直感」で「形体発生の法則を、純粋と、経済と、均衡との関聯に於いて、正確に處理」しなければならないと述べる。

２は、主に平面について述べ、平面計画に関係する要素は、土地の大小、形に対する生理的、光学的関係、地勢、敷地の起伏などであるが、単に土地にあわせて計画するのでなく、土地の性格リアル を観取し、土地と平面との有機的分割が正しく成されていることであり、さらに単に生活の目的にかない、平面の機能と成形とが美しいというばかりではなく、さらに平面的本質への精細な観察による正しい解釈が必要である。プランの創造に於いて、随所に犠牲が見られる状態は見苦しい「病症」であり、平面の秩序は、部分と全体とが「相助け、相融合」し、「有機的相関」で統一されていることである。さらに平面は、建築の基本的リズムであり、無限への変化と生き生きした「律動的調和」がなければならない。平面分割は、遠心的でなければならないというが、ここでいう遠心性は、開放性と読み変えてもいいかもしれない。平面はまた、立面にも表象されなければならず、平面の総合的操作は、「立体への均整と、偽りなき空間分割の衝動を、発生、規定するものである。」としている。

３では、空間の在り方、空間軸をとりあげ、「立体の空間に於ける交響性」では、空間を明確に意識しつつ、部分より全体へ、全体より部分へと自然に「浪費な」く移行できる空間構成を「ヴォリューメンジムフォーニイ Volumensymphone ㎥」と命名する。さらに内部空間の水平基準線として床と天井の関係について述べ、「天井と床との近きは足元を安らかに落ち付かしめ」、「低き天井の表面は、軽快にしつらへ、床は重々しく安定の感じを出すならば、天井は均勢に浮動し、床は天井に向って柔らかく華昇的感性を漂はす。天井は....床の上層空間に隙間なく埋め、遥に軸を突抜けて、スカイラインの涯まで、水平なる理念を拡げ」、この水平線は、壁体、面、開口などの垂直要素から構成される軸と関連し

て、空間の「アウトライン」を規定し、新鮮なフォルムを生み出すとする。

「雪國的造形意圖」では、「凡ゆる雪國的要求は、一切が建築的創造の手を経ねば、厳しい自然の弾圧から奪還出来ない。」とし、「國際建築。組立家屋。定型化。」という当時の建築界の姿勢に対し、自然と郷土と人間生活の本質の正しい理解を通じて、北国の新しい建築条件に適した雪國的造形が発見されなければならないとし、この雪國的造形が「整然と組立られた、水々しい体型を発映せしむならば、北方こそ新しき世界の根元となるであろう。」と結んでいる。

第10章　住宅作品

10-0　住宅作品に見られるライト風スタイルからの離脱

田上義也がライトの制作姿勢や思想から大きな影響を受けたことはよく知られる。北海道で展開した住宅作品のうち1929年頃までの作品では、「ライト風」モチーフが大きな役割を果たしていることが認められる。あるいは、ライト風デザインを借りながら、北海道の風土へ適合するデザイン手法の模索が大きな課題であったといえるかもしれない。

この課題にひとつの解決を与えたのが、1930年頃からしきりに展開する「雪国的造型」というデザインであった。そこには厳しい北国の気候、風土を背景に、水平性よりもむしろ垂直性の強調や、インターナショナルスタイルの影響さえ認められる。

この点については田上自身も語っている。北方文化研究会編『田上義也建築抄』（らいらっく書房、1966.5.1）に収録されている座談会「田上義也と北方建築」での田上の発言を引用しよう。「私の作品がライトの影響を受けていることは確かだと思うのですが、私の作品の方向は、ライトの精神を土台にし、雪国的なリアルなものを追及して、その中に私自身のイメージを作りたいと願っていますので、ライトの作風をそのままコッピーすることは意味をなさない訳です。」「むしろ師の作風から抜け出そうとしています。」（アンダーラインは筆者）と、はっきりと言及している。「「私の真似をするな。お前の師は日本だよ。私は君の国から教えられるものが多かった。日本のサクラになるんだね。サクラの花とサクランボをつけたまえ。」と、よくライトから言われましたが、この言葉が今も私の脳裏から離れません。」とも語り、ライトが自分の模倣をしても自分以上にはなれぬこと、「百の模倣より一つの創造」[1]であること、日本の古典こそがすばらしい師となることなど、ライトの教えがライト風からの脱却を示唆していたことを伝えている。

ライト的なスタイルから脱却して独自の作風を求める田上の姿勢の萌芽は、すでに渡道前の作品大竹虎雄別邸(1922年)などにみることができるが、その解答の一つが、「雪国的造型」住宅であった。積雪寒冷の風土に対する住宅として、雪国の屋根は単純で力強いこと、構造の軽快なこと、より防寒的であること、南からの採光を大量に摂取すること、平面はコンパクトにして保温性を保ち、平面構成はエントランスホールを

1：『北のまれびとくエゾライト・田上義也>(上巻)』p.73

中心に、書斉応接室部分、茶の間など和室部、北側設備部分の３つに分割される。さらに北海道的な造型として、ダイナミックな大風、山のような吹溜り、零下30度の切られるような寒気に対抗して、「豪健にして、智的なる体型を意図」[2]すべきとし、軒先まで１、２階を通してすくっと立ち上がる柱型形状、この柱型から北側へ葺きおろされる屋根表現、階段室隅の垂直なはしご窓など、高さや垂直性が表現された。

本章では、田上の処女作であり、独自の作風を求めた萌芽と考えられる大竹虎雄別邸、北海道における作品として２番目、住宅作品では実現第１号であり、ライト風の中にもすでに雪国的造型への模索がみられる高田治作邸(1925年)のほか、代表的な住宅作品を、ライトの影響を強く受けているライト風住宅、独自の作風を求める過程としての片流れと陸屋根住宅、田上的作風として確立した「雪国的造型」住宅に分類し個々の作品を通じて田上の設計姿勢、建築観を考察する一助としたい。

2：『田上義也建築畫集』 p.52

10-1　大竹虎雄別邸(1922)　東京都港区芝白金三光町

田上資料のスクラップブック[3]中に貼りこんだ雑誌記事に、自身が「最初の作品」と書き込んだ住宅作品である。この記事は、1922(大正11)年『婦人画報』７月号(No.201)掲載のもので、『婦人画報』では、大谷富子なる人物が「新趣味と實用を兼備へたライト式建築」の見だしでこの住宅を紹介し、さらに外観、玄関、内部階段室の写真を添えている。

同年の『建築画報』11月号(Vol.13、№11)グラビアに外観と応接間さらに記事ページに「軽い感じの階段」写真が紹介されているこの住宅は、大蔵省役人大竹虎雄[4]の別邸であった。上記の雑誌記事や掲載写真のほか、1941年からの所有者長島和夫氏からの聞き取り、子息長島孝一氏の記憶による略平面図などから概要を知ることができる。

大竹虎雄別邸は、「新しい田園都市住宅」[5]が建ち並び始めた東京市芝区白金三光町254-2(現東京都港区白金台５丁目11付近)[6]の一画、大正初期に開発されたという日東坂西側の200坪58(661.91㎡)の敷地[6]に建設された。『昭和九年刊　東京市芝區地籍臺帳』では、「地価273円12　土地賃貸価格682円80　所有者大竹虎雄」の記載がみられる。

その後1941年12月初め頃、長島和夫氏が大竹虎雄未亡人より購入、採光が得られないためただちに家の向きを90度変え、一部改築した[7]。1966年６月頃取り壊されている[7]。

「電気燈や家具も加えて」約１万円で完成した建坪37坪(122.1㎡)の瀟洒な住宅は、木造寄棟瓦葺漆喰塗り一部２階建て、『婦人画報』[8]では

3：田上義也所蔵のもので、現在筆者に寄託されている。

4：1893(明治26)年会津藩士で工学博士の大竹多気の長男として出生。1917(大正６)年文官高等試験に合格、翌年東京帝大経済科を卒業、大蔵省勤務。甲府豊橋各税務署長、産業組合中央金庫監理官預金部考査課長、大臣官房財政経済調査課長、大阪東京各地方専売局長を歴任、1940年退官とともに東京市財務局長を務めた。(『第十三版人事興信録』人事興信所、1941)

5：『建築画報』第13巻 11号(1922)

6：『東京市芝區地籍臺帳』内山模型製圖社出版部(「昭和五年八月版」)および『縮尺五千分の一　東京市各區別地図』内山模型製圖社出版部(1930.8.5発行)による。

7：長島和夫氏談。

8：『婦人画報』7月号(№201、1922)。以下「　」付きの語句は、すべて同誌による。

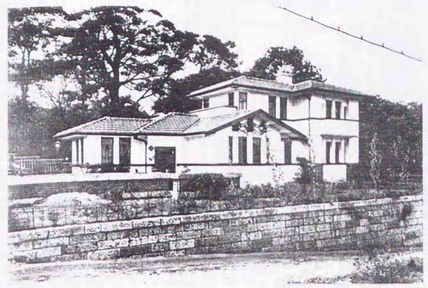


図10-1-1　大竹別邸南東外観(『建築画報』Vol.13　1922)



図10-1-2　1966年頃の大竹別邸(長島孝一蔵)

「有名なライト式建築」と紹介している。同記事には、同じ様式の建築として、ライトの帝国ホテル、自由学園、林愛作邸や遠藤新の「目白の女子大学アパトメント」(日本女子大学桜楓会アパート)、犬養邸、そして田上のこの大竹邸と伝通院のポプラなどをあげ、ライトおよびライトにつながる建築家たちの作品を総称して、「ライト式」という単語を使用している。

外観の白漆喰仕上げや縦長窓の配置など、全体の印象として、後の田上の作品よりも、ずっとライト風のモチーフは少ないように思えるが、内外で使用された大谷石や平家部分の切妻破風に見られる幾何的な装飾、低く抑えられた軒高や天井高、さらに人を迎え入れるようなアプローチの扱いなどは、ライトに通じるものといえるだろう。天井高の低さは、「或床しみと楽しさを人々に與へるばかりでなく、材料の節約という点も含まれて」いた。

敷地には特別に門などはなく、道路から幅の広い階段を数段上ると、「三和土たたき」の道が屈折して玄関まで続く。両側の低く続く袖壁コーピングは、大谷石の基礎の上にスクラッチタイルと思われる仕上げで腰を張り、上部にまた「花や樹木の花台」を兼ねた平らな大谷石を載せたもので、「さながら双手をさし伸べて来る人を掻き抱く様な」アプローチとされた。

『婦人画報』に掲載の外観写真（図10-1-1）では、道路脇の擁壁の大谷石積みや造園工事が途中であるが、『建築画報』では外構工事が完成している(図10-1-2)ので、工事完了は1922年７月から11月頃の間と考えられる。

玄関の左側が小応接室、右手に張り出した棟は大応接室であろう。大応接室妻上部に施した斜めの押縁装飾は、後の住宅作品の応接室に見られる欄間の亀甲形組子意匠への過渡的なものと、とらえることができる。

室数は全体で10室、掲載記事では、応接間大小２室、食堂寝室居間などに使用の４室、化粧室、女中部屋、納戸をあげている。ほかに「廊下に面した三尺の押入れ」３、便所３ヵ所、玄関、台所、風呂場などで構

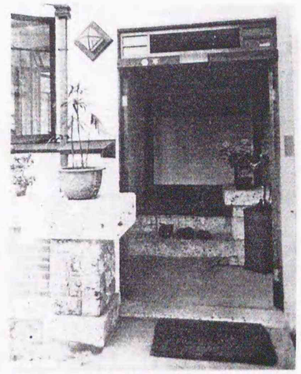


図10-1-3　大竹別邸玄関(『婦人画報』№201)

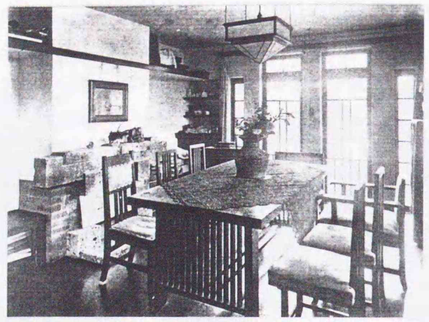


図10-1-4　食堂(『建築画報』Vol.13　1922)

成されていたという。

食堂には大谷石を張った暖炉がしつらえられており、食堂隣の「ポーチ」(テラス)は、「二十畳ほどの広さ」で、藤蔓をからませるパーゴラを備えていた。パーゴラは、時にはルーバーとして形を変えながらも、後の多くの住宅作品で使用された田上好みの意匠要素の一つである。

「ポーチ」は、住宅左端の小応接室とまっすぐな廊下で結ばれ、応接室からも「ポーチ」の緑を望むことが出来た。その「突き抜いたやうな感じは恰も家が呼吸してゐる事を意味している」と田上は語ったという。

アプローチの袖壁にも使われた「穴の多いざらざらした大谷石」は、内部でも玄関の石段や花台、応接間の暖炉に使用されたが、「耐火の目的の外に簡素な心易さを現はす為に有効」な材料として選ばれた。

照明も、「火屋ホヤ や綱コード をむき出しにせず、天井そのもの、壁そのものが柔らかく光る」間接照明とし、「旅人が森の中の灯影に吸ひ寄せられる様な」効果を演出していたという。

またインテリアの特色のひとつに、「繪の支へ ピクチャーホールド」があった。額類を架けるため、玄関や各室の長押にあたる部分に渡された細い木である。空間の連続性を強調したり、室内空間を引き締める主要なモチーフとして後の住宅作品でも多用され、旧小熊邸（1927年、札幌市）などに見られるように、壁面を斜めに走らせてグラフィカルな空間を演出する装飾としても使われたものであった。

以上述べたように、田上の作品活動の極初期を飾るものとして、また処女作に近い作品という点で、興味深い作品であるが、後の住宅作品よりもライト風というより、国際様式を意識した堅い印象を受ける。23歳の若い時代の作品ということもいえるが、むしろライトを意識しながらも、独自の作風を求めようと模索した後年の姿勢の萌芽としてとらえておきたい。

10-2　高田治作邸(現江口修邸)(1925)　小樽市富岡1－26　現存

小樽市議会議員高田治作の住宅で、北海道における竣工住宅作品の第１号であり、北海タイムス「雪國に相応しい新しい建築」の１つにもとりあげられた(1925.11.5、6)作品である。その後、松橋某（1961年小樽市住宅明細図)、折橋某（小樽石炭社長)、北村正司宅(1982年住宅地図)、山岸宅を経て、1989年11月江口修が購入、翌1990年春入居し、屋根、塀、ペンキ塗装などの改修を行っている。山岸時代に内装をかなり変更している。

北海タイムス紙では、「一寸見ると坪あたり百数十圓もかかった様なガッしりした家だが、実際は六十餘圓しかかゝってゐないさうだ」[9]、「崖の上に立ってゐて僅少な地面を充分に活用し地面から生えぬいてゐ

9：北海タイムス(1925.11.6)

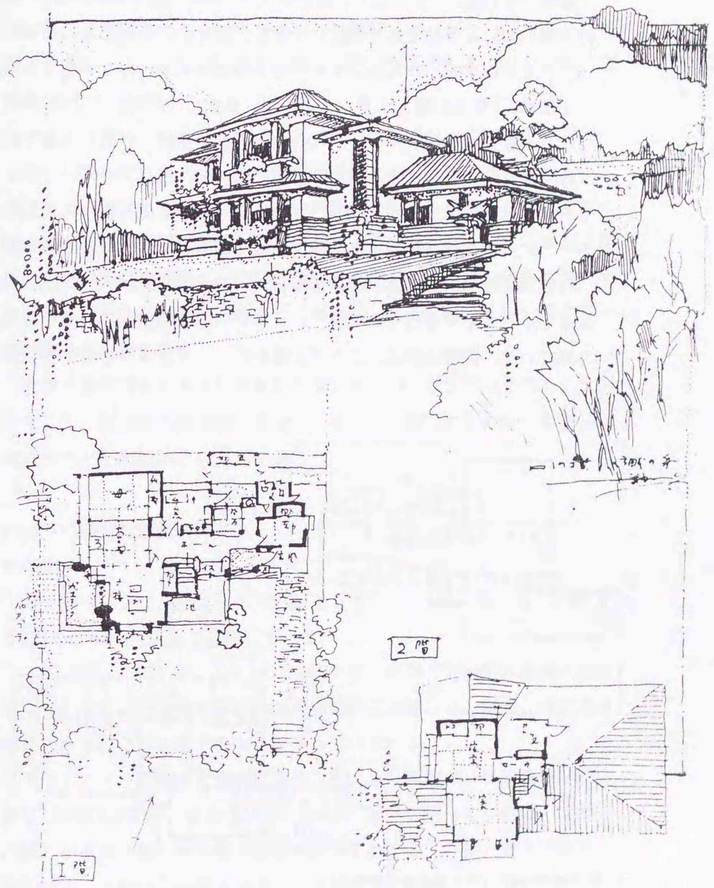


図10-2-1　高田邸スケッチ

る様な力強さを示す」[9]などと評され、また田上の「正しい建築に人間は住むべきである」[9]、「病人の醫師に信頼する如く、一切を建築家に委せよ」[9]という主張をとりあげている。

現存する図面は、第１回作品展に出品したものと考えられ、背景の木々まで書き込んだ外観パースと、フリーハンドの１、２階平面図が、Ａ３版程度(270×396㎜)の美濃紙に縦位置でバランスよく収められ、ライトの図面手法によく似た描き方をみせている。

畫集掲載の図面(図10-2-2)と比べて、敷地形状、外構に池が計画されていること、パーゴラ下のバルコンの形状が異なるなど以外、平面構成にほとんど差異はない。外観は、腰部分のみ横羽目下見板張りとする漆喰仕上げの意匠を意図したようであり、また後の「雪国的造型」住宅デザインのプロトタイプのひとつとなる垂直の柱型を東面にみせていた。実際には後述するように、外壁全体が横羽目目板張りとされ、東面のデザインも出窓の枠を引き締める程度の細目の柱型形式に変更されている。

10：『田上義也建築畫集』 p.43

畫集によれば、「背に北山の崖を控へ」[10]「東南に海を展開せる」[10]敷地の左隅(南西)に主棟である「胴」[10]を置き、西と北に低層部を、南東にパーゴラを伸ばすが、バルコンやパーゴラの実現については不明である。

主棟は、「母の部屋」(８畳)、「茶の間」(６畳)、「応接」と２階の「アトリエ」(４畳)、「客間」(７畳)、「寝室」(６畳)で構成[10]され、北側平家に「けんそんに人と応接する書生の部屋」[9](３畳)、風呂、台所、「トアレット」、「エントランス」[10]を置く。「海風に対峙する低き構への大屋根の下」[10]に、他の住宅作品にも共通する幅１間の豊かなホールがみられる。

洋室の応接間、茶の間、母の部屋は、「純日本式」[10]唐紙で仕切られ、広くも小さくもすることができ[10]、日本間の床は応接間よりも一段高くされている。洋間の南にベランダが置かれ、ベランダからは小樽全風景、

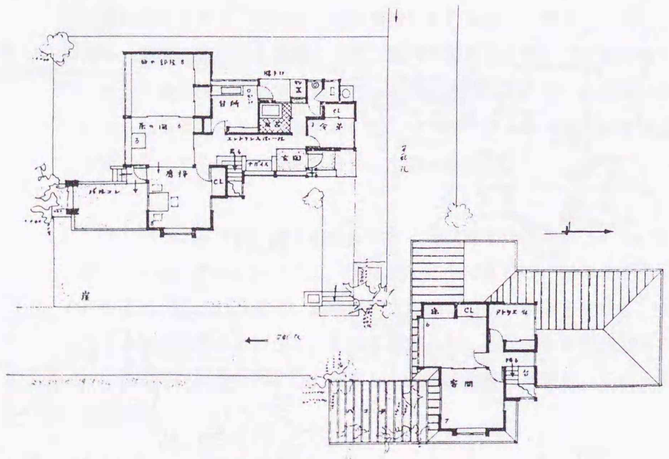


図10-2-2　高田邸平面図(『田上義也建築畫集』)

さらには遠く石狩の海を広々と「自分の庭とする」[10]ことができ、「小さい地面と小さい建坪を生かすは自然を庭にすることである」[10]との主張をよく表現している。ベランダの上は、「パゴラ」[10]になって、さらに大気との「デリケートな」[10]交歓も意識されていた。

横羽目目板張りの茶褐色の外壁と、白く着色された窓枠や軒天井の対比が美しく、「大空を望む」[10]階段室隅窓も特徴的であり、軒天井の換気口などの形態を含め、隅々にまで細かな配慮の見られる住宅である。



図10-2-3　高田邸(1983年撮影)

10-3　ライト風住宅

ライト風とは、文字通り形態やモチーフにライトの影響がみられる住宅作品のことである。ライトが確立した草原住宅（プレーリー・ハウス）から、自然と融合する水平性の強調や十字形平面の採用などの直接的な影響が認められる。

十字形平面は、直角に交わる２本の軸によるプランニングで、Ｔ型やＬ型としても使われたが、この平面形を田上は「直線体系」と命名した。水平性の強調は、水平に延びる深い軒を持つ屋根で表現され、緩勾配の寄棟や破れ破風の切妻屋根が採用されている。壁面は、腰壁を横羽目目板張りで水平線を強調し、上部は漆喰仕上げ、亀甲模様や幾何模様のサッシュ割りを施した窓が表情をつくるなど、共通の特徴をみいだすことができる作品群である。

また内部空間から大きく開かれた開口部、パーゴラで覆われたテラスを介して、庭園の外部空間へ連なり、さらに自然にまで融合する空間の連続性なども特徴的といえるであろう。

10-3-1:高松泰造邸(1925)

計画案

第１回作品展に出品の一つで、図面（図10-3-1)は、南立面、平面(上が北)を収め、色鉛筆で着彩している。

１階21坪、２階11坪、延べ42坪の住宅で、西側の南面壁が寄棟大屋根を突き抜けるように立ち挙げた表現は垂直性が強いが、東側に延びた平家部の水平性と微妙なバランスを保っている。

平面は、十字形平面を東西に接続したような形態で、日本間(６畳)、食堂･広間(5.75坪)、書斎(3.5坪)を１列に並べた胴部の南側に、玄関、広縁、子供室を配し、主棟西側を２階建てとする。西側１階子供室は共有勉強室、２階は子供寝室及び主寝室としている。

主棟北側に半間幅の廊下をはさみ、女中室と台所を東西に置き、間に風呂場、洗面所、便所といったサニタリースペースを配置している。

食堂と日本間、子供勉強室の３室及び２階寝室の真中に円形ペチカが置かれ、書斎と広間間には集合煙突の記入があり、暖炉も計画されていたかもしれない。２階寝室は、円形ペチカと本棚で間仕切られるものの、南側のソファー前で、両寝室は連絡しているが、ソファー上部には、外観にアクセントをもたらす高窓も設けられ、明るい休養スペースが緩衝帯として置かれることになる。１階の共用勉強室といい、この寝室形態といい、田上の理想を追及した平面といえるが、さすがに施主側には不評であったらしい。

1925年11月の高田邸記事(北海タイムス)にもこの住宅のことが一部とりあげられ、田上の妥協を許さぬ頑固さを「高松夫人が之では勝手が悪いからと田上君に注文しても必然性をぶちこはすことになるからといって何としても其要求を容れない、ドクトルも之には閉口して今秋建る筈の住宅建築が来春に延びたそうだ」と報じている。第２回作品展のリーフレットには掲載されていないので、実現しなかったものと思われる。

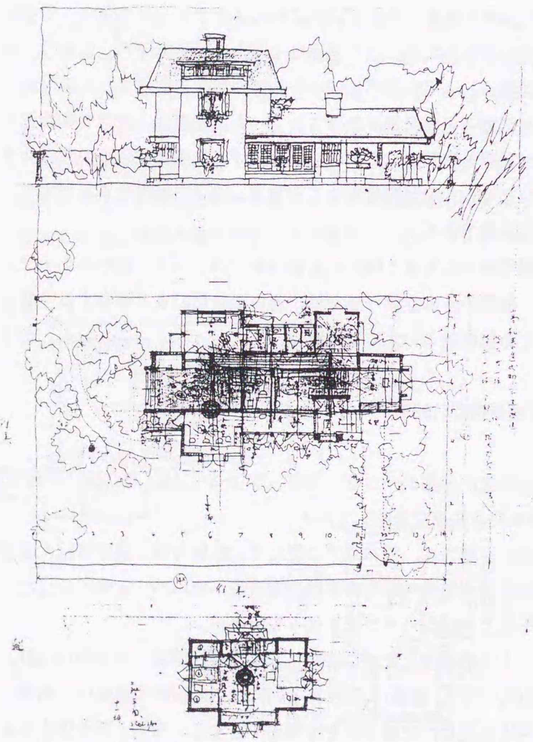


図10-3-1　高松邸計画案

10-3-2:関場不二彦邸（1926）

札幌市北１条西１丁目　施工：初代地崎宇三郎

北辰病院長、初代北海道医師会会長を務めた関場不二彦(1865－1939)の住宅。1925年の田上義也建築作品展覧会で田上を知り、設計を依頼したという。総工費３万円であった。この作品の設計料で、田上がアトリエ兼自邸を建てることが出来たという。

1942年から歴代の日銀札幌支店長役宅として、1960年まで使用された。

15×26間[11]の南北に長い長方形敷地の北側に寄せて、既設のＲＣ造書庫を基点に、東西一直線状に主棟を配置し、ほぼ中央にあるホールは、東に「バルコン」[12]、西に「大玄関」[12]を備えた開放的な「プロメナード」[12]と連絡し、南の八角形の応接間と主棟を連結する。

中央ホールの西には、広縁を廻す「主人室」[12](10畳)と「夫人室」[12](10畳)が並び、「レストスペース」[12]を介して、「書庫」[12]、「ライブラリー」[12]と連絡する。ホール東は、食堂、台所、「メードルーム」[12]のほか、東端に茶室を兼ねた「ゲストルーム」[12]を置き、「テレス」[12]を介して後庭を「抱える」[11]ように「食堂」[12]と結ばれていた。

２階は、子供室が３室（「ルーム１～３」[12]）南面して並び、東の「スペアルーム」[12]との間のホールから「プロメナード」上に設けられた八角形の「望楼」[12]に、西の「バルコン」[12]からは、書庫上の「ルーフガーデン」[12]に連絡していた。

１、２階とも、「鉄筋コンクリート」[11]造の角柱の柱形を１間間隔で配置することによって、内外の緩衝空間としての柱列を強調する。開口部は柱列から後退して、「外光を豊かにそそぎ入れる」[11]ために、「雨戸式」[11]の連窓とされている。

床はオガクズを石灰で練り二重床とし[13]、屋根は柾葺きの上にアスファルトを流して青銅板瓦棒葺き、軒は３尺張り出し、端隠し先端も銅板で彫刻した[13]。暖房は集中暖房で、地下室にスチームボイラーが設備されていた[13]。

この工事で田上は一つの失敗をおかした。内部天井に換気孔をとったため、暖気が天井裏に抜け、軒先に換気孔をとったものの、すがもり現象を誘発した[13]。室内と屋根裏を完全に断熱し、小屋裏を冷却する必要を身をもって教えられたのである[13]。

10-3-3:田上自邸(1926)

札幌市南12条西13丁目

関場邸の設計料(3,000円[13])の1／3、約1,000円をかけて作られたアトリエ併設の自邸(「ホーム」[14])である。

1階床面積38.045坪(125.55㎡)、2階面積7.5坪(24.75㎡)、延べ45.545坪(150.30㎡)の住宅で、「テレス」[14]部分を含めると１階45.67坪、延べ

11：『田上義也建築畫集』p.57
12：『田上義也建築畫集』pp.58、59 掲載平面による。

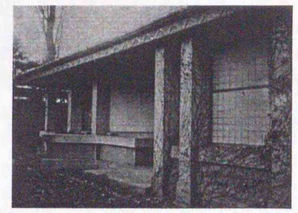


図10-3-2　関場邸バルコン（左手は応接間）

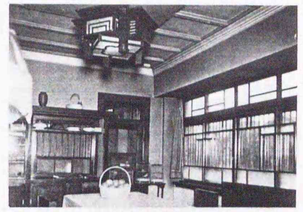


図10-3-3　関場邸食堂内部

13：『北のまれびとくエゾライト・田上義也(上巻)>』 p.107

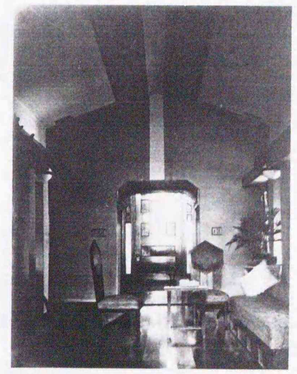


図10-3-4　関場邸プロムナード(正面は応接間入口)

14：『田上義也建築畫集』 p.38

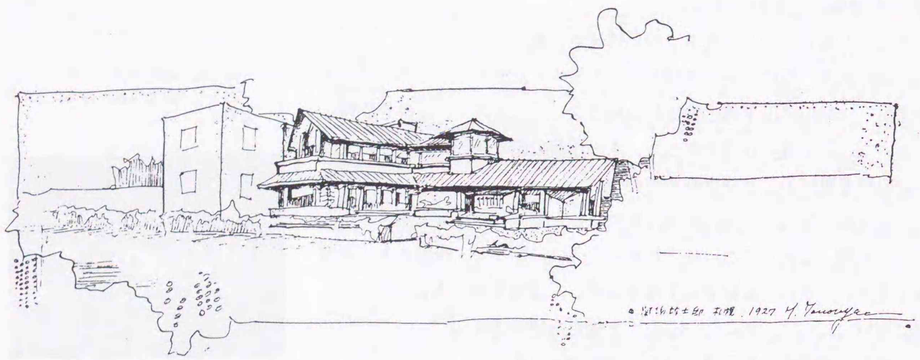


図10-3-5　関場邸スケッチ(『田上義也建築畫集』)

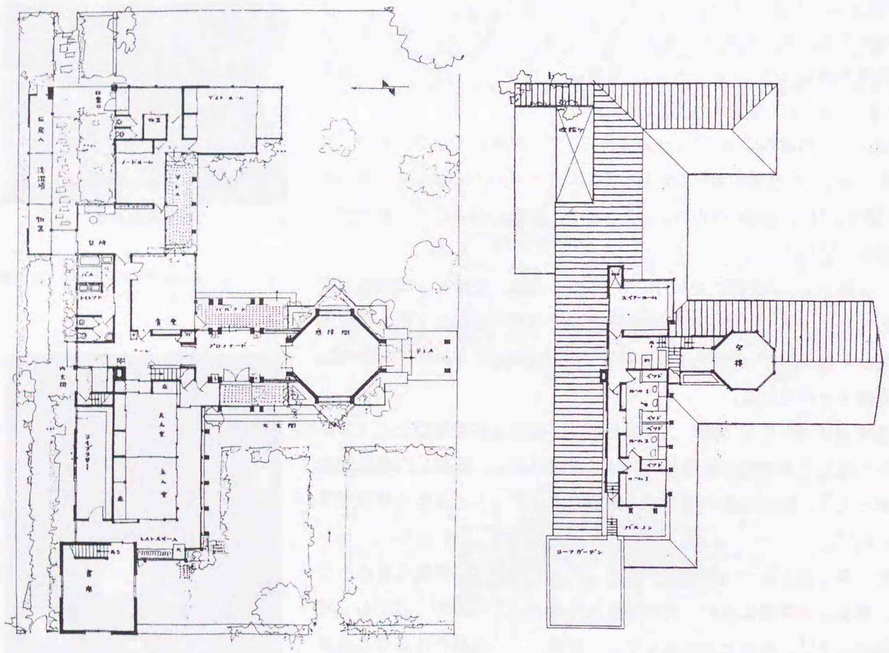


図10-3-6　関場邸1、2階平面図(『田上義也建築畫集』)



図10-3-7　田上自邸北側正面

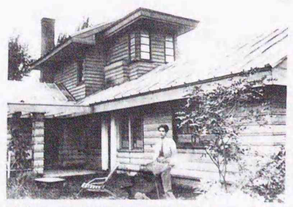


図10-3-8　田上自邸南東側外観

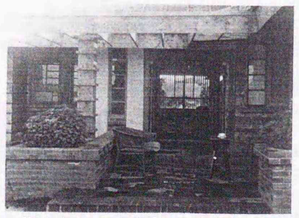


図10-3-9　田上自邸エントランス

53.17坪ある。

食堂、居間、寝室を結ぶ「ホーム」の南北軸と「アトリエ」「ホール」「バス」[14]を結ぶ東西軸を階段室ホールで交差させた十字形平面（『田上畫集』では「直線体系」と呼ぶ）の住宅で、２階は「ホームとアトリエの中心線の交點上に正しく配置されてゐる」[14]。

エントランスホールは、南北に入口を開き、アトリエと住居部分を明確に区分すると同時に、南北の庭を関連づけ、北側玄関前とホール南側には、ルーバー（ないしはパーゴラ）で覆った「テレス」を置いて、外部空間との緩衝帯を設けている。

住居部は、「寒風への衝壁」「不純なる西陽の直射」[14]への抵抗を意図し、「西に背を向け」[14]る形で、台所やユーテリィティーを配置し、また最低限の開口部をもつ壁面で遮蔽している。

２階「ゲストルーム」[14]（４坪）の東には「サンルーム」[14]、西に「バルコン」[14]を置く設計であったが、実際にはバルコンは実現せず、サンルームも開口部分の少ない閉鎖的な部屋とされた。

外観は、アトリエが付属する分東西に長く、他の住宅作品に比べて、より水平性が強調された作品となっている。

外壁全体を下見板目板打ち仕上げとし、北側の食堂に２本の柱型で支えられた大きな破れ破風を見せ、軒天まで届く幾何学的なサッシュ割を施した大きな開口は、書斎やゲストルームなどに多用されたモチーフであった。

２階は、意匠的にはまだまとまりきれていない印象を受け、田上の作品にしては扱いもそっけない。原設計と異なり開口部が著しく減少され、片開きないし嵌め殺しの小窓を縦に重ねた縦長窓の開口量が、壁面に対

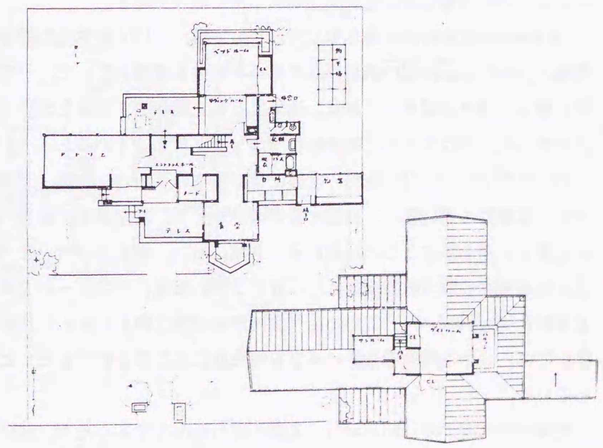


図10-3-10 田上自邸平面図(『田上義也建築畫集』)

して少なすぎるせいかもしれない。ただ、西側妻面には、後に多用される２本の柱型が見られ、サンルームのフラットルーフは、後の太秦邸などで開花する手法であった。

「テレス」のルーバーを支える柱も、外壁同様目板打ちの仕上げであるが、出目地仕上げの石造柱を想起させるが、これも田上が好んで使用した手法の一つであった。

10-3-4:小熊捍邸(現北海道銀行円山クラブ)(1927)

札幌市南１条西20丁目　現存

北海道帝国大学農学部教授小熊捍(1885-1971)の住宅である。

動物組織学、応用動物学を担当していた小熊博士は、1930年には理学部創設のため転出するが、初代理学部長や低温科学研究所長を務め、1948年に退官した。後に初代国立三島遺伝研究所所長に転任するまでの30有余年をこの住宅で過ごし、茅誠二、中谷宇吉郎をはじめ、北海道大学教授、文化人、芸術家らと交友を深めた。北海道大学の黒百合会は、1908(明治41)年有島武郎が指導者となって発足した美術団体であるが、その創立当初のメンバーでもある。黒百合会の名称は小熊の発案という[15]。



図10-3-11 建設中の小熊邸

15：『さっぽろ文庫61 農学校物語』(北海道新聞社、1992.6.24) p.110

フランスから帰国したばかりの小熊助教授は、1926(大正15)年竣工の関場不二彦邸をみて、フランス風の住宅を創ってくれるよう田上に依頼した。関場邸ではすべてをまかされた田上だが、小熊助教授は田上案をなかなか受け入れず、論争もしばしばであったという。最終的には田上案が実施されたわけだが、この作品を通じて、田上は、施主に自分のデザインを誠意をもって納得してもらう必要性と設計に対しては確固たる信念を持たねばならぬことを痛感したのである。

小熊博士のあと、北海道大学医学部教授柳壮一が数年入居した[16]という。1925年竣工のヒンデル設計の自邸に住んでいた柳博士は、二人のパイオニア的近代建築家の住空間を体験し得たわけである。

16：柳壮一夫人福子氏による。



図10-3-12 小熊邸南東外観

1951年北海道銀行頭取島本融の邸宅として購入、1956年木造低層部を増築、1968年には南側の鉄筋コンクリート部分を増築している。いずれの改修にも田上が関与しており、建築家として理想的な作品とのつながりであった。1975年から北海道銀行円山クラブとなっている。

241.05坪(795.47㎡)の敷地の北側に建つ住宅の平面は、客間、玄関ホール、応接間の南北軸と、玄関・書斎兼リビング、寝室の東西軸を十字に交差した形を基本とし、北側にメード室、台所、風呂、便所を並べ、北に走る電車の騒音の緩衝帯とし、リビングの南側にサンルームを配して南庭と「融合せしめ」[17]ていた。『芸術学研究第二輯』(1930.5.1)の建築論では、「十字體系のモテイーフを明らかに此の家で発見した」と語っている。

17：『田上義也建築畫集』 p.31

建築面積は37.5坪(123.75㎡)、２階５坪(16.5㎡)であったが、後に敷地76.92坪(253.84㎡)を買収し、64.17坪(211.76㎡)を増築して現在の姿になっている[18]。

18：北海道銀行による。

構造はバルーンフレームとした。２階の屋根までとどく長尺の間柱の骨組に、下見板を釘打ちで固定して、仕上げ外板と一体となって初めて固まる構法である。仕口には枘を用いない。後のツーバイフォー構法の基本になったものである。

ゆるい勾配の切妻屋根には“ころび”をつけ、妻面は破れ破風とする。谷の多い屋根はすがもりを防止するため、小熊博士の提案もあり、まさ葺きの上にアスファルトを塗りこみ[19]、谷にも同様の工法で補い[19]、亜鉛鉄板瓦棒葺きとしている。

19：『北のまれびとくエゾライト・田上義也>(上巻)』 p.110

外壁は腰部分を横羽目目板張りとし、上部は漆喰仕上げである。低く抑えられた階高、高く張り出した軒先、軒先に上端をそろえた窓、外壁の同コーニスや横羽目板などが水平性を強調することに役立っている。

２階の西妻面や南側応接間の大きな開口は、幾何学的パターンのサッシュ割りとなっており、この建物を特徴づけている。

応接間は南側を大きなガラス面とするが、かつて欄間部は植物文様のステンドグラスとなっていた。内部は漆喰仕上げであるが、長押（ピクチャーホールド）や斜めに走る細い木製の押縁がグラフィカルに飾っている。造り付けの長椅子や階段踊場側に付く菱形小窓なども含めて、非常にモダンな明るい室内空間である。

２階のアトリエでも、漆喰仕上げの天井面は架構材をグラフィカルに

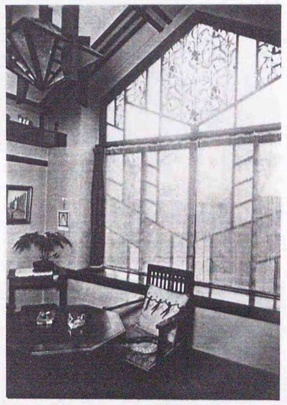


図10-3-13 小熊邸応接間南面

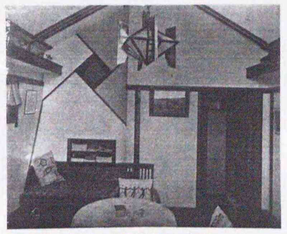


図10-3-14 小熊邸応接間北面

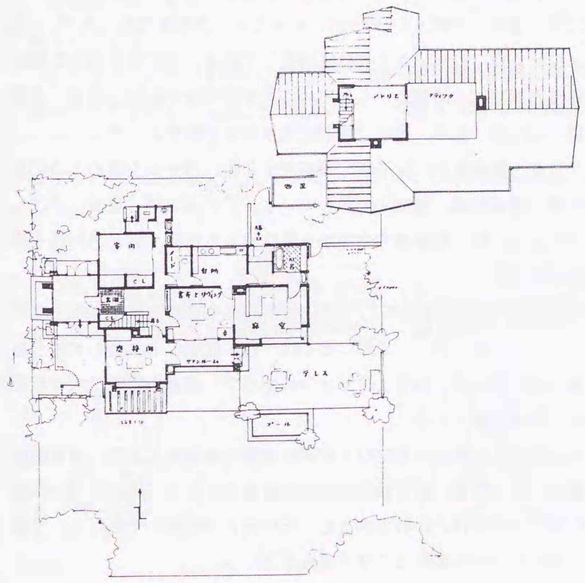


図10-3-15 小熊邸平面図(『田上義也建築畫集』)

装飾化して軽快に処理されており、東面上部の菱形小窓や四角錐の壁灯などの幾何学形態も空間によくマッチしている。

また書斎兼リビングでは、こうした斜め線を使うかわりに、水平垂直材だけの落ち着いた空間をつくりだしている。

暖房は当初から地下にボイラーを置く温水暖房であったという。

10-3-5:坂牛直太郎邸(現坂牛正志邸)(1927)

小樽市入船町5-8　施工：丸藤留治　現存

小樽新聞者重役坂牛直太郎の住宅。直太郎は、1917(大正６)年東京帝大法科卒業後、三井物産を経て1922年小樽新聞社に入社、同社を経営していた岳父上田重良の没(1915年２月５日[20])後を受けて上田寿久子未亡人を中心に重役として同社の経営にあたり、1930年退社後この住宅で弁護士事務所を開業していた。

新築前、富岡町１丁目20に住んでいた直太郎のもとへ、突然田上が訪れたのは1924年のことという。すぐ近くの高田邸の現場に通う際に立ち寄ったものであろうが、以来親交が始まることになる[21]。

1927年夏着工、竣工は12月５日、工費は家具別で8,000円であった。

小樽花園公園の南側、美しい白樺林に面した角地に建ち、Ｌ形平面の隅角部に２階を置き、さらに八角形の５辺を張り出す応接間を突出させている。薄緑色の横羽目目板打ちの腰壁と白漆喰との対比、平面分割されたサッシュの連窓と軒の深い屋根が、田上特有の低く抑えた外観に効果をあげているが、２階北面には後の住宅デザインの主要な垂直モティーフの一つともなる柱形の表現をわずかに見せる。

竣工時、夫婦、両親、5人の子供、女中という大家族であったが、「各自のインディヴィジュアルを充分に尊重して然も、相互の自由なる関連」[22]を考えた平面は、階段ホールを中心に玄関横西側に応接・書斎、北側に舎弟、女中室、風呂、台所、東側に食堂および縁を廻した老人室（10畳）を置き、南側翼部には子供の領域をまとめ、ペチカを囲むように子供勉強室と同運動室、寝室を配置している。子供室の東、庭側に設けられた「テレス」[22]は、勉強室や食堂から直接出入り出来、庭との関連を強く意識している。

「交通に対する離散に重き」[22]を置いたホールや階段廻りのスペースは、ゆったりととられており、このゆとりは、他の住宅にも共通して見られる。家具なども、多くは田上デザインのもので、書斎の重厚な机や椅子、置台なども残されている。

住宅の南隣りの敷地の現ＭＯＡ世界救世教北海道地区本部小樽布教所の建物は、翌1928年に田上設計で完成したもので、当初坂牛夫人の母堂上田久寿子の住宅(**10-3-9**)であった。坂牛邸とは庭続きであって、子供の何人かも、こちらの住宅に移り住んだという。

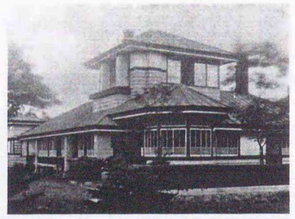


図10-3-16 坂牛邸北西外観

20：小樽新聞(1915.2.8)
21：坂牛直太郎氏談。

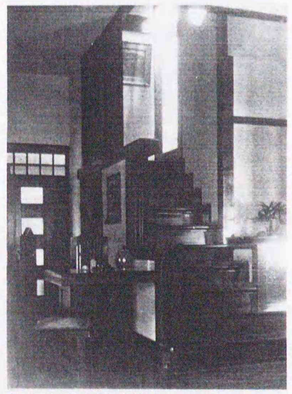


図10-3-17 坂牛邸階段

22：『田上義也建築畫集』 p.46

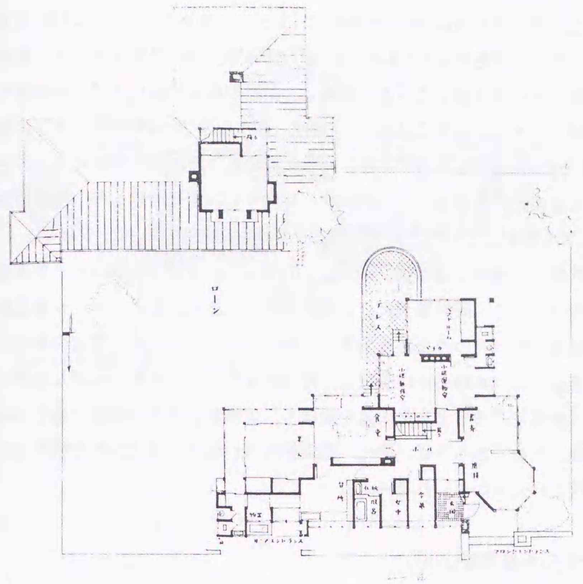


図10-3-18 坂牛邸平面図(『田上義也建築畫集』)

10-3-6:金子実邸(1927)

札幌市北17条東７丁目

鉄道員であった金子実はヴァイオリンを通じて田上を知り、設計を依頼したという。

Ｔ字型に近い十字平面の小住宅で、長軸の東西軸と短軸の南北軸が玄関ホールで交差し、交点上に2階がのる。1階床面積25.25坪(83.325㎡)、

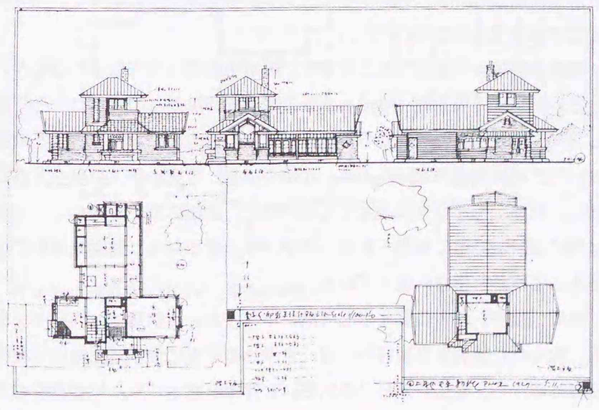


図10-3-19 金子邸平面図

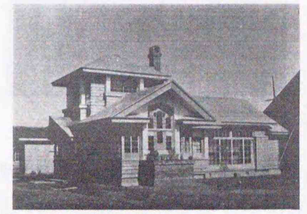


図10-3-20 金子邸南外観

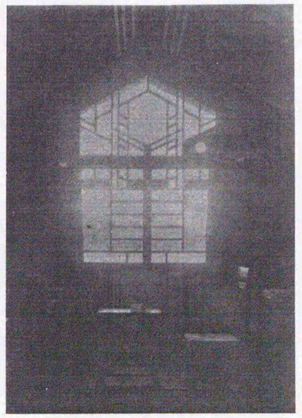


図10-3-21 金子邸応接間

２階4.45坪(14.685㎡)、延べ29.7坪(98.01㎡)ほどである。

玄関ホールの右に「応接兼書斎」[23]（レッスンルーム[24]）、左に台所を置き、東側に炉を切った「茶の間」(6畳)と「本間」(8畳)の続き間、その南側に縁側と小室を配している。書斎は、屋根勾配より緩い４寸勾配程度の傾斜天井とし、両壁には床から7.7尺（棚上端まで)の高さに、水平の棚「はち台」[24]を据え、南側には、勾配天井面まで達した６角形と２つの台形を組合せた幾何モティーフのサッシ割りを施す嵌め殺しの「亀甲型大窓」[25]を開口している。いずれも田上が好んで使用した意匠である。

外観は、図面では布コンクリートの上にレンガを一段積み、上を下見板張りとし、１階軒高 9尺、２階軒高20尺とある。正面ポーチや南北両翼妻面の転びをつけた破れ破風、２階のシックイの柱型、書斎の破風を突き抜けた５角形の開口部など、特徴的なデザイン要素を展開しながらも、全体にごろっとした印象を受ける。規模が小さく、翼部の延びが足りないためであろうが、後の「雪国的造型」住宅デザインへの模索期の表現といえるかもしれない。

23：『金子邸新築設計図　階上階下平面姿図詳細』
24：『金子邸新築設計詳細図―レッスンルーム切断図』
25：『田上義也建築畫集』 p.55

10-3-7:坂敏男邸(1927)

小樽市見晴289　現存

歌志内の住友坂炭礦㈱経営の坂敏男が、1927年に別邸として建てたものである。敏男は、炭鉱経営の２代目。東京の家で育てられ、慶応義塾大学を卒業後、炭鉱経営にあたっていた。

父市太郎は、札幌農学校学生時代に、日本の地質学、鉱山探査の父ともいえるベンジャミン・スミス・ライマンの空知方面調査団に助手として参加、その後1888(明治21)年、懇請され北海道庁技師となった市太郎は、ライマンの志を継いで、夕張空知炭田の鉱床調査を実施、1894(同27)年には鉱区出願、翌年石狩石炭㈱が起業したが不振のため、1913(大正２)年から独立経営を始めた。1917年に坂炭礦株式会社経営、1924年に住友合資会社と共同経営、翌1925年に住友坂炭礦株式会社と改称し、1930年住友炭礦株式会社となった[26]。

敷地は国道５号線脇の崖上にあり、銭函市街や石狩湾を望むことができる。当初は、坂を登って山を背景に家を眺めながらのアプローチであったが、現在は家の裏側から敷地内に入る。歌志内に本宅を構えた敏男は、ここに農園構想を持ちこみ、牧場や果樹、花を小作人に作らせるなどし、なかでもダリヤの栽培に力をいれた。39歳の若さで他界し、一家は1931(昭和６)年に東京へ転居したが、その後1944年に疎開を兼ねて住宅として使われ現在に至っている。

海側（街側）からの見え方も考慮にいれたという建物は、薄いピンク系に塗られた横羽目目板打の外壁、十字形の平面に合わせた赤い切妻屋根の外観から、竣工時から「赤別荘」と呼ばれたという。切妻屋根のこ


図10-3-22 坂邸(創建時)

26：歌志内市史編纂委員会『歌志内市史』(1964.11.10)


図10-3-23 坂邸(1987年撮影)

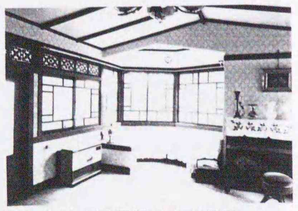


図10-3-24 坂邸居間(1986年撮影)

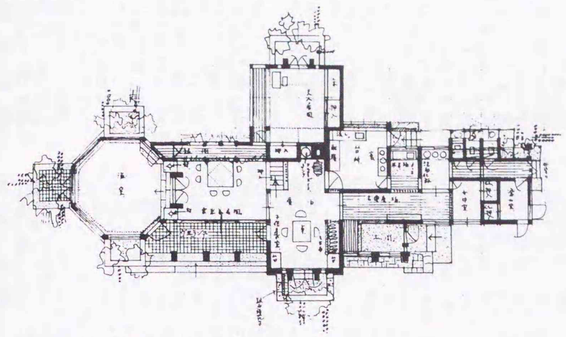


図10-3-25 坂邸原案(1937.3.10)

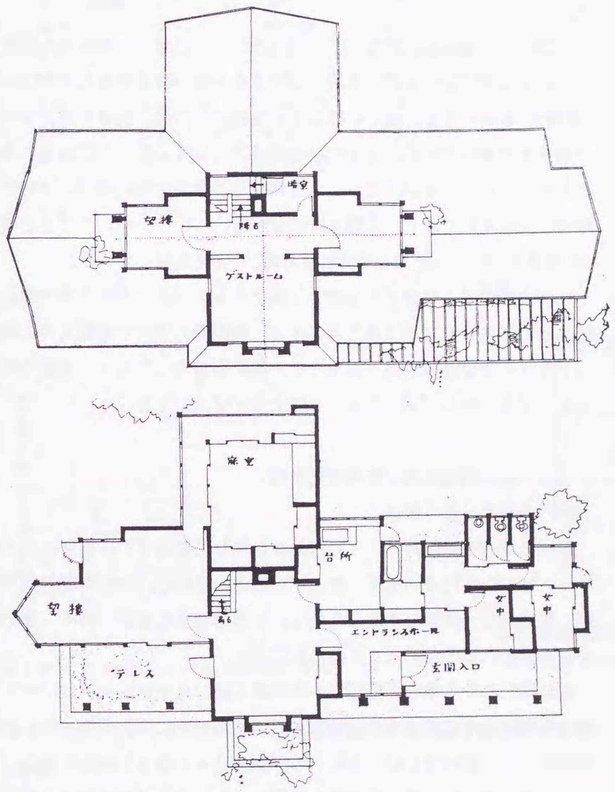


図10-3-26 坂邸平面図(『田上義也建築畫集』)

ろび、軒と窓の納まり、目板打ちの外壁、２階妻面の２本の柱型など、ライト的モチーフが随所に見られるが、屋根勾配はきつく、２階の腰壁が裾広がりになっているなど、全体にズングリした印象を受ける。水平に広がるプレーリーを意識しながらも、北海道の荒々しい自然の中では、デンと腰を据えた安定感のある外観の方がより適切と判断した雪国的造型を求める田上の意図であろう。

中央の広間と鍵手に縁側を廻す寝室(10畳)の左右に、「食堂兼居間」[27]「望楼」[28]と、「エントランスホール」[28]「台所」[28]「バス」[29]「トアレット」[29]「女中」[28]室を長く伸ばした十字平面で、海側(北側)のアプローチは「入口の感情をアクセントづける」[29]４本の列柱で支えられたパーゴラが覆い、居間前にはアプローチに呼応する列柱の並ぶ「テレス」[29]が配され、居間や広間に通じるドアを開くと潮騒や海岸を走る汽車の音が遠くに聞こえ、また夏の涼風も吹き込むといった、自然との交歓が意図されていた。

居間の東側端部は、原案(1927年3月10日)[27]では、八角形の大温室が作られるはずであったが、実施では居間を矛型に引き締めたアルコーブ「望楼」[28]を突出させ、四方に開口する連窓が、内部の視線を豊かな戸外の風景まで導いている。人工的な空間はここでは不用との設計者の考えとも受け止められるが、こうした自然や外部空間との対話は、２階でも顕著に表現されており、広間上に位置する「ゲストルーム」[28]の左右両翼の「望楼」[28]は、「山と海との紫外線貯蔵」[29]室を意図していた。

幾何模様のサッシ割りの連窓や２階ゲストルームのライト風の窓には、部分的に青色ガラスがはめこまれたり、長押風の横材や勾配天井の押縁のグラフィカルな構成が、田上らしい空間を表現しており、食堂の椅子やテーブル、カップボードなども田上のデザインであった。

27：『坂氏邸新築設計図 平面図(階下)』(1927.3.10)
28：『田上義也建築畫集』p.79掲載平面図
29：『田上義也建築畫集』p.80

10-3-8:佐田作郎邸(現小熊徹邸)(1928)

函館市元町32－10　現存

街区のほぼ中央にあり、２階部分がわずかに仲通りから望まれるだけで、人目につきにくい位置に建っているこの建物は、海産物商佐田作郎が、竣工後２～３年で手放したあと、函館の著名な財閥小熊幸一郎の娘夫婦小熊小五郎の住宅として使われてきた。

庭に突出した八角形の応接室や居間開口部の亀甲形モチーフのサッシ割りの連窓などに田上らしい意匠が展開され、外に大きく張り出した軒(軒出３尺)の扱いなどは、ライトのプレーリーハウスを想起させる。

Ｌ字形の平面は、広く開放的な階段ホールを中心に和室部と洋室部に振り分けられ、洋室部は、玄関ホール右に八角形の応接室、左に「リビングルームと食堂」[30]、台所、「メード」[30]室、「内玄関」[30]から構成されている。応接室は、２面の壁体以外はすべて「『ひまわり』の如く」[30]ガ


図10-3-27 建築中の佐田邸

30：『田上義也建築畫集』p.68

ラス窓とし、東側正面には田上好みの「切妻の高窓」[30](亀甲型大窓[25])を和室部は、広縁に面して仏間(８畳)、座敷(10畳)の続き間とし、Ｌ字の隅部にのる２階は、広縁付きの「客間」[30](８畳)であった。ゆったりとした階段ホールは、洋室部と和室部をつなぐ「重要なる任」[30]を果たすとともに、「ボイラールーム」と「サービススペース」[30]を兼ねていた。

建築畫集に掲載の平面（図10-3-29)は、現状にほぼ一致するが、残されている設計原案（図10-3-30)では、座敷の北側に板間の「休息室」[31]を置き、「コシカケ」[31]を造り付けた出窓を設けて、海への眺望を配慮した設計であった。　梁伏図と断面詳細図から、屋根勾配は５寸５分、地盤から端隠しまで９尺、軒高10尺３寸、座敷天井高10尺(畳上端より)、居間天井高 9.4尺(図面上実測)である。

構造部材寸法を以下に示した。

棟木・母屋	4寸角	端隠し	1寸5分×1尺
棰木	4寸×5寸	軒平物	1寸×6寸
敷桁	4寸×6～7寸	軒天井裏板	4寸×6分
軒桁	4寸×8寸	大引	4寸角
陸梁	4寸×8寸	土台	4寸角
敷梁	4寸×1尺4寸	根太	2寸×2寸5分
隅木	5寸×4寸	根太受け	2寸×4寸
２階真束	6寸角	柱	4寸角
真束	4寸角		

図10-3-29 佐田邸平面図(『田上義也建築畫集』)

図10-3-30 佐田邸原案

31：『佐田作郎氏邸新築設計図』(1927.7)

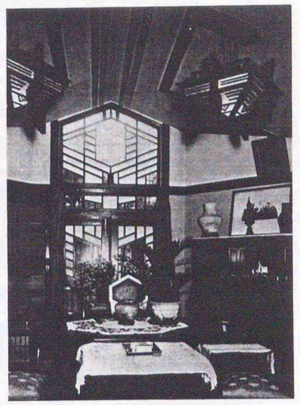


図10-3-28 佐田邸応接間

10-3-9:上田久寿子邸(現ＭＯＡ世界救世教北海道地区本部小樽布教所)(1928)

小樽市入舟5-8　現存

『畫集』で、「作品四(筆者注：小熊邸)のヴァリエイション」[32]として紹介された住宅で、かなり改変されながらも坂牛邸(10-3-5)の南隣りに現存する。

施主の上田久寿子は、初代小樽新聞社社長上田重良(1862～1915)夫人

32：『田上義也建築畫集』p.55

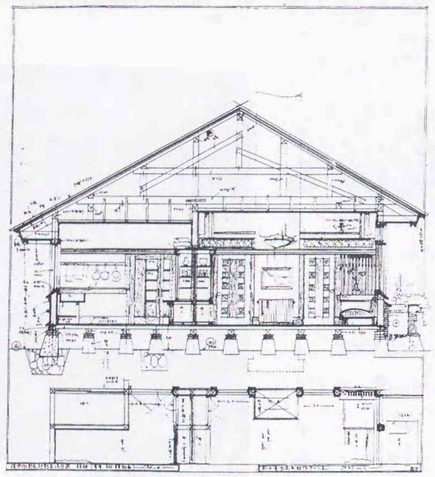


図10-3-31 佐田邸断面図(台所・食堂)

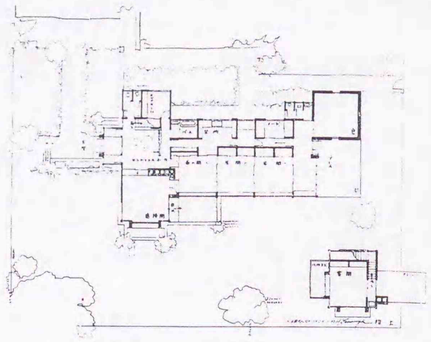


図10-3-35 上田邸平面図(『田上義也建築畫集』)

33：MOA世界救世教北海道地区本部小樽布教所による。
34：加藤誠『田上義也の初期住宅作品』(1983年度北海道大学卒業論文)



図10-3-32 上田邸南側外観



図10-3-33 上田邸門塀(住宅は坂牛邸)



図10-3-34 上田邸塀の田上のサイン

で、重良の死後社長を継いだ。1919(大正８)年には娘のスマが坂牛直太郎と結婚している。

竣工は、坂牛邸完成の翌年で、総工費15,000円。竣工を記念して門柱脇の煉瓦塀土台に「Build. 1928 AD T.Yoshiya」のサインが残されている。

久寿子の死後、坂牛スマ、上田正直、堀岡久子の共同所有であった[33]が、1962年10月[33]土地付き 300万円で小樽市に売却され地域のクラブとして使用[34]、1973年12月本野雄次郎商店所有、1979年１月からMOAの所有となり、大幅に増改築を受けている[33]。

図面資料としては断面詳細図が残るのみであるが、概要は『畫集』掲載の図面から知ることができる。敷地の北寄りの門塀からのアプローチは、正面の低い袖壁の目隠しを見ながら、手前で直角に南に折れ、ゆったりした前庭を通って、南側花台を兼ねた袖壁で受け止められ、玄関へと導かれる。玄関を入ると、テーブル、作り付け長椅子などを備え「小応接を兼ね」[32]た広いエントランスホールで、南に応接室、北に階段室、スペアルームを置く。応接間には、田上好みの「亀甲形大窓」[32]を開口し、「東、南、西の三方より採光し」[32]ていた。

「日本間を主体として構成」[32]した平面で、ホールの東側、東西に長い中廊下の南側に茶の間(10畳)、居間２室(8畳、6畳)の和室を一列に並べ、東端「テレス」[32]に面してサンルーム的なホールをとり、北東隅の石倉と連絡している。倉は既設のものと思われるが、縦長の開口部などは、田上が手を加えたものであろう。

廊下の北側に並ぶバス、台所、勝手口、メード室は、田上の住宅作品に共通する北風への対処である。

10-3-10:アパートメントハウス(1925)

計画案

第１回田上義也建築作品展覧會に出展した計画案で、着彩された平面図には1925年３月の日付が入っている。新聞評のように「在来の貧弱な長屋建ての世界を全く脱している」[35]作品といえる。

当時のアパートが、あまりにも「孤立的で」「社交性も成長の可能も見られ」[36]ず、「貴い人間生活」[36]がすっかり埋没され、住民生活不在の状況であると批判的であった田上が提言した「温かい人間味」[35]で「手をつなぎ合う」[35]アパート案であった。

周囲にゆったりと緑地を持つ敷地に計画された住棟は、１階軒高９尺と全体に軒高を抑えて水平性を強調した一部２階建てのプレーリースタイルの建物で、戸建住宅にも通じるデザインを展開している。住棟中央には、背後のパーゴラに続くアプローチ道路が貫通しており、同じ形式の棟が、いくつか続くことを想定した計画であったのだろう。

アプローチが貫通する住棟中央通路は、腰掛や机が置かれ、一種のコミュニティースペースとして考えられたものであろうが、この通路の左右に対称に、階段室と居室群が配置され、階段室をはさみ、前庭側に勝手口、後庭側に主玄関が置かれている。２階平面の記載はないが、下階よりも小規模な居室をもつ２階建てアパートの計画であったと推定される。

１階住居は、ラテン十字形に近い平面で、交差部中央に円形ペチカを置き、主軸と45度傾いた衝立(高さ5尺6寸位)で、４室に分割している。野球のホームベース型に分割された部屋は、６畳相当の矩形と１坪程度の三角形を組合せたものと、居間と記載された４畳半相当及び４畳相当の部屋を含む袖部の部屋、３坪の食堂に分割され、食堂に続いて台所、

35：北海タイムス(1925.4.26)

36：小樽新聞(1925.6.17)「正しい建築(下)」

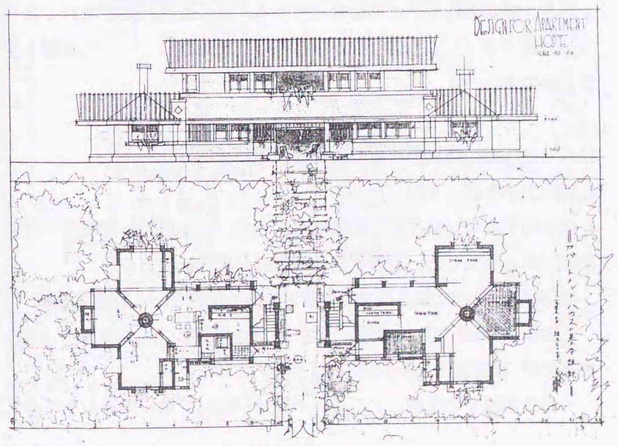


図10-3-36 アパートメントハウスの基本設計

風呂、玄関ホールが長胴部分を構成している。室名は、右側住居部を漢字で、左を英語で記載していた。

単純な平面形を、円形ペチカと成の低い斜めの間仕切で変化をつけ、各室はすべて庭に面しており、また左右の袖部から中央通路側にむかってセットバックする１階ファサードは、来訪者を拒むことなく、招きいれ包みこんでくれる温かさを表現したものであろう。

10-4　「雪国的造型」住宅

1930年に出版された『田上義也建築畫集』には、田上が意図した「雪国的造型」についての一文がある。そこでは「凡ゆる雪國的要求は、一切が建築的創造の手を経ねば、厳しい自然の弾圧から奪還出来ない。」とし、自然と郷土と人間生活の本質の正しい理解を通じて発見されるべき北国の建築条件に適した雪国的造形が「整然と組立られた、水々しい体型を発映せしむならば、北方こそ新しき世界の根元となるであろう。」と主張し、これまでのライト風デザインを越える雪国向けのスタイルを提案した。

寒地住宅にふさわしい住宅デザインの模索とライト風からの脱却を求める姿勢は、初期の段階から見られたことはすでに述べたが、後述する片流れ屋根形式の習作もそのひとつの方向であった。

こうした習作と並行して提案された雪国的造型は、軒先まで１、２階を通して立つ柱型、この柱型から北側へ葺き下ろす屋根表現、垂直なはしご窓など、高さや垂直性が強調され、南面に大きくガラス開口をとったファサード、保温性を保つためのコンパクトな平面構成などが特徴的である。妻面の柱型や内部装飾などライト風の表現も維持されており、ライト風デザインを意識しながら自己様式を確立していった過程をみることができる。

10-4-1:吉田角次邸(現袴塚厚三居住住宅)(1928)

札幌市北16条西４丁目　現存

現在の所有者は留辺藥町在住岡崎忠一で、1955年代に岡崎が北大医学部教官から購入した。1989年から袴塚家が居住している。

間口6間、奥行15間の長方形の敷地に建つ住宅で、１階床面積27.75坪(91.58㎡,物置を含む)、2階8.75坪(28.88㎡)、延べ36.5坪(120.45㎡)、畫集では「吉田夫人と子供達の家」と紹介されている。

一部２階建ての主棟とアプローチ側に「半島」[36]状に突出した「食堂兼居間」[38]とに「抱かれる」[38]入口は、「港」[36]にたとえられる。札幌軟石を積んだ門灯は、さしずめ灯台の暗喩であろう。

玄関ホームの左手に「メード」[38]室(３畳)、左手壁をはさんで台所、風呂、物置が続く。ゆったりとした階段ホールの北側に「小供室」[38](６畳)と居間(6畳)が続き、２階階段室北側に「小供室」[38](4.5畳)と客間(８畳)が置かれる。

現在はモルタルで塗られている外壁は、布コンクリートの上に法面をつけた「ヤキスキ水切り煉瓦」[37]をのせ、付け土台、水切り上を幅６寸の下見板を羽重ねした鎧下見板張りとし、出隅を小口留めとしている。屋根勾配 6寸、軒高はＧＬ(地盤面)より20尺、斜めに張り上げた軒天井は、1×5寸の持送りに４分板を張っている。

左右の柱型と上額縁、花台で囲われた、彫りの深い２階南側開口部は、三角破風をつき破り、軟石積みの集合煙突や階段室隅の腰から２階破風下までの縦長の「ハシゴマド」[38]などと共に、「華昇せる軸様の象徴」[36]としての役割を担っている。

１階居間の南側窓は、２本の柱型と上下の額縁で囲われるが、十字平面の住宅に見られるような大きな開口部とはせずに、額縁上をシックイで仕上げ、中央に菱形の小窓をあける程度の閉鎖的な扱いをみせている。

玄関･食堂廻りの断面詳細図(図10-4-3)には、「空気まど」[37]や「Ｖent」[37]の書き込みがあり、空気の流れを矢印で示すなど、換気への配慮も見出すことができる。



図10-4-1　吉田邸南外観

37：『吉田角次氏邸新築設計詳細(本玄関、食堂)』(1928.5.11)

38：『金子邸新築設計 平面立体』(1927.5.11)

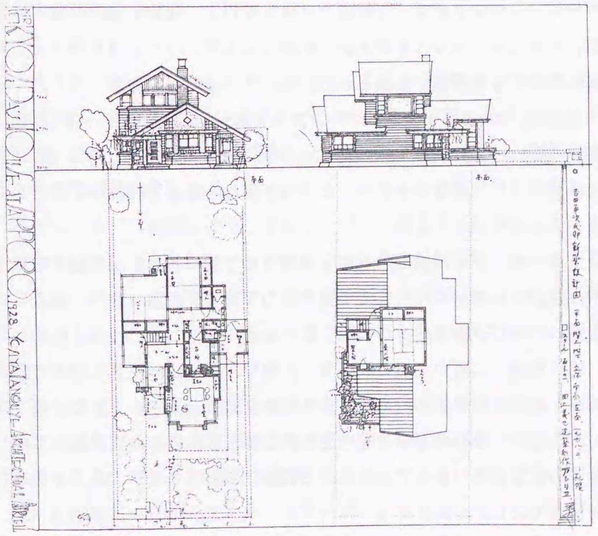


図10-4-2　吉田邸設計図

36：『田上義也建築畫集』 p.41

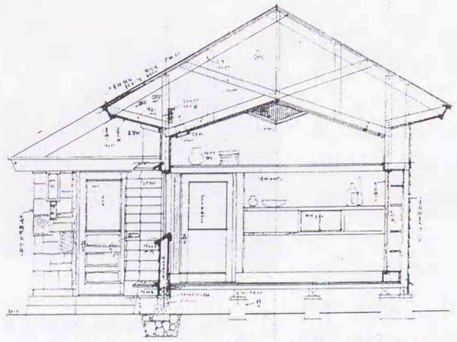


図10-4-3　吉田邸食堂断面図(『吉田角次氏邸新築設計詳細(本玄関、食堂)』)

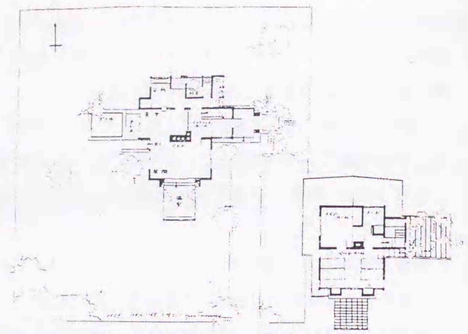


図10-4-5　小川邸平面図(『田上義也建築畫集』)



図10-4-4　小川邸

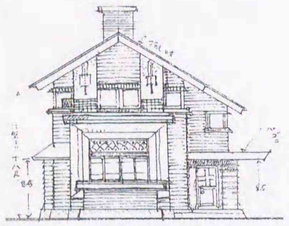


図10-4-6　小川邸南立面原案

39：『田上義也建築畫集』 p.36

10-4-2:小川隆子邸(1928)

札幌市

1924年結成の「北光トリオ」の一員ピアニストの小川隆子(小川義雄夫人)の住宅で、1階23.375坪(ポーチ含む)、物置1.5坪、２階13.75坪、延べ38.625坪(127.5㎡、物置を含む)の小住宅である。

畫集では「一九二七年作品」とされているが、図面「DeSIGNE(ママ) FOR MR'S OGAWA'S HOUSE」の日付は、「1928.3.20」となっており、「田上義也建築作品展覽会目録」(1930年) でも1928年作品としているので、ここでは1928年の作品とした。

ペチカを中心に、居間(南)、食堂(西)、エントランスホール(東)の３つの空間を連結し、居間の南側に温室を伸ばし、北側には台所、風呂及びサービスヤードを介して物置を付属している。建物本体の西側には実現しなかったプールとテラスが、東側には玄関とパーゴラを張り出して、弱いながらも東西軸が意識されている。

２階は、「ベッドルーム」(6坪)「スペアルーム」(6畳)「メード」[39]室(2畳)で構成されている。寝室のクローゼットは外側に突出して、後に「雪国的造型」の主要なモティーフの一つともなる２本の柱型の意匠として、まとめられている。

原案では、居間南側の窓は２階窓台下まで達する大きな額縁で縁取られ、装飾的な欄間や花台を持つ開口部のデザインであったが、実際には温室が付属し、額縁だけが実現している。

総２階建てに近い主屋の成の高い外観や、黒っぽい下見板張りと妻壁、軒下、柱型の漆喰壁とのコントラスト、２階窓上から軒下までの高さなど、田上の十字形平面の住宅に見られる意匠とは明らかに異なっており、前述の柱型とあいまって、のちの「雪国的造型」スタイルの萌芽が見られる作品である。

この住宅は1931年に離れと玄関部が増築された。離れは、台所から西側にＬ型にまわした縁側に面した和室の続き間(8畳、6畳)とし、座敷部は高さ16.60尺(GLから)の軒先から北側に４寸勾配の片流れ屋根を架け、縁側部は４寸勾配の差掛けとした。玄関部は当初の計画にあったものの実現のようで、ライト風住宅にもしきりに採用された煉瓦造の花台も備えていた。

10-4-3:東武別邸(1928)

旭川市７条13丁目右１号

政治家東武(1869＝明治2～1939＝昭和14)の旭川の別邸である。東は、1928年衆議院議員に北海道第２区（旭川市および上川、宗谷、留萌の３支庁管内)より立候補して、2月20日の選挙で当選している[40]。別邸の新築もこのあたりと関係があると思われる。

東武は、奈良県十津川郷士の家に生まれ、1890(明治23)年東京法学院(現中央大学)卒業後渡道し札幌製糖会社に就職したが、1892年北海道庁理事官浅羽靖の推薦で深川村菊亭農場支配人となり、十津川移住民の中から百戸団体を組織してメムに移住し、深川市の基盤を作った。在学中、水害に見まわれた郷里の住民を説得して、空知支庁新十津川村開拓の道を開いたことでも知られる。1901(明治34)年第１期道会議員選挙に当選、1907年まで２期６年道会議員をつとめたのち、1908年第10回衆議院議員選挙に出馬39歳の若さで当選した。その後衆議院には1915年の第12回総選挙で破れた以外は、1939年まで10期29年間国事に、また立憲政友会の中堅党員として奔走した[41]。また1898年『北海道時事』創立に参画し、1901年道史と『北海道毎日新聞』『北門新報』の三紙を合同して『北海タイムス社』を創立し、理事となり、その後短期間だが社長を務めた。



図10-4-7　東武邸南西外観

40：『旭川市史第一巻』(1959.4.10)「第三章第十一節衆議院議員選挙」

41：『新十津川町史』(1965)、『北海道大百科事典』(1981)参考。

42：『田上義也建築畫集』 p.67

住宅は、書斎、応接室など「公的生活」[42]空間を収容する２階建て主棟の東側に、平家を接続した「ダイナミッシュなる雪國的造形」[42]の作品である。西側正面左右の柱型は小窓をはさんだダブル柱とし、南側に５本の柱型「防風柱」[42]を並べ、また外壁仕上げも、設計図では目板打ち下見板とあるのに、実際にはモルタル仕上げ(「人造石仕上げ」)としているので、一連の住宅作品の中ではやや趣きの異なる外観意匠となっている。

敷地の西側に建物を寄せて、「奥庭をアングル型にとり、最大限の廣い展望を利かしめ、ローンを以て埋」[42]めるといった外構についても注意が払われた。

主棟南側、軒の出４尺の切妻屋根をかけた突出部は主玄関で、南面の破れ破風と五角形の欄間を付けた大きな開口部の組合せは、田上の一連の住宅作品で書斎や応接間に多用された意匠である。玄関南側に煉瓦の上に札幌軟石の笠木を置いたフラワーボックスを造り付け、「冬は地下より浸透する厳しい寒氣に對する抵抗となり、夏は草木の繁みに依って涼風を内部に導き入れる」[42]ことを意図した。

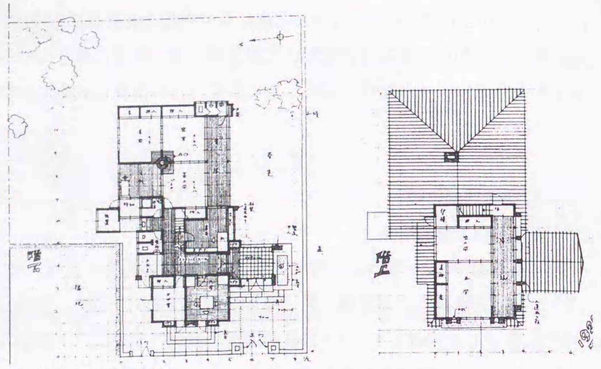


図10-4-8　東武邸平面図

玄関に続く「エントランスホール」[42]の東に書斎、西に応接と女中室、北側に「内玄関」[42]、水廻りを置き、２階は、南側に広縁を配した「東氏の居間」[42]で、「本間」(10畳)、「次の間」[42](10畳)の続き間である。下階の書斎の東に続く広縁(巾1間) の北側には、円形ペチカを中心に「三つのリヴィング」[42]である居間(8畳)、寝室(8畳)、茶の間(8畳)と台所を田字形に配置し、「採光と内部採暖に依る温度の調整は零下四〇度極寒に對して、春の如きペチカに触感に依り、エクセントリックな生活をやわらげ、健康を増進せしむ」[42]ことが意図されていた。

10-4-4:鬼窪重作邸(1929)

札幌市北１条西26丁目(旧圓山表参道23)　現存

1924年に創立した札幌民衆金融株式会社の専務取締役[43]鬼窪重作（1880～1973)は、「大衆の利便を、第一目的に置」[43]き、「商務厳重以外に非道を行はず決して人情に背かない」[43]人物として知られた。長野師範を卒業後、２ヵ年間県下の小学校の教壇に立ち、その後渡米し、20年間のアメリカ生活後[43]、1922年３月シアトルを出発し横浜着、一時夫人の実家のある軽井沢に滞在後、同年10月８日札幌に住居を定めた[44]。札幌の風土が長年住み慣れたシアトルと似ていることが理由の一つという[44]。

北１条通り(旧札幌神社表参道) に面した敷地は、北側8.5間、南側14間、長さ22.5間の台形で、中央やや南寄りに建物が建ち、表参道側正門からアプローチするが、広い庭の樹木が緩衝帯となっている。

南面の垂直性を強調した外観は、小粒ながら力強い印象を与え、北側に吹き下ろした屋根は、「雪国的造型」をよく表現しているとともに、後述する太秦邸の造型を予感させるデザインといえる。

東西に長い建物の南側に２階棟を突出させた単純な平面形で、１階は、「広場(ﾏﾏ)」[45](玄関ホール)の南側に「応接客間」[45](5坪)、北側に台所、便所、風呂など水回り部分を置く。「広場」から１間幅の広縁が続き、北

43：『現代札幌人物史』（札幌現代社、1931.11.23)pp.80、81

44：鬼窪重夫氏(1927―)による。



図10-4-9　鬼窪邸南側外観(1983年撮影)

45：『鬼窪氏邸新築設計図　札幌円山、NO1.階上、階下平面、東、北面の姿図』(1929.6)

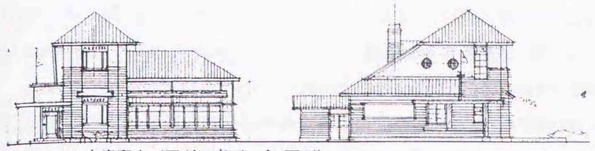


図10-4-10 鬼窪邸立面図(左 南面、右 西面)

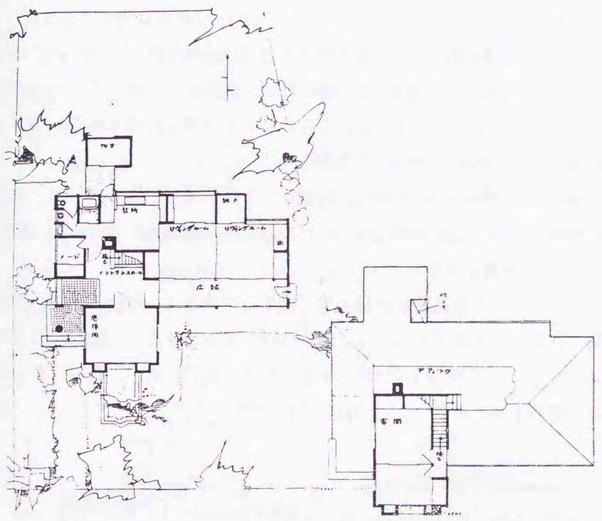


図10-4-11 鬼窪邸平面図(『田上義也建築畫集』)

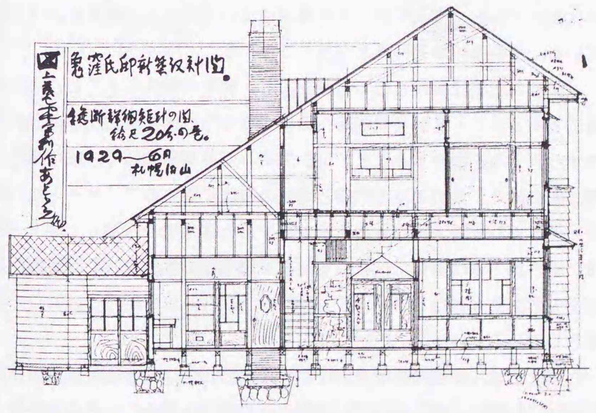


図10-4-12 鬼窪邸断面矩計図

側に「茶の間」(8畳)、「本間」[45](8畳)が続き、「茶の間」北側には「子供」[45]室(4.5畳)が連絡する。広縁入口上には、三角形のアルコーブ「recess」がとられ、八角形の照明器具とともに、ホール空間を飾っている。

ゆったりしたホール空間に設置された階段は、幅広の手摺を設けて段状の花台とするが、田上の住宅に共通する仕様の一つである。

２階は、北側「客間」[45](8畳)、南側「次の間」[45](6畳)の和室で構成され、「客間」西面には丸窓が計画されていたが、上げ下げ窓に変更されている。

陸屋根の玄関部前には、田上お得意のパーゴラも計画され、アプローチまわりにゆとりを生むはずであったが、実施されなかった。田上の他の作品でも、こうした傾向はよく見られ、図面修正の間もなく、現場で変更されることが多かったのであろう。

46：『鬼窪氏邸新築設計図 縦断詳細矩形の図』(1929.6)

遺存する矩計図[46]によれば、地盤から２階鼻隠し下端まで24尺、北側平家部分13尺、１階階高12尺、ホールおよび応接間天井高9.5尺、2階和室天井高8.5尺である。

コンクリート布基礎を建物全周に廻すのではなく、南側広縁から応接間、玄関、風呂場下までとし、残りは独立基礎とする。2階床梁を1.2尺×4寸、土台、軒桁を3.8寸角とする以外は、通柱、大引、母屋、小屋束など構造部材の多くで3.5寸角が採用されている。

10-4-5:後藤惣作邸(1930)

札幌市大通西27丁目（旧円山村７丁目）

47：『田上義也建築畫集』 p.21

「あらゆる雪國的要求は、一切が建築的創造の手を経ねば厳しい自然の弾圧から奪還できない」[47]との主張を具体化した「雪国的造型意図」の代表作である。畫集には、この意図についての田上の意見が述べられている。やや長いがそのまま引用してみよう。



図10-4-13 後藤邸

「雪國の屋根は單純にして力強きこと、構造の軽快なること、より防寒的であること、直射日光配給への重大なる關心は、多量なるガラスのファサードを必要とすること、併してそれが冷蔵庫の如く、或は海水に浮ぶ船の如く、スガモリと吹雪と寒氣の神経に對するデリケートな防禦、ダイナミッシュな大風が楡の大木を倒す山の様な雪の吹溜り、零下三〇度の切られる様な寒氣に反抗して建築も何等かの豪健として、智的なる體型を意圖せねばなるまい。」[48]と結び、鬼窪邸（1929年）などもこの類型としている。

48：『田上義也建築畫集』p.52

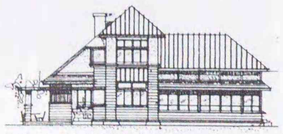


図10-4-14 後藤邸南立面図

外観を力強く引き締める南側正面の２本の柱型は、２階軒下まで垂直に伸び、柱間の大きな開口と、下階の下見板と上階の白いモルタル仕上げのコントラストなどが、「雪国的造型」の特徴であった。

49：『後藤惣作氏邸新築設計圖 南面姿図と東面姿図NO-2(a)』(1930.2)

竣工時（図10-4-13)の写真をみると、田上の作品にしては、玄関廻りの扱いがそっけないが、設計図[49]ではパーゴラを備えた玄関ポーチを予定していた(図10-4-14)。

216坪のほぼ矩形の敷地に建ち、１階46.76坪、２階12.59坪、延べ59.35坪である。平面は、玄関ホールを中心に明確に機能分割され、南に応接間(5.5坪)、西に広縁付きの和室部分、北に女中室(3畳)や台所、便所、風呂などのサービス部分が置かれていた。和室部は、１間幅の広縁の北側に炉を切った「茶の間」(8畳)と「本間」[50](10畳)を並べ、茶の間の北側に「次の間」[50](6畳)が置かれていた。応接間と２階次の間の柱型は、押入や物入に利用されている。

50：『後藤惣作氏邸新築設計圖 階上・階下・平面』(1930.2)

鉄板瓦棒引きの寄棟屋根は、8寸5分勾配で、平面の出入りに沿って複雑な形状にかけられ、北側では、台所附近で緩勾配とされながら、物置まで葺きおろされている。

１階胴蛇腹下を小口留めの下見板張り、上を「川崎式メタルラス張り下地」[49]のモルタル仕上げとし、2階軒高25尺、平屋部分で15尺とした[49]。出窓や柱型、外壁の凸凹など、やや雑多な要素で構成されている外観であるが、１、２階破風板下部の白く塗られた帯が、全体をよく引き締める効果をあげている。

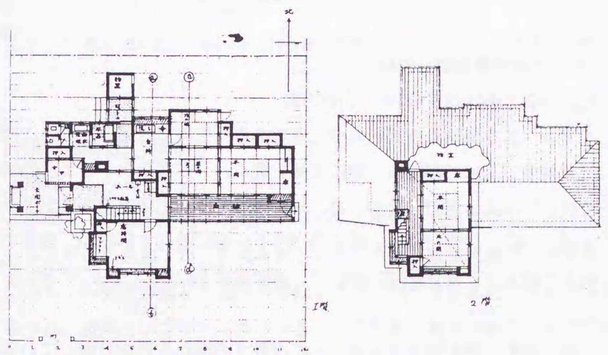


図10-4-15 後藤邸平面図

10-5　片流れと陸屋根の住宅

田上は寒地住宅にふさわしい住宅デザインの模索とライト風からの脱却を求め、「雪国的造型」に到達する過程で、片流れ屋根や陸屋根形式の住宅の習作を重ねた。単純で力強い雪國向きの屋根形式の模索や、十分な採光を意図した形態表現として採用されたが、ライト風のデザインをすすめる中で、当初から並行して採用された建築表現であった。古く

は、1926年の自身のアトリエや澤枝邸(1928年)、東京小金井里美勝造アトリエ(1929年)など小規模なアトリエ建築にみられるが、雪国的造型の屋根表現にも大きく影響を与えており、畫集では城下邸(1930年)を雪国的造型のバリエーションともしているが、本論文では太秦邸(1931年)などのようなライト風と明らかに異なる住宅デザインとして結実していく過程の作品と位置づけ、本節で扱っている。

10-5-1:百円の家(1926)

札幌市南３条西13丁目

田上義也の最初のアトリエで、北海道大学水産科教授西村真琴の住宅の納屋を改造した５坪強(10.5畳程度)の小品である。大きなガラス開口をもつ片流れ屋根の建築で、100円で完成した。「柔らかな光を思ひの儘採り入れた明るい」[51]オフィスは、同時に自身の建築を説明するためのモデルルーム的な要素も強かった。

「厳凍(ママ)に対して武装した中にも心からの住居と云ったアトリエのある住宅を建てたいものと常に努力して居ります」[51]と語る田上の「生命の躍動が見られる」[51]とは新聞記者評である。このアトリエで、関場邸(1926年)や札幌北一条教会基本案の設計が行われたのである。

51：小樽新聞(1926.4.13)

10-5-2:澤枝重雄邸(1928)

札幌市北２条西22丁目(旧円山村248)

アトリエを併設した画家の小住宅である。住宅部とアトリエを20度ほどの角度で曲げて接続し、間に玄関を置く。「外客及アトリエとの関係を断」[52]つよう意図したもので、設計図[53]では、玄関東側の住宅部は、食堂(５坪)、居間(８畳)、寝室(８畳)を一列に並べているが、畫集では室名の記入を、食堂を「応接間」[52]、居間寝室を「リヴィング」[52]としている。

開口部も、設計図では各室ごとに大きさの異なる窓を計画しているが、畫集では「南東のノルマルライト」[52]を内部空間に採り入れるよう出窓を南面から東面まで廻して、「大いなる硝子のファサード」[52]を造りだしている。

アトリエは、東京小金井の里美勝造のアトリエ(1929年)などと共通の外観をもち、北の「採光を蒼空より仰ぐ」[52]よう意図され、北側を軒高19尺まで高くして開口を広くとり、軒先には田上好みのルーバーを備えて、4寸5分勾配の屋根が南側に葺きおろしている。

玄関上には、「客及寝室」[52]として利用できる「スペアルーム」[52](2.75坪)を置き、アトリエと逆に南から北に屋根を葺きおろして、「屋根は明快に機能成形を表徴する」[52]という田上流の建築論を表現している。

小規模ながら変化のある外観はまた、「立體(ヴォリューム)は、プランのムーブマンを発映して空間に交響する」[52]という空間論の実践でもあった。

52：『田上義也建築畫集』 p.65
53：『沢枝重雄氏のアトリエと住宅―平面並に立体図.1928.5月作』

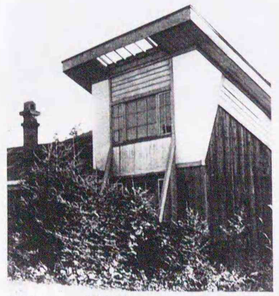


図10-5-1　澤枝邸

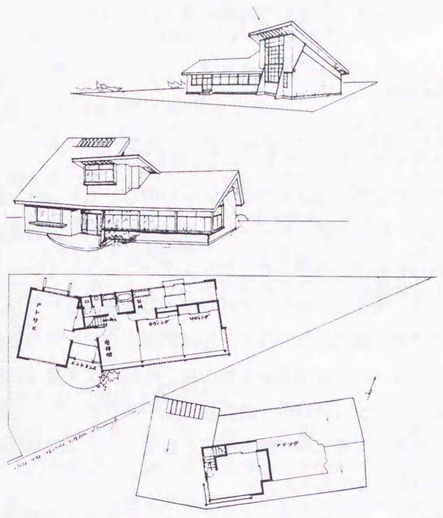


図10-5-2　澤枝邸外観、平面(『田上義也建築畫集』)

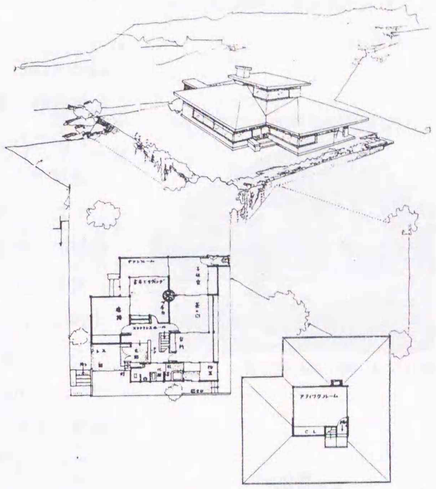


図10-5-3　櫻田邸外観、平面(『田上義也建築畫集』)

10-5-3:櫻田邸(1928)

小樽市

畫集に「小樽小住宅（櫻田氏の家）」[54]と掲載された住宅で、1928年４月９日付けの図面[55]が１枚残されている。平面は畫集とほぼ一致するのに対し、外観は畫集と立面図とではかなりの隔たりがある。アティック部分が、畫集ではフラットルーフをのせて外観に表現されているのに対し、立面図では小屋裏に納められている。田上の意図通り完成しなかったものの、後の太秦邸(1931年)に結実するデザインの習作作品として興味深い。

敷地は、南に日本海を一望できる断崖で、北は「山の圍繞」[56]地形である。

平面は、円形ペチカを中心に、「子供室」「茶の間」「書斎とリヴング」[56]が囲み、書斎の南側にサンルーム、北側に玄関と応接室、茶の間を結ぶ「エントランスホール」[56]を置く。茶の間の北側は台所とし、さらに北端に便所、物置、風呂を一列に並べ、北の寒風に備えている。「階下よりの暖気に防寒装置不要」[56]の２階「アティークルーム」[56]は、「父の書斎」で、フラットルーフを採用している。

「凸凹の平面は単純な大屋根で覆はれ」[56]、延びやかなスケールを意図したようで、立面図ではライトの代表作の一つウィンスロー邸（1895、

54：『田上義也建築畫集』 p.40
55：『桜田良(?)治氏邸新築設計図 平面、階下、アテック等』(1928.4.9)

56：『田上義也建築畫集』 p.40

シカゴ）を想起させる雰囲気をもっているものの、延びやかさは消えてマッシブな印象を与える。寄棟屋根の大屋根は屋根勾配６寸５分、鼻隠し下端まで(GLから)10尺の高さとし、土台上７尺、鼻隠し(1寸2分×1寸5分)下端に接する連続窓の成の半分までを６分厚の目板打ち下見板仕上げとし、その上軒下まで高さ２尺部分を漆喰で仕上げていた。



図10-5-4　城下邸南側外観

57：『城下良平氏邸新築設計図 階上階下平面.姿図』(1930.7)

10-5-4:城下良平邸(1930)

札幌市南５条西21丁目　現存

医師であった城下良平の住宅として5,000円で建てられた。

畫集では、雪国的造型意図の後藤惣作邸(**10-4-5**)のバリエーションとしており、鬼窪邸(**10-4-4**)の初期スケッチには屋根表現や丸窓意匠など類似のデザインがみられるが、南面の半円シリンダーが目を引く。

同様のシリンダーは、帯広志田病院(1934年)などでも採用されたが、北国における日光の享受を意図したもので、雪国的造型のテーマのひとつでもあった。シリンダーは機能は異なるものの、札幌紀文茶屋（1932年）、旭川パリジャンクラブ(1933年)、網走観光ホテル(1936年)、石狩海濱ホテル(1937年)などのガラス張り螺旋階段として田上が1930年代にしきりと使う意匠のひとつともなった。

南面するシリンダーは、２階軒下まで垂直に25尺[57]の高さまで伸び、そこから北、東、西側の三方向に屋根が大きくふき降ろされている。

内部は「エントランスホール」[57]を中心に構成されており、シリンダー部にあたる「応接と書斎」[57]部分、「茶之間」[57](8畳)、「本間」[57](10畳)、「広縁」[57]で構成される座敷部分と、便所、風呂などの付帯部分からなっている。付帯部分を北側に集めて全ての居室を南面させ、十分な開口部をとり、また台所、茶の間、本間の３室間には、畫集では壁ベチカとなっているが、実際には円形ベチカが採用され、「家族の為の健康に充分なる採光と採暖、通風」[58]が考慮されていた。

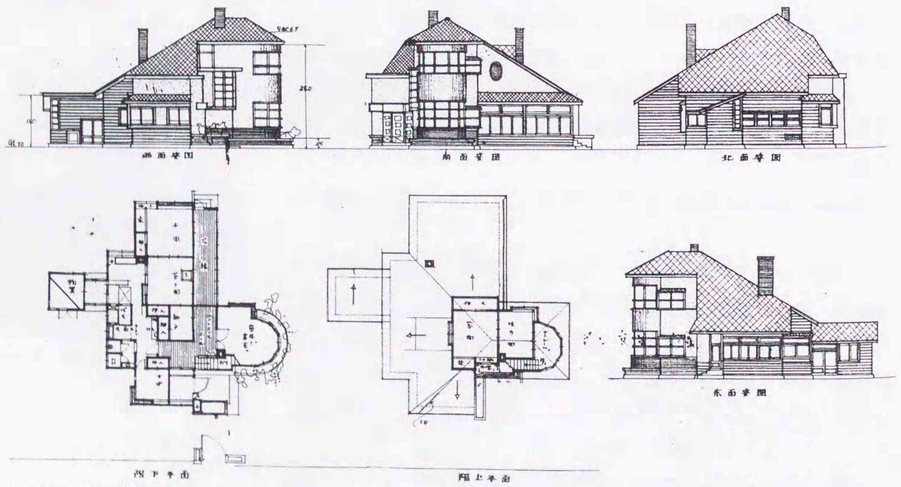


図10-5-5　城下邸設計図

２階は、シリンダー部をサンルーム、次の間(６畳)をはさんで客間(8畳)と小屋裏利用の物置とした。

シリンダー部は、１階天井高9.8尺[59]、２階9.3尺[59]、１、２階とも３段５連の横長ガラス窓(2×2.5尺[59])を建てこんでいる。シリンダー外周には「煉瓦半枚積み」[59]の花壇を添えている。

1946年自宅開業のため、応接室を診療室に、納戸を待合室、女中室を薬局に改造した。その後屋根裏や広縁を居室として改造したり、台所を改造している。

10-5-5:太秦康光邸(1931)

札幌市南１条西21丁目　施工：庄司藤吉　1995年3月23日取壊

旧小熊邸の西側に建つ太秦邸(**10-3-4**)は1931年５月施工、同年８月に竣工した。施主太秦康光は、北海道大学理学部創設の際に化学科教官として内定後、1928年から文部省在外研究員として２年間アメリカに留学。帰国後、小熊教授の勧めにより旧札幌郡藻岩村大字圓山村46番地（現南１条西21丁目）に155.25坪(512.33㎡)を借地し、田上に設計を依頼したものである。

田上は設計の際、小熊邸とのコントラストを考え、それぞれの施主の性格を反映させたという[60]が、この住宅では主人の温厚で角のない気質を表現したのであろうか。

建坪は45.58坪（150.4㎡）、庄司藤吉(1886～1960)の請負いで、請負金額は4,650円であった。

２階の陸屋根と片流れ屋根の組み合わせ、階段室の垂直の嵌め殺し窓、局面を持つサンルームの開口部、ずんぐりしたプロポーションなど、旧小熊邸などを代表とするライト風住宅とは異なる、どこか柔らかくふくよかな印象さえ受け、独自の作風を求めた到着点のひとつということができよう。

屋根は野地板の上に柾葺き、さらに「亜鉛引月星三十番平鉄板小羽ゼ五分以上折曲ゲ釣子ゞゞ各二個所取付十二切」[61]葺きとし、陸屋根部では下地としてアスファルトルーフィングを何層も張ったという。仕様書では、隅谷部同様鉄板をハンダ付けすることも指示している。この陸屋根(仕様書では平屋根)の採用は、「屋根裏に室内暖気を入れなければ、丸太に雪が積もったように、雪は、とけずに高いところでは吹き飛んでしまうであろうと考えたから」[62]という。

58：『田上義也建築畫集』 p.70

59：『城下氏住宅新築設計詳細図』



図10-5-6　太秦邸北西外観(1983年撮影)

60：太秦智子氏による。



図10-5-7　太秦邸と小熊邸(太秦家蔵)

61：『太秦邸新築設計仕様書　一九三十一年四月作　田上義也建築制作アトリエ』

62：『田上義也建築作品抄』(1966.5.1) p.37

外壁は腰部分を浅野スレート張りにするほかは、黒色系の「独逸ハキ付ケ」[61]モルタル仕上げである。

平面は、北側が電車通りであることを考慮し、玄関、ホール、便所、台所、納戸などを北側に一列に置く考え方は旧小熊邸と同様である。南側には応接、食堂、寝室を雁行させ、南端をサンルームとする。玄関ホールまわりが広くとられ、また土間とホール、階段室境は低い造り付けの下足箱と木製円柱が、非常にすっきりと空間を区切る。円柱上にのる円筒形の照明器具や、玄関土間北側の円窓が空間を和らげ、訪れる者を優しく受けとめた。

ホール南側の応接は、８畳相当の板間で、東側引き違い窓の下には造り付けソファーを備えている。西側の６畳相当の板間の食堂や南側サンルームとはガラス引戸で連続し、ダンスパーティ用に一体化して使用できるようにとの依頼であったという[62]。

南側いっぱいに開口部をとり、西側の寝室10畳分以外はサンルームとするが、寝室ではガラス窓の内側に大きな引き違い障子を４枚建て込んでいる。寝室の西側には化粧室、便所を付属し、北側は風呂、台所などのユーティリティとする。台所床にはレンガ製の貯蔵ムロを備えている。専用便所付きの女中室(3畳) も台所に付属している。

２階は書斎と客間(8畳)。陸屋根部分は書斎と北側の階段室を含むが、北側は高さ8.5尺のはめ殺し二連窓として、階段室に明るく採光している。

この住宅では、幾何学的な形態を組み合わせた花台や置台、食器棚などの小家具もデザインしている。いずれも小ぶりながら、美しい形態をしており、田上の多才な一面をうかがわせる。

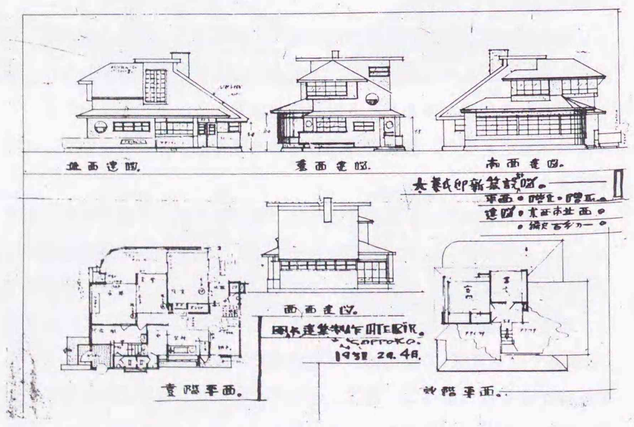


図10-5-8　太素邸設計図(太素家蔵)

10-6　インターナショナル・スタイルを意識した住宅

インターナショナル・スタイル(国際様式)とは、1920年代から50年代頃までの近代建築の主流をなす合理主義的造形様式をさしている[63]。その特色としては、装飾の排除、シンメトリーよりバランスの重視、量感より空間感覚で建築をとらえてゆくことの３点に要約される[63]。

田上も住宅以外の作品では、ライト風を脱却する過程で、1930年代の病院建築やホテル建築などで、意識的にこのインターナショナル・スタイルをデザイン手法に採り入れているように思われる。田上が『芸術学研究』の中で展開した建築論の途中に挿入された写真は、多分に編輯者外山卯三郎 (1903-1980)[64]の方針によるものと思われるが、第２輯にはル・コルビュジェとピエール・ジャンヌレの「メゾン・ア・ガルシュ」(1928年、図10-6-1)、第４輯にはローベル・マレ・ステヴァンのバルザック街の小別荘(1926年、図10-6-2)が掲載されている。

藤岡洋保によれば日本の建築界がル・コルビュジェに傾倒するのは1929年頃という[65]が、田上自身も意識していたようである。

住宅作品ではインターナショナル・スタイルと呼べる作品は少数派であるが、1930年代の田上の作風を考える上で見逃すことはできないであろう。

10-6-1:相内邸(現大谷邸)(1934)

札幌市南１条西28丁目　現存

施主の相内は竣工後２年で樺太に転勤し、その後先代大谷三郎がこの家を買い取り、子息哲也の経営する大谷哲也商店㈱(雑穀飼料)事務所を経て、三郎の長女宅として使用している。

軒の深い大きな寄棟屋根が東西方向に長く延びて水平線を強調し、南北方向にはエントランス部分のポーチが突き出し、Ｌ字型の平面形をとっている。２つの軸線の交差部に２階がのっている。

主棟から南に張り出すエントランス部は、南と西に窓をつけた半戸外空間の土間と玄関で構成され、南側と玄関東側には田上好みの「FLOWER BOX」[66]が配置される。玄関に続くホールの西側に「ヒロエン」[66]が続き、東側は８畳大の応接室である。南と東に１尺ほどの出窓を張り出すが、２階壁面も張り出すことによって平坦な壁面表現をとっている。ヒロエン(幅6尺)北側に「茶ノ間」[66](10畳)と「客間」[66](12.5畳)の続き間を並べ、西側廊下をはさんで納戸、便所を配置している。ヒロエンの建具は、欄間付きガラス繰戸「繰引雨戸」[66]とし、戸袋も「硝子戸入戸ブクロ」[66]として軽快に扱っている(図10-6-5)。

主室北側の台所、勝手口、女中室などの配置は、他の住宅作品に共通

63：『建築大辞典』（彰国社、1974.10.10)

64：美術評論家。1922年北海道帝国大学予科に入学。『黒百合会』と『詩学協会』を根城にダダイズムをキャンペーンした。1925年詩と版画の同人誌『さとぽろ』を創刊、モダニズム運動を紹介。1926年札幌を去り、京都帝国大学哲学科に入学。武蔵野音楽大学教授、造形美術協会理事長などを歴任。（『北海道大百科事典』(北海道新聞社、1981)『芸術學研究第一輯』(第一書房刊)を1929年12月１日刊行、第二輯1930年５月１日、第三輯８月20日、第四輯同年11月20日のうち、田上義也は建築論を1、2、4輯に投稿している。

65：藤岡洋保『大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるル・コルビュジェの評価』（日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)1982.10)

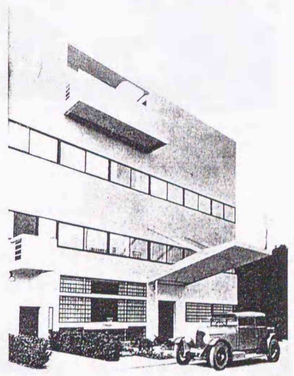


図10-6-1　メゾン・ア・ガルシュ（『芸術學研究第二輯』）

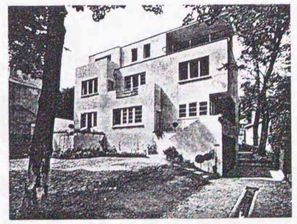


図10-6-2　ステヴァン作小別荘（『芸術學研究第四輯』）

66：『相内氏住宅新築設計平面図 階上.階下』



図10-6-3　相内邸南側外観

する。

２階は、南側に３方向に浅く出窓を張り出したサンルーム(6畳)、中廊下をはさんで東西に８畳の居室「LIVING RM.」[66]を配置した。

「つば廣の帽子の如く寒気に抗する為に厳重に構成」[67]された軒の深い寄棟屋根や階段室の梯子窓など従来のモチーフが見られる反面、壁面の凹凸や装飾が少なく、量感のないフラットな白い壁、窓台の水平線と横長窓および梯子窓による壁面分割などの外観は、以前の作品に見られない特徴である。南面サンルームの軒線と接する連窓の扱いも軽快である。同様の「横長の窓」[67]は、安部信明邸(1930年３月設計、図10-6-7)などにもみられるモチーフであった。

67：『田上義也建築畫集』 p.82



図10-6-4　相内邸東側外観

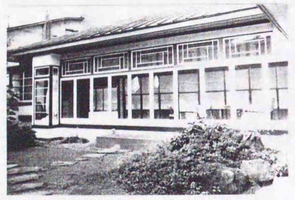


図10-6-5　相内邸「ヒロエン」



図10-6-7　安部信明邸(1930)

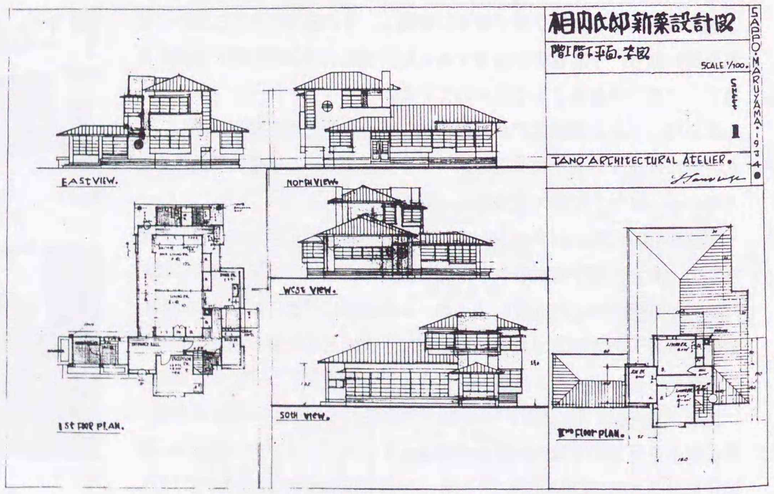


図10-6-6　相内邸新築設計図(平面・立面図)

10-6-2:倉田清純邸

図面に設計年や所在地などの記載がない作品であるが、田上の1930年代の作風をみせる住宅である。1932年に「クラタ氏の住宅」計画案があり、規模、意匠ともまったく異なるが、この倉田邸の初期案とも考えられるが、確定には至らなかった。

この住宅の正面ファサードをパラペット付きの陸屋根風にみせる片流れ屋根の手法は、正面性を強調する店舗やカフェー建築で多用された書き割り表現に通じる。また吹き抜けのガラス開口の多い居間部分を額縁で縁取る手法も、十勝川温泉ホテル(1933年)、志田病院(1934年)、宇喜代(1935年)などにみることができる。

この住宅の特徴は、中央の螺旋階段を中心とするコンパクトな平面と吹き抜けの居間であろう。単純な平面に比して、外観が複雑で、相内邸のような軽さのない点が惜しまれるが、コルビュジェのサヴォア邸（1931年）などの螺旋階段を意識したものであろうか。同類の螺旋階段は、北見郷土館(1936年)などにも見ることができる。

平面は一見矩形を意識しているものの、出窓や壁面、北側水廻り勝手口などの付帯部分でかなり凹凸があり、この形状がそのまま外観にも反映している。集合煙突を囲む螺旋階段を中心に、１階は南東側「居室及食堂・応接」[68](3.5×4間)、南西側「ヒロエン」[68]付き和室(8畳)、エントランスホールをはさんで北西に「柱型」、「フラワーボックス」[68]を備えた玄関、北側に「女中室」[68](1.5×1.5間)、便所、化粧室、浴室を、北東側に台所と勝手口を配置する。２階は、西側に押入をはさんで子供室(2.5×2.0間)と予備室(2.0×2.0間)が南北に並び、北側にホール的な「スペアルーム」[68]、東側に主寝室(2.5×2.5間)を配置している。

吹き抜けの居間の天井高は16.2尺、２階スペアルーム、１階ホール、女中室などで7.5尺、「日本間」[69]で8.5尺と断面図に記載がある。

断面詳細図によれば、地盤からパラペット上端まで30.0尺、西から東へ葺きおろす片流れ屋根は、垂木(0.18×0.18尺)、「並四分」[70]厚の野地板の上に、「ルーフィング二号品」[70]、桟「並二寸足」[70]を葺き、パラペット立上げ部とともに「亜鉛引平鉄板(月星印30番)」[70]を張っている。外壁は「菱形ラス張建築紙下地」[70]のモルタル塗り、玄関前の柱型も目地切りをしたモルタル塗りとしている。

外観意匠は決してスマートに納まっておらず、特に意識したと思われる南側も、吹き抜けの居間空間を強調するあまり、隣りの和室、子供室群とかけ離れてそれぞれがまったく別個の意匠として取り扱われ、小規模な住宅にしてはまとまりのない外観となっている。完成度の高い作品とはいえないが、ライト風を脱却した過程同様、インターナショナル・スタイルを意識しながら、独自の様式を求めようとした田上の歴程を示す作品のひとつとして評価しておきたい。

68：タイトルなし(倉田清純邸)平面図

69：タイトルなし(倉田清純邸)断面図

70：タイトルなし(倉田清純邸)断面詳細図

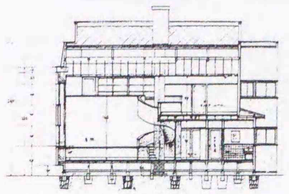


図10-6-10 倉田清純邸断面図

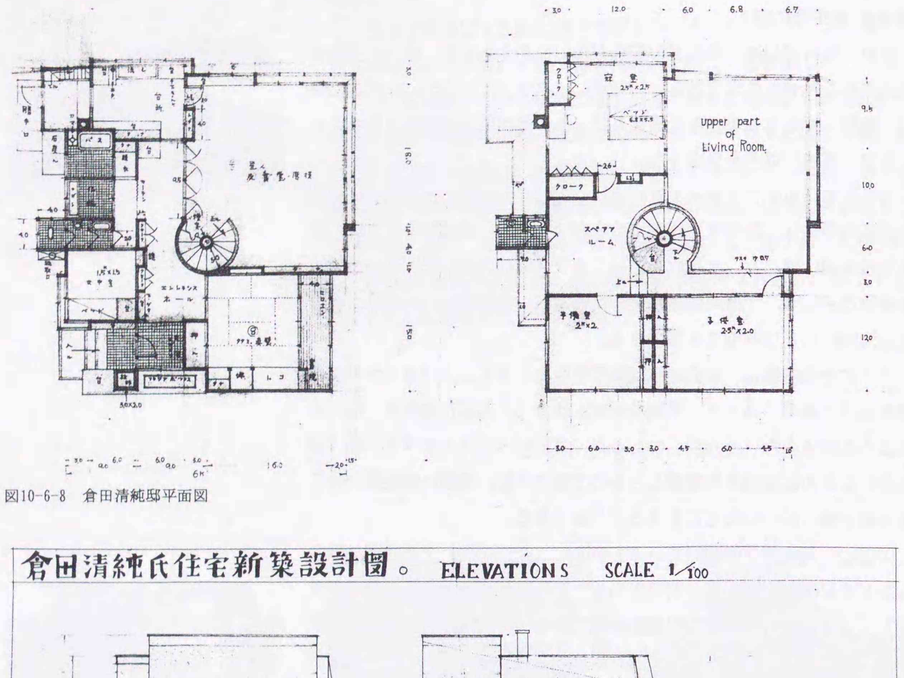


図10-6-8　倉田清純邸平面図

図10-6-9　倉田清純邸立面図

10-7　東京郊外の住宅作品

本節では、これまでみてきた雪国向けの住宅とは条件の異なる道外の作品２点をとりあげる。いずれの作品も、北海道で展開したデザイン傾向の線上でみることができるが、里美勝蔵邸の場合、アトリエは片流れ屋根住宅に通じる思想を展開しながらも、住宅部分では田上らしさは発揮できず在来の和風住宅形式をとっている。

もうひとつの外山邸は、雪国的造型要素を展開しながらも、雪や風などの厳しい自然環境から開放されて、北国では控えめにしか実現できなかったテラスやパーゴラなどの開放的な緩衝空間をのびのびと実践しており、また北の作品にはほとんどみられなかった白一色の外観など、当初から追及したテーマのひとつである自然との交歓のほか、1930年代に展開するインターナショナル・スタイルへの意識なども読み取れる作品である。

10-7-1:里美勝蔵邸・アトリエ(1929)

旧東京府豊多摩郡井萩町大字下井草字柿の木1911

画家里美勝蔵の住宅である。 108坪75のほぼ矩形の敷地に竣工した建物は、片流れ屋根のアトリエが付属するものの、住宅部分は瓦葺きのまったくの和風であり、田上らしい表現はほとんどみられない。

遺存する図面は、１次案(1928年10月26日付け)、２次案（同10月28日付け、配置の変更とアトリエ詳細の補足)と実施案(1929年3月付け)との３種類８枚が残されており、畫集では「ファサード及プラン成形は概して東洋的性格を多分に表示する」[71]と述べているものの、田上の本意ではなかったものと思われる。

実施案では、敷地の南東に寄せられた招き屋根のアトリエが和風の母屋に食い込む形で接続し、「北の採光を必要とするアトリエを、正しく東隅に引寄せるとき、プランのムーヴマンは土地をはげしく衝動する。」[71]という。

「火灯窓」[72]をみせる北側玄関(3坪)は、たたきと畳敷き(3畳)部分とからなり、右手にアトリエ(9坪)、正面に「本間」[72](8畳)への襖が開き、本間を通して「奥庭に呼應」[71]している。本間の東側には「茶の間」[72](6畳)が続き、南側「ローカ」[72]が続き間をコ字に囲み、南側で３尺５寸幅、東・北側では３尺幅で、玄関の間と連絡している。「ローカ」の北側に台所と風呂、東側に女中室(2畳)、便所が配置され、南東端に接続する「離れ」[72](6畳)は、「アトリエに相對」[71]し、「プランのリズムに於ける重要なアクセンテーション」[71]として意識された。

母屋は、軒下の塗壁仕上げ以外を押縁下見板張りとし、離れは、濡れ

71：『田上義也建築畫集』 p.73

72：『サトミ勝蔵氏邸住宅とあとりえの設計図』(1929.3)

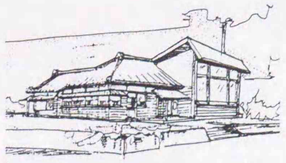


図10-7-1　里見勝蔵邸･アトリエ パース
（『田上義也建築畫集』）

縁、網代戸袋、火灯窓、下地窓などを備えた数寄屋風の造りとされた。アトリエは、亜鉛鍍鉄板瓦棒葺きの招き屋根であるが、後述する１次案とは、屋根形態、南側正面開口部などもすっかり変更され、平凡な意匠となっている。

これに対し１次案の方は、瓦棒引き鉄板葺きの寄棟屋根に下見板張りの外観を呈し、敷地の南東側の庭を囲むようにＬ型に配置し、北東にアトリエを置き、西に玄関、ホール、水廻り、台所、南に縁側を廻した続き間である寝室(8畳)と茶の間(6畳)、子供室(3畳)で構成されている。

アトリエは、3寸8分勾配の片流れ屋根で、正面軒高地面から18尺、漆喰塗り天井下までを大きく開口し、中央１間幅は、下引違い、上嵌め殺し、左右半間幅を上回転、下外開き窓とした。軒先部分は、 1.5尺ピッチの垂木(1×6寸[73])を軒桁より４尺延ばして、ルーバー(「パゴラ」[73])状とし、左右の壁の基部をバットレス状に斜めに突き出して勾配屋根の形態を強調する意匠であった。

73：『里美勝蔵氏邸新築設計図アトリエ縦断詳細』(1928.10.26)

10-7-2:外山卯三郎邸(1929)

旧東京市外井荻町下井草1,100

9.5×11.5間、 109.25坪の長方形の敷地に建つコンパクトな住宅であるが、「武蔵野の大自然に流動する大氣に呼應」[74]し、「泰山の如き安定と力学的平衡」[74]を表現した作品であった。

雪国的造形の要素の一つである柱型が書斎と２階の南面にみられるものの、北海道の住宅設計を規定していた「雪と風とに對する武装」[74]から解かれた解放感は、リビングルーム前の広いテラスや「パゴラ」[74]を支える柱列、２階バルコニーの他、北の住宅作品ではほとんどみられなかった外観全体を白一色で統一する作風にも表れている。北国では、控えめにしか計画できなかった「パゴラ」[74]も、ここでは大々的に使用され、「ベンガラ入り」[75]のコンクリート土間の「テレス」[75]に深い陰を提供している。

内部は、エントランスホールの東側に「リヴィングルーム」[76]、北側に「食堂」[76]、「台所」[76]を配し、規模の割にゆったりとした階段ホールの南側に応接室兼書斎を置く。「リヴィングルーム」には、軟石(おそらく大谷石であろう）積みの暖炉を備え、田上設計の八角形のテーブルと椅子のセットも置かれ、庭側の窓辺に造り付けのソファーを置いていた。リヴィングルームから２段ほど床の高い食堂とは、長押風の棚板で仕切られているものの、天井や天井をグラフィカルに飾る細木の押縁を連続して、空間の一体感を図っている。食堂にもリヴィングルーム同様、造り付けソファーが置かれていた。

2階は、前室を兼ねた書斎コーナーと寝室(4坪)と南側に「バルコン」[76]が計画され、武蔵野の自然との交歓が意図されていた。



図10-7-4　外山卯三郎邸外観(『田上義也建築畫集』)

74：『田上義也建築畫集』p.75
75：『外山卯三郎氏邸新築設計図井荻東京』(1928.10)

76：『田上義也建築畫集』p.74



図10-7-6　外山卯三郎邸リヴィングルーム(『田上義也建築畫集』)

遺存する２枚の図面は、いずれも1928年10月付のもので、完全な図面ではないが、実施案に近いものである。ただ外観が、設計図では、１階外壁の腰部分を北の住宅同様、水平押縁を強調した下見板仕上げとされている点と、暖炉の煙突幅が実施案よりも狭い点などの違いがあった。

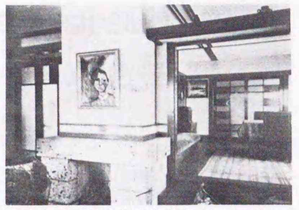


図10-7-7　外山卯三郎邸リヴィングルーム･食堂
（『田上義也建築畫集』）

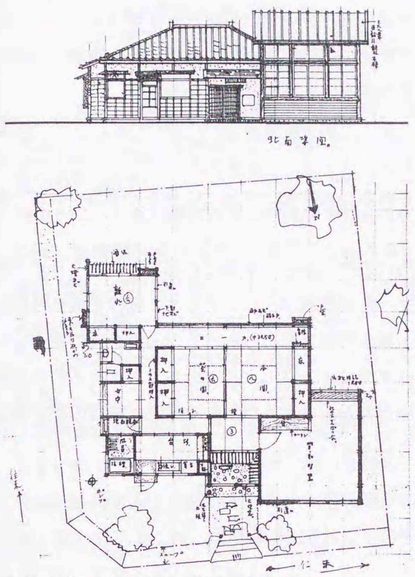


図10-7-2　里美勝蔵邸･アトリエ実施案

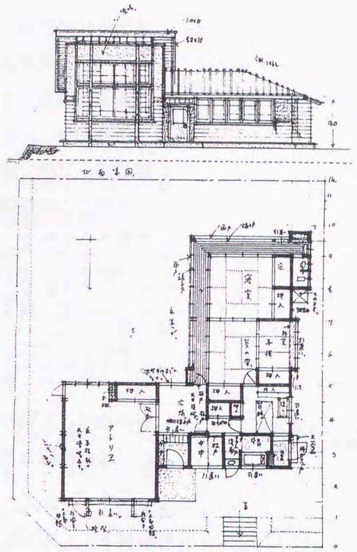


図10-7-3　里美勝蔵邸･アトリエ 1次案

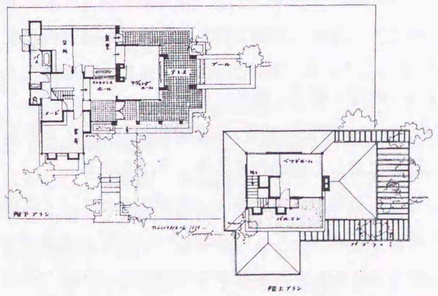


図10-7-5　外山卯三郎邸平面図(『田上義也建築畫集』)

第11章　1920年代の住宅以外の作品

11-0　1920年代の作品の作風

前章では住宅作家ともいうべきほどの田上の多産な住宅作品を通じて、1920年代の住宅作品がライト風モチーフに影響されながらも、当初からライトの作風を抜け出すための試行錯誤が行われたことを指摘したが、同様の姿勢は、住宅以外の作品でも認めることができる。

住宅以外の作品でも、ライト風の影響の強い1920年代と、ライト風を離脱するための過程として、インターナショナル・スタイルやアール・デコなどへの傾倒がみられる1930年代の作品とに大きく分類することができそうである。

本章では、1920年代の代表作品から、本道における作品第１号のバチェラー学園、第２部で述べた建築家M．ヒンデルとの競作である札幌北一条教会のほか、ライト風の影響が認められる５作品をあげて紹介するが、バチェラー学園ではすでにインターナショナル・スタイル的な手法もみられ、住宅作品同様当初からライト風からの離脱と独自の様式確立のための模索を意識していたといえる。

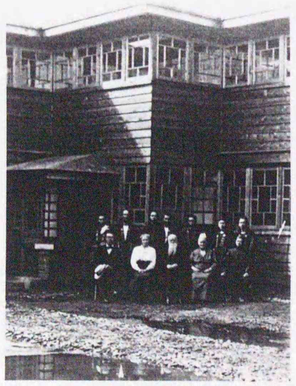


図11-1-1　バチェラー学園寄宿寮（新免克己提供）

11-1　バチェラー学園(1924)

札幌市北３条西７丁目　木造２階建　施工：朴沢組

アイヌ保護学園(バチェラー学園の前身)の寄宿寮として建てられたもので、田上義也の北海道における建築作品の第１号でもある。

田上とバチェラー博士（近年ではバチラーと記述するがここでは混乱をさけるため当時の呼び名に統一した）の1923(大正12)年の渡道中の出会いについては第８章でもふれたが、来札まもない田上に住居を提供してくれるなどなにかと面倒を見てくれたバチェラーの晩年の重要な社会事業のスタートをきる施設の計画が、田上の北海道における設計活動のスタートともなったのもまた因縁めいたものを感じる。

アイヌの父ジョン・バチェラー(1854～1944)は、1920(大正９)年「アイヌ教化団」を組織した。アイヌが和人と社会生活をおくれるよう学校教育を受けさせ、さらに希望者や能力あるものに中等学校以上の教育を受けさせるために経済的援助をすることを目的とした事業である[1]。1922年には「アイヌ教化団後援会」も設立された。設立当時の役員は、以下の者たちである[2]。

会長　北海道庁長官　宮尾 瞬治
理事　北大教授 農博　時任 一彦
　　北大教授 農博　須田 金之助
　　北大教授 法博　森本 厚吉
　　帝国製麻支店長 農博　平塚 直治
　　日基牧師　小野村 林蔵

バチェラーは1923年宣教師を退職するが、退職後もアイヌの子弟教育の為に奔走した。北海道で最も教育施設の発達した札幌で、才能ある者を中等学校からさらには大学まで進学させるため、寄宿舎の建設を計画、70歳を越える体に鞭打って寄付集めを始めた。資金は徳川義親（1886～1976、尾張徳川家19代当主）候爵が中心となって集めてくれた。1924年春に上京、徳川邸に招いた知名の士から５万円の寄付を集めることができた。義親候は、八雲に開拓移民を送って来た際にバチェラーと知り合い、以後バチェラーが日本を去るまでスポンサーとして面倒をみた人である。

寄宿舎は同年7月着工[3]、9月24日には完成したが、8月にはおよそ完成していたようである。8月8日付け徳川公爵宛の手紙に、「私たちの寄宿舎はいまほとんど完成しました。内部に壁が塗られております。物置小屋を除いて八十二坪となり本当に立派なものです。多くの人々が建物を見にやって来ます。」[4]とある。

さらに10月15日付け「アイヌ寄宿舎に関する一般報告」[5]によれば、９月24日に完成した寄宿舎には、その月の26日名寄出身の北風修次郎がまず入居。この建物は15～20名の青年を収容することができること。寄宿舎の建築面積は84坪、工費は物置や家具、ペンキ塗り、屋根の亜鉛板張り、排水樋を加えて9,230円24銭であったことなどがわかる。

1924(大正13)年10月の小樽新聞には、3日間(3、4、5日)にわたって寄宿舎の記事が連載された[6]。「札幌に生まれた珍しい建物」「通風と採光に苦心した建築家／母に抱かれたような温か味」「勝手の違った建築に大工も驚く／安価な材料で堅牢な建物」といった見出しで、記者の印象や建物記事が続く。多少長いが引用してみよう。

「あまりにも粗野にして異様なる外観にまごつかずにはをれなかった。それは日頃札幌などの近郊に所謂文化村として陸続と勢力を扶植してゆく新しき建築などとは似てもつかぬ、其処には何の粉飾もなく柱も壁板

1：仁多見巌『異境の使徒 英人ジョン・バチラー伝』(北海道新聞社、1991.8.29) p.178
2：仁多見巌『アイヌの父・ジョン・バチラー』(檜書房、1963.4.30) 以下の沿革は、同書を参考にした。
3：仁多見巌訳編『ジョン・バチェラーの手紙』(山本書店、1965.12.15) p.348
4：『ジョン・バチェラーの手紙』p.344
5：『ジョン・バチェラーの手紙』p.346
6：仁多見巌氏の教示による。



図11-1-2　バチェラー学園寄宿寮（仁多見巌蔵）

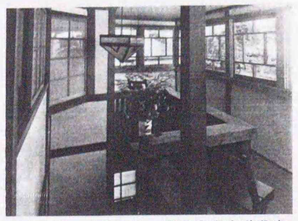


図11-1-3　バチェラー学園寄宿寮階段室

も木目鮮やかな森の香さへ嗅がれる様な荒けづりな素朴なものがあった。然し一度足を其の建築の中に踏み入れて部屋の一に座した時記者は何物か、かう母の抱擁のなかにでもある様な安らかな感じを抱かずにはをられなかった。」

建物の印象として、大小10以上のどの部屋も通風、採光に注意し、東、南に窓を開いて「秋の日の柔な陽光を一様に浴び」、部屋の一つ一つが押し入れなどをはさんで仕切られ、「日本の下宿屋などにある様な」唐紙一つという不安はなく、一人一人の個性を重んじようとする設計者の苦労にも言及し、また天井が低く押さえられているのは「温熱の関係」であること、心持ち長く水平に突き出た窓越しに外界を眺める感じはいかにものびやかで安らかであること。階段は、「舟底型の手摺りの水平線によって」階段の斜線は殺されて少しも昇るという重苦しさを与えないこと、小棚や手摺りの上の鉢植えが植物と家と人との接触をしみじみと感じさせること、階段室のガラス窓からの明るい光の入り方と眺めの趣がかわっていることなど、建築の特徴をよくとらえて報じている。

「建築に対する思想と抱負とをボツリボツリと断片的に語って呉れた」というくだりは、田上青年の風貌をよく伝えているが、さらに彼の言葉を借りて、「建築は一つの生命であり人間生活の基調である。」「建築は正しく美しく簡素でなければならない。」「建築は実用であり実生活の武器である。従って建築は装飾でない。……すべてが用に即し用が形に即して初めて美であり必然である」などと、田上の思想や設計態度についてもふれ、最後に「此の建築と共に息づき生活する人々の奥深い魂に交渉のある作品としてはあまりにも貧しいが、ただ全き感喜を以て当たり得たことを悦ぶ。」という設計者の言葉で締めくくっている。

寄宿舎は完成したものの、基本金不足の理由で財団法人化は却下された。その後もバチェラーは財団法人化を目指し、募金活動を続けたが、個人の力では限界があり、以前から助力を惜しまなかった徳川義親が中心となり、義親と渋沢栄一が顧問、新渡部稲造が会長となって、1930年7月「バチェラー学園後援会」が設立された。後援会事務所は、東京府荏原郡世田谷町桜木 652得能（とくのう）住吉方に置かれた。得能はもと北海道庁内務部長で、バチェラーが1923年4月道庁内務部嘱託になってからの知己で、夫人松子もバチェラーから洗礼を受け、また自叙伝『我が記憶をたどりて』(1928年)の日本語化を手伝う関係でもあった。この後援会の募金活動により、まもなく1931年7月13日学園は財団法人となった。1931年の「バチェラー学園後援会」役員名簿には、当時の札幌を代表する財界人、大学人が名を連ねている。

顧問	侯爵	徳川 義親	北海道庁長官　村上 信一
	農博・法博	新渡部 稲造	北海道大学総長 南 鷹次郎
	男爵	佐藤 昌介	
理事長	ジョン・バチェラー		

理事	宮部 金吾、時任 一彦	
監事	平塚 直治、須田 金之助	
評議員	有間 英二、志村 高志、今　裕、高岡 熊雄、新島 善直	
	岩本 俊郷、関場 不二彦、竹谷 源太郎	
書記兼舎監	片平 富次郎	

田上自身も、同年10月11日、札幌混声合唱団や小川隆子夫人、笹仲子夫人らの賛助出演を得て、バイオリンのチャリティ演奏会「バチェラー翁に捧ぐ。田上義也提琴独奏会」を豊平館で開催し収益を寄附している。1930年11月14日付田上宛のバチェラー書簡[7]には、内訳が「田上義也氏より領収　七〇円　バチェラー学園に対する個人的寄付」「札幌音楽協会より領収　二四五円　バチェラー学園のために」と記述されている。

設立以来多くのアイヌ青年を送り出した学園であったが、1940（昭和15）年頃から中等学校制度が地区制となり地方からの入学ができなくなり、さらに1941年には第二次世界大戦が勃発しバチェラーが日本を去ったあとは、本館(バチェラー宅)は澱粉会社や、軍人援護会に賃貸（1942年9月)され、寄宿舎は1945年北海道庁に収用され軍人援護会の理事住宅として使われるなどしたが、戦後は学園関係者に返還され、その後社会福祉団体に利用されたりして1961年に解体された。

この建物の設計史料としては、外観パース２枚（うち１枚は色鉛筆で着色している)と平面エスキースの３枚および、『畫集』の挿図(パースと平面図）が残るが、残された数葉の写真とは印象も規模もかなり異なる。写真に見られる外観は、田上の住宅作品によく使用された目板打ち下見板張りの外壁で、縦横桟で９分割された建具をはめた連窓を南側に見せているが、縦枠で区切られた連窓はパースの全面開放表現とはかなりかけ離れており、全体的に腰壁や外壁量も多く、基本案にみられた軽快さは失われている。

３枚の外観パースはほとんど同じもので、１、２階とも腰壁を除き、意識的に全面ガラスとされ、東側脇階段室もガラスの箱風に扱われており、「多量の硝子のファサードは壁體を殆ど埋めつくす程に、光線を求める」[8]意匠や、ピロティで支えられた物干スペースなどは、明らかにインターナショナルスタイルを意識したものと考えられ、独自の作風模索への姿勢をみることができる(図11-1-5)。

西と北翼の南側の柱形を意識したようなモチーフは、後の坂邸（1927年、10-3-7参照）や、鬼窪邸(1929年、10-4-4参照)などの住宅作品の外

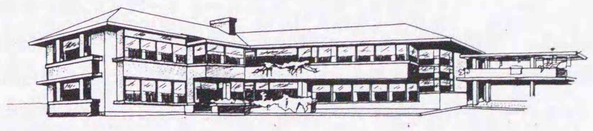


図11-1-5　バチェラー学園パース

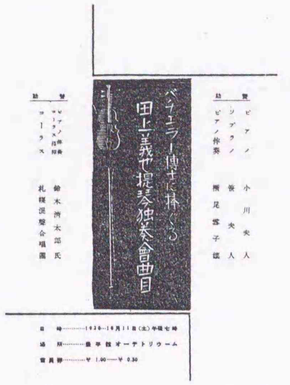


図11-1-4　田上義也提琴独奏会プログラム

7：前掲『ジョン・バチェラーの手紙』pp.429～430

8：『田上義也建築畫集』による。

観でも繰返し使われる特徴的な意匠であった。

平面史料は、エスキースと畫集掲載の両平面が存在するが、いずれも実施案とかなり異なる。エスキース平面では、１階55.5坪、物置3.5坪、テラス5坪、２階58坪、物置をいれて合計117坪(テラスを除く)、畫集平面では、１階65.5坪、物置3.5坪、テラス 6坪、２階59.75坪で物置を含む合計は128.75坪と、やや規模が大きい。1940年度の学園財産目録には、117坪25とあり、エスキース平面と規模の点では似ているが、田上好みのテラスは失われ、個室の数なども縮小されて完成したと考えられる。

内部構成の詳細は不明であるが、近年発刊された『異境の使徒　英人ジョン・バチラー伝』内に掲載の略平面によれば、Ｌ字型の接合部に玄関と階段室を置き、西棟１階では南から診療室(2.5×3.0間)、片廊下の西側に和室(8畳)と3尺幅の廊下をはさんで女子学生用(2～3人用、6畳程度)、職員用(1～2人用、2.5×2.5間) の部屋を並べる。廊下は北棟の北側で逆Ｌ字に台所(2.5×3.5間)に接続し、廊下の南側は広い食堂(2.5×5.5間(一部階段室下を含む))であった。

２階は西棟に職員用(2.5×3.0間)、床の間、押入付きの職員家族用和室(8畳)以外は、学生室である。６畳から12.5畳程度の２～３人用の相部屋が６室並んでいた。

建築畫集は建物完成後に発刊されたにもかかわらず、実施案でなく基本案を掲載している。実施段階で設計変更をうけコンパクトに収められた結果、基本設計のもつ延びやかさは失われており、田上は建築空間に対する自身の考え方をより積極的に示すために、あえて変更前の平面を掲載したと考えられる。他の作品でも同様に基本計画の方を掲載する例が多く見られるのもこうした理由であろう。

ここでは田上の設計意図を反映させていると思われる畫集掲載の平面をとりあげて、建物概要を説明しておこう。

平面はＬ字型で、１階は、「エントランスホール」西側に南から「ルーム１」(7坪)、「ルーム２」(6坪)、「ルーム３」(5坪) の家族用' ３室が並び、「ルーム２」と「ルーム３」との間には、外観隅角部を引き締める集合煙突が立っている。ホール東側に、「集会と食堂」スペース(13.5坪)、「台所」(5坪)が並び、南側に「テレス」を備える計画である。さらに西側には「メード」室、「風呂」、勝手口が並び、北側には片廊下が配されて、北西端に便所が付属する。

２階は、Ｌ型の偶角部に階段室、「パブリックスペース」を置き、西側に「ルーム４～７」を置き、東側に並ぶ「ルーム８～12」の５室の南側前面には、１間幅の「サンルーム」が配され、「コシカケ」なども備えた学生達の共同スペースとして考えられていた。東側脇階段のホールから出入りするパーゴラ付きの物干スペースは、物置と一部ピロティーで支えられた屋上を利用していた。

広いエントランスホール、食堂に続くテレスやパーゴラ付きの西側テレス、Ｌ型隅角部のパブリックスペースや階段室のほか、冬はサンルーム、夏は「バルコン」となる学生室前の勉強室など、その後の田上の開放的な空間の指向がじつによく表現された計画であった。

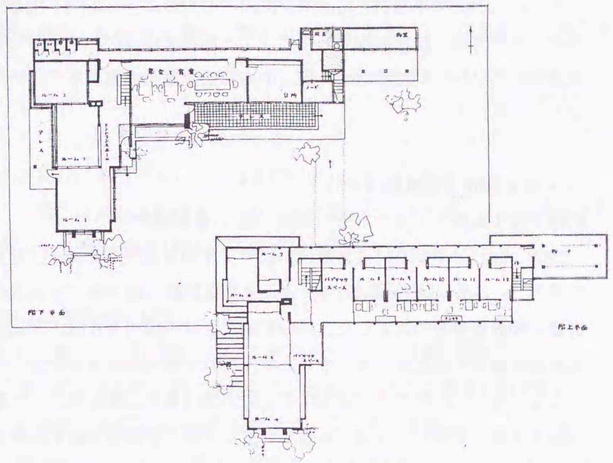


図11-1-6　バチェラー学園平面図(『田上義也建築畫集』)

11-2　ライト風の作品

11-2-1:札幌第一農園Ⅰ(1926)

札幌市南２条西13丁目　木造平家一部２階建　1926年5、6月設計

住宅(安部信明旧邸)に増築された種苗、農具などを売る「街の中に建てられたる Seed store」[9]である。

逆Ｌ字型平面の南側主棟１階には事務室と応接間、北側発送室、２階は居間兼客間と小屋裏利用の物置を配置する単純な構成で、南側主棟の大きく西側に葺きおろした招き屋根が特徴的である。1930年代の住宅作品で展開された「雪国的造型」(10-4参照)の萌芽の一部を見ることができる。田上自身もこの点を特に意識したようで、「単続なる切妻の屋根は西側の平屋より延び上り、階上に『招き』を構成し、視覚的平俗を破る」[9]と述べている。

主棟南東側に長方形断面の双柱で支えた差し掛けをかける入口とし、店舗部分が応接間とある。保存設計図では、差し掛け屋根部分はパーゴ

9：『田上義也建築畫集』p.27



図11-2-1　札幌第一農園Ⅰ(『田上義也建築畫集』)

ラ仕様とされており、内外のつなぎ空間を意識した田上の設計姿勢がよく表われている。内外のつなぎは、事務室と応接間とにつながる温室でも意識されたであろう。建物の性格上不可欠のものであったろうが、「草花の隙間を通して外部を柔く(ママ)視覚する」[9]ことへの配慮が、この点をよく示している。

10：『安部信明氏札幌第一農園新築設計図 階下平面図』

事務室の外開き窓は、「ミノ」[10](美濃)版サイズのガラスを「横使用」[10]した「はしご窓」で事務室と応接間の間に、やや南より円形ペチカがみられる。ペチカは、住宅のみならずカフェー亀屋支店(12-2-1参照)や幌西巡査派出所(12-5-3参照)など、田上の内部空間意匠の重要なモチーフのひとつであった。

11-2-2:札幌市医師会館(1926)

札幌市南１条西19丁目　木造２階建　施工:篠原要次郎

11：『札幌市医師会史 昭和編』(1983.3.10)

1926(大正15)年６月22日地鎮祭、同年７月18日上棟式を挙げ、９月27日竣工[11]。以後1954(昭和29)年３月に北海道医師会館が竣工するまで北海道医師会事務所も同居した。1942年国民医療法公布で札幌市医師会は北海道医師会札幌支部に改組されたが、1947年新札幌市医師会として発足している。1954年３月大通西７丁目に北海道衛生会館が竣工、３階に北海道医師会事務所が入居する際、今度は札幌市医師会が同居の身となった。

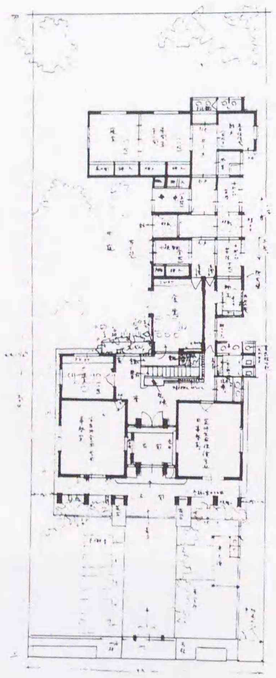


図11-2-2　札幌市医師会館1階平面図

旧会館は、その後札幌医大、日本通信建設株式会社、大北電建株式会社などに貸与されたが、1957年９月青木外科が内部改修を施し開業した。翌1958年、札幌市都市計画路線「中の島桑園通」の計画に、札幌医師会館西側住宅部分がかかることとなり、1960年７月26日旧会館の増改築工事が、請負金額 374万円で地崎組と契約され、同年10月21日、札幌市医師会及び准看護学校の移転式が行われた。1961年12月大通西19丁目の新会館移転に伴い、これらの建物はすべて解体された[11]。

木造２階建て切妻屋根の主棟(本館)は、平側正面中央に２本の柱型を貫入させたブロークンペディメントをみせ、長方形断面の８本の柱で支えられた吹き放しのポーチを張出している。昭和初期の建物によく見られる意匠である、軒下の白漆喰部と下見板張りの外壁との組合せは、水平コーニスでくっきりと区分され、妻面では破風状に立上げられている。幾何的なサッシュ割りをみせ、枠廻りを強調した欄間付き上げ下げ窓２連窓は、このコーニスを分断し漆喰部分まで突き出して配されている。

９×22.5間(202.5坪)の東西に細長い敷地に、西側を正面に本館事務所棟を置き、背後に住居棟を付属している。

12：札幌市医師会館平面図

長方形断面の４本の柱型で囲まれた正面玄関両側に、「市医師会用○○(筆者中：図面上の室名一部解読不明)事務室」[12]と「医師生命保険会社用事務室」[12]が配され、ホール(「広場」[12])の左(南)側に応接室、北側に

洗面所、便所を置き、中央には手摺り部分をゆったりと広げて照明置き台とする、田上らしい意匠の階段があった。階段室奥(東側)には、食堂、「内玄関」[12]、小使室(３畳)、台所を突出させ、煉瓦造防火壁をはさんで、住宅棟が付属する。

住宅棟は、東端南側に「寝室」(8畳)と「居間兼茶の間」[12](8畳)の続き間を、中廊下北側に「生命保険用納戸」[12](4.5畳)、風呂を配し、本館との間に台所、女中室(３畳)、「勝手口」[12]などを置いて、中庭をコ字形に囲んでいた。

平面図[12]では、アプローチがゆったりととられ、５台分の駐車スペースや「車夫溜」[12]なども計画されているが、残された写真(図11-2-3)では、門柱真近に本館があり、実現されなかったようである。

２階には大会議室が設けられたようで、正方形を基本とした幾何学的なシャンデリア(図11-2-4)の設計図も残されている。

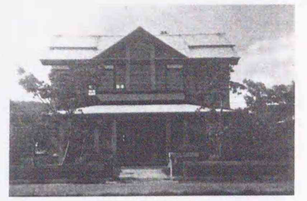


図11-2-3　札幌市医師会館

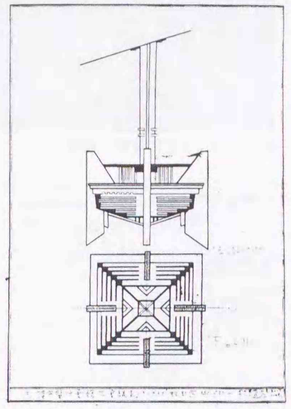


図11-2-4　札幌市医師会館大会議室シャンデリア

11-2-3:愛隣館(1927)

札幌市豊平　木造平家　施工：サッポロ建築社(川崎喜代治)

豊平町と白石町一円に生活している約 1,000人の細民の救済を目標とした慈善団体愛隣会の無料診療所および失業者救恤(きゅうじゅつ)所であった。

愛隣会は、細民の疾病を治療することを目標に1926(大正15)年９月14日、友松三郎や医師松江錁五郎らが中心となって豊平町30番地に開設した無料診療所が出発点である。開設以来約１ヵ年に 3,300余名の患者に治療を施す成果をあげたが、1927年にはさらに彼らの生活安定を図るために「救恤者ホーム PaupersHome」[13]を併設することとし、事業の拡張をめざした。中心的使命である無料診療所が、「健康保全」[13]のために疾病の治療や衛生思想の普及という「生活資料の増進」[13]に対する奉仕とすれば、救恤者ホームは「健康を資本として、其の生活の向上を図る」[13]指針を与える「生活保証」[13]という精神面での奉仕を意図したものである。

13：『北門建築　愛隣會無料診療所建築記念號』(サッポロ建築社、1927.11.1)

救恤者ホームの事業として、学芸講習部、家庭工業奨励部、生産及消費組合部、人事相談部を設けることとし、それぞれの事業の予定概要は以下のようであった。

① 学芸講習部は、知識と労働との調和を目ざし、毎月１回から２回学術講演会を公開し、工業、農業、水産等に関わる一般科学知識の普及を図り、毎夕または隔日貧児や希望者に国語、歴史、算術の３課を教え、これらの学課と交互に一定の技芸を修得させその技術の上達に従い、一定の工賃を支給して生計の一助とさせ、彼らの独立自営に対する自尊心を養うことを目的とした。

② 家庭工業奨励部では、家族一団となって労作でき、しかも職業というよりも趣味と実益を兼ね備えて、一大家族主義を実践できる家庭工業を推奨するが、作られた製品の販路については次の生産及消費組合部が責任をもつ。

③ 生産及消費組合部は、道産奨励、国益増進を根底に、低利資金を借り

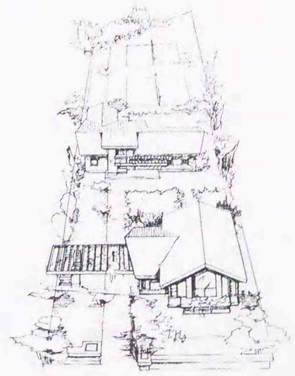


図11-2-5　愛隣館パース（『田上義也建築畫集』）



図11-2-6　『北門建築』表紙

入れて生産組合を組織し、家庭工業製品を廉価で市場販売業者に卸し、消費組合を組織して、低廉な物資の供給を計り、経費節約、相互扶助を目的とする。

④　人事相談部は、精神的煩悶や生活苦の訴えに対して、懇切な回答を与え、失業者に職業紹介を図って、生活全体に対する最善の方向を示す。

こうした事業は、従来の借家では積極的な展開が望めず、新たに事務所と必要施設を建設するのに、約１万円の基本金が必要とされ、基金の募集が計画された。1927年11月１日に発行された『北門建築』「愛隣會無料診療所建築記念號」(サッポロ建築社）には、寄付を募ることを目的に、この事業の詳しい説明がなされているが、すでにこれらの施設が着手されていること、こうした建物が細民区域の一角に建設されることそれ自体が、貧しい人々に明るい慰めを与え、生活に対する希望を与えるなど、愛隣会の固い信念が、田上の巧みなスケッチとともに特集されている。

この雑誌によれば、愛隣会の委員は、代表委員友松三郎、医務代表医師松江鉄五郎、常務委員として、野田波治、近藤孝悌、高杉年雄、田中博、中尾直則、伊藤胤男、事務員谷藤ふみ子、看護婦梶原そと子、助産婦山場ひで子、上野そと子らで、賛助員として、理学博士宮部金吾、ドクトル・オブ・フィロソフィー高杉栄次郎、医学博士香宗我部壽、同中川論、農学博士小熊捍、同井口賢三、道庁社会課長上田一郎、市会議長村田不二三、市助役増田彰、商業会議所会頭久保兵太郎、谷口眼科病院長谷口捨次郎、帝國製麻会社札幌支社長平塚直治、大日本麥酒会社札幌支店長藤田昌、医学士桑川秀武、地崎組地崎宇三郎らがまた資金募集の呼び掛け人として名を連ねていた。

1927年度経費予算は次のように計画されている。

○事業拡張資金募集予定額　12,000円
　内　訳
　１建　築　費　6,000円
　２設　備　費　1,000円
　３敷地買入金　3,300円
　４運転資金　1,700円

○収支計算
　予定収入総高　3,920円
　内　訳
　１維持会友会費　1,200円(200口予定)
　２道庁補助金　150円
　３特別寄付金　150円(薬価の２割は患者の寄付)
　４臨時収入　300円(音楽会、講演会、バザー等)
　５付帯事業よりの収入　420円(ホーム会費120円、家庭工業奨励部収入120円、生産組合収入180円)
　６運転資金　1,700円

　予定支出総高　3,780円
　１薬　価　840円
　２人件費　1,800円(医師、看護婦謝礼、事務員給料)

３消耗費　120円(月10円)
４事務及通信費　180円(月15円)
５点灯費　180円(月15円)
６旅費　100円
７薪炭費　60円(７ヵ月石炭３トン、木炭５表)
８諸雑費　100円
９臨時費　100円
10印刷費　150円
11予備費　150円
差引残高　140円(翌年度へ繰越)

拡張事業資金によって建設された木造建築は、間口10間、奥行29間の南北に長い敷地に２棟建てられた。手前から前庭、救恤所、中庭をはさんで「主体である」[14]診療所は奥深い位置にとり、さらに後庭をひかえる配置である。２棟とも、亜鉛鍍鉄板瓦棒葺きの大振りの屋根、目板押さえ下見板張りと漆喰を組み合わせた外壁、幾何学的な窓のサッシュ割など、田上の住宅作品などに共通の意匠がみられる。『北門建築』ではわざわざ「ライト派田上式」という様式規定をしているが、田上の作品が当時の札幌の建築界でひときわ特徴的であったことを示すエピソードといえる。

救恤所は31.5坪。主棟の「救恤者ホーム」[14]の東側に玄関棟を突出し、左右の袖に「事務室」[14]を置き、玄関からアプローチ通りを覆うように低いパーゴラが備えられていた。軒高13.1尺、玉石地業布コンクリート基礎のホームは、転びのある大きな切妻屋根をかけ、南北に大きな破風と「合掌窓」[13]をみせる計画であったが、この大窓は引違い窓に縮小された。南側妻面の大窓をはさむ両柱型の裾には、「フラワボックス」[13]が取り込まれ「花と共に地に連らなる」[13]意匠とされた。

「夢のアーチ」[13]を飾るパーゴラは、「つたと果実」[13]を繁らせ、「労かれし身と、傷ける貧しい心」[13]を、なぐさめるよう意図したもので、パーゴラの「隙間を洩れる光と影のかくれん坊」[13]を、田上は「モザアルトの音楽と感じ」[13]るようだとも説明している。

パーゴラ下の診療所へ通じる直線の小道は、田上が好む要素でもあった。「私は直線の道を愛する。病める者、疲れし者、弱き者、貧しき者に、道草は禁物である。」「率直を意味する直線の道こそ、方向と方針を定める唯一のレール（軌道)であろう。」[13]と述べている。この道は来訪者を「飛ぶように門から一気にパゴラのアーチをぬけて」[13]診療所の入口へと導いてくれる。

診療所入口は、幅１間、高さ18尺の角塔を立て、軒の出３尺でそそりたっていた。「安心と平和と正直」[13]の表現という。『北門建築』掲載のスケッチでは、玄関左右にパーゴラを備えるが、畫集挿図(11-2-5)では、玄関から待合室前のたたき部分にパーゴラがのびやかに表現されている。

診療所は、１階34.75坪一部２階にアティック2坪を備え、軒高10.5尺、基礎は玉石地業軟石積みであった。入口の西側に患者待合室、南に診療

14：『田上義也建築畫集』p.50

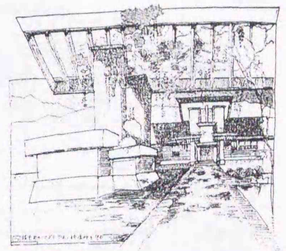


図11-2-7　講堂前のパーゴラから診療所を望む(『北門建築』)

15：北海タイムス(1927.12.11)『同胞愛を基調として/二つの社會奉仕/けふ盛大に落成式を挙げる /豊平無料診療所』、小樽新聞(1927.12.11)『寒空に貧しき人々のホーム建つ』

16：田上義也スクラップブック資料（新聞名不明）「救恤ホーム/細民の為め新築された/愛隣會の事業」による。

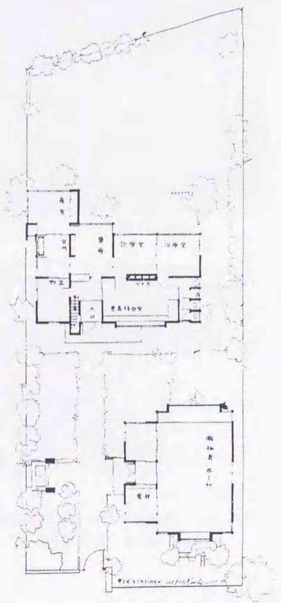


図11-2-8　愛隣館平面図（『田上義也建築畫集』）

17：脇哲『物語薄野百年史』（すすきのタイムス社、1970.9.15）p.255

室、治療室が並び、待合室は、「静かな落ち着きをただよわす低い腰掛、円い机、額、書籍」[13]などが置かれ、「感情の調和と理念の涵養を計る」[13]ことが意図された。畫集平面(図11-2-8)では、待合室と診療室との間にペチカも備えている。入口正面には薬局、西側には南から産室、台所、物置が並ぶ。

畫集では、南側のガラス開口を産室、薬局から診療室、治療室へと、段状に後退させて、「光に対する有機的分割」[13]を明確に意図しているが、『北門建築』掲載の平面では、薬局、診療室、治療室の南側壁体が直線状になっている。ペチカの記入も無いなど多少の違いがあって、実施にあたっては、こちらが採用されたと考えられる。

落成式は1927年12月11日に挙げられた[15]。当日は、北星女学校有志のコーラス、友松代表委員の事業経過報告、澤田道庁長官代理、市長代理、戸津高知北海中学校校長らの祝辞後、西村眞琴博士の救貧問題に関する記念講演などがあった。西村博士は、丸井百貨店で個人展覧会を開催し、千数百円の収入金すべてを愛隣会に寄付するなど、後援者として協力を惜しまなかった人である。

翌1928年１月２日には、細民 150余名をホームに迎え、田上のヴァイオリン演奏、北星女学校生徒の手造りの贈り物などがあって、温かい正月を迎えたことなどが新聞[16]にも報じられている。

11-2-4:亀屋本店(1928)

札幌市南４条西４丁目　木造平家

ススキノ最初の喫茶店兼高級洋菓子店[17]で、在住外人も多数訪れたという。計画初期には、陸屋根の客船をイメージさせるデザイン習作（図11-2-9）がみられ、次章に述べる亀屋支店(1929年)に連なる意匠として興味深い。この案は、その後の計画では姿をひそめ、かわってライト風意匠の木造２階建ての計画(図11-2-10）に変更されたが、最終的に亀屋食料品の喫茶部のみの改築となった。実施案は、切妻屋根下見板張りの簡素な外観で、入口廻りに幾何学的な意匠を集中させたデザインに変更されている(図11-2-11)。

内部では、亀甲型のテーブルとそれを囲むように配置された台形のソファーを６組配置し、「美しき平面分割と空間のリズム」[18]を演出し、正面の半円形に突出したカウンター上部の左右には、幾何学的な装飾を施した「ブリキ製電気のカサ」[19]の照明を下げている。屋根勾配とほぼ同じ勾配の舟底型の天井とし、床から頂部までの高さ11尺、両端部８尺とし、勾配天井には天井灯を組み込んでいる[19]。左右の壁面には床から 6.5尺の高さ、ちょうどピクチャーレールと同じ高さに、奥行１尺の物品棚を廻し空間を引き締めていた[19]。

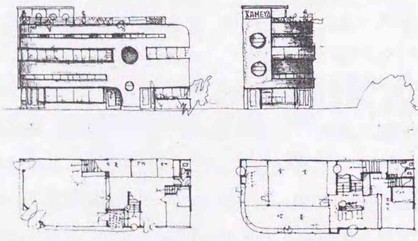


図11-2-9　亀屋本店初期計画案

18：図面『KAMEYA TEA SALOON』

19：『亀屋食料品店喫茶部新築設計図縦断面図』

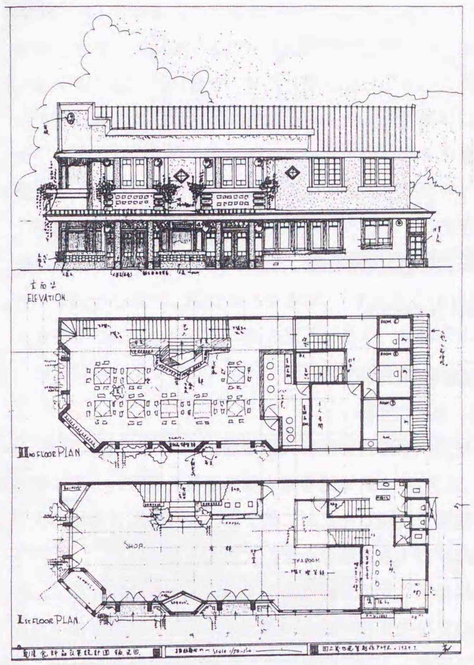


図11-2-10 亀屋本店計画案(1927.3)

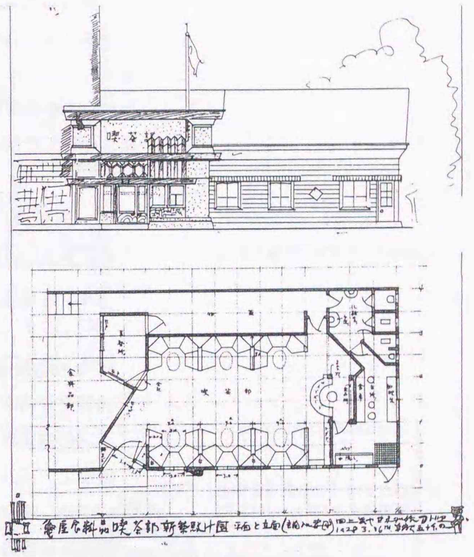


図11-2-11 亀屋本店喫茶部設計図

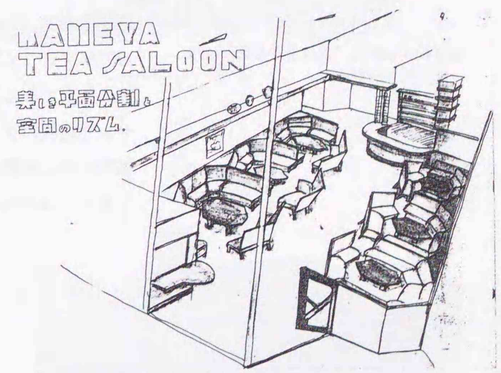


図11-2-12 亀屋本店喫茶部内部パース

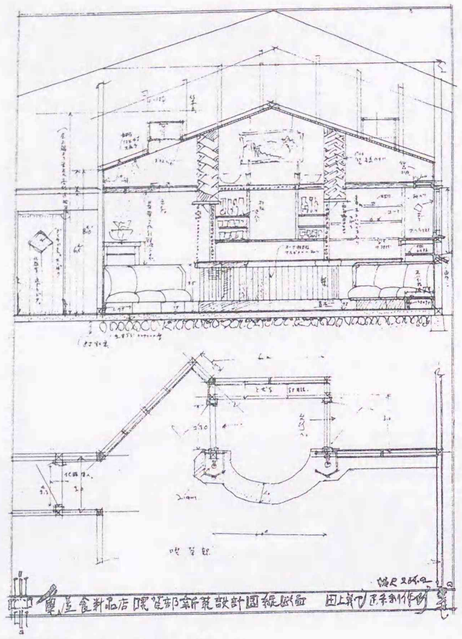


図11-2-13 亀屋本店喫茶部断面図

11-2-5:松岡農場事務所(1928)

和寒町字西町36　木造２階建

松岡農場は、松岡汽船株式会社社長松岡潤吉が、前社長修三(実父)の指示で、1921(大正10)年８月本道各地の農場地帯を視察し、同年秋本町の伊藤、根井両農場を買収したことに始まる[20]。和寒町市街地の大半と殖民区画時の和寒原野の主要部分を含む大農場であった[20]。

1924(大正13)年春、二代目支配人として小川義雄が着任した[20]。小川義雄は1880(明治13)年生まれ。1905(明治38)年８月札幌農学校卒業後[20]、1907年アメリカに留学し1922年の帰国まで酪農の研究にあたった[20]。ピアニストである隆子夫人とは1913年に結婚している[21]。熱心なクリスチャンで札幌のデパート五番館の創立者、小川二郎の実弟であった。日本基督教会札幌教会の設計者候補として田上を教会に紹介してくれた人物である。1924年赴任以来、農業の指導研究にあたり、特に1934年ころに

20：藤田明郎『松岡農場顛末記』(「北海道地方史研究90」、1973.2)

21：前川公美夫『北海道音楽史』(1992.6.5) p.322

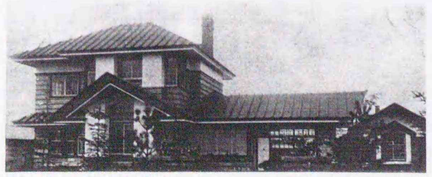


図11-2-14 松岡農場事務所

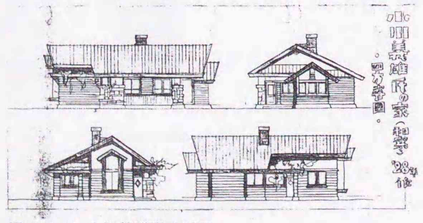


図11-2-15 小川義雄宅立面図

冷床苗利用栽培法を創案したことで知られる[20]。夫人を札幌に残し単身赴任を通したが、1928年に和寒の小住宅（図11-2-15)を田上が設計している。

1925年松岡農場株式会社となり、このころ会計主任として松岡汽船株式会社から綾仁三郎が派遣された。1938、39年ころには小川と農場運営で意見があわず農場を去る[20]が、小川宅と同年にやはり田上が綾仁宅を設計している。

1940年から村ぐるみでの小作農解放運動がスタートし、1941年５月農場解放が決定し、翌1942年松岡農場解放記念祝賀式が行われている[20]。

1927年１月頃から基本設計が始められたと考えられる事務所建物は、初期住宅作品に共通するライト風デザインである。深い軒、破れ破風と「亀甲型大窓」の組合せ、テラスをおおうころびのある切妻屋根、目板打ち下見板の外壁などが特徴的であるが、設計図では控えめな１階事務所や２階主寝室の南側柱型が、残されている写真や透視図ではかなり強調され、「雪国的造型」への試行を見ることができる。

事務所は、旧事務所として使用されたであろう住宅を移転した「旧家屋」[22]と棟続きになっており、１階は庭側に開放的なゆったりとしたテラスに続いて玄関、応接室と事務室、「小使室」[22]が配置された。これら４室の中心には丸形ペチカ風の記入がある。事務室に続いて「地図室」[22]、中廊下に沿って予備室、風呂、便所が配置され、旧家屋の台所と連絡し

22：『松岡農場新築設計図(事務所)』

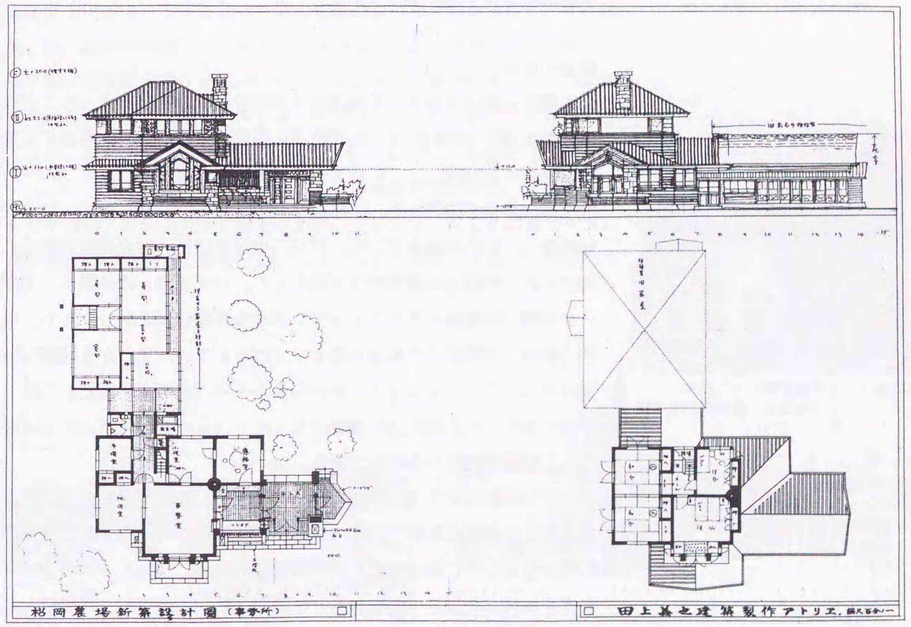


図11-2-16 松岡農場事務所設計図

ている。２階は階段ホールを中心に、主寝室と寝室の２洋室と８畳２室の続き間となっている。主寝室の一部はアルコーブ風に突出して机が隅角部に２卓おかれ、２面採光の縦長窓を備えていた。

事務所の２階および旧家屋部に誰が居住していたかは不詳であるが、２階の主寝室は記載されたツインベットや机などから、小川義雄とたまには訪れたであろう隆子夫人のために用意された部屋と考えたい。全体のデザインや規模からすると住宅作品の範疇に入るものであるかもしれないが、１階周りの外部から室内へと連続感あふれる空間処理は、事務所という機能であったからこそ実現できたものであろう。

11-3　日本基督教会札幌北一条教会(1927)

札幌市北１条西６丁目　施工：伊藤組　1979年取壊し

田上の代表作の一つであるとともに、札幌北１条通のシンボルの一つとして広く市民に愛されたこの教会建築は、M．ヒンデルとの指名競技設計であった。先にも述べたように、ヒンデルの来札は、田上の１年遅れ1924(大正13)年のことであったが、設計活動はほぼ同じ頃から展開しており、北海道におけるプロフェッショナルな建築家活動の黎明期を飾る記念碑ともいえるものである。

教会の沿革

札幌独立教会とならび北海道大学関係者と関わりが深かったこの教会の創設は1890(明治23)年、札幌市南１条西１丁目中通東向きに日本基督教会講義所を開設したのに始まる。1894年南大通西３丁目の 120坪の敷地に初代会堂が建設され、工事監督森山伝蔵により５月着工、12月竣工、建築費 1,781円45銭を要した。翌1895年10月23日、教会建設並献堂式があげられ、札幌日本基督教会が誕生した。下見板張りの外壁に、尖頭アーチの開口部を配したピクチュアレスクな外観(図11-3-1)をもち、風見鶏の飾りが玄関廊の尖塔頂部にとりつけられていたことから「鶏教会」と愛称された[23]。ハリストス正教会のセルギイ『北海道巡回記』[24]に「十字架のかわりに尖塔の上に雄鶏をたてたアメリカの長老派のりっぱな教会」と紹介されているものである。

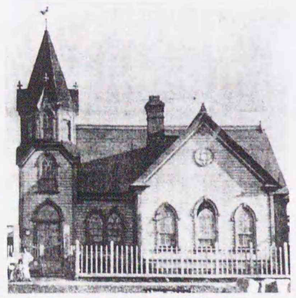


図11-3-1　日本基督教会初代会堂
(『札幌北一条教会歴史写真集』　1985)

23：『日本基督教會札幌北一條教會創立六十年史』(1956)
24：宮田洋子訳『掌院セルギイ北海道巡回記』(キリシタン文化研究会、1972)

1907(明治40)年５月10日の札幌大火で焼失したが、翌日の臨時総会でただちに仮会堂の新築と敷地の変更拡張が建議され、北１条西６丁目1927年会堂の位置に敷地を求め、仮会堂を3,318円で建設、同年1月16日献堂式をあげ、北辰日本基督教会と改称した[23]。木造平家、切妻妻入りの簡素な仮会堂であるが、棟飾りや妻の破風飾りなども一応備えている。田上の第１次案の外観パース(図11-3-2)の背景に描かれている木造建築がこれに相当する。

1914(大正３)年には牧師館竣工、翌1915年には日曜学校教室が会堂裏に増設されるなど、教会施設の充実が重ねられ、1924年の臨時総会では会堂の改築問題が提案された。1925年10月の創立満35周年記念式典を経て、1926年には具体的に新会堂建設に向けての準備がなされ、牧師館を隣接のローリー館(基督教青年会館、1910=明治43年建設、1937年札幌北１条教会が日曜学校敷地として買収)裏に移設、牧師館跡に会堂を移す工事が行われ、５月着工９月１日移転完了した。

1927年新会堂

新会堂の設計は、ヒンデルとの指名競技設計とされたが、1925年４月の第１回田上義也建築作品展覧会以降のことであろう。田上には教会員小川義雄の紹介で教会建築委員会[25]から依頼があり、第１次案(図11-3-2)では、柱型を強調した水平志向のデザインとした。遺存平面図には、玄関ホール廻りの照明具を組み込んだ柱型や、南北両側の２階テラス付き吹き放しポーチの扱いなどにライト風の手法がみられる。平面における玄関部、会堂、聖壇部の３つの空間分節はやや形態を変えながらも、実現案でも踏襲された。この案に対して、小野村林蔵牧師は「キリスト教の精神の象徴は塔である」[26]と再提出を求めた。そこで「大地から風雪を突き上げるような塔を設け、雪の結晶のような屋根をつけ」[26]て、正面中央の塔屋を強調し、内部のフライングビームの構造支柱や合掌天井を外観に明快に表現する案(図11-3-3)とした。同案透視図には、1925年12月20日の日付が記載されている。結果は、「日本の教会は日本人の手で設計したものを」[26]という教会側の意見もあって、田上案に決定した。

1927年３月28日長老小笠原楠彌名により新築申請がなされ、警保第3641号で認可、解体調査時に発見された「工事記録」によれば同年４月14日伊藤組(伊藤亀太郎)請負で着工、７月31日工費31,500余円[27]を要して

25：有馬英二、香曽我部寿、新島義直、時任一彦など北海道大学教授陣で構成された。

26：『北のまれびとくエゾライト・田上義也>(上巻)』(1977) p.117

27：北海タイムス記事(1927.10.1)

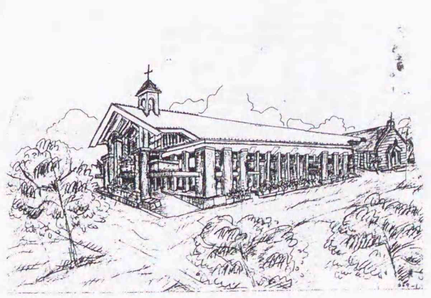


図11-3-2　田上案(一次)

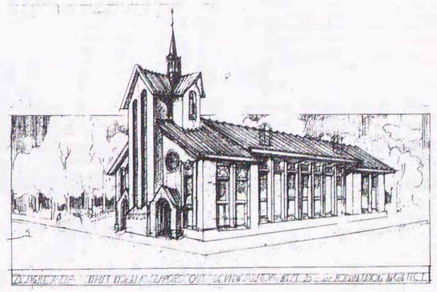


図11-3-3　田上案(二次)



図11-3-4　1927年新会堂正面外観

竣工した。『北海タイムス』では、「９月初旬竣工」[27]とあるから、教会本体以外の工事が１ヵ月あまりあったと思われる。献堂式は10月２日、時任一彦長老司会で挙行された。当時の北海タイム紙には「田上義也氏の設計にて極めて斬新な建築で札幌市の大建築物中異彩を放って居るもので北一條の通りに美観を添へるものである」[27]と報じられている。

『日本基督教會堂新築仕様』が残されており、総則の一文には「本工事竣工期限ハ大正十五年四月　日ヨリ大正十五年十月　日迄トナス」とあったり、仕様に「鉄骨小屋組」の項があるなど、実施工事と食い違う部分も見られる。また左官工事の項では「外部全部ハ人造洗出シ仕上リ厚サ八分以上タル可シ」の記載を朱線で訂正したり、「鉄筋コンクリート二階建」の上に付箋で「木造二階建」と訂正した部分なども見られ、実施工事にあたっては、仕様書の必要部分を朱で書き直したり削除したりする程度でそのまま適用したものと思われる。

初期の図面にはほとんど日付の記載がないので、正確なところは不明であるが、一部の設計図の日付と仕様書の記載から推測すると、鉄筋コンクリート造と鉄骨小屋組での設計は1926(大正15)年３月末には一応終了し、予算その他の事情から木造に変更され、引き続き変更図面が書かれたものと思われる。遺存する資料中、木造変更に直接関わるものは、『日本基督教會堂新築設計詳細平面玄関廻り』と『札幌日本キリスト教會堂新築設計図　會堂小屋組詳細』(図11-3-5)しか残されていない。

外観は「雪層堆積に對する機能成形」[28]を表現したもので、正面中央を高く立ちあげた塔屋部には、垂直に長くのびたアーチ窓が２連あけられ、その上にややころびのある破風をみせ、さらに小塔と尖塔をのせて、垂直性を高めている。後の田上の言葉を借りるなら、「広い正面の切妻破風を突き破り、大地から蒼空を切る尖塔は天に向かってさらに高く合掌し、大屋根の上に十字に組まれた屋根は、力強く、さらに天に伸びてゆく小尖塔を求心的に引きしめ、大地に直角にそそり立つ生命のシンボルとし」[29]、「教会堂と庭園が生き生き呼吸している雪国的造型としてコンポーズした」[29]のである。

28：『田上義也建築畫集』p.25

29：『失われた教会堂―札幌市北一条教会堂を保存する会の記録』(1980.5.1) p.20

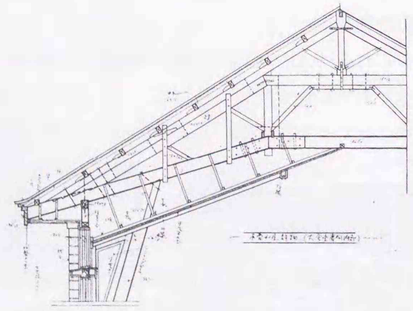


図11-3-5　会堂木骨小屋組

正面塔部左右を飾る直径 1.8m(実測値)のバラ窓は、様式的表現ともいえるものであるが、とかく堅く平坦な印象を与えるドイツ下見板張の壁面に繊細さをそえている。ドイツ下見板張りの採用は、当初の人造洗い出し外壁案に少しでも近づこうとした表現かもしれない。

木造モルタル造の正面玄関下屋および東側下屋は、1951年の増築によるもので、この部分の付加により当初の垂直的表現はかなり失われてしまった。創建時には、塔屋部左右のバラ窓下にモルタルで縁どられたニッチ風の２つの玄関があり、半円形欄間付きの両開戸が並んでいた。

屋根は桟瓦棒葺で、仕様書では、「野地板上端ニ便利瓦ヲ「アスファルト」ニテ張付ケ30＃亜鉛引鉄板図面ニ従ヒ小ハゼ五分以上折曲ゲ板巾弐ヶ所宛〇メ亜鉛引釘ニテ取付ケ入隅谷其他「ハンダ」付ヲナシ雨漏ナキ様施工スベシ」と指示している。

小屋組は、当初南北部を木造、会堂部を鉄材トラスで計画していた。矩計図(図11-3-7)によれば、部材は、主トラス上材(合掌材)２Ls-4×3×3/8、主トラス下材２Ls-3.5×2×3/8、真束２Ls-3.5×2×3/8、束２Ls-3×2×1/2、ラチス２Ls-3×2×1/4、柱２Cs-5×3×3/8（いずれも単位はインチ）などを予定していたが、変形クイーンポストトラスの木骨小屋組に変更された。

小屋組詳細図(図11-3-5)にはすべての部材寸法が記載されているわけではないが、陸梁(0.5×1.0)、二重梁(0.5×0.8)、合掌(0.6×0.5)、添



図11-3-6　新会堂北西外観

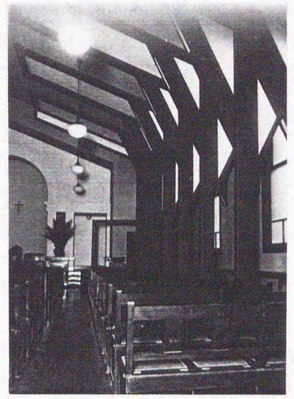


図11-3-8　食堂内部とフライングビーム

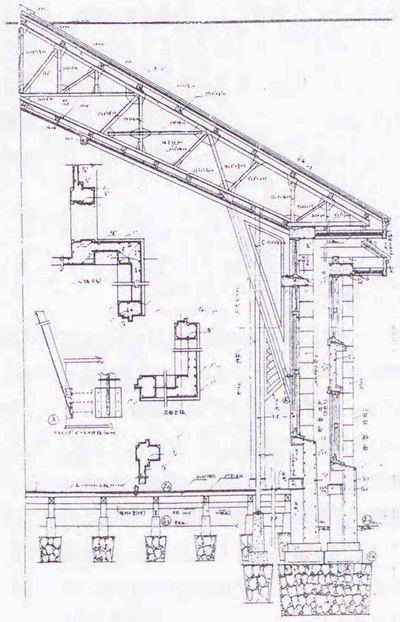


図11-3-7　鉄骨小屋組矩計図

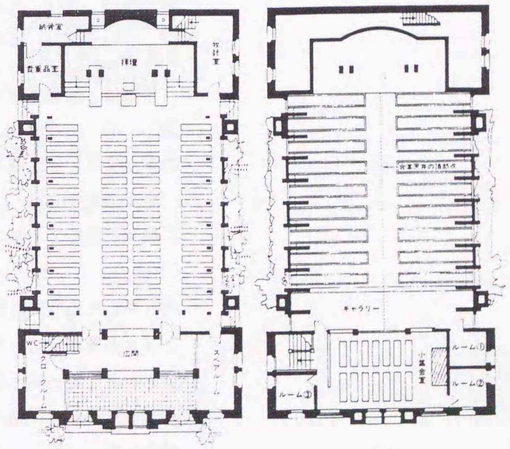


図11-3-9　平面図(『田上義也建築畫集』)

合掌(0.5×0.8)、母屋(0.6×0.4)、方杖(0.5×0.5)、桁(0.5×0.7)(いずれも単位は尺)などの材寸が記入されている。

側面は片開き戸をもつ５尺間のベイによって、北側(桁行18尺)、中央部、南側(桁行15尺)の３つに分節されるが、２階を含む北側、講壇を含む南側、礼拝堂にあたる中央部といった内部機能の相違をそのまま素直に外観に表現している。屋根勾配を、中央部6寸と南北部7寸と、微妙に違えているのもそれ故であろう。軒は深く、約 1.5m(実測値)張出し、軒下はボックスコーニスとし、開口部をもつベイ部には、屋根裏換気口が設けられている。南側妻面は、屋根面より高く立ち上がる木造モルタル塗の防火壁とされている。

「會堂の精神はゴシックの伝統を反映するを常とするが」、平面は「あくまで精神と機能の正しい表現」[28]を追及し、「あらゆる傳統的形式の壘重を離れて考察」[28]された。第１次案の原案を踏襲して、中央に礼拝堂(42×55尺、64.266坪)、南に講壇(15×48尺、20坪)、北に玄関部(18×48尺、24坪)を置いて大きく３分割し、玄関部は土間、「広間」(ホール)の左右に「スペアルーム」「クロークルーム」を配していた(図11-3-9)。

床面積は、１階108.266坪、２階40.56坪、延べ 149.725坪であったのが、後の増築で１階119.33坪、２階29.83坪、計 149.16坪と実測されている。

旧玄関部は、1951(昭和26)年の玄関下屋部増築時に礼拝堂に組み込まれ、６月初旬着工８月に完成した。

正面中央は半球ドームでおおわれた講壇とし、西側を牧師室、東側を納骨室、貴重品室としている。東側の納骨室部分はレンガ造の厚い壁で囲まれ、堅牢な構造とされていた。正面の奥まった壁面には金色の十字架が浮かび、左右には幾何学模様のステンドグラスが嵌め込まれ、講壇に柔らかな淡い光を投げかけていた。このステンドグラスは、田上設計の新会堂(中央区北１西13)に移設されている。

２階は、小集会室を中心に、西側階段室、「ルーム③」、東側「ルーム①、②」で構成し、南側に奥行10尺(実測時で５尺にせばまれていた)のギャラリーが付属していた(図11-3-9)。

中央の礼拝堂は、「合掌」[28]天井の高く吹き抜けた(頂点まで実測寸法8,445㎜)空間で、左右の壁面から３尺離れて５尺おきに連続する列柱と「フライング・ビーム」とが「力の力學的關係を明快に表徴」[28]しつつ、静的ともいえる空間に落ち着いた「音楽の階調を形に見るような美しさ」[23]とリズムを与えていた。無装飾に近い空間は、よく観察すると、柱とフライング・ビームとの交差部の二等辺三角形の格間に、漆喰を斜めに浅く彫った浮彫りが施されていたり、漆喰塗りの天井には、側面開口部に対応して、コ型の単純な木製モールディングが施されるなど、田上らしいグラフィカルな扱いも見られた。

保存運動と解体

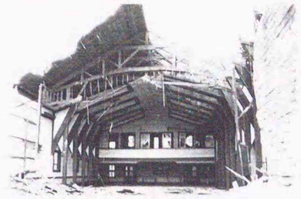


図11-3-10 解体中の会堂

1978年敷地移転問題がおおやけとなり、会堂の解体計画を知った市民から保存の声が起こり、翌1979年２月７日「北一条教会堂を保存する会」が結成された。札幌の文化人、財界人、一般市民を巻き込んでの会堂保存運動は、会を中心に様々な方策が検討されたが、約３ヵ月にわたる努力の甲斐なく、教会側の解体方針は変わらず、「祈りの場としての使命が終わった時、この建物の生命は終わったのであって、他の使用目的に供すべきではない」という厳然たる態度によって解体撤去が決定、会堂および1952年竣工の会堂東側日曜学校校舎の解体撤去工事は、1979年４月20日終了した。

会堂と同時に取り壊された日曜学校校舎も田上の設計で、1949年設計依頼、1952年６月伊藤組が着工同月22日の定礎式、６月３日献堂式を経て、10月５日竣工、同19日献堂式をあげたものであった。

保存運動の記録は、『失われた教会堂－札幌市北一条教会堂を保存する会の記録』(1980)に詳しいが、解体寸前の３月、保存する会の依頼で、会堂の実測調査をする機会があり、また解体の最期まで見とどけることになった。調査は、鹿島建設㈱および解体業者(三松建設)の協力を得たとはいえ、限られた時間内での調査のため、平面・立面・断面の基本図作成範囲内とし、構造、細部意匠などの詳細な調査は、時間的制約から断念し、主として写真記録にとどめた。図面は、同年５月から10月にかけて作成、１、２階平面図・北側正面図・西側側面図・断面図(いずれも縮尺1：50)および側面窓詳細図(縮尺1：5)の６葉を完成した。調査は、創建時の姿が復原できることを前提とし、東側日曜学校側玄関付近の立面、平面は一部省略した。

調査の成果として、塔屋部小屋組に打ち付けられていた２枚の札板－『新築認可証』と『工事記録』の発見があげられる。工事記録は、いわゆる棟札に相当するもので、工事に関わった者の氏名が詳細に書かれており、建築史料としても貴重な発見であった。

以下に『新築認可証』と『工事記録』の内容をあげておきたい。

新築認可証
「警保第三六四一号
　札幌市北三条西二丁目一番地
　　小笠原楠弥
昭和二年三月二十八日付申請
基督教会堂新築ノ件認可ス
　北海道庁長官中川健三」

工事記録
「日本キリスト教会堂
新築工事記録
　着手　昭和弐年四月拾四日
　竣工　　同　年七月參拾壱日

教会代表者	小笠原　楠　弥
設計監督	田　上　義　也
請負人	伊　藤　亀太郎
同現場主任	木　戸　定五郎
大工棟梁	身　延　與　七
同世話役	池　田　常　吉
鳶　職	内　山　政　吉
石　工	岡　本　群次郎
家根職	新　田　運　吉
武力職	久　保　喜　作
左　官	一　島　茂　平
建具職	燕　　栄　吉

（筆者注：燕は燕とも読める）

ペンキ職	深　宮　清　作
煉瓦職	吉　田　萬次郎
運　搬	佐　藤　千代吉

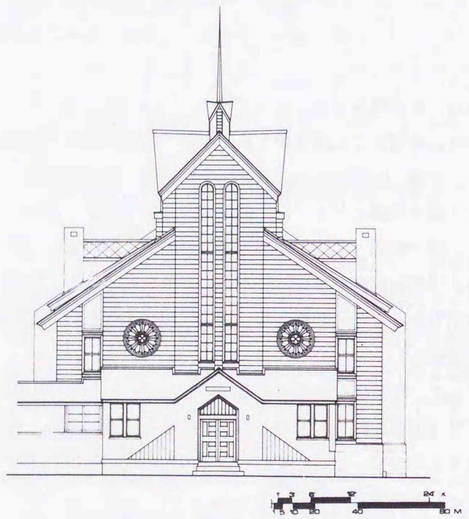


図11-3-11 実測正面図(1979年作成)(北海道大学建築史研究室蔵)

第12章　1930年代の作品

12-0　1930年代の作品にみられる作風

1930年代になると、それまでの住宅設計活動の割合よりも、市街地内の「モダニズムの尖端」[1]ともいうべきカフェーや喫茶店、店舗などの商業建築、1930年の鉄道省国際観光局創設を契機として増加した観光ホテル建設など、時代の風潮を適切にとらえた作品が増加し、さらに一連の住宅作品にみられたライト風スタイルからの離脱志向がより顕著に表れている。そこでは住宅作品と同様、「雪国的造型」が第一目標であったが、表現手段としてインターナショナルスタイルやアール・デコスタイルのデザイン要素を積極的に展開し、さらに当時の日本建築界に刺激を与えたル・コルビュジェを意識したことも、田上自らが認めている。

さらに商業建築のファサードデザインを宣伝媒体の一つとして理解した田上は、都市における商業建築意匠の在り方、方向性を探る手法の一つとして、既存の建築物に表装を付加するといった看板建築ともいうべき書き割り表現で様々な提案をおこなった。

また、一部のカフェーや病院建築、ホテルでは、一見ＲＣ造風の表現も見られた。外観を陸屋根風のモダニズムデザインでまとめ、時には露骨に正面外観のみの書き割り的表現としたり、外壁も白色塗装のモルタル仕上げなどで、この時期求めながらも果たせなかった田上のＲＣ造へのこだわりをうかがうことができる。

ＲＣ造的な表現は、艦船デザインをモティーフとしたホテル建築で顕著に展開されたが、さらに目につく意匠の一つとして、ガラス張りの螺旋階段がある。螺旋階段の採用は、コルビュジェからの影響とも考えられ、倉田邸(1930年代)や北見郷土館(1936年)などに見出せるが、外観に露出させたガラス張り螺旋階段は、モダニズムデザインの外観表現の一つとして、紀文茶屋(1932年)、パリジャンクラブ(1933年)などのカフェー建築や石狩海濱ホテル(1936年)、網走観光ホテル(同年)などホテル建築などでも積極的に展開した意匠であった。

本章では、1930年代の作品を、看板建築ともいえる書き割り表現のみられる商業建築、モダニズム期の代表建築としてのカフェー・飲食店、陸屋根表現などインターナショナルスタイルを意識した病院建築、艦船デザインを意識したホテル建築、その他の1930年代の作品とに分類し、この時代の田上の作風の変化をみていくことにしたい。

1：林喜代弘「昭和初年大阪歓楽街展望」(『近代庶民生活史⑩享楽・性』1988) p.474

12-1　商業建築と書き割り表現

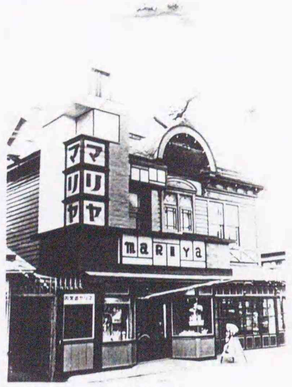


図12-1-1　マリヤ手芸店

2：マリヤ手芸店による。

12-1-1:マリヤ手芸店改修(1930)

札幌市北２条西３丁目　ファサード改修

マリヤ手芸店は1926年札幌駅前通りに開店した。店主本間テイは、北海石版所社長の姉にあたり、店舗は北海石版所の一部を借りた。２階中央に半円形破風をみせる木造２階建ての洋風建物で、この建物の正面一部に、広告塔と看板を兼ねた外装を田上が担当した。

田上と交際のあった北海石版所の２代目本間清造が依頼したもので、清造は「道展」の初期のメンバーであり、店には画家が多数出入りした[2]という。デザインは東京から店舗建築の本などを取り寄せ、何人かで話し合いながら模型を作り、商品のことも考慮しながらすすめ、最終的に田上がまとめたと思われる[2]。

「マリヤ」とカタカナの店名を縦にレタリングした塔部の垂直性と、「maRIYa」とアルファベットの大文字小文字を混在させた横長看板とが微妙なバランスを保った、ファサードデザインというより立体的な造型看板である。

都市における商業建築のあり方に様々な提案を重ねる田上にとって、こうした部分的な改修工事もまた、商業建築意匠の方向性を探る願ってもない実験の場であったのではなかろうか。

12-1-2:富貴堂改修(1930)

札幌市南１条西３丁目　1930年５月設計　ファサード改修　1937年取壊

1908(明治41)年11月に開店した間口７間、奥行15間（石造倉庫4×5間含む)の石造２階建て店舗[3]とその東側に1918年夏に増築された間口３間奥行７間木造３階建てモルタル仕上げの楽器部店舗[4]のファサード改修である。

1950年５月、これまで個人経営であった富貴堂の機構を合名会社富貴堂と改め、店主中村信以は代表社員となった。残されている『富貴堂書房改築設計図 北面姿図・断面ａ』(図12-1-3)には、「1930.5」の日付があり、機構変革を契機に改築が計画されたと思われる[5]。

石造２階建て店舗の屋根面に束を立てて片流れ屋根とし、「コーピング」[6](笠木)を大きく張り出して陸屋根風にみせ、西側に「伸びゆく店業」[7]をシンボライズする高さ50尺の「電気塔」[8]を建て、「FUKIDO SHOBO」の切り文字を縦に並べて浮かせ、隅部にガラスを入れ内部に照明を組み込む「隅あんどん」[6]とした。書房部東側の防火壁上にも西側塔と同サイズの横長ガラスをいれた「あんどん」とし、西側高塔上の旗竿には社旗をひるがえした。

3：『七十年のあゆみ 富貴堂小史』(富貴堂、1968.3.12) p.36
4：『七十年のあゆみ 富貴堂小史』p.51
5：『七十年のあゆみ 富貴堂小史』では改装を「昭和４年」とするが、ここでは設計図によった。
6：『富貴堂楽器部と書房の改造屋上平面』スケッチ
7：『七十年のあゆみ 富貴堂小史』p.70
8：『富貴堂書房改築設計図　電気塔側面図』

明治期の典型的な商店建築からの見事な変身であり、札幌の中心部南一条通に異彩をはなち、都市における商業建築自身の広告媒体としての存在を強く意識させる作品となっている。

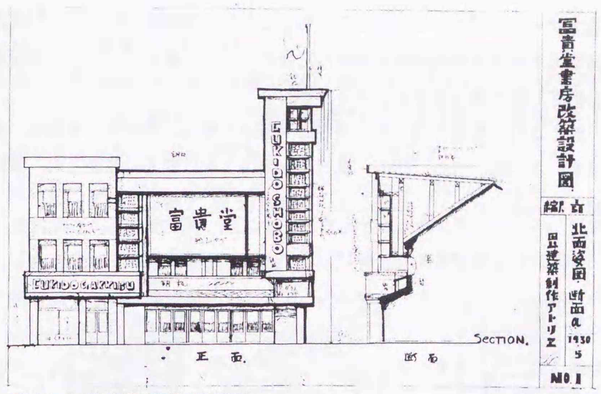


図12-1-3　富貴堂書房改築設計図



図12-1-2　富貴堂

12-1-3:札幌第一農園Ⅱ(1930)

札幌市南１条西24丁目(札幌市外円山村南大通４丁目)　木造２階建

1930年5月設計

1930年竣工の安部信明新邸脇に付属して新築された小店舗である。1926年4月頃新築の田上の最初のアトリエ(「百圓の家」[9])以来、1928年の澤枝邸アトリエ(札幌)、1929年里美勝蔵アトリエ(東京郊外)など、初期の作品からみられる片流れ屋根デザインの一ヴァリエーションである。

15×33尺の長方形平面の建物で、１階は前面に土間床の店舗、背後は吹き抜けの倉庫、店舗上に倉庫空間をもつ。正面北面は２階鼻隠し下端までの高さ20尺、南面背後９尺まで屋根を葺き下ろしている。

外壁は１階部分を下見板、２階を「独逸ナマコ」[10]仕上げとし、正面２階左手の半円形小窓と、横長押出し窓の組み合わせ、片流れ屋根を支えるかのような西面窓の斜め材の組み合わせなど、小粒ながら目を引く外観意匠を呈している。

12-1-4:岩城新聞店(1930)

旭川市２条７丁目[11]　木造２階建　1930年６月設計

新聞店の店舗併用住宅である。片流れ屋根の建物の前面を書き割り的に扱ったもので、内部構成とは無関係に左右対称のファサード意匠とし、正面陸屋根左右に「パコラ(ママ)(藤棚)」[12]を翼状に広げ、左右の箱型の壁は「下地メタルラス張リ色付モルタル叩仕上ゲ」[13]としている。『岩城新聞店新築設計図 旭川 階上・階下平面・姿図 NO.1』には、正面図に赤、

9：小樽新聞(1926.4.13)
10：『安部信明氏邸附属店舗新築設計図』

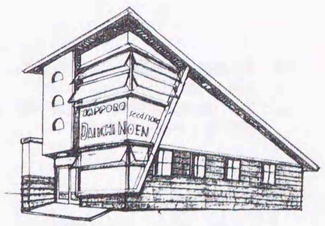


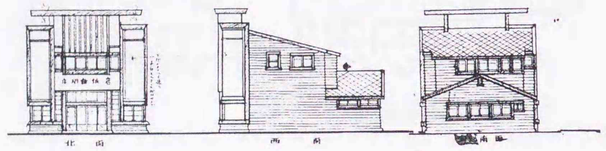
図12-1-4　札幌第一農園Ⅱ

11：新免克己氏による。
12：『岩城新聞店新築設計図 二階梁伏・床伏・断面』
13：『岩城新聞店新築設計図 旭川 階上・階下平面・姿図 NO.1』

青、黄色の色鉛筆で着色されており、水平軒板、額縁などは青、１階腰壁下見板は黄、左右の箱型モルタル壁は赤と黄を混合している。同じような色彩で完成したとは思えないが、グラフィカルな表現を得意とした田上らしいエスキスである。

パーゴラ頂部まで地上から33尺の高さの小規模な建物であるが、このファサードデザインは、田上の兄弟子にあたる遠藤新設計の1925年東京帝国大学学生基督教会青年会館の正面デザインに酷似しており、遠藤新の影響を強く感じさせる小品である。

間口５間、奥行７間１尺の長方形平面の１階は、作業場、事務室、応接間、茶の間、台所、便所、奥行約５間の２階は前面に８畳２室、階段室、押入をはさんで、６畳２室、子供室(５畳)で構成されている。



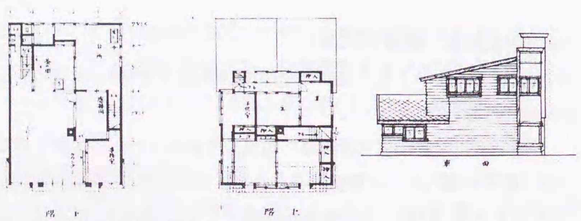


図12-1-5　岩城新聞店平面、姿図

14：『北海道商工名録』（北海出版社、1930.9.20）
15：『小笠原商店卸部新築設計図　階下』平面・階上平面・立体姿図』

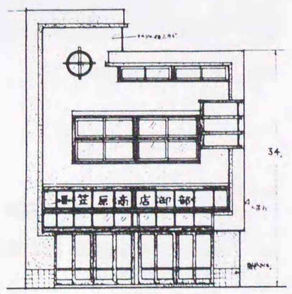


図12-1-6　小笠原商店卸部正面図

12-1-5:小笠原商店卸部(1932)

札幌市北３条西２丁目　木造２階建

文具、小間物、雑誌卸小売店土佐屋[14]の店主小笠原楠彌は、日本基督教会北一条教会の長老を務めた人で、教会の建設(1927年)が縁となり、店舗設計を田上に依頼した。

30×33尺のほぼ矩形平面の小規模建築であるが、1930年代の多くの作品の意匠の一部として採用されている枠取り(フレーミング)手法で外観を引き締めている。この建物では2尺成の笠木を、額縁状に左側地上39.5尺の高さの塔屋部分から建物の外形に沿って隅部1階まで連続し、右側は一段低く地上34尺の位置から１階欄間まで廻している。枠取り部は人造石、１階腰部を黒色タイル張り、２階以上の正面外壁を「モルタル独乙カベ」[15]で仕上げ、両側面および背面は「アサ野耐火壁板」[15]で仕上げている。１階欄間上の看板部には照明灯が組み込まれ、市街地建築で多用した「あんどん」効果を演出していた。

開口部も1930年代の田上スタイルの要素を採用し、塔屋部の中心に真鍮パイプを十文字にはめた丸窓、右側笠木下にスリット窓、２階中心に上下２段の横長引違い窓、右側枠部を中断するように付けられた横長ガラス３段重ねの出窓などを見ることが出来る。

12-1-6:千秋庵帯広支店(1933)

帯広市西２条南９丁目　木造３階建　施工:大江某(大工)　1965年取壊

1933年５月上旬起工し、７月５日開店した[16]菓子製造、販売、および喫茶店である。店主は岡部勇吉[17]、28歳の「新進の人」[16]であった。当時の新聞には、「西二条銀座通の一角に、例外なく誰の目をも惹く、明朗な白おう(ママ)の建築物、どこまでも都会的で、而も親しみ深い、モダーンな建物こそ味覚の殿堂千秋庵です」[16]「設計は芸術味豊かな札幌の田上義也氏です面倒臭い理屈ナンカ言ふ必要はありませんライト式のあの建物から惹つけられるやうに與へられる感じ丈けでもう充分です、恐らく田上氏にしても理想に近い設計だったらうと思ひます、田上氏の偉才を語るものでもありませう」[16]と紹介されている。

奥行の深い建築であるが、間口５間、前面奥行２間分のデザインに商業建築らしい配慮を払っており、背後の下見板張り住宅部分とを枠取り(フレーミング)手法ではっきりと区画している。

遺存設計図[18]によれば、店舗部２階軒には人造石仕上げのロンバルド帯のような小アーチを飾り、２階壁面はクリーム系タイル、半円アーチ飾りを付けた縦長窓とあわせて珍しくロマネスク風の意匠を借りているが、縦長窓の横長ガラスのサッシュ割り、横長ガラスを立て込んだ出窓、３階塔屋の丸窓と横長サッシュの出窓、１階階段室の丸窓などは、まさしく田上が1930年代に好んで展開した建築要素である。

１階看板部分は白色タイルで、左右に丸灯を付け、右から「札幌千秋庵帯広支店」のレタリングを掲げている。塔屋上部の旗竿も田上好みの意匠のひとつである。また喫茶部の家具の設計スケッチも残され、空間をトータルに考えようとした田上の姿勢をみることができる。

当時の新聞[19]掲載の写真などをみると、実際には軒先アーチは水平蛇腹に変更され、窓アーチの彫りも浅く、設計図の立面図よりも平滑な印象を受ける。塔屋部分の高さも増して、田上の提案したプロポーションに比べ頭でっかちの作品となっている。看板も、「生波」[16]と号する札幌中央寺住職が揮毫した「千秋庵」[16]の文字に変更された。

平面は、１階74坪、２階45.25坪、３階8.75坪、計128坪の建物[16]で、１階が売場、台所、居間、工場など、２階が喫茶部、使用人室、３階は塔屋となっている。２階の喫茶部は、「出来得る限り家庭的のもの」[16]にしようと、「ボーイの服装は勿論、飲物にもお菓子類にも」[16]注意を払い、「帯広における唯一の気軽な喫茶店」[16]として親しまれたという。

16：十勝毎日新聞(1934.2.14)
17：十勝毎日新聞(1934.12.11)
18：『千秋庵帯廣支店改築設計図　立体・平面・工場・断面』
19：十勝毎日新聞(1933.7.8)

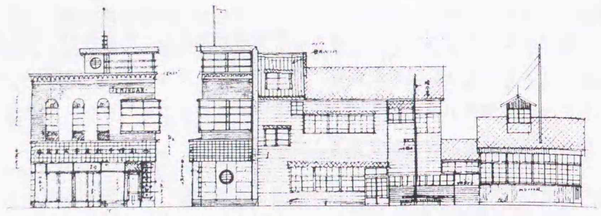


図12-1-7　千秋庵帯広支店正面･側面図

12-2　カフェー･飲食店

12-2-1:亀屋支店(1929)

札幌市南１条西３丁目　木造３階建

南１条十字街に建てられた「レストランとティールーム」[20]である。「思ひ切ってダイナミックに表現せる雪国的造形意図」[20]の作品で、屋上のカンチレバーのパーゴラ風庇やスリット状の旗竿支持塔などの軽やかな扱いは、「最上層空間に於けるマッセと蒼空とのリズミカルなる操作」[20]を意図したものであったし、ファサード右手の細長い行灯型照明具も垂直性の強調に一役かっている。

内部については、１階喫茶部の内部写真(図12-2-2)やパース(図12-2-3)が残されており、床はモザイクタイル、円形ペチカを囲むように客席が配置されていた。正面奥間仕切壁の隅には、上方にいくほど広がる７重の半円飾りがつく。照明塔のようにもみえ表現派風の意匠が注目される一方で、六角形の背をもつ椅子にはライト風意匠が認められる。

当時出版の『大札幌案内』(1931年)には、「新装をこらしてモダーン喫茶店の先駆をなしてから、ここの舗道をいやが上にも華やかにした。ラッシュアワーには若いサラリーマンで、レヂスターは猛烈な回転を開始する繁昌振り。設備がすべて新しくノーブルであるのもよい。見渡せば客種はざっと教授、医者、重役といふところ。」と紹介されている。経営者高橋達一は、食い道楽の粋人で、カレーライスにワカメの味噌汁をつけるといった独特の経営をした人で、仕事への情熱も激しい人であったという[21]。

20：『田上義也建築畫集』p.90

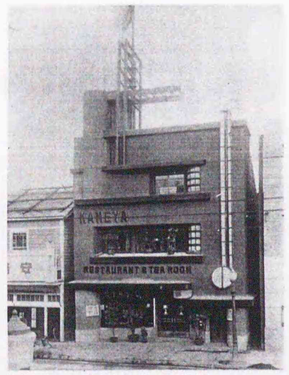


図12-2-1　亀屋支店正面外観



図12-2-2　亀屋支店内部

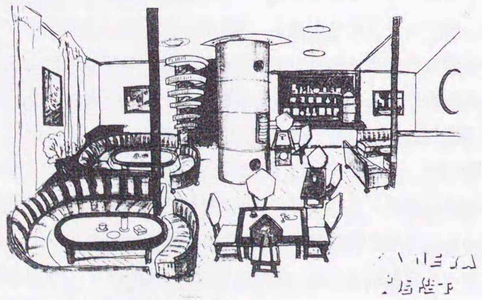


図12-2-3　亀屋支店1階喫茶部パース

21：和田義雄『札幌喫茶界昭和史』(1973.8.1)pp.45、46

12-2-2:ヤマニ(1930ころ)

旭川市４条８丁目　木造２階建　1928年計画

開店は1923(大正12)年[22]である。当時は「ヤマニバー」とよばれた[22]。経営者速田弘は、共鳴音楽会の会員としてチェロを弾き、また「旭川に近代風俗」[22]を持ちこんだ文化人のひとりであったが、旭川で始めた新感覚の事業は、時代を先取りしすぎて全て失敗している[22]。後述するアボQ、パリジャンクラブのいずれも速田の経営で、新改築の設計すべてに田上を起用した。

1928年9月31日付け『ヤマニビルデイング新築設計』(図12-2-4)が１枚残るのみであるが、当初は既存建物の一部を取り壊して改築を考えたものと思われる。立ち上り寸法の大きいスパンドレルの扱いや、最上階のパラペット部と階段室壁部とで額縁状に建物を枠どる意匠は、田上の1930年代の作品によくみられる扱いである。ラフなスケッチであるが、玄関部欄間や各階隅部に幾何学文様の装飾を意識した書き込みがみられる。１階は吹き抜けの大食堂、２階は一部食堂部で、新館背後の旧館上にはルーフガーデンが計画されている。

22：木野工『旭川今昔ばなし』(総北海出版部、1985.1.20) p.373

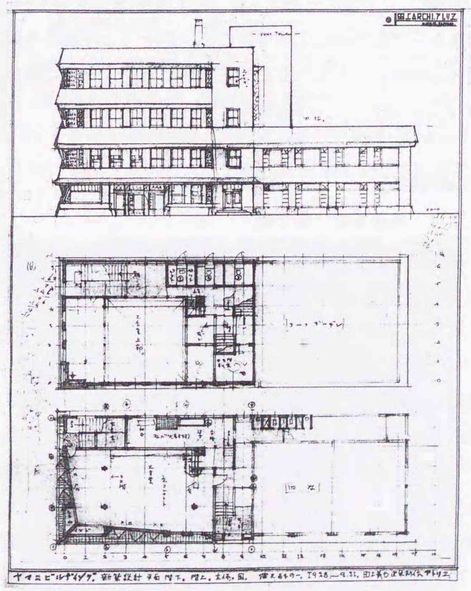


図12-2-4　ヤマニビルディング設計図



図12-2-5　改築前のヤマニ（渡辺義雄提供）

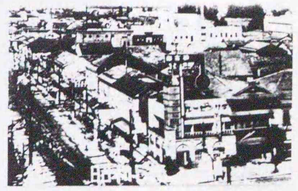


図12-2-6　1930年頃のヤマニ（渡辺義雄提供）

この計画案は大幅に縮小され、最終的に既存建物のファサード改修ですまされたらしい。看板建築に近い書き割り風の意匠であったと思われるが、田上の市街地建築作品に多く見られる手法のひとつである。

改装前1922年ころの写真(図12-2-5)で、左側の３棟がヤマニである。中央に入母屋屋根の建物をはさみ、左右ともに１階を大きく開口し、右棟は２階に下見板、上げ下げ窓の洋風意匠をみせ、左棟は２階も大きく開口した和風の建物が並んでいる。右手の大きな洋館は、旧北海ホテルである。1930年旭川４条交差点付近を写した写真には、改修されたヤマニ(図12-2-6)がみられ、左棟部分のキリンビールと掲げたファサード部分である。

ヤマニは、1934年２月17日の旭川新聞に広告を出し、営業を閉鎖し、店舗は一般商店に開放し、今後はパリジャンクラブ経営に全力傾注の謹告文が掲載された。実質的には1933(昭和８)年には営業を中止し、小原金物店に変っている[23]。

23：『まちは生きている』作者渡辺義雄の教示による。

12-2-3:アボQ(1929)

旭川市４条８丁目　木造２階建

前述のヤマニの喫茶部にあたる。旧北海ホテルとの間に開業し、主として町の美術家とか文学青年、新聞記者らが出入りし、ここで詩集、歌集の出版会などもよく催された[24]。

「黄を基調にした原色塗りの甚だモダニティな建物」[25]で、名前は旭川新聞の記事(1929.7.20)によれば、「Ａ.Ｂ.Cuoといふローマの幸福(殊に恋愛の)の神」に由来し、「アボをそのまゝにしてCuoキューをQ」とした。新聞掲載の写真からでは詳細は不明であるが、おそらく外装のみの改修であろう。黄色の色彩とともに、丸窓や正方形、水平、垂直に配した長方形のコンポジションなどが、「近代性」[25]を表現していた。

24：『旭川今昔ばなし』p.374
25：旭川新聞(1929.7.20)

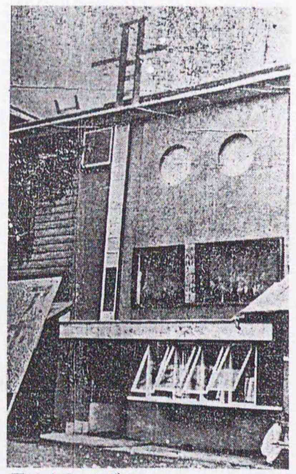


図12-2-7　アボQ

12-2-4:カフェー三條(1931)

札幌市南３条西３丁目　木造平家一部２階

「清楚、気転、高雅の三大信条を以て、ホテルの気品とカフェのおだやかさの中間を行く高踏的カフェの先駆」[26]をうたい文句に誕生した「会社組織で企業化された」[26]カフェーで、小樽市にも、支店小樽会館(水天宮鳥居前)、公園ガレージ(公園通)、分店酒場黒船(電気館通)を経営した。カフェー三條は、「建築芸術と姿態美と味覚技巧の交響楽を氾濫させる」[26]との意気込みで計画されたもので、三條ガレージも併設し、裏には純日本料理の分店太郎茶屋が付属していた。

既存建物の外装とインテリアを田上がてがけたもので、「コマイの上に型紙を貼った粗放なもの」[27]であった。外観写真のみしか残らず詳細は伝わらないが、ウダツ付きの木造平家の母屋と付属蔵の建物 180坪の

26：『大札幌案内』p.113
27：『物語薄野百年史』p.225

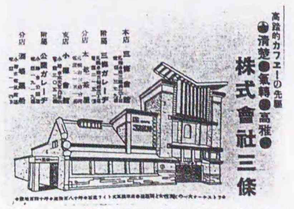


図12-2-8　㈱三條の広告(『大札幌案内』)

改装のようで、バタフライ屋根のように広げたルーバー庇やアティック部分に縦桟装飾を施した部分に田上らしさが表現されている。この部分の２階中央にみられるアーチ窓は、当初からの窓をそのまま利用している。

「ライト式五段床面」[28]と名付けられたスキップフロアの内部は「船室のような作り」[26]の座席を配置し、建物の外壁腰部の軟石の積み方にも田上らしいグラフィカルな扱いを見出せる。

12-2-5:キャピタル(1932)

釧路市西幣舞町26(現末広町２-11)　木造２階建　1931年設計

釧路でのカフェーの魁は、1927年の稲荷小路ライオン文化食堂といわれる[29]。その後、北陽軒、千草軒、赤玉、クロネコ、オーシャン、ミミーやキャピタルなどが出現し、一時はカフェーだけでも市内大小 400軒を数えるほどであった。とくに1934年ころにはカフェー、飲食店、料理店をはじめ一般商工業者の好況時代が出現し、その好況は1938年頃まで続いた[29]という。

キャピタルの開店は1932年１月、1929年発刊の『釧路市商工案内』には、経営者柳澤トキの名が確認される。「コーヒー一杯のお客さんこそほんとうのお客さん」[30]をモットーに、コーヒー１杯の客でも希望があれば自家用シボレーで送迎した。1934年に経営者がかわり、カフェ「街の酒場」となり、1945年７月釧路空襲で焼失した。

1983年発行『月刊住宅ライフ』Vol.28に田上の回想が掲載されている。「釧路市のヌサマイ橋のほとりに、約三〇〇坪の〈キャピタル〉というキャバレー風の社交場の設計を委嘱された。この仕事は設計一切を私に委任されたもので、龍神の精をテーマにクシロ河への荷揚げの喜びと安全を祈念する幻想風の造形とし、その龍眼を、Capitalと正面の塔の中央にネオンを入れた。このブルーネオンは当時のクシロでは初めてであ

28：『大札幌案内』p.127

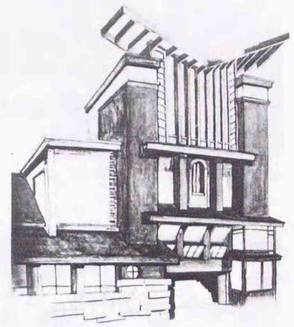


図12-2-9　カフェー三條外観パース

29：『釧路市史』(1957.9.15)
pp.432、433

30：釧路新聞(1932.1.9)

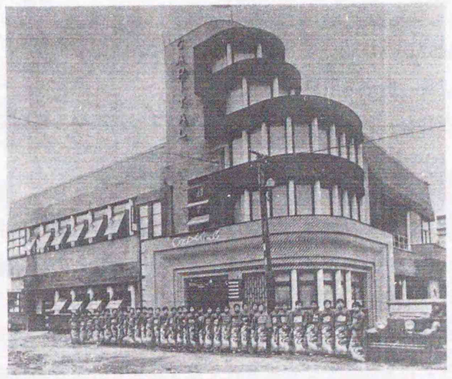


図12-2-10 キャピタル外観

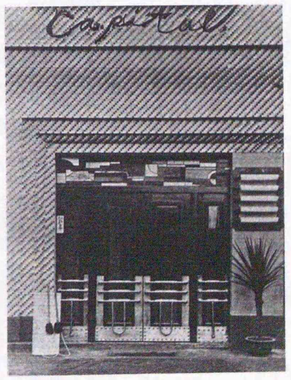


図12-2-11 キャピタル玄関

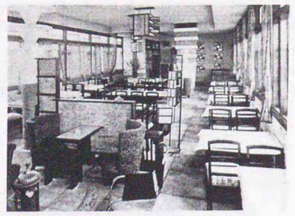


図12-2-12 キャピタル2階食堂



図12-2-13 キャピタル2階食堂

り、この製作は、今日高名なロバパンの社長である、当時の情熱の青年ネオン屋さんの石上寿夫さんであった。氏と私は師走の雪中に座りこんで輝くネオンの開眼に感銘を深めあいました。(中略)ヒューマニズムに溢れている漁業の港町に、キャピタルは人間の心をともす安らぎのいこいばたれ」との願いで設計したという。

回想にあるように、外観意匠のテーマは竜神の精である。龍の頭部をメタファーした隅角部を強調し、曲面をえがく外壁は上部にむかってセットバックし、単純ではあるがボリュームのあるデザインは表現派的な印象すら受ける。１階玄関廻りはモールディング付きの額縁の小壁で縁取るが、こうした縁取りの手法は田上が好んで採用した意匠のひとつでもあった。キャピタルでは、さらに外装を細かなタイル貼りとして、幻想的に仕上げられている。正面入口の欄間には幾何学的な模様のステンドグラスをいれ、木製ドアーの下部は真鍮製プレートでコの字型に覆い、一部は鋲頭を露したり、真鍮パイプの取手を手摺り風にアレンジするなどアールデコの影響も認められる。同様のドアー意匠は、ほぼ同時期の札幌の紀文茶屋の入口でも使用された。

計画当初は釧路ホテルを併設する予定であったらしいが、実施案では１階が食堂、ティ・サルーン、ビリヤードルーム、中庭中央にプールがありガラス張りの天窓が覆っている。２階は大小４室の食堂であり、３階は女給のために使われた。

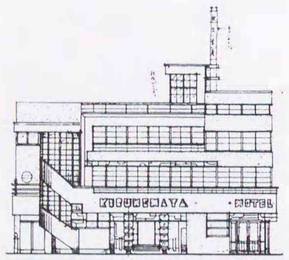


図12-2-15 紀文茶屋正面図

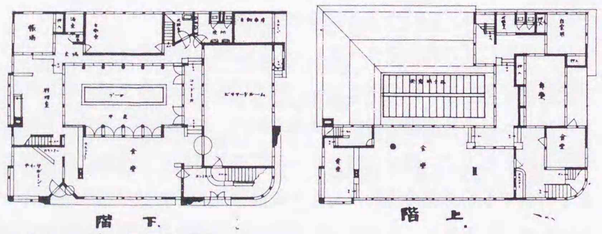


図12-2-14 キャピタル平面図

12-2-6:紀文茶屋(1932)

札幌市南５条西４丁目　木造３階建

すすきのに計画された「アパートホテル」[31]兼カフェ兼茶屋の建物である。

正面ファサード部分のみ陸屋根風のモダニズムデザインでまとめ、背後の建物は他の市街地建築作品同様、切妻屋根、下見板張りという在来型としている。「ロダイ」[32]やロダイ上の小庇、パラペットなどの水平線の強調、外壁の「ラス下地モルタル上塗白シックイ」[32]仕上げなどは、この時期求めながらも果たせなかった田上のＲＣ造へのこだわりの一表現と見ておきたい。さらに建物端部に配置されたガラス張りの螺旋階段も

31：『アパートホテル・新築設計図・SHeet１』

32：『紀文茶瓦屋改造矩形之図』

また、旭川パリジャンクラブの項(12-2-7)で述べるように、田上好みの意匠であった。

カフェーへの入口廻りの意匠は、釧路のキャピタルと酷似しており、また玄関部分の独立角柱には、電灯が段状に組み込まれ、他のカフェーのインテリア同様、照明デザインへのこだわりがみられる。

平面は、１階がカフェーを中心に、右手にホテル入口、洋室１～６室を鉤の手に配置し、ホテルの「エントランスホール」[31]中央の螺旋階段が２階ホール(「パーラー」[31])とを結ぶ。左端には茶屋への入口があり、ガラス張りの螺旋階段で２階へと導かれる。カフェー奥にはパーラーをはさんでプール(池)がある。２階は、「ロダイ」と前面廊下(「バルコン」[31])に面した客間(8畳、6畳の続き間)、客間(8畳) のほか、廊下をはさんで３室あり、ホテル部は１～７室の洋間で構成されている。

1932年12月14日の北海タイムスでは、「紀文ホテル・開店、宿泊料朝食付一円、一円五十銭、休憩料七十銭、一円」と「募集、女給、料理見習、ホテル女ボーイ、二階廻り女中」と広告が掲載されているが、『物語薄野百年史』など管見した文献には、まったく掲載されていない。

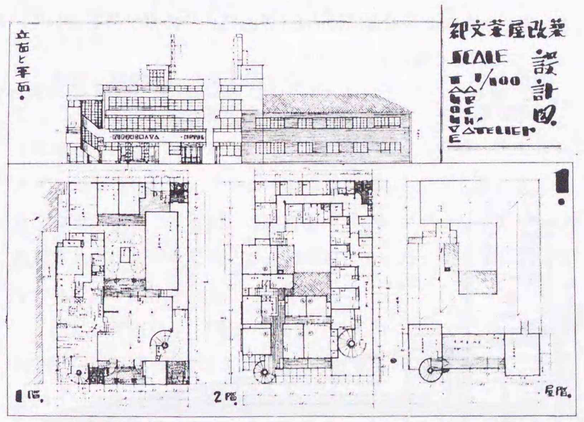


図12-2-16 紀文茶屋設計図

12-2-7:パリジャンクラブ(1933)

旭川市４条７丁目　木造２階一部３階建　1935年閉店

旭川で「ヤマニ」「アボＱ」とユニークな店を次々と開店した速田弘が経営するカフェーである。

正面左手のガラス張りの螺旋階段とその上部に続く塔がデザインポイントとなっており、２、３階通してのガラス張り壁面も斬新である。ガラス張りの螺旋階段は、前述の紀文茶屋(1932年)のほか、石狩海濱ホテル(1936年)や網走観光ホテル(1936年)でもみられる田上好みの意匠のひ

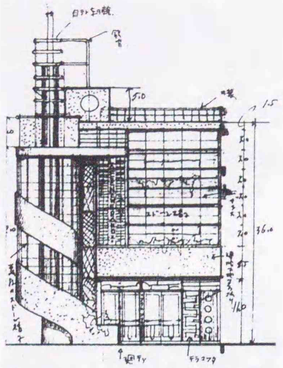


図12-2-17　パリジャンクラブ正面図

33：『旭川市史 第三巻』(1959.7.1) p.838
34：『CAFFE 設計図 1933』

35：『旭川今昔ばなし』p.206

とつである。螺旋階段屋上には木製手摺りもみられ、陸屋根風の意匠であるが、正面から背後にゆるやかな勾配の片流れ屋根の建物である。ファサードしか表にだせない市街地建築デザインの常套手段であり、多くの田上の作品でもみられる。

『CAFFE 設計図 1933』によれば、軒高36尺、螺旋階段頂部32尺、「ブリキ板張り」の塔屋高41尺、階段室上部の旗竿先端まで53尺、旗竿にはアールデコ調の７段の輪飾りを付けるが、自転車のホイールを転用している。

間口5.5間、奥行12.5間の長方形平面で、図面に「PROMENADE」と記載された２階には、ブラジルコーヒーを主とした喫茶部を設けたが、その構成は極めて新鮮で、一部の市民から喜ばれた[33]という。階下の広い踊場「AUDITORIUM 公衆社交場」[34]を見下す喫茶部の配置や、入口から喫茶部に昇っていく螺旋階段は、当時としてはモダンの先端で、すこぶる好評を受けた[33]。

１階正面奥にカウンターと台所を配置し、台所前には２階までの内部螺旋階段が配置され、その螺旋階段から２階へは「CORIDOR」(ママ)[34]が結んでいる。前面一部を３階とし、女給用畳室とした。

前面螺旋階段の中央は「クモリガラス」[34]をはめた照明塔(「アンドン」[34])で、夜ともなれば階段室にはめた「半紙判」[34]のガラスを通して、ネオンのように明るく輝いたことだろう。

1933年に華々しくオープンしたが、1935年には「旭川会館」に改称している[35]。

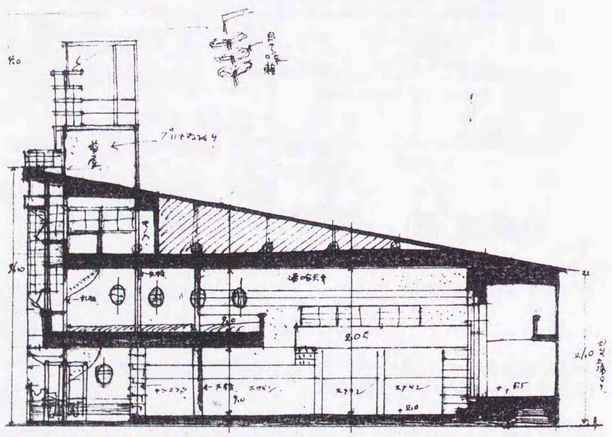


図12-2-18 パリジャンクラブ断面図

12-2-8:宇喜代(1935)

岩内町字万代29-6　木造３階建　施工：川端組

岩内町万代で４代目として料亭を営む経営者工藤勝美の話によると、

宇喜代は1935年２代目工藤芳蔵時代に建設され、外壁はモルタル吹付け、工期は同年４月初旬から７月初旬までの３ヵ月位、設計料は 200円、建築費は2,000円以上であったという。

1978年12月23日に田上建築制作事務所で行われた田上義也と工藤勝美との対談で、設計までのいきさつ、設計監理の様子などの概要を知ることができる。

「大正14年の冬だと思うが、岩内でバイオリンの独奏会を開いた[36]。場所は二葉座だったと思う。それから随分行かないで昭和８年に２代目の芳蔵さんから設計の依頼を受け、再び岩内へ行った。私は建築中、宇喜代に泊って図面を書きながら監督していた。その日数は10日位で奥の方の小屋でした。

構造は木造で３階建、外壁はモルタルで吹付けでやった。その時は岩内の左官屋さんがやったと思う。これは近代建築なんで大変でした。カーテンウォールをとり入れた。当時は確認申請なんかなかったので自由に仕事した。上のネオンについては、岩内の仕事の前に釧路でキャピタルというキャバレーをやった。その頃札幌ではわずか２、３ヵ所であった。釧路に次いで確か札幌のロバパンの主人(石上寿夫氏)にやらした。私がその話をしたら宇喜代でも作るということになり、作ったもので、後志でも初めてであった。」

外観は、額縁風に小壁を廻したカフェー部と、入口上の塔部、ぎこちなくカーブを描く階段室の３つの要素を結合し、小規模ながらソリッドな印象をうける。塔部屋上には、釧路キャピタル同様、石上寿夫制作のネオンがつけられた。カフェー部は、３本の方立を２階軒までのばして全面ガラス張りとするが、この点をカーテンウォールと称したのだろう。階段室もガラス張りであるが、他のカフェーのデザインに比べると伸びやかさに欠ける。

１階はビヤホール、2階は広間として利用したというが、設計図『DESIGNE FOR CAFE UKIYO』(1935年４月)では、２階もスクリーンでいくつかのブースに分けられている。家具は三越製であった。３階にボクシングジムがあったという。

1954年９月26日の岩内大火で焼失している。

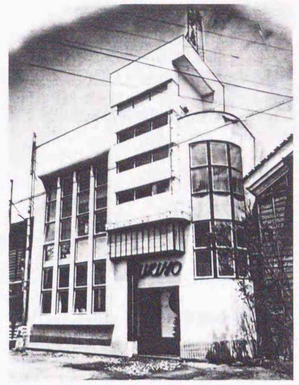


図12-2-19 宇喜代

36：『北のまれびとくエゾライト・田上義也>(下巻)』では1924(大正13)年。岩内白水会主催提琴独奏会をさすのだろう。

12-3　病院建築とモダニズム表現

田上義也は、病院建築を「最も近代的イデオロギーの上に凡ゆる現代的建築的要素を充実せしむべき使命に立つもの」[37]ととらえ、「都市の情

37：「帯広都市計画一考察」(十勝毎日新聞、1933.5.16)

操的表示、人間精神と生命を培養せしめ得べき暖たかき(ﾏﾏ)表現。健康的構成への表徴。生理的機能構成に対する特異なる新形體であらねばならない」[38]とした。

本節では、市街地におけるモダニズムデザインの展開手法として、ファサード廻りに重点を置いてデザインした病院の代表例として、浅野炭山病院、山下紅療院、池田病院、志田病院をとりあげた。

38：「建築家のみた一九三〇年の旭川」(新聞名不明、1933.12.25)

12-3-1:浅野炭鉱病院(1930)

沼田町浅野地区　木造２階建

1968年閉山の雨竜炭鉱株式会社[39](旧浅野雨竜炭鉱株式会社)は、初代社長浅野総一郎が設立した炭鉱である。1929年９月から開坑準備に着手、1930年３月本坑開坑、翌1931年４月から出炭を開始したが、炭鉱開発に心血を注いだ浅野は、出炭を待たずに1930年11月急死している[40]。

浅野炭は工業用で、国内産業の好不況に左右され、また再三のガス爆発等の事故で経営は必ずしも好調でなく、1952年古河鉱業㈱に鉱業権が委譲され、古河鉱業㈱雨竜鉱業所と改称した。この鉱業所も赤字の累積により1962年11月閉山、同年12月から新会社の雨竜炭鉱株式会社を設立し操業を続けたが、経営不振となり1968年11月20日閉山式が行われている。

39：『新編沼田町史』(1982.12.10) p.128

40：『新編沼田町史』p.778



図12-3-1　浅野炭鉱病院パース(『田上義也建築畫集』)

浅野炭鉱病院の新築設計図は、４枚残されているが、建築畫集に掲載の平面、透視図とも、設計図とはかなりかけ離れており、田上が意図した空間構成が、実現段階で大幅に縮小せざるを得なかったことがうかがえる。

まず畫集掲載の方からみていこう。

南側に大きく開口した直線上の建築で、階段室を望楼状に垂直に立ちあげ、３階には「ガラス張りの眺楼を持ち炭山一帯」[41]を望むことができ、「快復期に於ける患者の慰安」[41]に充てられた。階上西側の集合病室用のサンルーム張出し下は「エントランス」[41]で、「雪国的機能成形」[41]を意図した造形であった。

41：『田上義也建築畫集』p.87

プランは、１階エントランスホールまわりに薬局、待合室、外科室、診療室、看護婦室と食堂、台所を配置し、ホール東側は病室棟。病室６室はすべて南面し、南側１間幅の廊下は、「冬期の防寒に備え」[41]た２重窓の「プロメナード(散歩場)」[41]とし、直射日光の入るサンルームとすることも可能であった。病室の北側は「コリドール」[41]をはさんで、台所、「サービス」[41]室、便所、浴室などが並ぶ。２階は、階段ホールをはさんで、西側に前述の「集合病室」、サンルーム、東側が病室４室で、１階同様南側に「プロメナード」[41]を配置している(図12-3-2)。

新築設計図(図12-3-3)では、切妻屋根の平家建物の西側一部を陸屋根風の２階建てとし、玄関脇に丸窓付きの高さ30尺の階段室塔屋を立ちあげる。畫集案の望楼の変形である。正面、東西面からは陸屋根に見えるが、実際には北側に勾配を持つ片流れ屋根としている。外壁はクレオソート塗りの下見板張り、２階棟では高さ21尺まで同様の仕上げとし、上高さ6.5尺分は上下を水平コーニスで引締め、間を「白色」[42]塗装した「四番鉄板」[42]張り仕上げとし、南面に「ASANO TANKOHOSPITAL」、西面に「浅野炭砿病院」と病院名を掲げる。

42：『浅野炭砿病院新築設計図№3』

玄関、ホールを囲むように薬局、控室、外科室、診療室、看護婦室が並ぶのは畫集案とほぼ同じであるが、玄関脇の食堂は「茶の間」[42]と名称を変え、部屋配置は雁行し、畫集案の整然さが失われている。ホールの東側に続く病室は大部屋１室となり、サンルームを兼ねたプロメナードも失われている。２階も６畳、８畳の和室がとられのみで、畫集案に見られる軽快さはない。

田上義也の理想とする造形意図は、住宅以外の作品では田上の意図通りに実現されることが少なかったし、多くの場合実施段階で大幅に変更されたが、本施設もその一例ということができる。

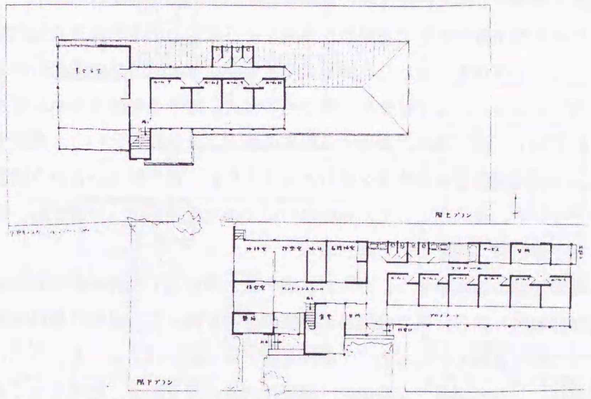


図12-3-2　浅野炭鉱病院平面図(『田上義也建築畫集』)

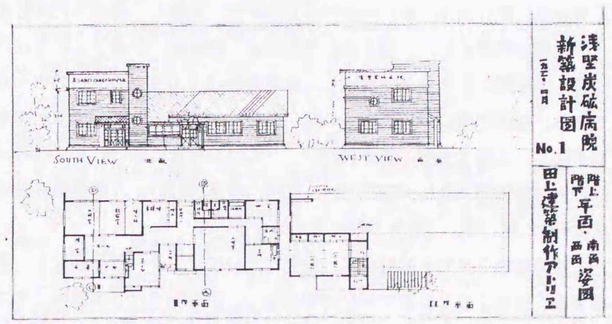


図12-3-3　浅野炭鉱病院設計図

12-3-2:山下紅療院(1931)

札幌市南１条西９丁目　木造３階建　現存

1930年９月21日、民間療法を行う者のわが国初の団体「北海道治療師会」が札幌市で誕生し、事務所が札幌市南１条西９丁目石原通孝宅に置かれた[43]。

民間療法とは、医師以外の者が行う病気治療法[44]で、1934年10月28日北海道治療師会が北海道庁衛生課長宛に提出の療術名称等によると、①精神療法科、②手技療法科、③物理的療法科の３科57療法があった[45]。適当な刺激を人体に与え、体質の改善、疾病の治癒及び予防にあたる③物理的療法科は、さらに(イ)電気、光線科、(ロ)温熱療法科、(ハ)刺激療法科に分類され、石原通孝の山下紅療法は、③の(ハ)に分類されるものであった[46]。

山下紅療法は、指頭をもって腹部の神経叢を按じ、神経系統の衰弱部位を検出し、その部位（主として頭部、頸部、脊部、腰部）に対し、桑製の塗擦扞及び紅剤、山下液を用い、塗擦操作を行って適当な刺激と栄養とを与え、神経系統の調節をはかり、血行を促し、回復エネルギーの機能を増進せしめて治療保険の目的を達す[48]る方法である。

1949年厚生省の依託で北海道が実施した「療術の医学的調査」研究で、この山下紅療法を分担した北海道大学放射線医学教室若林勝教授の調査報告[47]によると、山下紅剤は、明赤色の溶液に暗赤色の粉末を水に溶かしたもので、山下本家が製造する粉末の製法は企業秘密という。実験では、この紅剤は放射性物質を含むとは言えない、毒性はないという結果がでている。適応症として、神経系特に交感神経系疾患、神経衰弱、肩こり、胃痙攣、喘息等に有効とある。

さて建物の話に移そう。当主石原通孝は、現在地で西村真琴（北大水産学部教授）から55円で改築前の平家の建物を買った。以前は歯科医院として使用されていたもので、病院を開くには都合がよかっものらしい。石原は、1930年結核で入院中に、建築専門家の話を聞き、建物をつくるなら建築家に頼もうと思っていたが、たまたま知人の片平某からバチェラー学園の話を聞き、田上に設計を依頼したという[48]。

平面は、間口24.5尺奥行31尺の長方形平面の主棟と、間口15尺奥行17尺の従棟で構成され、１階主棟は患者控室、治療室、中廊下をはさんで玄関、応接間、便所などで構成し、丸窓部分は 6.5尺幅の控室前ホールである。西側従棟に、板敷き茶の間(4.5畳)、 洗面、台所、浴室、勝手口が続く。２階は主棟に書斉(板間)、バルコン付き広縁(サンルーム)、床押入付き客間(8畳)、和室(6畳)、従棟に寝室(板間)、３階屋根裏階は、前面6畳２室、8畳、3畳などの和室となっている。

主棟の前面９尺分を陸屋根風、後側22尺分はマンサード屋根とし、主棟背後に接続する２階建て部分は陸屋根で、設計図では「平屋根．アスファルト下地コンクリート上部タイル張り」[49]とある。またマンサード屋根部分の外壁は、「鉄板張り上ペンキ三回ヌリ仕上ゲ」[50]であった。

主棟東側正面は、軒高36尺、モルタル仕上げの平滑なファサードである。３階に1.5尺成のスリット状の連窓をコの字状にまわし、正面右(北)側１、２階を奥行３尺ほど切り込んで、１階は玄関、２階はバルコニーとしている。明らかに鉄筋コンクリート造を意識した意匠であり、コルビュジェ的作風への意識も感じられる。２階バルコニーの手摺り、１階中央の丸窓などは、1930年代に田上が好んで展開した意匠のひとつであった。

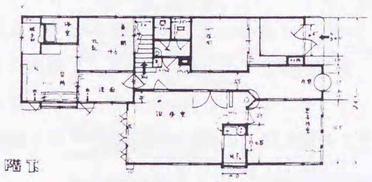


図12-3-4　山下紅療院平面図[49]

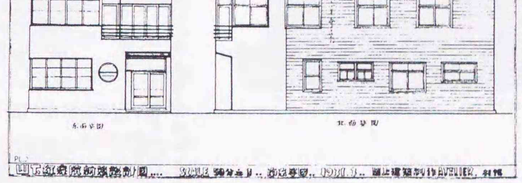


図12-3-5　山下紅療院立面図[50]

12-3-3:池田医院(1933)

札幌市南２条西４丁目　木造３階建

皮膚・泌尿器科池田六蔵の医院で、３階部分のスリット状連窓など、山下紅療院(1931年)のファサードとよく似た正面をもつ。美濃紙に描かれた縮尺1／100のファサードスケッチが残されており、赤、青、黄色の色鉛筆で、開口部、壁体などが検討されている。

平面は、間口６間奥行４間の医院部に、間口３間奥行7.5 間の住宅棟が接続する構成で、１階は診療室、控室、薬局、住宅部に食堂、台所、便所、風呂、奥に続き間の居間(8畳、6畳)が続く。

２階は、医院部に洋室３室(18×12、12×12、9×9尺)、畳室(4.5畳)、応接間(12×12尺)、非常階段などを配置し、住宅部では客室(8畳)、 次の間(6畳)、子供室(6畳)が一列に続いている。

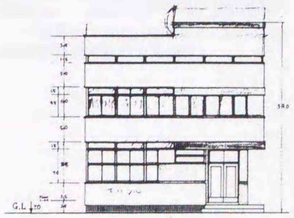


図12-3-6　池田病院正面図

43：『消されかかった療術―死線を越えて50年―』（社団法人北海道治療師会、1981.9.23）pp.31、32
44：『世界大百科事典29』（平凡社、1972.4.25）
45：『消されかかった療術―死線を越えて50年―』 pp.34、35
46：『消されかかった療術―死線を越えて50年―』p.37
47：『消されかかった療術―死線を越えて50年―』 pp.167、168
48：当主石原通孝による。
49：『山下紅療院新築設計図 平面図 PL.1』
50：『山下紅療院新築設計図 姿図 PL.2』

医院部ホールには、螺旋階段が計画されていた。墨入れされた「池田医院新築設計図」の原図には、赤や青鉛筆でエスキースした跡が残されており、螺旋階段も折れ階段への変更が認められ、実施段階でかなりの改変があったと想像される。

12-3-4:志田病院(1934)

帯広市西２条南８丁目　木造２階一部３階建

施工：横山棟梁、大沼棟梁[51]

51：十勝毎日新聞(1934.10.9)

東西に長い間口12間奥行27間の短冊状の敷地に建つ旧館の東側に増築された病院棟である。設計図の日付は1934年８月、同年10月７日上棟式を挙げた。式は、大野神官の修祓、祝詞奏上、志田信彌病院長、請負者横山、大沼両棟梁、来賓代表杉田末吉、友人代表船戸、十勝毎日新聞社長代理井浦編集長らの玉串奉奠があり、そのあと餅撒き、酒宴が行われた[51]。竣工は1934年12月、同月14日から診療が開始された[52]。新築の坪数は170坪、工費15,000円であった[51]。

52：十勝毎日新聞(1934.12.14)

志田病院は、1928年２月小児科専門病院として発足し、「幾何級数的に躍進」[53]し、1935年１月10日、内科、婦人科を増設して総合病院となった。院長志田信彌は、山形県の出身、山形中学を経て東北帝国大学医学部卒業後、北海道大学小児科を経ての開業であった[52]。総合病院化にあたり、東北帝国大学医学部から内科医長高橋濟一博士、北海道帝国大学医学部から産婦人科医長神谷虎二らが招聘された。

53：『志田病院増新築設計図・帯廣 Sheet Ⅱ』(図12-3-10)

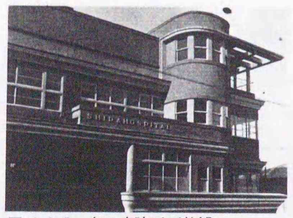


図12-3-7　志田病院正面外観



図12-3-8　志田病院(1955年頃撮影)
(北海道大学建築史研究室蔵)

新築された病棟の正面東側ファサードは、高いパラペットの立上り、２、３階に張り出したシリンダー、２階バルコニー上のパーゴラ、各階腰部に水平に走らせた厚みのある蛇腹などが特徴的である。１階パーゴラ下の玄関前の楕円形窓が、アクセントとして目を引いた。シリンダーや２階パーゴラの意匠は、この時期の田上の他の作品にもみられる艦船ブリッジのイメージを意識したものであろう。

ファサードデザインは、田上の市街地建築作品によくみられる書き割り的なもので、正面からは陸屋根風にみえるが、実際には前面は片流れ屋根、背後は切妻屋根を組み合わせている。外壁前側はモルタル仕上げ、背面切妻屋根部分は、下見板張り仕上げとしている。３階パラペット上まで地盤から38尺、２階部分パラペット上端まで34尺とし、１、２階天井高10尺、３階シリンダー部天井高は7.5尺としている。

平面は、間口55尺、奥行北側61尺、南側30尺(１階では27尺)の逆Ｌ字型とし、１階部分を７尺突出させ、パーゴラ下から玄関へアプローチする。１階は「エントランスロビー」[53]を囲むように応接室、診療室、待合室、薬局、研究室、階段室、便所などを配置し、奥に小児室、自家用茶の間、廊下をはさんで小応接室、休息室を配置している。２階は、東側のシリンダー状の病室を含めて５室、中廊下をはさんで看護婦室、病室３室、階段ホール奥に南側にサンルーム付き集合病室(18×24尺)、廊下をはさんで北側に病室２、流し場が並ぶ。１、２階廊下の天井はいずれも、垂木構造の舟底天井である。シリンダーの３階望楼部分は自家用室とされた。

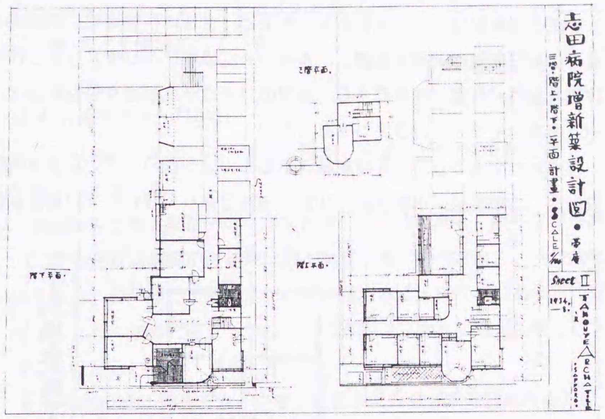


図12-3-9　志田病院設計図(平面)

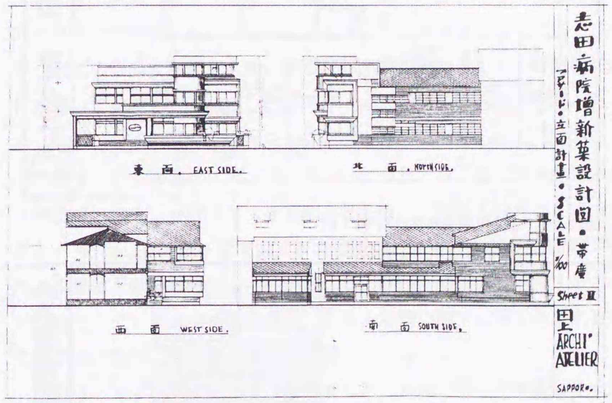


図12-3-10　志田病院設計図(立面)

12-4　ホテルと艦船デザイン

田上のホテル作品には、近水ホテル(1932、弟子屈町)、十勝川温泉ホテル(1933、音更町)、網走観光ホテル(1936)など、当時の北海道を代表するものがみられる。本項ではほかに、一度も使われることのなかった

石狩海濱ホテル(1936)と、市街地内の浴場保養施設である札幌中島温泉(1930)を含めて概観する。

12-4-1:中島温泉(1930)

札幌市南10条西２丁目　木造２階建

札幌市中島公園近くに建てられた「浴場を兼ねたレストラン」[54]である。L字型の隅角部は、左右に柱型を立ち上げ、さらに柱型内側に照明塔をくみこんで曲面中央部を強調し、ルーバー状の庇(「パゴラ」[55])をつけた片流れ屋根が柱型上部を抑える。屋根のパーゴラ風意匠や柱型意匠は、田上特有のモチーフのひとつであった。

残された図面のうち、日付記載のあるものは少ない。『中島温泉新築設計図　二階梁伏．小屋伏』に1928年10月とあり、ほかに『中島温泉新築設計図　百分ノ一　階上平面』には1929年10月とあるので、少なくとも完成(1930年)の２年程前から計画がなされていたと思われる。

54：『田上義也建築畫集』p.88
55：『中島温泉新築軸割』



図12-4-1　中島温泉外観

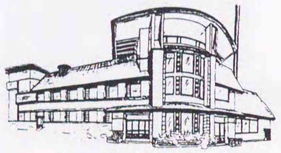


図12-4-2　中島温泉パース

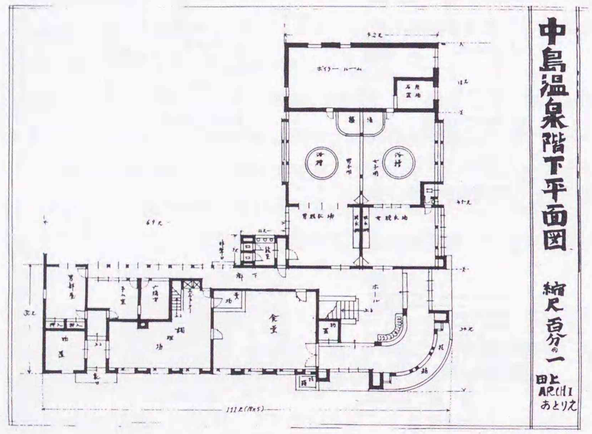


図12-4-3　中島温泉新築設計図(階下)

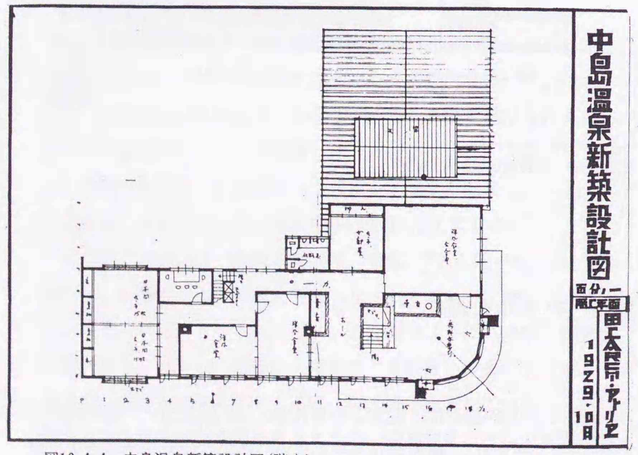


図12-4-4　中島温泉新築設計図(階上)

１階は、隅角部左右の入口を入ると、「エントランスホール」[56]をはさんで、天窓屋根付きの浴場部(52.5坪)と「喫茶食堂」「調理場」「応接間」「事務室」「男部屋」[58]などが並び、２階は、隅角部に「無料休憩所」[57]を置き、「会合用洋風食堂」「女部屋」「洋風食堂」２室、「日本間」[57]２室（ともに15畳)などで構成されている。

56：『中島温泉階下プラン』
57：『中島温泉階上平面図』

12-4-2:近水ホテル(1932)

弟子屈町字弟子屈120-70　木造３階建　施工：田中組(田中丑蔵)
棟梁：五十嵐一雄

釧路新聞社長遠藤清一の父平吉経営のホテルである。弟子屈温泉市街の北側を流れる釧路川の対岸、弟子屈湯ヶ島に建設された。当時弟子屈温泉には、長生閣、土沼旅館、子寶旅館、本山旅館などがあった[58]が、ホテルは近水が初めてだったので、阿寒国立公園への観光基地として盛況を続けたという[59]。

「弟子屈市街に碇泊した」「明るい一隻の巨大な」「欧州航路の優秀船」[60]を彷彿させる外観は、「緑色の聡明な小さな屋根」「裾を擴げたクリーム色の大きな胴體」「マストに似た望樓には、満州新國旗のような横線旗が、赤道直下の彩色魚みたいに翻へって」[60]いた。珍奇をてらったのではなく、一切の装飾や無駄を大胆に削り、しかもホテルとしての合理的実用性に基いて単純化し機能化した結果が、必然的に船の形態に帰結したという[61]が、後述の石狩海濱ホテルに至る習作の一つとしてよいであろう。

工事は、第１期本館、第２期別館と分けられ、第１期工事本館は木造３階建て。プラントボックスを兼ねた門柱は、「建築の触覚としての役目を」[61]果たし、スロープでホテルの玄関へと導く。玄関から矩形の「休息と食堂とを兼ねるサロン」[62]を通して、釧路川の流れを遠見することができた。サロンの右手を数段下りると１間幅の廊下に導かれ、左側に客間３室が並び、さらに脱衣所へと通じている。

浴室は、モザイクタイルで床を敷きつめ、東南に面して彎曲した大きな開口をもち、「欄間にちりばめられたステンドグラスは、湯に浸る人の心持を和らげ愉しませる、快い階調を奏でて」[61]いた。脱衣場共有の男女混浴の浴室であるが、楕円形の浴槽は、中央の低い仕切で一応男女用に分割されている。

サロンの左翼は和室で、基本段階では８畳２室であったが、実施段階では次の間（６畳）付き和室（８畳）に変更された。廻り縁をめぐらし、外側に柱型を強調したパーゴラ付き「テレス」を廻していた。

２階はすべて客室である。大きくとられた「硝子窓は、充分に潤澤な光線を室内へ吸収し雪國の旅人の健康を朗らかに嘔ってゐ」[61]た。『近

58：鉄道省『日本案内記　北海道篇』(1936.3)
59：『月刊住宅ライフ』(1983.6.1)
60：「社同人の弟子屈紀行【二】」(釧路新聞(1932.9.28か))



図12-4-5　正面(北側)外観

61：「社同人の弟子屈紀行【四】」(釧路新聞(1932.9.30か))
62：基本設計と考えられる『近水ホテル設計図 NO１ (1932.1.)』(整理番号236-4)書き込みによる。実施設計図では単に「食堂」と記載されている。



図12-4-6　南東外観

水ホテル設計図 2』や『近水ホテル設計 NO2 1932.1.』などの基本設計には「ルーム6～11」の5室で構成されている。北側に並ぶ「ルーム7、8」(3坪)、「ルーム9」(5坪)の南側には、サンルーム的な「プロメナード」を、また「ルーム6」(3坪)および7、8室の北側と9室の西側には「バルコン」を計画している。北棟に連続する西翼は、広縁を廻す「ルーム10」(和室8畳)と「ルーム11」(3坪)で構成された。実施段階では、「プロメナード」は採用されず、客間9室が縮小(4坪)され、広縁も3尺幅の廊下に変更されている。

3階も「ルーム12」(4坪)、「13」(4.25坪)の2室であったのが、客間(4坪)と望楼(2.25坪)およびデッキに変更された。

釧路新聞に弟子屈紀行を寄せた「仁麿生」と署名の記者は、たまたまホテルで田上と語らう機会を得、当時の田上の風貌を「ロイド眼鏡と、廣い額と、パッショネートな厚い唇と逞しい体躯」[63]と伝え、対話を通じて田上が語る建築観を引用している。その語るところを要約すれば、前半は、ライトの「日本人は日本の民族精神や自然風土に適した建築を作るべき」[63]という言葉を引用しつつ、建築を1枚の風呂敷にたとえ、建築は正直に生活内容を表現するものでなければならないこと。さらに人体の構成にたとえ、建築も各自のもつ個性や生活を如何に正直に造形的に表現するかということが必要という。

63：「社同人の弟子屈紀行【六】」(釧路新聞(1932.10.3か))

具体的に近水ホテルの設計に対してもふれ、弟子屈は武蔵野のように変化の少ない坦々たる土地であるが、地下から沸く温泉、釧路川の清流、対岸の低い丘の起伏と遠山との立体的な風景を見るにつけ、「私の構成意欲は自然に恵まれた水と湯との大なる湖上に浮かんでいる船の想念を直感し」[64]「水に近き大地の熱情を主題とせる旅人の心を港のような優しいしかも豊穣なおだやかさを以って憩はしめるホテル」[64]を意図したと語る。

64：「社同人の弟子屈紀行【七】」(釧路新聞(1932.10.4か))

また、東南面を完全にガラス窓で埋め尽くした点を、人はなぜ頑丈に壁で包まなかったか不審がるだろうが、「風、暴風、吹雪、寒氣など傳統的な雪國の条件を防禦するため壁で包むことは光線を否定するものであって却って反對な効果を生むと信じ」[64]、この点が「雪國建築に對する新解釋である」[64]という。このホテルは強い建築である。石や煉瓦の囲いということではなく、立木のような弾力をもつことで、力の性質の「剪力的構成」[64]を図り、風が吹いても揺るがず雪にたいしてもすが(ママ)を洩らすような不愉快さは絶対になく、寒風の侵略に対する武装は充分整えたつもりである。鞄でない建築を作ることが自分の一生の修練である。近水ホテルは、自分の貧しい作品として未だ世に問うほどのものではないかもしれないが、真剣な意味で以上の思想の一端を随所に大胆に表現したつもりであると結んでいる。

本館(1期工事)に続き、本館東側に新館、西側に別館が計画された。

新館についてはエスキース『近水HOTEL・設計(増築)・1933・Tanouye』が1葉残るのみで詳細は不明であるが、『近水ホテル別館新築及本館新館改造設計』(1933.9.9)図のタイトルから、新館竣工の後、別館が竣工したと推察される。別館は、遺存設計図(図12-4-11)などによれば、1階は、玄関ホール南側に続き間の客室(8、10畳)と南側畳廊下、西側に畳敷きでベット採用の2室(10、8畳弱)を配し、北側に宴会場(84畳)を突出させた。

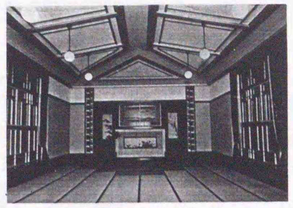


図12-4-7 別館宴会場内部

寄棟屋根の宴会場(図12-4-7)は、初期のライト風の雰囲気をもつもので、床こそ畳敷きであるが、漆喰仕上げの合掌天井をグラフィカルに木製棹縁材で隈取り、正面アルコーブは幾何学文様で飾る左右柱型状の小棚で強調し、中央にガラス窓を配置しながらも床の間的に扱うといった和洋折衷空間であった。

2階は、続き間の貴賓室と客間2室(5坪)で、書院(10畳)と続き間(8畳)の貴賓室の南側は、下階同様に畳廊下としている。玄関脇の4.5尺幅のガラス張り螺旋階段は、網走観光ホテル(1936)や石狩海濱ホテル(1936)などでも好んで使用されたボキャブラリーの一つであった。

同ホテルは1940年7月31日に弟子屈グランドホテルと改称し開業している。

1932.1.

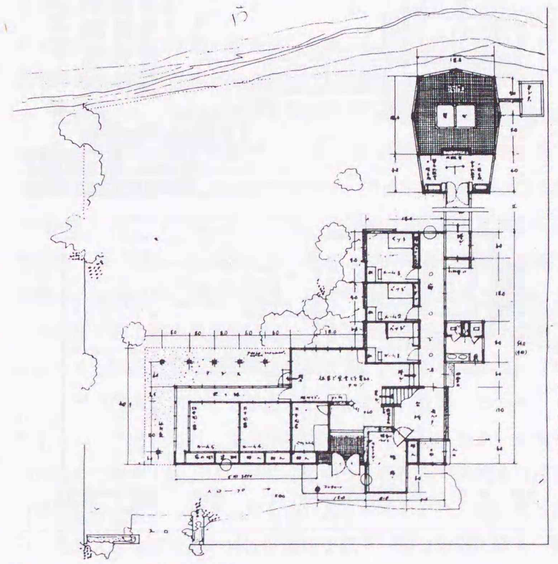


図12-4-8 近水ホテル1階平面図

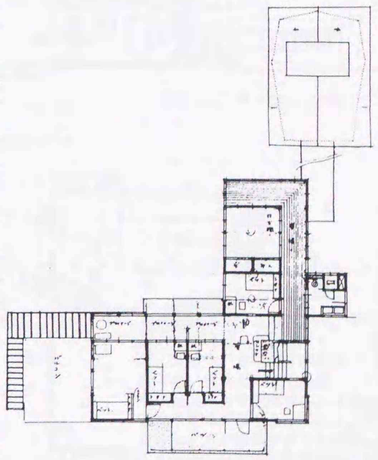


図12-4-9 近水ホテル2階平面図

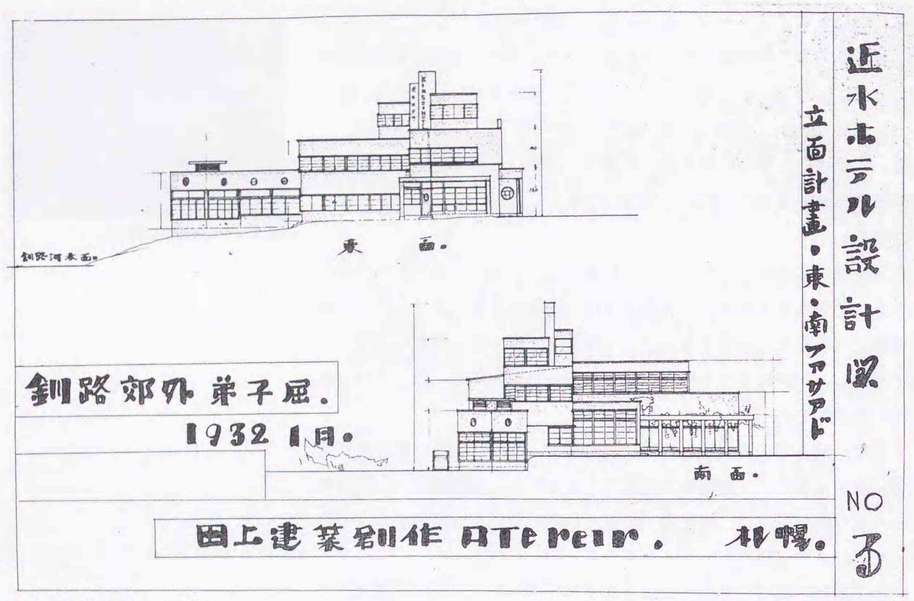


図12-4-10 近水ホテル立面図

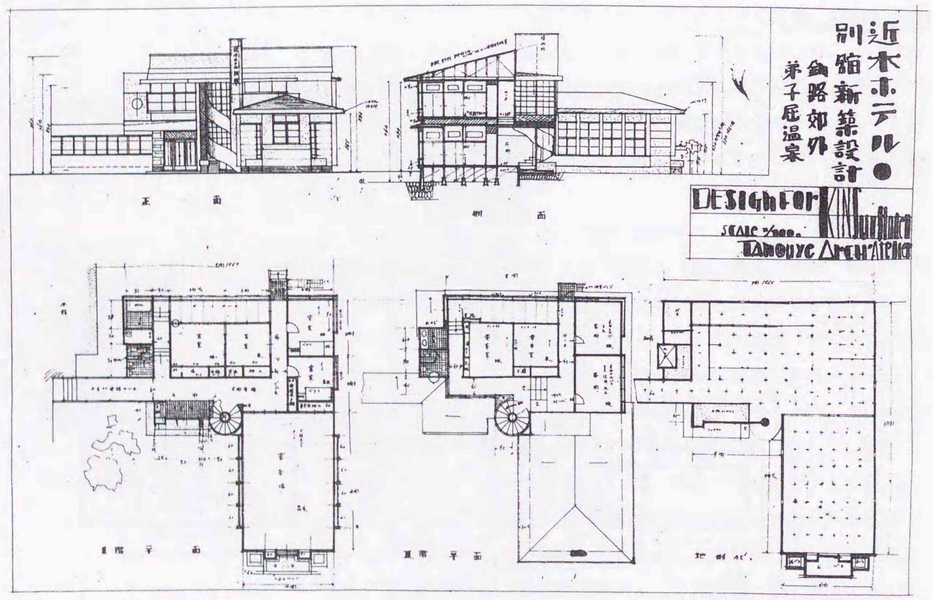


図12-4-11 近水ホテル別館設計図

12-4-3:十勝川温泉ホテル(1933)

音更町十勝川温泉南13-1　木造２階建て一部４階　施工：岡崎組

帯広市中心部から12kmの十勝川沿いに位置する十勝川温泉は、十勝平野、日高山脈の展望が開ける平原の温泉として親しまれる[65]。その歴史は、1900(明治33)年依馬嘉平が、南１線88番地(笹井温泉ホテル附近)に湧きでた「ぬるま湯」を沸かして利用したのが初めという[66]。その後、1910(明治44)年に簡素な温泉宿を経営していた前田友三郎が帯広十勝館の建物を買収移築し、本格的な温泉宿の経営を始めたが、1915年に廃業している[66]。

その後手のつけられないまま1928年になって雨宮駒平が掘削に成功、「下士幌温泉」から「雨宮温泉」と改称し、また当時の小樽新聞が全道から選んだ「五名泉」にも加えられて将来の発展が期待されたが、1932(昭和７)年には旅館経営から身を引いてしまった[66]。

一方雨宮温泉とは別に、然別湖の開発などに力を注いでいた十勝毎日新聞初代社長林豊州も、1931年十勝川沿いでボーリングを開始した。翌1932年には掘削に成功、事業半ばで岡崎公一に譲渡することになるものの、温泉ホテルの建設にもとりかかった。温泉名も、広く親しまれるよう豊州らの求めに応じた代議士三井徳宝が、「十勝川温泉」と名付け、さきのホテルも「十勝川温泉ホテル」と命名された[66]。

林豊州(本名茂)は、1889(明治22)年２月18日、板井増治、コト夫妻の次男として大分県臼杵町(現臼杵市)で生まれた。県立臼杵中学校（現臼杵高等学校）を経て中央大学法科に学ぶ。その間1909(明治42)年、帯広町で家具店を営む同郷人林長次郎と養子縁組、翌1910年11月中央大学を退学、長次郎長女波津女と結婚し、以後義父長次郎の経営する「北大商会」に勤務した。1914年菅野光民が創刊(1912年)した「十勝日日新聞社」理事として新聞事業に参画する[67]が、1918年菅野の死去で十勝日日新聞社の経営が宙に浮き、豊州は翌1919年十勝日日新聞社の社屋を譲り受け、「十勝毎日新聞社」を興した。以後、日勝黄金道路開削提唱から、1934年然別湖、糠平温泉、音更川上流一帯の大雪山国立公園編入実現等、郷土の観光と産業開発に捧げた[68]が、1935年12月20日46歳で死去した。

林豊州と田上義也の出会いは、当時の北海道庁長官佐上信一[69]の紹介によった。田上設計の弟子屈近水ホテルに一泊した佐上信一との会談の中で、「十勝毎日新聞社の林豊州社長がホテルを建てるから、一度会って欲しい」[70]といわれ、田上が林邸を訪れてからつきあいが始まった。初対面の印象を、田上は「林さんという人は直感で人柄を見抜き、人間を裸にして、自分も裸で大きくかかえ込んでしまう人だと思った。明るい、髭の大きな顔一高い鼻は計画性を語り一瞳は野望に充ち一発生すこぶる大一構想は全身にあふれ、豊かな巨体に対比して緻密な感性を所有した天衣無縫な風格の人であった。」[70]と回想する。

65：『角川日本地名大辞典1 北海道上巻』(角川書店、1987.10.8)
66：『音更町史』（音更町史編さん委員会、1961.11.3)



図12-4-12 正面外観



図12-4-13 本館と浴場

67：『林豊州伝』（十勝毎日新聞社、1989.10.8)

68：『林豊州伝』p.162

69：1882―1943年。広島県生れ。東京帝国大学卒業後、内務省に入り、岡山県、長崎県、京都府知事を経て、1931年第21代目北海道庁長官。この時期北海道は世界的規模の経済恐慌と連続冷害の打撃をうけており、佐上長官はとくに農業合理化を推進しようとした。また根釧原野開発に貢献し、この地方の酪農の父として敬愛された。(『北海道大百科事典(上)』北海道新聞社、1981.8.20)
70：田上義也「十勝の帝王」(『林豊州伝』p.207)

林との会談の中で、「十勝川流域の開発と十勝川温泉ホテルの建設計画」[70]が委嘱された。設計に先立ち、田上は林豊州らと敷地の検分を実施し、その印象を「十勝川温泉地へ」[71]と題して「十勝毎日新聞」に寄稿している。また林社長と帯広の都市構造や交通網についての歓談を、「帯広都市計画一考察」(1933年５月16日)として寄稿した。

ホテルの起工式は、1933年６月５日十勝川河畔下士幌堤防地で挙行された[72]。起工式の様子を伝える十勝毎日新聞記事(1933.6.6)には、式に参加した人名が報じられており、その一人である田上義也を「新進気鋭のライト式設計大家」[73]と紹介している。

1933年７月５日上棟を終え[74]、翌1934年４月内外の造作が完成[75]、同年５月20日開業した[76]。この間、1933年９月には北海道電燈会社によって電化工事がすすみ、温泉ホテルだけでなく付近の住民の需要にも応えることとなり[77]、さらに1934年３月には多量に噴出する炭酸熱泉を掘りあてるなどの幸運も重なった[78]。

このホテル建築のテーマは、第１に平原と川と強風であった[79]。玄関ホールから４階の展望台までの階段室をバットレス風に扱った意匠は、「40mの強風に木造建築が耐えるため」[79]であるという。浴場は川岸の接点まで迫り出し、全体の構成を「シャトー風のホテル」[79]とした。

バットレス風に立ちあがる塔屋までの高さは、地盤から60.5尺（18.3m）、設計図[80]には屋上に田上が好んだ意匠のひとつ鉄製円形旗竿支持台（径3.5寸)が書き込まれている。旗竿先端まで地盤から72.5尺との記載があるが、竣工写真(図12-4-12)にはみられない。

風と雪とシャトー風を意識したためか、全体にやや閉鎖的で鈍重な印象を受ける外観は、下地板に「建築紙ヲ張リ田崎式ラス張リ」[80]の上「モルタルハケヒキ」[80]の白っぽい外壁を、黒っぽいペイント塗り亜鉛鍍鉄板葺きの窓上部小庇、屋根軒端などの水平材が引き締めている。１階正面食堂や客室棟広縁、２階客室、３階望楼などにみられる丸窓は、この時期の田上の作品によくみられる要素のひとつである。

71：田上義也スクラップブック「十勝毎日新聞」(1933年日付不明)記事より。

72：十勝毎日新聞(1933.5.30、6.6)

73：十勝毎日新聞(1933.6.6)
74：十勝毎日新聞(1933.7.6)
75：十勝毎日新聞(1934.4.19)
76：十勝毎日新聞(1934.5.22)

77：十勝毎日新聞(1934.2.7)

78：十勝毎日新聞(1934.3.3、3.9)
79：田上義也「連載④私と北海道の建物」(月刊住宅ライフVol.28、1983.6.1) p.27

80：『十勝川温泉ホテル新築設計図エレヴェション(ﾏﾏ)』

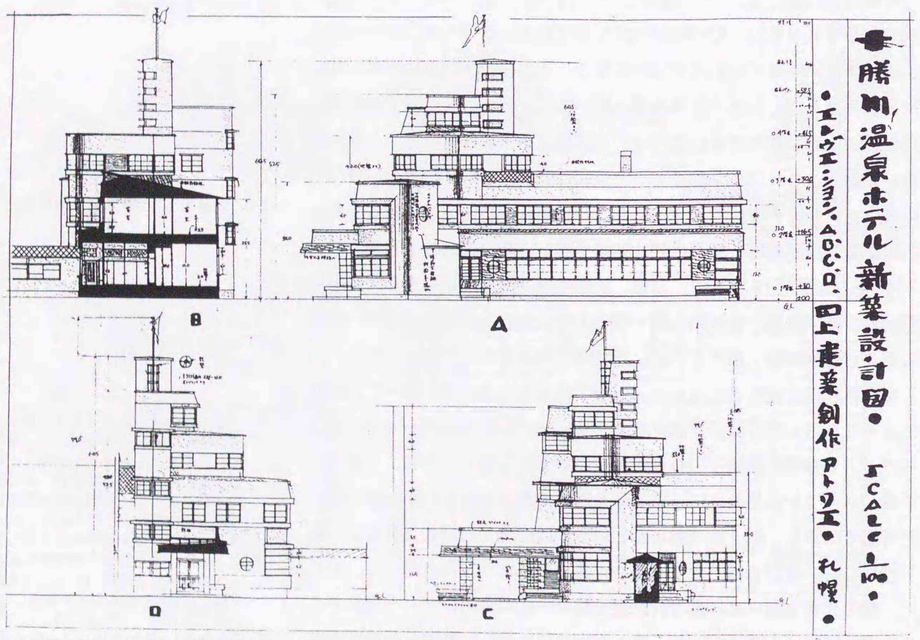


図12-4-14 十勝川温泉ホテル立面図

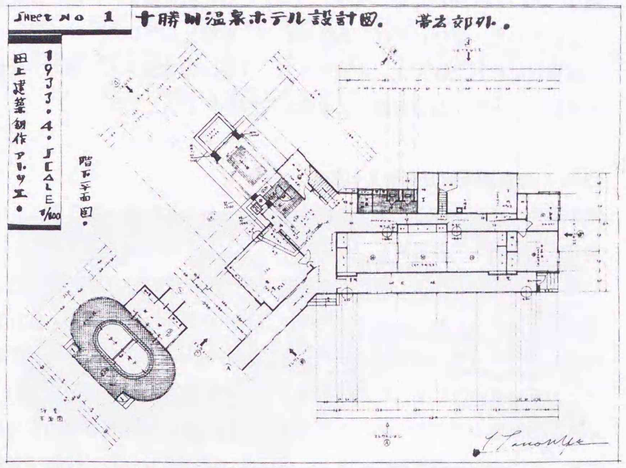


図12-4-15 十勝川温泉ホテル1階平面図

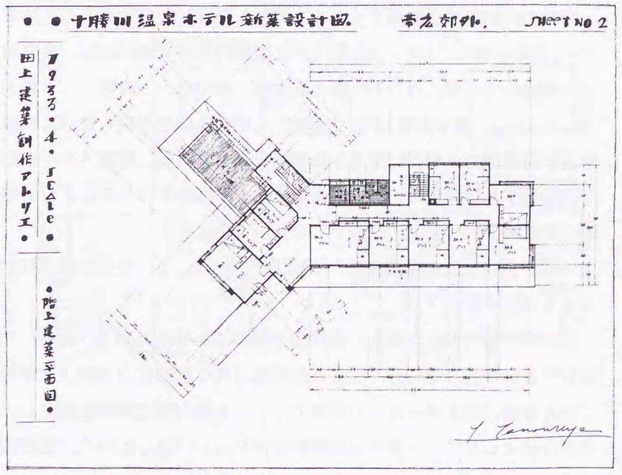


図12-4-16 十勝川温泉ホテル2階平面図

平面は、玄関ポーチ部と客室棟をＹ字型に接続し、１階はエントランスホール脇に食堂(18×18尺)、十勝川に沿って客室棟を延ばし、広縁(6尺幅)付き続き間3室(いずれも10畳)、中廊下をはさんで便所、物置、台所(15×24尺)、女(中？)部屋(6畳)、自家用室(8畳)、ホールから食堂前廊下を通じて川岸近くの楕円平面の浴場に連絡していた。

81：『十勝川温泉ホテル新築設計図.SHEETNO２(ﾏﾏ)』

２階は、Ｙ字の交差部に「広場」[81]「ロッビイ」[81]を置き、脚部にあたる客室棟は中廊下をはさんで、客室４室(RM.4～RM.7)と、反対側に便所、洗面所、納戸、階段、客室２室(RM.10、RM.11)を配置し、廊下端部に客室２室(RM.8、RM.9)を置く。Ｙ字の右腕部は玄関ポーチ上部で、スノコ張りの「バルコン」[81]とし、左腕部に客室３室(RM.1～RM.3)を並べる。客室は、入口は片開き戸で、ベット(3.4×6.8)と机を備え、一般には畳敷きとしていた。窓はいずれも出窓形式の二重窓としている。

82：『十勝川温泉ホテル新築設計図.SHEET３(ﾏﾏ)』

望楼状に建ち上げた３、４階のうち、３階は階段ホールを囲んで客室３室(RM.12～RM.14)を配置し、４階は「望楼」[82]としていた。

12-4-4:町営網走観光ホテル(1936)

網走市南２条西１丁目　木骨鉄網コンクリート造３階建一部５階

施工：三井組（三井三次）

網走町は、1935年度予算に町営観光ホテル新築費と鉱泉試掘費を計上し、ともに可決された。連年の凶作で財政困難にもかかわらず、翌1936年６月19日の皆既日食観測に、世界各国からやってくる学者や新聞記者のためのホテルとして、町および商工会が中心となって計画したものである。建築費４万円のうち、３万円を起債により、一部を有志の寄付に求め、不足分を一般町費から支出、完成後は委託経営とし、月額 250円の賃貸料で町債の償還にあてる計画であった。鉱泉試掘は観光地として熱望していたものであったが、不成功に終わっている[83]。

83：『網走市史 下』(網走市役所、1971.3)pp.1469、1470

当時の新聞記事(「北海タイムス」1935.9.15)は、「日食ホテル」「学者ホテル」建設を報じ、「地下共四階といふ国際的型の」[84]建物で、「貴賓室を含み客室は三十間、外に七十畳の宴会場、四十畳の小会室、二十畳大のグリルルーム(地下食堂)があり浴室、化粧室の衛生設備も充分に来朝の学者の満足出来る様特に配慮した建築」[84]とされた。建築スタイルは「国際型であるが質的には雪国型でオホツク海の国際ホテルとして申分のないもの」[84]を意図したという。

84：『北海タイムス』(1935.9.15)



図12-4-17 網走観光ホテル南西側外観

同ホテルは、日食観測後は、「網走観光ホテル」として引き続き町で経営する予定であった[84]。

85：『北海タイムス』(1935.12.7)

1935年に着工し、内部の一部造作を遺すばかりで九分通り完成した同年12月５日午後10時40分、仕上げ壁乾燥中の３階客室の火鉢の火が付近のかんな屑に燃え移ったのが原因で、３、４階内部 150坪を焼失し、11時20分鎮火した[85]。１万円の保険がかけられていたとはいえ、復旧には

２万円を要し、懸命の作業により予定通り完成し、日食観測にまにあわされた。大きな期待のもとに発足した町営観光ホテルであったが、最初の委託者の経営不振で、1939(昭和14)年２月、あらためて田辺村次に経営を委託、５月「ホテル山水閣」と改称して再発足している[83]。

このホテルも、田上は鉄筋コンクリート造でまとめたかったのではなかろうか。インターナショナルスタイルを意識した単純な外観や、ガラス張りの螺旋階段が特徴的な建物である。

敷地は、網走川沿いの1934年に永久橋として完成した網走橋の南側で、地上３階地下１階、総建坪 373坪のＬ字形の建物であった。１階はホール、宴会場、事務室、２階は、和室７室(内１室は続き間)、洋室４室、３階は、和室８室、洋室６室、浴室で構成されていた[86]。

86：北方文化研究会編『田上義也建築作品抄』（らいらっく書房、1966.5.1）

戦時中黒色に塗られたが、のち白色系クリーム色仕上げの外観に戻され、1977(昭和52)年取り壊されている。

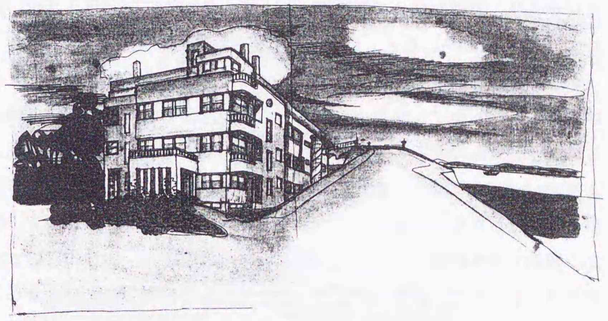


図12-4-18 網走観光ホテルパース

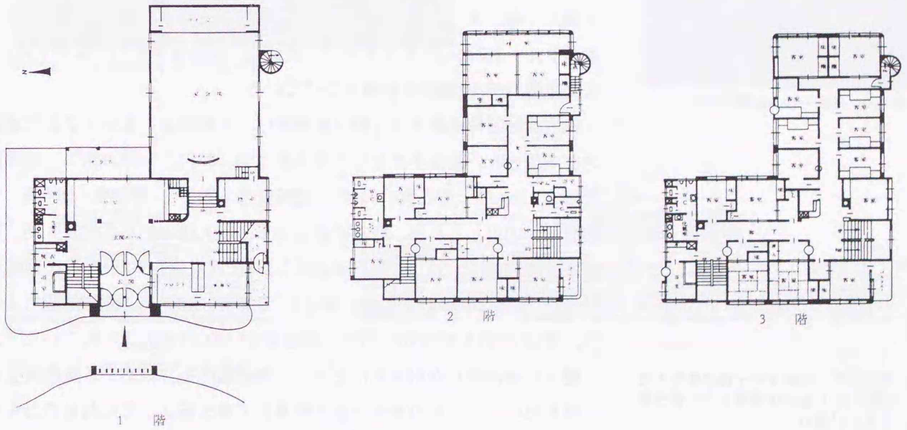


図12-4-19 網走観光ホテル平面図(『田上義也建築作品抄』)

12-4-5:石狩海濱ホテル(1937)

石狩町弁天町地先　木骨鉄網コンクリート造３階建　施工：増田鍬平

同ホテルは石狩町の砂浜に建設されながらも、一度も機能しないまま消え去った文字通り砂上の楼閣であるが、1936(昭和11)年７月発行の創立趣意書が見つかり[87]、また遺存する設計図[88]とあわせ、設立意図や工事概要などを知ることができる。

建設経緯と沿革

石狩海濱ホテルの計画は、1932(昭和７)年６月２日『北海タイムス』紙に「石狩の砂丘に大遊覧ホテル　工費五十万圓で建設」と透視図入りで紹介されている。「砂丘の地形なりに弩級戦艦を横たへたやうな」基本設計は、総床面積 700坪。１階は、水泳競技のできる大プール、食堂、海水温浴場、子供の一大楽園、２階は、和洋室、宴会場で、屋上はすべてテラス式。「夏は籐椅子にもたれて海風を浴びながら雄大なる風光を展望」するよう工夫され、他に温室、日光浴場、講堂などを含み、鉄筋コンクリート造、工費50万円という壮大な計画であった。その後、木造に変更され、規模も半分程度に抑えられて、最終的に1935年９月付け設計図（図12-4-23～25など）によって実施されたと考えられる。

ホテル起業にあたっては、町会議員も務めた能量寺住職飯尾円什[89]が中心となった。ホテル開設の背景として、趣意書では「自由ノ生活様式ヲ採ラントスル傾向近年特ニ著シク各地ノ海濱山岳、温泉等殷賑ヲ極ムル状態」を鑑み、「重ネテ地方農漁村ノ冬期閑散時」の「一大娯楽場ヲ提供セン」としたものであった。ホテル建設地附近は、細砂の遠浅で、僅かな設備で海水浴場となること、背面に柏樹林を控え、砂丘の白砂とハマナスの赤い花は、旅情を慰めてくれることなどの利を生かし、さらに石狩、札幌間の国道改修は「一時間ニ満タザル自動車ノ行程」を可能にし、また石狩川放水路完成が「江別ヨリ水路僅カニ一時間餘ニシテ降ルヲ得」「春、夏、秋ヲ通ジテノ遊覧客数萬ニ及ビ、海濱ノ文化的施設ヲ要望サルヽ」に至ったことをあげ、夏は海、冬は温泉として利用する「一大文化的ホテル」建設の動機を述べている。

株式会社石狩海濱ホテル創立事務所は、札幌市北３条西３丁目信陽館内に設置され、起業予算として資本金は50,000円、その内訳は、建物建設費 41,000円、備品費4,000円、運転資金3,000円、創立費1,000円、予備費 1,000円とされた。収支予算として、収入はホテル客室収入 9,720円、食事飲料売上12,920円、宴会収入2,400円、雑収入2,851円の計 27,891円、支出は食事飲料原価6,460円、営業費12,340円、減価償却 1,500円、諸税300円の計20,600円で、利益金は7,291円が見込まれていた[90]。

請負は増田鍬平が引き受けたが[90]、飯尾側の条件はホテル建設資金は一銭もない。どこかの業者が全工費を立て替え施工してくれるのなら一切をその業者に任せたい。工事の請負契約が成立すればただちに株式会社を設立して、工事竣工までには全額支払の予定というまったく虫の良い話しであった[90]。結局1935年11月「総工費36,000円。前渡し金なし。八分通りの出来高分に、半金の18,000円、残額は完成引き渡し後完済」[90]の契約を結び、同年11月８日に地鎮祭を、12月18日には網走から駆けつけた田上も参加して上棟式を挙げ[91]た。当時田上は、網走観光ホテルと北見郷土館(網走博物館、1936年、現存)の監理も抱えており、しかも観光ホテル工事中の12月５日には３階を焼失し、復旧工事に忙殺される時期でもあった。

ホテルは1937(昭和12)年５月に竣工したものの、内部造作などは未完のまま、敷地6,000坪と建物約300坪が増田鍬平名義で登記された。1942年には名義人の了解なしに北海道庁に売却され、1944年から第２健民修練所[92]として使用され、1945年７月15日空襲に見舞われ全焼している。

施工者の増田鍬平は、1901(明治34)年新潟県三条市生まれ。大工を志して上京し、宮大工の修業のかたわら、蔵前工業学校の夜学で建築を学んだ。1923(大正12)年の大震災後の復旧工事で実務をこなしたあと、1930年に来札した。主な作品として、この海濱ホテルのほか、北海道大学北学寮(1933年、札幌市北区北14西２)、玉一旅館（1935年、札幌市中央区北３西３)、丸新旅館増改築（1939年、札幌市中央区南１西４)、グランド太陽小樽支店(1940年、小樽市花園町)などの設計施工があげられる。

87：㈱石狩海濱ホテル創立事務所（札幌市北3西3信陽館ホテル内）発行。創立趣意書、起業予算、収支予算、定款、新築工事概要をまとめたパンフレット。田中実氏(石狩町在住)が発見したもので、石狩町役場総務部提供。

88：設計原図は、
1. 石狩海濱ホテル設計図３階PLAN. 1:200
2. 石狩海濱ホテル設計スケッチ 1:200(1935.7.25)
3. 無題スケッチ
4. 石狩海濱ホテル設計図(平面図) 1:100 NO.1～NO3(1935.9)
5. (立面図) 1:200
6. (断面図) 1:200 (1935.9)
7. 縦断面詳細図 1:50
8. 矩形図 1:20
の計10枚が遺されている。

89：1895(明治28)年石狩町生まれ。1911(同44)年能量寺副住職。1928～1932年町会議員。1947～59年石狩町長。1960(昭和35)年没。

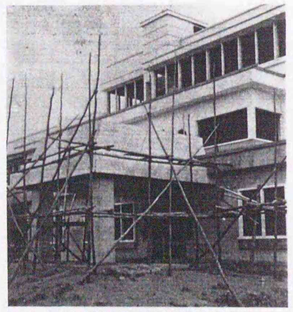


図12-4-20 建設中の石狩海濱ホテル

90：増田鍬平『戦時下の土建業界始末記(その３)』北海道建築士会札幌支部だより(1983)

91：注90の文献では12月25日とあるが、ここでは北海タイムス(1935.12.22)によった。

92：1943年内務・厚生省、健民運動組織要項を通牒、同年8月全国的に設置。身体の強健でない青少年を入所させ、体位・体力の向上をはかった。

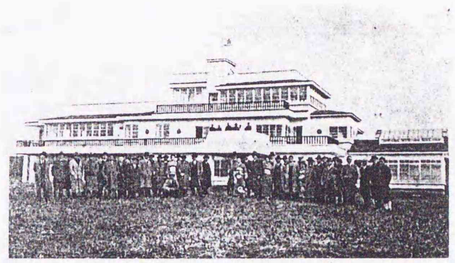
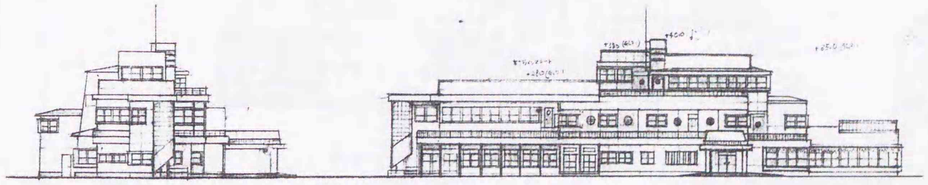


図12-4-21 石狩海濱ホテル正面外観



(側面図)　(正面図)

図12-4-22 石狩海濱ホテル立面図

建築概要

日本海に面する間口25間(45m)の横長の建物は、「木骨鉄網コンクリート」「礦精(タール：筆者注)仕上ノ上コンクリートペイント塗り」３階建て[93]。その様式は「雪国的造形意図ニ依ル国際型ニシテ石狩海濱砂丘ノリズムヲ性格的ニ発映セル独特ナル型体」[93]と、田上が一貫して語る建築論の一端を実現したものであった。

外観は、海側全面に展開するデッキ、セットバックさせた客室棟、２階客室の円窓、中央右よりの塔屋など、明らかに客船のイメージを意識しており、また左端のガラス張り螺旋階段は、田上が好んだ意匠の一つでもあった。浴場部分も含め、連窓の意匠は「紫外線誘導ノ目的ヨリ多量ナル玻璃面」[93]を必要としたからである。

高さは、趣意書の工事概要では、地上から旗竿頂部まで47尺、塔屋最高部40尺(12m)、２階デッキ上端12尺、３階デッキ上端22尺、同パラペット32尺であるが、矩計図や断面詳細図他の図面で微妙な違いがあり、かなりの部分で設計変更があったと考えられる。

建物の延べ面積は、332.76坪(デッキを含む。1,098㎡)、1階155.32坪、２階130.44坪、３階47.00坪[94]である。

１階は、車寄せ、玄関、「エントランスホール」を中心に、右に小集会室や「スカイライト」付き浴場(18坪)、ボイラー室、便所など、左に受付、「事務室」、売店、台所、大広間(27坪)を配し、大広間前を1.5間幅のデッキ「BALCON」としている(図12-4-23)。

93：「石狩海濱ホテル新築工事概要」(趣意書 pp.12、13)

94：設計図では39.5坪。

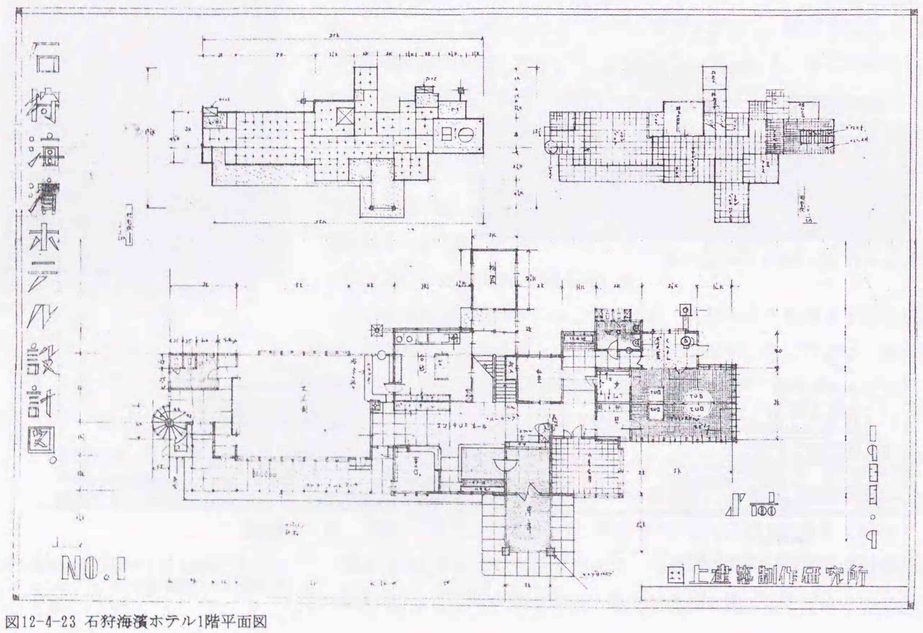


図12-4-23 石狩海濱ホテル1階平面図

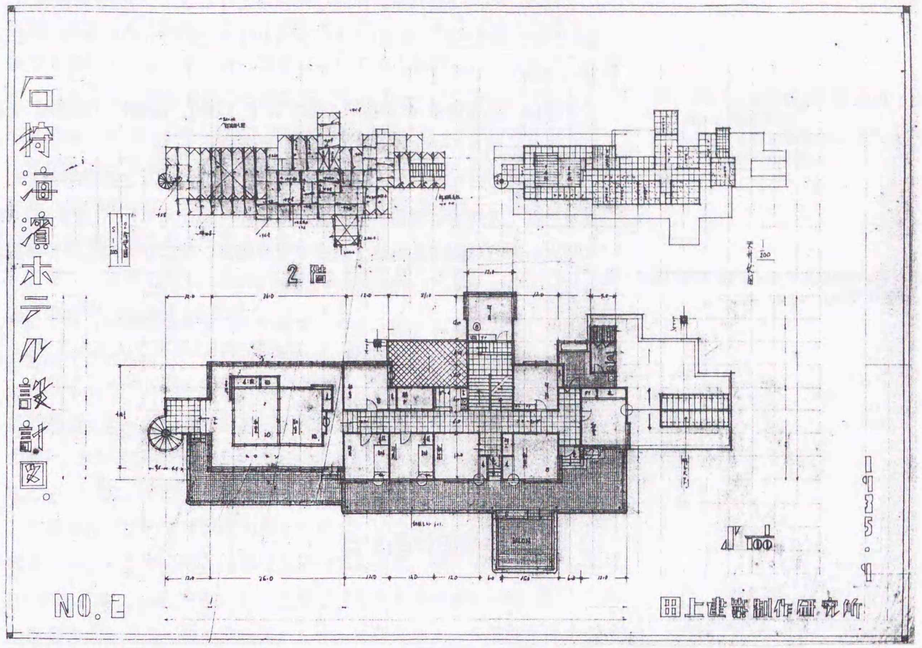


図12-4-24 石狩海濱ホテル2階平面図

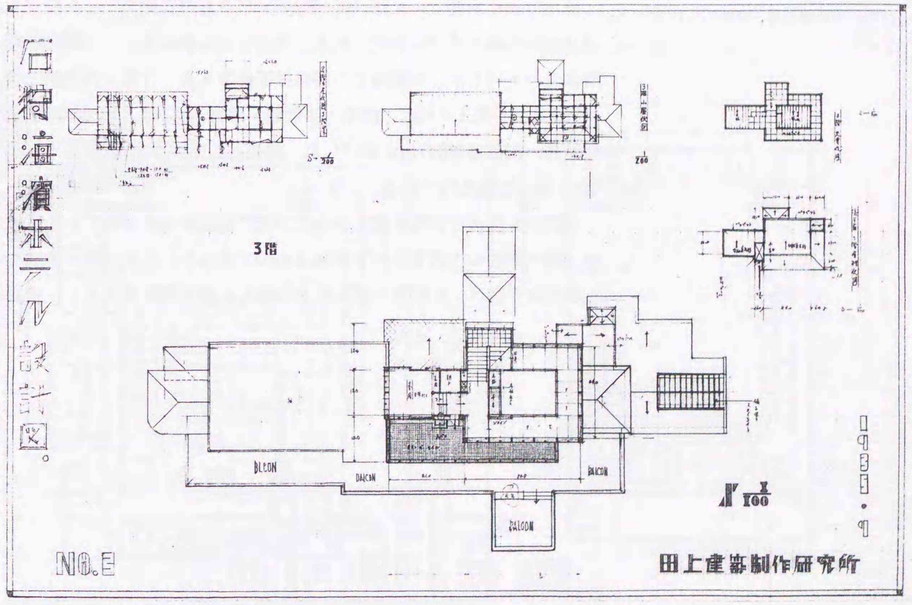


図12-4-25 石狩海濱ホテル3階平面図

２階は、和室(8畳)4室、洋間(4坪)4室と「ヒロエン」付きの続き間(10畳)２室で構成され、海側に「クリンガタイル」張りの「BALCON」を置く(図12-4-24)。

３階は、客間(8畳)と畳廊下を廻す和室(10畳)、海側に「礦精材」を施したタイル張りのデッキがあった(図12-4-25)。

２階の「ヒロエン」と３階の畳廊下は、サンルームと展望所を兼ね、デッキは「大衆的遊覧場トシテ開放」した「プロメナード(散歩場)」で、「雄大ナル石狩海濱日本海ノ風光ヲ十分観賞シ更ニ日光浴ニヨル健康増進ヲ計ラントスル」[93]目的で設けられたものであった。

内部は未完のままであったが、計画でも、天井は漆喰およびベニヤ、プラスタなど、壁もベニヤや「トマテキス」[95]など、ローコストの材料で仕上げられる予定であった。

95：『石狩海浜ホテル矩計図・TANO・ARCH アトリエ』

12-5　その他の作品から

12-5-1:佐々木座(1929)

旭川市１条６丁目　木造２階建一部３階

旭川で佐々木座といえば1900(明治33)年３月27日開業[96]した佐々木源吾経営の劇場がすぐに挙げられる。同劇場は危険家屋として昭和初期に解体されているが、本劇場との関連は不詳である。『旭川市史第三巻』(1959.7.1)「第三十六節　劇場・映画館・映画人」には、1928年末の劇場、常設館、演芸場8館の名が挙げられ、劇場として佐々木座(旭川市1条6丁目)１館が記載されている。

1929年５月付けの設計図を中心に13葉の図面が保存されている本劇場は、廻り舞台や枡席をもつ本格的なものであった。左右対称を意識した正面東側外観は、軒蛇腹で水平性を強調した陸屋根風意匠とし、中央塔

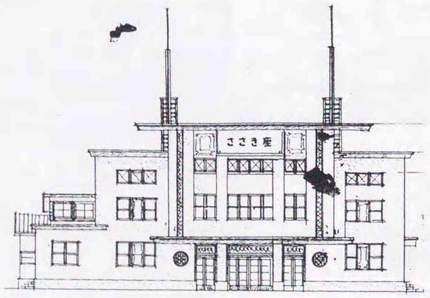


図12-5-1　佐々木座正面図

96：『旭川市史第三巻』(1959.7.1) p.765

屋部の高さは地上50尺、左右３階部のパラペット高は42尺、塔屋左右に旗竿を掲げている。客席から舞台にかけての主棟部は、木骨トラスの腰折れ屋根とし、屋根頂部には換気塔(「Vent Tower」[97])をあげている。

外壁は、クリーム色[97]の「人造石洗い出し仕上げ」[98]で計画された。

１階玄関は中央部左右に柱型をはりだし、左右の小壁に丸窓を配している。丸窓意匠は、北側側面の各階階段室や舞台裏廊下、芸人室、南側側面２階階段室などでもみられた。

１階は、玄関中央に「売券場」右手に「電話室」「事務室」、左手に「下足室」「喫煙室」「中茶屋」を配置し、「ライトプロメナード」「レフトプロメナード」をはさんで客席と舞台である(図12-5-2)。

客席は11×約10間の矩形で、上部約7×7間を吹き抜け、２階はコ字型に桟敷席を廻している。舞台には直径 5.5間の回転舞台を備え、上部左右に「ハヤシ方」席が設けられている。２階正面側には「食堂と喫茶」を備えていた(図12-5-3)。

内部意匠については詳細図等からわずかにうかがえるのみであるが、客用大階段まわりの球と直線材を組合せた壁灯、踊り場の正方形の壁灯、「スピンドル」(竪棒)を採用した手摺(『佐々木座新築設計図 旭川 8 客用階段の地下花道・便所詳細図』)や、内部柱型上に矢筈模様風の幾何学模様(『佐々木座新築設計図 旭川 12 楽屋廻り規矩断面図』)を付加するなど、田上らしい意匠がみられる。

97：『佐々木座新築設計図 旭川 4 北側面・中央断面図』
98：『佐々木座新築設計図 旭川 10 前面中央部矩形詳細』

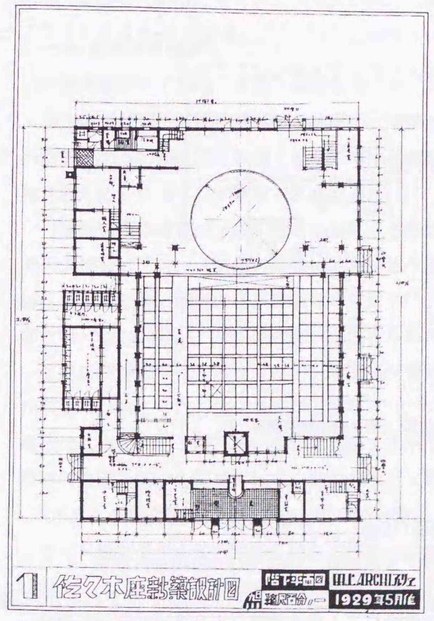


図12-5-2　佐々木座1階平面図

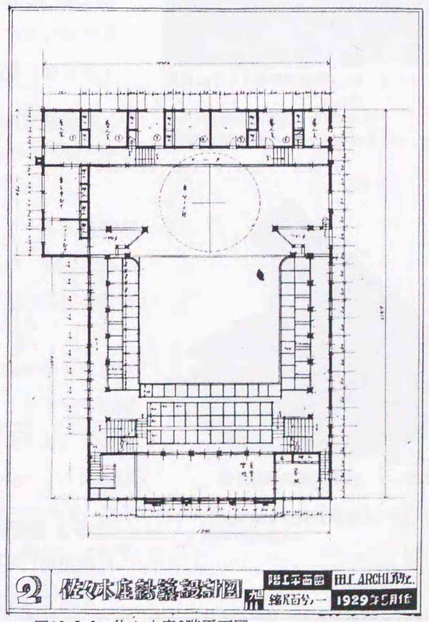


図12-5-3　佐々木座2階平面図

99：『田上義也建築畫集』p.95
100:『円山百年史』(1977.6.25)p.254

101:『田上義也建築畫集』p.94

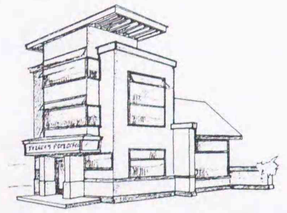


図12-5-4　円山郵便局(『田上義也建築畫集』)

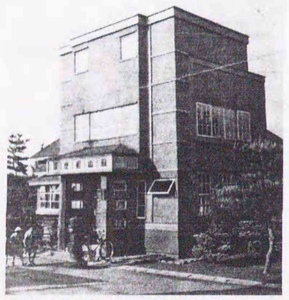


図12-5-5　円山郵便局外観(『円山百年史』)

102:タイトルなしの円山郵便局立面図



図12-5-7　幌西巡査派出所外観

103:『山鼻創基八十一周年記念誌』(1957.5.29)p.214

12-5-2:円山郵便局(1930)

札幌市南１条西24丁目　木造２階建　1965年秋取壊し

円山に初めて開設された３等郵便局[99]で、初代局長は藤森芳夫であった[100]。開局は1930年６月16日と記録されている[100]。

局舎併用の住宅で、平面は、局舎と住居部を「クローゼット」[99]で区切り、１階郵便局は「公衆室」「現業室」[101]からなり、住居部は、北側に玄関、「エントランスホール」[101]をはさんで西側に便所、応接室、東側に台所、物置を配置し、南東側に８畳二間の続き間、南側に縁側を配置している。２階は和室(10畳)である。

当初計画では、局舎部正面を旭川岩城新聞店(1930、12-1-3)のファサードに類似したデザインとし、片流れ屋根の前面を書き割り的に扱い、正面中央陸屋根左右にパーゴラを翼状に広げている。岩城新聞店の項でも指摘したように、東京帝国大学学生基督教会青年会館（遠藤新設計、1925)のファサードとも酷似する。

中央塔屋部は地上32尺の高さで、両側一段低い（パラペット上端まで地上27.5尺）壁体よりもわずかに突出させて強調し、２、３層目に配置した連窓は両脇まで廻り込ませて、ソリッドな外観に軽さを付加しようとしている。実際にはパーゴラは省略され、左右の壁は中央塔屋部上端まで延ばされた外観(図12-5-5)となって、当初案の浮遊感は一掃されている。

「独逸ナマコ」[102]の外壁は、「下地建築紙二号品敷込の上川崎式メタルラス張リモルタル掻掃付三回仕上ゲの上ペンキ二回塗」りとし、腰部と住宅部外壁は目板打ち下見板仕上げ、「円山郵便局」名をレタリングした正面玄関の庇は、照明入りのガラス張りとしている。

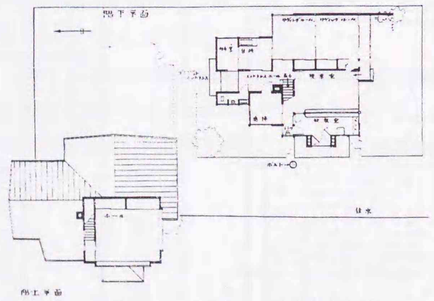


図12-5-6　円山郵便局平面図(『田上義也建築畫集』)

12-5-3:幌西巡査派出所(1930)

札幌市南11条西14丁目　木造平家　1964(昭和39)年10月取壊

札幌警察署幌西巡査派出所は、1930年７月１日設置[103]されたが、建物は設計図の日付から８月以降に建設されたものと思われる。1948年まで山鼻南方面の保安の要として重要視され、またモダン交番として有名であった[103]。

木造平家建ての小規模な建築で、当初案は2×4.5間の長方形平面の長手方向に片流れ屋根を架けた単純なもので、玄関部上部に円筒形の看板を掲げた外観がユニークである。平面も前側事務室と宿直室、台所間に円形ペチカを備えるなどの点が目を引くが、実現案では規模こそ同じものの切妻屋根とされ、円形ペチカは集合煙突に変更、円筒形看板は半円筒形とされ、この部分のみ片流れ屋根とされた。

半円筒部および東西南外壁は「モルタルハキ付ケ」[104]仕上げ、腰部は「人造石仕上げ」[104]、北側外壁のみ下見板仕上げとしている。

104:『幌西巡査派出所新築設計　矩形断面』

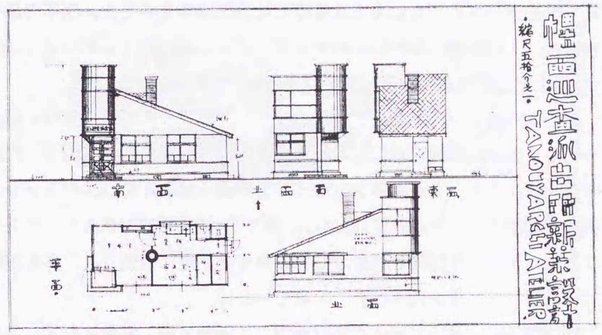


図12-5-8　幌西巡査派出所当初案

12-5-4:函館毎日新聞社(1932)

旧函館市鶴岡町１番地　木造３階建塔屋付き　施工：木田組

函館毎日新聞の新社屋である。社屋の大増築は「折畳み式輪転機」[105]の増設による工場施設の完備とともに「本社躍進の前奏曲」[105]として実施された1932年度の二大事業であった。

「建築美術の権威田上義也氏の創案になる鉄筋コンクリート四階建の近代式建築」[105]で、「三階には数百名を容るゝ講堂を設け、種々の催し場に備ふると共に読者の利用に便ならしめ」[105]、「「読者と共に作る新聞」即ち「われらの函毎」」[105]実現の願いがこめられた。

工費及び施設費は４万８千円で、木田組が請け負い、1932年８月24日から工事が始まった。着工を告げる記事[106]でも「鉄筋コンクリート四階建近代式建築」[106]と報じているが、実際には木造で実施された。しかも当初の全面新築から変更されて、既存の木造２階建て建物の上への増築[107]である。商業建築における書き割り的表現に共通する手法であった。

ライト風スタイルから脱却し独自の作風を模索する田上義也にとって、鉄筋コンクリートによる表現は常に念頭にあったようにも思われる。早い例では、1926年３月末に設計を終える日本基督教会北一条教会（1927年、11-3）でも、当初は鉄筋コンクリートで計画されていた。客船をイ

105:函館毎日新聞(1932.8.15)

106:函館毎日新聞(1932.8.25)

107:『函館毎日新聞社増築設計図　断面詳細矩計図』

メージさせる1930年代のホテル建築のデザインも鉄筋コンクリートによる表現を意識したものであろう。インターナショナルスタイルもコルビュジェも表現主義なども、ライトから脱却するためのデザインソースとして積極的に吸収したように思えるのである。

３階階高差をそのまま外観に表した正面は、１階中央に出入口、腰壁上に黒色タイル壁と縦長２連窓を交互に並べ、２階はスパンドレル上に中央階段踊り場開口部の縦長３連窓、左右に黒色タイル壁と縦長２連窓を交互に並べる。３階は、右手講堂部分はスパンドレルから軒までの全面開口、社章を入れる丸窓とその下に黒色タイルの小壁、小壁の上端は講堂部の水平サッシュと、左手連窓上端とにそろえられている。屋上の塔屋は、全面ガラス開口と「プリズムガラス」[108]入り開口をみせ、右手に「乳白ガラス」[108]をはめて広告塔と社旗用旗竿を立てた。旗竿の鉄管横には、４段輪飾りも付加されている。旭川のパリジャンクラブ（1933年）屋上でも採用されたアールデコ風の装飾である。

白いスパンドレルと黒色タイルのツートンカラーの外観は実現しなかったし、部分的に開口部位置の変更はあったが、ほぼ基本案通りに完成した。コンクリート造風のファサードを実現させるため、スパンドレル部分を壁面より１尺ほど[107]張出し、壁下地材と「鉄アングルリベットスクリュー付」[107]で緊結された２寸角の角材を下地に板張り、「外部川崎式ラス張りモルタル仕上げ」[107]としている。

間口72.5尺、奥行42尺の矩形平面で、１階が工場、営業室など、２階が工場、編輯室、応接室など、３階が講堂(34×42尺)、応接室、重役室などで構成され、塔屋に図書室が付属していた。

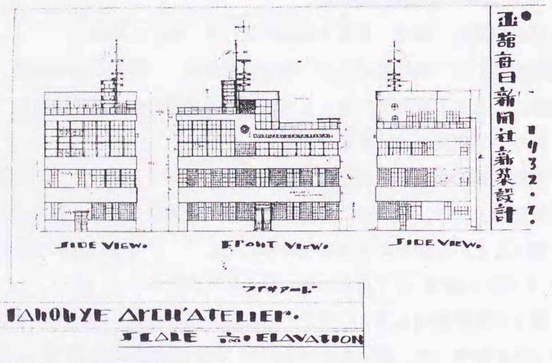


図12-5-9　函館毎日新聞社立面図

108:『函館毎日新聞社新築設計　ファサード』

12-5-5:共同魚菜市場(1934)

釧路市　木造２階建

旧釧路川に沿った釧路市大字入舟町３に所在の㈱共同魚菜市場が計画した施設である。同社は『昭和四年度釧路市商工案内』(1929.8.15)によると、1925(大正14)年６月10日設立の魚菜競売業で、資本金50,000円の株式会社であった。釧路には、もう一社㈱釧路魚菜市場があったが、1934年に共同魚菜市場に買収されて新たに釧路魚菜市場として発足しており[109]、この合併にあわせての計画であったと思われる。

幣舞橋のほとりに計画されたこの市場施設は、１階が魚類卸市場、倉庫、集会場、宿直室などで構成され、２階は青菜卸市場、倉庫、事務室、役員室及び応接室などが収容されている。

外観は陸屋根スタイルであるが、片流れ屋根の書き割り表現としている。道路側正面および川側ファサードはＲＣ造の表情にもみえ、また丸窓や連窓、煙突状にみえる換気塔など、ホテル作品で展開した艦船モチーフがストレートに表現された案であった。

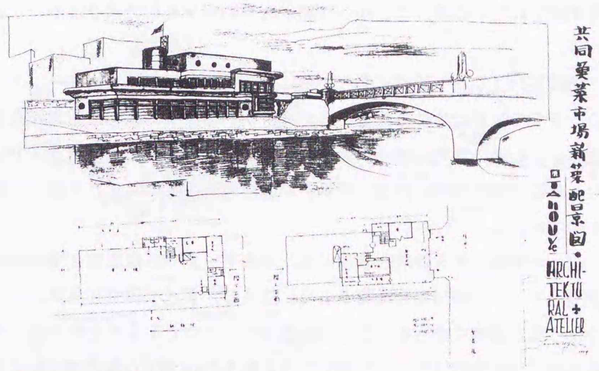


図12-5-10　共同魚菜市場配景図

109:『新釧路市史年表』(1975.9.25)

12-5-6:北見郷土館(現網走市立郷土博物館)(1936)

網走市桂町1-1-3桂ヶ岡公園内　木造２階建

施工：宍戸組(宍戸栄左衛門)

網走観光ホテルの設計調査のため網走滞在中に、網走支庁長岡田佐市から設計依頼を受けたもので、皇太子殿下御誕生記念事業として建設された博物館である。初代館長を務めた米村喜男衛の努力によって、先住民族の遺跡、その伝説、考古学的な資料の収集、アイヌ民族の生活の実態とその遺物資料などの展示解説を目的とした[110]。

ホテルと郷土博物館の二つを手がけることになった田上は、建築のテーマを、ホテルの方は心の安らぎと憩いを提供する女性像とし、博物館の方は、チャシの古城跡を守護し、風雪に対峙して立つ男性像を意識した[111]という。

資金は住友家より10万円の寄付の予定であったのが１万円となったため、他の鉱山や北見教育会、北見支庁内の町村にも寄付を求め、当初の鉄筋コンクリート造の予定を木造に変更した。1935年９月着工、翌1936年８月竣工、同年11月３日開館した[112]。

低く強い感じの表現を求めた[111]結果、中央部の玄関左右に広がる水



図12-5-11　北見郷土館南西外観

110:田上義也「連載④私と北海道の建物」(月刊住宅ライフVol.28、1983.6.1)p.28

111:田上義也「連載④私と北海道の建物」p.29

112:山口廣ほか「近代建築再発見29 流氷の街の赤いドーム」(『建築知識』1985.11)p.59。『網走市史』(1971)では9月着工、竣工1936年7月としている。

113:『田上義也建築作品抄』(1966.5.1) p.21

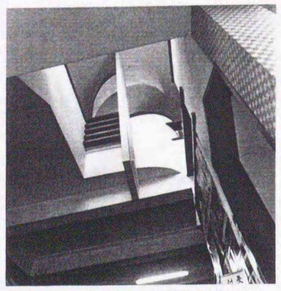


図12-5-12 北見郷土館階段室見上げ (1974年撮影)

平の強い両翼は、深い軒の出の寄棟屋根を架け、１、２階を左官手製のブロックを張り付た胴部が分節している。１、２階の窓間の柱型の強調は、窓の保護のため[113]という。胴部に張り付けたブロックは、防寒帯として、またモザイクタイルによるモルタル肌の被覆は、耐火、耐寒を工夫したもの[113]であった。

平面は十字型で、１階はホールを中心に左右の翼は展示室、正面図書室、２階は教育室、講堂、応接間として使用された。

低い翼部の外観の印象や階段室廻りの白壁と木製手摺のコンポジション、展示室の緩やかな勾配天井などはライト的ともいえるものであるが、ドームへ通じる２階中央の螺旋階段は、1930年代の建築モチーフのひとつとして田上がしきりに多用した要素の一つであった。ドーム塔屋は現在閉鎖されているが、ここからは網走港や知床半島を展望できる[113]という。

階段室のスリット状や星形の小窓には、当初幾何学的なパターンのステンドグラスがはめこまれていた。ステンドグラスの色も改修された現在のような濃い色ではなく、もっと淡い黄、水色、紫など色ガラスであり、日没と朝日の光と影のリズムの幻想を表現する[111]ことを意図したものであった。

田上が意識した男性的な表現とは、中央ドームや正面玄関２階の円柱柱型、アーチの採用などを指すように思える。アイヌ民俗を意識したかのような土着的な重さも、雪国的造型表現の一つと見ることができるが、全体的に1930年代の作品に共通して見られるモダニズム的表現はかなり薄れている。ただ正面１階左右の額縁状の縁取り手法の直線性は、1930年代の作品で田上が好んで採用したモチーフのひとつであるし、上で述べた螺旋階段も1930年代モチーフといえるものであった。

12-5-7:札幌正教会計画案(1934)

札幌市　木造平家

札幌市南７条東１丁目に1936(昭和11)年に完成した札幌正教会は、河村伊蔵長輔祭の設計であるが、田上の計画案が残されている。

河村は、建築家内井昭蔵の祖父にあたり、1865(慶応元)年愛知県半田市生まれ、上京後1885(明治18)年ニコライより洗礼を受け、1939年に没するまでロシア正教の建築担当聖職者として勤め[114]、函館正教会(1916年)や豊橋正教会(1915年)、白河正教会(同年)などを設計監督した。

札幌正教会の創立は、1888(明治21)年８月である。1893年南2条西7丁目で会堂基礎式をあげ、翌1894年秋竣工した。設計はモイセイ吉田（陸軍建築家)、監督ゲオルギィ芦立であった[115]。木造平家妻入り下見板張り、中央にファンライト付入口、左右に半円欄間付上げ下げ窓をみせる素朴な洋風建築であった。のち1921(大正10)年前面を増築、設計は臼澤

114:藤森照信・増田彰久『建築探偵東奔西走』(朝日新聞社、1988.5.30) p.212

115:『札幌正教會百年史』（札幌ハリストス正教会、1987.8.19)

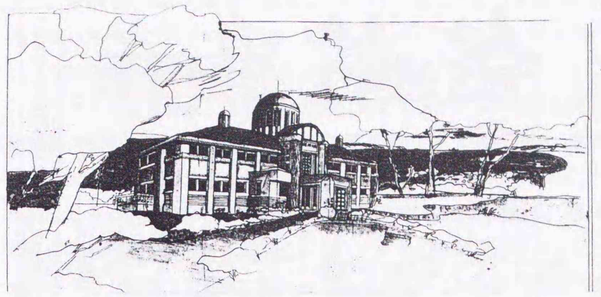


図12-5-13 北見郷土館透視図

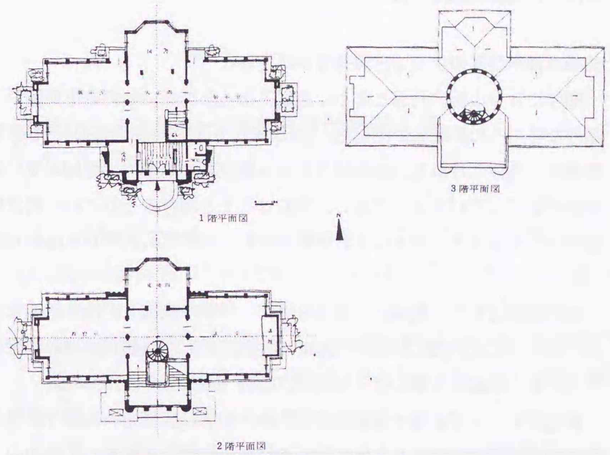


図12-5-14 北見郷土館平面図(『田上義也建築作品抄』)

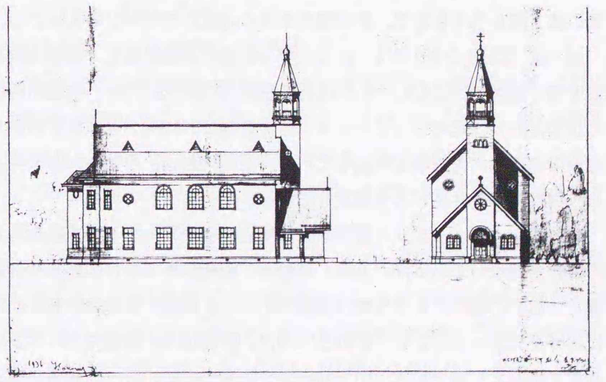


図12-5-15 札幌正教会彩色立面図

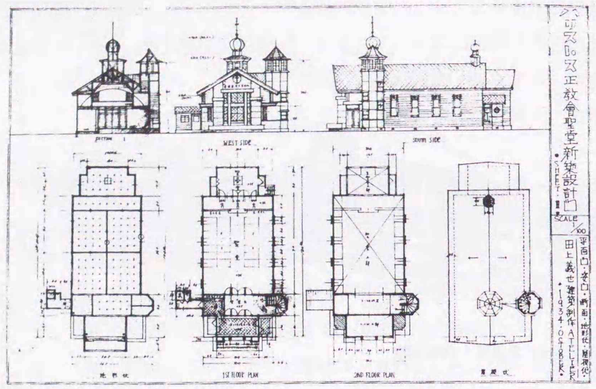


図12-5-16 札幌正教会設計図

建築事務所経営のマルコ臼澤長吉が担当した[115]。

昭和に入り市街の発展とともに会堂のあった地域にも商店街が延び、閑静な場所への移転話が出始め、1928年４月「聖堂建設準備委員会」設置が決定し具体化された。1933年８月から建設募金も開始、翌1934年には設計が終了していたようである。当初は田上と河村のそれぞれに設計依頼があったようで、田上には設計料 50円、河村には110円が支払われている[115]。

設計図書として、配置図１葉(1:100)、 平面・立面・断面・伏図２葉(1:100)、断面図２葉(1:50)のほか、彩色立面図１葉(図12-5-15)が遺存している。基本図２葉には、1934.OCTOBER の日付が入っている。

彩色図面には正面図と側面図が描かれ、中央に尖塔をいただくロマネスク風の木造会堂であり、ギリシャ正教の十字架を掲げているものの、他の設計図書とはまったく一致しない外観であり、最初の案と思われる。図面下の左右に、「1936 Y.Tanouye」と「札幌ギリシャ教会基本プラン Y.T」のサインが見られるが、左下サインの年号には疑問が残る。これは聖堂の竣工年を示すもので、後の整理の際に付加したものと考えられる。

田上案（図12-5-16)では、15×20間の敷地の北側に聖堂、南側に牧師館を置く配置で、聖堂は、5×8.5間の聖所(啓蒙所を含む)、啓蒙所西側の正面に20× 9尺のエントランス、背面東側に5×2間の至聖所を付加し、啓蒙所南側に八角鐘塔を突出している。聖所内部は、ヴォールト天井とし、中央部の天井高17尺を想定している。

啓蒙所上のキューポラと聖所東端講壇上の小キューポラが正教会らしい外観を表現しているが、玄関、啓蒙所、聖所部をころびのある切妻屋根で一体的に覆い、６寸勾配の屋根の軒は、札幌北１条教会などと同様にボックスコーニスとし、軒の出 2.5尺、軒高16尺、西側キューポラ先端まで地面より高さ40尺、小キューポラ先端まで36.5尺、八角塔軒高30尺と、塔部もそれほど高さを意識しておらず、むしろ低い安定した水平性の強い外観とされている。特に玄関ホール廻りのモルタル塗りの柱型は、初期の作品にみられる田上好みの意匠である。

ハリストス正教会は、結局河村の設計案で実現される。鐘塔を戴く玄関棟、啓蒙所、聖所、至聖所をそれぞれ分節させた外観をみせ、鐘塔と聖所棟の方形屋根の頂部にクーポラを戴く会堂は、1970年５月札幌オリンピック冬季大会に向けての道路新設の余波を受け解体された。翌1971年８月札幌市豊平区福住に鉄筋コンクリート造の新聖堂が竣工した。鐘塔やクーポラ位置など細部は異なるものの、全体としては旧聖堂の様式を踏襲したものとされ、武石木型製作所製の精巧な木工技術の聖障枠組み[115]は、新会堂にそのまま転用されている。

12-6 北ノ王鉱山と帝産航空㈱落部工場

多産な田上の活動は、1936(昭和11)年から激減する。日中戦争（1937年)、国家総動員法(1938年)を経て、太平洋戦争に突入するころである。木材や鉄鋼、生活必需物資の統制令などが公布された世相を反映して、ほとんど設計依頼もなく、戦後1951年に設計活動を再開するまでのブランク期ともいえるが、これまでの作品には見られなかった大規模な産業施設計画を２つてがけることになる。

一つは、帝国産金興業会社による北見・生田原村(現生田原町)の北ノ王鉱山(1937年)、もう一つは同社の渡島・落部村(現八雲町)入沢の落部工場(1944年)である。

12-6-1:北ノ王鉱山(1937)

生田原町　施工：地崎組、大野組[116]

生田原町に残されている田上自筆の透視図「北ノ王鉱山全景　KITANO-KOUZAN LANDSCAPE 1937 FEB.」(図12-6-1)は、北ノ王鉱山の全体像を、独特のタッチで実に細かく表現している。作品活動のほとんどなかったこの時期にあって、彼の創作エネルギーを発散させる格好の材料であったといえるものであった。

生田原川に臨む緩斜面一帯に展開するこの計画は、 531ｍの山頂近くに備えられた貯鉱室[117](I) や精錬所(H)に向かう中央通りをはさみ、左手正面ゲート付近に11棟ほどの庭付き「高級社員住宅[118]」(E)が並び、中央に北ノ王会館(劇場、C)、右手には従業員倶楽部(D)、やや上方に普通科、専科生100名収容の鉱山学校を併設した事務所[118](B) が位置し、さ

116:北方文化研究会編『田上義也建築作品抄』(らいらっく書房、1966.5.1)

117:『生田原町史』所収の杉山義夫（大阪商事調査部長)「北ノ王鉱山視察記(昭和13年)」による。

118:『生田原町史』（生田原町役場、1981.3)pp.96、97



図12-6-2　診療所



図12-6-3　北ノ王鉱山事務所



図12-6-4　北ノ王会館

らに上方に社員住宅地[117](F) や鉱夫長屋(G)が並び、谷をはさんで左手には「白亜の北ノ王倶楽部」[117](A)が位置していた。他に、日用品配給所、製材所、病院、機械器具修繕工場、変電所などが、整然と配置されていた。図の左端には、上生田原町駅(J) もみられ、精錬所と電気索道で結ばれる様子も描かれている。この計画の描かれた２ヵ月あとの４月には、帝国産業興業株式会社が買収し、飛躍的な増産体制に入ることになった。

鉱山の沿革

本鉱山の創立は、1918(大正７)年11月、前年に和田政吉や山品末男らが試掘発見した露鉱一帯を「北ノ王鉱山株式会社」が譲り受けたことに始まる。普通の金山とは異なり「土砂鉱」を採掘処理し、鉱量の豊富なことにおいても我国であまり例がないともいわれたこの鉱山は、また生田原町における金銀鉱業発展の端緒ともいえるものであった。

翌1919年、一部に水銀鉱が含まれていたことから金銀水銀鉱に変更、水銀精錬所も設置して操業を開始したが、成績不良のため４年間休業、改めて1923(大正12)年11月金銀鉱採掘を目的として再開、12月から久原鉱業㈱が引き受けて「貴王鉱山」と改称したが、翌1924年12月水野伊三郎に採掘契約が移されて「北ノ王鉱山」名に復されている。

1926年からは、北の王金山株式会社他吉田清作ら75名による北ノ王鉱山鉱業組合が経営し、売鉱は日立や鴻ノ舞へ送られたが、1931(昭和６)年精錬を開始し、1934年には精錬所を増設している。

1937年４月帝国産業興業株式会社が買収、増産体制に入った。同鉱山の規模は、北海道においては鴻ノ舞、静狩、三井珊瑠についで第４位の鉱産額を占め、重要金山として着目されていたが、1943(昭和18)年４月「軍事企業整備法」により、閉山されることになり、施設は次々と解体、

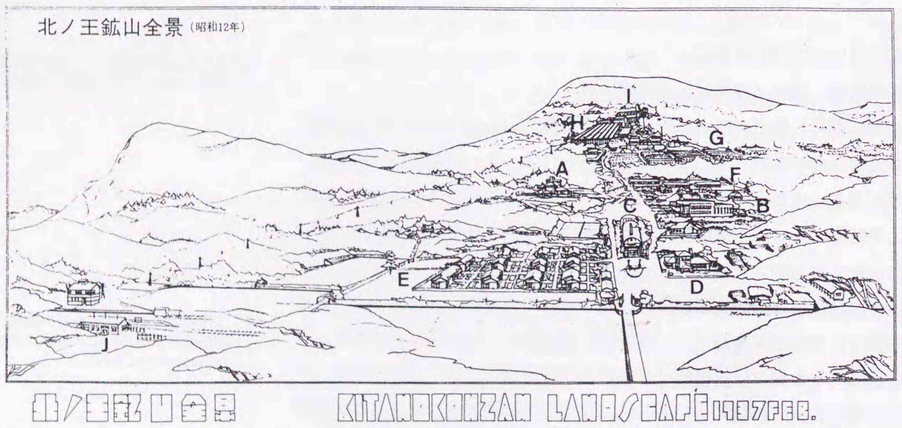


図12-6-1　北ノ王鉱山全景(『生田原町史』より。図中のアルファベットは筆者加筆)

従業員、労務者は、新しい鉱産現場へ配置転換されて、労務者の60～70％は、イトムカ鉱山に移されたという。

閉山に伴い、鉱山施設に関しては鉱山監督局が建物転換等の実権を掌握し、遊休施設の監理を帝国鉱業開発㈱にあたらせていた。村ではこの遊休施設を買収し、公共施設の充実を図ることを企画し、当時の寺井実笵村長(在職1943年７月～1946年11月)を中心に陳情請願を続け、最終的に診療所、事務所、会館、巡査駐在所、社宅２戸など 500坪余が、坪単価40円で払い下げられることになった[118]。

診療所(図12-6-2)は、日本赤十字社北見病院生田原分院として転用され、手術室や病棟の増築、内部改造を、川合徳四郎が請け負い、1945年１月25日開院。1953年には、モルタル塗り平家建ての建物に改築されたが、1964年閉院している[119]。

事務所(図12-6-3)は、水平感の強い外観で、整然とグリッド分割された開口部やガラスで覆われた階段室をもち、正面玄関の庇を支える四角錐台形の柱型は、ピロティーを想起させる力強さを持っている。村の総合庁舎として転用することを目的に買収されたが、1945年４月21日全焼の生田原国民学校の仮校舎として使用、また1947年５月７日開校の新制生田原中学校仮校舎として使われた[120]。

村の公民館に転用予定の会館(図12-6-4)は、正面に楕形アーチの破風と、破風を突き抜けた石造風意匠の柱型をみせ、プラスター仕上げと思われる表現が、ダイナミックな中にも瀟洒な印象を与えるファサード意匠の建物であった。写真から判断すると、このアーチは正面と背面に書き割り的に付加され、主棟は切妻屋根のようである。両側面には斜めの控え柱が露出し、力強さが強調されている。アーチへの嗜好は、北見郷土館(1936年、**12-5-6**)などにも見られるが、田上の作品群の中ではやや異質の表現をもつ作品である。

この会館は1947年川合徳四郎に10,000円で転売され、解体され遠軽に移築された。1950年８月17日 625名収容の遠軽劇場として落成し、舞台開きには七代目尾上菊五郎、市川海老蔵合同の東京歌舞伎が公演された[121]という。

巡査駐在所と社宅２戸は、村の公務員住宅として転用されている[118]。

さて、施設関連の史料としては、前述の透視図のほか、北ノ王クラブの初期案と考えられる無題透視図(図12-6-5)、「北ノ王金山クラブ設計図(1937.5)」平面図(1:100)と「北ノ王鉱山 office用家具(昭和12年10月10日)」の設計図２葉が遺存している。さらに北ノ王クラブ外観・内部、事務所外観、従業員倶楽部外観・内部、北ノ王会館外観、北ノ王鉱山事務所外観、診療所外観などの写真が若干残されており、本節ではこのうち北の王クラブと従業員倶楽部について概観しておこう。

119:『生田原町史』p.782

120:『生田原町史』p.839

121:『遠軽町史』(遠軽町役場、1957.7.20)p.463



図12-6-7　北ノ王クラブ



図12-6-8　従業員倶楽部

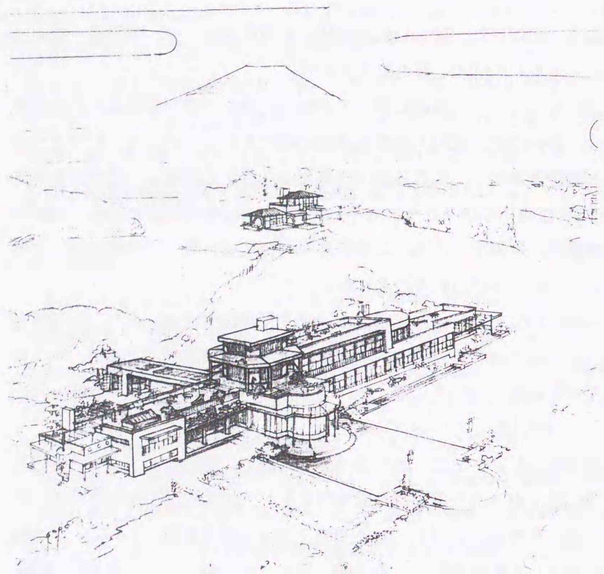


図12-6-5　北ノ王クラブ初期案(図面の一部割あい)

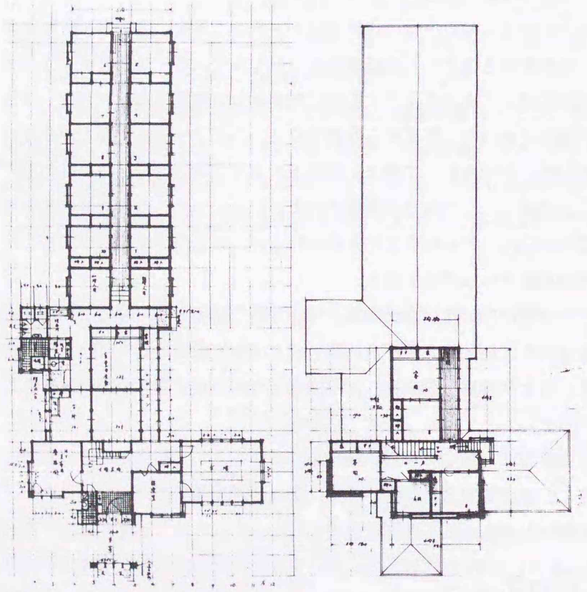


図12-6-6　北ノ王クラブ平面図

北ノ王クラブ

遺存する設計図書の中にクラブの極初期案と考えられる図面(図12-6-5)が１葉ある。美濃紙に鉛筆で描かれたもので、図面上方には従業員倶楽部に類似の建物が描かれ、下方に水平に伸びたガラス開口の多い建物がみられる。人工池に面して半円形に突出した１階中央部分はさしあたりロビーであろうか。１階のテラスやパーゴラ、２階３階の屋上テラス、ガラス張り螺旋階段など、石狩海濱ホテルなどに見られるデザインの延長上にあるもので、いわば田上の1930年代スタイルの総決算ともいえるスケッチであった。

一方実現したクラブ建築は、逆Ｔ字型の２階建て主棟の右手と背面に平家部を延ばした建物で、主棟頂部には社旗を翻し、建物名「北ノ王クラブ」を浮き出させた塔屋が垂直に立ち上がっている。正面左手に展望室風の３階を置き、塔屋右手の切妻屋根の階段塔が２階と結んでいる。

主棟の外壁は、２階窓上まで出隅を小口留めとする鎧下見板張りと、上部軒下までをプラスター仕上げとし、正面のみ浅いこぶ付きのブロックで被覆している。平家部は、開口部の高さ半分までが鎧下見板張り、上はプラスター仕上げである。

１階は、車寄せ４坪を加えて床面積150.63坪(497.08㎡)、２階は38.5坪(127.05㎡)で、主棟１階は、正面に２本の人造石仕上げの柱型で支えらえた車寄せを突出し、玄関広間を中心に左手に来客用洋室「応接間」(6.25坪)、便所が並び、右手は「娯楽室」(5坪)とさらに平家の「玉場」(ビリヤード室、12坪)が連続する。

「玉場」前のホールから、幅１間長さ5.5間の「ヒロエン」が続き、「食堂用座敷」として使われる書院・床構え付き座敷(12.5畳)と続き間（12.5畳）が並ぶ。手前続き間には台所(５坪)が続き、食堂用座敷をＬ字に廊下が囲み、廊下の右側端部はクラブ出入り口、左側に浴室、洗面所、便所など水廻りが置かれていた。

食堂用座敷の床の間裏廊下のほぼ中央で、背面の客室棟と結ばれ、階段４段上って中廊下をはさみ、左右に「料理人用」室(8畳)が並び、さらに左右６畳２室、８畳が左右に４室、合計10室並んでいた。

２階は、階段ホール正面側に８畳(床棚付き)および６畳の客間、左手に「客間」(10畳)を配し、ホール左側端部はさらに、塔状の明るい出窓付き階段室で３階と結ばれていた。ホールに直交する廊下にそって、書院、床付き「客間」(10畳)と続き間(8畳)が並んでいた。

従業員倶楽部

木造２階建て一部平家の建物は、小さいながらも田上らしい表現の見られる建物の一つである。平面は、クラブの基本形を縮小したものに類似していたと思われ、２階建て主棟に平家の和室群と台所などのサービ

ス棟を付属していた。

外壁全体を目板打ち下見板張りとし、この仕上げは集合煙突にまで徹底している。こうしたゴツゴツした仕上げとは対照的に、突出させた玄関部はプラスター仕上げとし、正面には半円アーチの窓を採用して軽快に扱っている。

主棟隅部の太めの木製枠で縁どられた縦長の開口部は、田上の住宅作品で多用された「はしご窓」で、階段室の採光用であろう。

12-6-2:帝産航空㈱落部工場(1944)

八雲町入沢(旧落部村)

生田原のほか、朝鮮や本州などで金山鉱業を経営していた帝国産金㈱(社長:石川博資)は、1943(昭和18)年３月愛別ベニヤ工場落部工場を買収し、帝国産金㈱落部工場とした。翌４月、入沢に田上設計の新工場を建設、６月には別会社帝産航空株式会社を創設して、前記の買収工場は解体、改めて新工場を落部工場とした。

同時に田上は、石川社長の申し出で、新設会社の取締役工場長を任されることになる。建築依頼のなかった時期だけに、生産工場経営者への転身に甘んじることになるのである。

この頃、落部の隣村野田生に疎開していた作家の伊藤整と出会い、慣れない疎開生活にとまどう伊藤を企画課長に、一家を社宅に迎えるなどの便宜を図っている。

会社は、新設と同時に軍の指定工場となり、木製飛行機に使用する航空用短板製造を主とし、従業員 400名を要する規模であった。戦時下の食料難ということもあって、ブイタウシナイ(現花浦)で農場経営をし、食料の自給自足の態勢まで固めていたが、1945年８月終戦と同時に閉鎖、帝国産金㈱落部工場と改称したが、1947年５月に閉鎖され、1949年大同木材株式会社が買収、引き続き操業したが、これもまもなく閉鎖された。

工場施設

『計画土地附近図 1:2000』及び『工場計画図 1:1200』(図12-6-8)によると、工場用地は、落部市街から下の湯へ通ずる道路をはさんで、北側に貯木池、丸剥(?)工場、合板工場、乾燥室などの工場施設が配置され、さらに函館本線から分岐して敷地内を通る石山線と工場側線の北側に、製品倉庫が４棟並ぶ。また、道路をはさんだ反対側の敷地には、木造平屋柾葺の４戸建従業員社宅６棟、木造平屋の合宿舎２棟、寮舎１棟や２戸建職員住宅４棟が整然と配置されていた。

『工場計画図』には、計画施設の規模、構造のほか、単価及び建設費も記入されており、総建設費 2,005,300円の予定である。施設を一覧して、次にあげる。

記号	用途	構造	棟数	延坪数	単価	建設費
イ	丸剥工場	木造亜鉛鉄板葺平屋	1	620坪	500円	310,000
ロ	合板工場	〃	1	618	500	309,000
ハ	試験室	〃	1	45	500	22,500
ニ	強化積層材工場	木造柾葺平屋	2	360	500	180,000
ホ	乾燥室	〃	1	150	600	90,000
ヘ	自然乾燥室	〃	42	315	400	126,000
ト	倉庫(製品用)	〃	4	480	400	192,000
チ	〃	〃	2	300	400	120,000
リ	〃	〃	2	120	400	48,000
ヌ	事務室	〃	1	125	600	75,000
ル	職員社宅	〃	4	120	600	72,000
オ	従業員社宅	〃	6	336	600	201,600
ワ	寮舎	〃	1	170	600	102,000
カ	合宿舎	〃	2	150	600	90,000
ヨ	変電所	〃	1	12	400	4,800
タ	守衛所	〃	1	25	400	10,000
レ	休憩所	〃	1	26	400	10,400
ソ	風呂場	〃	1	15	400	6,000
ツ	便所	〃	1	10	400	4,000
ネ	洗濯室	〃	1	80	400	32,000
						2,005,300

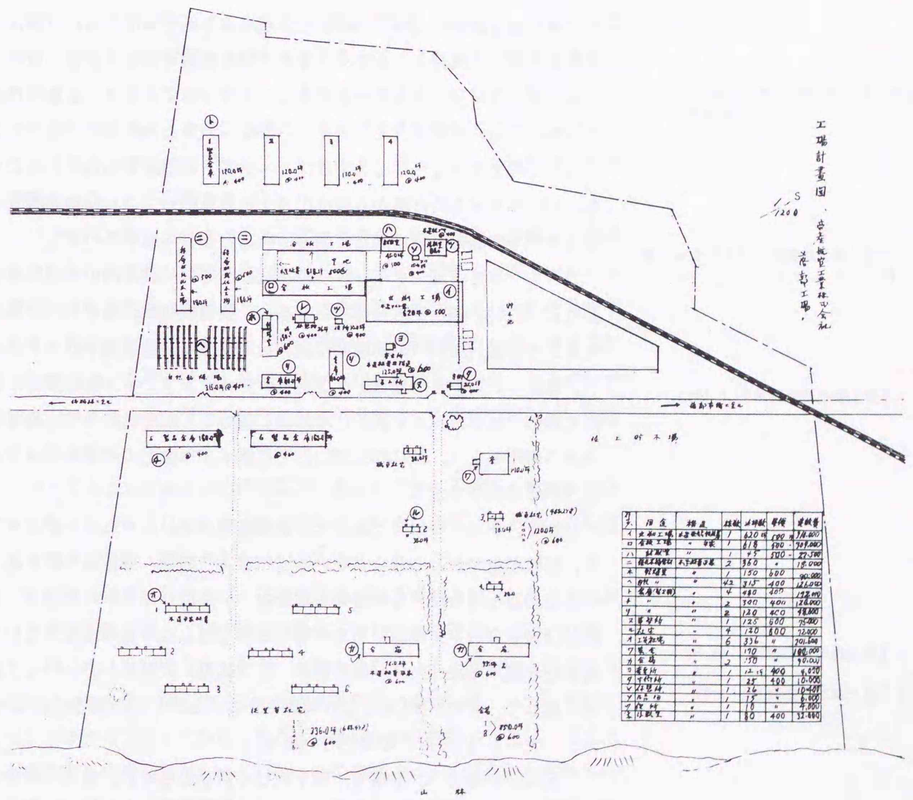


図12-6-9　帝産航空落部工場計画図

第13章　田上義也の作風と建築観

13-1　田上義也と雪国的造型

第10章から第12章にかけて、田上義也の作品活動を大きく住宅作品と住宅以外の作品とにわけて考察し、作品全体では1920年代と1930年代との作風に大きな変化のあることを指摘した。つまり、20年代にはライト風の影響が大きいのに対し、30年代には「雪国的造型」というキーワードを基盤に、ライト風から離脱する自己様式確立への姿勢が明確に表れているのである。

1929年に出版された『芸術学研究第一輯』(1929.12.1)では、東京郊外の外山邸(1929年、**10-7-2**参照)の外観写真を例示しながら、「彼はライトから多くの精神を学んでゐますが、師の模倣ではなく、むしろライトから受けた純日本的な精神を捉えようと努力してゐます」と説明が添えられている。田上自身も、ライトの影響を肯定しながらも、ライトの作風をそのままコピーするのではなく、ライトの精神を土台にしながらも、むしろライトの作風から抜け出すことを意識しつつ、積雪寒冷地に適した建築作品の創造に向けて努力したことを自ら認めている[1]。

こうしたライト的スタイルからの離脱の萌芽は、渡道前の大竹虎雄別邸(1922年)の外観などにも認められるし、渡道後初の作品ともいえるバチェラー学園(1924年)の初期案には、全面連窓による「硝子のファサード」[2]意匠やピロティーなど、インターナショナルスタイルを意識した意匠も認められる。ライト風の住宅作品と並行して創造された片流れ屋根住宅の習作もまた、「雪国的造型」住宅を模索する過程の形態表現のひとつとみることができる。

しかし、ライトやコルビュジェの建築形態をいかにそっくり型どっても、新興理論の新しそうな衣をいかにつけようとも、模倣は空疎であり、生活に必要な用を離れては意味をなさない。生活にピタリと呼吸し、必然的関係を育むフォルムであるべき[3]とする田上は、さらに北方という地域性を強く意識した。「国際建築。組立家屋。定型化。」[4]といった風潮に対して、それらは「南方より吹き寄する」[4]ものとし、国際性(アンチナショナール)に対しても否定的である。

「凡(〃)ゆる村や、部落や、町が新しく創り出される。新しい炭山が発見される。凡(〃)ゆる施設が、学校が、都市計画が、全て新しき意図に表現される。新鮮に充ちてゐる郷土」[4]である北海道を舞台に、建築は

1：『田上義也建築抄』(らいらっく書房、1966.5.1) p.45

2：『田上義也建築畫集』 p.28

3：『田上義也建築畫集』 pp.5、6

4：『田上義也建築畫集』 p.22

魂を生き生きと衝動し、オーガニックインテグラルとしての組立である[5]とし、「北方こそ新しき世界の根元となるであろう」[4]との意気込みで、「雪国的造型」は意識されたのである。そこには、ライトからの教えである「日本人は日本の民族精神や自然風土に適した建築を作るべき」[6]という思想が反映しており、当然、住宅以外の作品創造上でも常にこの意図は意識されたと思われる。

田上の意図する「雪国的造型」は、単純で力強い屋根、軽快な構造、防寒的であること、直射日光配給への配慮から多量のガラスのファサードの必要性、海水に浮かぶ船のようにスガモリと吹雪と寒気に対するデリケートな防御、そして大木を倒すような大風、山のような雪の吹溜り、零下30度の切られるような寒気に対抗するべく豪健にして知的な形態であることなど[7]を挙げている。

具体的な表現方法として、住宅では１、２階を通して立つ南面の柱型、この柱型から北側に葺きおろす屋根表現、垂直なはしご窓など、高さや垂直性を強調し、南面には大きなガラス開口が採用された。

住宅以外の作品でも、近水ホテル(**12-4-2**参照)で述べたように、暴風、吹雪、寒気などの雪国の条件を防御する上で、それまでの頑丈な壁で包む造型は「光線を否定するものであって却って反対な効果を生む」[8]とし、ガラス窓で埋め尽くす外観は雪国建築に対する新解釈である[8]とした。この解釈が1930年代の作品に見られるモダニズムデザイン展開の大きな原動力ともなった印象を受ける。

1930年代における田上の作風の変化はまた、作品活動の変化とも無縁ではなかった。それまでの住宅設計活動の割合と逆転し、市街地内の商業建築や郊外の観光ホテルなど、時代の風潮を適切にとらえた作品が多く見られるようになった。そこでは前述の「雪国的造型」が第１目標であったものの、表現手段としてはコルビュジェ的なものから、インターナショナルスタイル、アール・デコなどのデザイン要素まで積極的に展開されている。

ル・コルビュジェが日本の建築界で最も注目される外国人建築家となるのは、前述した(**10-6**)ように1929年頃といわれるが、田上義也の蔵書にもコルビュジェ関係のものが少なくなかった。

戦前のものではたとえば、工学博士前川国男訳／ル・コルビュジェ著『今日の装飾芸術』(現代建築文叢第五編)(構成社書房，1930.10.18)を、1932年２月14日付けで訳者から謹呈されている。同書は、同日付の前川からの書簡の別便で送られてきたもので、書簡には、いつぞやレイモンド事務所で御目にかかったこと、今度弘前で鉄筋コンクリート造の小事務所を依頼されたため、いくつかの事項について教示いただきたい旨書かれている。質問事項として、１陸屋根と防水排水につき積雪に対する特別の施設および注意すべき点、２内樋の可否、３井戸ポンプ水槽

5：『田上義也建築畫集』 p.8

6：「社同人の弟子屈紀行【六】」(田上義也スクラップブック「釧路新聞」(日付不明))

7：『田上義也建築畫集』 p.52

8：「社同人の弟子屈紀行【七】」(前掲「釧路新聞」)

に対する注意、４水洗便所についての意見と適当な簡単な衛生設備の有無、５積雪時に対する出入口の設備のほか、経験上気付いた点の教示を求めている。どのような返事か知るべくもないが、雪国的造型を求めた田上は、おそらく懇切丁寧に自己の経験をしたためたに違いない。と同時に、以前から注目していたコルビュジェに親しむ機会のひとつであったとも想像される。

もちろんこうしたさまざまな情報が、単なる模倣で終わることがなかったことはいうまでもない。ひとつひとつが田上流の表現として不可欠なものとして吟味された結果である。

ホテル建築にみられる艦船デザインも、近水ホテルで田上が述べるように、「珍奇をてらったのではなく、一切の装飾や無駄を大胆に削り、しかもホテルとしての合理的実用性に基いて短純化し機能化した結果が、必然的に船の形態に帰結した」[9]ものであった。

9：「社同人の弟子屈紀行【四】」(前掲「釧路新聞」)

市街地内の新しい建築であるカフェーや喫茶店などの風俗建築や商業建築の設計にも積極的に関わった田上は、商業建築のファサードデザインを宣伝媒体の一つと捉え、既存の建築物に表装のみ施したり、ファサードのみモダニズムデザインとするなど、看板建築ともいうべき書き割り表現を導入することによって、より斬新な正面意匠を展開することができた。

書き割り表現にはＲＣ造風の表現も見られた。代表作である日本基督教会札幌北一条教会(1927、11-3参照)では、ＲＣ造と鉄骨小屋組の設計から木造に変更された点にふれたが、1930年代の作品には一見ＲＣ造の表現ながら、実は木造が多い。基本設計ではＲＣ造でありながら、施主の経済力や当時の経済状況が実現を許さなかったものと思われるが、独自の作風を模索し、インターナショナルスタイルからコルビュジェ的表現、表現主義など、様々なデザインソースを意識的に展開した田上にとってＲＣによる表現は是非とも必要なものであったのだろう。木造に変更しても、時に張りぼてであったり、時に書き割り表現によって当初のイメージを追及した作品は多い。函館毎日新聞(1932年)のほか、一連の艦船デザインモチーフによるホテル建築や紀文茶屋(1932年)、パリジャンクラブ(1933年)などは、その好例といえそうである。

もうひとつＲＣ造的な表現に付加された意匠として、ガラス張りの螺旋階段をあげることができる。外観に露出させたこの階段は、紀文茶屋、パリジャンクラブなどの華やかなカフェー建築や石狩海濱ホテル（1936年)、網走観光ホテル（同年)などのホテル建築でも展開され、田上の1930年代の建築スタイルの主要な要素の一つでもあった。螺旋階段の採用などには、コルビュジェの影響も深いと筆者は想像するが、本論ではそれを検証するだけの材料を揃えることはできず、今後の課題として残された。ここでは倉田邸(1930年代)や北見郷土館(1936年)などの螺旋階段

が、サヴォア邸(1931年)の螺旋階段を彷彿とさせる点だけを指摘しておきたい。

以上みてきたように、田上義也は、北海道という活動の舞台を得て、雪国の過酷な自然風土に適した建築を求め、軽快な商業デザインから身近な住宅に至るまで、常に「北」を意識した。同時に建築はあたかも風呂敷のように正直に生活内容を表現するものでなければならぬこと、各自のもつ個性や生活を如何に正直に造型的に表現するかということにも腐心した。自身の設計の根元にはライトの教えや影響があることを認めながらも、当初からライトからの脱却を意識し、自己様式の確立への過程であった。その過程には、コルビュジェのほか当時の様々な建築思潮や建築スタイルへのゆらぎも認められるが、自己様式の一つの到達点が「雪国的造型」であったといえよう。

13-2　著作に見られる建築観

田上義也が戦前期に残した著作として、３回にわたる建築展のうち保存されているパンフレット２点(1925、1930)や『芸術学研究　第一輯』(1929)、『同　第二輯』(1930)、『同　第四輯』(1930)に連載の「建築論」、『田上義也建築畫集』(1931)などをあげることができる。建築展のパンフレットおよび『田上義也建築畫集』については第９章でふれており、また『芸術学研究』中の「建築論」は、内容が整理されて『田上義也建築畫集』中の建築論や各作品解説と共通部分が多いのであらためてとりあげることはさけ、当時の新聞に寄稿した４記事をとりあげ、田上の建築観の一端にふれてみよう。

ここでとりあげる寄稿記事は、田上義也が所蔵していたスクラップブックに収録されていたものである。筆者が寄託されている田上の初期のスクラップブックには、田上の寄稿や彼の作品について報じた記事、雑誌の切り抜きなどがＡ-４版125ページにスクラップされている。1921年頃から35年頃までの記事が多いが、記事掲載の年月日はほとんど未記入である。原則として元記事にあたったが、確認できないものもあった。

北国にふさはしい建築一考察

北海タイムス1929年10月25日、26日、30日の３回にわたる連載記事で、同年夏大雪山で開催の夏期大学での講演をまとめたものである。「雪国的造型」に結実する田上の建築観をまだ未成熟ながらみることができるが、第3回田上義也建築作品展覧會(1930)のパンフレットで展開した「建

築小論」と共通する個所が多く見られる。この講演での考察を基に翌年の建築小論はまとめられたものと思われる。

北国の建築を考えるには「必然が必然性を帯びる」ということを前提とすることをはじめに述べ、人体における５官はどこにも不必要なものがないように、一切が実用であり、うそのない、とってつけたような装飾もない、目的が必然性を持つことは優美である。飛行機の均整のとれた形態は、翼を支える針金１本にも力学と重量から割り出されて全体を支持する目的の結果であり、20世紀が機械美をたたえるのもうそではないと肯定する。

北国建築で最も重要な事項として、以下の７項目を挙げている。

１．雪国の生活に即した建築様式の根本的改革
２．構造革命
３．間取（家と土地の関係）
４．防寒と通風
５．採光（直射日光の配給）
６．庭園
７．建築保護（修復掃除）

１の建築様式の改革では、民族性と風土環境が独自の形態を生むように、雪国には雪国独自の様式が創作されるべきこと。暖国の中途半端な焼き直しや欧米の写真帖の模倣に決して北方生活の解決はありえないこと。２の構造では、単純で軽い構造が大切で、自重をできるだけ軽減して外力（雪や風圧）に耐えること、樹木のような弾力を有した強さをもつこと。大きな寸法の材料を使用しても構造が強くなることはなく、却って自重が増して危険であること。強い構造とは材料のマスではなく力の経済的組立にあること、冬の北海道の自然は家を虐げるので堅牢な構造を期したいと述べる。構造の項では、さらに具体的に基礎、壁、屋根などを取り上げているが、防寒的処方も含まれているので、本論では４の項でふれる。

３の間取では、雪国のプランニングは土地と緊密な関係から生まれるので一概にはいえないが、できるだけ単純にすること、細かい小さな部屋を多く作らず茶の間を大きく12畳以上とって一家団欒の目的を兼ねること。茶の間を中心に部屋を配置する、いわゆる居間中心型が防寒保温の目的上適切で、屋根も単純ですむので構造的に堅牢になること。各部屋の個性を尊重し、部屋の性質を十二分に活かしながらしかも全体と融合していること。客間や玄関を重視するあまり台所や居室が隅の方に押しやられるような、どこかに犠牲を強いるようなプランニングは生活をのびのびと自由な気持にさせない。土地に即して間取が生まれ、間取に即して外形ができる。よい間取は必ずよい形を教え、自然な形、正しい間取の根本は土地であるなど、敷地と間取と外観の関係についてふれた。

４では、防寒を外部的防寒と内部的防寒とに分類し、前者は建築本体の武装、後者は暖房器具による方法であるが、後者の発達に比して建築本体の防寒法はまったく遅れているとする。また、通風（換気）も防寒と同時におこなわれるべき重大な問題とした。

外部的防寒法については、記事では構造の項で述べているが、本論ではここで扱おう。

基礎と床下周りでは、床板を２重にすることや建築紙を床下に張ることも重要であるが、さらに有効なのは、煉瓦、コンクリート、石造の基礎を地下１尺ほどの深さにして外と床下を完全に遮断し、床下に乾燥砂厚さ２寸以上を敷き込むこと。

外壁では、空隙にオガクズをいれたり、下見板下地の二重三重張り化、二重窓の採用、堅牢な窓枠採用による在来の額縁の廃棄を唱える。

従来の屋根は薄過ぎ、野地板の張り方が粗末であるため、暖気が逃げる。床板のようにしっかり張った野地板の上に建築紙を張り、垂木を架け渡しオガクズを１寸以上屋根全体に敷き込み、さらに板を張って鉄板をかけて屋根を分厚くする方法など、外部的防寒装置の必要性を説いた。

５採光では、いかに建築本体を防寒的にし、人工的に暖房器具で室内温度を高めても、太陽光線には及ぶべくもないとし、事情の許すかぎり東南にできるだけ広い窓を多く採ることを推奨した。半年雪に埋もれる北国では、直射日光浴が不足し、白血球の製造や骨の発育に不可欠な紫外線を浴びることが乏しいのでできるだけ窓を解放して直射日光を浴びることが必要であること。東南を切妻にして亀甲型の大欄間をつける意匠は、重窓(かさねまど)と称して、高い大空から直接紫外線を導入するためのものである。

６では、建築とは単に家を建てることだけでなく外構の必要性を説き、「半歳の春と夏を自然の草木や花によって私共の庭園の中で一冬中を雪と戦った建築を飾ることは欠かしてはならない」とした。

７では建築のメンテナンスの必要性を説き、一冬を超した雪解け後には充分な手入れを必要とし、10月旬には冬に向けての保護を必要とする。建築にも愛情が不可欠とするのであった。

結論として、雪国では基礎を固め、窓を厳重にし、「何丈の雪層にも嵐にもびくともせない」建築を作ることが急務であること、北方建築は北国人にとって大海を航してゆく船の羅針盤の如きもので、雪原や吹雪の中に建つ建築は船のように周到な準備が必要である。建築は生活に即して生まれ、環境は個性を形成する。雄大で強烈な自然を基盤に、北の特色を生かした、健康で暖かい建築が生まれるなら、北方は必ずやユートピアになるであろうとし、自分は建築によってわれらの生命を守ることを考えたいと結んだ。

雪国の小住宅

小樽新聞に掲載された記事のスクラップである。掲載年月日は不詳であるが、『北のまれびと』年譜に掲載の1937年「札幌市主催雪国的小住宅」講演のレジュメと考えられる。

主として「洋服生活者に適応した」雪国の小住宅の１例をあげて、平面構成、防寒配慮などについて具体的に解説したものである。掲載年月日が不詳のため、前述の「北国にふさはしい建築一考察」の発表時期との関係は不明であるが、内容的には「北国にふさはしい建築一考察」と重複する点も多く、前項を補完するものとして興味深い。

具体例の説明に入る前に、雪国の住宅についてのまじめな研究が台頭してきた当時の風潮を喜ばしい傾向と評価した上で、住宅本来が持つべき要求がまだいくらも生かされておらず、また体系づけられていないことを危惧している。新たに建設される住宅が、安直に便利至上にのみ関心を持った結果、肉付きのない骨と皮のような味気ない家であったり、陳腐な装飾の小技に堕落したり全体が見かけ倒しに飾り立てられた厚化粧の住宅であったり、全てに控えめで現状維持の住宅に相当の価格の家具調度を飾るなどアンバランスな住宅など、生活者の要求自身があまりにも漫然とし、全体と部分の関係を捉えることがないことも憂いている。

建築に対する考え方として、「所有慾を強く持たないで友達のことを親身になって考へるやうなつもりで間取を考へ、庭を考へ、居間や台所といふ様に「助け合った考へ方」が大切である。」とし、その理由として「建築は有機的なまとまりをもってゐるから」とする。

例にあげた小住宅は、夫婦、子供２人、手伝いの計５人が生活し、１階17.5坪、中２階6.5坪、他に物置１坪、計25坪の規模である。

平面図(図13-2-1)が挿入され、北東側玄関から玄関広間(２畳)、南東にカギの手の大窓をつけた応接を兼ねた居間（10畳、図では12畳となっているがここでは本文に準じた）と円形ペチカをはさんで食堂、台所、物置、勝手口、と連なり、北西に風呂、便所、女中室が配置されている。居間からの階段は、中２階の寝室(10畳)に通じ、居間は吹抜、中２階はペチカの左右にガラス戸を建てこみ、階下との親しみやすいつながりのほか、変化と奥行が演出される。

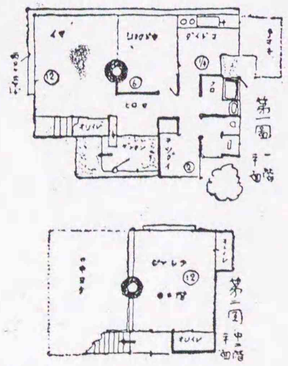


図13-2-1　雪国の小住宅平面図

平面を第一要素(台所風呂便所)、第二要素(茶の間玄関女中)、第三要素(居間と寝室)に分割し、第二要素である茶の間(食堂)によって、第一、第三を結びつけた形であり、「交通と静止」、「集合、離散」を最も自然に素直に表現した形態となっている。「家の重要なる機能として台所を基調とする主婦の生活」舞台として第一要素を与えることによって、清潔で、健康で、自由な動線が実現される。

換気と採暖の調節を、図13-2-2に示しているが、室内を完全に保温するために、床下冷気を遮断し、屋根裏に透過する暖気をふさぎ、にごった空気は煙突から逃し、新鮮な空気を導入する。居間は、東から「清澄な光線」、南から「暖かき温度を大硝子の表面ファサードから豊かにそそ」がれ、その光は食堂にも流れ、中２階を間接に柔らかく照らす。

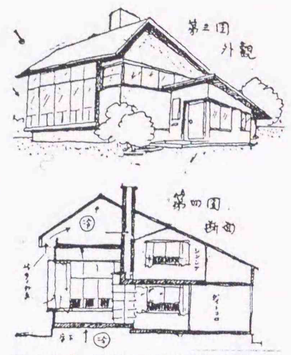


図13-2-2　雪国の小住宅外観と断面

保温に対する配慮として、天井と床についてふれるが、天井では屋根裏と室内との完全遮断を実現することにより、スガモリは防ぐことができ、屋根は単に積雪を支えるのみでよいので、緩勾配でも平屋根でもよいことになる。従来のスガモリ防止のための二重屋根や急勾配の配慮は必要なくなる。床は天井と同様に、「マルソイドルーフィングかその他建築紙一号品位のもの」で覆い、上床を張って床下と遮断する。畳の上に直接ふとんを敷くよりは、寝台を利用する方が、床面から１尺５寸ほど高いのでストーブの暖気も適度にあたたかく、床面と寝台の間に空気層があるので床の冷気を絶つことができると、寝台の効能を力説する。

記事はここで終わっている。（上）とあるので、連続記事があったかもしれないが、この記事だけに限っても、プランニングで重要視した点や雪国的造型で意識した暖かい室内空間の実現といったテーマに対する田上の真摯な姿勢がよく表れている。

建築家の見た一九三〇年の旭川

1930年12月25日掲載の寄稿文と推定される。北海タイムス旭川版ないし旭川新聞掲載記事と思われるが、現在のところ特定できていない。

1930年代には住宅にくらべて商業建築などの作品が多く見られるようになったことは第12章でふれたが、この時期旭川での作品活動も目についた。1928年東武別邸、1929年アボQ、佐々木座、1930年岩城新聞店、1931年ヤマニ、斉藤家累代之墓、1933年パリジャンクラブなどがあげられる。市街地内のカフェーや喫茶店など都市のモダニズムを代表する施設をてがける田上が、都市構成や都市施設、都市交通などに深い関心を示すのもこのころの特徴である。

小論は大きく５つに分節され、交通、カフェー、病院、モニュメント、高山植物をキーワードに当時の旭川の都市的状況をとらえている。

交通の要としての鉄道のほか、都市交通の急テンポなスピードに寄与する「モーターカー」が、旭川を律動的なリズムの街にしていることを指摘し、またカフェー激増の理由を「不景気の合理的反映は逆に本能的衝動を強く発映する」ものとするが、さらに北方のカフェーに特異な機能があるとする。つまりアルコールと人間性の欲情の春風であることは認めるものの、半歳の冬の厳しさに閉ざされた魂に春のような解放感、充足感を与えてくれる場であるとした。

また市中に多く存在する病院を、旭川の活動力を反映するものであり、

「最も近代的イデオロギーの上に凡ゆる現代的建築的要素を充実せしむ可き使命に立つもの」とし、いくつかの病院建築を具体的にあげて、形態、色彩などについて批評しながらも、都市的要素のひとつとして建築を理解し設計が進められている点を評価している。

さらに自身設計の斉藤家墓碑などのある神居町の墓地を、時代表徴の新しい概念を有する「フレッシュなるモニュメント」としてとらえるなど、新しいジャンルへの言及もみられる。

最後の高山植物に関しては、キーワードとしてやや唐突に思われるが、自身の設計姿勢をたとえたものであった。過酷な自然状況の中で可憐な花を咲かせる高山植物を「自らの小を持してこの山嶺」を美しく蔽う姿を、北国での自身の設計行為に重ねあわせ、微力ながら雪国建築を創造していく決意が語られていると思われるのである。

帯廣都市計画一考察

十勝毎日新聞1933年５月16日掲載の記事である。十勝毎日新聞社および十勝川温泉ホテル社長である林豊州社長と帯広の都市構造や交通網について歓談したことを基に寄稿したものであった。上述の旭川で展開した都市論をさらに発展させたものともいえる。

帯広の位置、地形を語るのに、日本列島から導入し、星形の島北海道は、弓なりにやわらかく彎曲する日本列島の「頭脳」にあたること。樺太をカンザシ、東北を胸、東京はヘソ、関西は胃、中国は腰、九州を健やかに伸びた双脚と表現し、日本を水平上に美しく伏せた姿と見た。「脳髄」にあたる雪国を人間精神の水晶にたとえ、旭川都市論で展開したと同様に高山植物の精神が脈うっているとした。

石狩岳とヌプリに囲まれ、然別湖を源流とする十勝川の流域に作られた帯広の幾何学的な都市構造を、「整然たる幾何学的「ユニットライン」が原野の区画を示し畑を整へ、村落を造り、町に体系を与え」たと説明し、街のアウトラインの基線のひとつが、鉄道、車道、人道であるとした。さらに都市交通の中心として、「モーターカー」と自転車と「トラック」を挙げている点が、十勝の物資の集散地である帯広の特徴をよく示している。

格子状の都市区画に対して、鉄道と火防線の斜めの軸の「タスキ」は、見事な「ムーブマン」を生じ、街にリズムを与えていると評した。

目を転じて、市街地建築を観察し、白壁の多い街で、瓦屋根の土蔵式建物が「ポツン、ポツン」と見えるが、色調が消極的で各々の建物が渾然として不統一である、「雪国の建築として色調に対する「コントラスト」がグット大胆にほしい」、「形体に立体性がほしい」、「力強さもほしい」と感想を述べている。

この稿でも、郷土に寄せる正しい理解と検討を基盤に、独自の雪国建築の必要性を唱え、「薄っぺらな国際主義的宣伝建築」では厳しい自然には対抗できぬとし、雪国的造型意図の展開によって「水々しい体型を発映せしむるなら」、帯広は「新しき雪国的前衛都市」となると断言する。

カフェーについての節は、旭川とまったく同じであるが、さらに病院とともに廉売市場に目を向けている。病院についてもまた旭川と共通するが、「内容に比して外部構成に色彩的錯覚と形体の統一に対する視覚的線の不統一が惜い」とし、「病院はなるべく一色に包まれた方が単純で美しいと思ふ」「都市美学の為めにも形体構成に対する形式的ハアクター(ママ)」を強調して欲しいと注文をつけ、都市美学を意識した単体デザインの必要性を意識している。

表通りから中通に突き抜ける廉売市場の存在には興味を引かれたようで、経済機構における公共的建造物として特異な存在で、将来性を予見しており、スカイライトによる採光計画はおもしろいが、通風と採光はまだ不完全であること、商品配列の混乱が商品価値を低めていることなどを指摘している。

当時の帯広市は、建築ブームであったのだろうか。「公私大小の建築群は修繕と改築と新装にハンマーのヒビキを立て(ママ)」と記述しており、「タウンプランニング」の修正も部分的に実施されていたらしい。そうした活気を背景に、大産業都市として展開する可能性を予見しているが、それを「拓殖一昔日の汗と血と希望と夢の還元である」とし、稿を田上得意の詩的なフレーズで結んでいる。

「「オビヒロ」は前進する！／レアリズムの街／マテリアリズムの街／オビヒロ市！／更に君はこれにクンストを加へないか」

以上４つの寄稿文を見てきた。そこに一貫して流れる主張は、北の建築家として活動する田上が求めた「雪国的造型」意図の確立である。田上の作品活動は、頑固なまで、北方的なるもの、北海道的なるもの、地域性を意識した制作過程であったといえよう。

結章　北海道建築界と二人のフリーアーキテクト
―マックス・ヒンデルと田上義也―

結章　北海道建築界と二人のフリーアーキテクト
—マックス・ヒンデルと田上義也—

本論文では、第１部で示したような大正・昭和前期の北海道建築界の大きなうねりを背景として、民間建築を対象に作品活動をすすめたM.ヒンデルと田上義也という二人のフリーアーキテクトについて、これまでほとんど知られていなかった作品および著作活動の多くの部分を明らかにした。

各人が北海道建築界に与えた直接的な影響を詳細に検討するまでには至らなかったが、それを論じる前に作品や業績についての資料の集積がまず必要と思われ、また当時の建築界の状況を十分ふまえた上でなければ検討できないと考え、本論文ではまずこの点を明らかにすることを主目的とした。

第１章で述べたように、当時の北海道では、大規模な商業施設や主要な教会建築、函館の防火都市づくりに貢献した中村鎮などのように、道外の建築家や建築事務所によって生み出されることが多かった(1-2)し、北海道建築界をリードしていったのは、北海道庁や主要都市の営繕技術者達であった(1-5)。

二人の建築家の活動範囲が彼らの活動の隙間を埋めるような、住宅建築や民間建築、宗教建築などであったことは、やむを得ないことであったと思われるが、逆にかえって建築家と市民との距離を近づけたようにも思えるのである。

市民生活に新しい息吹を与えるきっかけともなった博覧会(第２章)をはじめ、市街地の繁栄や発展は、郊外住宅地の整備をも誘引したが、札幌でも大正期以降中心市街地の周辺に新興住宅地が開発され、中流住宅の建設に拍車をかけた。しゃれた洋風の外観をもつ意匠的にも平面計画的にも目をひくそれらの住宅は、文化住宅とかモダン住宅と呼ばれ、多くは大学教官、医師といった知識人や実業家たちの住宅であった。施主自ら設計したり、従来通り棟梁がてがけたもののほか、建築家が積極的に関わるようにもなった(第３章)。

ヒンデルは自邸を手始めに、柳、山崎、大野など北海道帝国大学医学部教官の住宅を設計し(5-1)、田上義也は、北海道帝国大学教官のほか、政治家、医者、実業家、音楽家など、広い範囲の施主層に受け入れられていった。

ヨーロッパの近代建築思潮を身につけた37歳のヒンデルが来道するのは1924年、ライトに師事した24歳の田上義也の来道も１年前の1923年である。しかも二人は1924年からほぼ同時に札幌で設計活動を開始している。ヒンデルは1927年に活動の拠点を横浜に移すので、両者の活動が重なりあうのはわずか３年半ほどとはいえ、お互いに良きライバルとして意識したであろうし、新聞に報じられる両者の住宅作品をはじめ各々の寄稿記事や講演は、建築家の職能、存在を一般市民に鮮烈にアピールしたことは想像に難くない。

生前の田上義也からの聞き取りでは、両者は顔を会わせたことも、お互いに声をかけたこともなかったというが、一度だけ日本基督教会北一条教会の基本設計で両者が競ったことが知られている。結局田上義也の設計となるが、北海道におけるプロフェッショナルな建築家の活動期を飾る記念碑的な作品であった(11-3)。

さて両者が北海道建築界に残した足跡はどのようなものであったろうか。本論文では、大半を作品個々の解説などに費やした結果、この点については多くの課題を積み残したように思われるが、改めて両者に共通する足跡について評価しておきたい。なお両者の経歴と主要作品の対照年譜を表14に示し、再考の資料とした。

(a)建築家の職能についての啓蒙

ヒンデルは北海タイムスの投稿記事(1925年)で、建築に関する計画と監督は建築家にまかせよ、建築問題の解決は建築家に一任せよ、建築家の社会的地位は医師、弁護士などと並び法律で保証されるべきものであるなど、自信をもって断言した(7-1)。

いっぽう田上義也も『正しい建築』(小樽新聞1925年)で、多くの設計者が注文主の要求をあまりにも無節操に受け入れていることに警告を発し、施主の要求を受け入れるかどうかは建築家側にまかされていること、医師の措置にたいして素人が口出しできぬと同じく、建築も建築家のみがあづかる独舞台であると言及している(第９章)。

(b)北海道向き建築の提案

ヒンデルは、『雪國に相応しい新しい建築』（北海タイムス1925.10.30、31）で、日本の伝統的建築は北海道の冬には適さぬため、屋根を簡単で急傾斜のものとし、南からの採光を考慮するなど、北国の設計条件をいれた北海道向きの建築を創るべきことを唱えた(4-2)。こけら張り16角形平面の自邸は、「北海道建築にひとつのヒントを与えるもの」(同上北海タイムス）として評価されたし、外壁のこけら張りや鉄板張りなどの防寒処理やフレアード屋根は、独特のヒンデルスタイルを生み出した（7-3)。北国の建築には北国の建築家が適っているとも述べている(7-1)。

同様に田上の提案した「雪国的造型」も、単純で力強い屋根、軽快な

構造、採光を考えたガラスファサード、スガモリと吹雪と寒気に対する防寒性など、北国の建築条件に適した表現形態の追及であり、自己様式確立への過程でもあった(10-4、13-1、13-2)。

(C)安易な国際様式傾倒への警鐘

ヒンデルは、1925年代の日本建築界における「コンクリートの函が頻に建つ」(北海タイムス1925.10.30,31)傾向を「洵に心ない業」(同)とし、「何故日本建築のいい所をとり入れて日本独特の建築を造らないか」(同)と「模倣好きの日本人に対して」(同)疑問を投げかけ、風土伝統を意識した創作活動をすべきという立場をとった(第７章)。

田上もまた、ライトの教えである「日本の民族精神や自然風土に適した建築を作るべき」という思想を根底に、国際性（アンチナショナール）に対しては否定的であった。「国際建築。組立家屋。定型化。」(『田上義也建築畫集』)を、「南方から吹き寄するもの」(同)とし、「ライトやコルビュジェの建築形態をいかにそっくり型どっても、新興理論の新しい衣を身に着けようとも、模倣は空疎であり、用を離れては意味をなさないとし、安易な国際様式の模倣を戒めている(第13章)。

(d)設計ジャンルの多様性

二人の建築家がてがけた作品の中には、それまでの建築家がほとんど対象にしなかったようなジャンルもみられる。いずれも市民生活に潤いを与えるスポーツやリゾート施設、カフェーや喫茶店などの小規模商業施設などであった。

ヒンデルのスキーヒュッテ３部作は、自身の小屋を含め、札幌近郊の山々をつなぐツアースキーの拠点として市民に広く親しまれ、1994年に再建されたパラダイスを除く二つは現在も北海道大学管理のもとで利用されている(5-4)。

田上の設計活動が、1930年代になると住宅よりも市街地建築の割合が増加し、市街地内の風俗建築や商業建築、郊外の観光ホテルに至るまで多彩であったことは、第12、13章でも述べた。既存建築のファサード改修からファサードのみ斬新な意匠とする看板建築的な表現すら採用した手法は時として「絵しか書けない建築家」として建築技術者から白眼視される(遠藤明久『北海道住宅史話』（下）p.129)ことにもなったようであるが、田上にとっては商業建築におけるファサードデザインの重要性の主張以外の何物でもなかったように思われる。田上とてこうした表現は実施段階での不本意なものであったことは、遺存する設計図の当初案からも類推できるが、モダンを志向する施主にとって、気軽に相談にのってくれる建築家像というものが浮かび上がってくる。こうしたフットワークの軽さがまた、様々な建築ジャンルに携わる機会を増幅していったものと思われる。

各々の建築観や作風については、第７章、第13章で述べているので重複は控えるが、両者の共通した主張の多くが、現代の北海道建築界が抱えている問題にも通じる内容を有している点で興味深い。

なおヒンデルについては、横浜時代の作品や晩年のレーゲンにおける活動についての資料収集や詳細な検討が残された。田上義也については、雪国的造型をキーワードに作品を分類し多くの図面史料を基礎に北海道における作品の全容についてほぼ把握しえたものの、いくつかの作品にみられる兄弟子遠藤新との影響関係などについては、論究の余地が残された。いずれも今後の課題としておきたい。

表14　ヒンデルと田上義也の経歴と主要作品年譜

	ヒ　ン　デ　ル	田　上　義　也
1887	1.20 チューリッヒで誕生	
1899		5.5 栃木県で誕生
1903	【16】下級ギムナジウム終了 BISCHEF & WANDELE(チューリッヒ),SCHMIDT & ROSSET(チロン)で製図訓練	
1907	【20】チューリッヒ,ロールシャッハ,アーラウ,クール,サンモリッツ,ミュンヘン,ベルリン,パリ,ブリュッセルなど放浪(～1914)	
1913		【14】青山学院中等科入学
1914	【27】スイス軍技術士官として兵役(～1916)	
1915		【16】早稲田工手学校入学
1916	【29】設計事務所開設(チューリッヒ)	【17】早稲田工手学校卒業　逓信大臣官房営繕課勤務
1918		【19】帝国ホテル現場事務所入所
1919		【20】12.31 F.L.ライト来日　1921.4.帰国
1922		【23】大竹虎雄別邸(東京)
1923	(関東大震災)	【24】11.28 札幌到着　ジョン・バチェラー博士宅に寄留
1924	【37】1月マルセイユ出発，3月横浜到着 自邸「東光園円い家」(札幌) 札幌藤高等女学校(札幌)＊	【25】道北、道東、国後島遍歴、北海道定住を決意 岩内白水会主催提琴独奏会開催 北光トリオ結成演奏会開催 バチェラー学園(札幌)
1925	【38】柳壮一邸(札幌)，山崎春雄邸(札幌)，大野精七邸(札幌) 自邸(2次,札幌)，林邸(札幌) 聖フランシスコ修道院(札幌)，日本基督教会札幌教会案(札幌) 「新しく家を建てる人々へ」北海タイムスへ投稿	【26】4.26-27 田上義也建築作品展覧会(札幌時計台) 第二回北光トリオ大演奏会(小樽) 高田治作邸(小樽)＊,フナミヤ食堂(小樽)
1926	【39】奥田歯科診療所(札幌)，テイネパラダイスヒュッテ(札幌) 北星女学校女教師館(札幌)＊，フランシスコ会神学校(札幌) ジュネーブ国際聯盟会館競技設計案	【27】百円の家(西村真琴宅改築)(札幌)，関場不二彦邸(札幌) 関場博士の観海荘(銭函)，水野眼鏡店別荘(銭函) 田上自邸･アトリエ(札幌)，北大五十年祭記念装飾(札幌) 国産振興博覧会豊平館食堂(札幌)，同野外舞台(札幌) 札幌第一農園Ⅰ(札幌)，札幌市医師会館(札幌)
1927	【40】北星女学校寄宿舎(札幌)，札幌藤高等女学校寄宿舎(札幌) 天使の聖母トラピスチヌ修道院(函館)＊ ヘルヴェチアヒュッテ(札幌)＊，ノートン邸(札幌) 新潟天主公教会献堂式(新潟)＊ 横浜市本牧満坂へ移転,事務所開設 横浜自邸(現ゾンデルホフ邸)(横浜)＊	【28】小熊捍邸(現道銀円山クラブ)(札幌)＊，金子実邸(札幌) 坂牛直太郎邸(小樽)＊，坂敏男邸(銭函)＊ 白雲山荘(札幌) 日本基督協会北一条教会(札幌)，愛隣館(札幌)
1928	【41】旭シルク㈱住宅(司令官ハウス)(横浜) 熱田天主公教会(名古屋) 北星女学校校舎案(札幌) 秩父宮殿下ヒュッテ(現空沼小屋)(札幌)＊ ＯＡＧ(ドイツ東洋文化研究協会)入会	【29】第2回田上義也建築作品展(札幌今井記念館) 吉田角次邸(札幌)＊，小川隆子邸(札幌)，城生邸(札幌) 上田久寿子邸(現MOA小樽布教所)(小樽)＊，櫻田邸(小樽) 佐田作郎邸(現小熊徹邸)(函館)＊ 東武別邸(旭川)，小川義雄邸(和寒) 亀屋本店(札幌)，松岡農場事務所(和寒)
1929	【42】"Japanische Bausitten"(日本の建築風習)講演(ＯＡＧ) 岐阜天主公教会(岐阜) 北星女学校校舎(札幌)	【30】『芸術学研究 第一輯』に「建築論」発表 「北国にふさはしい建築一考察」(北海タイムス10.25,26,30) 鬼窪重作邸(札幌)＊，亀屋支店(札幌) 里美勝蔵邸･アトリエ(東京)，外山卯三郎邸(東京) アボQ(旭川)，佐々木座(旭川)
1930	【43】岐阜天主公教会附属幼稚園(岐阜) ＯＡＧ会館改築(東京)	【31】第3回田上義也建築作品展(4.25-29 札幌丸井記念館，7.24-28 旭川今井呉服店)開催 「建築家の見た一九三〇年の旭川」(新聞名不詳)発表 『芸術学研究 第二輯』『同 第四輯』に「建築論」発表 バチェラー翁に捧ぐる田上義也提琴独奏会(札幌豊平館) 後藤惣作邸(札幌)，安倍信明邸(札幌)，城下良平邸(札幌)＊ 中島温泉(札幌)，札幌第一農園Ⅱ(札幌) 幌西巡査派出所(札幌)，円山郵便局(札幌)，富貴堂改修(札幌) マリヤ手芸店改修(札幌)，岩城新聞店(旭川)，ヤマニ(旭川) 浅野炭山病院(沼田)，斎藤家墓(旭川)
1931	【44】恵方町天主公教会(名古屋) 聖母病院(東京)＊ 金沢天主公教会(金沢聖霊病院附属聖堂)(金沢)＊	【32】『田上義也建築畫集』出版 太秦康光邸(札幌)，山下紅療院(札幌)，カフェー三条(札幌) 国産振興北海道拓殖博覧会野外舞台(札幌)

	ヒ　ン　デ　ル	田　上　義　也
1932	【45】南山中学校本館(名古屋)＊，上智大学(現1号館，東京)＊ 三本木天主公教会(十和田カトリック教会)(十和田)＊ 宇都宮天主公教会(カトリック松が峰教会)(宇都宮)＊	【33】小笠原商店卸部(札幌)，紀文茶屋(札幌) 近水ホテル(弟子屈)，キャピタル(釧路) 函館毎日新聞社(函館)
1933	【46】ドイツ学園(東京)	【34】「帯廣都市計画一考察」(十勝毎日新聞5.16) パリジャンクラブ(旭川)，千秋庵帯広支店(帯広) 池田病院(札幌)，十勝川温泉ホテル(音更)，白雲荘(鹿追)
1934	【47】聖母病院第2期増築工事(東京) 聖母病院看護室第2期工事(同上)	【35】相内邸(現大谷哲也商店事務所)(札幌)＊，志田病院(帯広) 帯広観月園(音更)，共同魚菜市場(釧路)，札幌正教会計画案 石井莫のための円形野外舞台
1935	【48】マックス.ヒンデル建築事務所解散	【36】宇喜代(岩内)
1936	【49】ＯＡＧ退会	【37】網走観光ホテル(網走)，北見郷土館(現網走博物館)＊
1937		【38】札幌市主催「雪国的小住宅」講演 北ノ王鉱山(生田原)，石狩海濱ホテル(石狩)
1938		【39】「バチェラー翁に捧ぐ音楽の夕べ」(札幌公会堂)
1939	【52】ヘルベチアヒュッテ(札幌)行	【40】青森文芸館，弘前新光キネマ，能代国民劇場 盛岡国民劇場
1940	【53】ドイツへ出発	【41】仏舎利本殿計画案
1944		【45】帝産航空株式会社取締役工場長(～1947.3) 帝産航空落部工場(八雲)
1947		【48】帝産オート会社取締役札幌支店長(～1951.3)
1951		【52】田上建築制作事務所再開
1963	【76】1月末レーゲンにて没	【64】北海道総合開発功労者知事賞，北海道総合開発道民大会賞
1965		【66】北海道文化賞(芸術部門)
1966		【67】日本学士会アカデミア賞
1970		【71】北海道国際文化協会会長，北海道ユースホステル協会会長
1971		【72】勲四等瑞宝賞
1977		【78】札幌市芸術文化功労賞
1978		【79】北海道開発功労賞
1982		【83】北海道新聞社会文化賞
1991		【92】8.17 札幌にて没

注記：【　】内は年齢、＊は現存作品。1951年以降の田上義也の作品については省略し主な受賞関係のみとした。

注記：【　】内は年齢、＊は現存作品。1951年以降の田上義也の作品については省略し主な受賞関係のみとした。

図版出典および所蔵一覧

第１章

図1-1-1　『建築図案　文化生活と其の住宅』表紙（庄司博喜蔵）
図1-1-2　『大札幌案内』表紙（北海道大学北方資料室蔵）
図1-1-3　今井百貨店本店(1926)（『丸井今井百年のあゆみ』）
図1-1-4　今井百貨店本店(1937)（『丸井今井百年のあゆみ』）
図1-1-5　今井呉服店(1916)（『丸井今井百年のあゆみ』）
図1-1-6　三越札幌支店(1932)（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-1-7　松竹座（『大札幌案内』(1931.7.20)）
図1-1-8　寶塋座（遠藤明久提供）
図1-1-9　カフェー三條（田上家蔵、筆者寄託）
図1-1-10 亀屋（田上家蔵、筆者寄託）

図1-2-1　札幌組合教会(『建築世界』第８巻第２号(1914.2.10)）
図1-2-2　札幌組合教会立面図(『建築世界』第８巻第２号）
図1-2-3　札幌組合教会平面図(『建築世界』第８巻第２号）
図1-2-4　札幌独立基督教会(1885)（札幌独立キリスト教会蔵）
図1-2-5　札幌独立基督教会新会堂(1922)（札幌独立キリスト教会蔵）
図1-2-6　北立面図(1970年実測)（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-2-7　東立面図(1970年実測)（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-2-8　平面図（札幌独立キリスト教会蔵）

図1-3-1　中村式Ｌ字型ブロック（『早稲田建築学報 第二号』1923.7）
図1-3-2　中村式ブロックの床スラブ(『中村鎮遺稿』(1936.9.5)）
図1-3-3　中村式ブロックの壁の構造例(『中村鎮遺稿』(1936.9.5)）
図1-3-4　錦輝館(『早稲田建築学報 第二号』(1923.7)）
図1-3-5　北海道拓殖銀行滝川支店（北海道大学建築史研究室蔵）

図1-4-1　東本願寺函館別院（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-4-2　函館市立図書館本館（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-4-3　蓬莱アパート（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-4-4　蓬莱アパート平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-4-5　大火記念慰霊堂（北海道大学建築史研究室蔵）

図1-5-1　札幌グランドホテル(札幌グランドホテル蔵）
図1-5-2　札幌警察署(『札幌市写真帖』(1936.)）
図1-5-3　札幌グランドホテル平面図（田上家蔵、角寄託）
図1-5-4　小樽組合基督教会（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-5-5　小樽組合基督教会設計図(玄関部詳細)（日本基督教団小樽公園通教会）
図1-5-6　日本メソジスト函館教会立面図(1982年実測)（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-5-7　日本メソジスト函館教会第４代会堂(1909年)(『日本メソジスト函館教会五十年記念史』(1923.)）
図1-5-8　北海道大学理学部本館（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-5-9　石井喜助(石井家蔵）

図1-6-1　旧英国領事館(1960年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-6-2　在英資料〔図212〕(配置図)（Public Record Office蔵）
図1-6-3　在英資料〔図213〕(平面図)（Public Record Office蔵）
図1-6-4　在英資料〔図215〕(立面図)（Public Record Office蔵）
図1-6-5　北側復原立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-6-6　西側復原立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-6-7　主棟断面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-6-8　復原平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図1-6-9　札幌カトリック北一条教会（北海道大学建築史研究室蔵）

第２章

図2-1-1　北海道物産共進会(1886、根室県)（『北海道物産共進會報告』(1886.2)北海道大学北方資料室蔵）
図2-1-2　北海道物産共進会(1892、札幌)第一館（『北海道物産共進會報告』(1892.12.28)北海道大学北方資料室蔵）
図2-1-3　北海道物産共進会(1906、札幌)会場配置図(『北海道物産共進會事務及審査報告』(1907.9.23)北海道大学北方資料室蔵）
図2-1-4　北海道物産共進会(1906)第一館（『北海道物産共進會事務及審査報告』(1907.9.23)北海道大学北方資料室蔵）
図2-2-1　開道五十年記念博第一会場（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』(1920.3.30)北海道大学北方資料室蔵）

図2-2-2　開道五十年記念博第一会場配置図（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』掲載配置図より作成)(北海道大学建築史研究室蔵）
図2-2-3　水産館（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）
図2-2-4　北極塔（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）
図2-2-5　林業及鉱業館（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）
図2-2-6　園芸館（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）
図2-2-7　拓殖教育衛生館(『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）
図2-2-8　第二会場工業館(『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）
図2-2-9　農家住宅模範家屋（『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』）

図2-3-1　国産振興博覧会ポスター（『国産振興博覧會誌』(1927.12.20)北海道大学北方資料室蔵）
図2-3-2　札幌駅前歓迎門（『国産振興博覧會誌』）
図2-3-3　国産振興博覧会第一会場配置図（『国産振興博覧會誌』掲載配置図に加筆)(北海道大学建築史研究室蔵）
図2-3-4　第一府県館（『国産振興博覧會誌』）
図2-3-5　機械館（『国産振興博覧會誌』）
図2-3-6　参考館（『国産振興博覧會誌』）
図2-3-7　歴史館（『国産振興博覧會誌』）
図2-3-8　旭川上川館（『国産振興博覧會誌』）

図2-4-1　国産振興北海道拓殖博覧会ポスター（『国産振興北海道拓殖博覧會誌』(1932.8.20)北海道大学北方資料室蔵）
図2-4-2　国産振興北海道博覧会第一会場全景
（正面中央府県館、右は西府県館に続き特設館、左は東府県館および特設館）（『国産振興北海道拓殖博覧會誌』）
図2-4-3　国産振興北海道博覧会第一会場配置図（『国産振興北海道拓殖博覧會誌』掲載配置図より作成）
図2-4-4　中央府県館立面図（『国産振興北海道拓殖博覧會誌』）
図2-4-5　演芸館正面図（『国産振興北海道拓殖博覧會誌』）
図2-4-6　音楽堂正面図（『国産振興北海道拓殖博覧會誌』）

図2-5-1　小樽海港博覧会ポスター(『小樽海港博覧會誌』(1932.4.10)北海道大学北方資料室蔵）
図2-5-2　小樽海港博覧会位置図（筆者作成）
図2-5-3　小樽海港博覧会配置図（『小樽海港博覧會誌』掲載配置図より作成）
図2-5-4　小樽海港博覧会正面前広場の景（『小樽海港博覧會誌』）
図2-5-5　正門正面図（『小樽海港博覧會誌』）
図2-5-6　水族館・海事海運館・産業貿易館正面図（『小樽海港博覧會誌』）

図2-6-1　北海道大博覧会会場配置図(一部筆者加筆)(小樽市蔵）
図2-6-2　公園会場正門（北海道大学建築史研究室蔵）
図2-6-3　産業本館（北海道大学建築史研究室蔵）
図2-6-4　北海道館と飛躍塔（北海道大学建築史研究室蔵）
図2-6-5　迎賓館（小樽市博物館蔵）
図2-6-6　海岸会場正門（北海道大学建築史研究室蔵）
図2-6-7　国防館（北海道大学建築史研究室蔵）

第３章

図3-1-1　山鼻屯田兵村(北海道行政資料課蔵、『札幌歴史地図(明治編)』より転載）
図3-1-2　山鼻屯田兵村 一戸あたりの敷地（岡田彩子『山鼻・円山住宅地の成立－大正期札幌の都市形成に関する研究－』1985

年度北海道大学建築工学科卒業論文）
図3-1-3　山鼻町豫定道路一覧圖（北海道立図書館蔵、『札幌歴史地図（大正編）』より転載）
図3-1-4　札幌郡藻岩村大字圓山道路網圖（1922年）（三関ミン蔵）
図3-1-5　円山振興会住宅勧誘宣伝ポスター（1925年頃）（三関ミン蔵）
図3-1-6　「札幌温泉と理想的住宅地」記事（北海タイムス、1928.7.14）
図3-1-7　札幌温泉（札幌市資料館蔵）

図3-2-1　小田良治邸（『建築写真類聚 住宅の外観 その二』北海道大学附属図書館蔵）
図3-2-2　亀井邸（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-2-3　杉野目邸西正面（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-2-4　杉野目邸西立面図（杉野目家蔵設計図より作成）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-2-5　杉野目邸南立面図（1/200）（杉野目家蔵設計図より作成）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-2-6　杉野目邸平面図（1/200）（杉野目家蔵設計図より作成）（北海道大学建築史研究室蔵）

図3-3-1　旧有島武郎邸（1985年撮影）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-3-2　竣工当初の有島邸玄関（神尾行三蔵）
図3-3-3　1957年以前の有島邸（『森本厚吉』1957）
図3-3-4　有島武郎邸復原西立面図（1/300）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-3-5　有島邸復原平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-3-6　有島邸復原南立面図（1/300）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-3-7　中央10畳 北面（神尾行三蔵）
図3-3-8　中央10畳 南面（神尾行三蔵）
図3-3-9　食堂（神尾行三蔵）
図3-3-10　武郎のストーブのスケッチ（「手帳七」『有島武郎全集 第12巻』筑摩書房、1982）
図3-3-11　武郎の住宅スケッチ（「手帳十四」『有島武郎全集 第15巻』筑摩書房、1986）
図3-3-12　古藤邸北東外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-3-13　古藤邸平面図（1/200）（大島家蔵『古藤氏住宅設計図』）
図3-3-14　古藤邸東立面図（1/200）（『古藤氏住宅設計図』より作成）
図3-3-15　古藤邸南立面図（1/200）（『古藤氏住宅設計図』より作成）
図3-3-16　古藤邸西立面図（1/200）（『古藤氏住宅設計図』より作成）
図3-3-17　古藤邸北立面図（1/200）（『古藤氏住宅設計図』より作成）
図3-3-18　応接室の円形ペチカ（筆者蔵）
図3-3-19　大原邸南側外観（北海道大学住居地計画学講座蔵）
図3-3-20　大原邸応接室（筆者蔵）
図3-3-21　大原邸応接室、温室（筆者蔵）
図3-3-22　大原邸食堂（筆者蔵）

図3-4-1　庄司宅北西外観（1993年撮影）（筆者蔵）
図3-4-2　庄司宅復原平面図（1/200）（筆者蔵）
図3-4-3　富慳別邸南西外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-4-4　富慳別邸平面図（1/200）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-4-5　斎藤邸東外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-4-6　斎藤邸平面図（1/200）（北海道工業大学住谷研究室調査図面より作成）（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-4-7　旧大島邸南外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-4-8　旧大島邸平面図（大島家蔵『大島氏住宅之平面図』より作成）（北海道大学建築史研究室蔵）

図3-5-1　旧出納家住宅南西外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-5-2　旧出納家住宅復原略平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-5-3　旧出納家住宅南立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-5-4　旧出納家住宅東立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-5-5　旧出納家住宅現状平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図3-5-6　『高倉さんの楽しい農業生活設計』表紙（北海道大学北方資料室蔵）
図3-5-7　高倉左輔住宅南外観（『高倉さんの楽しい農業生活設計』1953.1.20）
図3-5-8　高倉左輔住宅平面図（『高倉さんの楽しい農業生活設計』）

第４章

図4-1-1　来札当時（1924年）のヒンデル（岡部洋子蔵）
図4-1-2　ヒンデル家家系図（ハンス・ヒンデル作成）（筆者蔵）

図4-2-1　東光園円い家（右から1人おいてヒンデル、アニー夫人）（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-2　札幌藤高等女学校（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-3　自邸（二次）（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-4　柳邸（山崎家蔵）
図4-2-5　山崎邸（山崎家蔵）
図4-2-6　奥田歯科診療所（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-7　パラダイスヒュッテ（筆者蔵）
図4-2-8　ジュネーブ国際聯盟会館競技設計案（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-9　札幌藤高等女学校寄宿舎（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-10　ノートン記念館（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-2-11　ヘルヴェチアヒュッテ（山崎家蔵）

図4-3-1　横浜自邸（筆者蔵）
図4-3-2　新潟カトリック教会絵葉書（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-3-3　旭シルク㈱住宅（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-3-4　上智大学（ハンス・ヒンデル蔵）
図4-3-5　南山中学校本館（南山学園蔵）
図4-3-6　宇都宮天主公教会（吉田勝夫蔵）
図4-3-7　ＯＡＧ会館（ヒンデルのサイン入りスケッチ）（"Die Geschichte der ＯＡＧ―1873 bis 1980―"ＯＡＧ蔵）
図4-3-8　ドイツ学園（東京横浜ドイツ学園蔵）
図4-3-9　ヒンデルが川喜田一雄に与えた「證」（川喜田敬忠蔵）
図4-3-10　雛日前（1939年）のヒンデル（山崎英男蔵）
図4-3-11　レーゲンの共同墓地（1984.9撮影）（筆者蔵）
図4-3-12　ヒンデルの墓碑（1984.9撮影）（筆者蔵）

第５章

図5-1-1　東光園円い家西側外観（竣工当初）（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-2　円い家北側外観（1950年代撮影）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-1-3　東光園円い家平面図（「北海タイムス 1925.10.31」より作成）
図5-1-4　二号官舎西側外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-1-5　二号官舎正面図（1/200）
図5-1-6　二号官舎平面図（原設計図をトレース）（北海道大学施設部蔵）
図5-1-7　二号官舎断面詳細図（原設計図をトレース）（北海道大学施設部蔵）
図5-1-8　柳邸南東外観（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-9　Baujournal表紙（柳福子蔵）
図5-1-10　柳邸 Baujournalの内容の一部（柳福子蔵）
図5-1-11　柳邸平面図（Baujournalより作成）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-1-12　山崎邸北側外観（山崎家蔵）
図5-1-13　山崎邸設計図（山崎家蔵）
図5-1-14　山崎邸平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-1-15　山崎邸玄関ホール（山崎家蔵）
図5-1-16　山崎邸居間南西面（山崎家蔵）
図5-1-17　山崎邸居間北面と神棚（山崎家蔵）
図5-1-18　山崎邸居間のオーフェン（山崎家蔵）
図5-1-19　山崎家所蔵椅子（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-1-20　グブラー所有椅子（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-1-21　林邸（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-22　大野邸（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-23　ノートン記念館南西側外観（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-24　ノートン記念館玄関部（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-25　ノートン記念館居間（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-1-26　ノートン記念館東側外観（右側がミス・ノートン）（日本聖公会北海道教区蔵）

図5-2-1　1933年頃の札幌藤高等女学校（札幌藤学園蔵）

図5-2-2　焼失した藤高等女学校本館（札幌藤学園蔵）
図5-2-3　復旧工事中の本館（札幌藤学園蔵）
図5-2-4　復旧工事終了（1932年）の本館（札幌藤学園蔵）
図5-2-5　創建時の本館（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-2-6　札幌藤高等女学校南立面図（1981年調査時）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-7　札幌藤高等女学校本館復原断面図（西翼部）（1/300）（一部推定）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-8　札幌藤高等女学校本館復原平面図（1/500）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-9　北星女学校配置図（『北星学校々舎新築設計建物配置図』（北星学園蔵）より作成）
図5-2-10　ヴォーリズ案教師館立面図（図5-2-10～13は原図を反転した）（北星学園蔵）
図5-2-11　ヴォーリズ案寄宿舎立面図（北星学園蔵）
図5-2-12　ヴォーリズ案教師館平面図（北星学園蔵）
図5-2-13　ヴォーリズ案寄宿舎平面図（北星学園蔵）
図5-2-14　女教師館西側外観（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-2-15　女教師館居間（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-2-16　女教師館居間・食堂（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-2-17　女教師館復原平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-18　女教師館南立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-19　女教師館南北断面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-20　寄宿舎西側外観中央部（1974年撮影）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-2-21　寄宿舎計画案正面図（資料7）（北星学園蔵）
図5-2-22　寄宿舎東側外観（北星学園目でみる100年 1887―1987』1987.9.15）
図5-2-23　寄宿舎側面、背面設計図（資料8）（北星学園蔵）
図5-2-24　寄宿舎1階平面図（資料1）（左）（北星学園蔵）
図5-2-25　寄宿舎2階平面図（資料2）（右上）（北星学園蔵）
図5-2-26　寄宿舎3階平面図（資料3）（右下）（北星学園蔵）
図5-2-27　北星女学校（左から寄宿舎、女教師館、校舎）（北星学園蔵）
図5-2-28　北星女学校校舎（『北星学園目でみる100年 1887―1987』）
図5-2-29　A案正面図（資料A-5）（北星学園蔵）
図5-2-30　A案側面図（資料A-7）（北星学園蔵）
図5-2-31　A案1階平面図（資料A-2）（北星学園蔵）
図5-2-32　A案2階平面図（資料A-3）（北星学園蔵）
図5-2-33　A案3階平面図（資料A-4）（北星学園蔵）
図5-2-34　B案立面図（資料B-3）（北星学園蔵）
図5-2-35　B案平面図（北星学園蔵）
図5-2-36　正面図スケッチ（資料C-1）（北星学園蔵）
図5-2-37　C案立面図（資料C-3）（北星学園蔵）
図5-2-38　C案断面図（北星学園蔵）
図5-2-39　校舎間取図（『北星学園百年史 資料編』1990.10.15）

図5-3-1　札幌北1東3仮修道院（『光明附録』No.1173 1957.1.13）
図5-3-2　札幌北15条修道院（『光明附録』No.1174 1957.1.20）
図5-3-3　フランシスコ修道院北西外観（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-3-4　神学校（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-3-5　復原北立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-3-6　復原東立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-3-7　復原断面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-3-8　復原平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-3-9　礼拝堂・祭壇（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-3-10　トラピスチヌ修道院（1960年撮影）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-3-11　トラピスチヌ修道院平面図 下から1、2、3階（『はこだての文化財』1971.12.20）
図5-3-12　トラピスチヌ修道院聖堂部断面（図面T1）（天使の聖母トラピスチヌ修道院蔵）
図5-3-13　トラピスチヌ修道院聖堂内部詳細図（図面T2）（天使の聖母トラピスチヌ修道院蔵）
図5-3-14　トラピスチヌ修道院断面（図面T3）（天使の聖母トラピスチヌ修道院蔵）
図5-3-15　トラピスチヌ修道院中庭（左側正面棟、中央聖堂棟は1927年、右側棟は1930年増築）（絵葉書『天使園』）
図5-3-16　新潟カトリック教会聖堂絵葉書（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-3-17　ライネルス苑の葉書（南山学園蔵）
図5-3-18　新潟カトリック教会遠景（左からヴィアンネ舘、教区長舘、聖堂）（カトリック新潟教会蔵）
図5-3-19　新潟カトリック教会聖堂内陣（戦前期）（カトリック新潟教会蔵）
図5-3-20　新潟カトリック教会配置図（1980年頃）（カトリック新潟教会蔵配置図より作成）
図5-3-21　新潟カトリック教会設計図（図面N1）（カトリック新潟教会蔵）
図5-3-22　新潟カトリック教会堂設計図 ①塔及階段詳細図（図面N4）（カトリック新潟教会蔵）
図5-3-23　新潟カトリック教会正面（1982年撮影）（筆者蔵）

図5-4-1　建設中のパラダイスヒュッテ（酒井隆太郎蔵『酒井隆吉アルバム』）
図5-4-2　1951年ころのパラダイスヒュッテ（『Berg Hütte と Ski Hütte に就いて』北海道大学建築工学科1951年度卒業論文）
図5-4-3　パラダイスヒュッテ正面図（1/150）（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-4　パラダイスヒュッテ設計図（札幌市冬のスキー博物館蔵）
図5-4-5　改修後のヘルヴェチアヒュッテ（1986年撮影）（筆者蔵）
図5-4-6　建設中のヘルヴェチアヒュッテ（『山とスキー』No.77 1927.12.1）
図5-4-7　ヘルヴェチアヒュッテ平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-8　ヘルヴェチアヒュッテ東立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-9　ヘルヴェチアヒュッテ断面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-10　秩父宮殿下ヒュッテ（Berg Hütte と Ski Hütte に就いて』北海道大学建築工学科1951年度卒業論文）
図5-4-11　秩父宮殿下ヒュッテ設計図（『山とスキー』第89号1929.1.1）
図5-4-12　秩父宮殿下ヒュッテ平面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-13　秩父宮殿下ヒュッテ北立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-14　秩父宮殿下ヒュッテ南立面図（北海道大学建築史研究室蔵）
図5-4-15　秩父宮殿下ヒュッテ断面図（北海道大学建築史研究室蔵）

図5-5-1　ジュネーブ国際聯盟会館ル・コルビュジェ案（Charles Jenks "Le Corbusier and the Tragic View of Architecture" 1973）
図5-5-2　ジュネーブ国際聯盟会館ヒンデル案 透視図（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-5-3　ジュネーブ国際聯盟会館ヒンデル案 配置図（ハンス・ヒンデル蔵）
図5-5-4　387号ネノー、フレーゲンハイメル案（『建築雑誌』1927.11）
図5-5-5　117号ブロツギ、ヴソカロ、フランツチ案（『建築雑誌』1927.11）
図5-5-6　143号ルフェーブル案（『建築雑誌』1927.11）
図5-5-7　431号ヴァゴー案（『建築雑誌』1927.11）

第６章

図6-1-1　旧ヒンデル邸南東側外観（筆者蔵）
図6-1-2　旧ヒンデル邸居間南東面（筆者蔵）
図6-1-3　旧ヒンデル邸居間北面（筆者蔵）
図6-1-4　旧ヒンデル邸居間天井隅部（筆者蔵）
図6-1-5　旧ヒンデル邸小屋裏（バランスウェイトの玉石がみられる）（筆者蔵）
図6-1-6　竣工後まもないヒンデル邸（ハンス・ヒンデル蔵）
図6-1-7　旭シルク㈱住宅外観（ハンス・ヒンデル蔵）
図6-1-8　旭シルク㈱住宅遠望（ハンス・ヒンデル蔵）

図6-2-1　熱田天主公教会 聖堂と司祭館（『素顔の名古屋教区』1968.10.15）
図6-2-2　熱田天主公教会聖堂袖廊部（1936年頃か）（南山学園蔵）
図6-2-3　岐阜天主公教会 聖堂と司祭館（神言神学院蔵）
図6-2-4　岐阜天主公教会聖堂 内陣と側廊（神言神学院蔵）
図6-2-5　岐阜天主公教会外観（神言神学院蔵）

図6-2-6　岐阜天主公教会聖堂内部（神言神学院蔵）
図6-2-7　岐阜天主公教会司祭館（神言神学院蔵）
図6-2-8　恵方町教会南側遠望（玄関・鐘楼は1969年増築）（恵方町教会蔵）
図6-2-9　竣工時の御器所天主公教会（『恵方の鐘 第19』1967）
図6-2-10　1974年以前の恵方町教会（畔柳武司提供）
図6-2-11　御器所天主公教会1階平面図（畔柳武司提供）
図6-2-12　御器所天主公教会2階平面図（畔柳武司提供）
図6-2-13　御器所天主公教会北立面図（畔柳武司提供）
図6-2-14　御器所天主公教会南立面図（畔柳武司提供）
図6-2-15　御器所天主公教会西立面図（畔柳武司提供）
図6-2-16　金沢聖霊修道院三位一体聖堂南東外観（南山学園蔵）
図6-2-17　三位一体聖堂内部（竣工時）（金沢聖霊修道院蔵）
図6-2-18　1941年以降の三位一体聖堂内陣（カトリック新潟教会蔵）
図6-2-19　金沢三位一体聖堂東立面図(1/400 原図を反転)(金沢聖霊修道院蔵)
図6-2-20　金沢三位一体聖堂北立面図(1/400 原図を反転)(金沢聖霊修道院蔵)
図6-2-21　金沢三位一体聖堂平面図(1/400 原図を反転)(金沢聖霊修道院蔵)
図6-2-22　創建時の三本木天主公教会（カトリック十和田教会蔵）
図6-2-23　創建時の三本木天主公教会内部（カトリック十和田教会蔵）
図6-2-24　三本木天主公教会設計図（カトリック十和田教会蔵）
図6-2-25　カトリック十和田教会正面現状（筆者蔵）
図6-2-26　カトリック十和田教会内部現状（筆者蔵）
図6-2-27　カトリック松が峰教会正面外観(1979年撮影)（筆者蔵）
図6-2-28　宇都宮天主公教会創建時正面外観（山根寛吉蔵）
図6-2-29　宇都宮天主公教会創建時北側外観（山根寛吉蔵）
図6-2-30　宇都宮天主公教会創建時内部（吉田博蔵）
図6-2-31　宇都宮天主公教会正面図(東面)(1/800)（北海道大学建築史研究室蔵）
図6-2-32　宇都宮天主公教会背面図(西面)(1/800)（北海道大学建築史研究室蔵）
図6-2-33　宇都宮天主公教会側面図(南面)(1/800)（北海道大学建築史研究室蔵）
図6-2-34　宇都宮天主公教会平面図(1/800)（北海道大学建築史研究室蔵）

図6-3-1　聖母病院正面外観（『聖母病院50年のあゆみ』1982.12.21）
図6-3-2　病院本館とベネディクト病棟（『聖母病院50年のあゆみ』）
図6-3-3　Ａ１．1929年設計平面図（聖母病院蔵）
図6-3-4　Ｃ１．1934年複写平面図（聖母病院蔵）
図6-3-5　立面図（聖母病院蔵）
図6-3-6　外来待合室（『聖母病院50年のあゆみ』）
図6-3-7　西棟西面南側のバルコニーと外階段（『聖母病院50年のあゆみ』）

図6-4-1　南山中学校校舎南正面（南山学園蔵）
図6-4-2　南山中学校教室前廊下（北海道大学建築史研究室蔵）
図6-4-3　南山中学校配置図（南山学園蔵）
図6-4-4　南山中学校校舎南立面図（南山学園蔵）
図6-4-5　南山中学校校舎北立面図（南山学園蔵）
図6-4-6　南山中学校校舎矩計図（南山学園蔵設計図を浄書）
図6-4-7　南山中学校校舎平面図(1、2階)（南山学園蔵）
図6-4-8　中学校付属教師住宅平面・断面図（南山学園蔵設計図を浄書）
図6-4-9　南山中学校全体計画透視図（『南山学園の歩み』1964.11.1）

図6-5-1　1914年校舎（『上智大学創立貳拾五年記念』1938.11.1）
図6-5-2　ヤン・レツェル建築事務所設計1914年校舎立面図（『建築世界』第8巻第1号口絵 1914.1）
図6-5-3　1932年新校舎（ハンス・ヒンデル蔵）
図6-5-4　1系案正面図(資料1-1)（上智大学蔵）
図6-5-5　1系案屋根伏断面図(資料1-3)（上智大学蔵）
図6-5-6　2系案1階平面スケッチ(資料2-2)（上智大学蔵）
図6-5-7　2系案立面スケッチ(資料2-4)（上智大学蔵）
図6-5-8　3系案1階平面スケッチ(資料3-1)（上智大学蔵）
図6-5-9　4-1案平面スケッチ（上智大学蔵）
図6-5-10　5系案1階平面図(資料5-1)（上智大学蔵）
図6-5-11　6系案1階平面図(資料6-2)（上智大学蔵）
図6-5-12　6系案南立面図(資料6-6)（上智大学蔵）
図6-5-13　6系案主棟断面・中庭立面図(資料6-9)（上智大学蔵）
図6-5-14　7系案透視図(資料7-6)（上智大学蔵）
図6-5-15　8系案1階平面図(資料8-2)（上智大学蔵）
図6-5-16　8系案2階平面図(資料8-3)（上智大学蔵）
図6-5-17　8系案3階平面図(資料8-4)（上智大学蔵）
図6-5-18　8系案4階平面図(資料8-5)（上智大学蔵）
図6-5-19　8系案側面図、南立面図(資料8-8)（上智大学蔵）
図6-5-20　9系案北立面図(資料9-2)（上智大学蔵）
図6-5-21　表玄関外観（山崎家蔵）
図6-5-22　屋上工事中の景（川喜田敬忠蔵）
図6-5-23　1階西翼事務室前ホール（山崎家蔵）
図6-5-24　2階西翼講堂（山崎家蔵）

第８章

図8-1-1　早稲田時代の田上義也（田上家蔵、筆者寄託）
図8-2-1　大竹邸(『婦人画報』1922.7)
図8-3-1　バチェラー邸(1972年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図8-3-2　北光トリオ第2回演奏会プログラム（田上家蔵、筆者寄託）
図8-3-3　小熊邸（田上家蔵、筆者寄託）
図8-3-4　田上自邸アトリエ（田上家蔵、筆者寄託）
図8-3-5　豊平館食堂（田上家蔵、筆者寄託）
図8-3-6　北海道帝国大学創基五十周年記念式典式場スケッチ（田上家蔵、筆者寄託）
図8-3-7　北海道帝国大学創基五十周年記念式典会場（『北海道帝国大学創基五十年記念写真』1927.3.25）
図8-3-8　田上義也提琴独奏会ポスター（田上家蔵、筆者寄託）
図8-3-9　1930年代の田上義也（田上家蔵、筆者寄託）

第９章

図9-1-1　第1回建築作品展ポスター（田上家蔵、筆者寄託）
図9-1-2　第1回建築作品展パンフレット表紙（田上家蔵、筆者寄託）
図9-1-3　バチェラー学園（田上家蔵、筆者寄託）
図9-1-4　アパートメントハウスの基本設計（田上家蔵、筆者寄託）
図9-1-5　北都に建つホテル（田上家蔵、筆者寄託）
図9-1-6　高松邸（田上家蔵、筆者寄託）
図9-1-7　高田邸（田上家蔵、筆者寄託）
図9-2-1　第3回建築作品展ポスター（田上家蔵、筆者寄託）
図9-2-2　第3回建築作品展旭川展の案内記事（田上家蔵、筆者寄託）
図9-2-3　第3回建築作品展目録（田上家蔵、筆者寄託）
図9-3-1　『田上義也建築畫集』の箱表紙（田上家蔵、筆者寄託）
図9-3-2　『田上建築畫集』宣伝ポスター（田上家蔵、筆者寄託）

第10章

図10-1-1　大竹別邸南東外観（『建築画報』Vol.13 1922.11）
図10-1-2　1966年頃の大竹別邸（長島孝一蔵）
図10-1-3　大竹別邸玄関（『婦人画報』No.201 1922.7）
図10-1-4　食堂（『建築画報』Vol.13 1922.11）

図10-2-1　高田邸スケッチ（田上家蔵、筆者寄託）
図10-2-2　高田邸平面図（『田上義也建築畫集』1931.2.23）
図10-2-3　高田邸(1983年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）

図10-3-1　高松邸計画案（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-2　関場邸バルコン(左手は応接間)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-3　関場邸食堂内部（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-4　関場邸プロムナード(正面は応接間入口)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-5　関場邸スケッチ(『田上義也建築畫集』)
図10-3-6　関場邸1、2階平面図(『田上義也建築畫集』)

図10-3-7　田上自邸北側正面（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-8　田上自邸南東側外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-9　田上自邸エントランス（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-10　田上自邸平面図(『田上義也建築畫集』)
図10-3-11　建設中の小熊邸（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-12　小熊邸南東外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-13　小熊邸応接間南面（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-14　小熊邸応接間北面（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-15　小熊邸平面図（『田上義也建築畫集』）
図10-3-16　坂牛邸北西外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-17　坂牛邸階段（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-18　坂牛邸平面図(『田上義也建築畫集』)
図10-3-19　金子邸平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-20　金子邸南外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-21　金子邸応接間（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-22　坂邸(創建時)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-23　坂邸(1987年撮影)（筆者蔵）
図10-3-24　坂邸居間(1986年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-3-25　坂邸原案(1937.3.10)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-26　坂邸平面図（『田上義也建築畫集』）
図10-3-27　建築中の佐田邸（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-28　佐田邸応接間（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-29　佐田邸平面図（『田上義也建築畫集』）
図10-3-30　佐田邸原案（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-31　佐田邸断面図(台所・食堂)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-32　上田邸南側外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-33　上田邸門塀(住宅は坂牛邸)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-3-34　上田邸塀の田上のサイン（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-3-35　上田邸平面図（『田上義也建築畫集』）
図10-3-36　アパートメントハウスの基本設計（田上家蔵、筆者寄託）

図10-4-1　吉田邸南外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-2　吉田邸設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-3　吉田邸食堂断面図(『吉田角次氏邸新築設計詳細(本玄関、食堂)』)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-4　小川邸（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-5　小川邸平面図(『田上義也建築畫集』)
図10-4-6　小川邸南立面原案（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-7　東武邸南西外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-8　東武邸平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-9　鬼窪邸南側外観(1983年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-4-10　鬼窪邸立面図(左 南面、右 西面)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-11　鬼窪邸平面図(『田上義也建築畫集』)
図10-4-12　鬼窪邸断面矩計図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-13　後藤邸（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-14　後藤邸南立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-4-15　後藤邸平面図（田上家蔵、筆者寄託）

図10-5-1　澤枝邸（田上家蔵、筆者寄託）
図10-5-2　澤枝邸外観、平面（『田上義也建築畫集』）
図10-5-3　櫻田邸外観、平面（『田上義也建築畫集』）
図10-5-4　城下邸南側外観（田上家蔵、筆者寄託）
図10-5-5　城下邸設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-5-6　太秦邸北西外観(1983年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-5-7　太秦邸と小熊邸（太秦家蔵）
図10-5-8　太秦邸設計図（太秦家蔵）

図10-6-1　メゾン・ア・ガルシュ(『芸術學研究第二輯』1930.5.1)
図10-6-2　ステヴァン作小別荘(『芸術學研究第四輯』1930.11.20)
図10-6-3　相内邸南側外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-6-4　相内邸東側外観（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-6-5　相内邸「ヒロエン」（北海道大学建築史研究室蔵）
図10-6-6　相内邸新築設計図(平面・立面図)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-6-7　安部信明邸(1930)（田上家蔵、筆者寄託）
図10-6-8　倉田清純邸平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-6-9　倉田清純邸立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図10-6-10　倉田清純邸断面図（田上家蔵、筆者寄託）

図10-7-1　里美勝蔵邸・アトリエ パース（『田上義也建築畫集』）
図10-7-2　里美勝蔵邸・アトリエ実施案（田上家蔵、筆者寄託）
図10-7-3　里美勝蔵邸・アトリエ 1次案（田上家蔵、筆者寄託）
図10-7-4　外山卯三郎邸外観（『田上義也建築畫集』）
図10-7-5　外山卯三郎邸平面図（『田上義也建築畫集』）
図10-7-6　外山卯三郎邸リヴィングルーム（『田上義也建築畫集』）
図10-7-7　外山卯三郎邸リヴィングルーム・食堂（『田上義也建築畫集』）

第11章

図11-1-1　バチェラー学園寄宿寮（新免克己提供）
図11-1-2　バチェラー学園寄宿寮（仁多見巌蔵）
図11-1-3　バチェラー学園寄宿寮階段室（田上家蔵、筆者寄託）
図11-1-4　田上義也提琴独奏会プログラム（田上家蔵、筆者寄託）
図11-1-5　バチェラー学園パース（田上家蔵、筆者寄託）
図11-1-6　バチェラー学園平面図(『田上義也建築畫集』)

図11-2-1　札幌第一農園Ⅰ(『田上義也建築畫集』)
図11-2-2　札幌市医師会館1階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-3　札幌市医師会館（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-4　札幌市医師会館大会議室シャンデリア（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-5　愛隣館パース(『田上義也建築畫集』)
図11-2-6　『北門建築』表紙（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-7　講堂前のパーゴラから診療所を望む(『北門建築』)
図11-2-8　愛隣館平面図（『田上義也建築畫集』）
図11-2-9　亀屋本店初期計画案（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-10　亀屋本店計画案(1927.3)（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-11　亀屋本店喫茶部設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-12　亀屋本店喫茶部内部パース（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-13　亀屋本店喫茶部断面図（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-14　松岡農場事務所（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-15　小川義雄宅立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図11-2-16　松岡農場事務所設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-1　日本基督教会初代会堂（『創立90周年記念　札幌北一条教会歴史写真集』1985.10.23）
図11-3-2　田上案(一次)（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-3　田上案(二次)（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-4　1927年新会堂正面外観（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-5　会堂木骨小屋組（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-6　新会堂北西外観（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-7　鉄骨小屋組矩計図（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-8　食堂内部とフライングビーム（田上家蔵、筆者寄託）
図11-3-9　平面図（『田上義也建築畫集』）
図11-3-10　解体中の会堂（北海道大学建築史研究室蔵）
図11-3-11　実測正面図(1979年作成)（北海道大学建築史研究室蔵）

第12章

図12-1-1　マリヤ手芸店（マリヤ手芸店蔵）
図12-1-2　富貴堂（富貴堂蔵）
図12-1-3　富貴堂書房改築設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-1-4　札幌第一農園Ⅱ（田上家蔵、筆者寄託）
図12-1-5　岩城新聞店平面、姿図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-1-6　小笠原商店卸部正面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-1-7　千秋庵帯広支店正面・側面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-1　亀屋支店正面外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-2　亀屋支店内部（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-3　亀屋支店1階喫茶部パース（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-4　ヤマニビルディング設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-5　改築前のヤマニ（渡辺義雄提供）
図12-2-6　1930年頃のヤマニ（渡辺義雄提供）
図12-2-7　アボＱ（旭川新聞1929.7.20）
図12-2-8　㈱三條の広告(『大札幌案内1931.7.20)

図12-2-9　カフェー三條外観パース（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-10 キャピタル外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-11 キャピタル玄関（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-12 キャピタル2階食堂（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-13 キャピタル2階食堂（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-14 キャピタル平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-15 紀文茶屋正面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-16 紀文茶屋設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-17 パリジャンクラブ正面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-18 パリジャンクラブ断面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-2-19 宇喜代（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-1　浅野炭鉱病院パース（『田上義也建築畫集』）
図12-3-2　浅野炭鉱病院平面図（『田上義也建築畫集』）
図12-3-3　浅野炭鉱病院設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-4　山下紅療院平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-5　山下紅療院立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-6　池田病院正面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-7　志田病院正面外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-8　志田病院(1955年頃撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図12-3-9　志田病院設計図(平面)（田上家蔵、筆者寄託）
図12-3-10 志田病院設計図(立面)（田上家蔵、筆者寄託）

図12-4-1　中島温泉外観（『田上義也建築畫集』）
図12-4-2　中島温泉パース（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-3　中島温泉新築設計図(階下)（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-4　中島温泉新築設計図(階上)（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-5　近水ホテル正面(北側)外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-6　近水ホテル南東外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-7　近水ホテル別館宴会場内部（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-8　近水ホテル1階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-9　近水ホテル2階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-10 近水ホテル立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-11 近水ホテル別館設計図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-12 十勝川温泉ホテル正面外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-13 十勝川温泉ホテル本館と浴場（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-14 十勝川温泉ホテル立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-15 十勝川温泉ホテル1階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-16 十勝川温泉ホテル2階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-17 網走観光ホテル南西側外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-18 網走観光ホテルパース（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-19 網走観光ホテル平面図(『田上義也建築作品抄』1966.5.1)
図12-4-20 建設中の石狩海濱ホテル（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-21 石狩海濱ホテル正面外観（石狩町蔵）
図12-4-22 石狩海濱ホテル立面図(側面図、正面図)（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-23 石狩海濱ホテル1階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-24 石狩海濱ホテル2階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-4-25 石狩海濱ホテル3階平面図（田上家蔵、筆者寄託）

図12-5-1　佐々木座正面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-2　佐々木座1階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-3　佐々木座2階平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-4　円山郵便局(『田上義也建築畫集』)
図12-5-5　円山郵便局外観(『円山百年史』)
図12-5-6　円山郵便局平面図(『田上義也建築畫集』)
図12-5-7　幌西巡査派出所外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-8　幌西巡査派出所当初案（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-9　函館毎日新聞社立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-10 共同魚菜市場配景図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-11 北見郷土館南西外観（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-12 北見郷土館階段室見上げ(1974年撮影)（北海道大学建築史研究室蔵）
図12-5-13 北見郷土館透視図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-14 北見郷土館平面図(『田上義也建築作品抄』)
図12-5-15 札幌正教会彩色立面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-5-16 札幌正教会設計図（田上家蔵、筆者寄託）

図12-6-1　北ノ王鉱山全景（『生田原町史』1981.3、図中のアルファベットは筆者加筆）
図12-6-2　診療所（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-3　北ノ王鉱山事務所（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-4　北ノ王会館（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-5　北ノ王クラブ初期案(図面の一部割あい)（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-6　北ノ王クラブ平面図（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-7　北ノ王クラブ（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-8　従業員倶楽部（田上家蔵、筆者寄託）
図12-6-9　帝産航空落部工場計画図（田上家蔵、筆者寄託）

第13章

図13-2-1　雪国の小住宅平面（小樽新聞、掲載年月日不詳)(田上家蔵、筆者寄託）
図13-2-2　雪国の小住宅外観と断面（小樽新聞、掲載年月日不詳)(田上家蔵、筆者寄託）

主な参考文献

【建築家・営繕組織関係】
村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島研究所出版会 1965.10.20
日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善 1972.10.20
越野武『日本の建築［明治大正昭和］１開花のかたち』三省堂 1979.6.30
小野木重勝『日本の建築［明治大正昭和］２様式の礎』三省堂 1979.4.15
藤森照信『日本の建築［明治大正昭和］３国家のデザイン』三省堂 1979.2.20
長谷川堯『日本の建築［明治大正昭和］４議事堂の系譜』三省堂 1981.4.10
坂本勝比古『日本の建築［明治大正昭和］５商都のデザイン』三省堂 1980.9.10
山口廣『日本の建築［明治大正昭和］６都市の精華』三省堂 1979.9.1
村松貞次郎・石田潤一郎『日本の建築［明治大正昭和］７ブルジョワジーの装飾』三省堂 1980.1.10
伊藤三千雄・前野まさる『日本の建築［明治大正昭和］８様式美の挽歌』三省堂 1982.8.10
谷川正己『日本の建築［明治大正昭和］９ライトの遺産』三省堂 1980.11.1
近江栄・堀勇良『日本の建築［明治大正昭和］10日本のモダニズム』三省堂 1981.8.30
坂本勝比古『明治の異人館』朝日新聞社 1965.9
山形政昭『近江兄弟社を中心に残るW.M.ヴォーリズの建築活動資料の調査報告』日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) 1976.10
山形政昭『ウイリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』私家版 1993.2
『高松政雄君の制作と著作』故高松政雄君記念事業會 1935.9.5
高松政雄『建築家の修養』(『建築雑誌』No.285) 1910.9.25
中村音羽『中村鎮遺稿』中村鎮遺稿刊行會 1936.9.5
藤森照信・増田彰久『建築探偵東奔西走』朝日新聞社 1988.5.30
藤森照信『昭和住宅物語』新建築社 1990.3.10
遠藤新生誕百年記念事業委員会編『建築家遠藤新作品集』中央公論美術出版 1991.9.25
遠藤明久『北海道住宅史話(上)(下)』住まいの図書館出版局 1994.6.21
遠藤明久『指田近之輔の経歴と業績』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.66 1993.3
小坂映王『建築家石井喜助について』北海道大学工学部建築工学科1991年度修士論文
吉田実『北海道における学校建築に関する史的研究 ―北海道庁設置以降の初等・中等学校建築をめぐって―』北海道大学工学部建築工学科1980年度修士論文
東出雅仁『北海道における初期鉄筋コンクリート造学校建築に関する史的研究』北海道大学工学部建築工学科1980年度卒業論文
小坂映王『昭和初期における小樽市の営繕事業について』北海道大学工学部建築工学科1989年度卒業論文
大條雅昭・越野武・角幸博『函館市(区)の営繕組織について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.56 1983.3
『播州解纜―小南武一の生涯―』小南ミチ 1982.1.20
スピロ・コストフ編／槇文彦監訳『建築家―職能の歴史』日経マグロウヒル社 1981.10.20
ペーター・ブレイク／田中正男、奥平耕造訳『現代建築の巨匠―20世紀の空間を創造した人びと―』彰国社 1963.8.10
藤岡洋保『大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるル・コルビュジェの評価』日本建築学会大会学術講演梗概集(東北) 1982.10
『新訂建築学体系6 近代建築史』彰国社 1968.7.1
S.ギーディオン／太田實訳『空間・時間・建築２』丸善㈱ 1955.5.25

【M. ヒンデル】
Kurt Meissner “Deutsche in Japan 1639－1960” Tokyo 1961
“Mittelungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens” 22 1931
“Die Geschichte der OAG―1873 bis 1980―” OAG
角幸博『建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について』日本建築学会計画系論文集No.465 1994.11

【田上義也】
蝦名賢造『北方のビジョン／地域開発における人間研究』らいらっく書房 1966.5.20
『わたしの道(第一集)』北海タイムス社 1974.4.10
小山一男『北のまれびと くエゾライト・田上義也〉』(上)(下) 現代出版社 1977.10.20
田上義也「私と北海道の建物」(『月刊住宅ライフ』連載) 1983.3～1984.3
『私のなかの歴史３』北海道新聞社 1984.8.20
『受賞に輝く人々（昭和五十三年）』北海道 1979.3.29
外山卯三郎編輯『藝術學研究　第一輯』第一書房 1929.12.1

外山卯三郎編輯『藝術學研究　第二輯』第一書房 1930.5.1
外山卯三郎編輯『藝術學研究　第四輯』第一書房 1930.11.20
日本藝術學協會編『田上義也建築畫集』東京建設社 1931.2.23
北方文化研究会編『田上義也建築作品抄』らいらっく書房 1966.5.1
加藤誠『田上義也の初期住宅作品』北海道大学工学部建築工学科1983年度卒業論文
江川弘一『田上義也の初期作品について』北海学園大学工学部1983年度卒業論文

【建設業関係】
木田保太郎『木田保造』1976.4.16
『風雪の百年　北海道建設業界史』北海道建設新聞社 1980.
山崎英雄『道南の槌音　函館建設業界史』函館建設業組合 1982.4.1

【住宅・文化村・郊外住宅関係】
山本外三郎『「文化村落」の建築に就いて』(『建築之普及』No.27 帝國工業教育會) 1922.6.
山中節治『建築図案　文化生活と其の住宅』建築書院 1923.2.11
中尾保『誤れる文化生活』(『建築と社会』第8輯 第2号 日本建築協會) 1925.2.1
中谷宇吉郎『續冬の華』甲鳥書林 1940.7.5
『高倉さんの楽しい農業生活設計』酪農学園通信教育出版部 1953.1.20
南博＋社会心理研究所『大正文化　1905-1927』勁草書房 1988.2.27
内田青蔵『「昭和改良会」の活動からみた大正・昭和初期（戦前）における「洋風系独立住宅」の導入と成立に関する研究』1986
池上重康・越野武・角幸博・太田純『北大医学部文化村について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.67 1994.3
池上重康・越野武・角幸博『北海道大学「医学部文化村」について』日本建築学会計画系論文集 No.466 1994.12

【北海道一般】
『消されかかった療術—死線を超えて50年—』社団法人北海道治療師会 1981.9.23
前川公美夫『北海道音楽史』私家版 1992.6.5

【札幌】
『北門建築　愛隣會無料診療所建築記念號』サッポロ建築社 1927.11.1
大塚高俊『大札幌案内』近世社 1931.7.20
『札幌市史　政治行政編』札幌市役所 1953.2.20
『札幌市史　産業経済編』札幌市役所 1958.4.30
札幌市教育委員会編『新札幌市史第二巻通史二』北海道新聞社 1991.10.19
円山百年史編纂委員会『円山百年史』円山百年史編纂協賛会 1977.6.25
『山鼻創基八十一周年記念誌』山鼻創基八十一周年記念会 1957.5.29
上野幌開基百年記念事業協賛会編集部『上野幌百年のあゆみ　拓魂』上野幌開基百年記念事業協賛会 1985.9.29
札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫１　札幌地名考』北海道新聞社 1977.9.26
札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫７　札幌事始』北海道新聞社 1979.1.30
札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫12 藻岩・円山』北海道新聞社 1980.3.25
札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫・別冊　札幌歴史地図〈明治編〉』札幌市・札幌市教育委員会 1978.9.12
札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫・別冊　札幌歴史地図〈大正編〉』札幌市・札幌市教育委員会 1980.3.17
札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫・別冊 札幌生活文化史〈大正・昭和戦前編〉』札幌市・札幌市教育委員会1986.2.20
伊藤廣『屯田兵村の百年(下巻)』北海道新聞社 1979.9.10
関秀司・笹木義共『ふるさとの想い出 写真集明治大正昭和 札幌』国書刊行会 1979.9.28
和田義雄『札幌喫茶界昭和史』株式会社財界さっぽろ 1973.8.1
脇哲『物語薄野百年史』すすきのタイムス社 1970.9.15
石田篤郎編纂『丸井今井百年のあゆみ』株式会社丸井今井 1973.12.1
阿部要介『札幌グランドホテルの50年』三井観光開発株式会社 1985.4.25
札幌市医師会史編纂委員会『札幌市医師会史　昭和編』社団法人札幌市医師会 1983.3.10

【函館】
『函館市誌』函館日々新聞社 1935.12.20
『函館市史資料集　第６集』函館市編纂委員会 1956.12.22
村田専三郎『函館建築文化雑記』函館名匠顕彰義会 1943.11.25
村田専三郎「函館の建築(一)」(ＮＨＫ函館放送局編『郷土昔話』函館郷土文化会 1954.6.20)

村田専三郎「建築士會以前(函館の建築団体のあれこれ)」(北海道建築士会・北海道建築設計監理協会共編『北海道建築士』Vol.16 北海道建築士会) 1956.1.26
村田専三郎『建築アラカルト』(『建築士／函館地方建築士会10周年記念』函館地方建築士会) 1962.2.10
川島龍司『はこだての文化財　建築編』函館市文化財保護協会 1971.12.20
遠藤明久『大谷派本願寺函館別院(1915年)の構造形態』日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道) 1978.9
大條雅昭『函館市営繕組織の史的研究』北海道大学工学部建築工学科1982年度卒業論文

【北海道その他】
『新編沼田町史』沼田町役場 1982.12.10
『新十津川町史』北海道新十津川町役場 1965.11.
歌志内市史編纂委員会『歌志内市史』1964.11.10
旭川市史編集委員会『旭川市史 第一巻』旭川市役所 1959.4.10
旭川市史編纂委員会『旭川市史 第三巻』旭川市役所 1959.7.1
木野工『旭川今昔ばなし』総北海出版部 1985.1.20
『室蘭市史　下巻』室蘭市役所 1941.6.25
『音更町史』音更町史編さん委員会 1961.11.3
『新釧路市史年表』釧路市 1975.9.25
生田原町史編さん委員会『生田原町史』北海道紋別郡生田原町役場 1981.3
『遠軽町史』遠軽町役場 1957.7.20
網走市史編纂委員会『網走市史　下巻』網走市役所 1971.3
藤田明郎「松岡農場顛末記」(『北海道地方史研究90』)北海道地方史研究会 1973.2

【宗教関係】
五十嵐鐵『回顧五十年』(小樽)天主公教会 1941.6.25
「フランシスコ会北海道布教小史(一)～（一七）」(『光明付録』) 1957.1.13-5.19
木太秀雄・工藤忠一・佐藤智憲『倶知安カトリック教会五十年記念誌』倶知安カトリック教会 1962.7.8
『函館・宮前町聖ミカエル教会改新築記念誌』1965.11.7
日本基督教団札幌北光教会七十周年記念誌編集委員会『札幌北光教会七十年の歩み』日本基督教団札幌北光教会 1966.10.2
日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会『教区九十年史—日本聖公会北海道教区』 1966.3.20
越野武・角幸博『札幌独立基督教会・クラーク記念会堂(1922)について その１』『同 その２』日本建築学会北海道支部大35回研究発表会論文集 1971.3
札幌キリスト教会歴史編纂委員会『日本聖公会札幌キリスト教会百年の歩み』 1993.4.10
「フランシスコ会北海道布教小史(一)～（一七）」(『光明付録』) 1957.1.13-5.19
小野忠亮『北日本カトリック教会史』中央出版社 1970.3.18
『素顔の名古屋教区』1968.10.15
『カトリック恵方町教会五十周年記念誌』1981.6.21
小野忠亮『青森県とカトリック』百年史出版委員会 1982.9
岡田義治『栃木の建築文化　カトリック松が峰教会』(社)日本建築学会関東支部栃木支所 1986.11.8
田中美知子『歩く宣教師 イポリト・ルイ・カディヤック』1978.5.21
宮田洋子訳『掌院セルギイ北海道巡回記』キリシタン文化研究会 1972.7.20
聖母病院50年史編集委員会『聖母病院50年のあゆみ』1982.12.21
『日本基督教会札幌北一条教会　創立六十年史』日本基督教会札幌北一条教会創立六十年史編纂委員会 1956.12.25
『失われた教会堂—札幌市北一条教会堂を保存する会の記録』札幌市北一条教会堂を保存する会 1980.5.1
札幌正教會百年史委員会『札幌正教會百年史』宗教法人札幌ハリストス正教会 1987.8.19
『日本基督教団函館教会100年史　1874～1974』日本基督教団ハリス監督記念函館教会 1976
『日本メソジスト函館教会五十年記念誌』1923

【学校関係】
北大医学部五十年史編纂委員会『北大医学部五十年史』北海道大学医学部創立五十周年記念会館建設期成会 1974.4.1
『五十年の歩み　斗楡』北海道大学医学部第二外科 1976.3.31
『北星学園八十年誌稿』1967.10.1
北星学園100年史「写真篇」編集委員会『北星学園目で見る100年 1887-1987』1987.9.15
北星学園百年史刊行委員会『北星学園百年史　資料篇』1990.10.15
札幌市教育委員会文化資料室『さっぽろ文庫61 農学校物語』北海道新聞社 1992.6.24
『南山学園の歩み』南山学園 1964.11.1

『上智大學　創立貳拾五年記念』上智大学 1938.11.1
上智大学編『上智大学五十年史』上智大学出版部 1963.11.1
上智大学史資料集編纂委員会『上智大学資料集　第３集(1928～1948)』学校法人上智学院 1985.3.30
“Deutsche Schule Tokyo 75 Jahre(1904-1979)” Tokyo 1979

【博覧会】
『北海道物産共進會事務及審査報告』北海道物産共進會 1907(M40).9.23
『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』北海道庁 1920.3.30
国産振興博覧會編纂部編纂『国産振興博覧會誌』北海タイムス社 1927.12.20
『国産振興北海道拓殖博覧會誌』国産振興北海道拓殖博覧會 1932.8.20
水出良造『小樽海港博覧會誌』小樽商工会議所 1932.4.10
『小樽市主催 北海道大博覧會誌』原稿(小樽市立図書館蔵) 1940か

【スキーヒュッテ】
『山とスキー』第78号 1928.1.1
『山とスキー』第79号 1928.2.1
『山とスキー』第89号 1929.1.1
『北大山岳部々部報』第13号 北海道大学体育会山岳部 1990.5.1
森本光彦『Berg Hütte と Ski Hütte に就いて』北海道大学工学部建築工学科1951年度卒業論文
佐々木政吉「新設記念ヒュッテに就て」(『北海道帝国大学文武会スキー部創立拾五周年記念』) 1962.12.10
大野精七『北海道のスキーと共に』1971.1

【人物・人名など】
『現代札幌人物史』札幌現代社 1931.11.23
森本厚吉伝刊行会『森本厚吉』河出出版 1956.12
佐波谷重信『評伝　有島武郎』研究者出版 1978.8
『有島武郎全集 第６巻』筑摩書房 1981.2.20
『有島武郎全集 第12巻』筑摩書房 1982.11.30
『有島武郎全集 第13巻』筑摩書房 1984.6.30
『有島武郎全集 第15巻』筑摩書房 1986.9.20
『新潮日本文学アルバム９　有島武郎』新潮社 1984.9.20
前川公美夫『有島武郎の札幌の家〈上〉』北方文芸 1984.12
前川公美夫『有島武郎の札幌の家』星座の会 1987.9.30
『有島寮物語』農林中央金庫札幌支店 1987.1.31
『出納陽一氏の面影』「出納陽一氏の面影」刊行会 1977.5.15
大野精七伝記編集委員会『大野精七の歩み』大野精七先生顕彰会 1981.6.17
『林豊州伝』十勝毎日新聞社 1989.10.8
仁多見巌『アイヌの父　ジョン・バチェラー』楡書房 1963.4.30
仁多見巌訳編『ジョン・バチェラーの手紙』山本書店 1965.12.15
仁多見巌『異境の使徒　英人ジョン・バチラー伝』北海道新聞社 1991.8.29

【雑誌】
『建築雑誌』No.285 1910.9
『建築雑誌』No.488 1926.10
『建築雑誌』No.497 1927.4
『建築雑誌』No.502 1927.11
『建築雑誌』No.506 1928.2
『建築雑誌』No.585 1934.5
『建築世界』第8巻 第1号 建築世界社 1914.1.
『建築世界』第8巻 第2号 建築世界社 1914.2
『建築世界』第8巻 第3号 建築世界社 1914.3.
『建築之普及』No.27 帝國工業教育會 1922.6.
『建築と社会』第2号 日本建築協會 1925.2.1
『婦人画報』No.201 1922.7
『建築画報』Vol.13 1922.11)

【辞書、辞典類】
古林龜治郎『現代人名辞典』中央通信社 1912.6.27
金子信尚『北海道人名辭書』北海道民論社 1923.9.30
『キリスト教大事典』教文館 1963.6.30
『建築大辞典』彰国社 1974.10.10
樋田満文『明治大正風俗語辞典』角川書店 1979.11.25
坂本太郎監修『風俗辞典』東京堂出版 1981.10.10
『北海道大百科事典』北海道新聞社 1981.8.20
『角川日本地名大辞典１　北海道上巻』角川書店 1987.10.8

【その他】
南博編『日本モダニズムの研究』ブレーン出版 1982.7.30
南博編『近代庶民生活誌③ 世相語・風俗語』三一書房 1985.5.31
南博編『近代庶民生活誌⑩ 享楽・性』三一書房 1988.7.15

関連既発表学術論文および論著

第１部

【学術論文】

1. 角幸博、越野武『有島武郎札幌邸(大正２年)―建設事情とその沿革について―』日本建築学会計画系論文報告集 No.465 (pp.129-136) 1986.3
2. 角幸博、越野武『函館旧英国領事館(大正２年)の建築について』日本建築学会計画系論文報告集 No.390(pp.142-149) 1988.8
3. 池上重康、越野武、角幸博『北海道大学「医学部文化村」について』日本建築学会計画系論文報告集 No.466(pp.153-162) 1994.12

【その他の学術論文】

4. 越野武、角幸博『札幌独立基督教会・クラーク記念会堂（1922）について　その１』日本建築学会北海道支部第35回研究発表会論文集 (pp.141-144) 1971.3
5. 越野武、角幸博『札幌独立基督教会・クラーク記念会堂（1922）について　その２』日本建築学会北海道支部第35回研究発表会論文集 (pp.145-148) 1971.3
6. 伊藤俊英、越野武、角幸博『建築家中村鎮と中村式鉄筋コンクリートブロック』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.55 (pp.153-156) 1982.3
7. 笹本明、越野武、角幸博『開道五十年記念北海道博覧会と明治大正期博覧会の建築』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.55 (pp.157-160) 1982.3
8. 越野武、角幸博、伊藤俊英『建築家中村鎮と北海道』日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)(pp.2349-2350) 1982.10
9. 大條雅昭、越野武、角幸博『函館市(区) の営繕組織について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.56 (pp.221-224) 1983.3
10. 郷間幹夫、越野武、角幸博『函館市元町の３教会について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.56 (pp.225-228) 1983.3
11. 川瀬昭則、越野武、角幸博『札幌における大正・昭和初期の住宅遺構調査』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.57 (pp.149-152) 1984.3
12. 古田真三、越野武、角幸博『旧有島武郎邸(大正２年)について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.57 (pp.241-244) 1984.3
13. 岡田彩子、越野武、角幸博『大正期における札幌山鼻・円山住宅地の成立』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.59 (pp.289-292) 1986.3
14. 高橋澄人、越野武、角幸博『函館給英国領事館の建築について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.60 (pp.217-220) 1987.3
15. 角幸博『『北海タイムス』にみられる明治・大正期の建設業者』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.61 (pp.241-244) 1988.3
16. 角幸博『国産振興北海道拓殖博覧会と小樽海港博覧会』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.63 (pp.349-352) 1990.3
17. 小坂映王、越野武、角幸博、長尾充『昭和初期における小樽市の営繕組織について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.63 (pp.345-348) 1990.3
18. 角幸博『北海道大博覧会(昭和12年) について』 日本建築学会大会学術講演梗概集(中国) (pp.765-766) 1990.10
19. 角幸博『国産振興博覧会(大正15年) について』 日本建築学会北海道支部研究報告集 No.64 (pp.381-384) 1991.3
20. 照井康穂、越野武、角幸博、長尾充、池上重康『札幌市における明治・大正期の建築の３遺構（旧正見病院・旧吉田別邸・旧出納邸)』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.65 (pp.445-448) 1992.3
21. 小坂映王、越野武、角幸博、長尾充『建築家石井喜助（1893～1977)』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.65 (pp.449-452) 1992.3
22. 小坂映王、越野武、角幸博、長尾充『建築家石井喜助（1893～1977)について』日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)(pp.1101-1102) 1992.8
23. 太田純、越野武、角幸博、池上重康『桑園博士町について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.67 (pp.581-584) 1994.3
24. 池上重康、越野武、角幸博、太田純『北大医学部文化村について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.67 (pp.585-588) 1994.3
25. 池上重康、越野武、角幸博、太田純『北海道大学医学部文化村にみられる文化生活の導入』日本建築学会大会学術講演梗概集（東海) (pp.1387-1388) 1994.9
26. 玉木大樹、越野武、角幸博『函館市東部旧「開發」の住宅地形成について （1)「開發文化村」ほか２村』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.68 (pp.609-612) 1995.3
27. 内藤孝、越野武、角幸博、玉木大樹『函館市東部旧「開發」の住宅地形成について （2)近代和風住宅について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.68 (pp.613-616) 1995.3

【著書】

28. (共著)『さっぽろ文庫23 札幌の建物』札幌市教育委員会 1982.12
29. (共著)『さっぽろ文庫・別冊　札幌生活文化史 〈大正・昭和戦前編〉』札幌市教育委員会 1986.2

第２部

【学術論文】

30. 角幸博『建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について』日本建築学会計画計論文集 No.465 (pp.175-181) 1994.11

【その他の学術論文】

31. 角幸博、越野武『建築家マックス・ヒンデルー１』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.45 (pp.369-372) 1976.3
32. 角幸博、越野武『建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER の経歴について』北海道大学工学部研究報告 No.83 (pp.15-24) 1977.3
33. 角幸博『建築家マックス　ヒンデル MAX HINDER-2 ―住宅作品について　その１』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.49 (pp.451-454) 1978.3
34. 角幸博『建築家マックス　ヒンデル MAX HINDER-2 ―住宅作品について　その２』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.49 (pp.455-458) 1978.3
35. 越野武、角幸博『北海道における近代建築の展開』北海道大学工学部研究報告 No.92 (pp.93-104) 1979.1
36. 角幸博『建築家マックス　ヒンデル MAX HINDER-3 ―名古屋市南山中学校について―』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.50 (pp.375-378) 1979.3
37. 角幸博『建築家マックス　ヒンデル MAX HINDER　３つのSki Hutteについて』日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿) (pp.2097-2098) 1980.9
38. 角幸博、越野武、新田真理『北星学園女教師館（大正15年）について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.54 (pp.113-116) 1981.3
39. 角幸博、越野武『北星学園女教師館（大正15年）について』日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) (pp.2333-2334) 1981.9
40. 畔柳武司、角幸博『新潟カトリック教会について』日本建築学会東海支部研究報告No.20 (pp.449-451) 1982.2
41. 渡辺正継、越野武、角幸博『マックス・ヒンデルに関する研究　その１．フランシスコ修道院について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.55 (pp.161-164) 1982.3
42. 角幸博、越野武『マックス・ヒンデルに関する研究　その２．札幌藤高等女学校(キノルド館)について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.55 (pp.165-168) 1982.3
43. 角幸博『宇都宮カトリック教会（1932）について』日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)(pp.2343-2344) 1982.10
44. 角幸博『『カトリック新聞』にみられるヒンデルの作品について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.56 (pp.229-232) 1983.3
45. 角幸博『『カトリック新聞』にみられるヒンデルの作品について』日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸) (pp.2567-2568) 1983.9
46. 畔柳武司、角幸博『金沢聖霊病院附属礼拝堂について』日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸) (pp.2585-2586) 1983.9
47. 角幸博『北の地に新風をおくったスイス人建築家マックス・ヒンデル』住宅建築 No.238 (pp.188-193) 1995.1
48. 池上重康、越野武、角幸博『北海道帝国大学および小樽高等商業学校傭外国人教師官舎（大正14年～昭和２年）』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.68 (pp.637-640) 1995.3

第３部

【その他の学術論文】

49. 加藤誠、越野武、角幸博『田上義也の初期作品について(１)－住宅－』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.57 (pp.153-156) 1984.3
50. 江川弘一、越野武、角幸博『田上義也の初期作品について(２)－非住宅－』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.57 (pp.157-160) 1984.3
51. 角幸博、越野武、加藤誠『田上義也の初期作品について』日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) (pp.921-922) 1985.10
52. 角幸博『石狩海濱ホテル(1936)について（田上義也研究２）』日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) (pp.787-788) 1989.10
53. 角幸博『大竹虎雄別邸（1922）について(田上義也研究３）』日本建築学会大会学術講演梗概集(東北) (pp.895-896) 1991.9
54. 角幸博『田上義也戦前期の建築活動から』ひろば No.51 (pp.25-32) (社)北海道建築士事務所協会 1991.12
55. 角幸博『田上義也建築作品展について（田上義也研究４）』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.66 (pp.397-400) 1993.3
56. 角幸博『田上義也建築作品展覧会(1925年)と出展作品について』日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) (pp.1499-1500) 1993.9

【著書】

57. (共著)『失われた教会堂　札幌市北一条教会堂を保存する会の記録』札幌市北一条教会堂を保存する会 1980.5